現金を扱ふ所。東京に中央金庫を置き、地方に本金庫・支金庫を置き、中央金庫は各地の本金庫を統轄し、本金庫を置かざる地方の支金庫は、中央金庫これを總轄す。現時の制度にては、日本銀行をしてこれが事務を扱はしむ。從ひて日本銀行は、其ため各地に支店出張店若しくは代理店を設く。

（きん-こ）［金鼓］（名）陣中の號令又は佛事の音樂に用ふる鉦（ｶﾈ）と太鼓と。ごんく。

（きん-こ）［禁錮］（名）㊀とぢめふさぐこと。「下位に—す」。㊁一室内に閉ぢ込めて其自由を束縛し外出せしめざること。おしこめ。㊂［法］自由刑の一、輕罪に科せらるゝ刑罰にして重禁錮と輕禁錮との別あり。

（きん-こ）［今古］（名）いまとむかしと。

（きん-こ）［近古］（名）㊀年代餘り隔たらざるむかし。㊁歷史上の區別、近世と中古との間の稱にして、我國にては後鳥羽天皇の文治二年より後陽成天皇の慶長八年までをいひ、西洋にては「ルーテル」の宗教革命頃より神聖同盟の前頃まで、即ち、十五世紀の末頃より十九世紀の始頃までをいふ。——し［近古史］（名）近古の歷史。

（きん-ご）［金吾］（名）《支那の官名なる執金吾の略。金吾は支那の宮門の衞士が執りし兵器の稱にして、其兩端を金にて塗りたるもの》衞門府の唐名。「—中納言秀秋」。

ぎん-こ［銀粉］（名）銀の粉末。

（きん-こう）［勤功］（名）職務上のほねをり。つとめたるいさを。「—によりて祿を給はる」。

（きん-こう）［噤口］（名）口をつぐむこと。又、ものをいはざること。

（きんこう-ぼくぜつ）［金口木舌］（名）《木鐸の異稱にして、論語に天將以夫子爲木鐸、とあるに

出づ》もと儒道を説きあかすものをたとへいひ、轉じて、道理を宣べ世人を教ふるものをたとへいふ。

（きん-こく）［金穀］（名）金錢と穀物と。（金米）。

（きん-ごく）［近國］（名）近まはりの國。遠國の對。

（きん-ごく）［禁獄］（名）㊀獄中に監禁すること。「さながら科人の—なりとも云ひつべし」。㊁［法］自由刑の一、重罪に科する刑罰にして重禁獄と輕禁獄との別あり。

きん-こじ［金巾子］（名）主上のめさるゝ一種の冠、巾子の上より前に纓（ｴｲ）をかされ、金紙にてはさみたるもの。きんのかんむり。

（きん-こつ）［筋骨］（名）㊀筋と骨と。㊁身體、體力。「—を勞して」。

（きんこん-しき）［金婚式］（名）共存せる夫婦が、結婚の五十年目に行ふいはひの式。

（ぎんこん-しき）［銀婚式］（名）共存せる夫婦が、結婚の二十五年目に行ふいはひの式。

（きん-さ）［欽差］（名）君主より使者として差しつかはさるゝこと。「—大臣」。

（きん-ざ）［金座］（名）德川時代に、官の支配を受けて金貨を鑄造せし所、慶長年中江戸に創設せられ、明治二年造幣局の設置せられたるにより廢止せられたり。「—の後藤」。

（ぎん-ざ）［銀座］（名）德川時代に、金座と同じく官の支配を受け銀貨を鑄造せし所、慶長十三年に京都に同十七年に江戸に設けられ、明治二年造幣局の設置せられたるにより廢止せられたり。

（きん-ざい）［近在］（名）近き在鄕。

（きん-さう）［金創］（名）刃物のきず。きりきず。

（きんさう-ぼん）［巾箱本］（名）小形の唐本。

（きん-さく）［金策］（名）金子を調達する工夫（ｸﾌｳ）。

（きん-さく）［近作］（名）ちかごろつくりたるもの。

（ぎん-さゝげ）［銀豇］（名）［植］「いんげんさゝげ」に同じ。

（きん-さつ）［金札］（名）㊀こがねの札。㊁政府より發行して國中に通用せしむる貨幣代用の信用證劵。さつ。紙幣。

（きん-さつ）［禁札］（名）禁制の旨を記したる制札。

（きん-サラサ）［金更紗］（名）金をまじへたる模樣ある「サラサ」。

（きん-さん）［菌傘］（名）［植］菌類の上部なる傘形をなす所。

（きん-さん）［金簪］（名）金づくりのかんざし。

（きん-ざん）［金山］（名）黃金の出る鑛山。

（きん-ざん）［近算］（名）［數］眞の値を求むること能はざるとき、これに近き値を算出すること。

（ぎん-さん）［銀簪］（名）銀づくりのかんざし。

（ぎん-ざん）［銀山］（名）銀の出る鑛山。

きんざんじ-ミソ［金山寺味噌］（名）ひしほの一種、大豆と大麥とを混（ﾏ）ぜ蒸（ﾑ）してねかし、これに鹽を加へ味をつけてこしらへたるもの、支那の徑（ｷﾝ）山寺にて創めて製せしより此名ありといふ。

（きん-し）［金枝］（名）天子の御一門を申す語。「—玉葉」。

（きん-し）［菌絲］（名）［植］菌の地中などに埋沒し錯綜して絲の如き狀態をなす所、即ち、菌の本體にして、これにより生活し柄傘を地上に抽出す。

（きん-し）［禁止］（名）物事を禁じとゞむること。さしとめ。はつと。

（きん-し）［近思］（名）自己の身に體して考へみること。

（きん-し）［勤仕］（名）役を勤むること。

（きん-し）［金絲］（名）金箔を薄紙に塗り細く切り

又はよりたるもの、細く切りたるものをひらきんといひ、よりたるものをよりきんといふ、きんらんおり又はぬひとりに使用し、其他種々の飾にも用ふ。

（きん-し）［金鵄］（名）神武天皇の長髓彥を征したまひしとき、御弭（ﾐﾕﾊ）にとまりたりといふ黃金色のとび。

（きん-じ）［金字］（名）金泥（ｺﾝﾃﾞｲ）にて書きたる文字。

（きん-じ）［近時］（名）いまごろ。このごろ。（今時）。

（きん-じ）［近事］（名）このごろの出來事。

（きん-じ）［近侍］（名）おそば。こしやう。

（きん-じ）［近似］（名）によりたること。同じやうなること。

（ぎん-し）［銀絲］（名）銀箔を薄紙に塗り細くきりて又はよりたるもの、細く切りたるものをひらぎんといひ、よりたるものをよりぎんといふ、種々の裝飾に用ひらる。

（ぎん-じ）［銀字］（名）銀泥（ｷﾞﾝﾃﾞｲ）にて書きたる文字。

（きん-しう）［錦繡］（名）㊀にしきとぬひある帛と。㊁あや麗（ﾊﾞﾙ）しき衣服又はあや麗しき織物。「身に—を纏ふ」。㊂字句麗しき詩文又は詩文に巧（ｸｸ）なる思想をたとへいふ語。「—の腸」。

（きん-じう）［禽獸］（名）㊀鳥とけものと。「—魚介」。㊁道理又は恩義を知らざる人を罵りていふ語。

（きんし-がん）［近視眼］（名）「きんがん」（近眼）に同じ。

（きん-しき）［禁色］（名）次條に同じ。

（きん-じき）［禁色］（名）㊀古昔、私に著ることを禁ぜられし色、即ち深紫と深紅との稱。「ゆるしのいろ」の對。㊁轉じて、後世は、窠（ｸﾜ）に霰（ｱﾗ）の紋ある袴をいふ。——せんげ［禁色宣下］（名）きんじきを著ることを許さるゝこと。

（きんし-くんしやう）［金鵄勳章］（名）一種の勳章、明治廿三年の創設にかゝり、軍功あるものに下

賜せらるゝもの、功一級より功七級までありて、級に應じおのおの一定の年金附屬す。（下圖は功一級の金鵄勳章なり）。

（きんじ-ち）［近似値］（名）［數］無理數の値に稍や似たる値を有する有理數、2,64或は2,6は$\sqrt{7}$の近似値なり。

［きんしくんしやう］

（きん-しつ）［琴瑟］（名）㊀きんとしつと。㊁夫婦又は其間柄にいふ語。「—和せず」。

（きん-じつ）［近日］（名）今より後多く日數を經ざる程、そのうち、やがて、近き頃。

（きんじつ-てん）［近日點］（名）［天］遊星・衞星又は彗星が、太陽に最も近き位置。——ねん［近日點年］（名）［天］地球が同一なる近日點を再び通過する時間にして、三百六十五日六時十三分四十八秒なり。

（きん-しふ）［近習］（名）おそば。こしやう。

（きん-しふ）［菌褶］（名）［植］菌傘の裏面にある褶の如きひだ、其表面に數多の胞子を發生す。

（きん-しや）［金紗］（名）㊀金絲を以て模樣を織り出したる紗。㊁金絲の稱。

（きん-しや）［金砂］（名）「きんこ」（金粉）（一）に同じ。

（ぎん-しや）［銀砂］（名）「ぎんこ」（銀粉）に同じ。

（きん-しやう）［金將］（名）將棊の駒の名、後方の二隅へ斜に退くこと能はざるのみにて、前後左右及前方の二隅へ、何れも一歩づゝ進み得るものにして、なることなし。

（きん-しやう）［襟章］（名）陸海軍の將校又は文官の高等官の禮服の襟につくる飾、官等の高下によりて金線又は銀線を用ひ、其形狀模樣もまた一

樣ならず。

（きん-じやう）［今上］（名）現在の時代をしろしめさるゝ天皇陛下。いまのうへ。

（きん-じやう）［謹上］（名）《謹みて奉る義》書狀の名宛に添ふる語。「—何某殿」。——さいはい［謹上再拜］（名）㊀神を拜（ｵｶﾞ）むときの語。㊁書狀の末尾に用ふる語。

（きん-じやう）［金城］（名）《金にてつくりたる城の義》防禦極めて堅固なる城にいふ語。——たうち［金城湯池］（名）防禦極めて堅固なる城池にいふ語。——てっぺき［金城鐵壁］（名）防禦極めて堅固なる城壁又は極めて堅固なる物事にいふ語。（鐵壁の條參照）。

（ぎん-しやう）［銀將］（名）將棊の駒の名、金將の次の位置を占む、四隅と前方とに一步づゝ進み、なりては金將にひとしきはたらきのもの。

（きん-しゆ）［金主］（名）資本又は費用を出す人。きんかた。「—が付く」。（財主）。

（きん-しゆ）［禁酒］（名）酒を飲むを禁ずること。酒を斷つこと。——くわい［禁酒會］（名）規約を設けて互に禁酒を勵行し、又、其利益を唱道する會合。

（ぎん-しゆ）［銀朱］（名）水銀を燒きて製したる朱、普通に朱墨として用ひ、又、藥料に供せらる。

（きん-しゆく）［緊縮］（名）㊀かたくしまること。かたまりちゞまること。㊁かたくしむること。かためちゞむること。

（きん-しよ）［近所］（名）ちかきところ。（近邊）。

（きん-しよう）［焮衝］（名）身體の或部局發熱して膨脹し、痛むこと。「肺—」。

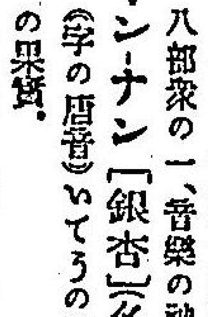
（きん-しよう）［近稱］（名）［文法］自身に近き物事又は場所に用ふる代名詞、これ・こゝ、等の類。

(きん-しよく[金色](名) こがねいろ。
(ぎん-しよく[銀色](名) しろがねいろ。
(ぎん-しよく[銀燭](名) 光のきら／＼と煌(ハウ)しくかゞやく燈。
(きん-しん[近臣](名) 主君の側近く仕ふる臣下。
(きん-しん[近親](名) ㊀血統の近き親族。㊁側近く仕ふる親しき臣下。
(きん-しん[琴心](名) ことを彈ずるによりて表はるゝ心の程。
(きん-しん[謹慎](名) ㊀みだらなる行をせざること、わけもなき事をなさざること、つゝしみかしこむこと。㊁德川時代の刑罰の名、逼塞(ヒツソク)の度の輕きものにして、士族以上に科せり。
(きん-しん[金針](名) 黃金にてつくりたる針。
(ぎん-しん[銀針](名) 銀にてつくりたる針。
(きんしん-しうこう[錦心繡口](名) 思想に富み詩歌に巧なるをたとへいふ語。
(きん-す[金子](名) 貨幣。金錢。「—を懷にす」。
きん-ず(ぜじずずるずれぜよ)[禁](他、さ變) いましめとゞむ。さしとむ。「通行を—」。
(ぎん-す[銀子](名) 舊の白銀(ハクギン)の一名。
ぎん-ず(ぜじずずるずれぜよ)[吟](他、さ變) 詩歌をうたふ。
(きん-すう[近數](名) 【數】或數の眞價に近き數、例へば、七・三四は、七・三四二五六…の近數なり。
きん-すなご[金砂子](名) すなごの一種、金箔の粉を散布せるもの。
ぎん-すなご[銀砂子](名) すなごの一種、銀粉を散布せるもの。
(きん-せい[金製](名) 金にてつくりたること、又、其物。
(きん-せい[均勢](名) 相互の勢力の輕重なく均等なること。「歐洲の—」。
(きん-せい[金星](名) 【天】下遊星の一、太陽よりの平均距離二千七百萬里にして、軌道は稍や圓く、二百二十四日・七にて太陽を一周す、直徑は三千百七十里、地球より見て最も燦爛たる星なり、地球よりも太陽に近く、下合以前には太陽に先だちて出づ、曉の明星これなり、下合以後には太陽に後れて没す、宵の明星これなり。——けいくわ[金星經過](名) 【天】金星が太陽の前面を經過すること。これによりて太陽の視差測定せらる、然れども完全なる法にあらず、其起りたる年は紀元千七百六十一年同千七百六十九年同千八百八十二年にして、起るべき年は紀元二千四年同二千十二年なりとす。
(きん-せい[近世](名) ㊀このごろの時世、きんだい。㊁歷史上の區別にして、近古以後の稱、我國にては後陽成天皇の慶長八年より明治維新までを指し、西洋にては紀元千八百十五年神聖同盟の締結以後より十九世紀の末頃迄をいふ。——し[近世史](名) 近世の歷史。
(きん-せい[禁制](名) ㊀或行爲又は或物事をさしとむること。(禁斷)。㊁或行爲又は或物事を禁じたる法規、おきて、はつと。「—を犯す」。——ひん[禁制品](名) ㊀法律又は命令により、有害なりと認めて、其輸入を禁止せる貨物。㊁すべて政府が輸送販賣等を禁制したる物品。「戰時—」。
(ぎん-せい[吟聲](名) 詩歌を吟ずる聲。
(ぎん-せい[銀製](名) 銀にてつくりたること、又、其物。
(きんせい-ぎよくしん[金聲玉振](名) 古昔支那の音樂は、金製の樂器に始まりて玉製の樂器に終りしより、物事を集めて大成することをたとへいふ語。
(きん-せう[僅少](名) わづか。すこし。
(きん-せう[筋鞘](名) 【生】橫紋筋を包む薄膜。
(ぎん-せかい[銀世界](名) 雪の降り積りたる景色又は多くの梅などの白く満開せる景色にいふ語。
(きん-せき[金石](名) ㊀金と石と、又、鑛物。㊁堅固なる石碑など鼎などと。「功を—に勒す」。——がく[金石學](名) 鑛物學の異稱。——ぶん[金石文](名) 石碑などに勒する銘文などの稱。
(きん-せつ[近接](名) ちかづくこと、よりつくこと。
(きん-せつ[緊切](名) ㊀すりよること、ひったりとつくこと。㊁極めて急要なること。
(きん-せん[近戰](名) 敵軍に近接し、白兵を以て格鬪すること、白兵戰。
(きん-せん[欽羨](名) ほしがること、うらやむこと。
(きん-せん[金錢](名) ㊀通用の貨幣、かね。㊁通用の紙幣に對して、通用の硬貨の特稱。㊂すべて黃金を貨としたる貨幣の稱にして、昔時の大判・小判等をもいふ。——すゐたふちやう[金錢出納帳](名) 金銀出納帳に同じ。——すゐたふぼ[金錢出納簿](名) 前條に同じ。——づく[金錢盡](名) かねづく。かんぢやうづく。
(きん-せん[欣然](名、副) よろこぶさまにいふ語。(忻然)。
(ぎん-せん[銀錢](名) 銀にてつくりたる貨幣。
(きんせん-くわ[金盞花](名) 【植】菊科に屬する草、もと舶來のものにして、高さ二三寸、葉は細長にして、花は盞形をなし紅黃若しくは淡黃なり。
(きんせん-くわ[金錢花](名) 【植】(い)午時花(ゴジクワ)の唐名。(ろ)「をぐるま」の唐名。
(きん-そく[禁足](名) 罪罰に觸れて、外出を止めらるゝこと。「—に會ふ」。
(きん-ぞく[金屬](名) 金屬元素又は其合金の總稱。——くわうぶつ[金屬鑛物](名) 金屬に屬する鑛物、金・銀・銅・鐵等をいふ。——げんそ[金屬元素](名) 金・銀・銅・鐵等の如く、其酸化物若しくは水酸化物の鹽基性を呈する元素、されど非金屬との區別はこれを明かにすること能はず、「クロミウム」「マンガン」等の水酸化物には半は鹽基性半は酸性のものあり。——せい[金屬製](名) 金屬にてこしらふること。又、其こしらへられたる物。

(きん-そん[近村](名) 近きわたりの村。
(きん-だ[勤惰](名) 「きんたい」(勤怠)に同じ。
(きん-たい[勤怠](名) つとむることおこたること、出勤と欠席と。
(きん-たい[近體](名) ㊀近時普通に行はるゝさま、近頃行はるゝ體裁。㊁漢詩にて、律の稱。
(きん-たい[禁體](名) 漢詩の詠物にて、其題に普通使用しがちなる字を禁じてつくること。
(きん-だい[近代](名) ㊀このごろ、ちかごろ。㊁歷史上の區別にして、我國にては明治維新以後、西洋にては十九世紀末以後。——し[近代史](名) 近代の歷史。
(きん-だい[金臺](名) 金を土臺にして鍍金(メッキ)などすること、又、其物。「—に象眼をする」。
(ぎん-だい[銀臺](名) 銀を土臺にして鍍金などすること、又、其物。
(きんたい-へう[勤怠表](名) 「きんだへう」に同じ。
(きんたい-ぼ[勤怠簿](名) 「きんだぼ」に同じ。
(きん-たう[金湯](名) (金城湯池の略言)防禦極めて堅固なる城池。
きん-だか[金高](名) 併せて計算したる金錢の高。
(きん-だく[金諾](名) 承諾すれば決して約を變ぜざること。
きん-だち[公達](名) (君等の音便) ㊀諸王の稱。㊁攝家・清華の子供の敬稱、「男—」「女—」。㊂大臣・大將の子の中納言又は中將などに至れる者。——げ[公達家](名) 清華家の異稱。
(きんだ-へう[勤惰表](名) 日々の出席者と欠席者とを取り調ぶる人名表。
(きんだ-ぼ[勤惰簿](名) 日々の出席者と欠席者とを取り調ぶるための人名簿。
(きん-たま[金玉](名) ㊀かうぐわん。(睾丸)。㊁金色をなしたる球形のもの。——ひばち[金玉火鉢](名) 股間に火鉢をいれてあたゝまること。
ぎん-だま[銀玉](名) ㊀昔時の銀貨幣の一なる豆銀・粒銀等の稱。㊁銀色をなしたる球形のもの。
(きん-たらう[金太郎](名) ㊀全身赤くしてよく肥滿したる子供の人形。㊁肥滿してあから顔の人の稱。
(きん-だん[禁斷](名) 或行爲をとゞめいましむること。さしとめ。「殺生—の場に網打ったる」。
(きん-だん[金談](名) 金子調達の相談。
廿きん-ぢ[汝](代) おまへ。なんぢ。
(きん-ぢさん[禁治產](名) 【法】心神喪失して法律上自ら財產を管理し得る能力なきこと、本人・配偶者・四等親內の親族・戶主・後見人・保佐人若しくは檢事の請求により、本人の普通裁判籍の區裁判所これを宣告す。——しや[禁治產者](名) 【法】禁治產の宣告を受けたるもの、其單獨にしてなしたる法律行爲は、當然これを取消し得べきものにして、後見人を置き財產の管理及一切の事を代理せしむ。
(きんち-てん[近地點](名) 太陰が最も地球に近づきたる位置。——げつ[近地點月](名) 太陰が近地點を再び通過する間の時間にして、二十七日十三時十八分三十七秒強なりとす。
(きん-ちやう[金打](名) ㊀昔時、武士が約束を變ぜざることの意志を表するため、刀の刃又は鍔(ツバ)などを打ち合はせしこと、又、女子は、鏡と鏡とを打ち合はせて、これをなしたり。㊁約束を決行すること。「—變はらぬ」。
(きん-ちやう[謹聽](名) ㊀つゝしみて聞くこと。(諦聽)。㊁演說などに、つゝしみてきくべき價値ある場合に聽衆の發する語。
(きん-ちやく[近着](名) ちかごろ到着したること。
(きん-ちやく[巾着](名) ㊀布又は革などにて縫ひたる袋、口を緒にて引き括り、中に金錢などを入れて携帶するもの。㊁常に他人に隨伴する人、「某大臣の—」。——きり[巾着切](名) 人の懷中物などを窃に切り取る盜人。すり。
(きん-ちゆう[禁中](名) 內裏、禁闕、宮中、ごてん。
(きん-ちよ[近著](名) ちかごろの著述物。
(きん-ちよく[謹直](名) 謹みてかたくるしき振舞なきこと。つゝしみ深くしてすなほなること。
きん-づくり[金作](名) 黃金にてかざりつくりたるもの。「—の太刀」。
ぎん-づくり[銀作](名) しろかねにてかざりつくりたるもの。
きん-つば[金鍔](名) ㊀金にてつくりたるつば、寬永年間に流行せり。㊁「きんつばやき」の略言。——やき[金鍔燒](名) 一種の菓子、饂飩粉に餡を包み、圓く扁くして、金屬の板の上にて燒きたるもの。
(きん-てい[禁廷](名) 禁闕、宮中、きんり。——さま[禁廷樣](名) 主上を申し奉る尊稱。
(きん-てい[欽定](名) 君主の自ら定めたまへ

ると。——けんぱふ[欽定憲法](名) 一國の君主が制定して發布せられたる憲法。
(きん-でい)[金泥](名) こんでい。「こんでー」。
(ぎん-でい)[銀泥](名) こんでいの類、銀の粉をにかは水にてときたるもの。
(きん-てき)[金的](名) 一寸四分の金色のなかに三分許の丸を描きたる射術の的。
(ぎん-てき)[銀笛](名) 銀色をなしたる金屬製の笛、西洋より傳來したるもの。
(きん-てつ)[金鐵](名) ㊀金と鐵と。㊁極めて堅固なる物事をたとへいふ語、「—の盟」。
(きん-てん)[均霑](名) 他と同一に利益を受くること、平等にうるほふこと、(多く國際の利益にいふ)。
(きん-でん)[金殿](名) 金を用ひて裝飾を施したる殿舍、又、極めて壯麗なる殿舍、「—玉樓」。
(きん-ど)[襟度](名) 物事にたへ得る心中、むねのうち。
(きん-とう)[均等](名) ㊀ひとしきこと。へいきん。びやうどう。㊁貸借勘定などの聊も違はぬこと。
(きん-とうぐわ)[金冬瓜](名) 【植】「カボチヤ」の類、果實は色甚だ赤く、形は長くして底扁く、味たうなすの如し。(紅南瓜)。
(きん-とき)[金時](名) ㊀「きんたらう」に同じ。㊁小豆に砂糖を交へて煑たるもの。
(きん-とく)[金德](名) かねを多くもつこと、人德の對。
(きん-どく)[菌毒](名) 菌類の含有する毒。
きん-どけい[金時計](名) きんがはどけい。
ぎん-どけい[銀時計](名) ぎんがはどけい。
きん-とん[金團](名) 一種の料理、ながいもをすり、これに砂糖を加へて餡となし、栗の實又は慈姑(クワイ)の煑たるを混じたるもの。(橘飩)。

(きん-なう)[錦囊](名) ㊀にしきの巾地にてつくりたる袋。㊁名吟多き人の草稿にいふ語。
(きん-なう)[金囊](名) かねのいれてあるふくろ。
ぎん-ながし[銀流](名) ㊀水銀にとのこを混じ、金屬に擦り付けて、銀色となすに用ふるもの、又、それを用ひて銀色となしたるもの。㊁上邊は麗しくて上部のみよく見ゆること、又、其物、「—の人物」。
(きん-なふ)[金納](名) 租稅又は小作料を納むるに金錢を以てすること、米納の對。
キンナラ[緊那羅](名)【佛】(梵語、Kimnara) 八部衆の一、音樂の神といふ。
ギン-ナン[銀杏](名) (字の唐音)いてうの樹の果實。


[キンナラ]

(きん-にく)[筋肉](名) 高等動物の外皮を剝(ハ)ぎて内に見ゆる色赤くして柔軟なるものと、其內臟の壁を繞圍せるものとをいふ、前者を横紋筋一に隨意筋といひ、後者を無紋筋一に不隨意筋といふ、前者は索狀の大小束をなして横紋を有し、種々なる方向に骨に附著し、關節に跨(マタ)りて骨と骨とを聯結す、意志のまに／＼運動するものにして、關節の運動は專ら其收縮力による、後者は束をなさずして紋狀なく、自體の收縮力により運動を營み、意志のまに／＼に運動するものにあらず。
(きん-ねん)[近年](名) この頃、ちかごろ。
(きん-のう)[勤王](名) 「きんわう」の訛。——じやうい[勤王攘夷](名) 「きんわうじやうい」の訛。
きん-の-かんむり[金冠](名) 「きんくわん」に同じ。
廿きん-の-こと[琴](名) 七絃の琴、きん。

きん-ば[金齒](名) 金をかぶせ又は塡(ウ)めたる齒、又、金を用ひて細工せる入齒。
(きん-ば)[金波](名) 月の光の稱。又、月光の映(ウツ)りて金色を帶びたる波。
ぎん-ば[銀齒](名) 銀をかぶせ又は塡(ウ)めたる齒、又、銀を用ひて細工せる入齒。
(きん-ぱい)[金杯](名) 金にてつくりたる杯。
(きん-ぱい)[金牌](名) 金にてつくりたる賞牌の稱にして、賞牌の第一なるもの。
キン-パイ[金海](名) (字の朝鮮音、Kum-haiの訛)朝鮮產の陶器の一種、茶器に用ふ。
(ぎん-ぱい)[銀杯](名) 銀にてつくりたる杯。
(ぎん-ぱい)[銀牌](名) 銀にてつくりたる賞牌、金牌に次ぐもの。
(きん-ばう)[近傍](名) 近きあたり、ちかまはり、きんじよ。(近邊)。
(きん-ぱく)[金箔](名) ㊀黃金の箔。㊁正味より一層よく世人に思はしむる飾、「—がはげる」。㊂ねうち、くらゐ、「—がついた」。——けんでんき[金箔驗電器](名)【理】「ガラス」瓶內に二枚の金箔を吊(ツ)し、其上部は眞鍮の板又は球に終はる裝置にして、或物體の電氣の有無を驗するに用ふる器、今電氣の有無を驗せんとする物體を其板若しくは球に觸るゝときは、電氣あれば二枚の金箔は開き、然らざるときは從前の狀態を保つ。——つき[金箔附](名) ㊀まがひなき正味のもの、「—の狂人」。㊁かたがき又はくらゐなどのあること。
(ぎん-ぱく)[銀箔](名) 銀の箔。
きん-ばへ[金蠅](名)【動】蠅の一種、胸背共に黃金色をなし、好んで腐敗せる食物等に集まる。
ぎん-ばへ[銀蠅](名)【動】「くそばへ」に同じ。

(きん-ばん)[勤番](名) ㊀かはる／＼勤務に赴くこと。㊁德川時代に、諸侯の大小名の家臣が、交代して江戶の屋敷につとめたりしこと、(妻子は國許に殘し置くを例とせり)。㊂轉じて、獨身にして勤務のために遠方に獨在すること。——もの[勤番者](名) 勤番のくにもの。
きん-びやうぶ[金屛風](名) 地紙に金箔をおきたる屛風、特に其全體におきたるものゝ稱。
ぎん-びやうぶ[銀屛風](名) 地紙に銀箔をおきたる屛風、特に其全體におきたるものゝ稱。
きん-びやくだん[金白檀](名) 漆の塗方、金箔を一面におきてうすく漆をぬりたるもの。
きん-ぴら[金平](名) (金平本の主人公の名に起る)強くして立派なる物事にいふ語、「—骨」。——ごばう[金平牛蒡](名) 一種の料理、ごばうを細かくきざみ、胡麻の油にていためて醬煮たるもの。——ぼね[金平骨](名) 堅固なる骨、(扇などに用ふ)。——ぼん[金平本](名) 德川の初代に流行せし、金平といふ主人公の武勇を述べたる極めて幼稚なる淨瑠璃本、轉じて、すべて武勇なる人を描(エガ)きたる幼稚なる小說などにいふ語。——もの[金平物](名) 芝居又は小說にて、趣味少き武勇談を脚色(シク)とせるものゝ稱。
ぎん-ビン[銀瓶](名) 銀製の瓶。
(きん-ぷう)[金風](名) あきかぜ。秋風。
(きん-ぷくりん)[金覆輪](名) 金を被(カ)せたるふくりん、「—の鞍をおき」。
きん-ぷち[金縁](名) ㊀うるしぬりのふちに金をぬりたるもの、「—の椀」。㊁金にて緣をつくりあるもの、「—の眼鏡」。
きん-プラ[金布羅](名) 「テンプラ」の一種、蕎麥粉を衣として揚げたるもの。
(きん-ぷん)[金粉](名) 金の粉。
(ぎん-ぷん)[銀粉](名) 銀の粉。
(きん-べん)[勤勉](名) つとむること。勉強。
(きん-ぺん)[近邊](名) 近きあたり、きんじよ。
きん-ペン(名) 金にてつくりたる「ペン」さき。
(きん-ぼ)[欽慕](名) おもひのぞむこと。あたふこと。
きん-ぼら(名)【動】硬鰭類に屬する魚、體は細長側扁にして、頭口共に小さし、背鰭は頭後より起りて全背上を被ひ、體色は背部紅褐にして暗褐色の斑紋あり、體長大なるは五六寸許、東海地方に多く產する近海魚なり。
きん-ぽうげ(名)【植】毛莨科に屬する草、葉は掌狀に分裂し、夏の頃、五瓣黃色の花を開く、果實は小形にして球狀をなす、有毒植物なり。
キンマ[蒟醬](名) ㊀安南地方に產する藥の實の如き果實、蜜に漬けて食ふ。㊁「キンマで」の略言。——で[蒟醬手](名) 舶來の漆器、金漆をもて[illegible]しく模樣を畫きたるもの。おもに「キンマ」を盛るより此名あり。
ぎん-まくはうり[銀甜瓜](名)【植】まくはうりの一種、果實は大形なれど味美ならず。
(きん-まん-か)[金滿家](名) 有福なる人。金もち。ぶげん。
(ぎん-み)[吟味](名) ㊀詩歌を吟じ味ふこと。㊁よく物事を調べ撰ぶこと。㊃罪を問ひたゞすこと、詮議すること。——かた[吟味方](名) 吟味する役前、又、其人。——がかり[吟味掛](名) ㊀詮議のかゝりあひとなること。㊁吟味の受持、又、其人。——やく[吟味役](名) 吟味する役前、又、其人。
(きん-みつ)[緊密](名) ㊀きびしくしてぬけめなきこと。㊁すきまなくぴつたりと附着すること。
きん-みづひき[金水引](名) ㊀水引の一種、金箔をおきたるもの。㊁【植】薔薇科に屬する草、葉は不整齊羽狀複葉にして、花は總狀花序に排列し、花瓣は五個ありて黃色を呈す、藥用植物なり。(龍芽草)。
(きん-む)[勤務](名) つとめ。
(きん-むく)[金無垢](名) 混合物なき純金。
ぎん-むく[銀無垢](名) 混合物なき純銀。
(きん-め)[斤目](名) かけめ。りやうめ。
(きん-め)[金目](名) 昔時の兩・步・朱などの名目。
(ぎん-め)[銀目](名) 昔時の貫・匁・分などの名目。
(きん-めい)[欽命](名) 君王のおほせ又はつかひ。
きん-めつき[金鍍金](名) 金にて鍍金(メッキ)すること、又、其鍍金もの。
ぎん-めつき[銀鍍金](名) 銀にて鍍金すること「又、其鍍金もの。
きん-モール[金毛織](名) 金絲の「モール」。
ぎん-モール[銀毛織](名) 銀絲の「モール」。
きん-もつ[禁物](名) ㊀禁じ戒むること、又、其物事、(禁忌)。㊁いみさくべきこと、又、其物事。
きん-もとゆひ[金元結](名) 金色のもとゆひ。
ぎん-もとゆひ[銀元結](名) 銀色のもとゆひ。
(きん-もん)[禁門](名) 禁闕。
(きん-もん)[金紋](名) 金漆をもて畫きたる紋所、德川時代に、大名が家格に由りて許され、其挾箱に記し、還(ミタリ)に用ひられざりしもの。
廿きん-や[禁野](名) 古昔、天子の御獵のため、私に鳥を捕ふるを禁止したる所、河內國交野(カタノ)の類。
(きん-やく)[勤役](名) 役を勤むること、又、其役。
(きん-ゆう)[金融](名) ㊀金融市場に於て、金錢の需要供給の狀態、卽ち、金錢に關する諸取引の狀態の稱、金融市場にて、貸出をなし得べき金錢の多

きに反して借入をなさんとする人の少きときは、これを金融緩漫といひ、若し金融市場にて貸出をなし得べき金錢の少きに反して借入をなさんとする人の甚だ多きときは、これを金融逼迫といふ。㊁金錢の融通。かねまはり。――かい[金融界](名)金錢の融通する社會。金融市場。――きくわん[金融機關](名)金融市場にて金融の便利を圖るために設置せられたる經濟上の機關、銀行又は手形交換所の如きこれなり。――しぢやう[金融市場](名)世界又は一國若しくは一地方に於ける富の集積して其金融上の主要なる所。

(きんよく-しゆぎ[禁慾主義](名)【倫】肉體上に關する一切の慾望若しくは名譽・利益・富貴等を得んとする念慮を禁止するを以て、道德に進む手段となす主義。

(きん-らい[近來](副)ちか頃。この頃。「―豐作打續き」。(近時)。

(きん-らう[勤勞](名)㊀勵役のはねなり。つとめの勞苦。「―に酬ゆ」。㊁【經】直接には生産に効力を及ぼさゞれど、間接には生産に効力を及ぼす勞力、卽ち、官吏・辯護士・著述家などの勞力をいふ。

(きん-らん[金襴](名)一種の織物、錦の類にして、横にひら金の絲を織りて地とし、絹絲にて模樣をあらはしたるもの。(織金)。――で[金襴手](名)磁器の模樣の一種。にしきで。

(きん-らん[金蘭](名)(易經に二人同心其利斷金、同人之言其臭如蘭とあるに出づ)朋友間の親密のいと親しきにいふ語。「―の交」、「―の契」。――ぼ[金蘭簿](名)文友の姓名宿所などを書きとめおく帳簿。

(ぎん-らん[銀襴](名)金襴の類、銀色の絲にて織りたるもの。

(きん-り[禁裏](名)宮中。禁中。ごてん。(内裏)。――さま[禁裏樣](名)きんていさま。主上。――づき[禁裏附](名)德川時代に、幕府より禁中の守護につけおきし武士の稱。

(きん-り[金利](名)金錢の借用に對する報酬。金錢の利子。

(きん-りやう[斤量](名)りやうめ。目方。

(きん-りよく[金力](名)かねのちから。

(きん-りん[近隣](名)近きとなり。きんじよ。

(きん-りん[金輪](名)金の輪。又、金色の輪。

(きん-るゐ[菌類](名)【植】きのこ・かび等の總稱、種類頗多にして、構造形狀等より生殖機關の狀態に至るまで一樣ならざれど、何れも柔組織にして體中に葉綠を缺き、特立の生活をなす能はず、他の有機物に寄生し滋養分を取りて生活す、死物に寄生するものと生物に寄生するものとあり。

(きん-るゐ[金類](名)金屬に同じ。

(きん-れい[禁令](名)㊀或行爲を禁止する法令、刑罰に關するもの、大部分はこれに屬す。㊁【法】民事上にて、他人の權利を害し若しくは自己の義務を怠る行爲の豫備又は繼續をなすものに對し、關係者の請求により、其行爲を禁止するために裁判官の發する命令。

(きん-れん-げ[金蓮花](名)【植】「あさ」この一名。

(きん-れん-ぼ[金蓮步](名)(支那南朝の齊の東昏侯が潘妃を愛し金製の蓮花を地におきて、其上を步ませ步々生蓮花といひて興じたる故事に出づ)美人の步行にいふ語。

(きん-ろく-こうさい[金祿公債](名)華族・士族の家祿及賞典祿を償還するために、明治九年にこれを公債に改めしもの。

(きん-わう[勤王](名)王事に勵勞すると。君王に忠を致すと。――じやうい[勤王攘夷](名)德川幕府の末年、朝野の志士が其專橫と開港とに對して、反抗運動をなすに標榜せし題目。

(きん-ゐ[金位](名)鑄造する合金の品位。

(きん-ゐん[金員](名)かねだか。又、きんす。

(きん-ゑん[金圓](名)きんす。「―を取る」。

(きん-ゑん[禁苑](名)宮城内の御園。

(きん-をく[金屋](名)金にて裝飾せるいへ。又、おごりをつくしたるいへ。「―の館」。

く　ぐ

く　喉的破裂音に卽ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「う」との綴音。

ぐ　「く」の濁音、凡て「く」音と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

(く[句](名)㊀文章又は言語の一切(キリ)、卽ち字を聯ね又は言を綴りて、一文としての意義を形成するに至らざるもの。㊁和歌若しくは俳句等の一切、普通は五字若しくは七字にして、時に字あまりと稱し、一二字の更に加はるとあり。㊂詩の一切、普通は五字若しくは七字にして、時には四字六字若しくは三字乃至十數字のものあり。㊃俳句の俗稱。

(く[苦](名)㊀はねをり。はたらき。㊁しんぱい。きづかひ。「―にする」。㊂くるしみ。なやみ。「人の―を救ふ」。㊃【佛】一切有爲の心行が、无常の患累のためになやまさるゝと、「生老病死の四―」。㊄【心】心の活動が盛大なる狀態より微弱なる狀態に落下するか又は精力に不相應なる外界の刺激を受

くるかによりて生ずる感情。

(く[空](名)「くう」に同じ。

(く[區](名)㊀こわけ。さかひ。分域。㊁しな。わかち。差別。㊂場所又は方位。「殊方別―」。㊃小さき室又は小さき舍。「買―をつくる」。㊄物を藏(ザ)むる所又は身を容るゝ所。「賊の―處を知る」。㊅まち〳〵。べつ〳〵。「―にして別あり」。㊆行政區劃の一、北海道・沖繩縣に於けるもの卽ち小樽區・那覇區の如きは、國の行政區劃にして、市町村に於けるもの卽ち麴町區・神田區の如きは、地方自治體の行政區劃なり、前者は法人なれど後者は法人にあらず。

(く[九](數)こゝのつ。

く[來](自、か變)こなたへ至る。きたる。

(―く[軀](接尾)佛像などを數ふるにいふ語。「觀音三―」。

(ぐ[具](名)㊀うつは。だうぐ。「物の―」。㊁したく。そなへ。設備。㊂きりやう。人物。「將相の―」。㊃ごもくずしの中に混ずるたね。(具)。

(ぐ[愚](名)㊀おろか。バカ。㊁バカもの。たはけもの。㊂自分の才能の謙稱。「―を効す」。――にかへる　おろかになる。ぐちになる。――にもつかぬ　甚しく理非のわかちなきにいふ。

(ぐ[愚](代)自分の謙稱。「―案ずるに」。

(ぐ[五](數)博奕にて、賽(サイ)の目の五の數の稱。

(ぐ―[愚](接頭)自分の物事に冠し、謙遜の意を表はす語。「―見」、「―策」、「―老」。

クーデター[Coup d'Etat](名)猛烈なる政略を斷行すると。大打擊を加ふると。暴斷を行ふと。

クーリー[苦力＝Coolie](名)支那にて人足の稱。

クーロン[Coulomb](名)【理】電氣量の單位、「アンペーア」の電流が一秒時間に送る電氣の量。――けい[Coulomb meter](名)【理】一定の時間に電路を通過するクーロンの量を計る器械。

(く-あくせつ[口惡說](名)【俳】口にて妄言・綺語・兩舌・惡口等の惡行をなすと。

く-あはせ[句合](名)二人各自に俳句をつくり、判者がその優劣を判ずると。

ぐ-あひ[工合](名)㊀ものゝ構成せられたる形狀、「―のよしあし」。㊁ものゝ適合せるありさま。「都―がよし」。㊂あんばい又はてうし。

(ぐ-あん[具案](名)書狀などにかきしたゝむると、又、一定の方法手段をそなふると。

(ぐ-あん[愚案](名)㊀おろかなる考。バカなるおもひ。㊁自分のかんがへの謙稱。愚見。

くい[悔](名)くゆると。後悔。「―の八千度」。

(く-い[區醫](名)衞生上其他必要なる場合のために、區役所よりかれて囑託しおく醫師。

(ぐ-い[愚意](名)「ぐあん」(二)に同じ。

くい-あらため[悔改](名)前非をくいて性行を改め善に向ふと。(おもに「キリスト」敎にていふ)。

(ぐ-いう[具有](名)そなへたもつと。

くい-くい(名、副)物をはげしく曳くさまにいふ語。

ぐい-ぐい(名、副)㊀ぐい〳〵の意を稍や強めたる語。「―引く」。㊁勢よく酒などを飲むさまにいふ語。「酒を―飲む」。

ぐい-のみ(名)ぐい〳〵と勢よく飲むと。「酒の―」。

(くう[空](名)㊀天と地との間のむなしき處、そら。ちゆう。「―を掴んで七顚八倒」、(虛空)。㊁空間の略言、「時―を超越す」。㊂むなしきと。むなしき處、から。あき。「―を打つてよろ〳〵よろ」。㊃ひろきと。廣大、「天―海濶」。㊄事實なきと。又、根據なきと、「―な噂」。㊅むだ。いたづら。あだ。「―な考」。㊆知性なきと、思慮なきと、「―で居たから知らぬ」。㊇執着なきと。私意なきと。又、煩惱なきと。㊈【佛】宇宙の萬事萬象は、すべて因緣の所生にして、實體自性なきと。――そく-ぜしき[空卽是色]【佛】諸法の本體は空なれど、因緣の相續により歷然として存在し、其まゝに有なりといふ。

(ぐう[寓](名)かりずまひ。やど。

(ぐう[偶](名)㊀つゐ。そろひ。㊁つれあひ。めをと。㊂なかま。とも。㊃ぐうすう。ちやう。

(ぐう-い[寓意](名)物事に託して、意をほのめかすと。「―小說」。

(ぐう-かく[隅角](名)㊀すみ。かど。㊁三平面以上の一點に會する所。

(くう-かん[空間](名)㊀あきてあるところ。からなるばしよ。すきま。あひだ。㊁【哲】上下・四方・遠近・長短等によりて表はさるゝ一般無限にして物體の延長の成立し得べきもの、彼處・此處・平面・立體等は其部分の稱なり、此槪念は、吾人の心中に具有せる形式なりともいひ、又は觸感視感等によりて物の限かれる樣を感得し、抽象に抽象を重ねて得たるものともいへり。――び[空間美](名)繪畫又は彫刻等の稱。

(ぐう-かん[偶感](名)偶然に發したる感想。うかびたるかんがへ。

(くう-き[空氣](名)地球を包圍する氣體にして動植物の呼吸するもの、無色・無味・無臭にして、酸素四・窒素一の割合に混合す。――じゆう[空氣銃](名)一種の銃、壓搾空氣の作用によりて、筒中の裝塡物を發射する裝置のもの。――ブトン[空氣蒲團](名)側を空氣の漏れざるやうにし、中に空氣を吹き入れ膨(フク)らして使用する裝置の敷蒲團。――ポンプ[空氣―＝Air pump]

(名) 空氣を排除する「ポンプ」、圓筒の底に筒内に向って開く瓣あり、又、筒に密に嵌入する活塞にも外方へ向く瓣あり、筒底を空氣を排除せんとする器に連絡して活塞を上下せしむ、活塞を上ぐるときは、底の瓣開きて空氣筒内に入り來り、活塞を下ぐるときは、底の瓣閉ぢ空氣出づるにより、器中の空氣を排除するを得、されど如何に活塞の上下を反覆すとも、充分空氣を排除する能はず、此外水銀を用ひたる空氣「ポンプ」あり、水銀「ポンプ」の條を見よ、(空氣喞筒)。 ——まくら[空氣枕](名) 側を空氣の漏れざるやうにし、中に空氣を吹き入れ膨(フク)らして使用する裝置の枕。 ——ランプ[空氣洋燈](名) 光力を強くするために、心を通じて上下に空氣のよく通ふ裝置ある洋燈。

(くう-きよ[空虛](名) ㊀空しくて何物も存せざること、から。 ㊁乏しきこと、竭きたること、「資力—」。 ㊂防禦なきこと、そなへなきこと、「敵の—を衝く」。

(ぐう-きよ[寓居](名) かりずまひ。

(くう-くう[空空](名) ㊀茫然としてあること、分別なきこと。 ㊁私意なきこと、執着なきこと、又、煩惱なきこと、「—乎たり」。 ㊂[佛]色心內外共に空なること、 ——じやく-じやく[空空寂寂](名) ㊀[佛]宇宙の有形も無形も、其實體自性は空にして何等の思惟をも絕つこと。 ㊁思慮無きこと、又、何事をも辨知せざること、「—の人間」。

(ぐう-ぐう(名、副) ㊀「ぐい〱」に同じ、「—飲む」。 ㊁鼾聲を發するさまにいふ語、「高鼾を—かく」。

(くう-げ[空華](名) ㊀かすみたる眼にて月を望めば、空中に花ある如く見ゆること。 ㊁煩惱(ボンナウ)の滿ちたる心に、種々の妄相の見ゆるにいふ語。

(くう-けい[空閨](名) 夫若しくは妻のひとりねのねや、(空房)。

(くう-けん[空拳](名) ㊀何物をも持たざるにぎりこぶし、又、何物をも蔽(カウ)らざるにぎりこぶし、「—を以て人を搏殺す」。 ㊁からて、てぶら。 ㊂孤立して援助なきこと、又、十分の用意なきこと、「—よく巨萬の富を致す」。

(くう-げん[空言](名) ㊀根も葉もなきはなし、眞實ならざる說。 ㊁やくにたゝぬことば、實施せられ難き說、「—施すなし」。

(ぐう-げん[寓言](名) 事實を假設したる寓意の談話、「莊子の—」。

(ぐう-ご[偶語](名) 相對して語ること。

(くう-こく[空谷](名) 人なきたに。 ——の-きようおん[空谷跫音](名) (空谷に聞ゆる人のあしおと) さびしさにわびてあるときに、出會せしうれしきはなしなどにいふ語。

(ぐう-ざ[偶坐](名) 相對して坐すること。

(くう-さう[空想](名) [心]現實よりかけ離れたる思想、事實及法則等に関係なく、其目的に達する手段も太だ漠然とし、實用的より寧ろ快樂的若しくは苦痛的にして、其多くは偶然に發作するもの。

(ぐう-ざう[偶像](名) 木・石又は金屬などにて作りたる像。 ——けう[偶像教](名) 偶像を宗教的容器として崇拜信仰し、これによりて苦惱を免れ安慰を得んとする宗教。

くう-さうば[空相場](名) 「くうとりひき」に同じ。

(くう-し[空紙](名) 何ものも書きてなき白紙。

(ぐう-じ[宮司](名) 官幣社又は國幣社の最高の神官。

(ぐう-じつ[偶日](名) ちやうの日。

(くう-しゆ[空手](名) からて、てぶら、くうけん。

(くう-しよ[空所](名) 空虛なる處。

(ぐう-しん[耦進](名) 左右より並び進むこと。

(ぐう-じん[偶人](名) でく、人形(ニンギャウ)。

(ぐう-すう[偶數](名) [數]二を以て整除し得べき數、四・六・八・十等の如きこれなり、ちやうのかず。

(ぐう-せい[偶性](名) 其物の本來の性質にあらずして偶然に生じたる狀態。

(ぐう-せい[偶成](名) ㊀偶然に成りたること ㊁相合して成りたること、

(くう-せん[空船](名) からぶね。

(くう-ぜん[空前](名) 以前にそれに比すべき物事なきこと、「—絕後」。

(ぐう-ぜん[偶然](名) ㊀おもひよらざること、意外。 ㊁豫想せざりし結果、原因の知れざる事柄。

(ぐう-ぜん[偶然](副) おもひもよらず、不圖。

(くう-だん[空談](名) むだばなし。又、ねなしごと。

(くう-ち[空地](名) あき地。

(くう-ちゆう[空中](名) ㊀大空の中、そらのうち、なかぞら、「—に舞ひ上がる」。 ㊁[佛]不生不滅不垢不淨不增不滅なる諸法の本體。 ——でんき[空中電氣](名) 空中に現はるゝ電氣。 ——ひかうき[空中飛行機](名) 兩翼を具へて空中を飛行する機械。 ——ひかう-せん[空中飛行船](名) 輕氣球に機關を附して進行するもの。 ——ろうかく[空中樓閣](名) 根據なき物事にたとへいふ語。

+くう-づ-く[功付](自、か四) 器用になる、巧になる、「くうづきて、だらによみたり」。

(ぐう-てい-るゐ[偶蹄類](名) [動]脊椎動物の一、每肢に四蹄ありて中央の二蹄はよく發達すれど、兩側のものは小にして地に接せずこれを懸蹄といふ、日齒の咀嚼面に琺瑯質より成る數多の波線あり、牛・鹿・羊・豕等これに屬す。

くう-ざりひき[空取引](名) 實際に物品の賣買をなさず、たゞ其相場の高下のみにより損益の計算をなす取引、くうさうば。

くう-に[空](副) ㊀徒に、むなしく。 ㊁めあてなく、かんがへなく。

(くう-はう[空砲](名) からでっぱう。

(くう-はう[空胞](名) 內部の空虛なる細胞。

(くう-ばう[空房](名) ㊀人なきへや、あきま。 ㊁「くうけい」(空閨)に同じ。

(くう-はく[空白](名) 紙面の何も書きてなき所。

(くう-ばく[空漠](名) ㊀何物もなくばっとしてひろきこと。 ㊁ぼんやりとして要領を得ざること。

(くう-ふく[空腹](名) 食に飢ゑて胃の空乏なること、ひだるきこと、「—を感ず」。

(くう-ぶん[空文](名) 實益若しくは實用なき文言又は規則。

(ぐう-もく[寓目](名) 目をつくること。

くうや-ねんブツ[空也念佛](名) [佛]天台宗の一派、空也上人光勝を祖とす、京都の空也堂を本山とし、徒弟は優婆塞(ウバソク)の姿にて、無常頌文を誦(ヨ)み、念佛をとなへ瓢を叩(タタ)きて踊る。

(くう-り[空理](名) 實際とかけはなれたる理。事實に關係なき理。

(くう-ろん[空論](名) 根據なき議論。又、無益なる意見。

(くう-ゐ[空位](名) あきてある位地。

(く-えう[九曜](名) ㊀七曜に、羅睺(ラゴ)及計都(ケイト)の二星を加へたるものゝ稱、陰陽家などにては、此九個の星を人の生年に配當して、其運命吉凶を判ず、(九星)。 ㊁紋所の名、中央に大いなる星を置き、周圍に八個の小なる星を附したるもの。

[くえう(二)]

(く-えき[苦役](名) ㊀苦しき勞動、つらき使役。 ㊁懲役又は徒刑等の稱、「七年の—」。

(く-えき[驅役](名) おひつかはれ、おひつかひ。

(く-えんさん[枸櫞酸](名) [化]柑類の果實中に含まるゝ鹽基性の酸、無色無臭の結晶にして、水に溶解す。

くが[陸](名) (國所(クニガ)の略言)地球の表面の河海湖沼ならざる部分即ち水の湛(タタ)へざる場所、りくち。

(く-かい[苦界](名) ㊀[佛]苦思ある世界即ち娑婆。 ㊁遊女の境界。

(ぐ-かう[愚考](名) ぐあん、ぐい。

(く-がく[苦學](名) なみ〱ならぬ辛苦をして學問すること。 ——せい[苦學生](名) 苦學する書生、又、勞働しつゝ學問する書生。

+くが-だち[探湯](名) 古代、是非正邪を判ずるため、神に誓ひて熱湯に手を入れしめしと、其正なるものは爛(タダ)れず邪なるものは爛るといへり。

くが-ぢ[陸路](名) 陸上を通ずる道路、又、りくぢ。

(く-かん[苦寒](名) ㊀さむさにくるしむこと。 ㊁いとさむきこと、又、最もさむき時。

(ぐ-がん[具眼](名) 物の是非を判ずる識見あること、「—の君子」。

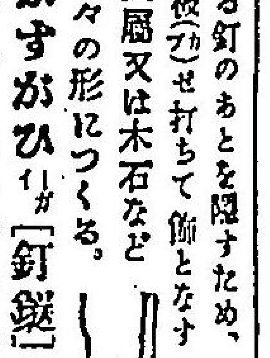
くき[莖](名) ㊀[植]草本の幹莖即ち中軸の稱にして、胚の幼芽の成長したるものなり、或は地上に現出するもあれば或は地中に存在して根狀をなすもあり、或は一年生なるあり或は多年生なるあり。 ㊁花の柄又は葉の軸、「菜の—」。 ——づけ[莖漬](名) 野菜の莖を鹽漬にしたるもの。

+くき[岫](名) 山の洞ある處、(洞)。

+くき[豉](名) 今日の醬油の類。

くき(名) [動]「うごひ」の一名。

くぎ[釘](名) 材木と材木とを綴(ト)ぢ合するに用ふるもの、金屬・木・竹其他かたき物を細く削りてつくる。 ——かくし[釘隱](名) なげしに打ちつけたる釘のあとを隱すため、其上に被(カ)せ打ちて飾となすもの、金屬又は木石などにて種々の形につくる。


[くぎかくし]

——かすがひ[釘鎹](名) ㊀くぎとかすがひと。 ㊁雙方を離れぬやうつなぎとむるもの。 ㊂物事を動かさぬやうとめつくるもの。 ——じめ[釘締](名) 戶・蓋などに釘を打ちつけて、開かぬやうにすること、又、其物、「家の—」、「箱の—」。 ——づけ[釘付](名) 前條に同じ。 ——ぬき[釘貫](名) ㊀+柵の類。 ㊁紋所の名、四角形の角(カド)を左右上下に向けたるもの。(鉗子)。 ——ぬき[釘拔](名) 打ちこみたる釘を拔くに用ふる具、形は鋏(ハサミ)のごとく頭はけぬきの如し、其頭にて釘をはさみて拔く、(千斤秤)。 ——をさす かたく約定す。

ぐきぐき(名、副) 固く凝(ト)くさまにいふ語、「—凝く」。

(く-きやう[究竟](名) ㊀きはまり、つめ、終極、畢竟。 ㊁假定又は特殊に對して、根本又は普遍の稱。 ㊂最もすぐれたること、「—の士」。 ——かく[究竟覺](名) [佛]无明の惑ひ全く盡き、心性の本體を見顯して、心性の常住なる狀態。 ——げんり[究竟原理](名) 「きうきやうげんり」に同じ。

(く-ぎやう[公卿](名) 公即ち攝政・關白・大臣と卿即ち參議・大中納言及三位以上と。又、殿上人の總稱、くげ。

(く-ぎやう[苦行](名) [佛]極めてつらき修行、即ち斷食の類、「難行—の功を積み」。

(く-ぎやう[供饗](名) 形は三方と同じくして、四方に穴ある臺。「晉さへ—なり」。

+くき-やか[際](名) きはやかに分明なること、「壁

くさ-ぜり [句切] (名) ❶句のきれめ。段落。❷物事のかぎり。きり。

くさ-ぜん [句切] (自サ四) ❶句にて切る。❷作家又は段落を施す。きる。

くさ-ぜん [九斤] (名) 【動】雌の鶏冠・毛深く脚にも毛ありて人爲飼法の結果肥大となり、飛力殆どなき一種。

くさ-ぞう [区区] (名・副) ❶まち〳〵。つ〳〵。❷物事のさゝいなるさまにいふ語。「一の小國」

くさ-ぞう [九九] (名) 【數】九九合數の略言。

くさ-ぞう [九九] (數) 九と九との乘數。即ち八十一。

くさ-ぞう [莎草] (名) 【植】莎草科に屬する草。生ず。高さ二三尺、かやつりぐさに似て、秋の切、小花を圓く、莖を採りて寶蓋をつくり、又は繩をつくる。

くさ-ぞえ-かぶすうりょう [九九合數] (名) 【數】二つ九九の數の中にて、二つの數を掛け合はせたる積。

くさ-ぞえ [括] (名) ❶くゝすること。くゝること。❷くゝりそゆ。えばりそゆ。

ごくさ-ぞえ-つけるはり [括附] (他カ下二)

くさ-すぼし [括] (他サ四) くゝりつゝ。

くさ-せ [屈折] (名) 疾病のために、骨關のまがりたるもの。せむし。(俗語)

くさ-たち [並立] (名) 草の莖。

くさ-だち [袋] (名) 裏にて細かなる袋。袋又は具などを入るゝ用に供するもの。

くさ-つ [似偏] (名) ❶からくりの雛形を欲に合はせて彫はまる人形。❷さる人形。又其人形を欲に合はせて彫はまる人形。

くさ-つ [区区] (名・副) ❶まち〳〵。つ〳〵。❷物事のさゝいなるさまにいふ語。「一の小國」

くさ-つ [九九] (數) 【數】九九合數の略言。

くさ-つ-がふすうりょう [九九合數] (名) 【數】二つ九九の數の中にて、二つの數を掛け合はせたる積。

くさ-つ [括] (名) ❶くゝすること。くゝること。❷くゝりそゆ。えばりそゆ。

ごくさ-つけるはり [括附] (他カ下二)

くさ-つ-ぜる [屈折] (名) 疾病のために、骨關のまがりたるもの。せむし。(俗語)

くさ-つたち [並立] (名) 草の莖。

くさ-つたち [袋] (名) 裏にて細かなる袋。袋又は具などを入るゝ用に供するもの。

くさ-つつ [似偏] (名) ❶からくりの雛形を欲に合はせて彫はまる人形。❷さる人形。又其人形を欲に合はせて彫はまる人形。

くさ-つつ [句切] (名) ❶句のきれめ。段落。❷物事のかぎり。きり。

くさ-つつ [句切] (自サ四) ❶句にて切る。くぎりを設く。❷作家又は段落を施す。きる。

くさ-つん [九斤] (名) 【動】雌の鶏冠・毛深く脚にも毛ありて人爲飼法の結果肥大となり、飛力殆どなき一種。

くさ-つわく [区区] (名・副) ❶まち〳〵。つ〳〵。❷物事のさゝいなるさまにいふ語。「一の小國」

くさ-つわつ [九月] (名) 一月より數へて九つ目に當る月。「九月節句」(名) 五節句の一。九月九日。(重陽)。

くさ-つげ [公家] (名) ❶天子。朝廷。(官家)。❷殿上にて何候する人。卿。上達部。殿上人の總稱。(公卿)。

くさ-つげあくた [公家衆] (名) 中古、武家時代に、將軍に仕ふる武士に對して、朝廷に何候せし人の稱。

くさ-つげけん [公家] (名) ❶くゝはゝくゝえ。

くさ-つげけつあな [横穴] (名) ぬけあな。「形、方形。

くさ-つげけいい [短形] (名) 【數】各角が直角をなす四邊形。

くさ-つげけいい [惡見] (名) 自分の見の謬解。

くさ-つげき [硝酸] (名) 硝子の原に出づる❶生産のうち、きわいん。

くさ-つげず [海路] (名) ぬけみち。

くさ-つげつ [口訣] (名) くでん。

くさ-つげでん [公家田] (名) 古昔、地方の費用を支出するために設けし職田。「やくにぬみそ。

くさ-つけ [紉縫] (名) 縫目を衆にあらはさぬやうに用ふる針。

くさ-つけるはり [紉針] (名) (他カ下二) 縫目のこえ

くさ-ぞり [括] (名) ❶くゝすること。くゝること。❷くゝりそゆ。えばりそゆ。

ごくさ-ぞえ-つけるはり [括附] (他カ下二)

くさ-すぼし [括] (他サ四) くゝりつゝ。

くさ-せ [屈折] (名) 疾病のために、骨關のまがりたるもの。せむし。(俗語)

くさ-たち [並立] (名) 草の莖。

くさ-だち [袋] (名) 裏にて細かなる袋。袋又は具などを入るゝ用に供するもの。

くさ-つつ [似偏] (名) ❶からくりの雛形を欲に合はせて彫はまる人形。❷さる人形。又其人形を欲に合はせて彫はまる人形。

くさ-つわく [区区] (名・副) ❶まち〳〵。つ〳〵。❷物事のさゝいなるさまにいふ語。「一の小國」

くさ-つわつ [九月] (名) 一月より數へて九つ目に當る月。「九月節句」(名) 五節句の一。九月九日。(重陽)。

くさ-つげ [公家] (名) ❶天子。朝廷。(官家)。❷殿上にて何候する人。卿。上達部。殿上人の總稱。(公卿)。

くさ-つげけん [公家衆] (名) 中古、武家時代に、將軍に仕ふる武士に對して、朝廷に何候せし人の稱。

くさ-つげけん [公家] (名) ❶くゝはゝくゝえ。

くさ-つげけいあな [横穴] (名) ぬけあな。「形、方形。

くさ-つげけいい [短形] (名) 【數】各角が直角をなす四邊形。

くさ-つげけいい [惡見] (名) 自分の見の謬解。

くさ-つげき [硝酸] (名) 硝子の原に出づる❶生産のうち、きわいん。

くさ-つげず [海路] (名) ぬけみち。

くさ-つげつ [口訣] (名) くでん。

くさ-つげでん [公家田] (名) 古昔、地方の費用を支出するために設けし職田。「やくにぬみそ。

くさ-つけ [紉縫] (名) 縫目を衆にあらはさぬやうに用ふる針。

くさ-つけるはり [紉針] (名) (他カ下二) 縫目のこえ

くさ-ぞり [括] (名) ❶くゝすること。くゝること。❷くゝりそゆ。えばりそゆ。

ごくさ-ぞえ-つけるはり [括附] (他カ下二)

くさ-すぼし [括] (他サ四) くゝりつゝ。

くさ-せ [屈折] (名) 疾病のために、骨關のまがりたるもの。せむし。(俗語)

くさ-たち [並立] (名) 草の莖。

くさ-だち [袋] (名) 裏にて細かなる袋。袋又は具などを入るゝ用に供するもの。

くさ-つつ [似偏] (名) ❶からくりの雛形を欲に合はせて彫はまる人形。❷さる人形。又其人形を欲に合はせて彫はまる人形。

くさ-つつ [似偏女] (名) ❶くゝつを業はする人。❷遊女。

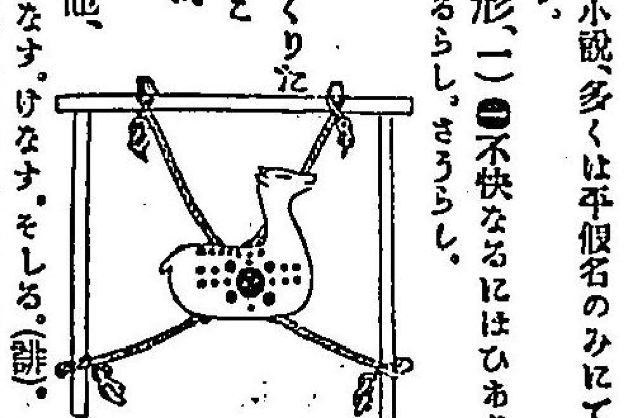
くさ-つつ [舞はしめ] (名) くゝつを業はする人。

くさ-つつ [似偏] (名) ❶くゝつもの。くゝつもの。❷くゝつに同じ。「一師」

くさ-つむ [包] (他マ四) 「つゝむ」に同じ。「一袖」

くさ-つむ [袋

笛」(名) くさかりわらはなどの吹く笛。――わらは(クワウワ)[草刈童](名) 草を刈る童子。
くさ-がれ[草枯](名) ㊀草の枯るゝこと。「―の頃に殘る」。㊁草の枯るゝ時節即ち秋季。「―の頃」。
くさ-かんむり[草冠](名) 漢字の冠の名。花・草などの字の上にある艹の字。さうかう。
くさ-ぎ[臭木](名) [植]馬鞭草科に屬する草。山野に生ず。葉は卵狀卵形にして尖り短毛を有す。聚繖花序は枝の上部に位して散在せる花より成り、萼は膨大し、花冠は白色にして紅色を帶ぶ。嫩葉は食用に供せらる。(海州常山)。
くさ-ぎり[臭桐](名) [植]「くさぎ」の一名。
くさ-ぎ・る(らりるるれれ)[耘](他、ら四) 田畑に生(オ)ふる雜草を除き去る。
〔くさ-くさ(名、副) 倦み厭きたるさまにいふ語。「厭きて、―する」。
くさ-ぐさ[種種](名、副) 物事の品數の多きさまにいふ語。いろ〳〵。さま〴〵。「―の品」。「―供へて」。
艹くさ-くだもの[草果物](名) 草に生じたる果實の食ふべきもの。胡瓜(キウリ)又は南瓜(カボチヤ)の如きこれなり。「其―を奉りて昂らましかば」。(蕪)。
くさ-けづり[草削](名) ㊀くさをけづり去ること。又、其人。㊁草をけづるに用ふる具。ワの字形をなす鐵器にして、これに柄をつく。
くさ-ごえ[草肥](名) 植物を田圃に鋤(ス)き込みて肥料となすもの。綠肥又は苗肥といふ。豆科に屬する植物最も適當なりといふ。
くさ-さ[臭](名) 臭くある度合。
くさ-ざうし(サウ)[草雙紙](名) (初めの印刷は極めて粗惡にして、あさくさ紙を用ひ、一種の惡臭ありしため、臭草紙といひしより轉ずともいひ、又、草假名にて書きしよりの名なりともいふ)德川時代に行はれし一種の短冊小說、多くは平假名のみにて書き、中に挿畫(エサシ)あり。
くさ-し(くしき、けれ)[臭](形、二) ㊀不快なるにほひあり。㊁其如くに見ゆ。然るらし。さうらし。
くさ-じし[草鹿](名) 的の一種。草に伏したる鹿の形をつくりたるもの。古昔、武士がこれを獸類に擬し、射術を學ぶに用ひたり。


[くさじし]

くさ-す(さしす、すせせ)[腐](他、さ四) あしざまにいひなす。けなす。そしる。(誹)。
くさ-ずり[草摺](名) (鎧にて草を摺る故にいふか)鎧の腰より以下を覆ふ部分の稱。數枚に分る。
くさ-だか[草高](名) 大小名の領地内の米の收穫の總高。其内より現石(ゲンコク)と稱して領主に納め、其殘餘は人民の所得としたり。
くさ-だち[草立](名) 草の生(オ)ふること。
くさ-だち[草質](名) 本草學にて、灌木などの草の性質を有せるものゝ稱。(草本)。
くさ-だんご[草團子](名) 去んこに餅草を搗(ツ)き混(マ)ぜてこしらへたるだんご。
〔ぐ-さつ[愚察](名) 自分の推察の謙稱。
艹くさ-つ-づき[草津月](名) 陰曆八月の異稱。
くさ-とり[草取](名) ㊀草を取り去ること。又、草を取る人。「田の―」。㊁草を取るに用ふる具。形はくまでに似る。
くさなぎ-の-つるぎ[草薙劍](名) 三種の神器の一。素盞嗚尊がきり殺したまひしやまたをろちの尾より出でたりといふ劍にて、もと叢雲劍(ムラクモノツルギ)といひしが、日本武尊これを佩(オ)びて東征したまひ、途中にて賊の詭計に陷り火攻にあひたまひしとき、これを以て草を薙(ナ)ぎたまひしより草薙劍といふ。其後熱田の神宮に奉祀す。
くさ-の-いほ(イホ)[草庵](名) ㊀くさぶきのいほり。㊁いぶせきいほり。――り[草庵](名) 前條に同じ。
艹くさ-の-かう(カウ)[草香](名) 草より取りたる香料。
くさ-の-かげ[草蔭](名) ㊀草の生ふるかげ。㊁くさばのかげ。
くさ-の-しる[草汁](名) 一種の顏料。雌黄と藍蠟とを混じたるもの。
艹くさ-の-て[草手](名) 平假名の古稱。
艹くさ-の-とざし[草扃](名) くさを編みてつくりたるとざし。轉じて、いぶせきすまひ。
くさ-の-はら[草原](名) 草の生(ハ)えわたる野原。
くさ-の-まくら[草枕](名) 「くさまくら」に同じ。
くさ-の-み[草實](名) 「くさくだもの」に同じ。
くさ-の-むしろ[草筵](名) ㊀艹草のよくはえそろひたるを筵にたとへいふ語。㊁草を筵のかはりに布きて坐すること。
くさ-の-や[草屋](名) くさぶきの家。
くさ-の-わう(ワウ)(名) [植]罌粟科に屬する草。葉は羽狀複葉にして小葉は缺裂す。花は繖形花序に排列し四個の瓣を有す、花柱短し、有毒植物なれど藥用に供せらる。(白屈菜)。
くさ-ば[草葉](名) 草の葉。――の-かげ[草葉陰](名) 黃泉又は墓所の下。「親は、―て泣く」。
くさ-ばうき(ハウキ)[草箒](名) 帚草又はきびがらなどにて造りたるはうき。
くさ-ばな[草花](名) ㊀草に咲く花。㊁花の開くべき草。

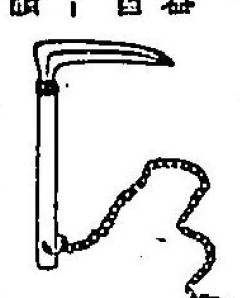
艹くさ-はひ(イーッ)(名) 物の種となるべきもの。「物定まらん―なるべき」。
くさ-はら(ハラ)[草原](名) 草の生じたる野。
くさ-び[楔](名) ㊀V字形の木片又は金屬片にして、木石を裂き又は重き物を押し上ぐるに用ふるもの、薄き程力少くして良く其用をなす。又、物と物との合せめの離れぬために、兩方へ跨らせて打ち込むにも用ふ。㊁車輪の脫落を防ぐために、軸の端の穴に挿(サ)すもの。(轄)。㊂物と物とをつなぎとむるもの。「あひの―」。
くさ-び[草火](名) くさをもやす火。
くさ-びえ[草稗](名) [植](い)「のびえ」の一名。(ろ)「はぐさ」の一名。
くさ-ひとがた[草人形](名) 古昔、祭事などに用ひし藁人形。わらにんぎやう。(芻靈)。
くさ-ひば(名) [植]「いはひば」の一名。
くさ-びら[草片](名) ㊀艹あをもの。やさい。蔬菜。㊁きのこ。たけ。(菌)。――いし[草片石](名) [動]珊瑚の類。海中の石に生ず、形きのこを積み重ねたるがごときもの。(石芝)。
くさ-ぶえ[草笛](名) 「くさかりぶえ」に同じ。
くさ-ぶか・し(くしき、けれ)[草深](形、二) ㊀くさだち茂げし。くさしげし。㊁ひなびたり。ゐなかなり。未開なり。「くさぶかきこの在處」。
くさ-ぶき[草葺](名) 茅又は麥藁などを以て屋根を葺(フ)くこと。又、其葺きたる屋根。

[くさぶき]

艹くさ-ぶし[草臥](名) 野山に臥すこと。「小野の―ふしわびて」。
くさ-まくら[草枕](名) たびまくら。たびね。
くさ-まくら[草枕](枕) 「旅」に冠する詞。
くさ-み[臭](名) くさきこと。くさき氣。
くさ-むすび[草結](名) ㊀山野の路案内などをなすに、草を結びて路を記すこと。㊁轉じて、先導して事を創(ハジ)むること。さきだち。
くさ-むら[叢](名) (草群の意)草の生(オ)ひ繁(シゲ)りたるところ。
くさ-め[嚏](名) 鼻の神經が、急に刺戟を受けて覺えず聲を發すること。くしやみ。
くさ-もち[草餅](名) 餅米によもぎの葉を混(マ)ぜて搗きたるもち。中にはあほばがらし又はつばきの葉などにて色を付けたるもあり。よもぎもち。
艹くさ-もちひ(チイモ)[草餅](名) 前條に同じ。
くさ-や[草屋](名) ㊀まぐさを貯藏する所。㊁草葺(クサブキ)の家屋。かやや。わらや。かやぶき。
くさらかし[腐](名) ㊀腐らすこと。㊁ものを腐らすに用ふる藥劑。
くさらか・す(さしす、すせせ)[腐](他、さ四) くさらす。
くさら・す(さしす、すせせ)[腐](他、さ四) くさるやうにす。くされしむ。
くさり[腐](名) ㊀くさること。「―が早い」。㊁くさりたる部分。くさりたる度合。
くさり[鬮](名) 音曲・遊藝又は講談などの段落。きり。「淨瑠璃一―」。
くさり[鏈、鎖](名) ㊀環と環とを貫き繋ぎたるもの。又、環と環とを數多く貫き繋ぎて長き連條となせるもの。(鎖、瑯璫)。㊁ものとものとをつなぎつゞくること。又、もののとものとの間をつなぎつゞくるに用ふるもの。きづな。――かたびら[鏈帷子](名) 小さき鏈を編みつらねてつくりたるかたびら、昔時の戰爭又は斬合などのときに、上着の下に着用せしもの。(鎖子鎧)。

[くさりかたびら]

――がま[鏈鎌](名) 昔時の一種の武器。鎌に長き鏈を着け、其端に適當なる鐵丸を着けたるもの、其鐵丸を投げかけて敵の武器を卷き取り、鎌を以て敵の首をかき切るなどに用ふ。――だい[鏈題](名) 一人の讀みたる歌の末の句をとりて、これを始めの句として次の人が歌を讀むこと。又、前の歌の末の句をとり、これを始めの句として次の歌を讀むこと。――ばかま[鏈袴](名) くさりかたびらの如くに造りたる袴にて、昔時、戰爭又は斬合などのときに用ひしもの。――れんが[鏈聯歌](名) 多人數にてよく聯絡するやうに讀む聯歌。


[くさりがま]

くさり―[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「―女」。「―男」。
艹くさ・る(らりるるれれ)[縺](他、ら四) つなぐ。つゞく。
くさ・る(らりるるれれ)[腐](自、ら四) ㊀たゞれうむ。あざれやぶる。「溫氣で―」。㊁金屬銹蝕せられて全く用をなさず。「鐵が―」。㊂すべて物の化學的變化によりやぶれくづるゝにいふ。「材木が―」。㊃用に堪へず。又、くづれやぶる。「性根が―」。
くされ[腐](名) ㊀くさり。㊁物をうちすてゝ、其成り行きに任すること。「ふて―」。「いっその―」。
くされ―[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「―儒者」。「―文章」。「―緣」。
くされ-だま[草連玉](名) [植]「ゆわうさう」の一名。
〔くされる[腐](自) 「くさる」の訛。
くさ-わけ[草分](名) ㊀草のある所を分け行く

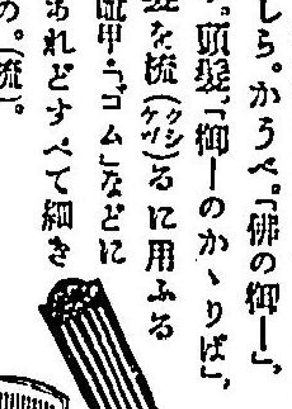
を。「ー衣」。⊖草の生じたる地を切り開くを。荒地の開拓。⊜事を創(ハジ)め行ふを。(草創)。——どろも[草分衣](名) 草の生じたる所を分け行くに着用する衣服。 「一名。

廿くさゐ-なき[草居鳴](名)【動】「ゐのまゐ」の

廿くし[首](名) かしら。かうべ。「佛の御ー」。

くし[髮](名) かみ。頭髮。「御ーのかゝりば」。

くし[櫛](名) 毛髮を梳(クシ)(ケヅ)るに用ふる具。黄楊(ツゲ)・竹・骨・鼈甲・「ゴム」などにて造る。其形種々あれどすべて細き齒の斯(ナラ)びあるもの。(梳)。


［しく］

くし[串](名) ⊖魚肉其他の食物を貫き、火に炙り又は日に乾すに用ふる細き簪(ハシ)の如きもの。「魚ー」「雅燒ー」。⊜すべて細長くして物を貫くに用ふるもの丶稱。「ーを刺す」。

(く-し[驅使](名) おひつかふを。

(く-し[苦使](名) むごきおひつかひ。

(く-し[苦思](名) いろ〱と心を苦しめおもふを。くるしきおもひ。

くし しくしきしけれ[奇](形、二) ⊖不思議なり、靈妙なり。たへなり。⊜あやしむべし。あやし。⊜珍奇なり。めづらし。

くじ[鬮](名) 木片・紙片其他何によらず數ある細片をあつめ、これに標記をつけおきて、人に其中の一を抽(ヌ)きとらしめ、其標記によりて、吉凶勝敗其他物事を判定するもの。(籤)。

(く-し[九時](名) 一時より數へて、九番目に當る時の稱。午前と午後とにあり、昔時の時刻にては、巳の上刻と亥の上刻と。

(く-し[九字](名) 臨兵鬪者皆陣列在前の九箇の字の稱、もと陰陽道にて用ひ、後に兵家及修驗道に移り、傳へて神秘の威力を有する護身の秘訣となす。——をきる 九字を唱へつゝ、指にて空中をたてよこに切るが如くしてまじなひをなすを。斯くすれば強敵も惡獸も恐るゝに足らずといひ傳へたり。

(く-し[公事](名) ⊖おほやけの儀式。朝廷にて行はるゝ事柄。⊜訴訟。⊜表立ちたる事柄。

くじ-あたり[鬮中](名) くじをひきて、定めのくじにあたるを。

くし-あはび ツーアツピ[串鮑](名) 串にさして干(ホ)したるあはび。 「らなひ。

廿くし-うら[櫛占](名) 古昔、くしにて行ひしう

く-しか[麞](名)【動】偶蹄類中麞鹿科に屬する獸、鹿より小さく角無し、毛は黑く、皮極めて柔かにして種々の用に供せらる。(麕)。 「貫。(乾柿)。

くし-がき[串柿](名) 串に貫きて乾したる柿の

くし-がた[櫛形](名) ⊖古代の櫛の背の形。⊜壁にくしがたにあけたる出入口、ぐわとうぐち。

く-しかた[公事方](名) 徳川時代の訴訟吟味の役。

くじ-く けけくくるくれけよ[挫、折](自、か下二) ⊖折れいたむ。まがり碎(クダ)く。⊜勢ぬく。よわる。はゞむ。⊜つまづく。たふる。

くじ-く かきくくけけ[挫、折](他、か四) ⊖折り傷つく。まげ碎く。「骨をー」。⊜勢を抑ふ。おさふ。よわむ。⊜うちつけて他人の罪過を詰責す。なじる。「まのあたりこれをー」。㊃つまづかす。たふす。

くし-げ[櫛笥](名) 櫛を入れおく筥。くしばこ。

くし-けづ-る らりるるれれ[梳](他、ら四) ⊖櫛にかけて毛髮をとゝのへをさむ。すく。⊜けづり除く。「兇を交り盡をー」。

〔くじける[挫](自) 「くじく」の訛。

くし-こ[串海鼠](名) 串にさし貫きたるいりこ。

くし-ざし[串刺](名) ⊖梟首するを。獄門。⊜串に刺し貫くを。「ーの魚」。⊜すべて魚を刺し貫くが如くに、物を刺し貫くを。

くし-ざ-す さしすすせせ[串刺](他、さ四) くしざしにす。

く-し-し[公事師](名) 他人の代理となりて、其訴訟をあつかふ人。辯護士。代言人。 「る道具。

くし-だうぐ カードウー[櫛道具](名) 髮を結ぶに入用な

(ぐ-しつ[愚室](名) 自分の妻の謙稱。

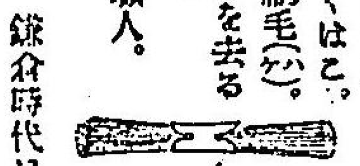
〔くじ-づよ-し くしきけれ[鬮强](形、一) くじをひくたびに、よく利益あるものをひく。

くじ-どり[鬮取](名) くじをひくを。くじをひきて事を決するを。

く-し-ば[公事場](名) 訴訟を裁判する所。

くし-ばこ[櫛匣](名) 櫛を入れおくはこ。くしげ。 「刷毛(ハケ)。

廿くし-はらひ ハラーイ[櫛拂](名) 櫛の垢を去る


［くしはらひ］

くし-びき[櫛挽](名) 櫛をつくる職人。

くじ-びき[鬮引](名) くじとり。

廿くしび[靈](名) たへなるを。靈妙。

く-し-ぶぎやう コーギヤウ[公事奉行](名) 鎌倉時代に、訴訟の裁判にあづかりし奉行の總稱。

くじ-ふだ[鬮札](名) くじびきの札。

くし-まき[櫛卷](名) 女の髻の風、髮の末を櫛に巻きつけたるもの。

クシヤ[俱舍](名)【佛】(い)(梵語 Abhidharma-kosa の上略、藏と譯す)一切所屬の知識を包持するを。(ろ)「クシヤしゆう」の略言。

(ぐ-しや[愚者](名) 痴鈍なるもの。バカ。あはう。

(く-しやう ーシヤウ[苦情](名) ⊖難儀なる事情。⊜やかましく不平などを陳べ立つるを。「ーを訴へる」。

(ぐ-しやう ーシヤウ[具狀](名) つぶさに文書にしためて上申するを。又、其文書。

(ぐ-しやく[孔雀](名)【動】鶉雞類に屬する鳥、おもに熱帶地方に産す、雌雄淘汰甚しく、雄は形大にして頭に三四寸の長毛直立し、羽毛䍿(ハウ)しくして尾長く、尾端に金色の綠を帶びたる玉の如き模樣あれど、雌は形小にして斑なく、頭上に直立せる毛もまた短し。(鳳友)。——がひ イーガ[孔雀貝](名)【動】「うぐひすがひ」に同じ。——せき[孔雀石](名)【鑛】銅の酸化物よりなる鑛物、色は美麗なる靑綠色を呈し、結晶稀にして多くは瘤狀をなす、堅美なるものは裝飾品に供せられ、粗惡なるものは溶解して種々の製作用に供せらる。(石綠)。

〔くしや-くしや(名、副) ⊖入り亂れて秩序なきさまにいふ語。⊜揉(モ)みあらされたるさまにいふ語。⊜心のみだれわづらふさまにいふ語。

〔ぐしや-ぐしや(名、副) ⊖前條に同じ。⊜水分多くして固からざるさまにいふ語。「泥がーする」。

クシヤ-しゆう[俱舍宗](名)【佛】八宗の一、天親菩薩の俱舍論を所依とする小乘敎なり、おもに奈良に行はる。

〔くしやみ[嚏](名) 「くさめ」の訛。

(く-しゆ[酗酒](名) 酒に醉ひて狂ふを。

くじよわ-し くしきけれ[鬮弱](形、一) 利益ならぬ籤を引きがちなるにいふ。

くじり[抉](名) ⊖くじるを。⊜物の結び目をくじりて解く用に供する具、さき尖りて錐の如き狀をなすもの。(觽)。

くじ-る らりるるれれ[抉](他、ら四) ⊖穴を穿ちてかきまはす。穴の中に物を入れてかきまはす。ゑぐる。⊜ゑぐりて中にあるものを出す。「吾眼をくじりて東門に懸けよ」。

廿くしろ[釧](名) 古昔、臂(ヒヂ)に纏(マ)ひ付けし一種の裝飾品、今時のうでわの類。たまき。ひぢまき。

くしろ[鉱](名) 土をかきならすに用ふる具、形くまでの如し。

(く-しん[苦心](名) 心をくるしむるを。ちゞにかんがへなやむを。えんつう。えんばい。

(ぐ-しん[具臣](名) 員にそなはるだけにて、役にたゝぬ臣下。

(ぐ-しん[具申](名) 詳狀を上申するを。

(ぐ-じん[愚人](名) バカもの。あはう。

くす[藥](名) 「くすり」の略言。「ー師」「ー玉」。

くす[樟](名)【植】「くすのき」に同じ。

廿く-す せしすするすれせよ[屈](自、さ變) かゞむ。ふさぐ。

〔く-す さしすすせせ[致](他、さ四) いたす。おこす。「ーか、くさぬか、こりやどうぢや」。

廿く-ず[國栖](名) 古昔、大和國吉野郡國栖の邊に居りし人民、應神天皇の時より、宮中の節會に參上し、贄(ニヘ)を獻じ、音樂などを奏したり、其音變をくずの奏といへり。

くず[葛](名) ⊖(國栖葛の略言)【植】荳科に屬する蔓草、多く山野に生ず、葉は圓狀にして尖頭を有し、花は小形にして紫赤色なり、根よりくず粉を製し、又、莖の纖維を採りてくず布の料に供す。⊜「くずこ」「くずだまり」「くずふ」の略言。

ぐ-す せしすするすれせよ[具](自、さ變) そなはる。そろふ。

ぐ-す せしすするすれせよ[具](他、さ變) ⊖そなふ。そろふ。⊜伴なふ。つれだつ。「共にぐして參りける」。(俱)。

くず-かけ[葛掛](名) 料理にくずだまりをかくるを。又、其料理。

廿くず-かづら(名)【植】「くず」(葛)(一)に同じ。

くず-きり[葛切](名) 一種の食品、葛粉を水にて溶(ト)き、砂糖を加へ煮固めて、饂飩(ウドン)の如くこまかく切りたるもの。

グスク(名) (琉球の語Gusiku) 琉球にて、城の稱。

〔くす-くす(名、副) ひそかに笑ふさまにいふ語。

〔くすぐつた-い くいけれ(形、二) 身に觸れられて、一種異樣の感起る。こそばゆし。

くすぐ-る らりるるれれ(他、ら四) こそぐる。

くず-こ[葛粉](名) 葛の根の液汁を採りて製したる粉、澱粉質に富み、種々の食用に供せらる、大和國吉野地方の產最も有名なり。 「たる索麪。

くず-ざうめん ーウメ[葛索麪](名) 葛粉にて製し

廿くす-し[醫師](名) いしや。醫師。

廿くす-し しくしきしけれ[奇](形、二) ⊖あやし。めづらし。不思議なり。くし。「ーき智慧」。⊜窮屈なり。こゝろよからず。 「覆す。いやす。

廿くす-す さしすすせせ[藥](他、さ四) 藥用して疾病を治

くす-だま[藥玉](名) ⊖種々の香料を入れたる袋を集めて玉となし、造花などを用ひてこれを裝飾し、其下に五色の絲を七八尺ばかり垂れたるもの、昔時、これを簾又は柱などに掛けて、不淨を拂ひ臭氣を避くる具となせり。(續命縷)。⊜かけかう。

［くすだま］

くず-だまり[葛溜](名) 葛粉を煎(ニ)て製したる餡(アン)。 「たるもの。

くず-に[葛煮](名) 葛粉を加へて煮るを。又、其煮

くず-ぬの[葛布](名) 「くずふ」に同じ。

くず-ね[藥煉](名) 油を混じて煉(ネ)りたる松脂(ヤニ)、弓弦などに塗るもの。

くず-ねり[葛煉](名) 葛の粉を水に溶(ト)き、砂糖を加へて煮固めたるもの。くずもち。

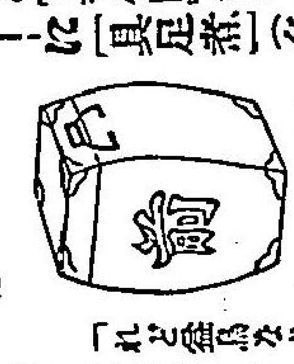
〔くす-ねる ねねねるねるねれねよ(他、な下一) ひそかに掠(カス)

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

め取る。「賭山して錢を―」。
〔くすね-もの (名) くすねたる物。賊物。
くす-の-き [樟] (名) 【植】樟科に屬する喬木。葉は革質にして羽狀脈を有し、花は小形にして黄白色なり。材は堅くして文理緻(ち)しく且一種の香氣を有し、種々の用に供せられ、又、樟腦を製する料となる。(楠)。　「る符。
くず-ばかま [葛袴] (名) 葛布(クズフ)にてつくりたる袴。
†くすは-し [奇] (形、二) くすし。
くず-ひき [葛引] (名) くずを塗りたる紙。婦人の髪飾にするもの。
†くず-びと [國栖人] (名) 「くず」(國栖)に同じ。
くず-ふ [葛布] (名) 葛の莖の纖維を採りて織りたる布。質強くしてよく水に堪ふ。雨具・袴を造り又は襖(フスマ)などを貼(は)るに用ふ。遠江國掛川の名產。
くすぶ-る [燻] (自、は四) くすぶる。
くすぶ-らす [燻] (他、は下二) くすぶらしむ。
くすぶり [燻] (名) くすぶること。
くすぶ-る [燻] (自、ら四) ❶燃(も)えずして煙る。❷室内にかゞみこみて外出せず。
くず-まんぢゆう [葛饅頭] (名) かはを葛粉にて製したる饅頭。
くすむ (自、ま四) ❶老人めく。大人(オトナ)めく。❷質朴に見ゆ。飾なく見ゆ。「くすんだ人間」。❸衣服又は携帶品の色・柄若しくは模樣などが、はでやかならず、じみにてあり。「くすんだ縞柄」。
くず-もち [葛餅] (名) 葛ねり。(蘇蓮餅)。
くず-や [葛家] (名) くさや。かやや。
くず-ゆ [葛湯] (名) 葛の粉に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて粥く溶(と)きたるもの。
くすり [藥] (名) ❶疾病又は傷損等を治療するために、飲用又は塗抹して使用するものゝ稱。やくざい。やくひん。❷陶器に注(か)けて、光澤を生ぜしむる料のもの。(釉)。❸火藥の稱。❹すべて、身體又は性狀に益を與ふるものゝ稱。「運動が何よりの―」。†――がり [藥獵] (名) 古昔、五月五日に野山に出でゝ鹿を狩りしこと。鹿の若角(ワカヅノ)を採りて藥用となしゝより此名あり。†――ご [藥子] (名) 古昔、正月元日供御(ぐご)に奉る屠蘇酒の味を試みし童女。――し [藥師] (名) ❶いしや。(醫師)。❷やくざいし。――なべ [藥鍋] (名) 藥を煎ずるための鍋。†――の-かみ [典藥頭] (名) くすりのつかさの長官。相當は、從五位の下。†――の-つかさ [典藥寮] (名) 古昔、宮内省の被官に屬し、醫藥一切の事を掌りし所。――ばこ [藥箱] (名) ❶藥を入るゝ箱。❷醫者が患者を見まふとき、藥品を入れて攜帶する箱。藥籠。(藥匣)。†――び [藥日] (名) 五月五日の異稱。此日は藥狩をなし又は藥玉(ダマ)を掛けなどせしより此名あり。――みづ [藥水] (名) 藥を混じたる水。又、藥の調劑などに使用する水。――や [藥屋] (名) くすりを賣る家。又、其人。やくしゆや。――ゆ [藥湯] (名) 中に藥劑を入れたる洗湯。――ゆび [藥指] (名) 拇指(オヤユビ)より數へて四番目の指。卽ち、小指の隣にある指。此指先にて藥などを溶(と)くによりて此名あり。べにさしゆび。(無名指)。
†くす-る [藥] (他、ら四) 「くすす」に同じ。
(くすん-ごぶ [九寸五分] (名) あひくち。短刀。
くせ [癖] (名) 偏頗なる一種の習慣。
くせ― [曲] (接頭) 或語に冠して、正しからざる意を表はす語。「―事」「―者」。
(ぐ-せい [愚生] (代) 自分の謙稱。せうせい。
(ぐ-ぜい [弘誓] (名) 【佛】弘く衆生を濟度して佛果を得しめんとの、佛陀の大慈悲なるちかひ。――の-うみ [弘誓海] (名) 【佛】佛陀の弘誓の慈悲の深大なるを海にたとへいふ語。――の-ふね [弘誓船] (名) 佛陀の濟度を船にたとへいふ語。「―に帆をあげて」。
(く-せう [苦笑] (名) にがわらひ。
くせ-ぐせ-し [癖癖] (形、二) ひがみてあり。すなほならず。「心根―」。　「きたる事。
くせ-ごと [曲事] (名) まがりたる事。條理にそむ
(く-ぜち [口舌] (名) いさかひ。いひあひ。
(く-ぜつ [口說] (名) 親密なるものゝ言ひ爭ふこと。いひあひ。いさかひ。「痴話が高じて―の繩上」。
(ぐ-せつ [愚說] (名) 自分の說の謙稱。
くせ-もの [曲者] (名) わるもの。又、あやしきやつ。
(く-せん [苦戰] (名) 苦しきたゝかひ。
†く-せん [口宣] (名) 古昔、頭辨(トウベン)が敕命を帶びて、直に五位以上の官位を授くること。――あん [口宣案] (名) 古昔、頭辨より上卿に達せし口宣を其家に納めて、別に寫して大外記に進しゝこと。
(ぐ-ぜん [瞿然] (名、副) ぎよつとしておそるゝさまにいふ語。
くそ [屎] (名) ❶動物が、消化器内に於て、營養に變ぜしめたる食物の殘滓不用物を、肛門を經て體外に排泄したるもの。ふん。(糞)。❷垢又は滓などにもいふ稱。「眼―」「齒―」。　「のま給はんとは」
†くそ [屎] (名) 古昔、童子を呼びたる稱。「けふ―達
くそ― [屎] (接頭) 或語に冠して、よからぬ意又はいやしむ意を表はす語。「―起」。
(ぐ-そう [愚僧] (代) 僧侶の自分の謙稱。「同じ。
くそ-かづら [細子草] (名) 【植】「へくそかづら」に

はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

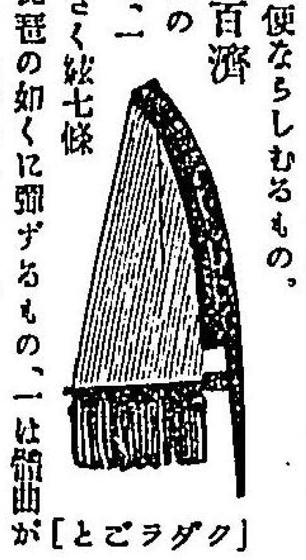
くそ-がへる [屎蛙] (名) 【動】「いぼがへる」の
(ぐ-そく [愚息] (名) 我子の謙稱。　」一名。
(ぐ-そく [具足] (名) ❶そなはり足りてあること。缺陷なきこと。❷きぐ。だうぐ。「調度―ども取り持ちて」。❸よろひ。甲冑。――し [具足師] (名) 甲冑を製造する職人。(鎧匠)。――に [具足煮] (名) 一種の料理。伊勢蝦を殼のまゝ輪切にして煮たるもの。――びつ [具足櫃] (名) 甲冑を入るゝ櫃。――もち [具足餅] (名) 昔時、正月に甲冑に供へしかゞみもち。



[ぐそくびつ]

「れど釜鳥なり。
くそ-とび [屎鳶] (名) 【動】鷹の一種。形みにくけ
〔くそ-ばひ [屎蠅] (名) 【動】「くそばへ」の訛。
くそ-ばへ [屎蠅] (名) 【動】蠅の一種。大形にして青綠色をなし、最もよく不潔物にあつまる。
〔くそ-ばつた (名) 【動】「つちばつた」の一名。
くそ-ひり (名) 「せきり」(赤痢)に同じ。
†くそ-ぶくろ [屎袋] (名) 胃の古名。
くそ-むし [屎蟲] (名) 【動】「こがねむし」の一名。
†くそ-わたぶくろ [屎腸袋] (名) 「くそぶくろ」に同じ。
(ぐ-ぞん [愚存] (名) 自分の所存の謙稱。ぐい。
〔くた (名) くた〳〵して役に立たぬこと。
くだ [管] (名) ❶圓くして細長く中の空虛なるもの卽ち小さき筒。「煙管の―」。❷機の緯(ヌキ)絲を卷きて杼(ヒ)に入るゝもの。❸絲車のつむにさして絲を卷くもの。(莩)。❹餘計なることば。むだぐち。――いと [管絲] (名) 管に卷きたる絲。――を-まく 酒に醉ひなどしてむだくちを言ひたつ。――を-もつて-てん-を-うかがふ [以管闚天] 狹細なる識見を以て、廣大なる物事をうかゞひはか　るにいふ。
†く-たい [裙帶] (名) うはも。もびら。
(く-だい [句題] (名) 歌の題の一種。三代集の歌より拔き出したる一句か、若しくは或漢詩の一句かを題とせるもの。
(ぐ-たい [具體] (名) 「ぐしょう」(具象)に同じ。――てき [具體的] (名) 「ぐしょうてき」(具象的)に同じ。――めいし [具體名詞] (名) 「ぐしょうめいし」(具象名詞)に同じ。
(く-だう [狗盜] (名) こぬすびと。草賊。　「ること。
(ぐ-だう [求道] (名) 宗教上の正しき道をもとむ
†くだ-かけ [鶏] (名) 東國の方言にて、雞をくたといふより此名ありといひ、或は百濟鷄の義なりといひ又は梵語なりともいふ。【動】「にはとり」の古名。(家雞)。――どり [鶏鳥] (名) 【動】前條に同じ。「―の、まだきに鳴きて、せなをやりつる」。
くだ-く [碎] (他、か四) ❶打碎りて細片となす。こはす。「氷を―」。(摧)。❷やぶる。くじく。「敵を―」。❸よわむ。やはらぐ。❹千々にくるしむ。「心を―」。❺細かに分けて說く。ひらたく打ちあけて話す。❻はした金に分く。「壹圓札を―」。
くだ-ける [碎] (自、か下二) ❶こはれて細片となる。こはる。(摧)。❷やぶる。くじく。「鋭勢―」。❸よわる。やはらぐ。「心―」。❹はした金に分たる。❺意義わかる。理解せらる。
〔くた-くた (名、副) 力拔けて弱くなりたるさま又は勢乏しくて堅固ならざるさまにいふ語。「―した布」。
(ぐた-ぐた (名、副) 前條に同じ。
くだ-くだ-し (形、二) ❶煩(わづら)はし。煩(ウルサ)はし。あつこし。くどし。❷繁雜に過ぎたり。こまかすぎたり。えげし。むはし。「―き解」(煩瑣)。
くだけ [碎] (名) くだくること。又、くだけたる斷片。
〔――る [碎] (自) 「くだく」の訛。
くださ-る [下] (他、ら四) 長上より物を賜はる。下し賜はる。たまはる。
くだし [下] (名) ❶くだすこと。❷「くだしぐすり」の略言。――ぐすり [下藥] (名) 便通をよくするために飲用する藥劑。つうじぐすり。げざい。――ぶみ [下文] (名) ❶古昔、官府の命令書。❷鎌倉時代又は室町時代に、所領を與ふるときなどに、政所(マンドコロ)より與へし文書。
†くた-す [腐] (他、さ四) ❶腐敗せしむ。くさらす。❷惡しきさまにいひなす。けなす。そしる。
くだ-す [下・降] (他、さ四) ❶上より下へ行(ゆ)かす。高きより低きへ移す。おとす。おろす。❷ふらす。「天雨を―」。❸敵の城壘を拔く。せめおとす。❹おちつく鎮む。「氣をくだし心を平かにす」。❺まうしわたす。さげわたす。「罰をくだして其是非をいはしむ」。❻下賜す。たまはる。❼ひくゝす。さぐ。おとす。「品を―」「價を―」。❽京地より地方へ遣(ヤ)す。❾大便を通ぜしむ。
くだ-だま [管玉] (名) 圓柱體にして、心に管のごとき孔を穿ちたる玉。古代これに絲を通し帶びて飾とせり。(管石)。　「く。
†くだ-つ [降] (自、た四) すゑとなる。かたむ
〔ぐた-つ-く (自、か四) ぐたぐたす。
くたに [九谷] (名) 「くたにやき」の略言。――やき [九谷燒] (名) 加賀國江沼郡九谷村より出す磁器。伊萬里燒より分派したるものにて、赤繪・金襴手等多し。
くだ-の-ふえ [小角] (名) 管の形につくりたる小さき笛。古昔、戰場などにて用ひしもの。

くだ-ばり[管鍼](名) 鍼術に用ふる一種の鍼。鍼を其進退自由なる程の孔ある金屬製の管に入れて用ふるもの、鍼を皮膚に刺し入るゝに、普通のものより時間を要すること少しといふ。
くたば・る(自、ら四) 「かる」、よわる。
くたびれ[草臥](名) くたびれたること、つかれ。(勞)。
くたび・れる(自、ら下一) 疲勞す。つかる。
くだ-ぶえ[小角](名) 「くだのふえ」に同じ。
くだ-まき[管卷](名) (動) きりぎりすに似たる小蟲、頭小さく羽大きく、鞭状の長き觸角あり、繰車を廻すごとき聲にて鳴く。すいと。くだむし。(絡緯)。
くだ-むし[管蟲](名) (動) 前條に同じ。
くだ-もの[菓物](名) ㊀菓子の古稱。㊁草木に生ずる果實。(果實)。
くだ-やり[管槍](名) 一種の槍、柄に貫きたる手頃の金屬製の管ありて、刃に近き所に管を留むる鍔あり、管の進退は自由にして左手にてこれをにぎり、槍の縱橫に便ならしむるもの。
クダラ-ごと[百濟琴](名) 一種の樂器、二種あり。一は琴に似て小さく絃七條あり、撥にて琵琶の如くに彈ずるもの、一は形曲がりて二十三絃あり、竪に抱きて兩手にてかきならすもの。(箜篌)。


［くだらごと］

[くだらない](形、二) ㊀とるに足らず。㊁不粹なり。
くだり[下](名) ㊀くだること、さがること。さがり。㊁都より田舍へ行くこと。㊂時の移りゆくこと。さがり。㊃文書の縱行、ぎやう。「三―半」。㊄「くだりさか」の略言。㊅「くだりはら」の略言。㊆「くだりあめ」の略言。
くだり[件](名) ㊀前の個條にありし事を指していふ語。「其―のとほり」。㊁個條又は種類。㊂裝束などのそろひ。「かんぞ一―」例の事なり。
[くだり](名、副) 「くだくだ」に同じ。
くだり-あめ[下飴](名) 地黄煎(ヂワウセン)を加へたる固飴。
くだり-ぎしや[下汽車](名) 都より田舍へ行く汽車。
くだり-さか[下阪](名) ㊀下りみちとなる阪。㊁物事のおとろへかゝること。
くだり-ざけ[下酒](名) 上方(カミガタ)より輸送せる酒。
くだり-はら[瀉腹](名) 便通のはげしきこと、はらくだり。げり。
くだり-ばら[瀉腹](名) 前條に同じ。
くだり-ぶね[下船](名) ㊀上方より來たる船。㊁上流より來たる船。
くだり-むね[下棟](名) 棟の端より折れて檐のかど迄下れるもの。
くだり-やな[下梁](名) 上流より下り來る魚を捕ふるための梁。
くだり-やみ[下闇](名) 月の下旬の闇の夜。「二十日三日なれば―にて」。
くだ・る[下](自、ら四) ㊀上より下へ行く。高きより低きへ移る。おりる。㊁ふる。「雨―」。㊂時移り行く。㊃世移りて末となる。「くだれる世の習慣」。㊄まうしわたさる、さげわたさる。㊅下賜せらる。たまはる。㊆おとる、さがる。ひくくなる。㊇大便はげしく通ず、げりを催す(瀉)。㊈降伏す、かうさんす。㊉抑遜す。へりくだる。「人に―」。⑪都より田舍へ行く。⑫通じて讀み又は解せらる。「讀みが―」。
くだん[件](名) 「くだり」に同じ。「―の如し」。
くち[口](名) ㊀動物が外界より攝取する食物を直接に受くる腔、これより食物は消化器内に移る、高等動物のには、脣・齒・舌等の口器ありて、又、音聲を發する機關なり。(玉池)。㊁人の出入すべき所。物を出入せさすべき穴。「室の―」。「瓶の―」。㊂ことば。ぎごん。「―を出す」。㊃いふこと。くちふさ。「―を止める」。㊄人別、人數。「―を減す」。㊅はひりこむべき地位。又、いれこむべき場所。「奉公の―」。「仕官の―」。㊆すき間、ひま。あな。「隙物の―」。㊇いとぐち、端緒。㊈てがゝり。たより。[illegible] ㊉種類。「此―」。⑪栓又は蓋などの如く、器物のくちをふさぐもの。⑫たぐひ。種類。
――にあふ[適口] 食ふものゝ味が口にあふ。
――にかく 言語などのよどみなきやうにいふ。
――につ[絶口] 其物を飲食せず。又、其事を語らず。
――にのす 欺く。
――にのる 欺かる。
――にみつありはらにけんあり[口有蜜腹有劍] 小人などの、口さきては巧言を吐きて心のうちには害毒を持つにいふ。
――にかく 言ひふらす。
――をけす[滅口] 其事をはなさゞるやうにす。
――をさく 口をひらく。
――をいとわず 多くものをいふ。
――をきる はじむ。
――をたゝく 多くものをいふ。
――をつぐむ[噤口] ものをいはず。又、言論を束縛す。
――をとざす[掛口] いはぬやうにす。
――をぬぐふ 或事をなして知らぬ顏にて居る。
――をふさぐ[塞口][守口] 輕々しくものをいはぬやうにす。
――をまもる 同じ。
ぐち[鯢](名) (動) 「いしもち」の一名。
ぐち[愚痴](名) ㊀おろかなること。㊁言ひて甲斐なき事をいひて歎くこと。

くち-あけ[口明](名) ㊀物の口を開くこと。㊁物事のはじめ。「―故に負けて殴かう」。
くち-あそび[口遊](名) くちずさみ、あだくち。「かいるーはさらにうけたまはらじ」。
くち-あたり[口當](名) ㊀口の飲食に於ける感じ。㊁ひまへ、いふかみ。
くち-あひ[口合](名) ㊀話すこと。㊁地口又は語呂などの趣向。「―が旨い」。
くち-あ・ふ[口合](自、は四) 互の話がよくあひて衝突なきこと。
くち-いれ[口入](名) ㊀此方のいふ所を先方へ通すこと。㊁奉公人の周旋をなすこと。又、其業の人。けいあん。「―宿」。
くち-い・る[口入](自、ら下二) 口出をなす。又、口入をなす。
くち-いれ-にん[口入人](名) 口入をする人。ちうせんにん。
くち-うつし[口移](名) ㊀飲食物を口に含みて他の口に移し入るゝこと。(小兒などに對してなす)。㊁言語にて傳ふること。(口授)。
くち-うら[口占](名) 其語に由りて其心の程を量り知ること。「―を引いて見る」。
くち-おも[口重](名) ㊀口のするどからぬこと、言語の列整せぬこと。㊁はっきりしたる返答なきこと。
――し[口重](形、二) くちおもなり。
くち-がうしや[口巧者](名) 口前の巧なること。
くち-がき[口書](名) ㊀人の供述を書き留めたる文書。㊁筆を口にくはへて書又は畫をかくこと。
くち-がしこ[口賢](名) くちがしこきこと。
――し[口賢](形、二) ものいひさかし。口前うまし。「―小兒」。
くち-かず[口數](名) ㊀いふこと、言ふべきこと。㊁人數。
くち-がた[口堅](名) ㊀くちごはきこと。㊁ふみだりに他言せざること。
――し[口堅](形、二) くちがたなり。
くち-かため[口固](名) ㊀他言せざるやうにせしむること。「―を」。
くち-かなし[口悲](形、二) くちをしきこと。
くち-がる[口輕](名) ㊀ものいふこと輕々しきこと。㊁秘密なる事をもよく他言すること。
――し[口輕](形、二) くちがるなり。
くち-き[朽木](名) 朽ちたる木、腐れたる木。
――がき[朽木書](名) 古昔、燒筆にて繪を書きし線。
――がた[朽木形](名) くち木のさまを描ける模樣。

［くちきがき］

くち-きき[口利](名) ㊀ものをよくいふ人。巧に辯ずる人。㊁談判又は相談などに立入りて、巧に斡旋ふ人。
くち-きた[口穢](名) ㊀事の始め。てはじめ。「其の第一―はいひがたし」。
――し[口穢](形、二) いひやう惡しきさまなり。
くち-きり[口切](名) ㊀事の始め。はじめ。㊁秋の始めに、茶つぼの口をきりて新茶を用ふること。
[くちく](名) 「くちく」に同じ。
くちく[駆逐](名) ㊀おひはらふこと。おひやること。㊁おひかくること。おひうつこと。㊂はしりくる。
――かん[驅逐艦](名) 海軍艦艇の一、形體は水雷艇に似て大きく、且速し、艦内に備付ける速射砲を以て水雷艇を驅除又は破壞し、時によりては敵艦の襲撃に使用せらる。水雷驅逐艦。
――かんたい[驅逐艦隊](名) 二隻以上の水雷驅逐艦の編制の名。
くち-ぐすり[口藥](名) ㊀火繩銃の火蓋(ヒブタ)に用ふる火藥。㊁やかましく言はぬやう又は他言せぬやうにくらはせおく金錢などの稱。
くち-ぐせ[口癖](名) いひ慣れて癖(クセ)となりたること。
くち-ぐち[口口](名) みなの口、めいめいの口。
――に[口口](副) めいめいに。
[くちぐるま][口車](名) 巧にいひ回はして、たぶらかし誘ふこと。口先の辯。「―に乘る」。
――にのす 欺く、たぶらかす。
――にのる 欺かる、だまさる。
くち-ごたへ[口答](名) 尊長に向ひ、ことばを返して抗論すること。さからふ調子の返事。(反口)。
くち-ごは・い[口強](形、一) よくいひ張りて抗辯す。
くち-ごもり[口籠](名) くちごもること。
くち-ごも・る[口籠](自、ら四) ㊀言語口中に籠りて明かならず。くぐもる。(口澀)。㊁明瞭なる返答をなすこと能はず。
くち-ざ[口座](名) ㊀區別したるものの場所。㊁簿記にて、原簿に仕譯して設けたる名目。

くちさか・し しくしくしき しけれ [口賢](形、二) 口前かしこし。口巧者なり。

くちさがな・し くしくしき くけれ [口性無](形、二) 惡しさまにいひなす。くちさたなし、「口さがなき世」。

くちさき [口先](名) ㊀口の端、(吻)。㊁實際は然らざるに、言詞のみかざりていふと。口前ばかり。(口角)。㊂ことば。ものいひ、「人の―を眞似て」。

廿**くちささら** [先口](名) 前條に同じ。

くちさみせん [口三味線](名) 口にて三味線の音をまぬると。

くちしほ [口鹽](名) 魚の切身の切口などに鹽をふりかくると。

くちすぎ [口過](名) 生活を遂ぐると。くらし。よすぎ。すぎはひ。(糊口)。

くちずさび [口號](名) 口ずさぶと。(口占)。

くちずさ・ぶ ふぶぶへべ [口號](他、は四) ㊀心に浮びたるまゝの詩歌などを吟ず。ぎんず。「殘郷、少しも驗がずと壁細くくちずさびて出づれば」。㊁心に浮びたるまゝを詩歌にのべいふ。

くちずさみ [口號](名) くちずさび。

くちずさ・む [口號](他、ま四) くちずさぶ。

くちすす・ぐ [口滌](自、か四) 口中をあらひきよむ。うがひをなす。(嗽)。

くちそそ・ぐ (自、か四) 「くちすゝぐ」に同じ。

くちだし [口出](名) ㊀他人の談話の間に、よこあひよりいひ出すと。㊁他人の談判などに、よこあひよりいひ出すと。

くちづから [口](副) 自身の口よりして。親しく談じて。

くちつき [口付](名) ㊀口のすがた。口の樣子。「―愛敬あり」。㊁ものをいふ樣子。「巧みなる―」。㊂卷煙草に吸口のつけてあると。又、其卷煙草。

くちつき [口附](名) 牛馬などの口を取りて率(ひ)く者。くちとり。

くちづき [口付](名) くちなるゝと。

くちづ・く かきくくけけ [口付](自、か四) ㊀言ひ慣る。慣れて言ふ。㊁食ひ得られざりし物の、次第に食ひ得らるゝに至る。

くちづけ [口付](名) くちくせ。くちなれ。

〔**くちづたへ** タヘ [口傳](名) 口づからつたふると。人より人へいひつたふると。くでん。(傳言)。

廿**くちづつ** (名) 物をいふ體の拙なると。

くちづつみ [口鼓](名) ㊀志たうち、(鼓舌)。㊁くちびやうし。

くちど [口疾](名) 物のいひ方の疾きと。はやくち。「―に宣ふ」。

くちど・し くしくしき くけれ [口疾](形、二) くちどなり。

くちどめ [口止](名) ㊀他言せざるやう禁じ置くと。くちふさぎ。くちがため。(封舌)。㊁他言を禁ずるために與ふる金錢などの稱。

くちとり [口取](名) ㊀牛馬の口を取りて率(ひ)き行く者。くちつき。馬丁。御者。別當。㊁「くちとりざかな」の略言。――**ざかな** [口取肴](名) ㊀一種の料理、味を甘く濃厚に製したる肴を取合はせたるものにして、多くは、きんとん・かまぼこ等と、他の魚鳥の類とを取合はするを常とす。㊁茶などに茶受として用ふべきもの。(茶食、點心)。

くちなぐさみ [口慰](名) 退屈のときなどに、雜談をなし又は間食などすると。

くちなし [山梔](名) ㊀[植](果實熟すれども口を開かざるより名づく) 茜草科に屬する灌木、幹莖は直立す、花は白色大形にして香氣あり、果實は黄色の染料に供せらる。(梔子)。㊁くちなしの果實にて、染めたる色、又、黄色。(緗桃、鮮支)。――**いろ** [山梔色](名) 「くちなし」(二)に同じ。

くちなは ナハ [蛇](名) [動](口のある繩の意ともいひ、又、朽繩の義ともいふ) 「へび」の一名。――**いちご** [蛇苺](名) [植]「へびいちご」の一名。

〔**くちなほし** オシ [口直](名) にがきもの又は味なきものなどを食ひしあとに、甘きもの又は味好きものなどを食ふと。

くちならし [口馴](名) くちならすと。

くちなら・す さしすすせせ [口馴](他、さ四) 口になるゝやうにす。

くちな・る れれるるるれ れよ [口慣](自、ら下二) ㊀くちづく。㊁口あたりよくなる。

くちなれ [口慣](名) くちなるゝと。――**る** [口慣](自) 「くちなる」の訛。

くちのは [口端](名) ことばのはし。はなしのたね。うはさ。ひやうばん。――**にかかる** ひやうばんせらる。いひつたへらる。――**にかく** ひやうばんす。いひつたふ。

廿**くちのとら** [口虎](名) ことばの恐ろしきに譬へいふ語。

くちは [口端](名) くちのは。「人の―に掛かり」。

くちば [朽葉](名) ㊀朽ちたる落葉。㊁「くちばいろ」の略言。――**いろ** [朽葉色](名) 朽ちたる落葉の色、黄に赤を帶びたる色。

くちばし [喙](名) (口端の義) ㊀鳥類の口の端、即ち、上下の顎の延長したるものにして、角質の鞘を被る。くちさき。はし。くちさきら。(嘴)。㊁ことば。ものいひ。

くちばし・る らりるるれれ [口走](自、ら四) 秘密なる事を誤りて言ひ洩(も)らす。(逸口)。

〔**くちはば** [口幅](名) ㊀口の廣狹。㊁ものいひ

ひやう。思ひ切りたるいひやう。「―ひろき言分」。

廿**くちばみ** [蝮](動) 「まむし」の稱。

くちばや [口速](名) ものいひやうの急速なると。はやくち。くちど。

くちばや・し くしくしき くけれ [口速](形、二) くちばやなり。

くちび [口火](名) ㊀鐵砲の火口に用ふる火。㊁物事の導きとなるべきもの。てびき。「―を懸ける」。

くちひび [口胼](名) 唇の邊にてくる胼(ひ)又、唇の邊にてくる腫物。(胗)。

廿**くちひび・く** かきくくけけ (自、か四) 口ひりひりして痛む。

くちびやうし ヒヤウシ [口拍子](名) 口にて拍子をとると。又、其拍子。

くちびる [唇](名) (口緣の義) 上下より口腔の門戸を掩ひて、高くなりたる肉色の所。「ものいへば唇寒し秋の風」(脣)。――**ほろびてはさむし** [唇亡齒寒] 互に相より相たすけあふもの、一方ほろびて、他の一方孤立し勢衰ふるにいふ。――**をかへす** [反唇] あしざまにいふ。惡口す。

くちぶえ [口笛](名) 唇を蹙(しか)め息を強く吹き出して音を出すと。又、指を口中に入れ吹きて音を出すと。

くちふさぎ [口塞](名) くちどめ。

廿**くちふで** [朽筆](名) やき筆。

くちべに [口紅](名) ㊀婦人が唇に紅を塗ると。又、其紅。㊁物の周圍に紅を付くると。又、周圍の紅なるもの。「―の花」。「―の紙」。㊂磁器のふちに赤みがゝりたる彩色をなすと。

くちへん [口偏](名) 漢字の偏の名、吐・鳴などの字の左方にある口の字。

くちまかせ [口任](名) 口に任せてものをいふと。口のまゝに言ふと。でたらめにいふと。

くちまね [口眞似](名) ㊀人のものいふ眞似(マネ)をなすると。(學舌)。㊁徒に古人の訓戒などをのべたて、これを自家の實行に現ぜざると。

くちまへ マヘ [口前](名) いひぶり。はなしぶり。いひきはし。「―のいゝ男」。

くちまめ [口忠](名) よく多言すると。巧にいふと。(饒舌)。

くちもと [口許](名) ㊀口の邊。㊁口の樣子。くちつき。㊂はいり口。

(**くちやう**) ヤウ [區長](名) ㊀北海道又は沖繩縣に於ける區の單獨制の行政機關、區に於ける行政事務を掌るもの。㊁市又は町村に於ける區の吏員、市にては市參事會の機關となり町村にては町村長の機關となり、區內の行政事務の執行を補助するもの。

くちやかま・し しくしくしき しけれ [口喧](形、二) ㊀ことば喧しくいふ。ことば煩(ワヅラ)はし。㊁すこしの事にもとがめ立をなす。

(**ぐちゆう**) [愚衷](名) 自家の心中の謙稱。

(**くちよ**) [驅除](名) かりのぞくと。むひたつると。

ぐちよく [愚直](名) バカ志やうぢき。

くちよごし [口汚](名) 飲食物の、少量にして腹に足らず又は味なくして心持よからぬ饌にいふ語。

くちよせ [口寄](名) 巫女(ミコ)などが、死人の靈魂を招き寄せ、自分の口を藉(カ)りて、其意を陳べさすると。かみおろし。(通鬼術)。

くぢら [鯨](名) ㊀[動] 游水類に屬する哺乳動物にして、まつかうくぢら・いわしくぢら・ざとうくぢら・ながすくぢら・せみくぢら・こくぢら等の總稱、海洋中に棲息し魚形をなす、體軀は稍や紡錘形をなし、巨大にして長さ概ね五六間乃至十間、皮膚は平滑にして厚く其下に脂肪層あり、後肢なく前肢は全く鰭狀をなし、尾も水平に擴がりて尾鰭狀をなす、鼻孔は頭の頂上にあり、時々水面に浮びて空氣を呼出するとき、其量多きものは霧の如くに噴出す、皮膚・脂肪層及肝肉は食用に供すべく、特に脂肪層よりは工業又は器械用に用ふる多量の油を搾(シボ)るべし、鬚もまた工藝用に供せらる。㊁いわしくぢら・ざとうくぢら・ながすくぢら・せみくぢら・こくぢら等の上顎に櫛の齒の如くに列生したる纖維性の角質板の稱、これを鬚といひ又は「なさ」ともいひ若しくは「ひれ」ともいひ、何れも工藝用に供せらる、殊にこくぢらの鬚は「志ろくぢら」と稱し、色白くして纈(ハリ)しく、籠目などに編みて汗衫などとす。㊂「くぢらざし」の略言。――**ざし** [鯨差](名) ものさしの一種、布帛の長さを計るに用ひられ、其一尺は曲尺の一尺二寸に當る、始めはくぢらの鬚を以て造りたるより此名ありしが、今日は多く竹を以て造る。――**志やく** [鯨尺](名) 「くぢらざし」に同じ。――**じる** [鯨汁](名) 鯨の白肉即ち白き脂肪層を實としたる味噌汁。――**とり** [鯨取](名) 鯨を捕ると。又、其漁師。――**ひげ** [鯨鬚](名) 「くぢら」(二)の條を見よ。――**ぶね** [鯨船](名) 鯨を捕る船。

くちわき [口吻](名) (口脇の義) 口の左右の邊。――**きばむ** いまだ幼稚にして經驗少なく才能足らざるをあざけりていふ語。

くちわけ [口分](名) ㊀類に由りて物を區別すると。類別。㊁分前(ワケマヘ)を與ふること。分配。

〔**くちわる** [口惡](名) よく物事を惡さまにいふと。又其人。

くちゑ [口繪](名) 書物の始めに挿入する繪。

くちを・し しくしくしき しけれ [口惜](形、二) 滿足ならずして歎(ナゲ)かはし。仕遂げ得ずしてうらみ多し。殘念なり。のこりをし。くやし。「―き振舞」。(遺憾)。

くつ[沓、靴、鞜、履](名) ㊀足に屈(ハ)きて歩行する具、足首を殘らず掩(オホ)ひ穿つもの。㊁衣冠束帶のときに用ふる一種の履物、桐にて作り中に紙を貼(ハ)り外を漆にて塗る。㊂今時はおもに西洋傳來の履物の稱、護謨製又は「ズック」製等あれど、多くは革製にて、ながぐつ・ふかぐつ・はんぐつ等の種類あり。**――をへだててかゆきをかく**[隔靴搔痒] くつの上からかゆき處をかくが如く、思ふやうに手が屆かずして、物事の徹底せざるにいふ。

くつ・う[朽](自、た上二) ㊀枯れ腐る。腐れ朽ず。(おもに、草木にいふ)。㊁すたる。おとろふ。

くづ[屑](名) ㊀物の切れ又は碎(ク)けなどして不用となりたる細片。「紙の―」。㊁よき部分を選び取りたる後に殘れる惡しきもの。かす。すたれもの。

〔ぐ〕**づ**[愚圖](名) 因循姑息なること。活潑ならぬ性質、又、其性質の者。

くつ・いし[履石](名) 椽の束柱(ツカバシラ)の下などに用ふる礎石。

くづ・いと[屑絲](名) 屑となりたる絲。**――おり**[屑絲織](名) 屑の絹絲にておりたる絹織物。

(く)**つう**[苦痛](名) ㊀くるしみ、なやみ。㊁〔心〕精力の減退又は要求の不滿足等より生ずる感情。

〔ぐ〕**づう**[弘通](名) 教法のあまねく世上にひろまりわたること。

くつ・がた[履楦](名) 靴(クツ)を拵(コシラ)ふる型(カタ)。

くつ・かた[沓形](名) 宮殿の棟(ムネ)の兩端に付くる飾、古昔は沓(クツ)の形につくりしより此名あり、火よけのまじなひといふ。(鵄尾)。

くつ・かぶり[沓冠](名) 折句(ヲリク)の一種、短歌の題の假名を、毎句の首と尾とによみこむこと。

くつ・がへ・す[覆](他、さ四) (くつしかへす義) ㊀ひっくりかへす。うらがへす。㊁たふす。こかす。㊂はろぼす。やぶる。「國を―」。

くつ・がへ・る[覆](自、ら四) (くづれかへる義) ㊀ひっくりかへる。うらがへる。㊁倒(タフ)る。くづる。㊂やぶる。はろぶ。「三軍―」。㊃動詞に添へて、其意味を強むるに用ふ。「沸て―」。

くづ・かみ[屑紙](名) かみのくづ。

(くっ)**き**[崛起](名) 山などの高く起ること。又、にはかに起りたつこと。「あふこと。」

(くっ)**きやう**[屈強](名) 心ねぢけて強くはり けっきよく。ちゆうきよく。

(くっ)**きやう**[屈竟](名) (究竟の音便) ㊀つめ。㊁最もすぐれたること。最もよきこと。「―の武士」。

(くっ)**きよく**[屈曲](名) をれまがること。かゞみまがること。(屈折)。

〔ぐっ〕**きり**(名、副) きは立ちて見ゆるさまにいふ語。きはやか。くきやか。(分明)。

〔く〕**つくつ**(副) 笑ふさまの、くすくすより稍々意味強く且うはべに現れたるさまにいふ語。

〔く〕**っくっ**(副) ㊀こみあげて、殆ど呼吸のつまる程に笑ふさまにいふ語。㊁精を出すさまにいふ語。

〔ぐ〕**づぐづ**[愚圖愚圖](名、副) 活潑ならぬさま又は姑息なるさまにいふ語、又、其性質の人。

くつくつぼふし[寒蟬](名) 〔動〕(くつくつは鳴き聲)「つくつくぼふし」に同じ。(蛁蟟)。

廿**くつ・こ**[口籠](名) 牛馬の人を嚙(カ)まぬやうに、其口に嵌(ハ)むる籠。

くつ・し[沓師](名) 沓(クツ)を造る職人。くつや。

(くっ)**し**[屈指](名) ㊀指を屈して數ふること。㊁多きもの丶中より、數へ立つるばかりにすぐれてあること。「―の勇士」。

くづし[崩](名) くづすこと。又、くづしたるもの。

――がき[崩書](名) ㊀字畫を省略して書くこと。又、其文字。㊁草書にてかくこと。又、其文書。**――もん**[崩紋](名) 普通の紋を略したるもの。

くつ・しき[沓敷](名) くつの中に敷くもの。

くつ・した[沓下](名) たびの一種、沓を穿(ハ)く時に着くるもの。くつたび。(靴下、韈)。

(くつ)**じゆう**[屈從](名) をれしたがふこと。

(くつ)**じよく**[屈辱](名) はづかしめを受けて面目を失すること。おさへつけられて恥辱を受くること。

(くっ)**しん**[屈伸](名) かゞむとのびること。又、かゞむとのばすこと。

くっ・す[屈](自、さ變) ㊀まがる。かゞむ。折る。㊁縮(チヂ)む。又、むすぼる。「心氣―」。㊂撓(タワ)む。又、つまる。「議論逆に―」。㊃服從す。したがふ。㊄下位に沈む。㊅理ありて非とせらる。

くっ・す[屈](他、さ變) ㊀まぐ。かゞむ。をる。㊁おさへつく。おしとむ。くじく。「威武も―ること能はず」。㊂服從せしむ。したがふ。㊃下位に置きてのぼらしめず。㊄理あるも非として之へたぐ。

くづ・す[崩](他、さ四) ㊀碎(クダ)きこぼつ。「土手を―」。㊁破り散らす。「敵陣を攻め―」。㊂さまを亂す。あしくす。㊃省略す。はぶく。㊄くづしがきをなす。

くつ・ずみ[沓墨](名) 革沓(カハグツ)に塗りて光澤を出すもの。(靴墨)。

くつ・ずれ[沓擦](名) はく沓(クツ)のために足の皮膚のすれやぶること。

(くっ)**せつ**[屈折](名) ㊀かゞまりをること。㊁〔理〕波動が異なる媒體內に入るとき、其方向を變ずること、音又は光等の屈折これなり。**――せん**[屈折線](名) 〔理〕波動が異なる媒體內に入りて後に進む方向。**――りつ**[屈折率](名) 〔理〕入射線及屈折線が法線をなす二つの角の正弦の比。

くつ・ぞこ[沓底](名) ㊀沓の底。㊁〔動〕「したびらめ」の一名。

(くっ)**たく**[屈託](名) ㊀おもひ屈すること。或一事をのみ心配すること。(懊惱)、「思案―」。㊁くたびれあくこと。つかれていやになること。

くつ・たび[沓足袋](名) くつした。(靴下)。

〔くっ〕**つき**(名) ㊀くっつくこと。㊁くっつきあひ。**――あひ**(名) 男女私に通ずること。又、できあひの夫婦。

〔くっ〕**つ・く**(自、か四) ㊀接合す。つく。㊁屬從す。したがふ。㊂男女ひそかに通ず。又、媒者なしに夫婦となる。

くつ・づくり[沓造](名) くつをつくること。又、其職工。

くつ・なほし[沓直](名) くつの破損をつくろふこと。又、其業の人。

〔ぐっ〕**と**(副) ㊀一心に。ひといきに。「―飲み込む」。㊁物につまるさまにいふ語。「―差し詰まりて、返辭が出ぬ」。㊂一際(キハ)すぐれて。「―よい品」。

くつ・ぬぎ[沓脫](名) 履物(ハキモノ)を脫(ヌ)ぐところ。**――いし**[沓脫石](名) 戶口又は椽側(エンガハ)のあがり口に、くつぬぎのためにすゑある石。

くつ・ぬぐひ[沓拭](名) 室に入る人の靴につきたる土を拭ふために、玄關先などに設くるもの。

くつ・ばけ[沓刷毛](名) くつを拭(ヌグ)ひ又はくつ墨の上をこすりて光澤を出すに用ふる刷毛(ハケ)。棕櫚の皮などにて編みてつくる。

廿**くつ・ばみ**(名) (口食の義)「くつわ」の古名。

くつ・びき[沓引](名) 織機の附屬具、麻繩にてつくり、其一端を織る人の足にかけ、これを引きてあぜを操(アヤツ)るもの。すそを。(臥機)。

(くっ)**ぷく**[屈伏](名) おそれしたがふこと。服從すること。(屈服)。

くつ・べら[沓篦](名) 半沓を穿つに用ふる篦(ヘラ)、これを踵(カカト)にあてゝ穿てば、足容易に靴に入る。

廿**くづ・ほ・る**[頹](自、ら四) (崩殘の義) くづる。

くつ・まき[沓卷](名) 矢の箆(ノ)に鏃(ヤジリ)をつけたる所。

くつ・みがき[沓磨](名) くつをみがき光澤を出すこと。又、其業のもの。

〔く〕**づめ**[苦爪](名) 苦勞すれば爪の長じ方早しといふこと。

くつ・や[沓屋](名) くつをつくり又は賣る職業の人。又は其職業の家。

くづ・や[屑屋](名) 紙屑を買ひ集め又は賣買する商人。かみくづかひ。

くづ・る[崩、頹](自、ら下二) ㊀碎(ク)けこはる。「山―」。㊁破れみだる。「敵陣―」。㊂わるくなる。やぶる。「行儀―」。

くづれ[崩、頹](名) ㊀くづるゝこと、くづれたるもの。㊁集會などの解散。あまひ。「とむらひの―」。

廿**くつろ・か**[寬](名) くつろぎたるさまにいふ語。

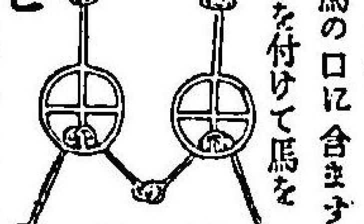
くつろぎ[寬](名) くつろぐこと。又、餘地。

くつろ・ぐ[寬](自、か四) ㊀ゆるやかになる。ひろくなる。㊁こゝろもちのびのびとす。こゝろよくなる。㊂悠然としてあり。ゆったりとしてあり。

くつろ・ぐ[寬](他、か下二) くつろがしむ。ゆるやかにす。ゆるむ。ひろぐ。

〔**くつろげる**[寬](他) 「くつろぐ」の訛。

くつ・わ[轡](名) ㊀(口輪の義)馬の口に含ますする具、金屬にてつくり、これにたづなを付けて馬を御するに用ふ、古昔のは、多く環の中に十文字を置きたる形のものなり。くつばみ。(銜)。㊁紋所の名、圓の中に十文字を置きたる形を描(エガ)きたるもの。



[わつく]

――どころ[轡心](名) 馬を御するたづなのあやつりの工合。**――だすけ**[轡助](名) 轡に添ふる飾、先端は房(フサ)になりて馬の口の兩脇に垂る、おもに組絲にて作る。たすけ。廿**――づら**[轡](名) ㊀「たづな」の古言。㊁くつわのさき。**――むし**[轡蟲](名) 〔動〕直翅類中螽蟖(キリギリス)科に屬する蟲、長形の脚を有しよく跳躍す、綠色と褐色との二種あり、鳴く聲高く喧(カマビス)し。がちやがちや。(聒々兒)。

〔くつ〕**わ**[忘八](名) (古昔、伏見の遊里橦木町(一に江戶の遊里ともいふ)の町割を十字形に割りて、其形轡に似たるより此名起るといふ) ㊀遊女屋又は遊里の異稱。(亡八)。㊁遊女屋の主人。(孤老)。**――や**[忘八屋](名) 遊女屋の異稱。

廿**くつ・わら**[沓藁](名) くつしき。

廿**くづを・る**(自、ら下二) よわる。ひるむ。おぐ。「われ亡くなりぬとて、口惜しう思ひ―な」。

くて[湫](名) 低くして沼などの如くになりたる土地。

(ぐ)**てい**[愚弟](名) 自分の弟の謙稱。

(く)**てう**[口調](名) ことばのいひまはし。文句の調子。「―の好い文」。

(く)**でう**[九條](名) 九布にて製したる袈裟。

(く)**でま**[工手間](名) 工人の賃銀。(作料)。

(く)**てん**[句點](名) 句の切目にうつ點。

廿(く)**でん**[功田](名) 古昔、功績ある者に賜はりし田地。

(く)**でん**[口傳](名) ㊀奧義などの秘密を口授すること。㊁言語にて傳ふること。くちづたへ。

〔ぐ〕**でん・ぐでん**(名) 酒に醉ひて、ぐたぐたとなりたるさまにいふ語。「―に醉っぱらふ」。

く・ど[山突](名) ㊀竈(カマド)の後口の孔。けむりだし。㊁轉じて、かまど。

く・ど[苦土](名) 〔化〕白色の粉末、卽ち、酸化マグネシウムの稱。

くどう【句讀】(名) 文章の中の一小區分の稱。讀は切りて讀む所にして、句は文章中の一段なり。——**てん**【句讀點】(名) 句點と讀點と。——**をきる** 句讀點をきる。

くどき【口說】(名) ❶くどくど。くどく言。❷芝居狂言にて、口說の文句のときに行ふふり。——**うた**【口說歌】(名) そゝりぶしの一種。なげぶしに諸ふの、昔時、吉原返りの遊客など、よく謡ひにて謡へり。

くどく【功德】(名) 【佛】善行のめぐみ他に及ぶと、行己に足りて猶外に及ぶと、又、積善の力。——**ゑ**【功德衣】(名) 【佛】袈裟(ケサ)の異稱。

くどく【口說】(他、か四) ❶くどくどしく繰り返していふ。❷あまりに迎ひ說く。うるさく言ふ。❸恋に從はしめんといろいろに說きつく。

くどくどし(形、二) いとくどし。くだくだし。

くど・しい【諄】(形、二) わづらはし。あくどし。

ぐどん【愚鈍】(名) バカ。のろま。おろか。

くどんのをしへ【瞿曇敎】(名) 瞿曇牟尼の說きし敎、卽ち佛敎。

くない【畿內】(名) 其國の中。

くないくわん【宮內官】(名) 宮內省に出仕する高等官。

くないしやう【宮內省】(名) ❶古昔の八省の一、宮中の御料調度の整理などを掌りしところ。❷宮內大臣の統轄の下に屬し、其旨意を受けて帝室に關する一切の事務をとりあつかふ所。又、宮內大臣が總理する事務の全體の稱。

くないだいじん【宮內大臣】(名) 帝室に關する一切の事務を統轄し、所部各官を統轄し、かねて華族を監督する親任官。

くなう【苦惱】(名) くるしみなやむこと。なやみ。くるしみ。「衆生の—」。

くなどのかみ【岐神】(名) 道のちまたの神。

くに【國】(名) ❶國家。❷國土。❸君主又は諸侯の政權の全體の稱。「—破れて山河在」。❹古昔の行政區劃の一、卽ち、郡を總合したる名稱。「山城—」「大和—」。❺封土。知行所。❻ふるさと。故鄕。❼京地以外の地。いなか。地方。「—もの」。

✝**くにうど**【國人】(名) くにびと。

✝**くにお**【陸】(名) くが。

くにがた【國形】(名) 國人の狀態又は國土の形勢。

くにがた【國方】(名) 地方。「—の武士」。

くにがへ【國替】(名) 昔時、大小名の領地をかへ移されしこと。(移封)。

くにがら【國柄】(名) 一國の成立せる狀態。國體。

くにく【苦肉】(名) 自分の身を苦しめて、敵をあざむくこと。例へば故意に刑罰を受けて敵にいつはり降りて、あざむくなどの類。「—の計」。

くにぐに【國國】(名) それぞれの國。かくこく。

くにことば【國言葉】(名) 地方の方言。いなかことば。くになまり。

くにざかひ【國境】(名) 國の境界。くにのさかひ。くにはて。

✝**くにじやうらふ**【國上臈】(名) 國方の貴き婦人の稱。

くにたみ【國人】(名) (もと「くにびと」といひしを、後嵯峨天皇のとき、御諱の邦仁と音似通ふためにひかへたるなりといふ) 一國の人民。こくみん。

✝**くにつかみ**【地祇】(名) 國土を守護したまふ神。あまつかみの對。(地神。國神)。

✝**くにつこ**【國造】(名) 「くにのみやつこ」に同じ。

くにづめ【國詰】(名) 昔時、大小名及武士の江戶に詰め居るを江戶詰といひしに對して、大小名は己の領地に武士は其主君の領地に居りしとの稱。

✝**くにつもの**【國津物】(名) 土地に作りたる產物。(土毛。土物)。

✝**くにつやしろ**【國津社】(名) くにつかみを祀りたる社。(國社)。

くになまり【國訛】(名) ❶地方言語の正しからぬ習慣。又、其習慣ある言語。いなかなまり。いなかことば。❷我領地又は鄕里の言語。

✝**くにのおや**【國親】(名) 天皇の御親を申し奉る語。

✝**くにのかみ**【國守】(名) こくしゆ。

✝**くにのちぶさ**【國乳房】(名) 國の恩をたとへいふ語。

✝**くにのはしら**【國柱】(名) 大臣の異稱。

✝**くにのはは**【國母】(名) 皇后又は皇太后などを申し奉る語。こくぼ。こくも。

✝**くにのみやつこ**【國造】(名) 上古、國といふ一の行政區劃を主宰せし職臣(カバネ)。みやつこ。

✝**くにのをさ**【國長】(名) 國の守護者卽ちくにのみやつこ・こくしゆ等の稱。

✝**くにはら**【國原】(名) 國を廣く見ていふ語。「見るすれば—は」。

くにばら【國腹】(名) 大名などの子の其領地にある婦人の腹に產まれたると、又、其子。「—の男子」。

くにばらひ【國拂】(名) 其國を追放せらるゝと。

くにひと【國人】(名) くにのひと。又、くにたみ。

くにふ【口入】(名) ❶くちいれ。❷斡旋。

くにぶぎやう【國奉行】(名) 國々の治績を視察しまた其地方に於ける訴訟を判斷せし職名。

✝**くにぶみ**【國文】(名) 古昔、諸國より貢物に添へて奉りし文書。

✝**くにみ**【國見】(名) 國の形を高き處より見ること。

✝**くにみたま**【國御魂】(名) 國を草創したる德のある神。

くにめぐり【國廻】(名) 國々をめぐりあるくこと。

くにもち【國持】(名) ❶昔時、大名の一ヶ國以上を領有せしもの。❷國持大名の略。——**だいみやう**【國持大名】(名) 昔時、一ヶ國以上を領有せし大名の稱。(國守)。

くにもの【國者】(名) ❶地方の人。いなかもの。❷同鄕の人。ところのもの。

ぐにやぐにや(名、副) 軟(ヤハ)らかく力なきさまにいふ語。ぐだぐだ。

✝**くにわかれ**【國別】(名) ❶國の區別。❷國々によりて事を區別すること。

くにん【公人】(名) ❶古昔、公文所に仕へし小役人。❷古昔、禁中の地下の小役人。——**ぶぎやう**【公人奉行】(名) 鎌倉時代に、政所又は問注所にて奉行の巡邏をつかさどりし役名。

✝**くにん**【宮人】(名) 宮仕(ミヤヅカヘ)の人。

✝**くぬが**【陸】(名) くが。

✝**くぬがのみち**【陸道】(名) 北陸道の古名。

くぬぎ【櫟】(名) 【植】殼斗科に屬する木。高さ二三丈に達す。葉は栗に似て形細長く周邊に刺あり。花も亦栗に似る。雌雄異株にして果實はどんぐりと名づけ、材木は薪炭用に供せらる。くのぎ。(櫟。橡。櫪)。

✝**くぬち**【國中】(名) 國內。

くねつ【苦熱】(名) くるしきほどの暑氣。ひどいあつさ。

くねくね【曲曲】(名、副) 折れまがりて直からざるさまにいふ語。「—したる坂」。——**しくねくねし**【曲曲】(形、二) ❶心直からず。根性わるし。(執拗)。❷くねくねとしてあり。直からず。

くねり【曲】(名) くねくねすること。——**みち**【曲路】(名) くねくねしたる路。(羊腸)。

くねる【曲】(自、ら四) ❶折れまがる。くねくねす。❷性質ねぢけまがる。ひがむ。❸うらみかこつ。不平に思ふ。「—涙の手枕」。

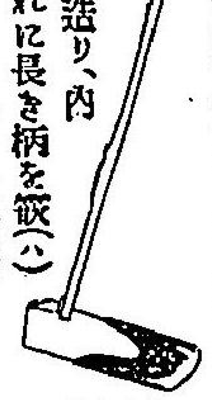
くねんぼ【九年母】(名) 【植】芸香科に屬する木。樹は柑に似て刺少なく葉長し、果實は密柑に似て酸甘し。皮も食用に供せらる。(香橙。香橘)。

✝**くのえかう**【薰衣香】(名) 衣に薰(タ)きする一種の香。

くのぎ【櫟】(名) 【植】「くぬぎ」に同じ。

くは【桑】(名) ❶【植】桑科に屬する木。葉にて蠶を飼養す。葉より先に花を着け、小さき莖の如き實を結ぶ。材木は木質堅固にして木理麗(ウルハ)しく諸種の用に供せらる。樹皮の纖維は製紙の料に供せらる。❷藥所の名。❸くはいろの略言。——**いちご**【桑苺】(名) 桑の實。其形苺に似たるより名づく。(椹)。——**いろ**【桑色】(名) 薄き黃色。

くは【鍬】(名) 一種の農具。頭は一枚の鐵にて扁(ヒラ)く造り、內部に向ひて曲がり、これに長き柄を嵌(ハ)めたるものにして、地を掘るに用ふ。(鐇)。

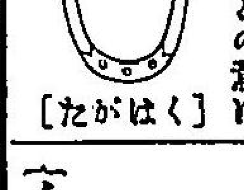


[くは]

✝**くはう**【惑】これは、こは。

くばう【公方】(名) ❶おほやけ。朝家。❷(足利義滿の頃より始まる、もと公方樣と呼びしに起るといふ) 征夷大將軍の稱。

くはがた【鍬形】(名) (備中鍬の形なればいふ) 兜の附屬具。きびさしの上より角の如く二本さし立てたるもの、端は外へ反(ソ)り中に曲りて凹み、恰もくわゐの葉の形の方より見たる樣に似るより此名あり。「—打ったる兜」。(九方形)。



[くはがた]

(**くばく**)【瞿麥】(名) 【植】なでしこの異稱。——**たう**【瞿麥湯】(名) 古昔、えなの出ぬを治するに用ひし煎藥。

✝**くはご**【桑子】(名) 【動】蠶の異稱。(蠶を食ふ子の義)。

くはこ【桑蠶】(名) 桑の木に生ずるさものこの類。

くはざけ【桑酒】(名) 桑の實を材料として製したる酒。味は味醂に似て稍々酒精分強し。丹波國八木の名產。

くはし【精】(形、二) ❶つまびらかなり。つぶさなり。明細なり。(委)。❷明知せり。通達せり。熟練せり。たくみなり。「藝に—」「道に—」。

✝**くはし**【細】(形、二) ❶こまかし。ちひさし。❷うるはし。たへなり。よし。「—き女」「—き妹」。——**ほこちたるのくに**【細矛千足國】(名) (細矛はほこの枕詞にして、よき兵器の數多き國の義といふ) 上古、日本國の美稱。——**め**【細女】(名) うるはしき婦人。(美女)。

くはさたねんき【鍬下年期】(名) 十年以內に成功し能はざる開墾に對し、官廳が願出により地目變換まで、原地價により地租を徵收する三十年以內の年期。又、官有地を開拓して民有に歸したる土地に對し、官廳が願出により、其素地相當と認むる地價を定め、これによりて地租を徵收する十年以內の年限。

くはす【食】(他、さ四) ❶くらはす。❷あ

ざむく、だしぬく。㊂仕向く。「鬪爭を―」。「一名。
くは-ず-いも クワズイー［不食芋］（名）【植】「いしいも」の
くはず-ぎらひ クワズギラヒ［不食嫌］（名）㊀其物を食ひしとなく其味を知らずして、たゞ其物を食ふをきらふと。㊁其物事の妙味を經驗せしとなくして、たゞ其物事を嫌ふと。
〔**くはせる**［食］（他）「くはす」の訛。
〔**くは-せ-もの** クワ［食物］（名）にせもの。がんぶつ。
くは-ぞめ クワ［桑染］（名）桑色にそめたるもの。
くは-た クワ［桑田］（名）桑を植ゑつくりたる田圃。
くはだ-つ クワダツ［てててつつるつれてよ］［企］（他、た下二）思ひ立つ。營み始む。えはじむ。もよほす。「事を―」。
くはだて クワダテ［企］（名）くはだつると。いとなみ。もよほし。「謀反の―」。
くは-ちや クワ［桑茶］（名）桑の葉を茶の如くに製したるもの。
〔**く-はつ**［供發］（名）【佛】佛に供物を奉ると。
くは-つみ クワ［桑摘］（名）桑の葉を摘みとると。
くは-はら クワ［桑原］（名）雷鳴のとき、落雷を避くるために唱ふる咒語。
くはは-る クワハル［らりるるれれ］［加］（自、ら四）㊀添はる。かさなる。㊁多くなる。ふゆ。ます。㊂其列に入る。「御相に―」。㊃およぶ。いたる。「威四海に―」。「法。
〔**く-はふ** ーホ［句法］（名）詩文などの句をつゞる方
くは-ふ クワフ［へへふふるふれへよ］［加］（他、は下二）㊀添ふ。かさぬ。㊁多くす。ふやす。ます。㊂高くす。のぼす。あぐ。「位を―」。㊃落く。當つ。置く。「手を其上に―」。㊄仕向をなす。えむく。㊅加算をなす。
くは-ふ クワフ［へへふふるふれへよ］［銜］（他、は下二）口に入れ輕く嚙みて持ち支ふ。「筆を口にくはへて」。
くはへ クハヘ［加］（名）㊀くはふると。ましふやすと。
㊁酒を盛る器、銚子に酒を差し加ふるためのものにして、形水さしに似る。
くはへ-ギセル クハヘ［銜煙管］（名）煙管を口にくはへながら煙草を吸（ス）ふと。
くはへ-ぐすり クハヘ［加藥］（名）「かやく」に同じ。
〔**くは-まゆ** クワ［桑繭］（名）自然生の蠶（カヒコ）が桑の木にかけたる繭。
くは-むし クワ［桑蟲］（名）【動】「かひこ」の異稱。
〔**くは-や** クワ（感）これよ。さらば。「らすがしら。
〔**くは-ゆき** クワ［烏頭］（名）馬の後足のそと面。か
〔**くはゆる**（他）「くはふ」の訛。
くばり［配］（名）㊀くばると。㊁活花にて、木の叉（マタ）などを割り裂き筒の中に入れ、それにて花を支ふると。又、其木の叉。「花―」。―**つ-く**［けけくくるくれけよ］［配付］（他、か下二）㊀くばり渡す。くばり當つ。㊁それぞれ適當なる位地に置く。―**つけ**［配付］（名）くばりつくると。くばりつけたるありさま。「―の工合」。
くば-る［らりるるれれ］［配］（他、ら四）㊀分けて與ふ。割り付けておくる。「金を―」。（頒）。㊁行き渡らす。普く屆かす。「目を―」。㊂それぞれ適當なる所に置く。㊃つれあひとなす。めあはす。
〔**くば-る**［らりるるれれ］［燒］（自、ら四）（くべらるの義）火に入りて燒く。「衣服が―」。
くひ クヒ［杙］（名）㊀地に打ち込み又は埋め立てたる長き材木。「柵の―」。「榜示―」。（杭、橛）。㊁古昔、禁中にて、時をえらするためにたてし長き材木。ときのくひ。「四つの―」。「申の―」。
くひ クヒ［株］（名）木のきりかぶ。（杌）。―**を まもる**［守株］（支那の宋の人が、一たび兎が田の中の株に觸れ死にて、手を勞せずにこれを獲しより、鋤をすて耕を已め、更に兎を獲んとを思ひて其株をまもりしとの故事に出づ）變に通せず理に暗く、徒に以前の物事を頑守するにいふ。―**を まもり うさぎ を まつ**［守株待兎］（守株と同一の故事に出づ）さきの幸福は偶然の遭遇なるにも關（カヽ）はらず、再び斯かる事あらんかと思ひ、自家のなすべき事をすてゝ、空しく心待ちに待ち居るとの愚かなるにたとへいふ。
くび［頸］（名）㊀頭部と體部とを繋ぎ連ぬる細き部分の稱。㊁諸物の頸にあたる部分の稱。（領、襟）。「衣の―」。㊂凡て頸の形したる所の稱。「手―」。「足―」。―**を くくる** 頸に紐又は繩などをまとふ。又、くびをつるして死ぬ。―**を つる** 紐又は繩などを高き處にかけ、これを以て頸をしめ體を宙に吊りて死ぬ。又、頸に紐又は繩をかけてつるしあぐ。
くび［首］（名）かしら。かうべ。あたま。えるし。首級。―**に する** 首を切る。又、免職・解雇又は除名するにいふ。―**に なる** 首を切らる。又、免職・解雇又は除名せらるゝにいふ。
〔**ぐ-び**［具備］（名）㊀たりとゝのふると。そなはると。㊁十分にとゝのふると。そなふると。
くひ-あはせ クヒアハセ［食合］（名）㊀併せて食へば、害となる物を併せて食ふと。㊁器具の隅などに材と材とを相交はらするると。又、其所。
くひ-あひ クヒアヒ［食合］（名）㊀かみあひ。㊁器具の隅などに、材と材との相交はると。「の。
くひ-あまり クヒ［食餘］（名）食うてのこりたるもの。
〔**くひ-いぢ** クヒ［食意地］（名）物をくひたがる慾望。「くびをけ。
サ**くび-いれ**［首入］（名）斬りたる首を入るゝ器。
くび-かし［頸枷］（名）頸に掛くるかし。（盤枷）。

くび-かせ［頸枷］（名）前條に同じ。
サ**くび-かみ**（名）袍又は狩衣（カリギヌ）などの襟（エリ）の稱。ばんりやう。（盤領）。
くび-き［頸木］（名）車の轅の先につくる横木、其車を挽く牛の頸に掛くるもの。（軛、衡）。―**を あらそふ**［爭衡］耳に拮抗して相下らざるにいふ。
くひ-きり クヒ［食切］（名）食ひ切ると。
くび-きり［首斬］（名）㊀死罪にあたる人の首を斬ると。ざんざい。㊁ざんざいに處せらるゝ人の首を斬る人。たちとり。（劊手）。―**だい**［首斬臺］（名）首斬の刑に處せらるゝ人をあがらせて首を斬る臺。（斷頭臺）。―**ちやう** ヂヤウ［首切疔］（名）頸の周圍に發する癤。―**ば**［首斬場］（名）首斬の刑を行ふ場所。―**ばった**（名）【動】直翅類中きりぎりす科に屬する蟲、圓錐形の頭を有し鳴聲高し、綠色と淡褐色との二種あり、物などを嚙ませて體の一部分を引けば、頸切るれど嚙みたるものを放さずといふより此名あり。

［くびきりばった］

くひ-き-る クヒ［らりるるれれ］［食切］（他、ら四）㊀齒にて嚙み切る。㊁食ひ終はる。くらひつくす。㊂全く手切となす。無關係となす。
くび-き-る［らりるるれれ］［首斬］（他、ら四）㊀首を斬る。斬罪の刑に處す。㊁免職す。解雇す。除名す。
くび-くくり［首縊］（名）首をくゝりて死ぬると。又、其死人。
〔**ぐび-ぐび**（名、副）酒などを味ひ飲むさま又は少しづゝ飲みて多量を飲むさまにいふ語。
くひ-こみ クヒ［食込］（名）くひこむと。
くひ-こ-む クヒ［まみむむめめ］［食込］（自、ま四）㊀食ひ入る。㊁殘蝕す。侵入す。「他人の選擧區に―」。㊂商業などに損耗多くして、資本を次第に失ふ。㊃罪狀發覺して捕へらる（博徒仲間などにいふ）。
くひ-ごろ クヒ［食頃］（名）其物を食するに最も味よき時期。
くひ-さし クヒ［食止］（名）食ひ盡くさずして止むと。又、其食物。くひのこし。
くひ-さ-す クヒ［さしすすせせ］［食止］（他、さ四）くひ盡くさずして止む。くひのこす。
くび-じっけん［首實檢］（名）㊀古昔の戰爭にて、味方の得たる敵首の實否をあらたむると。㊁すべて首級の實否を檢査すると。「松王丸の―」。
くひ-しば-る クヒ［らりるるれれ］［喰締］（自、ら四）齒と齒を強く合はせて、口を閉づ。
くひ-しろ クヒ［食代］（名）くひれう。
（**ぐびじん-さう** ーサウ［虞美人草］（名）【植】「ひなげし」の一名。
〔**くひ-ぜんばう** クヒザウ（名）くひいぢの張りたるもの。
くびす［踵］（名）足蹠の後方の地に着する部分の圓かなる所。かゝと。あくと。（跟）。―**を せっす**［接踵］往復するもの、前後相續（ツ）ぐにいふ。―**を かへす**［返踵］後へかへり行く。
くひ-すぎ クヒ［食過］（名）過度に物を食ふと。又、其ために胃腸などをいたむると。過食。
くび-すぢ［頸筋］（名）頸の後部。えりくび。（首筋）。
くひ-ぜ クヒ［株］（名）木の切りかぶ。くひ。
くび-せん［首錢］（名）首になる所を助かるために出す料。
くひ-ぞめ クヒ［食初］（名）小兒の生れて百二十日目に、始めて飯を食せしむると。又、其儀式。―**もやう** ーヨウ［食初模樣］（名）食初に供ふる椀にある模様、多くは蒔繪にて鶴・龜・松・竹・梅などを並べ。「く。
くび-だい［首代］（名）くびせん。
くひ-だうらく クヒダウラク［食道樂］（名）いろいろ食物を吟味して食ふ道樂。
〔**くひ-たふし** クヒタフシ［食倒］（名）㊀たゞ食ひて價を拂はぬと。又、其人。㊁あそびぐひ。くひつぶし。
〔**くひ-たふ-す** クヒタフス［さしすすせせ］［食倒］（他、さ四）㊀食ひて其代を拂はず。無報酬にて他人の物を食す。㊁くひつぶす。
〔**くひ-だふれ** クヒダフレ［食倒］（名）㊀飲食をむごりて、生活費の多くをこれにつかふと。又、其ために貧困に陷ると。㊁あそびぐひ。くひつぶし。
くび-たま［頸玉］（名）㊀上古、頸にかけし玉の飾、即ち、瓔珞（ヤウラク）の類。㊁猫・犬などの頸に掛くる環。（頸綜）。㊂くび。頸部。
サ**くひ-ぢ** クヒ［弦］（名）（杙路の義といふ）古昔、獸を捕る陷罠、即ちわなの類。
くひ-ちがひ クイチガイ［喰違］（名）「くひちがふ所。くひちがふと。又、
くひ-ちが-ふ クイチガウ［はひふふへへ］［喰違］（自、は四）㊀物事相合はず。ゆきちがふ。（齟齬）。㊁犬牙の如くに彼此出入して相交はる。（交錯）。
（**ぐ-ひつ**［愚筆］（名）自分の手蹟の謙稱。
くひ-つ-く クヒ［かきくくけけ］［食付］（自、か四）㊀くらひつく。㊁ひっしととりつきて離れず。
〔**くびっ-たけ**［頸丈］（名）㊀地上より頸までの高さほど。「水が―ある」。㊁身の程を忘るゝまで、色香に迷ひゐると。
〔**くびっ-たま**［頸玉］（名）くび。頸部。
くび-づな［頸綱］（名）犬の頸に掛くる綱。又、囚人などの頸に絡（マ）ふ綱。くびなは。

〔くびっ-びき〔頸引〕(名)「くびひき」の訛。「人。
〔くひ-つぶし〔食潰〕(名) くひつぶすこと。又、其
〔くひ-つぶ-す〔食潰〕(他、さ四) ㊀報酬又は代價を拂はずして徒に食事す。㊁かせがずに生活して資産を傾く。
†くひ-つみ〔食摘〕(名) 蓬萊かざり。(蓉盤)。
くひ-つ-む〔食詰〕(自、ま下二) 糊口の道を失す。もはや活計を立つること能はず。
くひ-つめ〔食詰〕(名) 食ひつむること。又、其人。
―もの〔食詰者〕(名) 糊口の路を失ひたる人。〔―る〔食詰〕(自)「くひつむ」の訛。
〔くひ-て〔食人〕(名) 食ふ人。又、よく食ふ人。
くひ-とめ〔食止〕(名) くひとむること。防ぐこと。
くひ-と-む〔食止〕(他、ま下二) 押しとゞむ。ふせぎとゞむ。
〔くひとめる〔食止〕(他)「くひとむ」の訛。
くひな〔水鷄〕(名) 【動】渉禽類に屬する鳥、嘴長く其基部に軟皮を被る、脚は長くして趾は自在なり、水邊に棲息し小魚蟲類などを食す、鳴く聲恰も戸を叩くに似たるより、歌などに、其鳴くをたゝくと詠めり。(秧鷄)。
〔くひ-にげ〔食逭〕(名) 物を食ひ代價を拂はずして、其まゝ逃ぐること。又、其人。
くひ-の-き〔食退〕(名) くひのくこと。
くひ-の-く〔食退〕(自、か四) ㊀食ひ終りて其座を退く。㊁食ふことを止む。
くひ-のこし〔食殘〕(名) くひのこすこと。くひのこしたるもの。
くひ-のこ-す〔食殘〕(他、さ四) くひかけてやむ。くひさす。
くび-の-ざ〔首座〕(名) くびきらるゝときにすわる席。「―になほる」。
〔くひ-はぐれ〔食外〕(名) くひはづすこと。又、其人。
〔くひ-はづし〔食外〕(名) くひはづすこと。
〔くひ-はづ-す〔食外〕(他、さ四) ㊀食ふべき時を失す。㊁生活すべき道を失す。㊂利を取得すべき機を失す。「る」。(剡)。
くび-は-ぬ〔首撥〕(他、な下二) 首を斬
くび-ひき〔首引〕(名) ㊀一種の遊戲、兩人首に紐(ヒモ)を懸け、雙方の首の力にて其紐を引き合ひて勝負すること。くびっぴき。㊁〔雙方互角に力を出して、競ひあふこと。㊂〔或ものを相手とし、力を出して勉むること。「字引と―」。
くび-ほそ〔頸細〕(名) くびはそきこと。―・し〔頸細〕(形、二) ㊀頸部はそやかなり。㊁†こゝろぼそし。
くび-まがり〔首曲〕(名) ㊀病により首の曲がりたること。又、其病人。㊁〔家産の傾きたること。
くび-まき〔頸卷〕(名) 頸部に卷くもの。えりまき。
くひ-もの〔食物〕(名) ㊀食すべきもの。たよくもつ、飲物の對、(餌)。㊁〔だまされて他人の生活の資用をむさぼりとらるゝ人。「隱居は彼女の―」。―・あたり〔食物中〕(名) 食物にあたりて病をかもすこと。
〔ぐびり(名、副)「ぐびぐび」に同じ。
くび-る〔縊〕(自、ら下二) 自ら頸をくゝりて死ぬ。くびをくゝる。
くび-る〔縊〕(他、ら四) ㊀紐などをもて、頸をくゝりて命を害す。絞(シ)め殺す。㊁絞罪に行ふ。
くび-る〔括〕(自、ら下二) 兩邊ふくれて其中ほど細まる。
くび-る〔括〕(他、ら四) 中ほどをまめくゝる。
くびれ〔括〕(名) 中のくびれてあること。
くひ-れう〔食料〕(名) ㊀食用に供するもの。㊁食したる物の報酬。
〔くびれる(自)「くびる」の訛。
くび-わ〔頸輪〕(名) 猫又は犬などの頸にまとふもの。
くひ-わ-く〔食分〕(他、か下二) 食ひて味をかみ分く。食味の良否を知る。
くひ-わけ〔食分〕(名) ㊀食ひ分くること。㊁くひのこし。〔―る〔食分〕(他)「くひわく」の訛。
くび-をけ〔首桶〕(名) 首級を入るゝ桶。くびいれ。
(ぐ-ひん〔狗賓〕(名) 天狗の異稱。
く-ふ〔食〕(他、は四) ㊀はむ。くらふ。たぶ。「米を―」「餅を―」。(喰、喫)。㊁かじる。かむ。㊂くはふ。ふくむ。㊃侵入す。おかす。くひこむ。「他人の勢力範圍内にくひ入る」。㊄殘蝕す。むしくふ。そこなふ。「白魚のくひたる書物」。㊅〔かじりつく。くみつく。「ふところにくひさがりて」。㊆〔受く。かうむる。「罸を―」。㊇〔生計を立つ。「筆で―」。
〔く-ふ〔食〕(自、は四) あざむかる。たばからる。「一ぱい―」。
く-ふ〔構〕(他、は四) 造り營む。かまふ。「鳥が巣を―」。
く-ぶ〔燒〕(他、は下二) 火に入れて燒く。もやす。もす。「柴折り―る冬の山里」。
(ぐ-ふ〔愚父〕(名) 自分の父の謙稱。
(ぐ-ぶ〔供奉〕(名) 行列に加はりて御供(オト)すること。又、其ものども。「御幸の―」。
(く-ふう〔工夫〕(名) ㊀思案して方法を立つること。思ひめぐらすこと。(心機、手段)。㊁品性の修養又は意志の鍛錬に、心を用ふること。
(ぐ-ふう〔颶風〕(名) 【地】螺旋狀に旋轉する急激なる風、廻轉甚だ急激なるを以て、其中心に一時眞空を生じ、ために其中心にある物體を捲き上げ、災害を及ぼすものなり。つむじかぜ。

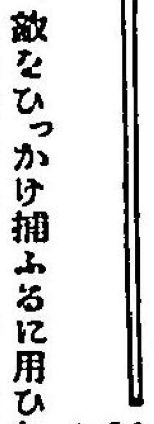
(ぐ-ふ-たい-てん〔俱不戴天〕(名) (共に天をいたゞかず、即ち、共に此世に存在せざる意) 仇讎とする念の深くして、必ずこれが報いをなさずば已まざる意にいふ語。「―の親の仇」。
(ぐ-ぶつ〔愚物〕(名) おろかもの。あはう。ばかもの。
(ぐ-ふ-ぐ-ふ〔愚夫愚婦〕(名) おろかなる男女。無教育なるものども。
†くぶん-でん〔口分田〕(名) 古代、班田收授の法によりて、六才以上の男子には各二段女子には其三分の二を給與せられしもの。
†くべ〔墻〕(名) 墻(カキ)の古言。
(く-べつ〔區別〕(名) わかち。ちやべつ。けぢめ。
(く-ほ〔矩歩〕(名) 規律正しきあるきかた。
†くぼ〔踵〕(名)「くびす」の古名。
†くぼ〔女陰〕(名) 女子の陰部。
〔くぼ〔凹〕(名) くぼき所。「大―」「小―」。(窪、窟)。
(くぼ(名) かはぼう。ゑた。
(ぐ-ぼ〔愚母〕(名) 自分の母の謙稱。
†くぼ-か〔凹〕(名) くぼきこと。
くぼ-し〔凹〕(形、一) 周圍高く中央低し。おちこみてあり。「くぼき顏」。
くぼ-たまり〔凹溜〕(名) くぼくなりてゐる部分。
†くぼ-て〔葉椀〕(名) 古代、柏の葉を十枚重ねて綴ぢてつくりたる盤の中凹(ボク)きもの、食物をもるに用ひたり。
(く-ほふ〔求法〕(名) 【佛】法の道を體得せんとねがひもとむること。
(ぐ-ほふ〔弘法〕(名) 【佛】法の道を世に弘むること。(布敎)。
くぼまり〔凹〕(名) くぼまること。くぼみ。(窪、窟)。
くぼま-る〔凹〕(自、ら四) ㊀中低くなる。おちこみて深くなる。くぼくなる。「くぼまりたる土地」。㊁うづくまり居る。「くぼまり居たる五郎丸」。(踞踞)。
くぼみ〔凹〕(名) 凹(ボク)みたる部分。へこみ。「―のある土地」。(窪、窪)。
くぼ-む〔凹〕(自、ま四) くぼまる。へこむ。
くぼ-む〔凹〕(他、ま下二) 中を低くす。おちこます。へこます。
くぼ-め〔凹目〕(名) 中へ落込みたる目。(瞘)。
〔くぼめる〔凹〕(他)「くぼむ」の訛。
くぼ-やか〔凹〕(名) くぼきこと。
く-ほん〔九品〕(名)【佛】(い)極樂往生の等級、上中下の三品あり、又、其おのおのに上中下の別ありて、都合九つに分る。(ろ)九品淨土又は九品蓮臺の略言。―じやうど〔九品淨土〕(名) 【佛】西方淨土即ち極樂淨土の異稱。―ねんぶつ〔九品念佛〕(名) 【佛】念佛の異稱、念佛を唱ふれば極樂往生すといふより此名あり。―れんだい〔九品蓮臺〕(名) 【佛】極樂淨土の蓮のうてな。
くま〔熊〕(名) ㊀【動】食肉類に屬する獸、大形にして雜食す、齒爪共に強く、四肢共に太く逞(タク)しく、指趾おのおの五つあり、全蹠地を踏み又よく物を握り木に登る、深山に棲み冬季は洞穴に籠(コモ)る、毛皮は敷物にし肉は食用に供せられ、膽は健胃劑として珍重せらる、種類少からずして、本邦普通見る所は、全身黑く、喉の下に新月の形に似たる白き素毛あり、これを月の輪といふ。㊁〔芝居にて立見するもの、稱、其鐵の格子によりつきて見るさまの檻中の熊に似たればいふ。(東京地方の俚言)。
くま〔曲、阿〕(名) ㊀內部へ灣曲して入り込みたる部分。すみ。「山の―」。(隈)。㊁奧まり隱れたる所。かげ。㊂色と色と相接する所。光と影と相接する所。「彩色の―を取る」「月の―」。㊃秘密なる事又は發表せざる思。「心の―」。㊄役者の顏の彩色。
†くま〔奠〕(名) 神に奉る精米。くましね。
くまー〔熊〕(接頭) 或語に冠して、強く恐しき意を表はす語。「―蜂」「―鷹」。
(く-まい〔供米〕(名) 神に供する米、貢米。
(く-まい〔口米〕(名) 古昔、本租以外に徵收せし年貢米。
(ぐ-まい〔愚昧〕(名) 理に暗きこと。おろかなること。
くまがい-さう〔熊谷草〕(名) 【植】(花の形が昔にある熊谷直實の背負ひし母衣に似たりといふより此名あり) 蘭科に屬する草、葉は濶くして莖の上端に二個對生す、花梗は其間より生じ一個の大なる花を著く、花は二個の荊を有す、觀賞用として栽培せらる。
くまがい-ざくら〔熊谷櫻〕(名) 【植】さくらの變種、彼岸櫻に次ぎて早く咲く、始めは赤くして後に白色となる、花瓣に尖頭あり。
くま-ぐま〔曲曲〕(名) こゝかしこのくま。すみずみ。
†くま-ぐま・し〔曲曲〕(形、二) 心にくまありて明かならず。へだてがまし。へだてあり。
くま-ざさ〔隈笹〕(名) 【植】笹の一種、長さ五六尺許に及ぶ、細き莖と廣き葉とを有す。(山白竹)。
†くま-しね〔神稻〕(名) 神に奉る精米。あらひよね。かしよね。洗米。(精)。
くま-ぜみ〔熊蟬〕(名) 【虫】蟬の一種、全身黑色、羽は透明にして中に綠色の筋あり、形も聲もあきせみより大なり。やませみ。うまぜみ。(馬蜩)。
くま-そ〔熊襲〕(名) 古代、今の日向・大隅・薩摩の一帶を根據とせし一種の民族、天孫と同種のものにあらず、もと朝鮮地方より渡來したるものならんといふ。

くま-たか［熊鷹］(名) ㊀【動】猛禽類中たか科に屬する鳥。普通の鷹より大なること凡三倍許。嘴は強大にして上嘴鉤曲し尖鋭なり。性質極めて烈しく、狐・狸・兎などをも掴(ツカ)み捕ふ。(角鷹)。㊁性質の兇暴にして貪慾なるものゝ稱。「―ばゝあ」。

〔くまたか〕

†くま-ぢ［隈路］(名) 「くま」(隈)に同じ。

くま-で［熊手］(名) ㊀昔時の一種の武器。熊の爪の如き鐵の爪を數個並べ附け、これに長き柄をすげたるもの。敵をひっかけ捕ふるに用ひたり。㊁武器のくまでと同じ形にて、多くは竹を曲げて造りたる具。落葉又は穀物などを掻き寄するに用ふるもの。㊂東京の酉の市に賣る竹製のくまで。これにおかめの面又は模造したる枡若しくは小判などを付けたるもの。一年中の福徳を掻(カ)き寄する寓意なりといふ。



〔くまで〕

くま-どり［暈取］(名) ㊀暈(マク)を取ること。ぼかし。さいさき。「給の―」。(渲染)。㊁役者の顏の彩色。「す。

くま-ど・る［暈取］(他、ら四) くまどりをなす。

くま-な・し［曲無］(形、一) ㊀心にへだてなし。㊁くもりなし。かげなし。

くま-の-い［熊膽］(名) 熊の膽臟。味苦し。健胃劑として甚だ珍重せらる。ゆうたん。

†くま-の-つづら(名) 【植】「ばべんさう」(馬鞭草)の古名。

くま-ばち［熊蜂］(名) 【動】膜翅類中胡蜂科に屬する蟲。我國に於ける蜂類中の最大なるものにて、全身黑褐色を帶び、頭部及腹帶は黄色なり。樹液を吸收するもの多し。其攫烈し。(大黄蜂、大胡蜂)。

くま-びき［九萬疋］(名) 【動】「しいら」の一名。

くま-まつり［熊祭］(名) 北海道土人の行ふ一種の祭。熊の子を捕へ、婦人の乳もてこれを養ひ、三年目に殺してこれを神に供へ祭ること。

†くま・る［配］(他、ら四) 「くばる」の轉。

†くま-わ［隈回］(名) くま。「水の―にさすらへば」。

くま-わし［熊鷲］(名) 【動】鷲の一種。性質最も猛烈なり。尾は基部白く末端黑し。多く年數を經たるものは、頭より尾まで鼠色の斑點を生ず。

(くまん-ばち(名) 【動】「くまばち」の訛。

†くみ［胡頽子］(名) 【植】「ぐみ」に同じ。

くみ［組］(名) ㊀絲を組むこと。「あら―」。㊁絲を組みてつくりたるもの。ひも。㊂ふさ。(綬)。㊃合體して共に事を行ふ者ども。とも。なかま。㊄つゐ。そろひ。㊅たい。群列。㊆同一なる旬調の短きものを、くみあはせたる琴の曲。

(く-み［苦味］(名) にがきあぢ。にがみ。

ぐみ［胡頽子］(名) ㊀【植】胡頽子科に屬する植物の總稱。溫帶に産する木本にして、概ね高さ六七尺。此類の植物は、通常食用に供すべき果實を生ず。あきぐみ・なつぐみ・まるぼぐみ・なはしろぐみ・つるぐみ等の種類あり。くみ。もろなり。(茱萸)。㊁錯のわたかみにある飾の鋲。

くみ-あ・ぐ［組上］(他、か下二) ㊀組みて仕上ぐ。組み了る。㊁組みて積みあぐ。

くみ-あ・ぐ［汲上］(他、か下二) 水などをくみてつりあぐ。又、水などを汲みほす。

くみ-あげ［組上］(名) 組み上ぐること。「―る「組上」(他) 「くみあぐ」の訛。

くみ-あげ［汲上］(名) 水など汲みあぐること。「―る［汲上］(他) 「くみあぐ」の訛。

くみ-あは・す［組合］(他、さ四) 組みあふやうにす。くむふうにす。

くみ-あはせ［組合］(名) ㊀組みあはすること。組みあはしたるもの。㊁【數】數個のものゝ中、或數だけのものを順序に拘(カカ)らずに採りたる群。n個のものをr個宛採りたる組合の數は、$\frac{n(n-1)(n-2)\cdots\cdots(n-r+1)}{1\cdot2\cdot3\cdots\cdots r}$なり。

くみ-あひ［組合］(名) ㊀互に組みあふこと。㊁組みあふ人々。組みあひて成りたる群族。なかま。つれ。むれ。だんたい。㊂【法】行政法上の人格を有し、國家及地方團體と並びて、特殊の行政組織を有する一種の團體。即ち、公共組合。「郡―」。「水害豫防―」。㊃【法】二人以上のものが出資して、共同の事業を營むもの。即ち、組合契約によりて成立する團體の稱。會社の如く法人たる資格なきものとす。勞働組合・消費組合・技藝組合・同業組合等種類多し。㊄くみうち。とっくみあひ。けんくわ。――けいやく［組合契約］(名) 【法】各當事者が出資して、共同の事業をなすとの契約。――しやうひん［組合商品］(名) 簿記にて、二人以上のものが組合をなして、互に損益を分擔する契約を以て販賣する商品の稱。帳簿への記入は、全擔式・分擔式及代理式の三種あり。――ゐん［組合員］(名) 組合を組織する各當事者の稱。

くみ-あ・ふ［組合］(自、は四) ㊀互に組む。㊁一群となる。くみをつくる。なかまとなる。㊂公法上又は私法上の組合を組成す。㊃

耳に取りくむ。互にくみつく。又、つかみあふ。

くみ-いと［組絲］(名) 組みあはせたる絲。

くみ-い・る［組入］(他、ら下二) 其中に組みて入る。

くみ-い・る［汲入］(他、ら下二) 汲(ク)みて中に入る。

くみ-いれ［組入］(名) ㊀井天井の古名。くみれ。「―の上に彼降るなり」。㊁白木にて造りたる小さき一組の角盆。「多くは三個位を、いれこみにせらるゝやうに造り、供物を入れて神に供ふるに用ふるもの。㊂すべて中に組み入るゝやうに造ること。又、其つくりの器物。

くみ-うち［組討］(名) 取り組みて互に打ち合ふこと。組みつきて互に爭ふこと。(格鬪)。

くみ-かき［組垣］(名) くみあはせてつくりたる垣。

くみ-がしら［組頭］(名) 一組又は一團の長。

くみ-か・は・す［酌交］(他、さ四) 互に酒を酌みあふ。杯のとりやりして酒を飲む。(獻酬)。

†くみ-かみ(名) 「くびかみ」に同じ。

くみ-かみ［組髮］(名) 組みて結(ユ)ひたる髮。

くみ-がみ［組紙］(名) 色紙を細く切り、縱横に組みて布帛の縞模樣等を作る遊戲。

くみ-こ［組子］(名) 組の手下。くみした。

くみ-こみ［組込］(名) くみこむこと。

くみ-こみ［汲込］(名) くみこむこと。

くみ-こ・む［組込］(他、ま四) ㊀くみいる。㊁とりつきくむ。ひきくむ。

くみ-こ・む［汲込］(他、ま四) くみいる。

くみ-し・く［組敷］(他、か四) 敵と引組みて、これを下に押へ敷く。

くみ-した［組下］(名) 組頭の下に支配せらるゝ者ども。くみこ。部下。配下。

くみ・す［與］(自、さ變) ㊀共同して爲す。㊁つれ立ちて行く。㊂なかまとなる。ひとくみとなる。(黨)。㊃可として從ふ。「人言に―」。㊄助勢となる。力をかす。「勝者にくみせず」。㊅親密にす。志たしむ。「膽を以て相―」。㊆關係す。かゝはる。「歳月吾にくみせず」。

くみ-だし［汲出］(名) ㊀くみだすこと。又、くみだしたるもの。㊁「かたてをけ」の異稱。

くみ-だ・す［汲出］(他、さ四) ㊀汲(ク)みて外へうつす。㊁くみはじむ。

くみ-た・つ［組立］(自、た四) 組みて出來上がる。かまへなる。なりたつ。

くみ-た・つ［組立］(他、た下二) ㊀組みてこしらへ上ぐ。かまへつくる。㊁くみはじむ。

くみ-たて［組立］(名) ㊀組み立つること。㊁組み立つる規模又は方法。かまへ。(構成)。㊂くみはじむること。くみはじめ。

くみ-たて［汲立］(名) 汲(ク)みてより時間をへぬこと。汲みて間の無きこと。

くみ-チンキ［苦味丁幾］(名) 橙皮などを以て製造したる「チンキ」、味苦し。健胃劑として用ひらる。

くみ-てがた［組手形］(名) 紛失若しくは延着等を慮りて、作成したる二通若しくは三通の連續せる同番號又は同日附の手形。

くみ-てんじやう［組天井］(名) 格子形に作りたる天井。

くみ-とり［汲取］(名) 汲(ク)みとること。

くみ-と・る［汲取］(他、ら四) ㊀汲(ク)みて上ぐ。汲みて分く。㊁推察す。酌量す。おしはかる。おもひやる。「人の心を―」。

†くみ-の-を［組緒］(名) 太刀(タチ)などに付くるさげを、組絲にて編みたるもの。

くみ-ひも［組紐］(名) 絲にて組みたる紐。くみを。

くみ-やしき［組屋敷］(名) 昔時、同一の階級なる武士が一組になりて住みし屋敷の稱。

†くみ-れ［組入］(名) 「くみいれ」㊀に同じ。

くみ-わ・く［汲分］(他、か下二) ㊀汲(ク)みて分く。㊁酌(ク)みとる。おもひやる。

くみ-わけ［汲分］(名) ㊀汲みて分くること。㊁おもひやり。同情。

くみ-を［組緒］(名) 組みたる紐。くみひも。

(く-みん［區民］(名) 其區に住む人民。

(ぐ-みん［愚民］(名) おろかなる人民。無智の民。

く・む［組］(自、ま四) ㊀仲間になる。くみになる。くみす。㊁己の體を寄せ手を敵の體にかく。くみうちをなす。とりくむ。「敵と―」。

く・む［組］(他、ま四) ㊀細長き物を絡(マト)ひ又は結る。あむ。あざなふ。「籠を―」。「紐を―」。㊁かれこれ相交叉せしむ。うちちがひにす。(交)。

く・む［汲］(他、ま四) ㊀水などを分け取る。㊁推量す。おもひやる。おしはかる。「其心をくんでやる」。㊂杯に入れて飲む。酒を飲む。「酒を―」。(酌、斟)。

(く-めい［軀命］(名) からだといのちと。「―を國家に掛ぐ」。

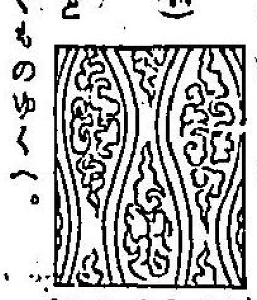
(く-めい［苦茗］(名) わるき茶又はにがき茶。

†くめ-べ［久米部］(名) 上古久米氏に屬したる武人。(來目部)。

く-めん［工面］(名) ㊀算段。工夫(クフウ)。さいかく。㊁ぎんだい。ぎんぎやう。「―が惡い」。

くも［雲］(名) ㊀大氣の上層に浮遊せる細微の水滴。㊁行衞の定めなく又は形跡の分けがたき物事にいふ語。「はかなくも―となりぬる物ならば」。㊂高き場所又は高き階級。「―つくばかりの大漢」。㊃

—さなりあめとなる「爲ゝ雲爲ゝ雨」 男女夫婦の情愛の互に極めて睦じきにいひ、又、人情の輕薄にして變り易きにもいふ。 —をしのぐ［凌ゝ雲］ 雲の上に出づる義にして、高く聳ゆるさまにいふ。 —をつかむ あてどの極めて空漠なるにいふ。 —をつく 高くして雲をつくほどなる意にいふ。
くも［蜘蛛］（名） ［動］蜘蛛類に屬する節足動物、體軀は頭胸部と腹部とより成りて殆ど甕狀をなす、口に二對の顎ありて、上顎は二節より成り、其末節鉤狀をなし、尖頭に毒腺の孔を開く、胸部に四對の歩脚を有す、腹部の後端に肛門あり、其前にある數個の疣(イボ)の微細なる孔より、蜘蛛絲を出し、かけ渡して網を造り、これによりて昆蟲をかけ捕へて其血液を吸ふ、あしたかぐも・女郎ぐも・ひらぐも・まるぐも・つちぐも等種類多し。さゝがに。（杜公、蟵蛛）。
くも-あし［雲脚］（名） ㊀雲の浮遊するありさま。㊁雨を含める雲の垂れて見ゆるもの。「—が下がる」。㊂屈曲して雲の形をなす脚のある案(ツクヱ)。
（ぐ-もう）［愚蒙］（名） おろか。（愚昧）。
くも-がく・る［雲隱］（自、ら下二） ㊀雲に隱る。㊁去りて見えなくなる。㊂貴人の死去にいふ。
くも-がくれ［雲隱］（名） くもがくるゝこと。
くも-がた［雲形］（名） 雲のたな引きたる形を描(エガ)きたる模樣又は彫刻。「—定規」。
くも-がみ［雲紙］（名） とりのこ紙の一種、雲の模樣を現したるものにして、多くは連歌又は俳諧の懷紙などに用ふ。
くも-きれ［雲切］（名） くものたえ間。
（く-もじ）［韮文字］（名） つけ菜。（婦人の語）。
くも-すけ［雲助］（名） 昔時、驛路に徘徊して、駕籠(カゴ)を舁(カ)き又は賤役に從ひたる住所不定の者。
くも-すだれ［雲簾］（名） 月なかくす雲をすだれにたとへいふ語。
くも-たちわき［雲立涌］（名） 雲のさまを描(エガ)きたる模樣。


［くもたちわき］

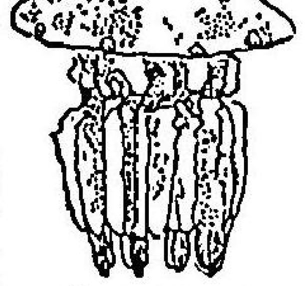
くも-ぢ［雲路］（名） ㊀鳥などの翔(カケ)り行く空中の路。㊁くものゆくへ。
（く-もつ）［供物］（名） 神佛に奉る供へ物。そなへもの。
くも-で［蜘手］（名） ㊀蜘蛛(モク)の足の如くに、物の交叉したる狀態。「水—に流れて」。㊁材木を交叉してつくりたるもの。㊂種々にうち亂れたるさまにいふ語。「—にものを思ふ」。㊃擊劍にて、刀を八方にうちちがへに使ふこと。㊄やり遊ひに十文字に組みたる油皿又は手水(テウヅ)鉢などの臺。 —のはし［蜘手橋］（名） 池の上などに縱横左右さまぐ\に架(カ)けたる橋、三河國の八つ橋の類。
卄くも-とり［雲鳥］（名） 雲と鳥との模樣ある綾の布。「—の、綾の色をも思ほえず」。
くも-の-あし［雲脚］（名） 雲の動き行くさま。
くも-の-い［蜘蛛網］（名） 蜘蛛(モク)のかけわたしたる絲の巣。（蛛絲）。
くも-の-いと［蜘蛛絲］（名） 蜘蛛の肛門の前にある疣(イボ)の孔より出づる粘液、大氣に觸るれば忽ち固體となりて絲狀をなす、これをかけ渡して蜘蛛網(クモノイ)をつくる。
くも-の-うへ［雲上］（名） ㊀浮遊せる雲の上。又、最も高き所。㊁禁中。 —びと［雲上人］（名） 禁中の人。うんかく。殿上人。
くも-の-かけはし［雲梯］（名） ㊀深山などに雲を凌(シノ)ぐばかりに掛け渡したる橋。「木曾の—」。㊁大内にあるかけ橋。㊂敵の城壁などへのりこむための大いなるかけ橋。
くも-の-す［蜘巣］（名） くものい。（蜘蛛網）。
くも-の-なみ［雲波］（名） 波の如きさまをなす雲。
卄くも-の-はたで［雲旗手］（名） ㊀雲の形の旗のなびくが如く見ゆるもの。㊁雲のきはみ。雲のはて。「—までひゞきのぼるこゝちするに」。
くも-の-はら［雲原］（名） 雲のひろくたな引きわたりたるさまにいふ語。
くも-の-まがき［雲籬］（名） たな引く雲を籬(マガキ)にたとへいふ語。
卄くも-の-みなと［雲湊］（名） 雲のあつまりたるさまにいふ語。
くも-の-みね［雲峯］（名） 夏の空に雲立ちて、峯の如くに見ゆるもの。
くも-はく［雲箔］（名） たな引く雲の如くにおきたる箔。
くも-はなれ［雲離］（名） ㊀遠く〜離るゝこと。㊁くもきれ。
くも-ひたひ［雲額］（名） 芝居にて用ふる一種の鬘(カツラ)。
くも-ま［雲間］（名） ㊀雲の切れたるあひだ。㊁晴れ間。
くも-みづ［雲水］（名） ㊀雲と水と。㊁行く方の定まらざること。うんすゐ。
くも-ゆき［雲行］（名） ㊀雲の行くさま。㊁事の成り行き。
卄くもらは・し［曇］（形、二） ㊀曇(モク)りたる樣なり。㊁おぼろなり。不分明なり。
くもり［曇］（名） ㊀雲の出づること。くもること。「雨ぐもり」。（陰）。㊁色又は光などのおぼろとなること。「鏡の—」。㊂うたがひ。嫌疑。「身の—がはれぬ」。㊃はれぐ\せざること。又、うれひふさぐこと。「胸の—」。 —び［曇日］（名） 空のくもれる日。 —よ［曇夜］（名） 空のくもれる夜。

くも・る［曇］（自、ら四） ㊀雲空を立塞(フサ)ぐ。空にかげ生ず。「空が—」。（陰）。㊁色又は光などおぼろとなる。くらむ。「鏡が—」。㊂はれぐ\せず。うれひふさぐ。「聲—」。「心—」。
くも-ゐ［雲居］（名） （普通には聖井と書く） ㊀雲の在る場所。そら。「—を渡る雁の聲」。㊁遥き場所。「—の家」。㊂こゝのへ。くものうへ。（禁裏）。 —ぢ［雲居路］（名） くもぢ。
（く-もん）［苦悶］（名） なやみもがくこと。うれひまどふこと。くるしみもだゆること。
（く-もん）［公文］（名） ㊀官府より發する文書。布達。㊁公文所の役人。 —じよ［公文所］（名） 鎌倉幕府の政令を出し、役所、後に政所(マンドコロ)と改稱したり。
（く-やう）［供養］（名） 死人の靈又は佛などに、物などを供へて回向(ヱカウ)すること。
（く-やく）［公役］（名） 官府より人民に課する夫役。「夫役等」。
（く-やく-しよ）［區役所］（名） ㊀北海道又は沖繩縣の區にて、其區長が行政事務をとりあつかふ所。㊁市又は町村の區にて、其區に於て委託せられたる事務をとりあつかふ處。
くや・し［悔］（形、二） うらみ多し。ざんねんなり。くちをし。
くやし・む［悔］（他、ま四） くやむ。
卄くや・す［崩］（他、さ四） 崩(クヅ)しおとす。こはす。くづす。
くやみ［悔］（名） ㊀くやむこと。後悔。㊁死を弔(トム)ふこと。又、其弔ふことば。（弔）。
くや・む［悔］（自、ま四） ㊀くゆ。㊁人の死を傷みて弔ふ。
（く-ゆ）［苦窳］（名） 器物のゆがみ又はきず。
卄く・ゆ［崩］（自、や下二） くづる。
く・ゆ［悔］（自、や上二） 自ら既往の過を悟る。自ら前日の行を恨(ウラ)む、後悔す。くやむ。
くゆらか・す［燻］（他、さ四） くゆらす。
くゆら・す［燻］（他、さ四） けぶりをたゝす。ふすぼらす。ふすぶ。「烟草を—」。
くゆ・る［燻］（自、ら四） 燃(モ)えて烟立つ。ふすぼる。
卄くよ-くよ（名、副） 絶間(タエマ)なく思案に沈むさまにいふ語。「つまらぬ事を—思って」。
くら［倉］（名） 財物を納めおくための建設物。（倉庫）。
くら［鞍］（名） 人又は荷を乘(ノ)するために、馬又は牛などの背の上におく具、其種類多し。
くら［座］（名） ㊀物を載する處。又、物を載する臺。㊁すわる場所。席。「かみ—」。「み—」。
卄くら［樂］（名） （樂の字をさかさに讀める隱語） 千秋樂。「興行が—になる」。
卄—くら［競］（接尾） （競(クラ)べの略言） あらそふこと。きそふこと。「あるき—」。
くら-いり［藏入］（名） くらの中に入ること。（庫入）。
くら-いれ［藏入］（名） 貨物をくらの中へ納めこむこと。（庫入）。
（く-らう）［苦勞］（名） ㊀身を苦しめ骨を折ること。㊁こゝろづかひ。心配。「親に—を掛けまいため」。（劬勞）。 —しやう［苦勞性］（名） 些細の事をも氣にかけて心配する性質。 —にん［苦勞人］（名） しんくを經過してよく人情に通じたる人。
（ぐ-らう）［愚老］（代） 老人自らの謙稱。
卄くら-うづ［藏人］（名） 「くらうど」の轉。
くら-うつし［藏移］（名） 一の倉庫に入れおきし貨物を、他の倉庫へうつしかふること。
卄くら-うど［藏人］（名） （藏人(クラヒト)の音便） 古昔、校書殿(ケウシヨデン)の書籍を掌りたる職名、後には天子の御前に侍して政治にもあづかりたり。くらんど。 —とう［藏人頭］（名） 藏人所にありし職名、二人ありて頭中將(トウノチウジヤウ)・頭辨(トウベン)といひたり。 —どころ［藏人所］（名） 藏人の事務を行ふところ。 —の-ごゐ［藏人五位］（名） 藏人を四年務めて五位となりたるもの。
クラウン［Crown］（名） 西洋にて冠又は戴冠頭の印象ある錢貨の名、「イギリス」國の「クラウン」は銀貨にして五「シリング」相當なり。
クラウン-ガラス［Crown glass］（名） ［化］「カルシウム」「ナトリウム」の酸鹽より成る「ガラス」、板「ガラス」其他普通の器具を製するに用ふ。「ソーダ、ガラス」。
くら-おき-うま［鞍置馬］（名） 背に鞍をおきたる馬。
くら-おき-どころ［鞍置所］（名） 馬の背に鞍を置くべきところ。
卄くら-おほひ［鞍覆］（名） 馬におく鞍をおほふに用ふるもの。馬氈(バセン)。
卄くら-がへ［鞍替］（名） 藝妓又は娼妓などのかせぐ場所を轉ずること。
くら-かけ［鞍掛］（名） 鞍を懸けて置く臺。 —まめ［鞍掛豆］（名） ［植］志ろまめの一種、其形恰も馬に鞍を置きたる狀に似たるより此名あり。（扁眼黄）。
くら-がり［暗］（名） くらくなること。くらき部分。やみ。（闇）。
くらが・る［暗］（自、ら四） くらげになる。「(さ)になる」。闇。
（く-らく）［苦樂］（名） くるしみとたのしみと。苦と樂と。 —をともにす［共苦樂］ 同心共力して事をなし行ふ。

くら-くら（名、副）㊀眼のまはるさまにいふ語。「目が—す」。㊁流動體の沸き立つさまにいふ語。「湯が—煮える」。

〔ぐら-ぐら（名、副）㊀物事の堅固ならずしてよく動搖するさまにいふ語。「杙が—動く」。㊁「くらくら」に同じ。

くらげ［水母］（名）㊀【動】海面に浮游する一種の腔腸動物、形は鐘狀若しくは傘狀をなし、寒天質にして強直ならず、緣に數多の觸手あり、裏面の正中に口ありて周圍には美麗なる總房あり、種類多し。（海月）。㊁筋肉發達せずして自ら體軀を支（サ）ふること能はざる人。



〔くらげ（一）〕

くらさ［暗］（名）くらき度合。

くらし［暮］（名）㊀時をすごすこと。くらすこと。㊁すぎはひ。なりはひ。くちすぎ。活計。

くら-し くしけれ［暗］（形、二）㊀光無し。あきらかならず。やみなり。㊁智識乏し。熟錬せず。おろかなり。つたなし。「くらき心」。

くら-しき［鞍敷］（名）鞍の上に敷く布。うはしき。

くら-しき［倉敷］（名）他人の倉庫に荷物を寄託するために支拂ふ報酬。

くら-しし［鞍鹿］（名）【動】「かもしし」の一名。

くら-した［鞍下］（名）牛馬などの背の鞍の下になる所。又、其所の肉の稱にして、食用として賞美す。

クラシック［Classic］（名）㊀古典。古文。㊁擬古に傾き、客觀を主とし、格式の整齊・義理の明白等を重んずる文藝上の傾向。

くらし-むき［暮向］（名）活計のありさま。

くら-しり［座尻］（名）しもざ。末座。

くら-しり［鞍尻］（名）牛馬の鞍のうしろ。

くら-しろ［倉代］（名）「くらしき（倉敷）」に同じ。

くら-す さしすすせせ［暮］（他、さ四）㊀日の暮るゝまでの時間を過ごす。「日を—」。㊁年月を送る。

くら-す さしすすせせ［暮］（自、さ四）生計を營む。くらしを立つ。

くら-す さしすすせせ［暗］（他、さ四）くらくす。

くら-ずれ［鞍擦］（名）牛馬などの背の、上におく鞍のためにすれやぶれたるあと。

†くら-づかさ［藏司］（名）古昔、中務省の所屬にして、禁中の調度寶物等に關する一切の事をとりあつかひし役所。

ぐら-つ-く かきくくけけ（自、か四）㊀動搖す。うごく。ゆるぐ。㊁ぐるめく。

くら-つぼ［鞍坪］（名）鞍のまへわとしづわとの間、即ち人の乘る所。又、馬術にて身を鞍の前か又は後かに少しくよりてもたるゝこと。（鞍局）。

くら-に［倉荷］（名）倉庫にいれおきたる物品。—しようけん［倉荷證券］（名）倉庫業者が物品寄託者の請求により、其寄託物に對して發する證券、預證券と質入證券との二あり、共に一定の法式に從うて作成するものにして、其寄託物處分はすべて此證券によりてこれをなし、其返還の請求もまたこれと引換にあらざればなすことを得ず、此證券により現品を動かさずして自由に讓渡又は質入等をなし得、又、此證券は裏書によりてこれが讓渡をなすことを得。—しようしよ［倉荷證書］（名）前條に同じ。

くら-の-かみ［內藏頭］（名）㊀†古昔のくらづかさの長官。㊁內藏寮の長官。

くら-の-すけ［內藏助］（名）內藏寮の次官。

†くら-の-つかさ［藏司］（名）「くらづかさ」に同じ。

くら-は-す クラ サス［さしすすせせ］［食］（他、さ四）㊀食せしむ。くはす。㊁誘（イザ）ふために利益をあたふ。（啗）。㊂與ふ。加ふ。「げんこを—」。㊃打擲す。なぐる。

くら-ばん［藏番］（名）藏（クラ）の番をつとむる人。

〔くら-ひ-と-む クラ［まみむむめめ］［喰込］（自、ま四）捕へらる。からめらる。牢に入る。（博徒などにいふ）。

くら-びらき［藏開］（名）新年に吉日を選み、始めて倉庫を開くこと。「質屋の—」。

くら-ふ クラウ［はひふふへへ］［食］（他、は四）㊀くふ。食す。㊁くひ物となす。「子を易へてこれを—」。㊂生活をなす。くらす。「遊んで—」。㊃飲む。「酒を—」。㊄被る。受く。「げんつくを—」。

クラブ［Club］（名）會。組合。（倶樂部）。

クラブ［Clover］西洋骨牌（カルタ）の札の名、三裂せる葉の形を黑く描（ヱガ）きたるもの。

くら-ぶ べぶぶるれよ［比、較］（他、は下二）㊀合はせ見てちがひをはかる。てらし合はせて相違を見る。㊁きそふ。はりあふ。（競爭）。㊂てらしあはす。ひきあはす。（引照）。㊃ならぶ。「自ら古の高士に—」。（比擬）。

くら-ぶね［藏船］（名）つなぎおきて、中に物ををさめおく船。

くら-べ［比、較］（名）㊀くらぶること。ひかく。㊁きそひ。きやうそう。（競）。㊂てらしあはせ。ひきあはせ。㊃ならび。なみ。†—うま［比馬］（名）古昔、五月の節句に行はれし加茂の競馬。—ぐるし しくしけれ［比苦］（形、二）苦惱の思案に迷（マヨ）ふ。—る［比］（他）「くらぶ」の訛。

くら-ぼね［鞍骨］（名）鞍のまへわ及しづわの稱。（鞍橋）。

くら-まい［藏米］（名）藏（クラ）にある米。庫米。—とり［藏米取］（名）德川時代に、淺草の倉庫より扶持米を受取りし旗下（ハタモト）御家人（ゴケニン）などの稱。

くら-まぎれ［暗紛］（名）やみに紛（マギ）るゝこと。

くら-ま-す さしすすせせ［暗］（他、さ四）認（ミト）め得ざるやうにす。くらくす。「跡を—」。（晦）。

くら-む まみむむめめ［暗］（自、ま四）㊀くらくなる。くらがる。（晦）。㊁目がまはる。くるめく。（眩）。

グラム［瓦＝Gramme］（名）重量の單位、我國の二分六厘十七毛弱に當る。—ぶんし［瓦分子］（名）【化】物質の一分子量を瓦（グラ）にて表したるもの、酸素の三十二瓦は其一瓦分子にして、水の十八瓦は其一瓦分子なるが如し。—カロリー［瓦＝Gram caloric］（名）【理】熱量の單位、一瓦の淸水が、攝氏の零度より一度まで昇るに要する熱量。

くら-め［暗目］（名）くらがり。やみ。

くら-めつけ［藏目附］（名）倉庫のめつけ役。

くら-やく［藏役］（名）㊀倉庫の役人。㊁倉庫の租稅。

くら-やしき［藏屋敷］（名）㊀米ぐらのあつまりある處。㊁德川時代に、諸國の大名が、大阪に設けおきし倉庫の稱、領內の米穀の賣捌に附するものを、廻送してこれに入れおけり、後には他の國產の賣捌をも、此處にて扱はしめたり。

くら-やど［藏宿］（名）㊀倉代をとりて貨物を倉に納れおかする所。㊁「ふださし」の一名。

くら-やみ［暗闇］（名）㊀くらきこと。くらきところ。㊁亂れて理（ヲサ）まらざること。「旦那が死にて內は—」。

くらら［苦參］（名）【植】荳科に屬する草、葉は羽狀複葉にして花は單總狀花序に排列し、白黃綠色なり、根は藥用に供し、莖葉の蒸汁は菜蔬の驅蟲劑に用ひられ、又、莖の皮より纖維を採る。

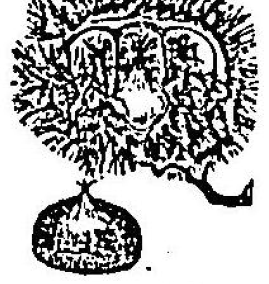
くら-れう ヨリウ［內藏寮］（名）㊀†くらづかさに同じ。㊁宮內省の一部局、皇室の經費及其主管に屬する財產會計を管理するところ。

くら-ゐ［位］（名）（座居の義）㊀至尊のおはします處。㊁國家を統治する地位。君位。「—をうばふ」。㊂昔時、朝廷に於ける者座の高下の標示、親王は品（ホン）といふ（品の條を見よ）、諸臣のは一位より八位初位まで各正と從とあり、四位以下は別に上と下とありて（例へば從五位上又は從五位下などといふが如し）、總數三十階ありたり。㊃現今、華族及勅・奏任官又は國家に勳功若しくは表彰すべき功績あるものを叙せらるゝ表章、一位より八位に至るまで、各正と從とありて、都合十六階あり、從四位以上は宮內大臣これを奉じ、正五位以下は宮內大臣これを宣す。㊄官職の地位。「其—にあり其祿をはむ」。㊅【數】數を表はすため十倍每に附する名稱、即ち、一・十・百及分・厘・毛等これなり、一より九までを一の位といひ、十より十九までを十の位といひ、百より九百までを百の位といふ、これ以上類推すべし、又、九分より一分までを分の位といひ、九厘より一厘までを厘の位といひ、九毛より一毛までを毛の位といふ、以下類推すべし。㊆すべて物事の品等又は優劣の稱。〔—だふれ オレータ［位倒］（名）位階の徒に高くして、實利のこれに伴はざること。—どり［位取］（名）㊀數の位をとり定むること。㊁轉じて、品等又は優劣。「彼と此とは—がちがふ」。—くらゐ［位］（接尾）ほど。だけ。「あの—」。

くら-んど［藏人］（名）「くらうど」に同じ。

†くり［涅］（名）（黑の古言）㊀水中の黑き土、黑き色を染むるに用ふるもの。㊁くろ。黑色。

くり［栗］（名）㊀【植】殼斗科に屬する木、長橢圓狀披針形にして緣に鋸齒あり、花は單性雌雄同株にして、花穗は穗狀なり、果實は堅果にして長き刺の密生せる殼斗に包まれ、熟すれば殼斗裂開して內より果實を出だす、果實は食用に木材は種々の用に供せられ、又、樹皮及殼斗は染料に供せらる。㊁「くりいろ」の略言。「—毛」。



〔くり〕

（くーり［庫裏］（名）寺院のだいどころ。「今は—までも覗くほどに心を許され」。（寺廚）。

ぐ-り［屈輪］（名）堆朱（ツイシユ）の模樣の渦（ウヅ）の如く又は唐草の如きもの。

くり-あ-ぐ げげぐぐるれげよ［繰上］（他、か下二）㊀次第に送り上ぐ。「組を—」。㊁繰りをはる。

くり-あげ［繰上］（名）くりあぐること。—る［繰上］（他）「くりあぐ」の訛。

くり-あは-す サス［せせすするすれせよ］［繰合］（他、さ下二）㊀絲などをくりて合はす。㊁さしくる。やりくる。

くり-あはせ ワセ［繰合］（名）くりあはすること。

くり-アン［栗餡］（名）栗の實にてこしらへたる餡（アン）、餡の上品なるもの。

くり-いし［栗石］（名）小さき石。

くり-いだし［繰出］（名）くりいだすこと。

くり-いだ-す さしすすせせ［繰出］（他、さ四）㊀細長きものを次第に引き出す。㊁順に出す。次第に行（ヤ）る。「軍兵を—」。㊂槍などを手許へ引きてまた突き出す。㊃たびたび支出す。「資本を—」。

くり-いも［栗芋］（名）㊀【植】「はすいも」の一名。㊁栗の如く味のよきさつまいも。（栗薯）。

くりい・る[繰入](他、ら下二) 漸次に入る。「絲を―」。
くりいれ[繰入](名) くりいるゝこと。〔―る〕[繰入](他) 「くりいる」の訛。
くりいろ[栗色](名) 栗の果實の皮の如き黑ばみたる茶色。赭黑なる色。
くりうめ[栗梅](名) 濃(コ)き栗色。
くりかた[栗形](名) ㊀刀の鞘(サヤ)の鍔許(ツバモト)近き所に附くるもの、孔ありてこれに下緒(サゲヲ)を通す、其形半圓狀にして栗の實に似たるより此名あり。㊁栗の實の形。
くりかは[栗皮](名) ㊀赤黑色の革。㊁「くりかはちや」の略言。―ちや[栗皮茶](名) 赤黑色を帶びたる茶色。
くりか・ふ[繰替](他、は下二) さし繰(ク)りて都合をつく。都合によりて換(カ)へ用ふ。
くりかへ[繰替](名) くりかふること。「―金」。
くりかへ・す[繰返](他、さ四) 同じ事を數度なす。反覆す。
〔くりかへる[繰替](他) 「くりかふ」の訛。
クリカラ[倶梨伽羅](名) (梵語、Krkara)劍を黑龍の纏(マト)ふ圖、劍は不動尊が右の手に持つもの、龍は其左の手に持つ繩の變體としたるものにして、不動尊の三摩耶形をあらはしたるもの。〔―もんもん[倶梨迦羅紋紋](名) 博徒などが背部に箚(ホリモノ)したる倶梨伽羅などの圖の稱。

[クリカラ]

くりがんな[刳鉋](名) 孔を彫(ホ)るに用ふるかんな。(曲鉋)。
〔くりき[功力](名) ちから。いさを。ゑるし。
〔くりき[苦力](名) (「クーリー」(Coolie)の轉) 賤しき勞働に從事するもの。人夫(ニンプ)。
〔くりくり(名、副) ㊀よく廻轉するさまにいふ語。「―まはる」。㊁まろやかなるさまにいふ語。「―と肥えてゐる」。〔―ばうず[―坊主](名) きれいに頭髮を剃(ソ)り去りたること。又、其頭顱。(圓顱)。
ぐりぐり[屈輪](名) 「ぐり」に同じ。
〔ぐりぐり(名) 病氣により身體の關節の皮膚内に、生ずる凝(コ)り固まりたるもの。
〔ぐりぐり(名、副) ㊀肱(ヒヂ)などの先にて、他の身をもむさまなどにいふ語。㊁「くりくり」に同じ。
くりげ[栗毛](名) 馬の毛色、栗色にて鬣(タテガミ)の黑きもの。(騮)。
くりこし[繰越](名) くりこすこと。「―の決算」。―だか[繰越高](名) 前よりくりこしたる高。
くりこ・す[繰越](他、さ四) 次第を追ひて次へ送りやる。
くりごと[繰言](名) くりかへして同じ事をいふこと。又、其言。
くりこみ[繰込](名) くりこむこと。
くりこ・む[繰込](他、ま四) ㊀細長きものを次第に引き入る。㊁つぎ〳〵に入る。だん〳〵にいる。
くりさ・ぐ[繰下](他、か下二) 次第に下へ送りやる。
くりさげ[繰下](名) くりさぐること。〔―る〕[繰下](他) 「くりさぐ」の訛。
クリストけう[基督教](名) =Christianity 「キリストけう」に同じ。
クリスマス[Christmas](名) 耶蘇の降誕を祝するための祭、毎年十二月廿五日に行ふ。(耶蘇降誕祭)。
グリスリン[Glycerine](名) 【化】「グリセリン」に同じ。

グリセリン[Glycerine](名) 【化】脂肪又は脂油より製出する無色の結晶體、普通販賣するものは、水其他の雜物を含み無色の粘液をなし甘味を有す、藥用又は工業用に廣く用ひらる。
グリセロル[Glycerol](名) 【化】「グリセリン」に同じ。
くりそめ[涅染](名) 黑く染めたる色。(皁)。
くりたけ[栗茸](名) 一種の菌類、山野に生ず、其高さ一寸許、傘は四五分許にして、形圓く色白く、栗の實の肉に似る。
くりだし[繰出](名) くりだすこと。
くりだ・す[繰出](他、さ四) くりいだす。
クリケット[Cricket](名) 一種の遊戲、木の球を長き柄の撞木(シユモク)樣のものにて打ち、鐵線を曲げてつくりたる小さき門をくゞらせて、勝負を爭ふもの。
くりのべ[繰延](名) ひのべ。延期。
くりバチ[刳鉢](名) 木を刳(ク)りてつくりたる鉢。
くりびき[繰引](名) ㊀軍勢を次第に引き上ぐること。㊁長き繩などを次第にたぐり引くこと。
くりまはし[繰廻](名) くりまはすこと。さしくり。
くりまは・す[繰廻](他、さ四) 順序よく運轉す。都合よく運轉す。
くりめし[栗飯](名) 皮をむきたる栗の實を入れてたきたる飯。
くりもどし[繰戻](名) くりもどすこと。
くりもど・す[繰戻](他、さ四) ㊀順を追ひて返却す。㊁くりかへす。
くりや[廚](名) (黑(クリ)屋の義といふ)食物を料理する所。みづしどころ。臺所。(庖廚)。―びと[廚人](名) くりやの事をつかさどる人。れうりにん。
卄―め[廚女](名) みづしめ。下女。
くりヤウカン[栗羊羹](名) 栗の實をすりつぶしてこしらへたる羊羹。

くりわた[繰綿](名) 木綿(キワタ)の實を車に掛け、核を取り去りたるのみにて、未だ精製せざるもの。
〔くりん[九輪](名) 塔の屋根の上に輪の形の九層かさなりたるもの。
ぐりんだま[屈輪玉](名) 玉の如くまろきもの。
卄くる[樞](名) 「くるゝ」の略言。「むらたまの、―にくぎさしかためてし」。
〔ぐる[痀瘻](名) せむし。
く・る[繰](他、ら四) ㊀順次に引き出だす。㊁次第に送りやる。㊂細長きものを、物にまきつけて引き出す。「絲を―」。㊃わたくりにかけて綿花の種子を去る。「綿を―」。㊄順に數へて行く。
く・る[刳](他、ら四) 器械をまはして物を穿(ウガ)つ。えぐる。はる。「穴を―」。(剖)。
く・る[暮](自、ら下二) ㊀日沒してあたり暗くなる。夜になる。㊁をはる。はつ。㊂心迷ふ。眼明かならず。「途方に―」。「涙に―」。
く・る[眩](自、ら下二) 眼くらむ。
く・る[呉](他、ら下二) あたふ。遣(ヤ)る。つかはす。「物を―」。(與)。
くる[來](自) きたる。く(來)の轉訛。
〔ぐる(名) あひぼう。なかま。(惡だくみなどにいふ)。「―てだまかす」。
クルークスくわん[―管](名) =Crookes' tube 【理】硝子の管に白金線を入れ管内の空氣を排出したるもの、其白金線に感應起電機の第二「コイル」の導線を絡(ツ)ぎて電流を通ずれば、陰極より放射線を發し螢光を放つ。
卄くるくさ[大青](名) 藥劑の翠藍の葉。
〔くるくる(名、副) ㊀物事のとゞこほりなきさまにいふ語。㊁よく回轉するさまにいふ語。「―まはる」。㊂ものに幾重にも卷きつくさまにいふ語。

〔ぐるぐる(名、副) くる〳〵を稍や強めていふ語。「―廻る」。
くる・し[苦](形、二) ㊀身體なやまし。心中なやまし。いたまし。つらし。㊁處置しがたし。あつかひむづかし。㊂こゝろづかひなり。きがねなり。「―からずば通下さい」。―さ[苦](名) くるしき度合。―まぎれ[苦紛](名) くるしさのあまりになすこと。
くるしみ[苦](名) くるしむこと。なやみ。なんぎ。「苦惱」。
くるし・む[苦](自、ま四) ㊀痛み惱(ナヤ)む。悶(モダ)へ煩(ワヅラ)ふ。なやむ。いたむ。㊁こゝろづかひす。きがねす。㊂處理に窮す。こまる。㊃心力を盡くして爲す。ほねをる。
くるし・む[苦](他、ま下二) 苦しましむ。いぢめる。こまらす。たしなむ。(窘)。
〔くるしめる[苦](他) 「くるしむ」の訛。
クルップはう[―砲](名) =Krupp gun 「ドイツ」國「クルップ」會社にて製造する後裝砲、千八百六十年頃に「ドイツ」人「クルップ」が鋼鐵を以て砲身を製造せしに起因し、爾來幾多の改良を經て今日の製となる、砲身を鋼鐵製となすは、これに創まれり。
グルテン[Gluten](名) 【化】小麥粉を綿布の袋に入れ、水中に於て揉(モ)み澱粉を流出せしめたる跡に殘留せる粘質物、燒麩(フヤキ)の原料なり。
くるはか・す[狂](他、さ四) くるはす。
くるはし[狂](名) くるはすること。
くるは・し[狂](形、二) くるひたるさまに見ゆ。
くるは・す[狂](他、さ下二) くるふやうにす。常にたがはす。「時計を―」。

〔くるはせ[狂](名) 「ぱんくるはせ」に同じ。
くるひ[狂](名) くるふこと。みだれ。たがひ。「土臺に―生ず」。―ざき[狂咲](名) 花の時ならぬ節に開くこと。又、くるひ花。―ばな[狂花](名) くるひざきの花。
くる・ふ[狂](自、は四) ㊀正しきもの亂る。常を失す。㊁烈しく運動す。秩序なく行動す。㊂病氣により精神錯亂す。發狂す。きちがひとなる。㊃ねらひ外(ハ)る。まとを誤る。「手許くるひて」。
くるぶし[踝](名) 脛と足首と相聯がる處に高くなりたる骨。
卄くるべか・す(他、さ四) 物をくる〳〵回轉せしむ。(廻轉)。
卄くるべき(名) 絲をくる道具。
卄くるべ・く(自、か四) くる〳〵廻轉す。(廻轉)。
卄くるほ・し[狂](形、二) 心の狂へるさまに見ゆ。狂氣じみてゐる。
くるま[車](名) ㊀輪に由りて運轉せしむる裝置の器械の總稱、牛車・馬車・荷車・自轉車・汽車・電車など其種類甚だ多し。㊁軸につらぬきて廻轉する裝置の輪、わ。㊂人力車の特稱。「―屋」。「―挽」。㊃わなり。輪狀。「―になつて酒を飲む」。―えび[車蝦](名) 【動】えびの一種、殼は平滑にして毛なく硬し、軸狀の突起は頭胸部の二分一を超え僅に彎曲す、其上緣に八個乃至十個其下緣に一個の鋸齒を有す、體色は青黑紅色若しくは淡褐色にして、體長大なるは八寸許に達す、我國諸方の沿海に產す、ゆでて又は煮れば全身濃紅色となる。(斑節蝦)。―がかり[車掛](名) 昔時の陣立、新手・二番手・三番手と順次に手を分けて、前者衰ふれば

[くるまえび]

後者これに代り、箭環して敵に攻め掛かると。——かへし[車返](名) [植]「きりがやつ」の一名。——ざ[車座](名) 多人數が輪の如くに圓形をつくり中を囲みて座すること。まとゐ。(圓居)。——ざき[車裂](名) 支那の古昔に行はれし刑罰。車を罪人の四肢に束縛し、車を驅(カ)りて罪人を引き裂き殺しゝと。(轘裂)。——じかけ[車仕掛](名) 器械に車の裝置あること。——せん[車錢](名) 人力車に乘りたるときに拂ふ賃錢。——ぞひ[車添](名) 昔時、公家の牛車につきて歩きし人。(從者)。——だて[車楯](名) 下に車を裝置して廻轉自由なるやうにつくりたる大いなる楯。——ちん[車賃](名)「くるません」に同じ。——ながもち[車長持](名) ながもちの一種。運轉を自由にするため、下に車輪を添へたるもの。——どめ[車止](名) 車の通行を禁ずること。——ひき[車引](名) 車を挽(ヒ)きて物又は人を送るを業とする人。くるまや。車夫。——へん[車偏](名) 漢字の偏の名。軒・轉・輻などの字の左方にある車の字。——や[車屋](名) ❶くるまひき。❷くるまを製造する家。又、其人。——やど[車宿](名) ❶くるまひきをかゝへ置きて人力車をそだつる家。——やどり[車舍](名) 前條(三)に同じ。——やどり[車宿](名) 貴族の邸の門内に車をいれおくために設けたる小さき建物。——ゆり[車百合](名) [植]ゆりの一種。葉輪く對生し、花瓣は大いに反捲せり。——よせ[車寄](名) 車を寄せて昇降すべき口。——ゐど[車井戸](名) 轆轤(ロクロ)の裝置に由り、釣瓶(ツルベ)綱を掛けて水を汲(ク)むべき井戸。

くるまき[轆轤](名) (轉卷の義)「ろくろ」の一名。

くるみ[胡桃](名) [植]胡桃科に屬する木。葉は漆に似て大きく、夏の頃、紅白色の細花を開く。果實は桃に似て核堅し、仁は料理又は菓子などに用ふ。(羌桃)。——いろ[胡桃色](名) ❶胡桃の核に似たる色。❷かされの色目、表は香色にして裏は青なるもの。(襲)。——やき[胡桃燒](名) 底々に凹(ヘコ)をつくりたる金屬の板に油を引き、其凹に溶(ト)かしたる饂飩(ウドン)粉を注ぎ入れ、又、其中に餡(アン)を入れて包み、ひき返して燒きたるもの。形胡桃に似たればいふ。

くるみ[包](名) くるむこと。つゝむこと。

—ぐるみ[包](接尾) 悉皆。ひきくるめて。のこらず。「骨ぐ—」。

くるむ[包](他、ま下二) ❶巻きつゝむ。包みまく。❷一つに括(ク)る。とりまとむ。「くるめて言へば」。❸巧にいひなす。巧に欺く。

くるめかす[轉](他、さ四) くる〳〵まはす。くるめかす。

くるめがすり[久留米絣](名) 筑後國久留米地方より出だす木綿織の絣(カスリ)。

サくるめく[轉](自、か四) ❶くる〳〵回る。回轉す。❷目まはる。目くらむ。めまひす。

(くるめる)[包](他) 「くるむ」の訛。

くるり[〓](名) 輕くして水に浮くやうにつくりたる矢。古昔、水鳥を射るに用ひしもの。(枝、鏑)。

(くるり)[轉](名) 「くるりぼう」の略音。——ぼう[轉棒](名) 「からざを」の一名。くるりくるり廻轉するより此名あり。

(くるり)[轉](名、副) ❶廻轉するさまにいふ語。「—と旋る」。❷變化するさまにいふ語。「—かはりて」。

(ぐるり)[周](名) めぐり。まはり。周圍。(圍)。——おとし[周落](名) 女の髪の結(ユ)ひ方、髷(マゲ)と髱(タボ)とを一つに出だしたるもの。

(ぐるり)[輟](名、副) 「くるり」に同じ。

サくるる[樞](名) ❶戸を開閉するために裝置したる機、即ち「とぼそ」と「とまら」との總稱。❷戸の桟。——ど[樞戸](名) くるゝを裝置しある戸。

くるわ[郭](名) (轉曲の義) ❶城市又は城砦などの周圍に廻らす土石のかこひ。又、周圍に土石のかこひを設けたる地。「二の—」。❷區域。又、かこひ。「さむらひ屋敷の—」。❸いろざと。遊里。「通ひの大門を」。——がよひ[郭通](名) 遊里へかよふこと。あそびにゆくこと。——ことば[郭語](名) 昔時、遊里にて遊女の特に使用せし俚語。

くれ[暮](名) ❶日の入らんとして、暗(クラ)くなる時。ひのいり。ゆふべ。❷歳月又は時期のすゑ。「年の—」「春の—」。❸餘命少なき時。末路。

サくれ[榑](名) ❶木材。「檜の—」「榲の—」。❷屋の中なかの柱。(榑)。

くれ[塊](名) かたまり。「土—」。

クレー[呉](接頭) 古昔、支那より渡來の物事に冠らせし語。「—藍」「—竹」。

サくれ[代](代) (是の轉)物事を確かに指定せざるときに用ふる語。「何—となく」。

グレーシャムのはふそく[—の法則 = Gresham's law](名) [經]「イギリス」國人「グレーシャム」が主張したる惡貨は良貨を驅逐すといふ原則、即ち品位重目を異にする貨幣に、同一の價格を付して流通せしむるときは、其貨價の如何に係らず同一に流通するが故に、貨價の低きもの多く市場に流通し、貨價高きものは、或は外に輸出せられ或は地金となして他に使用せらるゝといふ。

グレイン[Grain](名)「アヴォイルデュポイス」衡の單位。〇〇六四五、〇〇一七二八匁に當る。

(くれう)[苦寥](名) [植]「みかんそう」の一名。

クレオソート[Creosote](名) [化]「クレオソート」に同じ。

サくれがし[某](代) なにがし。

サくれがた[暮方](名) 日の暮るゝ時。ゆふべ。ゆふぐれ。たそがれ。(薄暮、黄昏)。

サくれくさ[錯](名)「きりぐさ」の古名。

くれぐれ[呉呉](副) ❶何となく心のこりするさまにいふ語。❷心に念を入るゝさまにいふ語。

グレゴリーれき[—暦 = Gregorian calendar](名)「ローマ」法皇「グレゴリー」十三世の制定せる暦、我國現時使用する太陽暦これなり。

クレたけ[呉竹](名) [植]古昔、呉の國より渡來せしものといふ竹の一種。葉細かく節多し、枝又は籠細工、格子などを造る料に供せらる。——の[呉竹](枕)「よ」「ふし」に冠する語。「—ふし見の世井の假の夜に」。

サクレつづみ[呉鼓](名) 呉樂に用ふるつゞみ。

クレなゐ[紅](名) (呉の藍の轉) ❶[植]「べにばな」の古名。❷べにばなの汁をもて染めたる赤き色。鮮明なる赤き色。「血あはの—」。——ぞめ[紅染](名) クレなゐにて染めたる色。又、其を物に染むる事。——の[紅](枕) いろといふ縁語より「あさし」に冠する語。

サクレのあゐ[呉藍](名) [植]「クレなゐ」の古名。

サクレのおも[呉母](名) [植]「ウヰキヤウ」の古名。

サくれはし[榑階](名) 材木を横にしたるあがりだん。階段などに設く。

サクレはし[呉橋](名) そりはし。

サクレはとり[呉織](名) (呉機織の略言) ❶古昔、呉の國より渡來せし織物師。❷呉の法を傳へて織りたる布帛。(呉服)。

サくれはとり[呉織](枕)「あや」に冠する語。「—あやに戀しく、ありしかば」。

くればらひ[暮拂](名) かけ代金などを節季に支拂ふこと。

くれわり[塊割](名) 土塊を打ち碎く農具。

くろ[黒](名) 光全くなき暗き色。

くろ[畔](名) 田の中の堺。あぜ。「埒布」。

クローズ[Cloth](名) 毛織の衣裝に用ふる舶來の緞。

グローブ[Glove](名)「ベースボール」にて用ふる手袋。

くろあしげ[黒葦毛](名) 馬の毛色、黒味をふくみたる葦毛。

くろあづき[黒小豆](名) [植]あづきの一種。あかあづきより粒小さくして色黒し。

くろいし[黒石](名) ❶色黒き石。❷色黒き碁石。

くろいろ[黒色](名) くろきいろ。

(ぐろう)[愚弄](名) 人をあなどりて弄(モテアソ)ぶこと。ひやかし。嘲弄。

(くろうと)[黒人](名) ❶藝術などに深く熟練せる人。❷其物事を職業とせる人。❸藝者又は遊女などの稱。

くろえぬり[黒江塗](名) 紀伊國名草郡黒江より出す漆器。

くろがき[黒柿](名) 柿の木の中心にある黒き部分。質固く色黒く麗(ウルハ)しきより、諸種の器具又は室内裝飾品などをつくるに用ふ。(鐵刀木)。

くろかげ[黒鹿毛](名) 馬の毛色、黒みある鹿毛。

くろがね[黒金](名) 鐵の古稱。色の黒きより名づく。(鐵)。——のはだ[鐵肌](名) ❶甘なくその古稱。❷色黒くがんぜうなる肌。——もち[黒鐵黐](名) [植]「くろきもち」の一名。

くろかみ[黒髪](名) 色黒く艶麗(ツヤ)しき髪。(髮)。——の[黒髪](枕) 髪の亂るゝより「みだる」に冠する語。

くろかはをどし[黒革縅](名) 黒革にて鎧をおどしたるもの。又、其鎧。

くろかはらげ[黒川原毛](名) 馬の毛色、かはらげ色にして黒味を帶びたるもの。

くろき[黒酒](名) ❶古昔、新嘗祭又は大嘗祭などに奉りし酒、醴酒に久さぎの灰を入れて色を黒くしたるもの。❷後世は、黒胡麻の粉を入れて黒くしたる酒の稱。

くろき[黒木](名) ❶皮を削らぬ材木。「—の御所」。❷木を一尺許に切り、釜に入れて黒く蒸(ム)したるもの。京都の八瀬大原の婦女などが薪とし、頭にのせて京都市中に賣りありく。❸「こくたん」の一名。——うり[黒木賣](名) くろきをうりありくもの。又、其人。

くろきぬ[黒衣](名) 色黒き衣服。又、喪中に着くる衣服。「きる黒きかさ」。

サくろくさ[紆](名) 「ほ」に同じ。

くろぐさ[白薇](名) [植]よもぎの一種。花は黄色なり。貨は藥種として癰疽・持及死などを治するに用ひらる。(突厥)。

くろくちなは[黒蛇](名) [動]「からすへび」の一名。

くろくは[畔鍬](名) ❶畑を耕し又は畦を堀りなどするくは。❷徳川時代に、卑き役のもの・稱。

くろくひゃく[九六百](名) 德川時代に、錢九十六文を以て、百文に當てし稱。

くろ-くりげ[黑栗毛](名) 馬の毛色、栗毛に黑味のあるもの。
くろ-ぐろ[黑黑](名、副) 甚だ黑きさまにいふ語。
くろ-ぐわゐ[黑慈姑](名) 【植】莎草科に屬する草、水澤に生ず、管狀をなせる圓き莖を有し、球狀の地下莖あり、地下莖は食用に供せらる。(烏芋)。
くろ-げ[黑毛](名) 馬の毛色、眞黑なるもの。
くろ-けぶり[黑烟](名) くろ〲と立ちのぼる烟。
くろ-こはく[黑琥珀](名) 【鑛】こはくの一種、黑き光澤ありて、質極めて固し。
くろ-ごま[黑胡麻](名) 【植】胡麻科に屬する草、もと東「インド」より渡來したるものにして、葉は長楕圓形又は卵形をなし、花は葉腋に一箇又は數箇づゝ生じ、花冠は多くは白色にして、往々紅色又は黄色の蕊を具す、種子は食用に供せられ又これより油を搾(シボ)る。
くろ-ごめ[黑米](名) つかぬこめ。玄米。
くろ-さ[黑](名) 色のくろき度合。
くろ-ざたう[黑砂糖](名) 砂糖の未だ精製せざる色黑きもの。
くろ-ザン[黑棧](名) 黑色のサントメ皮。
くろ-さんご[黑珊瑚](名) 「うみまつ」に同じ。
くろ-し[黑](形、一) 黑色なり。
くろ-じ(名) 【動】燕雀類雀科の鳥、あをじの一種にして下面一體に灰黑色なり。
くろ-しび[黑鮪](名) 【動】しびの一種、體大にして、色黑し。
くろ-しほ[黑鹽](名) 鹽の骨に鹽を加へこれを黑燒にしたるもの、きりぎす又はめまひなどの藥用に供せらる。
くろ-しぼり-の-あぶら[黑絞油](名) 胡麻油の一種、黑胡麻の種子よりしぼりとりたるもの。

くろ-しゆす[黑繻子](名) 黑色の繻子。
くろ-しろ[黑白](名) ㊀くろとしろと。㊁事の善惡。よしあし。
くろ-ず[黑酢](名) 昆布又は椎茸を黑燒にし、擂り潰して酢を加へたるもの。
くろずみ-けう[黑住教](名) 神道の一派、備前國御野郡中野村の人黑住宗忠の始めたるもの。
くろ-ずむ[黑](自、ま四) 黑色を帶ぶ。
くろ-ずゐしやう[黑水晶](名) 黑色なる水晶。
くろ-ぞめ[黑染](名) くろくそむること。
くろ-だな[黑棚](名) 座敷などに据(ス)ゑて物を飾りおく棚、高さ三尺五寸長さ四尺二寸幅一尺三寸にして黑塗なるを古來の法とす。

[なだろく]

くろ-だひ[黑鯛](名) 【動】硬鰭類たひ科に屬する魚、形はまだひに似、體肥えて圓く目太し、全身黑味を帶ぶ、體長大いなるは二尺餘に達す。ちぬだひ。(烏頰魚)。
くろ-だま[黑玉](名) ㊀黑き色を帶びたる玉。㊁くろぼし。こくてん。㊂くろめ。ひとみ。㊃うちあげたる花火の球の、發火せざるものゝ稱。
くろ-ち[黑血](名) 腦症の血物などより出づる黑みを帶びたる血。あるち。
廿くろ-つか[畔塚](名) くろ。畔。
くろ-つぐみ[黑鶇](名) 【動】つぐみの一種、色黑きもの。
くろ-つち[黑土](名) ㊀色の黑き土。㊁火災にかゝりて焦(コ)げて黑くなりたる土。(焦土)。
くろ-づる[黑鶴](名) 【動】つるの一種、形はまなづるに似、嘴長くして基部は軟皮を以て被はる、脚長くして跳自在なり。(陽鳥)。

〔くろ-ど[黑人](名) 「くろうと」の訛。
廿くろ-ど[黑戸](名) 古昔、禁中にて、清涼殿の北、瀧口の戸の西にありたる所、御薪にすゝけて黑ければいひしとぞ。又、近世は、禁中の佛をまつられしところの稱。——ごしよ[黑戸御所](名) 前條に同じ。
廿くろ-どり[黑鳥](名) ㊀【動】くひなの小さきもの、稱。㊁羽毛の色黑き鳥の稱。——げ[黑鳥毛](名) 黑色の鳥の羽、昔時、鎗の鞘(サヤ)などを飾るに用ひられたり。
〔くろ-ねずみ[黑鼠](名) 主家の金錢を掠め又は主家に不利益なる事をたくらむ番頭又は手代の稱。
クロノグラフ[Chronograph](名) 時刻を自記する器械、時計仕掛にて廻轉する圓筒あり、これに煤を塗りたる紙を捲き付け、且これに觸るゝ二個の針あり、其一は煤上に二線を劃して、「クロノメートル」及電磁石に連なり、秒針の打音に應じ、電流閉ぢ第一線に横突起を生じて秒時を記す、其一は電磁石及電鍵に連なり、これを押せば第二線に横突起を生ず、よりて二線を比較して、觀測したる時刻を精密に定むることを得。
クロノメートル[Chronometer](名) 携帶用の最も精密なる時計、溫度變化の影響を受けざる二つの異なる金屬を合せたる擺輪を用ひ、又、重力の影響を受けざるため、振子を用ひずして撥條を用ひたるものなり、航海用のものは、軸の互に直角なる輪にて支へ、常に水平の位置を保たしむ、經度測定の主要器械なるが故に經線儀の名あり。
くろ-は[黑羽](名) くろきはね。「—の矢」。
廿くろ-ばう[黑方](名) たき物の一種。「—や、

年は經れども臘月」。
〔くろ-はえ(名) 六月梅雨に入りて吹く南風(伊勢・鳥羽又は伊豆の船人の語)。
〔くろ-はち[黑八](名) 「くろはちぢやう」の略言。——ぢやう[黑八丈](名) 織物の名、黑色無地の絹布、織目を高く現はしたるもの、おもに男子の衣服の襟又は袖口などに用ふ。
くろ-ばむ[黑](自、ま四) 黑色を帶ぶ、くろくなる。
くろ-び[黑日](名) 太陰曆にて、萬事につけて忌むべしといふ日、強ひて犯せば命にかゝはる事ありといふ。(受死日)。
くろ-ひえ[黑稗](名) 【植】ひえの一種、形狀種子共にいぬひえに似る。
くろ-ふ[黑斑](名) ㊀黑き斑(フ)。㊁黑き斑のある鷹の羽、矢の羽に用ふ。
廿くろ-ふ[黑生](名) 野などを燒きたる跡に生ずる草。
くろ-ふね[黑船](名) 昔時、歐米諸國より來れる大いなる船艦の稱。(西洋船)。
くろ-ほ[黑穗](名) 黴菌發生して全穗の穀粒が黑粉となりたる麥の穗。
くろ-ほう[黑保](名) 「あさくさがみ」に同じ。
くろ-ぼく[黑木](名) ㊀皮を取らぬ材木。くろき。㊁色黑き土。
くろ-ぼし[黑星](名) ㊀黑く圓きしるし。黑き點。㊁的(マト)の正中にある黑き點、轉じて、的の正中。
〔くろ-ぼし[踝](名) 「くるぶし」の訛。
くろ-ぼたん[黑牡丹](名) 【植】ぼたんの一種、花は紫色にして稍や黑色を帶ぶ。
くろ-ほん[黑本](名) 表紙の黑き草紙、昔時、天保・文化の頃、盛に行はれたり。
くろ-まく[黑幕](名) ㊀芝居の舞臺などに用ふる色黑き幕。㊁かげにありて指圖するもの。

くろ-まぶす[黑](他、さ四) 黑くす。
くろ-まなこ[黑眼](名) くろめ。くろめだま。(烏珠)。
くろ-まつ[黑松](名) 【植】松の一種、多く海邊に生ず、樹皮は黑褐色を帶び、葉は赤松に比すれば剛し、材木もまた保存期永く種々の用に供せられ、薪としても火力大なり、樹脂より松香油を製す。
くろ-まめ[黑豆](名) 【植】大豆の一種、種子色黑くして長く太し。
くろ-まゆ[黑眉](名) 古昔、奧女中などが畫きし色黑き眉。
くろ-まる[黑](自、ら四) くろくそまる。黑くなる。くろむ。
くろ-み[黑味](名) 黑きこと。黑き色。「—を帶ぶ」。——ばしる[黑味走](自、ら四) くろみを帶ぶ。くろくなる。
クロミウム[Chromium](名) 【化】「クロム」に同じ。
くろ-みどり[黑綠](名) 馬の毛色、黑色に稍や靑味を帶びたるもの。(鐵驄馬)。
クロム[Chromium](名) 【化】灰白色の金屬、大氣に觸れて錆(サビ)を生ぜず、鹽酸及硫酸には溶解すれど、白金に比し更に融解し難し、又、甚だ硬くして殆ど鋼玉石に匹敵す。
くろ-む[黑](自、ま四) 黑くなる。
くろ-む[黑](他、ま下二) ㊀黑くす。㊁紛(マギ)らす。欺く。「いひ—」。
廿くろ-むぎ[黑麥](名) 【植】蕎麥(ソバ)の古名。
くろ-め[黑目](名) 眼球の中心の黑き部分、くろまなこ。くろだま。(瞳孔)。——がち[黑目勝](名) 眼の黑玉の大きなること。又、其目。
〔くろ-める[黑](他) 「くろむ」の訛。
くろ-もじ[黑文字](名) ㊀小楊枝(コヤウジ)の一名、㊁「くろもじのき」の略言。——のき[黑文字木](名) 【植】樟科に屬する木、枝の樹皮は平滑にして綠色及帶黑色の二部を有し、葉は絹絲狀の毛を具し、花序は短き柄を有するか若しくは無柄なり、木材は一種の香氣を有し、多く小楊枝又は箸を製する料に供せらる。(野宮欄)。

くろ-やき[黑燒](名) 燒きて黑くすること。又、其物、(おもに古風の藥にいふ)。「いもりの—」。
くろ-やけ[黑燒](名) 燒けて黑くなること。又、其黑くなりたる物。
くろ-やま[黑山](名) 人だち多きことにいふ語。「—の人」。
くろ-ゆり[黑百合](名) 【植】ゆりの一種、葉は心形にして長き葉柄を有し、花序は總狀にして小數の花より成り、花莖は淡灰色なり、鱗莖は食用に供せらる。
くろ-らか[黑](名) 黑きこと。
クロロフォルム[Chloroform](名) 無色揮發性にして多少甘味を有する液體、漂白粉を以て「アルコホル」を處理して製す、有機化合物の溶劑又は外科手術の痲醉劑として用ひらる。
くろん-ばう[黑坊](名) ㊀(「セイロン」島の地名 Colombo に起るといふ說あり)熱帶地方に住める黑人種の稱。黑奴。黑人。㊁芝居の舞臺に、黑き衣服黑き頭巾を着けて出で、役者に從屬して臺詞(セリフ)などを陰より讀みきかせなどする人。㊂皮膚の色黑き人。㊃「くろぼ」(黑穗)に同じ。
くろん-ぼ[黑坊](名) 前條に同じ。
(くわ[窠](名) 紋所の名、瓜を輪狀に切りたるやうの形を描(ヱガ)きたるもの。もっかう。
(くわ[火](名) ㊀ひ。㊁古昔、軍隊の一部曲。「五人を伍とし、伍二を—とす」。㊂くみあひ。なかま。
(くわ[科](名) ㊀程度又は制限。ほど。かぎり。㊁

品等又は區別。えな。わかち。㊁條目又は典格。きまり。さだめ。㊃刑律又は罪質。とが。つみ。㊄あな。うつろ。「—に盈ちて而して後進む」。㊅植物の分類の名目。屬を概括したるもの。「薔薇—」「毛茛—」。㊆動物の分類の名目。目を細別したるもの。「すゞめ—」「あざらし—」。㊇役者の先ぐさ。

くわ[戈](名) ㊀ほこ。「室に入り—を操ふ」。㊁弦器にして長さの單位。一丈三尺に當る。

くわ[貨](名) たから。えなもの。かね。「—を賄る」。

くわ[訛](名) なまり。又、あやまり。

くわ[寡](名) ㊀數少なきこと。㊁孤立者又は少數者。「—を以て衆に敵す」。㊂やもめ。又、やもを。(寡)

くわ[和](名) 「わ」に同じ。

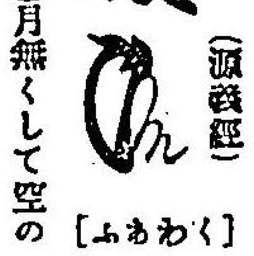
くわ[課](名) ㊀考科又は試驗。こゝろみ。ためし。㊁程限又は次序。ほど。ついで。㊂負擔又は租賦。かかり。わりあて。㊃官省の中に於ける事務の小部分。「記錄—」。

くわ[化](名) ㊀生死又は兒滅。進歩又は變遷。うつりかはり。㊁異種類のものに形を變ずること。㊂德教又は訓諭。をしへ。さとし。㊃風俗又は習慣。ならはせ。ならひ。㊄化學の略言。「理—學」。

[—くわ][顆][踝尾] 果實又は玉石などの箇數をかぞふるにいふ語。「玉—」「印五—」。

くわ[靴](名) ゑ。皆の對。

くわ-あふ[花押](名) 「かきはん」に同じ。


(源頼朝)　(源義經)
[くわあふ]

くわい[晦](名) ㊀古暦の月末。つごもり。みそか。㊁月無くして空の暗きこと。やみ。くらがり。

くわい[塊](名) ㊀つちくれ。㊁かたまり。

くわい[快](名) ㊀こゝろよきこと。おもしろきこと。「人を屈り以て自ら—となす」。㊁[心] 心の活動が微弱なる狀態より盛大なる狀態に上昇するか。若しくは精力に適應せる刺戟を受くるかのときに起る感情。

くわい[會](名) ㊀對面又は接見。であひ。まみえ。㊁集會又は團結。よりあひ。あつまり。㊂會盟又は會議。ちかひ。ひやうぎ。「塗山の—」。㊃をり。とき。機期。「風雲の—」。㊄かなめ。おも。要所。㊅物事のあつまりある所。㊆物事をあはせたる所。あはせめ。㊇一歲の計算又は其帳簿。そうぶめ。そうだめのちやうめん。

くわい[魁](名) ㊀かしら。をさ。「賊徒の—」。㊁さきがけ。「百花の—」。

くわい[懷](名) ㊀ふところ。㊁おもひ。「—を遣る」。

くわい[回](名) ㊀まはり。めぐり。㊁たび。度數。㊂よこしま。邪曲。「惡を求むるに—ならず」。

ぐわい[外](名) そと。ほか。

くわい-い[怪異](名) ㊀あやしきこと。常ならざること。㊁ばけもの。もの、け。へんげ。

くわい-い[會意](名) ㊀こゝろにかなふこと。㊁支那の文字にて所謂六書の一。二個以上の字の形若しくは意を合して一個の字の形若しくは意となすもの。例へば人と言とを合して信となし、止と戈とを合して武となすが如し。

ぐわい-い[外夷](名) 外國人をいやしめていふ語。

くわい-いう[回遊](名) 方々をめぐりあそぶこと。——**れっしゃ**[回遊列車](名) 方々を見物する客をのするため、特に差立つる鐵道列車。

ぐわい-いう[外遊](名) 外國に遊ぶこと。

ぐわいいうせい[外遊星](名) 木星・土星・天王星・海王星の四遊星の稱。

ぐわい-いう[臥遊](名) 山水の畫幅などを見て樂しむこと。

ぐわい-えき[外役](名) ㊀國外への出兵。㊁國外にての使役。「囚徒の—」。

ぐわい-えん[外延]=Extension(名) [論] 概念が代表する事物の範圍。例へば生物といふ名辭の外延は動物といふ名辭の外延よりも廣きが如し。

くわい-が[怪訝](名) あやしみいぶかること。不思議に思ふこと。

ぐわい-かい[外界](名) ㊀心に對する一切の現象。㊁其物の周圍。「—の狀態」。

くわい-かう[廻航](名) 方々をへめぐる航海。又、方々をへめぐりてかへる航海。——**ゐゐん**[廻航委員](名) 外國に註文して建成したる軍艦を、我國に廻航するために、任命派遣せられたる委員。

ぐわい-かう[外項](名) [數] 一つの比例に於て、其兩端に立つ二つの項。

ぐわい-かう[外交](名) ㊀國と國との交際又は交渉即ち國家相互の關係、又、其處理の手段。「—問題」。㊁內部の事務取扱に對して、外方の運動周旋などをいふ。——**か**[外交家](名) 外交の局にあたる人。又、外交に巧なる人。——**きくわん**[外交機關](名) 外交上のために設置せる國家の機關の總稱。外務大臣・公使なども其一なり。——**くわん**[外交官](名) 外務大臣の監督の下に屬し、外國に駐在して外交の事に從ふ官職。全權公使・辨理公使又は公使館書記官等の稱。——**ぶんしよ**[外交文書](名) 使臣の信任狀・委任狀又は議定書・覺書其他條約以外の外交上に關する一切の文書の稱。

ぐわい-かく[外角](名) [數] 二つの直線が一つの直線と會するとき、二線の外側にある四つの角。又、多角形の一片とこれに隣れる邊の延長との交(さ)む角。

ぐわい-かく[外殼](名) 外面にある殼(から)。

くわい-がふ[會合](名) よりあひ。あつまり。

ぐわい-がふ[外合](名) [天] 「合」に同じ。

くわい-かん[快感](名) こゝろよき感じ。快の感情。

ぐわい-がん[魁岸](名) 人品すぐれて偉(おほ)げなること。

ぐわい-かん[外感](名) [心] 外界の刺戟により て起る感覺。

くわい-き[回忌](名) 人の死したる後、年毎にまはりくる其月の其日。其一年目を一くわいき又は一周忌といひ、二年目を三くわいき又は三周忌といふ類。(年回、年忌)。

くわい-き[快氣](名) ㊀こゝろもちのさわやかなること。㊁病氣のこゝろよきこと。

くわい-ぎ[會議](名) ㊀會合して評議すること。「—の席」。㊁事を評議する機關。「砲兵—」「工兵—」。

くわい-ぎ[懷疑](名) ㊀うたがふこと。あやぶむこと。㊁認識を否定し眞理を疑ふこと。

ぐわい-き[外氣](名) 室外の空氣。外部の空氣。

くわい-ぎあん[回議案](名) 役所などにて、關係ある者へ順次に廻送して、其意見を問ふ議案。

くわい-きう[懷舊](名) 昔時の事柄を思ひ出だすこと。「—の涙にむせぶ」。——**だん**[懷舊談](名) 自分の昔時遭遇したる事柄のものがたり。

くわいきせん[回歸線](名) [天] 天球上赤道より南北各約二十三度半を通過する小圈。北なるを北回歸線といひ、南なるを南回歸線といふ。太陽が北に來るときは即ち北回歸線に達するときなり。故に一に夏至線といふ。太陽が南に來るときは即ち南回歸線に達するときなり。故に一に冬至線といふ。又、地球上赤道より南北約二十三度半の緯線を回歸線といふ。これもまた南北の別あり。

くわい-き-ねん[回歸年](名) [天] たいやうねん(太陽年)に同じ。

くわいきむふうたい[回歸無風帶](名) [地] 貿易風反對貿易風の相會して無風となる地方。緯度凡そ三十度の所なり。北半球にあるを北回歸無風帶といひ、南半球にあるを南回歸無風帶といふ。

くわい-きよ[快擧](名) こゝろよきふるまひ。いさましき行動。

ぐわい-きよ[外虛](名) [天] 半影の稱。又、太陽の黑心の中の周圍の稍や闇(くら)き部分の稱。

くわいぎろん[懷疑論]=Scepticism(名) [哲] 吾人の認識を不確實なるものとし、一切の知識を否認し眞理を疑ふ哲學論。

ぐわい-きん[外勤](名) 外部の勤務。「—の巡査」。

くわい-いく[化育](名) 萬物の互に生死兒滅しつゝつひそだちて其性を遂げ、以て變遷進歩すること。「天地の—に參す」。

くわい-ぐわ[繪畫](名) 物の形象を平面に描(ゑが)き出すこと。又、其描き出したる物の形象。ゑ。ぐわ。

ぐわい-くわ[外科](名) 「げくわ」に同じ。

ぐわい-くわく[外郭](名) そとぐるわ。

くわい-くわつ[快闊](名) ㊀氣象さわやかにして度量ひろきこと。物事を苦にせず心のひろき性質。㊁こゝちよくむねのひろきこと。心にくるしみなくうちとけてあること。

くわい-くわつ[快活](名) 氣象さわやかにして勢よきこと。こゝちもよくいさましきこと。

ぐわい-くわひ[外果皮](名) [植] 果實の最も外部にある薄き皮。熟するときは或は彩色を現はし或は軟毛を生ず。

くわい-くわん[挂冠](名) 官職を辭すること。やむこと。

ぐわい-くわん[外患](名) 外國と難を構ふること。又、外國に對するうれひ。

ぐわい-くわん[外觀](名) おもてむき。うはべ。

くわい-けい[塊莖](名) [植] 地下莖の一種。地中にある莖の末端が肥大して塊狀をなすもの。ヂャガタラいもの類これなり。

くわい-けい[會計](名) ㊀金錢物品の出納を計算すること。㊁金錢又は物品の出納に關する事務の稱。㊂代金の支拂。かはらひ。「—を人に持たす」。——**くわんり**[會計官吏](名) 會計の事務にあづかる官吏。——**けんさくわん**[會計檢査官](名) 會計檢査院を組織し、其職務を執行する高等官。——**けんさゐん**[會計檢査院](名) 官金の收支・官有物及國債に關する計算を檢查確定して、國家の會計を監督する官廳。天皇に直隸し、國務大臣に對し特立の地位を有す。——**けんさゐんちやう**[會計檢査院長](名) 會計檢査院の長官。院務を總理す。親任官の待遇なり。——**ねんど**[會計年度](名) 會計上の便宜によりて設定したる一定の期間。我國現時の制度にては、四月一日より翌年三月三十一日迄の規定なり。

ぐわい-けい[外形](名) 外より見たる形。

くわい-けい[會稽](名) 會稽の恥の語より出で、人より受けたる恥辱。「—を雪(すゝ)ぐ」。

(くわい-けう)〔回教〕(名)「フヰフヰけう」の稱。
(ぐわい-けう)〔外教〕(名) 其國固有のものにあらざる外國傳來の宗教、昔時、我國にては「キリスト」教をさしていへり。
(くわい-けつ)〔潰決〕(名) 水力などによりて堤防等の破るゝこと。
(くわい-けつ)〔怪傑〕(名) 一種異樣の力量あるす
(くわいけつ-びやう)〔壞血病〕(名) 身體衰弱して出血し易き病、齒齦(ハグキ)は腫れたゞれ皮膚は土色となり、遂に貧血病となる。
(くわい-けん)〔懷劍〕(名) 懷中に携ふる小刀。「逆手に持ち」「—」
(くわい-けん)〔會見〕(名) 互に一處にあつまりて面會すること。「春帆樓の—」。
(ぐわい-けん)〔外見〕(名) みえ。うはべ。
(くわい-こ)〔懷古〕(名) むかしを思ふこと。「—の情」。
(くわい-こ)〔回顧〕(名) ㊀あとにふりむくこと。㊁むかしを思ふこと。
(くわい-ご)〔魁梧〕(名) 身體のすぐれて逞(タクマ)しきこと。
(くわい-ご)〔悔悟〕(名) 前非をくいさとること。
(ぐわい-こう)〔外寇〕(名) 攻め來れる外國のあだ。
(くわい-こく)〔廻國〕(名) ㊀國々を經めぐること。「—修行」。㊁順禮となりて、諸國の札所をめぐること。又、其順禮。
(ぐわい-こく)〔外國〕(名) 我が主權の統治に屬せざる他の國家又は國土。よそのくに。とつくに。 —いうびん〔外國郵便〕(名) 外國へ發送する郵便又は外國より到着する郵便の稱、外國へ發送する郵書は、書狀十五「グラム」迄十錢、葉書四錢、印刷物及商品見本は五十「グラム」迄二錢、書留料十錢の規定なり。 —かはせ〔外國爲替〕(名) 正貨を送付する浪費・危險其他不便等なくして、外國に於ける貸借を完了する方法、即ち外國にて金錢を受取るべき權利を利用し、外國にて金錢を支拂ふべき義務を辨濟するとなり、例へば、在「パリー」の甲は、在神戸の乙に對して五千圓の負債ありて、在「パリー」の丁は在神戸の丙に五千圓の債權ありと假定せよ、乙は甲に宛てゝ各爲替手形を作成し、丙は乙の振出したる手形を甲は丁の振出したる手形を買ふときは、丙は甲に對し五千圓の債權を得、甲も丙に對して五千圓の債權を得ることとなるを以て、甲丙互に交互計算をなすときは、甲乙丙丁間の貸借關係は一文をも輸送せずして完了するなり。 —かはせさうば〔外國爲替相場〕(名) 爲替相場に同じ。其條を見よ。 —かはせてがた〔外國爲替手形〕(名) 外國爲替に用ふるために振出したる手形。 —ご〔外國語〕(名) 外國の國語、即ち我國にては朝鮮語・支那語・英語等すべて日本語以外の國語の稱。 —こうし〔外國公使〕(名) 我國に駐在せる外國の公使。 —さい〔外國債〕(名) 其債主の全部若しくは大部分が、外國政府若しくは外國人なる公債、普通外國に於て募集せらる。 —じん〔外國人〕(名) 其國籍が外國に屬する人民、外國の民。異國の人。 —せいふ〔外國政府〕(名) 外國の中央官府、即ち、其國の政務をつかさどる中央機關。 —せん〔外國船〕(名) 外國政府又は外國人の所有せる船舶。 —ひん〔外國品〕(名) 外國にて製造せられ又は外國より輸入せられたる物品。 —ぼうえき〔外國貿易〕(名) ㊀內國と外國との間に行はるゝ財の交換、其起る原因は、甲國のみに產し他國には產せざる財ありて、他國人のこれを需要するに起るは勿論、一國に於ける各種の財の交換の比例が、他國に於ける同種の財の交換の比例と相異なるときにも起る、方今これに對する文明諸國の政策は、自由貿易と保護貿易との二主義あれど、各長短得失ありて一概に判定すべからず、要するに國民の程度又は國家の地位及產業の種類の如何により取捨すべきものなり。㊁外國人との取引。
(くわい-こん)〔塊根〕(名)〔植〕地上を匍匐する莖より生じたる肥大なる塊狀の根、さつまいもの類。
(くわい-さい)〔快哉〕(名) こゝろよきこと。「—を呼ぶ」。
(ぐわい-さい)〔外債〕(名) 外國債の略言。
(くわい-さう)〔回想〕(名) むかしの事を思ひまはすこと。
(くわい-さう)〔會葬〕(名) 葬送の人數に加はること。
(くわい-さう)〔廻漕〕(名) 船舶にて旅客又は物品を運送すること。 —てん〔廻漕店〕(名) 廻漕の取扱を業とする家。(廻船問屋)。
(くわい-し)〔懷紙〕(名) 歌又は連歌を正式に認むる時に用ふる紙、多くは檀紙又は引合紙(ヒキアハセガミ)を使用す、官位姓名など併せ記するものとす。
(ぐわい-し)〔外資〕(名) 外國人の有する資金。 —ゆにふ〔外資輸入〕(名) 外資を內國に移し入るゝこと、即ち、外債により又は外人を資本主として、內國に於て企業するなどをいふ。
(ぐわい-じ)〔外事〕(名) ㊀うちわの事にあらざる事。そとの事。㊁外國に關する事、又、外國の事柄。
(くわい-しう)〔回收〕(名) もとへかへしをさむること。とりもどし。「資金の—」。「遺人の—」。
(くわい-じう)〔懷柔〕(名) なつけてしたがはすること。
(くわい-しゃ)〔會社〕(名) 商行爲を目的として二人以上のものが協同して設立したる社團法人、合名會社・合資會社・株式會社・株式合資會社の種類あり。

(くわい-しゃ)〔膾炙〕(名) なますとあぶりものとが、普通一般人の口にかなふるが如く、物事の普く人々の口の端にかゝること。「人口に—す」。
(くわい-しゃう)〔會商〕(名) よりあひて商議すること。
(くわい-しゃう)〔廻章〕(名) 名宛を連記し、それよりそれへとまはして事を通ずる書狀。まはしぶみ。くわいぶん。(廻文、移文)。
(くわい-じゃう)〔回狀〕(名) 前條に同じ。
(ぐわい-しゃう)〔外相〕(名) 外務大臣の異稱。
(くわいじゃう-くわざん)〔塊狀火山〕(名)〔地〕地下の岩漿噴出するとき、水蒸氣又は瓦斯を伴はず岩塊を堆積して成りたる火山。
(くわいしゃ-ゐん)〔會社員〕(名) 會社の事務員。
(くわい-しゅ)〔會主〕(名) 會を開く主人。
(くわい-しゅん)〔懷春〕(名) 年ごろとなりていろけづくこと。色情付すこと。
(くわい-しょ)〔會所〕(名) ㊀人々のよりあひする所。「碁—」。㊁もと商業の取引又は町內の取締等に就きて、其事に關係ある人のよりあひをなしゝ所の稱。「米—」。「綿—」。
(くわい-じん)〔灰燼〕(名) はひともえさしと。轉じて、火に燃えて形なくなること。
(ぐわい-しん)〔外信〕(名) 外國よりのたより。
(ぐわい-しん)〔外臣〕(名) 其國の君主に對して、外國の臣民の稱。
(ぐわい-しん)〔外心〕(名)〔數〕外接圓の中心。
(ぐわい-じん)〔外人〕(名) 外國の人。
くわい-す〔會〕(自、さ變)(せしすするすれせよ) ㊀集合す。よりあふ。あつまる。㊁接見す。みる。まみゆ。㊂遭遇す。あふ。であふ。「千歳一遇の好機に—」。㊃一致す。ひとつになる。
くわい-す〔會〕(他、さ變)(せしすするすれせよ) ㊀あつむ。あはす。㊁理解す。ゑる。さとる。「意義不明にして—る能はず」。
(くわい-すう)〔回數〕(名) たびかず。どすう。 —きっぷ〔回數切符〕(名) 幾回數分を一つにまとめて發賣する切符。
(くわい-せい)〔快晴〕(名) 空のこゝろよく晴れわたること。「天氣—」。
(ぐわい-せい)〔外征〕(名) 外國へ出征すること。
(くわい-せき)〔懷石〕(名)(溫石にて腹部を溫むる代はりに出すもの、義なりともいひ、或は緊束披の佛印禪師に推石を供せし故事に出づともいふ)茶湯にて、茶を供する前に先づ出す饗膳。
(くわい-せき)〔會席〕(名) ㊀よりあひの座敷。よりあひの場所。會の席。㊁會席料理又は會席茶屋の略言。 —ぢゃや〔會席茶屋〕(名) 茶湯の懷石風の饗膳を出す料理屋。 —れうり〔會席料理〕(名) 會席茶屋にて、茶湯の懷石風に出す饗膳、又、集會せる人に個々にもりわけて出す饗膳。
(ぐわい-せき)〔外戚〕(名) 母方のえんるゐ。
(くわい-せつ)〔怪說〕(名) あやしきうはさ。いぶかしきとりざた。
(くわい-せつ)〔廻折〕(名) ㊀をれまがること。㊁〔Diffraction〕〔理〕光が甚だ狹き空隙を通過するとき、其進む方向以外にも達すること、此現象の起るは、光線の通過する空隙甚だ狹きが故に、映像部以外に達する光波は相干渉すといへども、全く消滅するに至らざるのみならず、却て或部分に於ては光波の山と山と相重なりて、ために輝部を生ずるが故なり、故に單色光を用ふるときは、映像部以外に明暗こもごも生じ、白光を用ふるときは「スペクトル」數個順次に現はる。 —かうし〔廻折格子〕‖Diffraction grating〕(名)〔理〕硝子板又はよく磨きたる金屬板に無數の平行線を密接して刻したるもの、稱にして、光硝子板にては通過の光、金屬板にては反射の光の廻折の現象を檢するに用ふ、刻線の部分は光を通過せず或は正しく反射せず、故に格子の後方(金屬板なれば前方)の一點には、距離の少しづゝ異なる點より光達するが故に、相干渉して特別の色を呈するにより、こゝに衝立(ツイタテ)をおくか又は望遠鏡にて望むかすれば、「スペクトル」現はる、其「スペクトル」は各平行線の間隔狹きほど明瞭なり。
(ぐわいせつ-きう)〔外切球〕(名)〔數〕一つの球の外にありて且これとたゞ一點に於て切する球。
(ぐわいせつ-ちょくせんけい)〔外接直線形〕(名)〔數〕一つの圓を圍み且各邊が此圓に會する直線形。
(ぐわいせつ-ゑん)〔外接圓〕(名)〔數〕一つの直線形を圍み且其各頂點が周上にある圓。
(ぐわいせつ-ゑん)〔外切圓〕(名)〔數〕一つの圓の外にありて且これとたゞ一點に於て會する圓。
(ぐわい-せふ)〔外妾〕(名) ㊀外へかこひおけるめかけ。㊁外國人のめかけ。
(くわい-せん)〔快戰〕(名) いさましきたゝかひ。こゝちよきいくさ。
(くわい-せん)〔廻船〕(名) 廻漕に用ふる船。 —どひや〔廻船問屋〕(名)「くわいさうてん」(廻漕店)に同じ。
(くわい-そう)〔回送〕(名) おくりもどすこと。
(ぐわい-そう)〔外層〕(名) 外部のかさなり。
(ぐわい-そふ)〔外祖父〕(名) 母方の祖父。

(ぐわい-そぼ[外祖母](名) 母方の祖母。
(ぐわい-そん[外孫](名) 自分の娘の他家へ嫁して生みたる孫。
(くわい-たい[懷胎](名) 子をはらむこと。みもち。くわいにん。(懷妊)。
(ぐわい-たい[外帶](名) [地]彎曲せる山脈の凸面。「—山脈」。
(ぐわい-たう[外套](名) 洋服にて、寒を防ぎ雨を凌(しの)ぐためなどに、上衣の上に着する表衣。
—まく[外套膜](名) [動]軟體動物の體壁上の一部の擴張して膜狀をなすもの。
(くわい-たつ[廻達](名) 次第におくりとゞくること。
(くわい-たふ[回答](名) へんじ。へんたふ。
(くわい-だん[怪談](名) ㊀あやしきうはさ。㊁ばけものゝはなし。
(くわい-ちやう[會長](名) 會員を統率し會を代表するもの。會のをさ。會の頭。(會頭)。
(くわい-ちゆう[蛔蟲](名) [動]圓蟲類の一、人體の小腸に寄生し腹痛を起す、形狀みゝずに似る。はらのむし。(蚘蟲)。
(くわい-ちゆう[懷中](名) ㊀ふところのうち。㊁ふところのうちに入るゝこと。㊂かみいれ。かねいれ。
—かがみ[懷中鏡](名) 懷中して持ち歩く小形のかゞみ、婦人などの携ふるもの。
—しるこ[懷中汁粉](名) 一種の菓子、側は麩餅の類にて、これに乾餡を包みたるもの、湯を注ぎかきまずれば汁粉となる。
—すずり[懷中硯](名) 懷中すべき小形の硯、筆墨などをも併せ入れおくやうにつくりたるもの。
—どけい[懷中時計](名) 懷中する小さき時計。たもとゞけい。
—もの[懷中物](名) 懷中に入れてある品物、即ち、かみいれなどの類。「—御用心」。

(ぐわい-てい[外廷](名) 次條に同じ。
(ぐわい-てう[外朝](名) ㊀君王の國政を聽きたまふ所。㊁外國の朝廷。
(くわい-てん[回天](名) (天をめぐらす義) ㊀時勢を一變すること。又、至大なる努力を要すること。「—の事業」。㊁至大なる力量あること。
(くわい-てん[廻轉](名) ㊀くるくるとめぐること。まはること。㊁[理]物體が一線の周圍に運動すること。
—うんどう[廻轉運動](名) ㊀くるくるめぐる運動。㊁[植]きうりなどの卷鬚の他物にくるくるとまきつくこと。
—せん[廻轉線](名) [數]平面上にて、一定點の周圍に廻轉する直線。
—へんくわう[廻轉偏光](名) [理]偏光の偏平面が廻轉すること、偏光が水晶・砂糖溶液若しくは磁場を通過するときに起る。
(ぐわい-てん[外典](名) 「げてん」に同じ。
(ぐわい-でん[外電](名) 外國よりの電報。
(くわい-ど[灰土](名) ㊀はひつち。㊁昔時の形跡を存せざる敗殘物。「金殿玉樓忽に—に歸す」。
(くわい-とう[會頭](名) 會のをさ。くわいちやう。
(くわい-どう[會同](名) ㊀一つ處によりあつまること。㊁諸侯又は使臣などの集會。
(くわい-どく[會讀](名) 數人集(つど)まり、書を讀みて互に其意味を解き論ずること。
(くわい-にん[懷妊](名) はらむこと。みもち。にんしん。(懷胎)。
(くわい-ねん[懷念](名) おもひ。こゝろ。
(ぐわい-はい-そう[外胚層](名) [動]卵の發生する際、二胚葉より成る胚體の外層の稱。
(くわい-はう[廻報](名) ㊀くわいぶん。くわいじやう。㊁へんじ。返信。
(くわい-はう[會報](名) 或會に關する事柄の報知。

(くわい-はう[懷抱](名) ふところにいだくこと。又心におもふこと。
(くわい-はう[快報](名) おもしろきしらせ。こゝちよきおとづれ。
(くわい-はう[快方](名) 疾病又は創傷のこゝろよきかた。快氣。「病氣—に趣く」。
(ぐわい-はう[外方](名) そとがは。又、よそ。
(ぐわい-はう[外邦](名) ぐわいこく。
(ぐわい-ばう[外貌](名) うはべのありさま。見たところのやうす。
(ぐわい-ばう[外防](名) 外國に對する防禦。
(ぐわい-はん[外藩](名) 附屬せる國。ぞくこく。
(くわい-ひ[回避](名) ㊀よけさくること。㊁[法]訴訟事件にて、判事又は書記が嫌疑を招く事柄ある場合に、さけて其審理に關係せざること。
(くわい-ひ[會費](名) 或會の開設又は維持に要する規定の費用。又、會員の負擔する一定の費用。
(ぐわい-ひ[外皮](名) 外部のかは。
(ぐわい-ひん[外賓](名) 內國に來遊せる外國人。
(ぐわい-ぶ[外部](名) そとがは。ぐわいめん。ぐわいへう。
(ぐわい-ぶ[外侮](名) 外國よりのあなどり。又、他人のさげしみ。
(くわい-ふく[回復](名) もとへとり戾(もど)すこと。もとのさまにかへすこと。「天下を—す」。(恢復)。
—こうげき[回復攻擊](名) 占領せられたる陣地などをとり戾すために、敵に攻擊を加ふること。
(くわい-ぶつ[怪物](名) ㊀あやしきもの。ばけもの。へんげ。(變化)。㊁行動又は性狀の測り難く力量のすぐれたる人の稱。
(ぐわい-ぶつ[外物](名) ㊀ほかのもの。他のもの。㊁心に接觸する一切の對象。「—に惑はず」。

(くわい-ぶん[廻文](名) まはしぶみ。廻狀。
—か[廻文歌](名) 和歌の一體、初めより順に讀み下すとも、末より逆に讀み返すとも、同じ語になるやうに作りたる歌。
—し[廻文詩](名) 漢詩の一體、初めより讀み下すとも、末より逆に讀み返すとも、平仄も韻も相かなふやうに作りたる詩。
(くわい-ぶん[怪聞](名) あやしき評判、をかしきうはさ。
(ぐわい-ぶん[外聞](名) よそのきこえ。世間の評判。「—惡し」。
(ぐわい-へき[外壁](名) 外部の隔壁。
(くわい-べん[快辯](名) よどみなく巧に陳(の)べいふこと。辯舌の巧にさわやかなること。
(ぐわい-へん[外邊](名) そとがは。
(くわい-ぼ[懷慕](名) なつき慕ふこと。
(くわい-ほん[快奔](名) はやくはしること。とくかけること。
(くわい-み[快味](名) こゝろよき感じ。こゝちよきおもむき。
(くわい-みん[快眠](名) こゝちよくねむること。
(くわい-む[槐夢](名) (異聞錄に、淳于棼といふもの自己の宅南にある古き槐樹の下に醉臥して、槐安國に遊び南柯郡の守となり功名を博して歸りたりといふ夢を見たりと、ある故事に出づ)ゆめ。ゆめみ。ゆめ。又、功名のはかなきことにいふ語。
(ぐわい-む-きやう[外務卿](名) 明治十八年官制改革以前に於ける外務大臣の稱。
(ぐわい-む-ぎやうせい[外務行政](名) 外國に關する一切の政務の稱、其機關は外務大臣及外交官・領事官等なり、されど宣戰媾和又は條約締結等は、天皇の大權に屬し行政機關の權限以外なり。
(ぐわい-む-しやう[外務省](名) 外務大臣の統轄の下に屬し、其意思を受け外務行政の事務を扱ふ中央官廳、又、外務大臣の處理する事務全體の稱。

(ぐわいむ-だいじん[外務大臣](名) 各省大臣の一にして外務行政の單獨官府、政府の外交を統轄し、外國に於ける帝國商事の保護及外國在留帝國臣民に關する事務を管理し、外交官及領事官を指揮監督するもの。
(くわい-めい[會盟](名) 諸侯又は使臣などが、相あつまりてちかひをなすこと。
(くわい-めい[晦明](名) くらきとあかるきと。よるとひると。やみとあかりと。
(くわい-めい[晦冥](名) まっくらがり。くらやみ。
(くわい-めつ[壞滅](名) やぶれほろぶること。
(ぐわい-めん[外面](名) そとがは。うはべ。
(くわい-もん[槐門](名) 大臣の異稱。
(くわい-もん[廻文](名) 「くわいぶん」に同じ。
—か[廻文歌](名) 「くわいぶんか」に同じ。
(ぐわい-やう[外洋](名) 內海に對して、大洋の稱。そとうみ。
(くわい-ゆ[快癒](名) いゆること。なほること。
(ぐわい-よう[外用](名) 外部に用ふること。
—やく[外用藥](名) 膏藥又はぬり藥等の如く、皮膚に貼(は)り又はぬる藥劑。
(くわい-らい[磈磊](名) ㊀石多くして平かならざること。㊁心の平かならざること。「胸中の—」。
(くわい-らい[傀儡](名) くゞつ。
—し[傀儡師](名) ㊀くゞつまはし。㊁人をあやつりて種々の行動をなさしむる人。さくしや。
(ぐわい-らい[外來](名) ㊀ほかより來ること。㊁外國より渡り來ること。
—くわんじや[外來患者](名) 病院にて、入院患者以外の患者。
—ご[外來語](名) 外國語より借入したる語。

(くわい-らう[廻廊](名) 長く曲折せる廊下。
(くわい-らく[壞落](名) やぶれおつること。くづるゝこと。
(くわい-らく[快樂](名) ㊀こゝちよくたのしきこと。心はればれしておもしろきこと。㊁[心]精力の增進又は要求の滿足によりて生ずる感情。
—せつ[快樂說=Hedonism](名) [倫]人生の目的は愉悅の幸福即ち快樂にありとし、快樂を增進し苦痛を減退する傾向の多少によりて、道德上の價値を定むる一派の說、分つて自己的快樂說と公衆的快樂說との二とす、前者は自己の快樂を增進するを主とし、後者は公衆の快樂を增進するを主とす。
(くわい-らん[廻鑾](名) 天子の行幸先よりかへりたまふこと。
(くわい-らん[廻覽](名) ㊀方々をへめぐり見物すること。㊁廻し仰へて見ること。
(くわい-り[快利](名) はやきこと。すばやきこと。
(くわい-りき[怪力](名) 「くわいりよく」に同じ。
(ぐわい-りつ[外率](名) [數]外項に同じ。
(くわい-りよく[怪力](名) ㊀非常にすぐれたる力量。㊁不思議なる現象をなすはたらき。常識にて知るべからざるあやしきわざ。「—亂神を語らず」。
(ぐわい-りん[外輪](名) ㊀そとがはのわ。そとわ。㊁そとのまはり。
—ざん[外輪山](名) [地]複成火山に於ける舊時の噴火口の壁。
(くわい-りん[悔吝](名) ㊀くやむこと。くゆること。㊁しくじり。やりそこなひ。
(くわい-るゐ[魁壘](名) 「くわいゐ」(魁偉)に同じ。
(くわい-れい[瑰麗](名) めづらしくうつくしきこと、すぐれてうるはしきこと。
(ぐわい-れう[外療](名) 外部の療治。

（くわい-れき【回曆】（名） 一年の循環してめぐりくること。年立返り改まること。
（くわい-ろ【懷爐】（名） 胸腹などを溫むる具。銅又は鐵葉にて製したる小さき箱にして、くわいろ灰を入れ、火を付け密閉して懷中するもの。——ばひ【懷爐灰】（名） 懷爐に入るゝ灰。なすのへたなどを黑燒にして製したるもの。
（くわい-ろく【回祿】（名） ㊀支那にて、火の神の名。（祝融）。㊁火事にて燒けたること。
（くわい-わ【會話】（名） ㊀相會して話すこと ㊁外國語にてする談話。
（ぐわい-わうふ【外王父】（名） 母方の祖父。
（ぐわい-わうぼ【外王母】（名） 母方の祖母。
（くわい-ゐ【魁偉】（名） からだの人なみにすぐれてたくましきこと。
（くわい-ゐん【會員】（名） 會を組織する人。會に「加はれる人。
（ぐわい-ゑん【外援】（名） ほかよりのたすけ。他よりのおよせい。
（くわい-を【穢汚】（名） ㊀よごれ。けがれ。㊁恥辱「又は邪曲。
（くわう【皇】（名） ㊀天子。君王。きみ。かみ。㊁上帝又は造化。かみ。あめ。㊂支那の上代に用ひし一種の冠。上部に翌を描（ゑが）き鳥の羽を飾となしゝもの。㊃支那の古代に、五采の羽を持ちて行ひし舞。㊄はかばのもん。又、みたまやのもん。
（くわう-【皇】（接頭） 至尊又は帝室の事物に冠らせてあがめ申す語。「一帝」「一族」。
（くわう-【光】（接頭） ㊀或語に冠して、廣大なる意を表はす語。「天下に一被す」。㊁或語に冠して、尊敬の意を表はす語。「一來」「一臨」。
（くわう-いう【荒遊】（名） 酒色などにおぼれすさむこと。心を奪はれること。

（くわう-いつ【荒逸】（名） 前條に同じ。
（くわう-いん【光陰】（名） ㊀ひま。とき。「一寸の一輕んずべからず」。㊁（日を光といひ、夜を陰といふ）つきひ。としつき。（歲月）。
（くわう-いん【皇胤】（名） 天子の血統。又、其血胤をうけつぎたまふ方。
（くわう-うん【黃雲】（名） ㊀黃色の雲。㊁ひろき稻田のみのりを雲にたとへいふ語。
（くわう-えい【光榮】（名） はえ。さかえ。
（くわう-えう【光耀】（名） ひかり。かゞやき。
（くわう-えき【廣益】（名） あまねく益すること。
（くわう-えふ【黃葉】（名） 葉綠素分解して黃色を呈する葉。
（くわう-えん【光焰】（名） ㊀ひかりとほのほ。㊁きはだちたるいきほひ。
（くわう-えん【光艷】（名） うるはしきつや。
（くわう-おん【皇恩】（名） 天子の御恩。「語。
（くわう-が【光駕】（名） 人の訪ひ來るとの敬
（くわう-か【遑暇】（名） いとま。ひま。
（くわう-か【皇家】（名） 天子。又、帝室。
（くわう-かう【皇考】（名） 先代の天子を申し奉る語。
（くわう-かう【鑛坑】（名） 鑛物を掘り出すために、山又は地に穿つ坑（アナ）。
（くわう-かく【光覺】（名） 眼に光線の刺激を受け、これを視神經より腦に傳へて、光あるを感覺するはたらき。
（くわう-がく【皇學】（名） 「こくがく」（國學）に「同じ。
（くわう-き【皇基】（名） 天子の國家を治ろしめしたまふ事業又は基礎。
（くわう-き【光輝】（名） ㊀ひかり。かゞやき。㊁いきほひ。ちから。「國家の一」。

（くわう-き【廣軌】（名） 鐵道の軌道の幅が、歐米普通の標準たる四「フィート」八「インチ」半以上なるもの々稱。——てつだう【廣軌鐵道】（名） 軌道の幅が廣軌なる鐵道。
（くわう-きう【光球】（名） [天]太陽の光輝を放てる表面即ち外形の稱。
（くわう-きよう【荒凶】（名） ききん。きようね「ん。
（くわう-きゆう【皇宮】（名） 帝王の住み給へる御宮。ごえふ。きゆうぢやう。（宸宮）。——けいさつ【皇宮警察】（名） 宮殿又は離宮に關する警察、宮內省主殿寮の管轄に屬す。
（くわう-きよ【皇居】（名） 皇宮に同じ。
（くわう-きよく【皇極】（名） 天子の御位。又、天子のにぎりたまふ國家の綱紀。
（くわう-ぎよく-せき【黃玉石】（名） 無色透明の結晶をなす鑛物、甚だ水晶に似て水晶より重く且堅し、彫琢して指環・鈕釦などとす。
（くわう-く【鑛區】（名） 行政廳の許可を得て鑛物の採掘採取をなす特定の區域。——ぜい【鑛區稅】（名） 鑛區の地積に應じて賦課する租稅。
（くわう-ぐう【皇后】（名） 「くわうごう」に同じ。
（くわう-ぐう【皇宮】（名） 「くわうきゆう」に同じ。——けいさつ【皇宮警察】（名） 「くわうきゆうけいさつ」に同じ。
（くわう-くわ【黃花】（名） ㊀黃色なる花。㊁「[植]菊の異稱。
（くわう-くわ【黃化】（名） [植]葉の葉綠素が次第に變じて遂に黃白色となること。
（くわう-くわ【皇化】（名） 天皇の御政治。
（くわう-くわ【黃禍】=Yellow peril】（名） 黃色人種が他人種を侵害すといふこと。黃色人種の勢力

に對する恐怖心より起りたる想像說。黃人禍。
（くわう-くわ【光華】（名） ひかり。かゞやき。
（くわう-くわう【煌煌】（名、副） きらきら光るさまにいふ語。ぴかぴか。（晃晃）。
（くわう-くわう【廣廣】（名、副） ひろびろしてあるさまにいふ語。
（くわう-くわう【皇皇】（名、副） ㊀おごそかなるさま又はさかんなるさまにいふ語。㊁光華あるさまにいふ語。㊂定まらざるさまにいふ語。
（くわう-くわう【轟轟】（名、副） とゞろきひびく音又はさまにいふ語。
（くわう-くわつ【廣闊】（名） ひろびろして眺望のひらけてあること。
（くわう-くわん【黃卷】（名） （支那の昔時、書籍の蠹（シミ）を防ぐために黃蘗の葉にて紙を染めしよりいふ）書籍の異稱。
（くわう-けい【皇繼】（名） 天子の御よつぎ。
（くわう-けい【光景】（名） ㊀ひかり。かげ。㊁ありさま。やうす。
（くわう-けい【黃經】（名） [天]春分點より黃道に沿ひて測りたる天體の角距離。「あること。
（くわう-けつ【曠缺】（名） 官職の久しくかけて
（くわう-けつ【壙穴】（名） 屍をうづむる穴。
（くわう-けふ【廣狹】（名） ひろきとせまきと。又、物のはゞ。
（くわう-げふ【宏業】（名） 大いなる事業。
（くわう-げふ【鑛業】（名） 鑛物の採掘採取其他これに附屬する一切の事業。——けいさつ【鑛業警察】（名） 鑛坑又は鑛業に關する建築場及坑夫又は鑛區の保護等に關する警察。——けん【鑛業權】（名） 特定の人が特定の場所に於て、特定の鑛物を採掘採取するを得る特權。——ざいだん【鑛業財團】（名） [法]鑛業の採掘權者が、抵當權の目的のため、其鑛業に附屬する權利及物件の全部若しくは一部に就き設定したる財團。其設定は所有權保存の登記によりてなす、一個の不動產と看做され、所有權及抵當權以外の物權又は貸借の目的たることを得ず、又、一の財團に屬するものは、同時に他の財團に屬することを得ず。——ぜい【鑛業稅】（名） 鑛業の製產物の價格に應じて、鑛業をなす人に賦課する租稅。
（くわう-げん【廣言】（名） 口にまかせて憚らずいふこと。物事を大きくいふこと。大言。放言。（漫語）。
（くわう-けん-えうふ【黃絹幼婦】（名） （黃絹は絕の字の隱語にして幼婦は妙の字の隱語）字句の絕妙なること。「しより。
（くわう-こう【黃耇】（名） 七八十の老年者。と
（くわう-こう【黃口】（名） ㊀鳥の雛の口の黃なること、轉じて、人の年齡尚は少（ワカ）く經驗未だ足らざるにいふ語。「一の小兒」。——じ【黃口兒】（名） 幼年者又は無經驗者をのゝしりていふ語。
（くわう-ごう【皇后】（名） 皇族の御一人にして、至尊の御配。きさき。きさい。
（くわう-ごう-ぐう【皇后宮】（名） 皇后のおはします宮殿。又、皇后を申し奉る語。——しき【皇后宮職】（名） 宮中及內廷に關する事務を管理し、主管に屬する會計を掌る所。——しよく【皇后宮職】（名） 前條に同じ。——たいふ【皇后宮大夫】（名） 皇后宮職の長官、職務を總理し職員を監督するものにして、親任官待遇なり。
（くわう-こく【皇國】（名） 天皇のしろしめす國の意にして、我國の尊稱。すめらみくに。

（くわう-こく【廣告】（名） ㊀廣く世上に告げしらすること。ひろめ。㊁特定の人に告げ知らせんとすれども、其所在不明なるときなどに、新聞又は官報などに其旨を揭ぐること。㊂ちらし又はひきふだの類の稱。——や【廣告屋】（名） 傭（ヤト）はれて廣告にありく人。廣告の請負を業とする家。
（くわう-こつ【恍惚】（名） 物事に心をとられてうっとりとすること。ほるゝこと。
（くわう-こん【黃昏】（名） たぐれ。たそがれ。
（くわう-さい【光彩】（名） ㊀あざやかなるひかり。きはだちたるつや。㊁他にすぐれたるけしきのあらはるゝこと。「結構一」。
（くわう-さう【宏莊】（名） 大いにしてりっぱなること。
（くわう-ざん【鑛山】（名） ㊀鑛物を採掘する山。鑛物のある山。かなやま。㊁鑛山の事業經營にあたる事務を掌る所。「鑛山一」。——がく【鑛山學】（名） 鑛山より鑛物を採掘採取するに關して、學理上の研究を爲す學。採鑛冶金學。——かんとくしよ【鑛山監督署】（名） 農商務大臣の管理に屬し、鑛山の監督に關する事務をつかさどる所、現今は、東京・仙臺・大阪・福岡・札幌に置かる。——きよく【鑛山局】（名） 農商務大臣の意思を受け鑛業に關する事務を掌る農商務省の一局。
（くわう-し【皇子】（名） 天子の御子の男子にまします方。わうじ。
（くわう-し【皇嗣】（名） 天皇の御よつぎ。
（くわう-しつ【皇室】（名） 天子の御家、天皇の御一門、皇族。——ざいさん【皇室財產】（名） 皇室の御所有に屬する財產。——てんぱん【皇室典範】（名） 皇位繼承其他皇室の御事に關して御定せられたる成典、憲法と相並びて國家法令の

上に立つもの。――ひ【皇室費】(名) 國家の歳出の中、皇室の費用にあつる額の稱。
(くわう-じつ)【曠日】(名) 物事の延引して空しく日を過ごすと。――びきう【曠日彌久】(名) 物事のながびきひまどると。
(くわう-じやう)【皇上】(名) 時の天皇を申し奉る語。
(くわう-じやう)【皇城】(名) 天子のまします御城。きゆうじやう。
(くわう-じゆくかう)【黄熟香】(名) 熱帶地方より舶來する一種の香料、伽羅(キヤラ)の類。
(くわう-じゆ-はうしやう)【黄綬褒章】(名) 私財を獻納して海防の事業を賛するものに賜はる褒章。
(くわう-しよく)【黄色】(名) きいろ。――くわやく【黄色火藥】(名) 一種の火藥、破壞力大いにして、拋射力強きもの。――じんしゆ【黄色人種】(名) 世界の人種の一、皮膚は黄色若しくは淡褐色にして、毛髮黒く且硬直なり、顴骨高くして顔面の下部は黒色人種の如く突出せず、東洋諸國の人民は多くこれに屬す。
(くわう-じん)【黄人】(名) 黄色人種の略言。――くわ【黄人禍】(名) 「くわうくわ」(黄禍)に同じ。――しゆ【黄人種】(名) 黄色人種に同じ。――どうめい【黄人同盟】(名) 黄人種に屬する民族の建設せる國家卽ち我國及清・韓などが、同盟を結びて他人種に屬する民族に對抗すといふと。
(くわう-じん)【荒神】(名) 三寶荒神の略言、俗に竈(カマド)の神として家々に祭る。(灶神、竈神。)――だな【荒神棚】(名) 荒神を祭る棚、竈所の竈の上に掲ぐるもの。――ばうき【荒神箒】(名) かまどを掃(ハ)くに用ふるはうき、かまどは荒神に守らるゝとて、他の不淨のはうきと區別して名づく。――まつ【荒神松】(名) 荒神に奉る松の枝、米の粉などを塗りたるもの。
(くわう-せん)【黄泉】(名) (支那にて、天は玄、地は黄といふより出づ) ㊀地の最下層。㊁よみぢ。よみ。(冥府)。
(くわう-せん)【光線】(名) ㊀あかり。ひかり。㊁[理]光の等質媒體を通過するときは、一直線上に進行するものにして、其進行する直線の稱。
(くわう-せん)【鑛泉】(名) 鑛物の質を含む泉、
(くわう-そ)【皇祖】(名) 天皇の御先祖。
(くわう-そ)【皇祚】(名) 天皇の御位。皇位。
(くわう-そう)【皇宗】(名) 天皇の代々の御祖。
(くわう-ぞく)【皇族】(名) 天皇の御一族、皇室典範第三十條の規定により、太皇太后・皇太后・皇后・皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・內親王・王・王妃・女王をいふ。――くわいぎ【皇族會議】(名) 成年以上の皇族の男子を以て組織せられ、內大臣・樞密院議長・宮內大臣・司法大臣・大審院長の參列の上にて、諮詢せられたる事項を議決する機關。
(くわう-そん)【皇孫】(名) ㊀天皇の御孫。㊁皇統の義にもいふ。
(くわう-たい)【光體】(名) 光を發射する物體。
(くわう-だい)【廣大】(名) ㊀ひろく大きくあると。㊁すぐれてたふときと。――むへん【廣大無邊】(名) ひろくしてかぎりなきと。
(くわう-たいこう)【皇太后】(名) 皇族の御一人にして、天皇の御嫡母。
(くわう-たいこう-ぐう)【皇太后宮】(名) 皇太后のましまず御殿を申す語。――しき【皇太后宮職】(名) 皇太后宮に關する事務を司り、主管の會計を掌る所。――しよく【皇太后宮職】(名) 前條に同じ。――たいふ【皇太后宮大夫】(名) 皇太后宮職の長、職務を總理し職員を監督するものにして、親任官待遇なり。
(くわう-たいし)【皇太子】(名) 現代の天皇につぎて皇位を繼承したまふ方と定まれる皇子。
(くわう-たいそん)【皇太孫】(名) 皇位を繼承したまふ御方と定まりたる皇孫。
(くわう-たう)【荒唐】(名) 言說のよりどころなくとりつゞめなきと。――ふけい【荒唐不稽】(名) より所もなくかんがへなしに說くと。
(くわう-だう)【黄道】(名) ㊀[天]太陽の視軌道、赤道に對して二十三度半の傾斜をなす。㊁よきひがら。吉日。――きちにち【黄道吉日】(名) 事を擧行するに吉なる日。よきひがら。――くわう【黄道光】(名) [天]春季日沒後又は秋季日出前に東天に見ゆる光、熱帶地方にては、毎夕これを見ると得れど、高緯度の地方にては容易に見えず。――たい【黄道帶】(名) [天]天球上黄道を圍める部分、古來これを十二分して十二宮といふ。
(くわう-たく)【光澤】(名) つや。ひかり。
(くわう-たん)【荒誕】(名) 言說のよりどころなきと。うそ。いつはり。
(くわう-だん)【光彈】(名) 暗夜を照らすために發射する砲彈、強大なる光輝を有し、敵の近接の警戒などに用ひらる。
(くわう-だん)【謊談】(名) ねなしごと。うそ。
(くわう-ち)【隍池】(名) 城下のからほり。
(くわう-ぢく)【光軸】(名) [理]複屈折體に於て光の複屈折をなさゞる方向。
(くわう-ちよ)【皇儲】(名) 天子の御よつぎ。

(くわう-ぢよ)【皇女】(名) 天皇の御女、(內親王、
(くわう-ちん)【轟沈】(名) 艦船を砲擊して打沈むると。又、艦船が爆發にかゝりて沈むと。
(くわう-ぢん)【黄塵】(名) ㊀黄なるつちけむり。㊁厭(イト)はしき世間の俗事。
(くわう-てい)【皇帝】(名) 天子の尊稱。
(くわう-てう)【皇朝】(名) 我國の朝廷。又、我國。
(くわう-てつくわう)【黄鐵鑛】(名) [鑛] 鐵と硫黄(イワウ)とより成りて眞鍮(シンチユウ)の如き色を帶びたる鑛物、諸岩石中に分布し、普通結晶面上に條線を具す、質硬(カタ)けれど酸化し易く分解し易し。
(くわう-てん)【皇天】(名) 天のかみ。上帝。
(くわう-てん)【光點】(名) ㊀[理]光の發する點。㊁[天]太陽の黒點附近にあらはるゝ特に光輝の強き部分。
(くわう-ど)【荒土】(名) 不毛の地。
(くわう-ど)【黄土】(名) ㊀黄色を帶びたる土。㊁よみぢ。めいど。「美人―に歸す」。
(くわう-ど)【光度】(名) [理]發光體より單位の距離に於て、光の方向に直角なる衝立(ツイタテ)上の單位の面積に受くる光の量、光度の單位は一燭光なり、一燭光とは、鯨蠟の一時間に百二十「グラム」宛燃燒するときの光度をいふ。――けい【光度計】(名) [理]光度を比較するに用ふる具、「ブンゼン」氏の光度計は、目盛(メモリ)したる臺に、中央に油脂を點したる衝立(ツイタテ)をのせ、其左右に蠟燭及計らんとする發光體を置けるものにして、其ものゝを適宜に動かし、衝立の油脂の色が、何れの側よりも同じに見ゆる位置を求めば、發光體及蠟燭より衝立までの距離の平方の比が、卽ち發光體の光度なり。
(くわう-とう)【皇統】(名) 天皇の御血統。「―連綿」。――ふ【皇統譜】(名) 皇統の順序を志るしある譜、皇室の御系圖。
(くわう-どうくわう)【黄銅鑛】(名) [鑛]銅鑛中須要なる鑛物、色は黄金に似る結晶は微小、概ね樹狀又は毛髮狀の集合をなして鑛脈を成す。
(くわう-どく)【鑛毒】(名) 鑛物の含有する毒、又、其毒のために害を被むると。「―事件」。
(くわう-ねつ)【黄熱】=Yellow fever(名)「マラリア」性の一種の熱病、患者は黒色のものを嘔吐する特徴あり、中央「アメリカ」及「メキシコ」等に流行す、氷點以下の時候にては發生せずといふ。
(くわう-ねん)【光年】(名) [天]光が一年間に進する距離、恒星の距離は甚だ大いにして、里の如き單位にては測り難きを以て、光年にて測る。
(くわう-は)【光波】(名) 光の波動。
(くわう-はい)【荒廢】(名) ㊀あれすたると。くづれはつると。「田園―す」。㊁自家の修業又は職務のなほざりになると。又、自家の修業又は職務をうちすてゝつとめざると。
(くわう-はく)【黄白】(名) (黄は金をいひ白は銀をいふ)金錢の異稱、「―を散ず」。
(くわう-ばく)【廣漠】(名) ひろびろとしてかぎりなきと。
(くわう-はつ)【黄髮】(名) 老人の髮の黄色なると。轉じて、七八十の老人。
(くわう-ひ)【皇妣】(名) 崩御ましまし皇太后。
(くわう-ひ)【皇妃】(名) きさき。
(くわう-ふ)【曠夫】(名) 妻なき獨身者。やもを。
(くわう-ふ)【鑛夫】(名) 鑛山にやとはれて鑛物を掘り出す人夫。かねほり。
(くわう-ぶ)【荒蕪】(名) 田畝などのあれはつると。
(くわう-ふう)【光風】(名) 雨後の晴天に吹くこゝちよき風。――せいげつ【光風霽月】(名) 物事に執着(シフヂヤク)せずして胸中に煩悶苦痛を止めず、洒々落々として快活なる狀態にいふ語。
(くわう-ぶつ)【鑛物】(名) [鑛]地殼岩石を形成する天産の無機物、卽ち、金・石・玉・土・砂・化石・氷・鹽などの類。動物又は植物などの對。(礦物)。――がく【鑛物學】(名) 鑛物の性質種類などを研究する科學。金石學。
(くわう-べつ)【皇別】(名) 皇族より出でし氏族の稱。
(くわう-ぼ)【皇謨】(名) 天子の國家を治ろしめすはかりごと。
(くわう-ばう)【廣袤】(名) よこと長さと。ひろさ。
(くわう-みやう)【光明】(名) ㊀發射する光輝。ひかり。かゞやき。㊁慈悲・博愛、其他すべて心上又は世上の煩惱・罪惡・愚昧等の暗黑を照らして、信仰・道德又は智識の力を與ふるもの、稱。㊂はえあると。いきほひよきと。――じだい【光明時代】(名) 文物道德の興起せる時代、世運の安寧なる時代。――めん【光明面】(名) 光榮又は善德の存在せる方面。
(くわう-みやく)【鑛脈】(名) 鑛物の岩石間に塡充したる脈絡、地下の鑛物を含有する水が、岩石の裂隙の兩壁に物質を沈澱せしむるより生ず。
(くわう-めい)【光明】(名) 「くわうみやう」に同じ。
(くわう-もん)【黄門】(名) 中納言の唐名。
(くわう-や)【曠野】(名) ひろびろとしたる野原。
(くわう-らい)【光來】(名) 人の訪ひくるとの敬語。おいで。「御―被下度候」。
(くわう-らう)【黄老】(名) 黄帝と老子とを祖としたる學、卽ち、生を養ひ無爲を貴ぶ學。
(くわう-りやう)【荒涼】(名) 景色の荒れすさびて物寂しきと。

(くわう-りやう[黃粱](名)「おほあは」の異稱。——いっすゐ[黃粱一炊](邯鄲の枕の故事に出づ)富貴功名の極めて短きにたとへいふ語。
(くわう-りん[光臨](名) 人の訪ひ來ることの敬語。
(くわう-りよう[皇陵](名) みさゝぎ。
(くわう-れい[皇靈](名) 代々の天皇のみたま。——さい[皇靈祭](名) 春秋二度彼岸の中日に行はせらるゝ皇靈の大祭。——でん[皇靈殿](名) 宮中にて皇靈をまつらせたまふ殿。
(くわう-ろせん[黃櫨染](名) 天皇の着させらるゝ御袍の染色、色は茶色に似、御紋は桐・竹・鳳凰などにして、はじ・すはう及米酢・灰などを合はせて染むるもの。

[くわうろせん]

(くわう-わう[皇王](名) 天子。君王。
(くわう-ゐ[皇位](名) 天皇の御位即ち帝國の元首にして且皇室の嫡宗にまします地位、標識として神器を相傳せらるゝ定めなり、男系の卑屬に傳へらるゝを原則とし、嫡長子孫に傳へらるゝを正順とす、皇位は國法の原則として閉斷あるを許さず、先帝崩御の發表と同時に新帝の踐祚あるものとす。
(くわう-ゐ[皇威](名) 天皇の御威光。みいづ。
(くわう-ゐ[黃緯](名) [天]黃道より天體に至る角距離、北に測りたるを北緯といひ、南に測りたるを南緯といふ。
(くわ-えい[花英](名) はな。はなぶさ。
(くわ-えう[火曜](名) 月曜の翌日。
(くわ-えん[火焰](名) [化]流出する瓦斯の燃燒して熱及光輝を放つもの、其中心部は、燃燒物の氣體に塑せる部分にして殆ど無色なり、其外部は、空氣の供給不充分にして固形物遊離し、燃燒熱によりて熱せられて光輝部をなす、又、其外部の空氣に觸るゝ所は、酸素の供給充分なるを以て燃燒十分にして光輝なし。——たいこ[火焰太鼓](名) 周圍に火焰の飾ある太鼓、舞樂に用ふるもの。
(ぐわ-えん[臥煙](名) ㊀昔時、江戸城の見附の番所に附屬せし賤役者。㊁無賴にして品性卑しき人をあざけりていふ語。

[くわえんたいこ]

(ぐわ-か[畫家](名) ゑかき。ゑし。
(くわ-かい[禍階](名) それより次第に禍(ワザハヒ)の及ぶべき物事。
(くわ-がい[花蓋](名) [植]花の萼及瓣の總稱。
(くわ-がい[禍害](名) わざはひ。さいなん。
(くわ-がい[花街](名) 遊里の異稱。はなのちまた。いろまち。いろざと。くるわ。
(ぐわ-かい[瓦解](名) ㊀物事の瓦の如く碎け散ること。㊁東京にて、德川幕府顚覆して武士の離散せしとにいふ。「ー後」。
(くわ-かう[花梗](名) [植]花を附くる柄。
(くわ-かう[花香](名) 花のにほひ。
(くわかう-がん[花崗岩](名) [鑛]石英・長石及雲母の三鑛物より成りたる岩石、我國に多く產し、中國地方にては哩餘に連亙するもあり、銀白色の鱗片と鱗狀の裂け易き黑點とを併有するもあれど、多くは其何れかに偏するものなり。
(くわかう-せき[花崗石](名) 花崗岩のきりいし。みかげいし。
(くわ-がく[化學=Chemistry](名) [化]物質の元素及其化合の分量定則等を研究する科學。「セイミ」。——さよう[化學作用](名) [化]化學的作用に同じ。——しき[化學式](名) [化]元素の符號に其原子の數を表はす數字を添へたるものを組み合せ、化合物の分子の組成を示す式、例へば、H_2Oは水の分子の化學式なり。——しや[化學者](名) 化學を學ぶ者。又、化學に通達せる人。——せん[化學線](名) [理]「スペクトル」の紫及其外部はよく化學的作用を起すものにして、硝酸銀を塗りたる紙を此部に置けば、これを黑變せしむ、此作用ある輻射線を化學線といふ、紫部より外に於て、赤より紫に至る長さと殆ど等しき距離に達す。——てき-さよう[化學的作用](名) [化]化合又は分解せんとすること。——てき-はんおう[化學的反應](名) [化]二種又は二種以上の物質の間に、化學變化を生ずること。——てき-へんくわ[化學的變化](名) [化]物質の性質が全く異なる物質に變ずること。——はうていしき[化學方程式](名) [化]化學的反應を表はす方程式にして、或化合物を表はす符號又は化合元素化合式を數個加へ、新規の數個の元素又は化合物に等しきことを示すもの、例へば、銅に硫酸を加ふれば硫酸銅と水素とを生ずることを示す化學方程式は、Cu(銅)$+H_2SO_4$(硫酸)$=CuSO_4$(硫酸銅)$+H_2$(水素)なるが如し。——ふがう[化學符號](名) [化]元素及其原子量を表はす符號、例へば、水素の一原子量をH、酸素の一原子量をOにて表はすが如し。——へんくわ[化學變化](名) [化]化學的變化に同じ。
(くわ-がく[科學=Science](名) 假定の上に立ちて、特殊なる現象の原理に關し、概括して系統的に論述し證明せる學、これを研究事項によりて、自然科學・精神科學の二とす、理學・化學・動物學・植物學等は前者に屬し、倫理學・心理學・法律學等は後者に屬す、又、これを研究方法によりて說明學・規範學の二とす、前者は理學・化學・心理學等の如く單に說明するものをいひ、後者は倫理學・法律學の如く說明の外に規則を立つるものをいふ。——てき[科學的](名) 個々の事實に就き、秩序なき想像又は意見にあらずして、概括して系統を立て論述し證明するさまにいふ。

(ぐわ-がく[畫學](名) 畫をゑがく技術。——し[畫學紙](名) 鉛筆畫をかくに使用する洋紙、質粗にして脆し。
くわかく-の-あらそひ[蝸角爭](名) (莊子に、蝸牛の角の上に兩國ありて互に攻伐すといふ寓言に出づ)見識の小さき者が、互に役に立たぬ些細の事に爭ふにいふ。
(くわ-かつ[瓜葛](名) (うりのつるの如くまとひつゞく意)血緣のつゞき。えんるゐ。「ーの親」。
(くわ-かふ[華甲](名) 六十一の本卦がへり。
(くわ-がふ[和合](名) まぜあはすること。
(くわ-がふ[化合](名) [化]二種又は二種以上の物質が、相結合してもの〳〵異なる性質を有する物質となること、例へば、酸素と水素と化合して水となるが如し。——ねつ[化合熱](名) [化]化合の際に發生する熱。——ぶつ[化合物](名) 化合によりて生じたる物質。
(ぐわ-がふ[瓦合](名) 破れたる瓦の合するが如く、全からざるものゝあつまるにいふ。
(くわ-かん[果敢](名) けつだんよく、物事をもしきりてなすこと。「ーの氣」。
(くわ-き[果毅](名) けつだんよく、意志のしっかりしてあること。
(くわ-き[花卉](名) 花のさく木と花のさく草と。
(くわ-き[花器](名) 花を活(イ)くる器。はないけ。
(くわ-き[火氣](名) 火の氣。火の勢。
(くわ-き[火器](名) ㊀火をいるゝうつは、即ち、火鉢の類。㊁大砲又は小銃の稱。
(くわ-き[禍機](名) わざはひのよりて發する所。
(くわ-ぎう[蝸牛](名) [動]「かたつむり」の一名。
(くわ-きふ[火急](名) 火の付くが如くに急なること。極めて急なること。(火速)。
(くわ-きやう[過境](名) 境界を超越すること。
(くわ-きよ[寡居](名) やもめぐらし。
(くわく[畫](名) 字を書くに一筆に行(ヤ)るべき程の稱、例へば「一」は一畫、「小」は三畫なるが如し。
(くわく[郭](名) くるわ。「城ー」。
(くわく[槨](名) 棺を入るゝ箱。
(くわ-ぐ[火具](名) 暗夜を照らし又は物を燒毀し若しくは爆發する等に用ふるもの。
(ぐわ-ぐ[臥具](名) ねるだうぐ、即ち、ふとんの類。
(くわく-いつ[畫一](名) とゝのひてたゞしきこと、又、物事の明かにして曲がりなきこと。
(くわく-かう[藿香](名) [植]唇形科に屬する草、莖は薄荷(ハクカ)に似て細長く、藥用又は香料とす。
(くわく-ぐわい[郭外](名) くるわそと。
(くわく-こう[郭公](名) [動](い)「ほとゝぎす」の一種、「ほとゝぎす」に似て、體の稍や大形なると胸腹の黑線の細きとを異なりとす、毛蟲の類を食餌とし、從樹上益鳥なり。(ろ)「ほとゝぎす」の異稱。
(くわく-さく[畫策](名) はかりごとを立つること。
(くわく-さん[擴散](名) ㊀ひろがりちること。㊁[理]一の液體に他の液體を注ぐとき又は一の氣體に他の氣體を注ぐとき、其二つの液體又は氣體が漸次相混和すること、例へば、水の上に「アルコホル」を注ぐに、暫時にして均等に混じ、又、水素瓦斯を充(ミ)せる瓶口を倒にし、酸素瓦斯を充せる瓶口を其下方に置くに、暫時にして上下二瓶の瓦斯は均等に混和するが如きこれなり。
(くわく-しやく[矍鑠](名) 老年なれども壯健にして元氣よきこと。
(くわく-じゆう[擴充](名) おしひろめて缺陷なきやうになすこと。「惻隱の心をーし」。
くわく-す[畫す](他、さ變)(せし、すれ、せよ) ㊀字を書く、又、線を描(ヱガ)く。㊁畫止す。區分す。かぎる。わかつ。定まる。㊂謀計を立つ。はかる。
(くわく-せい[廓清](名) 害物をはらひのぞくこと。
(くわく-せい-き[擴聲器](名) ものいふ聲を高くして遠方に聞えしむるため、口にあて用ふる器。
(くわく-ぜん[畫然](名、副) はっきりとして亂れざるさまにいふ語。
(くわく-だい[廓大](名) ㊀ひろくふときこと。㊁ひろくすること。ひろぐること。——りつ[廓大率](名) [理]「レンズ」其他光線の研究用器械の物體の見ゆる大きさを廓大する割合、即ち其器械にて見ゆる直線と肉眼にて見ゆる直線との比なり。
(くわく-だく[畫諾](名) 物事につけて自家の意見なく、たゞ下官の文案通に許可すること。
(くわく-ちやう[擴張](名) 範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむること。「海軍ー」。
(くわく-ちゆう[郭中](名) くるわのうち。
(くわく-とく[獲得](名) 手にいるゝこと。うること。
(くわく-ない[郭內](名) くるわのうち。
(くわく-ばつ[劃伐](名) 區劃をたてゝ林木を採伐すること。
くわく-びき[畫引](名) 漢字の字書を字の點畫數

にょりて索引するやうに編纂するを、又、其字音。
(くわく-らん[霍亂](名)「コレラ」病の一種、吐瀉はげしく、多くは夏日飲食より起る。
(くわぐわい-みつさう[花外蜜槽](名)[植]花の外部にある蜜槽、榎の葉柄にある蜜槽の類。
(くわ-くわく[花郭](名)いろざと。遊里。
(くわ-くわん[花冠](名)[植]花瓣の總稱。
(くわ-くわん-ぷ[火浣布](名)㊀支那の南荒の外の火山に棲める鼠の毛を取りて織りたるといふ布、火に入れて燒けず却つて白くなるといへり。㊁いしわたを以て織りたる布、よく火に堪ふ。
(くわ-くん[寡君](名)(寡德の君の義)諸侯の臣下が、他の諸侯に對して自分の主君の謙稱。
くわ-け[區分](名)くぶん。わかち。
(くわ-けい[花畦](名)花の植ゑてあるうね。
(くわ-げき[過激](名)度に過ぎてはげしきこと。甚だあらくしきこと。
くわ-けふ[和協](名)中よくむつまじきこと。又、中よくむつまじくせさすること。
(くわ-げん[寡言](名)ことばすくなきこと。多辯ならざること。
(くわ-げん[禍源](名)わざはひの起るもと。
(くわ-げん[訛言](名)㊀うそのひやうばん。あやまりのいひふらし。㊁なまり。方言。
(くわ-げん[過言](名)いひすごし。
(くわ-こ[過去](名)㊀過ぎ去りたる時日又は境遇、むかし。「—を回想す」。㊁まへのよ。前身。前世。「如何なる—の報にて」。㊂[哲]時間の三區別の一、現在の前。㊃[文]動詞及助動詞の過ぎ去りし動作を表はすもの。
(くわ-ご[訛語](名)「くわげん」(訛言)に同じ。
(くわ-ご[過誤](名)あやまち。あやまり。

(くわ-こう[火口](名)[地]火山の噴火口。——げん[火口原](名)[地]火山の中央なる火口と外輪山との間の低地。——げんこ[火口原湖](名)[地]火口原の一部に水の湛(タ)ひて成りたる湖。——こ[火口湖](名)[地]火山の噴火口に水の湛ひて成りたる湖。——らい[火口瀨](名)[地]火山の外輪山以內の溜水相集まりて、外輪山の一部を破り出でゝ成りたる溪川。
(ぐわ-こう[畫工](名)繪をかく人。ゑかき。繪師。
(くわ-こく[過刻](名)さきほど。せんこく。
(くわこく-るゐ[禾穀類](名)稻・麥・粟・稗・黍・蜀黍(モロコシ)・玉蜀黍(タウモロコシ)・薏苡(ハトムギ)等の總稱。
(くわこ-ちやう[過去帳](名)死人の法名を記し置く帳面。(鬼籍、鬼簿)。
(くわ-こん[禍根](名)わざはひの起るもと。
(くわ-ごん[過言](名)「くわげん」に同じ。
(くわ-ざ[冠者](名)古昔、元服したる少年の稱。
(ぐわ-さ[畫叉](名)かけおかけ。
(くわ-さい[果菜](名)㊀くだものとやさいと。㊁おもに其果實を需要する蔬菜、西瓜(スヰクワ)・甜瓜(マクワウリ)等の類これなり。
(くわ-さい[火災](名)火のわざはひ。くわじ。火難。——ほけん[火災保險](名)火災によりて生ずる損害を塡補することを目的となす保險。
(くわ-さう[火葬](名)屍(カバネ)を燒き骨のみ取りて葬(ハウ)ること。土葬又は水葬などの對。
(ぐわ-ざう[畫像](名)畫きたる像。ゑすがた。
(くわさう-るゐ[禾草類](名)家畜の飼料として栽培する草の禾穀類に似たるもの、稗、かるかや・かやつりぐさ等の類これなり。
(くわ-ざん[火山](名)[地]地中の水蒸氣又は融融なる岩漿が、地殼の脆弱部を破りて噴出する山。やけやま。噴火山。——がん[火山岩](名)火成岩の一種、地下の岩漿が逬發し地表に流出して成りたるもの、多量の氣孔を有す。——くわい[火山灰](名)[地]火山より噴出する灰、即ち熔岩の碎片細小なるもの。——しや[火山砂](名)[地]火山灰より稍々大いなる熔岩の碎片。——たう[火山島](名)[地]海中火山の噴出によりて生ずる島。——だん[火山彈](名)[地]熔岩の碎片の大いにして彈狀をなせるもの。——ぢしん[火山地震](名)[地]火山破裂の際に起る地震。——みやく[火山脈](名)火山の線狀をなして排列するもの、稱。——れき[火山礫](名)[地]熔岩の碎片の礫大なるもの。
(ぐわ-さん[畫讚](名)畫の上に題する讚。
(くわさんくわ-ちつそ[過酸化窒素](名)[化]二酸化窒素の稱。
(くわさんくわ-すゐそ[過酸化水素](名)[化]無色の液體、容易に酸素を放出するを以て酸化の作用強く、其溶液は絹・木綿等を晒(サラ)すに用ふ、過酸化「バリウム」に稀硫酸を注げばこれを得。
(くわさんくわ-バリウム[過酸化—=Barium peroxide](名)化灰色の粉末、強き熱度を加ふれば酸化「バリウム」を生ず。
(くわ-し[花絲](名)[植]雄蕊の葯を附くる柄。
(くわ-し[菓子](名)一種の食品、食膳の外に供ふるものにして、古昔は果實なりしより轉じて名づく、小麥の粉米の粉又は餅などに、砂糖・餡の類を加へて種々の形に製す、もちぐわし・ひぐわし等の名稱あり。(餻餅、餈餌)。——いれ[菓子入](名)菓子を入れおくための器。——がた[菓子型](名)落雁などを製するに、粉を打ち込むべき型。(花模子、脫子)。——き[菓子器](名)菓子をもり客に供(ソナ)ふる器。——ざら[菓子皿](名)菓子を盛りて客に供ふる皿。——ぢゆう[菓子重](名)菓子を入るゝ小さき重箱。——ばこ[菓子箱](名)菓子を入れて音物などにする箱。——パン[菓子麪麭](名)中に餡(ア)を入れ菓子の如く製したる麪麭。——ぼん[菓子盆](名)菓子を入れて客に供ふる盆。——や[菓子屋](名)菓子を製し賣る家又は人。(餻餅匠)。

(くわ-じ[火事](名)火のわざはひに罹(カ)りて家屋などの燒くること。(火災、火難)。——しやうぞく[火事裝束](名)消防夫などが火事場に赴く定めのよそほひ。——どろ[火事泥](名)「くわじばどろばう」の略言。——ばおり[火事羽織](名)昔時、武士などが火事場に赴くときに着せし羽織、形は陣羽織に似てぶつさきにし背に定紋などを着けたり。
くわじ-ば[火事場](名)火事のあるところ。——どろばう[火事場泥坊](名)㊀火事場の紛擾に乘じて竊盜をはたらくもの。㊁他人の紛擾に乘じて利益を攫取する人をのゝしりていふ語。
(くわ-しつ[過失](名)㊀あやまち。あくじり。やりそこなひ。㊁[法]法を犯さんとする故意なくして法を犯す行爲あること。規則習慣を遵守せず又は疎虞・懈怠等により、故意なくして法に觸(フ)るゝこと。——さつしやう[過失殺傷](名)[法]故意なくして過(アヤマ)ちて人を殺し若しくは傷つけたる罪、例へば、塡裝せる銃を弄び、過ちて引金に觸れて傍人を殺傷したる如きをいふ。
(くわ-じつ[過日](名)過ぎし日。先日。

(くわ-じつ[果實](名)㊀[植]植物の子房の成熟したるもの。くだもの。み。みづぐわし。㊁[法]或基本の物件より生殖する利益の稱、元金に對する利息又は家畜の產する子などの類これなり。
(くわ-しや[火車](名)㊀惡心の老婆。わにばゞ。㊁汽車。火輪車。
(くわ-しや[華奢](名)花やかによそほふこと。はなやかに飾ること。
(くわ-しや[火舍](名)香爐。又、火入。
(くわ-しや[花車](名)(花をまはすものゝ意なりといふ)やりて。(老鴇)。
(くわ-しや[貨車](名)鐵道列車の貨物を積むもの。荷物汽車。
(くわ-じや[冠者](名)「くわんじや」に同じ。
(くわ-しやう[過賞](名)ほめすごし。「—辭」。
(くわ-しやう[火傷](名)[醫]やけど。
(くわ-しやう[和尙](名)「ヲシヤウ」に同じ。(おもに天台宗などにていふ)
(ぐわ-しやう[臥床](名)㊀ねどこ。ふしど。㊁とこにつきてあること。ねてゐること。
(くわ-しゆ[火酒](名)せうちう。
(くわ-しゆ[花樹](名)花のさく樹木。
(くわ-しよ[華胥](名)(支那の黃帝が午睡に華胥といふ國に遊びたりといふ故事に出づ)ひるね。午睡。「—の夢」。
(くわ-しよ[過書](名)關所(セキショ)通行の切手。くわそ。(過所)。
(くわ-じよ[花序](名)[植]着生する花の排列の稱、分って無限花序と有限花序との二とす、前者は其下部の花先づ開き順次上部へ開き行く、一に上昇花序といふ、後者は莖の頂端に花先づ開き順次下部に開き行く、一に下降花序といふ。
(くわ-じよう[過剩](名)定數よりありあまること。のこりあること。あまり。

(くわ-しよく[貨殖](名)財產をふやすこと。商賣をさかんにすること。
(くわ-しよく[華燭](名)はなやかなる光のともしび(婚禮の儀式などに用ふる語)。——のてん[華燭典](名)婚禮。
(くわ-しよく[過食](名)過分に食ふこと。くひすぎ。(暴食)。
(くわ-しよく[火食](名)物を煮たきして食ふこと。
(くわ-しん[禍心](名)わざはひをなさんとたくらむこゝろ。「—を包藏す」。
(くわ-しん[化身](名)「けしん」に同じ。
(くわ-しん[花神](名)花のたましひ。
(くわ-しん[花脣](名)花の開くを人のものいふにたとへ花の瓣をくちびるにたとへいふ語。
(くわ-しん[花心](名)㊀[植]花の中心即ち雌雄蕊の稱。㊁美人のこゝろ。
(くわ-しん[花信](名)花の開きたりといふ知らせ。花のおとづれ。——ふう[花信風](名)初春より初夏までの風の稱、五日に一番、梅花風より楝花風に及び都合二十四番あり。
(くわ-じん[寡人](代)(寡德の人の義)王侯などの謙稱。
くわ-す[化](自、さ變)㊀うつりかはる。かはる。㊁かはりて異類のものとなる。ばく。「鷹化して鳩となる」。㊂導かれ移る。感じ做(ナ)ふ。從ひ變ず。「德に—」。
くわ-す[化](他、さ變)㊀うつりかはらしむ。かはらす。かふ。㊁かはりて異類のものとなす。㊂敎へ導く。導き移す。從ひ做(ナ)はしむ。「民を—」。
くわ-す[和](自、さ變)㊀やはらぐ。とゝのふ。㊁したしむ。むつぶ。㊂怨(ウラ)をとき好(ヨシ)みを結ぶ。㊃ほどにかなふ。宜しきに當る。㊄まじ

る、混ず。㊅従ひ爲す。つきて行ふ、「天下これに—」。㊆他の聲に應じて聲を發す。他の歌ふにつきて歌ふ、「汝先歌へ我これにくわせん」。㊇他の詩作の韻によりて詩作す。又、他の詩意に答へて作詩す。

くわ・す せしすするすれせよ [和](他、さ變) ㊀やはらぐ。とゝのふ。㊁したしみむつばしむ。㊂まぜあはす。混合す。

くわ・す せしすするすれせよ [課](他、さ變) わりあつ。おほす。

くわ・す せしすするすれせよ [科](他、さ變) 刑罰をおはす。

ぐわ・す せしすするすれせよ [臥](自、さ變) ふす。ねる。

(くわ-ずゐ) [花蕊](名) 【植】花の雌蕊・雄蕊の總稱。

(くわ-せい) [火星](名) 上遊星の中にて最も地球に近きもの、太陽よりの平均距離五千七百萬里にして、六百八十七日にて太陽を一周す、直徑は一千七百里にして、二個の衛星あり、色はおもに赤し、中に青緑の見ゆるは水陸の分布ならんといひ、又、南北兩極に白色の見ゆるは雪圏ならんといひ、表面無數の線状の見ゆるは運河ならんといひ、雰圍氣ありて生物存在するならんともいへり。(熒惑星)。

(くわ-せい) [化生](名) ㊀そだつこと。生ずること。㊁生物の形を變ずること、ぼうふりの蚊となるが如きをいふ。

(くわ-せい) [化成](名) ㊀そだて、其生を遂げしむること。「天地の萬物を—するや」。㊁前形を變じて現形となること。㊂化合して一の物となること。

(くわ-せい) [和聲](名) ㊀やはらぎたる聲。又、和してうたふ聲。㊁[Harmony]數個の旋律相合して同時に響くこと。又、或旋律に或聲を調和すること。

(くわ-せい) [課稅](名) 租稅を人民にわりあつること。又、わりあつる租稅。——**へうじゆん** ヘウジユン [課稅標準](名) 租稅を賦課するに就き法律にて定めたる標準、地租の地價又は酒造稅の石數の如きものにて、これに稅率を乘ずれば其稅額を算出し得。

(くわせい-がん) [火成岩](名) 【地】岩石の二大別の一、地下の熔解せる岩漿が迸發して、地表又は其附近に於て凝結せしもの、火山岩と深造岩とあり、おもに石英・長石・雲母・輝石・角閃石などより成り、普通塊狀にして層をなさず。

(くわ-せき) [化石](名) 死せる生物の遺骸又は痕跡が化して石となること、又、其石に化したる生物の遺骸又は痕跡の稱、化石はおもに水中に起る現象にして、水成岩中には多く前世界に於ける生物の化石を包藏す。

(くわ-せん) [火戰](名) 火兵戰の略言。

(ぐわ-ぜん) [果然](副) はたして。

(ぐわ-ぜん) [瓦全](名) 徒らに生存すること。何事をもなし得ずしてながらふること。「玉碎—」。

(ぐわせん-し) [畫仙紙](名) 支那產の紙、白紙よりも厚く白く判も大いなり、書畫の用とす。

(くわ-そ) [過書](名) 關所(セキシヨ)通行のてがた。

(くわ-ぞく) [火賊](名) 銃器を持ち群をなせる賊。

(くわ-ぞく) [華族](名) ㊀貴族又は淸華(セイグワ)の稱。㊁明治二年六月、公家及諸大名に賜はりたる稱號にして、皇室の藩屛たる一種の階級、これを公・侯・伯・子・男の五等に分ち、國家に功勞ありし者は特旨を以てこの階級に列せらる。——**くわいくわん** [華族會館](名) 華族の集會所、同族中の貴族議員の互選も此處にて行ふ。——**ぢよがくかう** [華族女學校](名) 學習院女學部の舊稱。——**れい** [華族令](名) 明治十七年發布せられたる華族の待遇等に關する法令。

(くわ-た) [過多](名) おほすぐること。

(くわ-た) [夥多](名) おびたゞしきこと。おほきこと。

(くわ-たい) [禍胎](名) わざはひのよりて起る所。

(くわ-たい) [過怠](名) ㊀あやまち。おこたり。ぬかり。㊁「くわたいきん」の略言。——**きん** [過怠金](名) 過怠の所爲に對して負擔せしむる金。くわれう。

(くわ-だい) [過大](名) 大きに過ぐること。なみにはづれてふときこと。

(くわ-だい) [科第](名) 進士の試驗。

(くわ-だい) [課題](名) 課して爲さしむる題。

(くわ-だい) [花臺](名) 花瓶をおく臺。

(ぐわ-だい) [畫題](名) 畫に描(エガ)き出す形象の標題。

(ぐわ-だい) [臥內](名) ねどこ。ふしど。

(くわ-たう) ヴート [過當](名) 程(ホド)に過ぎてゐること。普通にはづれてゐること。分不相當。

(くわ-たう) ヴート [果糖](名) 甘味を有し、還元性の水に溶(ト)け易き物體、醱酵すれば「アルコール」を發生す。

(ぐわ-だう) ヴード [畫道](名) 繪畫のみち。

(くわ-たく) [火宅](名) 【佛】(煩惱の苦を火に、宅を三界にたとへていふ) 現世の稱、「五濁の—」。

(くわ-たく) [花托](名) 【植】花柄の花を着する所の膨(フク)れてある部分。

(ぐわ-たふ) ヴート [臥榻](名) ㊀ねどこ。ねだい。㊁安んぜる領地の義にかりいふ語、「—の側、豈に他人の鼾睡を容れんや」。

(くわ-だん) [花壇](名) 草花を植うるため、高く土を盛りて壇の如くこしらへたるもの。(花塢、花畦)。

(くわ-だん) [果斷](名) 物事をおもひきって行ふこと、決斷よくして實行の意志強き性質。

(くわ-ちう) [華胄](名) 門閥高き家がら。

(くわ-ぢく) [花軸](名) 【植】花梗を出せる莖の部分。

(くわ-ちやう) ヨウ [課長](名) 一課の事務を擔當し課員を統率するもの。

(くわ-ぢやう) ヂヤウ [火定](名) 行者(ギヤウジヤ)などが、火中にみづから身を投げ入れて死すること。

(くわ-ちう) [花柱](名) 【植】雌蕊の長き柄。

(くわ-ちう) [火中](名) ㊀火のなか。㊁火の中に入れて焼き捨つること。

(くわ-ちう) [渦中](名) ㊀水などのうづまく中。㊁紛擾せる事件のうち。

(くわ-ぢう) [過重](名) ㊀過度に大事にすること。㊁過度におもきこと。

(くわつ) [活](名) ㊀いきてゐること。又、たすかること。㊁氣絕したる人を、其急所を突き又は揉(モ)みなどして蘇生せしむること。「—を求む」。

(くわつえふ-じゆ) ヨウ [闊葉樹](名) 【植】葉のひろき樹木、即ち、なら・くぬぎ・かし・くり等の類。

(くわつ-がん) [活眼](名) 明かなる眼識。

(くわつ-がん) [刮眼](名) 「くわつもく」に同じ。

(くわつ-き) [活氣](名) ㊀よく活動する身心の元氣。㊁はたらき動く勢。

(くわつ-き) [火氣](名) ひのけ。

(ぐわつ-き) [月忌](名) 去りにしつきのめいにち。

(くわつ-くわざん) [活火山](名) 【地】現在噴火しつゝある火山。

(くわつ-くわつ) [聒聒](名、副) かまびすしきさまにいふ語。

(くわつ-けい) [活計](名) くちすぎ。なりはひ。くらし。生計。

(くわつ-げき) [活劇](名) 演劇の狀態を實際に行ふこと。

(くわつ-こ) [括弧](名) 數字又は文字の前後に挿(サ)みて、他との區別を明かにするために用ふる記號、其中間に挾まるゝものは、一群に總括せらるゝものとす、[ ]( )( )「」等種々あり。

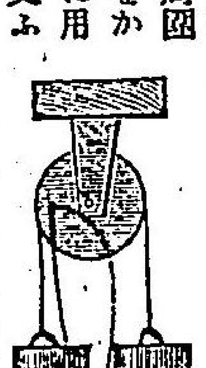
(くわつ-ご) [活語](名) 【文法】「ようげん」に同じ。

(くわつ-さう) ウーツ [聒噪](名) かまびすしきこと。

(くわつ-さつ) [活殺](名) いかすところすこと。活動をなさしむるとなさしめざること。——**じざい** [活殺自在](名) 思ふまゝにとりあつかふこと。

(くわつ-じ) [活字](名) 活字金にて個々に鑄造したる文字、これを組み列べて活字版を作成するもの、大小種々あり、日本にては最も大なるものを初號と稱し、以下順を逐ひて一號・二號等の名あり、もとは木製なりき。——**きん** [活字金](名) 活字を鑄るに用ふる合金、即ち、百分中に十七八分の「アンチモニー」を含める鉛。——**ばん** [活字版](名) 活字を組みてつくりたる印刷版。——**ほん** [活字本](名) 活字版を印刷したる本。

(くわつ-しや) [滑車](名) 【理】水平軸の周圍に廻轉し得る圓板にして、周圍に溝を穿ち、これに綱をかけて、物體を扛擧するに用ふるもの、其水平軸を支ふる框(ワク)の固定せるものを固定滑車といひ、上下し得るものを動滑車といふ。


[くわつしや]

(ぐわつ-しよく) [月食](名) 「げつしよく」に同じ。

(くわつ-じん) [活人](名) 生きてある人。命ある人。——**ぐわ** [活人畫](名) 集會などの餘興として衆人の覽に供するため、活人が恰も畫中の人の如く或さまに扮してあること。

(くわつ-せき) [滑石](名) 一種の礦物、上品なるは色白く下品なるは色黃なり、これを細粉となし、紙などに塗抹す。

(くわつ-せん) [括線](名) 數字又は文字の或部分を一括して、他と區別するために其側につくる線。

(くわつ-ぜん) [豁然](名、副) ㊀ひろ〴〵とうちひらけたるさまにいふ語。㊁疑惑又は迷妄の忽ち開け散ずるさまにいふ語。「—大悟す」。

(くわつ-そく) [活塞](名) 圓筒內に密に嵌入し、且自由に出入し得るやうに裝置しある栓、蒸汽機關又は「ポンプ」等に設けあるものこれなり。

(くわつ-たい) [活體](名) 生活しある物體。「—の解剖」。

(ぐわつ-たい-しよく) [月帶食](名) 「げつたいしよく」に同じ。

(くわつ-たつ) [闊達](名) 度量寬大にして、物事に拘泥せざること。

(くわつ-ち) [猾智](名) 狡猾なる智慧。わるがしこきこと。わるぢゑ。

(ぐわつ-てん) [月天](名) 【佛】月天子の略言。——**しん** [月天子](名) 【佛】月の神、一に月宮天子ともいふ、四天王に屬し四天下を照らすといふ。

(くわつ-と) (副) にはかに怒り立つさまにいふ語。「—と急き立つ若狹介」。

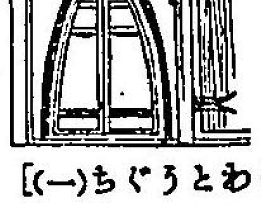
(くわつ-どう) [活動](名) ㊀はたらき動くこと。㊁勢力ある行動をなすこと。——**しやしん** [活動寫眞](名) 映像の活動する狀態を映(ウツ)し出す幻燈。——**りやう** ヨウ [活動量](名) 【化】氣體又は液體の單位の容積中にある分子量の數。

(くわつ-なう) ウ [括囊](名) (易經に出づ、囊の口をむすめくゝる義) 多言せざること。放縱ならざること。物事をむすめまもること。

(ぐわっぱい［月牌］(名) 位牌に毎月なす供養。
(くわっぱつ［活潑］(名) ㊀魚の勢よく水上にはぬる音。㊁精神又は擧動の勢よきこと。いきいきとせること。――はっち［活潑潑地］(名) 精神の勢氣みちみちして煩悶又は澁滯なき狀態。
(くわっぱふ［活法］(名) 巧に應用せらるゝ方法。活用するによろしき方法。
(くわっぱん［活版］(名) 活字を以て組み立てつくりたる印刷版。――ずり［活版刷］(名) 文書を活版にくみて印刷すること。又、其印刷したる文書。――や［活版屋］(名) 活版を組み立つると又は其印刷を職業となす人。又、其家。
ぐわっぴ［月日］(名) 月と日と。
(くわつぶつ［活物］(名) 活動するもの。生活せるもの。――きせい［活物寄生］(名) 【植】菌類などの生活せる動植物に寄生して、これより營養分を吸收すること。
(くわっぽ［濶步］(名) ㊀濶揚(おうやう)なるあるきかた。氣位高きあるきかた。おほまた。㊁他を眼下に見て行動する狀態。「文壇に―す」。
(くわつめい［活命］(名) いのちあること。
(くわつもく［刮目］(名) 目をぬぐひて見開くこと。注意して見ること。
(くわつやく［括約］(名) ㊀くゝりちゞむること。㊁よせあつめて一つにすること。――きん［括約筋］(名) 【生】肛門・口若しくは膀胱等の孔端をちゞめつゞむるための筋。一は濶大作用をなし一は收縮作用をなす二種の纖維より成る。
(くわつゆ［蛞蝓］(名) 【動】「なめくぢ」に同じ。
(くわつよう［活用］(名) ㊀活(い)かして用ふること。利用すること。はたらかすこと。㊁【文法】語尾の變

化。はたらき。――げん［活用言］(名) 【文法】語尾の變化する單語、即ち、動詞・形容詞・助動詞の稱。
(くわつりょく［活力］(名) 活動の力。生活の力。
(くわつろ［活路］(名) まぬかれ出づる路。いのちのたすかる路。「一條の―を求む」。
(くわてい［課丁］(名) 公用に役使せらるゝ成年者。よぼろ。にんぷ。(丁)。
(くわてい［禍梯］(名) 次第に禍にすゝみ及ぶべき事物。
(くわてい［科程］(名) ほど。しな。
(くわてい［過程］(名) 物事の經過せるみち。
(くわてい［課程］(名) 課して爲さしむる仕事のほど。
(くわてう［花朝］(名) 陰曆、二月十五日の異稱。
(くわてう［花鳥］(名) 花と鳥と。――の―つかひ［花鳥使］(名) 艷書を持たせてやるつかひ。こひのなかだち。
(くわてつ［瓜瓞］(名) (うりと小さきうりとの意) 本家と末家との關係。ちつゞき。血族。
(ぐわでふ［畫帖］(名) 繪を集めたる折本又は冊子。
(くわでん［訛傳］(名) あやまりの風說。
(くわでん［瓜田］(名) うりの生(お)ふるはたけ。――のくつ［瓜田履］(名) 瓜田に履をいれてふみこめば、瓜をぬすみはせぬかと他の疑を受くるより、嫌疑の起り易き行爲にいふ。「―李下冠」。
(くわてんげっち［花天月地］(名) 花開きて月明かなる風景。春の月夜の景。
(くわと［蝌蚪］(名) ㊀【動】おたまじゃくし。㊁篆字の稱、形おたまじゃくしに似たるより名づく。
(くわと［過渡］(名) ㊀わたること。わたる所。わたり。㊁已に舊態を脫して未だ新態を成さざる途中

の狀態。――じだい［過渡時代］(名) 物事が過渡の狀態にある時代。
(くわど［過度］(名) 度にすぐること。程をこゆること。
(ぐわど［畫圖］(名) くわいぐわ。ゑ。
(くわとう［科頭］(名) 頭に何物をもかぶらぬこと。
(くわとう［裹頭］(名) 頭を袈裟(けさ)にてつゝむこと。――しゅう［裹頭衆］(名) 【佛】五條袈裟を著し頭をつゝみてある僧侶。
(ぐわとう［瓦燈］(名) 燈火を點ずる陶製の具、四角形にして上狹く下廣し。――ぐち［瓦燈口］(名) ㊀家の壁などに設くる出入口の上を弓狀につくりたるもの。㊁芝居にて、舞臺に設けたる家の正面の出入口。


[(一)ちぐうとわぐ]

(くわとうせいぢ［寡頭政治＝Oligarchy］(名) 共和政治の一、或少數の人員が協同して政治を行ふこと。貴族政治の如きこれなり。
(くわとん［火遁］(名) 火中に入りてまぬかれ出るといふ幻術。「―の術」。
(くわなん［火難］(名) くわさい。火災。
(くわにふ［火入］(名) 陶器の釉(くすり)の面に波文の如きわれめをなせるもの。
(くわねつ［火熱］(名) 火のあつさ。
(くわねつじょうき［過熱蒸氣］(名) 【理】飽和してあらざる蒸氣、此蒸氣は其飽和の狀態に於ける溫度より高き溫度にあるを以て過熱といふ。
(くわのくつ［靴沓］(名) 獸皮にてつくれるくつ、古昔、蹴鞠などに用ひしもの。
(くわはう［花苞］(名) 【植】花梗の下部にある鱗狀の片。

(くわはう［果報］(名) ㊀因果の報、むくい。㊁仕合よきこと。うんつよきこと。――もの［果報者］(名) しあはせもの。
(くわはう［火砲］(名) 使用し運搬するに少くとも數人を要する發火の兵器。大砲。
(ぐわはう［畫報］(名) 狀態を繪畫に描(ゑが)きて報知すること。又、其繪畫。
(ぐわばう［臥房］(名) ねや。ふしど。
(くわはうわえき［過飽和溶液］(名) 【化】或溫度に於ける飽和溶液を靜かに冷却したるもの、下りたる溫度に於ける飽和溶液よりも割合に多量の溶質を含む。
(ぐわはく［畫伯］(名) 繪畫の道に長じたる人。
(くわはん［過半］(名、副) 半數以上。おほかた。――すう［過半數］(名) 半數以上の數。
(くわひ［果皮］(名) 【植】果實の皮部の稱、外果皮・中果皮・內果皮の三部より成る。
(くわひ［花被］(名) 【植】萼と花冠との總稱、其花蕊を包むと恰も衣服の人身を被ふが如きよりいふ。
(くわび［華美］(名) はなやかに美(うつく)しきこと。又、かざりのきはだちて見事なること。
(ぐわびゃう［臥病］(名) 病みて床につくこと。
(くわひん［華品］(名) うつくしきしな。
(くわびん［過敏］(名) 神經などの普通よりもするどくなりて、刺戟感受のはげしきこと。
(くわビン［花瓶］(名) 花卉を挿(さ)し入るゝ瓶、はないけ。
(くわふ［寡婦］(名) かゝるところなき獨身のをんな。夫にはなれたる獨身の婦人。やもめ。
(くわふ［花譜］(名) 花を其開く時節の順序によりて記錄したるもの。
(ぐわふ［畫譜］(名) 花鳥山水などを時節の順序

によりて描(ゑが)きわけたるもの。
(くわふうびゃう［花風病］(名) 色きちがひ。
(くわふきふ［過不及］(名) すぎたると及ばざると。度に適合せざること。
(くわふく［禍福］(名) わざはひとさいはひと。「―門なし、たゞ人の招く所」。――をほしいまゝにす［擅禍福］ 樞威を弄して、勝手に人の賞罰又は黜陟を行ふにいふ。
(くわふそく［過不足］(名) すぎたるとたらざると。
(くわぶつ［貨物］(名) ㊀有形の財貨。㊁荷物。――れっしゃ［貨物列車］(名) 「くわしゃ」［貨車］に同じ。
(くわぶつ［菓物］(名) くだもの。
(くわふん［花粉］(名) 【植】雄蕊の葯裂開して中より出だす黃色の粉末、風又は蟲の媒介により、雌蕊これを受粉して生殖作用を營む。
(くわぶん［瓜分］(名) 無造作(むざふさ)に土地などを分割すること。「天下を―して功臣を封ず」。
(くわぶん［過分］(名) 分限を過ぎてあること。
(くわへい［貨幣］(名) 社會に流通して、交換の媒介・交換の方便及價格の標準・蓄積の用に供せらるゝ物件にして、通常鑄造の金錢及兌換券不換紙幣を總稱す、從來其信用を堅固にして流通を圓滑ならしむるために、國家これが證明をなし、本位貨幣と補助貨幣とに分つ。――けいざいじだい［貨幣經濟時代］(名) 社會が貨物經濟時代より一段の進步をなし、貨幣を交易の媒介物として、經濟界の事業を經營する時代、これより更に進步して、信用經濟時代となる。
(くわへい［花瓶］(名) 「くわビン」に同じ。
(くわへい［火兵］(名) 小銃又は大砲等の總稱。――せん［火兵戰］(名) 敵と味方と相隔てゝ、

互に彈丸を發射しあふ戰鬪。
(ぐわべい［畫餅］(名) (畫に書きたる餅の食ふとを得ざる意) 物事其用をなさずして無効なること。むだ。
(くわへう［華表］(名) ㊀とりゐ。㊁家屋の外部の飾。
(くわへん［火片］(名) ひのこ。
(くわへん［花片］(名) はなびら。
(くわべん［花瓣］(名) 【植】花の美麗なる部分、即ち、花冠の各片。はなびら。
(くわぼく［花木］(名) ㊀はなときと。㊁美しき花のさく木。
(ぐわほん［畫本］(名) ゑをあつめたる本。ゑを挿入してある本。ゑほん。
(くわほんくわ［禾本科］(名) 【植】草本又は木本のものあり、葉は二列をなし、下部は管狀の鞘をなし前面にて分裂す、完全單葉にして並行脈なり、花は穎を有する龠花にして穗狀又は複穗狀に排列す、果實は穎果なり。
(くわみつ［花蜜］(名) 花の蜜槽より分泌する甘味のもの。
(くわめん［火綿］(名) 【化】「セリユローズ」を強き硝酸及強き硫酸を以て處理して得たる爆發藥、無煙火藥の原料なり。
(くわもく［科目］(名) 物事の區分。しな。わかち。科の小わけ。
(くわもく［寡默］(名) ことばすくなきこと。又、多辯ならざる性質。
(くわもつ［貨物］(名) にもつ。くわぶつ。
(くわもん［火門］(名) 銃砲の發火する處。
(くわもん［花紋］(名) 花の模樣(もやう)。
(くわやう［花樣］(名) ㊀前條に同じ。㊁花のかたち。
(くわやく［課役］(名) わりあてられたる夫役。
(くわやく［火藥］(名) 硝石・木炭・硫黃等を混合じて製したる爆裂藥にして、黑色火藥・褐色火藥・綿火藥・無煙火藥・黃色火藥等の種類あり。がふやく。

あはせぐすり、てっぱうぐすり、えんせう。——こ[火藥庫](名) 火藥をおさめおくくら。
(くわ-よ[過譽](名) ほめすぎ。
(くわ-よく[寡欲](名) 慾望の少きと、貪欲ならざる性質。
(くわ-らく[和樂](名) やはらぎたのしむと。うちとけてたのしむと。
(くわ-らく[華洛](名) みやこ。京都。
(ぐわら-ぐわら(名、副) 積みたる物の崩るゝ音。
(くわらり(名、副) 閉けたるさまにいふ語。
(ぐわらり(名、副) ❶俄に戸を引き明くるなどのさまにいふ語。❷積みたる物の崩るゝ音。
(くわ-らん[禍亂](名) わざはひ。みだれ。
(くわ-りう[花柳](名) ❶花と柳と。❷遊女・藝妓などの稱。 ——かい[花柳界](名) いろざと。くるわ。遊里。藝者社會。 ——びやう[花柳病](名) かさ。黴毒。
(くわ-りふ[顆粒](名) つぶ。
(くわ-りよ[過慮](名) おもひすごし。かんがへすごし。
(くわ-りよう[火龍](名) 火事のほのほの盛なるありさまにいふ語。「—天に冲す」。
(ぐわ-りよう[畫龍](名) 畫にかきたる龍。 ——てんせい[畫龍點睛](名) (龍を畫きて其睛をかきこむ義にして、それにて龍の活動する様を表はし得るをいふ) 或言句又は或行爲によりて、擧(カ)(チ)て施設せる物事の大いに活動するとにいふ。
(ぐわ-りよう[臥龍](名) ❶ふしわだかまれる龍。❷野にかくれたる大人物。 ——ばい[臥龍梅](名) [植]梅の一種、花は淡紅にして枝幹地上に蟠(ワダカマ)り延びて、枝の地に着く所に根を生ず。
(くわ-りよく[火力](名) 火のちから。火のいきほひ。
(くわ-りん[花梨](名) 熱帶地方より舶來する材木、木理こまかにして紫檀に似たり、諸種の器具の料に供せらる。[花櫚]。

(くわ-りん(名) [植]薔薇科に屬する木、樹皮の外層は次第に剝離す、花は淡紅色にして枝の頂端に生じ、實の外面は平滑なり、觀賞用として栽培せられ、果實は食用又は藥用に供せらる。[榠樝]。
(くわ-りん[火輪](名) ❶太陽の異稱。❷「くわりんしや」又は「くわりんせん」の略言。 ——しや[火輪車](名) 汽車の異稱。 ——せん[火輪船](名) 汽船の異稱。
(くわりん-さん-せき-くわい[過燐酸石灰](名) [化]燐酸鹽と硫酸「カルシウム」との混合物、肥料に用ふ。
(くわりん-たう[花林糖](名) 一種の菓子、饂飩(ウドン)粉に砂糖を和し、油にてあげたるもの。
(くわ-れう[過料](名) ❶徳川時代に、過失のつぐのひに金錢を出さしめしと、庶人の閏刑とせり。❷[法]法令に違反せる行爲者より、國家が強制的徵收をなす金錢。
(くわ-れう[科料](名) [法]違警罪の刑罰、五錢以上一圓九十五錢以下の範圍により、其輕重に應じて犯人より徵收す。
(くわ-ろ[蝸廬](名) ❶自己の住家の謙稱。❷小さき家。
(くわ-ろ[火爐](名) ゐろり。こたつ。又「ストーヴ」。
(くわ-わう[花王](名) [植]牡丹(ボタン)の異稱。
くわゐ[慈姑](名) [植]澤瀉科に屬する草、水田などに生ず、葉は戟形又は箭形にして、地下莖は球狀の塊をなし食用に供せらる。
(くわん[官](名) ❶朝廷又は政府。おかみ。❷くに。國家。❸行政事務を分擔する機關。「太政—」「神祇—」。❹行政事務を扱ふ場所。やくしよ。

❺吏員が擔當せる職務。やく。つとめ。❻吏員が或職務を行ふ地位、例へば、判事の如し、職に就きて何裁判所判事といふ。職の對。❼吏員又は司僚。やくにん。つかさびと。「百—扈從す」。❽動植物の具有する機能。「心の—はよく思ふ」。
(くわん[棺](名) ひつぎ。[柩]。 ——をおほひてことさだまる[蓋棺事定] 斯世を去りたる後、生前の事業又は性行の眞價の定まるにいふ。
(くわん[管](名) ❶くだ。つゝ。❷筆のぢく。轉じて、筆。❸笛又は笙などの稱。管樂器。「—絃」。❹雷管の略稱、殊に、前裝銃に用ふる雷管の稱。
(くわん[環](名) ❶金屬の輪。わ。❷引出(ヒキダシ)などに付くる把手(ツマミ)の輪の形をなせるもの。❸すべて輪狀をなすものゝ稱。たまき。
(くわん[卷](名) ❶まきもの。卷軸。❷しよもつ。書籍。
(くわん[貫](名) ❶錢の名目、古昔は一千文をいひ、後世は九百六十文をいふ。❷現今の制にては、瓦斑の單位、一瓩の四分五なり、「千分一」を匁といふ。
(くわん[歡](名) よろこび。たのしみ。[驩]。
(くわん[冠](名) ❶かんむり。❷最もすぐれたるもの。第一。首位。「文人の—」。
(くわん[鰥](名) 老いて妻なき獨身の男子。やもを。
(くわん[罐](名) ❶つるべの類、液體を汲(ク)むに用ふるもの。❷金屬(多くはブリキ)製の箱、中に食品などを入れ腐敗を防ぐに用ふ。
(くわん[關](名) ❶くわんのき。とざし。❷せき。せきしよ。「—を出づ」。❸うまつぎ。しゆくば。❹山入の要處。❺くゝり。要會。❻からくり。展機。「施—」。❼臍のまはり三寸程の間の稱、古來呼吸する氣の服中にをさまる處といへり。❽腕の中程の折れ曲がる所。

(くわん[欵](名) ❶たのしみ。よろこび。「—を盡さず」。❷まごゝろ。忠誠。❸なさけ。悃愛。❹うらぎり。內應。「—を通ず」。❺かでうがき。ひとつがき。❻區別してある箇條又は事項。❼文字を凹(クボ)く刻(キザ)みこむと。又、其刻みこみたる凹き字。
(くわん[館](名) ❶やかた。たち。❷やどや。はたごや。「旅—」。❸一構の大屋。「書籍—」。 ——をすつ[捐館] 貴人の死去せるにいふ。
(くわん[觀](名) ❶みえ。外見。「徒に—を飾る」。❷かたちづくり。儀容。❸ながめ。眺望。❹ありさま。狀態。❺あそび。遊樂。❻たかどの。樓臺。❼みかた。見解。「樂天—」「厭世—」。❽見るに足るべきもの。みもの。❾道士の居處。道宮。❿物事を分別鑑識する能力。
(くわん[浣](名) 一ヶ月を三分したるもの、即ち十日間の稱、始めの十日を上浣といひ、中の十日を中浣といひ、其以後を下浣といふ。(澣)。
(くわん[寬](名) ❶ゆるやか。ゆたか。❷廣きと。
(くわん[卷](名) まき。
(—くわん[卷](接尾) 卷物又は書籍の數をかぞふるにいふ語。
(—くわん[管](接尾) 笛又は筆などの個數をかぞふるにいふ語。
(ぐわん[丸](名) たま。又、圓きもの。「—藥」「彈—」。
(ぐわん[頑](名) ❶かたくな。❷動搖せざるさまにいふ語。「—として聽かず」。
(ぐわん[願](名) ねがふと。ねがひ。特に、神佛にかくるねがひ。 ——い[願意](名) ねがひの主意。
(くわん-いう[官有](名) 國家の所有。
(くわん-いう[官遊](名) 官吏となりて遠地に行くと。
(くわん-いう[勸誘](名) すゝめさそふと。
(くわん-いん[官印](名) ❶官署又は官職の印章。

❷太政官の印の特稱。
(くわん-えい[卷纓](名) 「けんえい」に同じ。
(くわん-えい[官營](名) 政府にての營業。
(くわんえい-せん[寬永錢](名) 寬永十三年に鑄造せし銅錢、表に寬永通寶の四字ありて、一枚は一文に當り、今日一厘に通用す。又、明和五年に鑄造せし背銅錢、形は前者に比すれば稍や大きく、裏に波の形あり、一枚は四文に當り、今日二厘に通用す。
(くわん-おん[觀音](名) [佛]「くわんぜおん」の略言。 ——さう[觀音草](名) [植]吉祥草の一名。 ——ちく[觀音竹](名) [植]竹の一種、高さ一尺許、琉球の觀音山に產す、盆栽などに栽培せらる。りうきうしゆろちく。[鳳尾竹]。 ——びらき[觀音開](名) 左右より閉(ト)ぢ中央にて合するやうに作れる二枚戶、倉・厨子(ヅシ)などにあると。
(くわん-か[官家](名) 朝廷。
(くわん-か[換價](名) 代價につもると。
(くわん-が[官衙](名) くわんちやう。やくば。
(くわん-かい[勸解](名) 裁判官が原被兩告に對し、さとして和解せしむると。
(くわん-かい[官海](名) 官吏の社會。
(くわん-かい[官階](名) 官等。
(くわん-がい[灌漑](名) 水をそゝぎて土地を濕ほすと。
(くわん-かう[還幸](名) 主上の行幸先より還りたまふと。[還御]。
(くわん-かう[慣行](名) ❶從來のならはしとして行はるゝと。❷其事を常に行ふと。其事をつゞけて行ふと。 ——はん[慣行犯](名) [法]數回同一の所業をなすによりて成立する犯罪、例へば、私に醫業をなすが如きをいふ。
(くわん-かう[勸降](名) 降伏をすゝむると。

(くわん-かく[丱角](名) あげまき。つのがみ。轉じて、こども。兒童。
(くわん-がく[勸學](名) 學問の道を勸め勵ますと。又、自ら學問の道にはげみすゝむと。 ——ゐん[勸學院](名) 天長三年藤原冬嗣の創立せし學校にして、藤原氏の子弟を敎育せし所。
(くわん-がく-き[管樂器](名) 笙・笛・篳篥などの如く、管を以てつくりたる樂器の總稱。
(ぐわん-がけ[願掛](名) 神佛にぐわんをかくると。
(くわん-かつ[管轄](名) 權限を以て支配すると。又、權限の及ぶ範圍。 ——くわんちやう[管轄官廳](名) 其物事を管轄する權限を有する官廳。 ——くゐき[管轄區域](名) 權限の及ぶ範圍。 ——さいばんしよ[管轄裁判所](名) [法]訴訟の性質又は土地の區域によりて、其事件を管轄すべく定められたる裁判所、例へば、訴訟の性質に就きては、違警罪又は價格百圓以下の訴訟は區裁判所を其管轄裁判所とし、重罪又は價格百圓以上の訴訟は地方裁判所を其管轄裁判所とするが如し、又、土地の區域に就きては、違警罪は犯罪地の區裁判所を其管轄裁判所とし、價格百圓以上の訴訟は被告人の現住所の地方裁判所を其管轄裁判所とするが如し、訴訟の性質に就きての管轄裁判所は、裁判所構成法に列擧しあり、土地の區域に就きての管轄裁判所は、刑事にては犯罪地、民事にては被告人の所在地の裁判所なるを普通とす。
(くわん-かふ[擐甲](名) 甲(ヨロヒ)を身體に着くると。
(くわんかん-しき[觀艦式](名) 軍艦を一所に集め、天皇親臨して、各艦隊の行列の間を通御して檢閱したまふ儀式。
(くわん-き[官紀](名) 官府の規律。官吏のとりしまり。「—振肅問題」。

(くわん-き[喚起](名) ❶呼びおこすこと。❷唱へはじむること。

(くわん-き[歡喜](名) よろこぶこと。よろこび。――だん[歡喜團](名) 古昔の菓子の一種、歡喜天に供するもの、義にして、一名を團喜ともいひ、薬種・五穀などをつゝみて油にてあげたるもの。――てん[歡喜天](名)[佛]一に聖天ともいふ。九千八百の諸大鬼王を將領し三千世界を遊行し、三寶をまもり衆生を利し、所願するものは、ことごとく滿足を得しめんと誓へりとぞ。呪法は、牛の蘇を以て圓き壇をつくり、胡麻油を盛りたる銅盤を載せ、像を油の中に安置して油を灌ぐこと一日乃至七日すべしといふ。

[くわんきてん]

(くわん-ぎ[官妓](名) 朝鮮などにて、伎樂を奏することを以て官廷に事ふる女。

くわん-ぎく[鈗菊](名) (鈗は瑱の當字)致所の名、菊花の形を座とし、これに鐶を添へたる形。

(くわん-きふ[還給](名) 物件をもどしあたふること。所有者へかへすこと。

(くわん-きふ[官給](名) 官よりの給與。

(くわん-きふ[緩急](名) ❶ゆるきときびしきと。おそきとはやきと。「―其宜しきを得」。❷事變の起ること。「一旦―あれば義勇公に奉じ」。――れっしや[緩急列車](名) 走行の緩急が自由に出來得るやうの機關を具する鐵道列車。

(くわん-きやう[環境](名) 四圍の外界。

(くわん-きやう[還郷](名) くにもとにかへること。きこく。

(ぐわん-きやう[頑強](名) 意地づよきこと。手強きこと。

(くわん-きやく[還却](名) もどすこと。かへすこと。

(くわん-きよ[官許](名) 政府より特定の人に特定の行爲をゆるすこと。官のゆるし。(免許)。

(くわん-ぎよ[還御](名) 陛下の御かへり。(回鑾)。

(くわん-きよく[款曲](名) ❶つゝみかくしなき心のたけ。まこと。❷入り組みたる内密の事情。

(くわん-きん[官金](名) 官府の所有に屬する金錢。――せうひ[官金消費](名) 官吏が其取扱に屬する官金を私につかひこむこと。

(ぐわん-きん[元金](名) もときん。――すゑおき[元金据置](名) 公債などの元金を償還せずにおくこと。「―年限」。

(くわん-く[管區](名) くわんかつの區域。

(くわん-ぐ[驩虞](名) よろこびたのしむこと。

(ぐわん-ぐ[頑愚](名) かたくなにして道理の分らぬこと。

(ぐわん-ぐ[玩具](名) もてあそびもの。おもちや。

(ぐわん-くう[頑空](名) かたくなにして知識なきこと。

(くわん-くわい[歡會](名) たのしき會合。おもしろきよりあひ。

(くわん-ぐわい[管外](名) 管轄區域のほか。

(くわん-くわう[觀光](名) ❶ながめ。やうす。「―形を改む」。❷他國の土地の狀態又は人民の風俗などを觀察すること。

(くわん-くわ-こどく[鰥寡孤獨](名) たよりなき人民。無告の民。

(くわん-くわつ[寬濶](名) ❶度量のひろきこと。❷おほまかなること。氣象のはでやかなること。

(くわん-くわん[桓桓](名、副) 虎又は武士のたけきさまにいふ語。

(くわん-くわん[欵欵](名、副) まこと多きさま又はゆるやかなるさまにいふ語。

(くわん-ぐわん[宦官](名) 支那朝鮮にて、生殖器を切斷して宮中に事ふる男子。君側にはんべる人。

(ぐわん-ぐわん[還願](名) 神佛にかけたる願をとくこと。ぐわんほどき。

(くわん-ぐん[官軍](名) 政府方の軍勢。賊軍の對。(王師)。

(くわん-げ[勸化](名) 寄附金などをつのること。(抄化、募化)。――ちやう[勸化帳](名) 勸化の趣意を書きて寄附金を募(つの)るに用ふる帳面。

(くわん-けい[關係](名) ❶一のものと他のものとが互に繋(かか)りつながること。かゝりあひ。❷一のものと他のものと相對する狀態、遠近・大小・可否・異同などはこれを表はすものなり。❸えんびき。つゞきあひ。❹てづる。つて。❺男女間の情交。

(くわん-けい[還啓](名) 皇太后・皇后・皇太子等の行啓さきよりの御かへり。

(くわん-けい[換刑](名) [法]罰金又は科料を納むる能はざるものを、一圓を一日に充て、禁錮又は拘留に處すること。

(くわん-げい[歡迎](名) 好意を表してむかふること。よろこびむかふること。――くわい[歡迎會](名) 歡迎の意を表するために催(もよほ)す會合。

(くわん-けつ[完結](名) まったく結了すること。

(くわん-げふ[官業](名) 官府の營業。

(くわん-げふ[勸業](名) 農工などの業を勸め勵ますこと。――ぎんかう[勸業銀行](名) 農工業の改良發達のため、其資本を貸附することを以て目的とする株式組織の銀行。――さいけん[勸業債券](名) 勸業銀行が日本勸業銀行法により發行することを許されたる債券、券面二十圓以上にして無記名(應募者の請求により記名となすことを得)利札附なり、少なくとも毎年一回以上抽籤にて

償還せられ、其場合に割増金の附與あることあり。

(くわん-けん[關鍵](名) くわんのきとかぎと。轉じて、物事の内に入りこむために要用なるもの。

(くわん-けん[官憲](名) ❶國家又は政府ののり。❷つかさびと。やくにん。官吏。

(くわん-けん[管見](名) (管(くだ)より伺ひ見る義)狹き意見。

(くわん-けん[官權](名) 官府の權力。政府の權限。――たう[官權黨](名) 官權を維持又は擴張せんとする黨派。政府に盲從する黨派。

(くわん-げん[換言](名) 言ひやうをかふること。

(くわん-げん[管絃](名) ❶笛又は笙などと琴又は琵琶などと。❷いとたけ。❸音樂を奏すること。――がく[管絃樂](名) ❶舞臺と看客との間の側傍に設けたる樂師又は樂隊の場所。❷笛笙などと琴琵琶などとの合奏。

(くわん-げん[還元](名) ❶根源のものに復歸すること。❷[化]酸素を含む化合物より、酸素の總量又は其幾分の去ること。――ざい[還元劑](名) [化]酸素を含む化合物を還元せしむるために用ふる原料。――さよう[還元作用](名) 還元するはたらき。

(くわん-こ[讙呼](名) 多人數かまびすしくさけぶこと。

(くわん-こ[歡呼](名) よろこびて呼び叫ぶこと。

(くわん-ご[歡娯](名) よろこびたのしむこと。

(くわん-ご[歡語](名) おもしろくはなしあふこと。うちとけてかたること。(款語)

(ぐわん-こ[頑固](名) 氣質かたよりて事理に通ぜざること。かたくな。かたいぢ。

(ぐわん-こ[紈袴](名) ❶しろねりの絹にて仕立てたるはかま。古昔、支那の貴公子の着せしものといふ。轉じて、富貴の家の子弟。又、柔弱なる貴公子。

(くわん-こう[寬厚](名) むねひろくして性質篤實なること。「―の長者」。

くわんこう-ば[勸工場](名) 數多の商人が、規約を結びて、一つの建物の中に、常に商品を陳列して販賣する場所。

(くわん-こく[勸告](名) 或事をなさしむるやうすゝめとくこと。「辭職―」。

(くわんこつ-だったい[換骨奪胎](名) (骨をとりかへ胎をとる義)詩文などを作るに、他人の作の主意をとりて其組立を異にすること。

卄(くわん-ざ[冠者](名) 「くわんじや」に同じ。

(くわん-ざ[環坐](名) くるまざ。まどゐ。

(くわん-さい[完濟](名) 「くわんせい」に同じ。

(くわん-さい[關西](名) 古昔、近江國逢阪山に關所ありしより、それより以西の國々の稱。

(ぐわん-ざい[丸劑](名) ぐわんやく。

(くわんざい-にん[管財人](名) 財産を管理する人。

(くわん-さう[觀相](名) 人の容貌骨格等をみて、其性質又は運命を判斷すること。にんさうみ。

(くわん-さう[萱草](名) [植]わすれぐさ。

(ぐわん-さく[玩索](名) 考慮し眞意を索むること。

(くわん-さつ[觀察](名) ❶物事によく注意してみあきらむること。❷事物の現象に就き、自然の狀態のまゝに研究し觀察すること。實驗の對。――がん[觀察眼](名) 觀察する才能。――し[觀察使](名) 古昔、畿內七道へ遣はして政治の可否又は官吏の善惡などを觀察せしめたる使者。

(くわん-さん[換算](名) 單位の異なる數量に計算しかふること。「百弗を圓に―すれば」。

(ぐわん-さん[元三](名) (歳と月と日とのはじめの義)元日の稱。三元。――にち[元三日](名) 前條に同じ。

(くわん-し[環視](名) 四方をとりまきてみること。又、多くのものが其狀態に對し注意してあること。「列國―の中にありて」。(圜視)。

(くわん-し[官司](名) つかさびと。又、やくば。

(くわん-し[冠詞](名) 名詞に冠する詞、英語の a 又は the の如きをいふ。

(くわん-し[冠辭](名) [文法]まくらことば。

(くわん-じ[莞爾](名) にっこり笑ふさまにいふ語。「―而笑」。

(くわん-しう[還收](名) 他人の手にわたりてあるものをとりもどすこと。

(くわん-しき[款識](名) 鐘鼎などに刻みたる文字。

(くわん-じざい[觀自在](名) ❶成覺して障礙煩惱なく、觀ずる所自由自在なること。❷[佛]觀世音菩薩の異稱。

(くわん-しつ[灌室](名) [佛]灌頂を行ふ室。

(ぐわん-じつ[元日](名) 年の始めの第一日。第一月の第一日。ぐわんにち。

(くわん-しふ[慣習](名) ❶社會の全部若しくは一部が、永く行ふところの行爲。❷個人のくせ。――はふ[慣習法](名) [法]法律上効力を有する慣習。不文法。

(くわん-しや[官舍](名) 官より吏員の住居にたてたる屋舍。

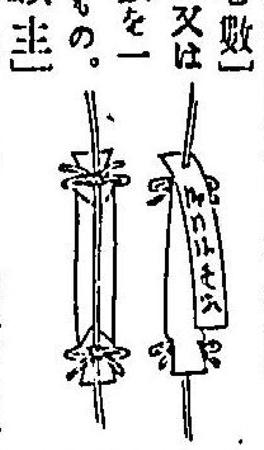
(くわん-じや[冠者](名) ❶元服して冠したる少年。くわんざ。くわんざ。❷無冠にて六位の人の稱。

(くわん-じや[患者](名) 病氣にかゝりてゐる人。びやうにん。――しつ[患者室](名) 病院などにて、患者のために定められたる室。

(くわん-しやう[官省](名) ❶中央の官廳。❷やくば。やくしよ。

(くわん-しやう[勸奬](名) すゝめはげますこと。ほめすゝむること。

(くわん-しやう)[管掌](名) つかさどること。とりあつかふこと。
(くわん-しやう)[勸賞](名) 褒(ホ)めはげますこと、はげましたゝふること。「殿の―に預かる」
(くわん-しやう)[觀賞](名) みてはむること。みてたのしむこと。
(くわん-しやう)[觀象](名) 氣象を觀測すること。――だい[觀象臺](名) 氣象を觀測するための臺。
(くわん-しやう)[勸請](名) 離れたる土地の神佛の靈を移して祭ること。
(ぐわん-しやう)[願狀](名) ねがひの主意を認めたる文書。願を立つる趣を記したる手紙。
(くわんしやう-しう)[管城子](名) 筆の異稱。
(くわん-しやく)[官爵](名) やくめとくらゐと。「―を削る」
(くわん-しゆ)[卷首](名) まきもの又は書籍のはじめ。
(くわん-しゆ)[觀取](名) みて其眞相を知ること。
(くわん-しゆ)[官守](名) やくめ。つとめ。「―ある者の其事を得ざれば去る」
(くわん-しゆ)[管守](名) つかさどり守ること。又、ばんにん。つかさ。
(くわん-しゆ)[貫首](名) ㊀かしらだつ人。㊁廿藏人の頭の異稱。㊂天台の座主の異稱。(貫主)。
(くわん-しゆ)[卷數](名) [佛]讀誦せし經卷又は呪文等の名目度數を一紙に合せて記しゝもの。


[くわんしゆ]

(ぐわん-しゆ)[願主](名) 願を立つる人。ねがひを掛くる人。ねがひぬし。
(くわん-しゆく)[慣熟](名) なれて巧なること。
(くわん-しゆだん)[慣手段](名) いつもきまりたるてだて。
(くわん-しよ)[官署](名) やくば、やくしよ。
(くわん-しよ)[患所](名) 病又は創ある所。
(くわん-しよ)[灌所](名) 手を洗ふ所。
(くわん-しよ)[寬恕](名) ㊀度量ひろくして、おもひやり深きこと。㊁不問に附すること。ゆるすこと。
(ぐわん-しよ)[願書](名) 願のおもむきを記したる書面。申請書。
(くわん-しよう)[換稱](名) ことなるとなへ。
(くわん-しよう)[還昇](名) 地下(ゲ)となりたる殿上人が、再び昇殿を許さるゝこと。
(くわん-しよく)[官職](名) ㊀官制によりて定められたる事務取扱の地位。㊁かみのつとめ。やくめ。㊂官と職と。
(くわん-しん)[歡心](名) よろこぶこゝろ。――をかふ[買歡心] 人の機嫌をとる。
(くわん-しん)[關心](名) 心にかゝりて忘れられざること。
(くわん-じん)[官人](名) つかさびと。やくにん。
(くわん-じん)[寬仁](名) 度量ゆるやかにして、なさけ心の深きこと。「―大度」
(くわん-じん)[勸進](名) ㊀勸め奉ること。㊁佛徒などが、佛道に關したる事につき、俗人を勸めて寄附をなさしむること。(勸化)。――ずまふ[勸進相撲](名) ㊀勸進の錢を集むるために催(モヨ)すすまふ。㊁木戸錢をとりて興行するすまふ。――ちやう[勸進帳](名) 勸進の主意を記して寄附をあつむるに用ふる帳面。――のう[勸進能](名) 見料にて見物をなさしめし能樂。――もと[勸進元](名) 勸進相撲興行の發起人。
くわん-す[鑵子](名) ㊀茶道にて湯を沸(ワ)かす器、眞鍮(シンチユウ)・銅などをもて造る。(茶鑵)。㊁ちやがま(關西地方の方言)。

[くわん(一)す]

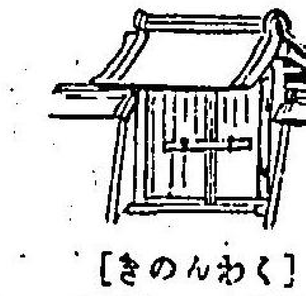
くわん-す[關](自、さ變) かゝはる。かゝる。たづさはる。
くわん-す[冠](他、さ變) ㊀ものを頭上にす。㊁元服す。㊂冠を着く。
くわん-す[管](他、さ變) 管轄をなす。とりしまる。つかさどる。
くわん-ず[觀](他、さ變) よく〳〵注意して見る。こまかに識別す。
(くわん-せい)[慣性](名) [理]物體が外力の作用を受けざれば、靜止してあるか若しくは一定の速度にて一定の方向に進むかするを、「ニウトン」の創設にして卽ち運動の第一律なり。(運動の條參照)。
(くわん-せい)[官制](名) 政務の分配の規定、卽ち、官廳の組織權限又は官吏の配置職權等を規定せるもの。「―改革」
(くわん-せい)[關西](名) 「くわんさい」に同じ。
(くわん-せい)[欵誠](名) まこと。まごゝろ。
(くわん-せい)[完成](名) まったく出來上がること。又、完全に出來上がること。
(くわん-せい)[完濟](名) まったくとゝのへすますこと。かいせい。
(くわん-ぜい)[關稅](名) 內國より外國へ輸出する貨物又は外國より內國へ輸入する貨物に對して課する稅。稅關なる機關を設けてこれを徵收す。國定稅率・協定稅率又は從價稅・從量稅の區別あり。――どうめい[關稅同盟](名) 二國若しくは二國以上が同盟して、相互間の輸出入貨物には關稅を課せず、同盟外の諸國間の輸出入貨物に課稅して、其收入を分配すること。
(くわん-せう)[歡笑](名) おもしろげにわらふこと、たのしみわらふこと。

(くわん-せう)[環礁](名) [地]海上に現出し中央に水を湛(タタ)へて環狀をなせる珊瑚礁。
(くわん-せう)[觀照](名) 觀じて明かに知ること。
(くわん-ぜ-おん)[觀世音](名) (梵語、Avalokitesvaraの譯語、正しくは觀自在と譯す)[佛]菩薩の一、慈悲の大德を行ひ、世人の其名を稱する音聲を觀じて皆解脫を得しむ。忍辱柔和の相を有し、種々に形相を變ずといふ。くわんおん。

[くわんぜおん]

(くわん-せき)[貫籍](名) にんべつ。こせき。
くわんぜ-こより[觀世小縒](名) 「くわんぜんより」に同じ。「又次郎といへる男―を始めて今重寶となれり」(紙索、紙縒子)。
(くわん-せつ)[關節](名) ㊀骨と骨との互に相接する所卽ち骨のつがひめ、其運動の自在なる部には、靭帶ありて兩骨を接合し、軟骨ありて兩骨の衝突を避け、滑液ありて兩骨の摩擦を減ず。㊁物と物との相接合する所。
(くわん-せつ)[官設](名) 官府の直接に設くること。「―鐵道」
(くわん-せつ)[環節](名) [動]動物の體軀が許多同一なる環狀の節に分たるゝもの。――どうぶつ[環節動物](名) [動]體軀柔軟にして長圓筒狀をなし、許多の環節の連續より成る動物、かひこ・みゝず等これなり。
(くわん-ぜつ)[冠絕](名) すぐれて第一なること。
ぐわんぜ-な-し(くしきけれ)[頑是無し](形、二) (頑も是も無しとの義)小兒などの、是非善惡の區別を未だ知らずして、何となくあどけ無くあり。
(くわん-ぜ-ぶ)[觀世麩](名) 燒麩の一種。
(くわんぜ-りう)[觀世流](名) 能樂の一派、足利義滿頃の人にして能を創始せし觀世阿彌の嫡傳なるもの、其子孫これが座をつかさどれり。
(くわん-せん)[官撰](名) ㊀官にて選ぶこと。「―辯護士」。(官選)。㊁官にて文書などを編纂すること。
(くわん-せん)[官線](名) 鐵道又は電信線の官有なるもの。
(くわん-ぜん)[完全](名) 不足なきこと。缺點なきこと。まったきこと。――へんたい[完全變態](名) [動]昆蟲が仔蟲及蛹の二期を順次經過して、更に成蟲となること。――むけつ[完全無缺](名) 十分にとゝのひて少しも不足なきこと。
(くわんせん-きよく)[管船局](名) 遞信大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、航路標識・航路・船舶・海員・水運又は保險海事會社の監督に關する事項を扱ふ遞信省の一局。
(くわんぜん-ちようあく)[勸善懲惡](名) 善事を勸め惡事を懲(コ)らすこと。
くわんぜん-より[觀世縒](名) 紙を細長く切りてよりたるもの。かんぜこより。
(ぐわん-そ)[元祖](名) ㊀其家系の第一番の人。先祖。㊁或物事を創始したる人。創業者。
(くわん-そく)[管足](名) [動]棘皮動物の水管系より出す柔軟なる管狀物の稱、其根基に收縮性の小胞を具し、收縮每に水液をこの中に送り、以てこれを伸長して體の移動を營む。
(くわん-そく)[觀測](名) 或もの、現象を觀察して、其變化運行等を測度すること。「天體の―」
(くわん-ぞく)[貫屬](名) 戶籍の存在する土地。例へば、東京府華族といへば、東京府の貫屬なり。――がへ[貫屬替](名) 貫屬をかへて他の土地へ移ること。
(くわん-たい)[寬待](名) ゆるやかなるもてなし。
(くわん-たい)[緩怠](名) をこたり。なほざり。
(くわん-たい)[欵待](名) 親切にもてなすこと。
(くわん-たい)[冠帶](名) (かむりとおほおびとの義)禮儀あつき風俗。「―變じて左衽となる」
(くわん-たい)[緩帶](名) ㊀衣をくつろげ帶をゆるく結ぶこと。「長袖―都人を學ぶ」。㊁なまけたる衣のきかた。戒心せざる身なり。
(くわん-だい)[寬大](名) きびしからざること。ゆるやかなること。
(くわん-だう)[官道](名) 官の開鑿又は營繕に係る道路。
(くわん-たく)[官宅](名) 「くわんしや」(官舍)に同じ。
(ぐわん-だて)[願立](名) 神佛に誓(チカ)ひて願(グワン)をかくること。
(ぐわん-たん)[元旦](名) 年の第一番目の日。ぐわんじつ。
(くわん-ち)[官治](名) [法]國家が官廳をして直接に行政をなさしむること。自治の對。
(くわん-ち)[官地](名) 官有の土地。
(くわん-ぢく)[卷軸](名) ㊀卷物又は書物のをはりの稱。㊁其中にて秀拔なるもの(おもに詩歌にいふ)。
(くわん-ちやう)[管長](名) 宗門を管理する長。
(くわん-ちやう)[官長](名) やくにんの長。
(くわん-ちやう)[官廳](名) 「くわんぷ」(官府)に同じ。
(くわん-ちやう)[灌腸](名) 肛門より藥劑を注入すること、大便の通じをよくするために行ふ。
(くわん-ぢやう)[灌頂](名) ㊀[佛]密敎にて頂に香水を灑(ソソ)ぐ儀式、結緣傳法のときなどに行ふもの。㊁墓に水をかけそゝぐこと。

(くわん-ちゆう［灌注］(名) そゝぎかくること。
(くわん-ぢよ［官女］(名) 宮中に奉仕する女中。
(くわん-ちよう［勸懲］(名) 善をすゝめ惡をこらすこと。——しゆぎ［勸懲主義］(名) 善をすゝめ惡をこらすことを目的となす主義。
(くわん-つう［貫通］(名) ㊀一の側(ハシ)より他の側へぬけとほること。㊁始めより終りまで、つゞけをふること。「—して讀む」。㊂條理よく通じてあること。㊃抑(ヒ)く物事に通ずること。——じゆうさう［貫通銃創］(名) 銃丸が體をぬけとほりたるによりて受けたる創。
(くわん-づめ［罐詰］(名) 食品を罐につめいるゝこと。又、其食品。
(くわん-てい［官廷］(名) ㊀朝廷。政府。㊁役所。
(くわん-てい［官邸］(名) 官舍に同じ。
サくわん-てい［官廷］(名) 太政官の事務所。又、其書類。
(くわん-てつ［貫徹］(名) つらぬき徹(ト)ること。
(くわん-てん［寛典］(名) きびしからぬおきて。
(くわん-と［官途］(名) ㊀官吏の勤務又は地位。㊁やくしよむき。公邊。「—の事に暗し」。
(くわん-と［環堵］(名) ㊀まはりのかき。㊁いへのうち。
(くわん-とう［官等］(名) 官職の等級。
(くわん-とう［卷頭］(名) ㊀卷物又は書物などの始め。㊁其卷の中の最も秀拔なる詩歌。
(くわん-とう［關東］(名) ㊀古昔、近江國逢坂山の關所より東にあたる國々の總稱。後世は關東八州の特稱。㊁支那の遼東半島一帶の總稱。——くわんりやう［關東管領］(名) 足利時代に關東の政事を委任して鎌倉に置きし管領。——くわんれい［關東管領］(名) 前條に同じ。——しう［關東洲］(名)「くわんとう(二)」に同じ。——ととく［關東都督］(名) 關東洲を管轄し、南滿洲に於ける鐵道線路の保護・取締り及南滿洲鐵道會社の業務監督を掌り、部下軍隊を統率し、外務大臣の監督を受けて諸般の政務を行ふ官職。親任にして陸軍大將又は中將を以てこれに充つ。——ととくふ［關東都督府］(名) 關東都督が事務を取扱ふ所。民政部と陸軍部とを置く。——はっしう［關東八州］(名) 箱根山以東に位する相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野八個國の稱。
クワントン-ちう［廣東綢］(名) 支那の廣東より出す一種の縞織の絹布。(廣綢)。
(くわん-ない［管內］(名) 管轄區域の內。
(くわん-なふ［完納］(名) 殘らずをさめいるゝこと。
(くわん-なふ［還納］(名) かへしをさむること。
(くわん-なん［患難］(名) うれひ。なんぎ。
サぐわん-にち［元日］(名) ぐわんさつ。元旦。——さう［元日草］(名)【植】福壽草の異稱。
(くわん-にゆう［貫乳］(名) (火入或は鑵入などとも書く) 陶器にひゞ燒の如く割目に似たる細かき模樣(モヤウ)の現れたるもの。
(くわん-によ［官女］(名) 官づかへの女。くわんぢよ。
(くわん-にん［官人］(名) やくにん。つかさびと。
(ぐわん-にん［願人］(名) ㊀願書を差出したる名前主。ねがひぬし。㊁「ぐわんにんばうず」の略言。——ばう［願人坊］(名)「ぐわんにんばうず」の略言。——ばうず［願人坊主］(名) ㊀昔時、江戶にて人に代はりて願がけの修行・水垢離(ミヅゴリ)などせし乞食の僧。㊁轉じて、乞食の僧又は蓬々と頭髮のはえたる僧。
くわん-ぬき［閂］(名) ㊀「くわんのき」の轉。㊁物をくわんのきの如く橫にかまへたる狀態。㊂相撲の手、敵の諸差(モロザシ)したる腕を上より抱きしめしぼり上ぐること。
(くわん-ねん［觀念］(名) ㊀【佛】(觀じて念じ思ふ義)目を閉ぢ氣を鎭(シヅ)めて、心に考へ思ふこと。㊁[Idea]【心】意識の內に把住せられたる寫象。㊂かくご。あきらめ。「—せよと切り付けたり」。——ろん［觀念論＝Idealism］(名)【哲】認識論の一派。吾人の認識する外物は、主觀的觀察たるに止まりて必ずしも正當のものにあらず、吾人の認識する世界は、單に吾人の觀念に外ならずといふ說。實在論の對。
(ぐわん-ねん［元年］(名) ㊀帝王即位の第一年。㊁年號の改りたる初の年。はじめのとし。
(くわん-のう［官能］(名) 動物の器官のはたらき。
くわん-の-き［貫木］(名) 門戶などを鎖(サ)しかたむる橫木。鎖し合はする所の左右にある金屬の鈕の中に差し入れて用ふるもの。くわんぬき。(閂。閉)。


［くわんのき］

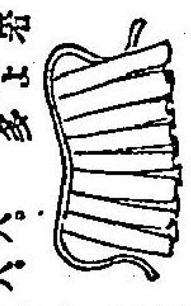
(くわん-ばう［關防］(名) ㊀國境のかため。せきもり。㊁昔、書を書き、其全幅又は端部なることを證するために、普通其右肩に押す印形。
(くわん-ばう［官房］(名) 各省及其他特殊の官廳にて、其長官に直屬し特別の事務を取扱ふ所。省にて大臣官房といひ、機密事務・官吏の進退身分又は大臣の官印及省印の管守等を掌り、警視廳にては總監官房といひ、高等警察及外國人に關する事項其他部署の監査制規、官吏の進退身分・文書記錄・廳印官印の管守、金錢物品の出納等を掌る、北海道廳にては長官官房といひ、官吏の進退身分及褒賞、文書の往復・記錄の編纂及官印廳印の管守等を掌る、府縣廳にては知事官房といひ、官吏の進退身分及褒賞、文書の往復、官印府縣印の管守等を掌る、統監府・關東都督府・臺灣總督府にては、共に機密に關する事務を掌る。

(くわん-ばう［官帽］(名) 官吏の制帽。
(くわん-ばう［官報］(名) ㊀法令・詔勅・告示・敍任・辭令其他官より一般人民に周知せしむべき新事項を編纂記載して、內閣印刷局より日曜日・大祭日等の外、日々刊行する文書。公文式は官報を以て布告するとに定まれり。㊁官廳又は官吏が、公務上に關して發する電報。
ぐわん-ばう［願望］(名) ㊀ねがひのぞむこと。ねがひ。こゝろざし。㊁【心】或目的を心中におもひ浮べて、これを得んと欲求する感情と意志との結合。
(くわん-ばく［關白］(名) 次條に同じ。
(くわん-ばく［關白］(名) ㊀萬機巨細となく其人にあづかりまうすこと。㊁古昔、天子を輔佐して天下の政務を行ひし大臣。我國にては光孝天皇のとき藤原基經の任ぜられしに始まる。
(くわん-ばつ［渙發］(名) あきらかに天下に發布せられたること。「大詔—」。
(くわん-ぱつしう［關八州］(名) 關東八州に同じ。
(くわん-ぱふ［觀法］(名)【佛】眞理を觀念すること。「坐禪—」。
(くわん-ばん［官版］(名) 官府にて製作し又は發行する印版又は書物。
(くわん-び［完備］(名) 全くそなはること。不足なきこと。
(くわん-ぴ［官費］(名) 官府より出す費用。——せい［官費生］(名) 官費にて學問修業する生徒。
(くわん-ぷ［官府］(名) ㊀朝廷又は政府。おほやけ。㊁つかさ。役所。役場。㊂【法】官制によりて範圍定まりたる行政事務を扱ふ一人又は衆人によりて組織せらるゝ國家の機關。
(くわん-ぷ［完膚］(名) きずなきはだへ。轉じて、きずなき箇所。「百孔千創—なし」。
(くわん-ぷ［還附］(名) 或ものをもと領有し又は所有せしものへもどすこと。
(くわん-ぷう［觀風］(名) 他國の風俗を觀察すること。
(くわん-ぷく［官服］(名) 官吏の制服。
(くわん-ぶつ［官物］(名) 官の所有物。
(くわん-ブツ［灌佛］(名) ㊀佛の像に香水などをそゝぎかくること。㊁「くわんブツゑ」の略言。——ゑ［灌佛會］(名)【佛】陰曆四月八日即ち釋迦如來の降誕當日に、其像に甘茶を灌(ソソ)ぎかくる儀式、種々の草花にて美(クワッ)しく屋根を飾りたる小さき家をつくり、其中に釋迦の像を安置してこれを行ふ、我國にては推古天皇の朝より始まれりといふ。
(ぐわん-ぶつ［玩物］(名) もちや。もてあそびもの。玩弄物。(玩具)。
(ぐわん-ぶつ［頑物］(名) かたくななるもの。ぐわんこなる人物。
(くわん-ぶんしよ［官文書］(名) 官府の文書。
(くわん-ぺい［官兵］(名) くわんぐん。
(くわん-ぺい［官幣］(名) 古昔は神祇官にて、祈年祭又は月次祭などに神々に幣帛を捧げて祭りしこと。又、今時は官幣社の祭典に幣帛を捧ぐること、宮內省式部職にてこれを取扱ふ。——し［官幣使］(名) 官幣を捧ぐるために差遣せらるゝ使者。——しや［官幣社］(名) 格式高く官の幣物にて祭る神社、中に大社・中社・小社及別格の區別あり。
(くわん-ぺい［觀兵］(名) ㊀軍兵を列してこれを閱すること。㊁兵の威勢をかゞやかすこと。——しき［觀兵式］(名) 天長節・陸軍始其他特別の祝日又は貴賓の歡待等に擧行せられ、天皇親ら兵を閱し給ふ式。終りて分列式を行はるゝものとす。
(くわん-ぺき［完璧］(名)(きずなきたまの義) 缺陷なきすぐれてよきものにいふ語。
(くわん-べん［冠冕］(名) ㊀かんむり。かむり。㊁上位にあるもの。
(くわん-ぺん［官邊］(名) おもてむき。やくばむき。
(くわん-ぽ［緩步］(名) ゆるやかにあるくこと。
(くわん-ぼく［灌木］(名)【植】木本莖なれど丈低き植物の稱、幹は判然たらず、地に近き部分より數多の枝を生ずるもの、薔薇・山吹・牡丹などの類これなり。——たい［灌木帶］(名)【植】高山植物帶の一部、樹木漸く短小となり、風雪を凌(シノ)ぐ自然の必要より、幹根屈曲して地上に蟠(ワダカマ)れるもの。
(くわん-ぼつ［官沒］(名) 官府に取りあぐること。
(くわん-ぼつ［還沒］(名) 分れ出たる個體が、もとにかへり入ること。「大我に—す」。
ぐわん-ほどき［願解］(名) 神佛に立願せし後に、其願として參詣すること。かへりまうし。
(くわん-ぽん［官本］(名) ㊀官版の書籍。㊁官府の藏書。
(くわん-ぽん［完本］(名) 全部そろひてある書籍。缺本の對。
(ぐわん-ぽん［元本］(名) ㊀もと。ねもと。㊁利益收入を生ずるもとゝなる物件又は權利、貸家・貸地・公債・株式等をいふ。㊂【經】生產物の總收入より、諸種の費用を引去りたる剩餘、使用如何によりて、資本ともなり、浪費ともなるもの。
(ぐわん-まう［願望］(名)「ぐわんばう」に同じ。
(くわん-まん［緩慢］(名) ㊀きびしからざること。せまらざること。ゆるやか。㊁のろきこと。にぶきこと。

(ぐわん-み[玩味](名) ❶食物をよくかみわけて味ふこと。❷物の意義を能く味ひわきまふること。
(くわん-みやう[官名](名) 官職の名稱。
(くわん-みん[官民](名) 官府又は官吏と人民と。「—親密」。
(ぐわん-みん[頑民](名) かたくなゝる民。知識の劣れる民。
(くわん-む[官務](名) ❶官府の扱ふ事務。又、官吏の負擔せる職務。❷古昔、太政官の左大史・右大史などの稱。又、世々これを勤めし小槻家の稱。
(くわん-め[貫目](名) ❶めかた。❷貫の重位。即ち、千匁をいふ。❸人を服從せしむる威望。
(くわん-めい[官命](名) 官府よりの命令。
(くわん-めい[官名](名) 官職の名稱。
(ぐわん-めい[頑冥](名) かたくなにして知識なきこと。
(ぐわん-めい[頑迷](名) かたくなにしてまよひのとけ難きこと。
(ぐわん-めん[願面](名) 願書に書き立てゝある主意又は文面。
(ぐわん-めん[願免](名) (依願免官の略言)願によりて免官となること。
(くわん-もう[冠毛](名) ❶冠上の毛。❷[植]瘦果の上にある白色の長毛。
(ぐわん-もう[頑蒙](名) かたくなにして物理を知らざること。
(くわん-もん[關門](名) ❶關の門。❷せき。關所。
(ぐわん-もん[願文](名) 願意を記したる文。多くは神佛への願文をいふ。
(くわん-もん[喚問](名) 官署などに呼び出して問ひたゞすこと。
(くわん-やく[關鑰](名) ❶くわんのきとぢやうと。又、門の戸まり。❷內部に入りこむ要所。
(ぐわん-やく[丸藥](名) 錬り合はせ、丸めて小さき球の狀にしたる藥。
(くわん-よ[關與](名) あづかること。かゝはること。
(くわん-よう[慣用](名) つねに用ふること。
(ぐわん-らい[元來](副) もとより。はじめから。
(くわん-らく[歡樂](名) ❶よろこびたのしむこと。「—極りて哀情多し」❷古昔、病氣の忌詞。
(くわん-らん[觀覽](名) ながめみること。みること。
(くわん-り[冠履](名) かんむりとくつと。又、上と下と。——てんたう[冠履顛倒](名) 上下の順序がさかさまなること。
(くわん-り[管理](名) 物件の保存改良をはかること。事務の整理執行をなすこと。又、人員の指揮監督をなすこと。あつかひ。とりまり。——くわうゐ[管理行爲](名)[法] 物件を保存し又はその移轉失せざる範圍に於て、これが改良利用をはかる等の行爲。——のうりよく[管理能力](名)[法] 管理行爲をなし得る能力。私權行使の能力ある普通一般の人がこれを有するは勿論、禁治產者及び有夫の婦もまたこれを有す。處分能力の對。
(くわん-り[官吏](名) 任官の手續により官制上に定められたる公務を扱ふ地位。又、其地位にある人。やくにん。くわんゐん。——しうわい[官吏收賄](名)[法] 官吏が其職務に就き、人の囑託を受け賄賂を收受し若しくは要約したる罪。——とくしよく[官吏瀆職](名)[法] 官吏が、當然なすべき職務に反して公益を害し、若しくは職權を濫用して人民の權利を侵害し又は官金を消費する等の罪。——ぶじよく[官吏侮辱](名)[法] 官吏の職務に對し、形容又は言語を以てこれを侮辱したる罪。
(ぐわん-り[元利](名) 元金と利子と。「母子」。
(ぐわん-りき[願力](名) 願がけして目的を貫かんとする意氣又は念慮の勢力。ねんりき。
(くわん-りつ[官立](名) 官府の設立又は維持にかゝること。私立又は公立の對。
(くわん-りやう[管領](名) 室町幕府にて、一切の政事にあづかりし重要の職名。斯波・細川・畠山の三家これに任ずる定めにして、別に關東管領を置けり。
(くわん-りん[官林](名) 官有の森林。
(くわん-れい[管領](名) 「くわんりやう」に同じ。
(くわん-れい[關棙](名) とざし。ねぢ。
(くわん-れう[官僚](名) ❶同官のもの。どうれう。❷やくにん。くわんり。(有司)——せいぢ[官僚政治](名) 君主は官僚に左右せられ、諸般の政治一に官僚の手によりて行はるゝこと。
(くわん-れき[還曆](名) 生まれて六十一歲の稱。陰曆にては、干支が六十にて一周して元に復する故に、曆が回り返る義よりいふ。ほんけがへり。
(くわん-れん[關聯](名) かゝりつゞくこと。かゝはりつながること。
(ぐわん-ろう[頑陋](名) 事理にくらきこと。心ねぢけて智少きこと。
(ぐわん-ろう[玩弄](名) ❶もてあそぶこと。❷なぶりものにすること。(愚弄)。——ぶつ[玩弄物](名) ❶もてあそぶ具。おもちや。❷他人のなぶりもの。——しへい[玩弄紙幣](名) 紙幣の形に似せてつくりたるおもちや。
(くわん-ろく[官祿](名) 官府よりたまはる祿。官職あるによりて受くる祿。「職」
(くわん-ゐ[官威](名) 官府の威力。又、官吏の威權。
(くわん-ゐき[灌域](名) 河水の灌漑する區域。
(くわん-ゐん[官員](名) 官位にある人。官職ある人。やくにん。
(くわん-をけ[棺桶](名) 棺に用ふる桶。はやをけ。

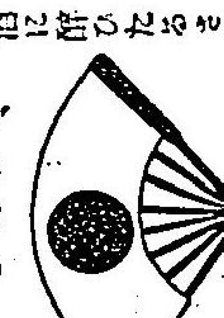
(くゐき[區域](名) 區劃したる境界。區劃したる範圍。かぎり。きまり。さかひ。
(くゐ-いつしよ[俱會一處](名)[佛] 佛も衆生も共に淨土に生れあつまるといふこと。
(くゐ-そく[花足](名) ❶机などの足に花などの彫刻あるもの。❷佛に供ふる食物。
(くゐ-にち[凶會日](名) 陰陽相剋して、百事に凶なりとする日。
(くゑ-まり[蹴鞠](名) けまり。
(くん[訓](名) ❶をしへ。さとし。いましめ。❷字句の意義の解釋。わけ。❸漢字を國語にあてゝよむこと。よみ。
(くん[君](名) ❶國家の元首又は封土の領者。❷鬼神又は祖先。「—は何の神ぞ」❸すべて他人の敬稱にいふ語。
(くん[勳](名) ❶國家又は君主に盡したる功勞。てがら。いさを。❷勳等下賜の等級。
(くん[葷](名) ねぎ又はにんにくなどの如き一種の臭氣ある蔬菜の總名。
(ぐん[群](名) むれ。むらがり。一團。
(ぐん[軍](名) ❶つはもの。軍勢。兵隊。❷たゝかひ。いくさ。戰爭。❸戰時の出征に際し、數個の師團又は軍團を以て編制せられたるもの、名稱、我國にては、普通二個乃至四個師團を以て編制せられ、これに騎兵砲兵工兵其他必要の諸隊を附屬せらるゝの規定なり。
(ぐん[郡](名) ❶一國を區劃したるもの、稱、郷又は町村等を包括す。こほり。❷[法] 地方團體の一にして且行政區劃の一、町村を包括し、法人として第一次に府縣知事第二次に內務大臣の監督を受け、法令により事務を處理するもの。機關は郡會・郡參事會及郡長とす。❸支那にて、周以後秦以前までの行政區劃の一。周にては縣の下に屬せしが、秦以後にては縣を包括しての稱となれり。
(ぐん-い[軍醫](名) 陸軍又は海軍に附屬して、醫務に從事する高等官。——かん[軍醫監](名) 將官相當の軍醫。——さうかん[軍醫總監](名) 陸軍又は海軍の醫務を總理し軍醫を統轄する將官相當官。——せい[軍醫正](名) 佐官相當の軍醫。
(くん-いう[薰蕕](名) ❶よきにほひとあしきにほひと。❷善行と非行と。又、君子と小人と。「—器を同じくせず」。
(くん-いく[訓育](名) をしへそだつること。
(ぐん-えい[軍營](名) 軍隊の營所。
(ぐん-えい[群英](名) おほくの秀才。
(ぐん-えき[軍役](名) ❶軍あるときの夫役。❷戰爭又は征伐。
(くん-おん[君恩](名) 君のめぐみ。「—海の如し」
(ぐん-か[軍歌](名) 軍隊の士氣を鼓舞するため又は軍事の思想を盛んにするため等の目的を以て製作せられたる歌。もし軍事上の壯烈なる事柄を詠じたるもの。
(ぐん-が[郡衙](名) ぐんやくしよ。
(くん-かい[訓戒](名) をしへいましむること。さとしいましむること。
(くん-かい[訓解](名) 文章字句のときあかし。
(ぐん-かう[軍港](名) 鎭守府のある港。其海軍方面の海軍の根據地。
(ぐん-がう[群豪](名) 多くのすぐれたるもの。
(ぐん-がく[軍學](名) 兵法。兵學。
(ぐん-がく[軍樂](名) 陸軍又は海軍に使用する音樂。——たい[軍樂隊](名) 軍樂を奏するための一隊。
(ぐん-かん[軍艦](名) 戰鬪の用に供するため特に製造したる國家の兵船。即ち、海軍艦船の第一種第二種の總稱。——き[軍艦旗](名) 軍艦の表彰となるものとす。我國のは旭日の狀を描ける。——ていけいしよ[軍艦碇繫所](名) 軍港の所在地。
(くん-き[勳記](名) 勳勞者に叙せらるゝ證として勳章と共に賜はる文書。
(ぐん-かん[軍監](名) ❶古昔、鎭守府の判官。❷軍事の監督をなす職名。
(ぐん-き[軍紀](名) 軍隊の規律。
(ぐん-き[軍旗](名) 聯隊の表彰として授け與へらるゝ旗。聯隊設立のとき、天皇陛下より下し賜はる、旭日の狀を描きたるもの。れんたいき。——さい[軍旗祭](名) 聯隊にて、軍旗を天皇陛下より賜はりたる日又は戰勝の紀念日などに行ふ祝典。
(ぐん-き[軍機](名) 軍事上の機密。——ろうえい[軍機漏洩](名) 軍事上の秘密世間又は敵國へもれこぼるゝこと。又、軍事上の秘密を世間又は敵國へ知らすこともいふ。
(ぐん-き[軍記](名) 戰爭の事蹟をかきたるもの。
(ぐん-ぎ[軍議](名) 軍事上の評議。
(ぐん-ぎ[群議](名) おほくの人の議論。
(ぐん-きよ[群居](名) あつまりゐること。むらがりをること。
(ぐん-くみあひ[郡組合](名)[法] 二郡又は二郡以上が、共同して特定の事務を處理するために設置する組合。府縣知事が郡參事會の意見と府縣會の議決とにより、內務大臣の許可を得てこれを設置するものとす。
(くん-くわ[訓化](名) をしへみちびくこと。

(くん-くわい[訓誨](名) をしへ。さとし。
(ぐん-くわい[郡會](名) 郡内の町村より選出したる議員を以て組織せる郡の機關、郡の歳入出豫算其他重要の事件を議決するものにして、又、地方官廳の諮問に應じ意見を述べ又は建議をなすことを得、郡長これを招集す。——-ぎゐん[郡會議員](名) 郡會を組織する議員、郡内の町村公民にして町村會議員の選擧權を有し、且其郡内にて、一年以來直接國稅年額三圓以上を納むるものは、これが選擧權を有し、又これと同一の資格にして直接國稅年額五圓以上を納むるものは、これが被選擧權を有する規定なり。
(くん-げん[訓言](名) をしへのことば。いましめのことば。
(ぐん-けん[郡縣](名) ㊀こほりとあがたと。㊁「ぐんけんせいど」の略言。封建の對。——-せいど[郡縣制度](名) 中央政府より、全國にひとしき政令を布き、地方官を選任してこれを執行せしむる制度。封建制度の對。「きあかし。
(くん-こ[訓詁](名) 古言の意義の說明。わけ。と
(ぐん-こ[軍鼓](名) いくさに用ふるたいこ。
(くん-こう[勳功](名) 國家又は君主に盡したる功勞。いさを。てがら。いさをし。
(くん-こう[君公](名) きみ。ダンナ。
(くん-こう[君侯](名) 諸侯の敬稱。「の功績。
(ぐん-こう[軍功](名) いくさのてがら。戰爭にて
(ぐん-こう[群口](名) 多くの人のことば。
(ぐん-こく[軍國](名) ㊀軍隊と國家と。又、軍を治むると國を治むると。「一の事一に御に任ず」。㊁軍事上の大事ある國。戰爭をなしつゝある國家。
(ぐん-さう[軍曹](名) ㊀古昔、鎭守府に附屬せしさくわん。㊁陸軍の下士官の一、一等と二等との階級あり、地位は曹長の下なり。「のよそほひ。
(ぐん-さう[軍裝](名) 軍隊のよそほひ。出征
(ぐん-さんじくわい[郡參事會](名) 郡に於ける合議の機關、郡長及名譽職參事會員五名を以て組織し、郡長を以て會長とす、郡會より委任せられたる事件及其他權限に屬する事項を議決し、又、臨時緊急の事件ありて、郡會を招集する暇なきときは、郡會に代はりて議決をなす、又郡長が郡會に提出する議案につき、意見を述ぶることを得。——-ゐん[郡參事會員](名) 郡參事會を組織する名譽職、郡會議員中より互選す。
(くん-し[裙子](名) 【佛】僧侶の帯(ツ)くる一種の服、形は袴の如く腰より以下を蔽ふものにして、襞(ヒダ)を多く設けて仕立つ。


[くん]

(くん-し[君子](名) ㊀官位ある人。㊁心術善良にして品行方正なる人。㊂竹の異稱。——-こく[君子國](名) ㊀國民の心術の善良なる國。㊁日本國の美稱。
(くん-じ[訓示](名) ㊀ときしめすこと。をしへさとすこと。㊁上官が下官に對し、執務上の心得などに關してなす陳述。
(ぐん-し[軍師](名) ㊀主將に附屬し、軍機を參り謀計を運(メグ)らす人。㊁巧に手段を運らす人。
(ぐん-し[軍使](名) 戰爭の繼續中に、一方の軍隊より或使命を齎(モタ)らして敵の軍隊に赴く人。
(ぐん-じ[郡司](名) ㊀古昔、郡を治めたる職名、これに大領(カミ)・少領(スケ)・主政(ジヨウ)・主帳(サクワン)の四職ありき。㊁郡の大領の特稱。
(ぐん-じ[軍事](名) 兵備又は軍隊若しくは戰爭に關する事柄。——-いうびん[軍事郵便](名) 出征せる軍隊・軍艦又は軍人・軍屬等より發する郵便物、若しくはこれに對して發する郵便物の取扱の稱にして、前者は免稅なるものとす。——-ぎやうせい[軍事行政](名) 國家に必要なる兵力の設備・編制若しくは保管に關する行政、即ち、陸海軍に關する一切の行政をいふ、其中陸海軍の統率編制及常備兵額の決定は、天皇の大權に屬すれど、他は一切陸海軍大臣これを管理す。——-けいさつ[軍事警察](名) ㊀戰時其他事變に際し、其地の司令官が、通常の警察法によらずして行ふ警察行政、人民の居住・移轉・集會・出版・言論等の自由を制限することを許さる。ひぎやうけいさつ。㊁軍事上に關する警察。——-こうさい[軍事公債](名) 明治廿八年に軍費支辨のため募集せられし五分利付の公債。——-さいばん[軍事裁判](名) 軍法會議に同じ。——-さんぎくわん[軍事參議官](名) 天皇の帷幄に參し軍事の機務に預る高官、即ち、陸海軍兩大臣・參謀總長・海軍々令部長・教育總監部長及親補せられたる陸海軍將校より成る。——-せんりやう[軍事占領](名) 攻擊又は防禦の必要より、敵國又は他國の領土を占領すること。——-たんてい[軍事探偵](名) 敵國に入りこみなどして、軍事上に關する探偵をなすもの。——-つう[軍事通](名) 軍人にあらずして軍事にあかるきこと。又、其人。——-ひ[軍事費](名) 軍事のために支出する費用。——-ふたん[軍事負擔](名) 【法】直接に軍事の需用のために、財產の制限又は給付をなす法律上の負擔、勞力の徵發等も金錢上の價格に見積られ、兵役と同一にあらざるが故に、また軍事負擔なり。
(ぐん-じう[群醜](名) 群集せる盜賊又は反賊。

(くん-じつ[曛日](名) いりひ。
(ぐん-じふ[群集](名) むらがりあつまること。又、其あつまりたるもの。むれ。
(くん-しやう[勳章](名) 國家に盡し、功勞を表彰して下賜せらるゝ記章、菊花章・寶冠章・旭日章・瑞寶章・金鵄章等の種類ありて、菊花章を除くの外は皆な等級あり、佩用の次第は、種類により等級によりてこれを異にす。——-ねんきん[勳章年金](名) 勳章の等級に應じて、終身の間每年下賜せらるゝ一定の金。
(くん-じやう[勳狀](名) いさをを賞(ホ)めて、大將などより賜はる感狀。
(ぐん-じやう[群青](名) 靑色を有する一種の顏料、人工と天然との二種あり。(音讀)。
(くん-しゆ[葷酒](名) ねぎ又はにら等と酒と。又、葷を食ひ酒を飲むこと。「不許葷酒入山門」
(くん-しゆ[君主](名) 國家主權の本體たる特定の一人、即ち國家の元首。きみ。——-こく[君主國](名) 君主國體の國、即ち君主が國家の元首たる國。——-こくたい[君主國體](名) 國體が特定の一人を以て主權者となすもの、即ち君主が自己固有の權力を以て君臨する國體。——-しゆけんせつ[君主主權說](名) 一國の主權が特定の一人なる君主にありといふ說。國家主權說の對。——-せいぢ[君主政治](名) 君主が其國の政治を總攬すること。——-せいど[君主制度](名) 君主が元首として其國の主權を有する制度の稱。——-せんせい[君主專制](名) 君主が自己の意思によりて其國の政治を行ふこと。——-どくさい[君主獨裁](名) 前條に同じ。
(くん-じゆ[群集](名) 多人數むらがり集まること。
又、其人々。
(ぐん-じゆ[軍需](名) 軍事に需用あること。又其品。
(ぐん-しよ[軍書](名) 軍事に關係の事を記したる書物。軍記。——-よみ[軍書讀](名) 軍談師。
(ぐん-しよ[群書](名) 多くの書籍。「講談師。
(ぐん-しよく[軍職](名) 陸海軍に從屬する官職。
(ぐん-しれいくわん[軍司令官](名) 一軍の統率指揮をつかさどるもの、大將若しくは中將を以てこれに補す。「と。
(くん-しん[君臣](名) きみとおみと。君主と臣下
(ぐん-しん[群臣](名) 許多の臣下。
(ぐん-しん[軍神](名) ㊀武運を守る神。いくさがみ。㊁生前最も壯烈なる武功ありし將士。
(ぐん-じん[軍人](名) 軍籍にありて、戰時に戰鬪に從事する將校下士卒の總稱。いくさびと。
すくん・ず(だ・ぢ・づ・ずる・ずれ・ぜよ)[屈](自、さ變) 屈す。窘(ア)く。
くん・ず(だ・ぢ・づ・ずる・ずれ・ぜよ)[薰](自、さ變) かをる。にほふ。
くん・ず(だ・ぢ・づ・ずる・ずれ・ぜよ)[曛](自、さ變) 日没す。くる。
ぐん・ず(だ・ぢ・づ・ずる・ずれ・ぜよ)[軍](自、さ變) 陣を取る。
(ぐん-せい[軍制](名) 軍の編制經理等に關する規定。
(ぐん-せい[軍勢](名) 軍のいきほひ。
(ぐん-せい[軍政](名) ㊀「ぐんじぎやうせい」に同じ。㊁戰時又は事變に際し、或地域内に其地の司令官が委任によりて軍事警察を行ふこと。——-しよ[軍政署](名) 占領の土地などにて、軍政上の事務を取扱ふやくしよ。
(ぐん-ぜい[軍勢](名) ぐんたい。ぐんびやう。
(くん-せき[勳績](名) いさを。てがら。
(ぐん-せき[軍籍](名) 軍人たるべき地位分限。
(くん-せん[薰染](名) 感化を受くること。うつりそむこと。又、感化を與ふること。うつりそますこと。
(くん-ぜん[醺然](名、副) 酒に醉ひたるさまにいふ語。
(ぐん-せん[軍扇](名) 古昔、大將が軍勢を指揮するに用ひし扇、多くは鐵をもて骨を造り、地紙に日月を描(カ)きたるもの。


[ぐんせん]

(ぐん-せん[軍船](名) いくさぶね。「羅屈の語。
(くん-せんし[君仙子](名) うつぼの異の稱。(藥
(くん-そく[君側](名) 主君のあそば。——-をきよむ[清君側] あそばの姦臣を除くにいふ。
(ぐん-ぞく[軍屬](名) 陸海軍に從屬する文官其他雇員などの稱。軍人の對。
(ぐん-そつ[軍卒](名) ぐんびやう。兵卒。
(ぐん-そん[郡村](名) 郡と村と。轉じて、ゐなか。——-たくち[郡村宅地](名) 市街宅地以外の宅地の稱。
(くん-たい[裙帶](名) 「くたい」に同じ。
(ぐん-たい[軍隊](名) ㊀軍の編制又は隊伍。㊁陸上の兵備に當る將校及下士卒の總稱。へいたい。「一の強弱」。「位せしもの。
(ぐん-だい[郡代](名) 武家の職名、代官の上に
(ぐん-だい[軍代](名) 大名の陣屋を守る重役。ぢんだい。「ること。
(くん-たう[薰陶](名) 德をもて人を感化す
(くん-だう[訓導](名) ㊀教へ導くこと。㊁免狀を有する小學校敎師。㊂神道敎會の職名。
(ぐん-たう[群盜](名) あつまりてむれをなす盜賊。
(ぐん-たう[軍刀](名) 戰鬪に用ふる刀。

(ぐん-たう)[群島](名) むらがりて一群をなす島々。

グンダリ[軍荼利](名)(梵語、Kuṇḍalī)【佛】「グンダリヤシヤ」の略言。——ヤシヤ[軍荼利夜叉](名)【佛】明王の一、南方を守る、一面八臂にして忿怒の相をなす、一切の阿修羅惡鬼を推伏すといふ。

[ヤシヤリダング]

(ぐん-だん)[軍團](名) ㊀古昔、諸國に備へ置きし兵隊、國中の二十一歲より六十一歲までの男子より聚集し、軍事を習はせしもの。㊁普通步兵二個師團及これに適應せる各種の兵より成立せるもの丶稱、我國現時の軍制にはなし。

(ぐん-だん)[軍談](名) 軍書を節(フ)おもしろく讀み聞かせ又は戰爭に關係したる話をなすこと。——し[軍談師](名) 軍談を營業とする人。(講釋師)。

(ぐん-ちやう)[郡長](名) 規定の職權又は特別の委任により、府縣知事の指揮監督の下に、郡に關する行政事務を處理し、兼ねて郡會及郡參事會の議決を執行し、郡を代表する官職。

(ぐん-ちゆう)[軍中](名) ㊀軍隊又は軍營のなか。㊁戰爭又は征伐の間。

(くん-ちよう)[君寵](名) きみのきに入り。又、きみのめぐみ。

(ぐん-ぢん)[軍陣](名) 軍營、軍隊。

(くん-てん)[訓點](名) 漢文を和讀するために付くるかへり點。

(くん-とう)[勳等](名) 勳章の等級、一等より八等までありて、一等の上を大勳位とす。

(くん-どく)[訓讀](名) 漢字に日本語を當て丶讀むこと、音讀の對。

(ぐん-ない)[郡内](名) ㊀一郡の區域內。㊁「ぐんないしま」の略言。——しま[郡内縞](名) 甲斐國、郡內地方より織り出す絹織物、かいき織の一種。

(ぐんにやり)(名、副) 力ぬけ去りたるさまにいふ語。

(くん-のう)[君王](名) 「くんわう」の轉訛。

(ぐん-ば)[軍馬](名) 軍事に用ふる馬匹。

(ぐん-ばい)[軍配](名) ㊀軍陣の配置又は進退などの指圖(サシヅ)。㊁「ぐんばいうちは」の略言。——うちは[軍配團扇](名) 古昔、大將が軍配をなすときに用ひし具、鐵又は板をもて、扁(ヒラ)たき瓢簞形に造り、これを漆塗などにして柄をすげたるもの。(軍扇、麾扇)。

[ぐんばいうちは]

(ぐん-ぱう)[群邦](名) おほくのくに、あまたのくに。

(ぐん-ぱう)[軍帽](名) 軍人の制帽。

(ぐん-ぱう)[群芳](名) おほくの花又は花さく草木。

(ぐん-ぱふ)[軍法](名) ㊀軍隊の配置又は操縱の方法、戰爭の法。㊁軍中の法律、軍隊の刑法。——くわいぎ[軍法會議](名) 陸海軍に於て、軍人の犯したる重輕罪の審判及違警罪の正式裁判又は軍衙・軍人の損害に係る本案附帶の訴訟を審判し、又、合圍地境及臨戰地境にては、何人たりとも軍の刑法を以て論ずべき犯罪を審判する裁判所、判士長・判士・理事若しくは理事補及錄事を以てこれを組織す、被告の身分に應じ、判士長は佐官以上中將迄の武官を以てこれに充て、判士は尉官以上少將迄の武官を以てこれに充つ。

(ぐん-び)[軍備](名) 軍事に關する諸種の設備。いくさのそなへ。

(ぐん-ぴ)[軍費](名) 軍事費に同じ。

(ぐん-ぴやう)[軍兵](名) ㊀つはもの。へいたい。㊁ざふひやう、ぐんそつ。(兵甲、甲士)。

(くん-ぷ)[君父](名) きみとちゝと。

(ぐん-ぷ)[軍夫](名) 軍隊に屬從する人夫。

(ぐん-ぶ)[郡部](名) 郡に屬する部分、市部の對。

(くん-ぷう)[薰風](名) 南方より吹く風、又、夏季の風。

(ぐん-ぷく)[軍服](名) 軍人の着用する規定の服。

(ぐん-ぺう)[軍票](名) ぐんようてがた。

(ぐん-ぽう)[軍鋒](名) 軍のいきほひ、軍のほさき。

(ぐん-ぼく)[群牧](名) おほくの諸侯、又、おほくの地方長官。

(ぐん-まう)[群萌](名)【佛】多くの草の萌え出でたるが如く、この世界に生れ出でたる衆生。

(ぐん-む)[軍務](名) 軍に關する事務又は勤務。——きよく[軍務局](名) 陸軍省及海軍省の主要なる事務を扱ふ一局。

(くん-めい)[君命](名) 君のおほせ、君の命令。

(くん-もう)[訓蒙](名) こどもに敎へさとすこと、初學者にをしへさとすこと。「—の文」。

(くん-もく)[薰沐](名) 身體に香をぬり又は湯あみすること、からだをきよむること。

(くん-もつ)[薰物](名) たきもの。にほひもの。

(ぐん-もん)[軍門](名) 軍營の出入口。「—に降る」。

(ぐん-やく)[軍役](名) 軍のときの課役。

(ぐん-やくしよ)[郡役所](名) 郡長の事務を扱(アツカ)ふ所、又、郡長の取扱ふ事務の全體。

(くん-ゆ)[訓諭](名) をしへ。さとし。

(ぐん-ゆう)[群雄](名) おほくの一方に長たる人。

(ぐん-よう)[軍容](名) 軍隊のいでたちのさま。

(ぐん-よう)[軍用](名) 軍事に用ふること。——きん[軍用金](名) 軍の費用につかふ金錢。——しゆへう[軍用手票](名) 「ぐんようてがた」に同じ。——てがた[軍用手形](名) 軍隊が戰地などに於て、物品購買の便利のために使用する特殊の手形、現金と引換へらるゝもの。——てつだう[軍用鐵道](名) 軍事に關する輸送のために特に布設せる鐵道。——でんしん[軍用電信](名) 軍事に關する通信のために特に設備したる電信、固定せる設備のものと處々に移動する設備のものとあり。——りよしや[軍用旅舍](名) 徵發せられたる遠方の軍人などが、一時止宿するためのやどや。

(ぐん-らく)[群落](名) 相集まりたる國邑。あつまり。むれ。

(ぐん-り)[軍吏](名) 陸軍の會計事務を扱ふ官吏。特に其尉官相當官の稱。

(ぐん-り)[郡吏](名) 郡長の統率に屬し、其意思を受けて事務を扱(アツカ)ふ人。

(ぐん-りつ)[軍律](名) 軍中の刑律。軍人に關する法律。

(ぐん-りつ)[郡立](名) 郡の經費にて設立維持せらるゝこと。「—中學校」。

廿ぐん-りやう[郡領](名) 古昔、郡の大領と少領との稱。

(ぐん-りやく)[軍略](名) ㊀軍事上の才智又ははかりごと。㊁「せんりやく」に同じ。

(ぐん-りよ)[軍旅](名) ㊀ぐんたい。軍勢。㊁いくさ。戰爭。

(ぐん-りよ)[軍虜](名) 降服し又は捕獲せられたる敵兵、とらはれ。はりよ。

(くん-りん)[君臨](名) 君主として其國土人民ををさめすぶること。

(くん-れい)[訓令](名) ㊀上級官が下級官に對して、法令の解釋又は事務の方針に關して下す命令。㊁軍隊にて、目的のみを命令し、其施行の手段は命令を受けたるものに一任するもの。

(ぐん-れい)[郡令](名) 郡長が法令又は委任せられたる範圍內に於て發する行政命令。

(ぐん-れい)[群黎](名) ひやくせう。ばんみん。

(ぐん-れい)[軍令](名) 軍事に關する命令。——ぶ[軍令部](名) 海軍軍令部に同じ。

(くん-れん)[訓練](名) をしへみちびきて實務に熟練せさすること。

(くん-ろく)[薰陸](名) ㊀凝固して石の如き狀をなす木のやに、藥劑又は香料に供す ㊁陸中國の山中より出す一種の香料、松脂(ヤニ)の化したるものにして、形は琥珀に似て色黑し、夏時は溶解す。

(くん-わう)[君王](名) きみ。くんしゆ。元首。

(くん-ゐ)[勳位](名) ㊀勳功と位階と。「—共に高し」。㊁勳功によりて賜はる位階。㊂勳等と位階と。㊃勳章下賜の等級。

(くん-ゐ)[君位](名) 君主のくらゐ。

け げ

け 喉的破裂音kと即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「え」との綴音。

げ 「け」の濁音、凡て「け」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

け[氣](名) ㊀いきほひ。き。いき。「火の—」。㊁やまひ。「時の—」。㊂たゝり。「物の—」。(怪)。㊃けしき。けはひ。やうす。㊄あぢはひ。にほひ。又、痕跡。「酒の—」。「鹽の—」。「—も無い」。

け[毛](名) ㊀動物の皮膚に生ずる細き絲狀のもの、即ち、裘皮の變形物。㊁髮の毛。㊂すべて物の表面に生ずる細き絲の如きもの。㊃地上に生ずる草木。「—なし山」。㊄稻の穗のみいり。作毛。——をふきてきずをもとむ[吹毛求疵] 人の陰事などをあばき出して追及するにいふ。又、餘計な事をして却つて禍にかゝるにもいふ。——をみて むまを さうす[見毛相馬] 毛のよしあしを以て馬の駿駑を見るが如く、たゞ外形の如何を以て人物の賢愚をはかるにいふ。

廿け[褻、常](名) ㊀つね。ふだん。「ひに—にまさる」。㊁晴れがましからざること。公ならぬこと。

廿け[食](名) くひもの。しよくお。「朝—」。「夕—」。

廿け[笥](名) 物を入るゝ器。うつは。「稲—」。「苧—」。

廿け[故](名) 「ゆゑ」に同じ。「願どもたてさせ給ふ—にや、平かに事なり果てぬ」。

廿け[蹴](名) 蹴(ケ)ること。「一—」。「二—」。

(け)[罫](名) ㊀物書かんときのため、紙上に引きたるまきりの線。(界)。㊁碁盤などの面の縱橫の線。㊂拾(ヒロ)ひ上げたる活字の行の間に挿(サシハ)むもの、厚さは薄く高さは活字にひとし。

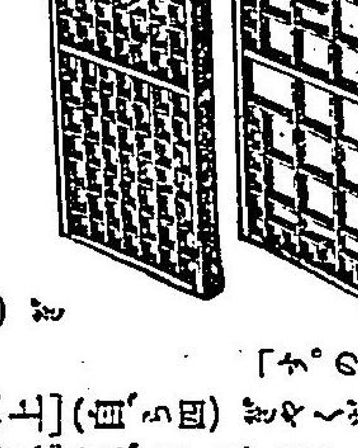
(け)[卦](名) 易にて、筮(メドギ)をかぞへて旋(シ)きたる六畫の算木の面に現るゝ象、これに由りて、吉凶善惡を判斷す、乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の八つを本として八卦と稱し、更に參伍綜錯して六十四卦の變化を生ず。

(け)[悔](名)【佛】「ザンゲ」に同じ。

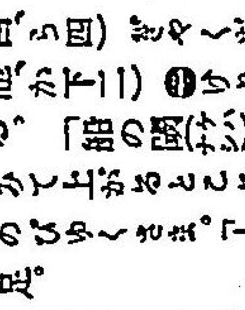
廿け—(接頭) 動詞又は形容詞に冠して、稍や其意を強むる語。「—壓さる」。「—近し」。

(—け)[家](接尾) いへ。いへすぢ。いへがら。「平—」。「武—」。「源—」。

(げ[牙](名) ❶きば。❷象牙の略言。「一軸」
(げ[下](名) ❶しも。した。すゑ。❷劣(オト)りたること。いやしきこと。
ゲ[偈](名) 【佛】《梵語 Gatha の略、頌の義》佛の功徳を讃美するに謡ふ一種の詩。
ケース[Case](名) ❶活字を入れおく木製の箱、中に數多の小區劃を設け、區劃ごとに同種の活字を入る。❷「やくけふ」(藥莢)に同じ。

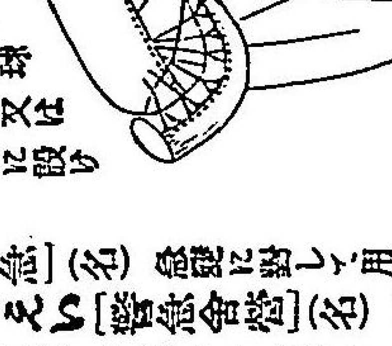

[ケース(一)]

げ-あがり[氣上](名) ぎやくあがり。のぼせ。
げ-あが・る[氣上](自、ら四) ぎやくあがる。「ず。のぼす。
げ-あ・ぐ[蹴上](他、か下二) ❶けりて上ぐ。❷下より上のものをけあぐ。「胡の國(ナシ)の稱。
げ-あげ[蹴上](名) ❶蹴(ケ)りて上ぐること。❷
げ-あし[毛脚](名) ❶毛ののびゆくさま。「一が早い」❷毛の多く生(ハ)えたる足。
げ-あな[毛孔](名) 毛を生ずる皮膚の小孔。
げ-あはり[毛栗](名) 【植】「ゐはぎ」の一名。
げ-あひ[蹴合](名) 互に蹴(ケ)あふこと。「雞の一」
げ-あ・ふ[蹴合](自、は四) 互に蹴る。
げ-あんご[夏安居](名) 【佛】僧侶が夏季一定の日數間出遊を絶して一室に靜坐すること。


[けい]

(けい[罫](名) 「け」(一)に同じ。
(けい[磬](名) 一種の樂器、玉石を曲形に刻(キザ)み、吊(ツ)り下げて拍(ウ)ち鳴らすもの、後世には銅を以てつくりたるもあり。
(けい[兄](名) ❶「けいえい」の略言。「一が好い」❷「けいぶつ」の略言。「砲一是上」
(けい[啓](名) ❶ひらきあく。きりひらく。❷せんばう。前驅。❸漢文にて事狀を陳述する手簡、おもに儷語を用ひたるものゝ稱。
(けい[刑](名) ❶のり。常法。❷犯罪行爲に關する制裁の規定。❸【法】「けいばつ」(刑罰)に同じ。
(けい[系](名) ❶いとぐち。端緒。❷ちすぢ。血統。❸つゞき。連屬。❹いとすぢ。細絲。「斷えざること一の如し」❺【數】定理より直に推定し得べき
(けい[慶](名) よろこび。いはひ。「命題。
(けい[桂](名) ❶【植】かつら。❷將碁の駒の「けいま」の略言。
(けい[圭](名) ❶支那の古代に、天子より封侯のしるしとして、諸侯に賜ひし玉、上部尖りて下部は方形なり。❷くぎりめ。くぎり。❸かど。とがり。
(けい[奎](名) 星の名、二十八宿の一。
(けい[徑](名) 直徑の略言。さしわたし。
(けい[兄](名) あに。「一弟」
(けい[京](名) みやこ。
(けい[敬](名) ❶うやまふこと。たふとぶこと。❷おろそかにせざること。つゝしむこと。❸つゝしみ守りて、妄に心を動かさゞること。「一以て內を直くす」
(けい[經](名) ❶たて。又、たていと。❷すぢ。みちすぢ。❸のり。つね。❹さかひ。けいかい。❺聖人の述作にかゝる書、聖人の言を記載したる書。(聖
(けい[計](名) かんぢやう。はかりごと。「典」
(け-い[怪異](名) あやしく不思議なる物事。ものゝけ。「よな〳〵姫君御惱の一」
(けい[卿](名) 執政の大臣。朝廷の高官。
(けい[兄](代) 同輩に用ふる敬意の代名詞。「一以て如何となす」
(けい[卿](代) ❶君主の臣下を指して呼びたまふ語。なんぢ。❷同輩若しくは同輩以下に用ふる敬意の代名詞。きみ。
(けい[京](數) 數の名、兆の千倍。
(けい[藝](名) ❶わざ。たくみ。❷身に學び得たるわざ。「一が身を助くる不仕合」❸遊藝の特稱。「かくし一」「うやまひ且愛すること。
(けい-あい[敬愛](名) うやまふと愛すると。又、
(けい-あん[慶安](名) 《もと江戶の醫者の名といふ》❶奉公又は緣談などの媒介をなすもの。❷履人の周旋人又は請宿。(桂庵、慶庵)
(けい-い[敬意](名) うやまふこゝろ。「一を表す」
(けい-い[輕易](名) ❶てがるきこと。たやすきこと。❷たやすしとすること。あなどること。
(けい-いう[經由](名) へよること。とほること。
(けい-いん[契印](名) 文書の相分離したる紙面に、其相關連する證として、雙方へかけて捺す印。
(けい-いん[鯨飲](名) 多量に酒を飲むこと。「馬食」
(けい-うん[慶雲](名) めでたきしるしの雲。(卿
(けい-えい[經營](名) ❶なはばりをしもとをたてゝ建築すること。❷規模を定め基礎を立てゝ物事をとゝのひいとなむこと。「一慘澹」「どき兵士」
(けい-えい[輕銳](名) 身輕によそほひたるすゝ
(けい-えい[形影](名) かたちとかげと。——あひ とむらふ[形影相弔] 孤立してたよる人もなくさびしきくらしをなすにいふ。
(けい-えん[瓊筵](名) 詩歌の會などの敬稱。「一
(けい-ねん[磬音](名) 梵磬(ボン)の聲。「に陪す」

(けい-か[輕舸](名) はやふね。てんま。「一」
(けい-が[慶賀](名) いはひ。よろこび。「新年の
(けい-か[猊下](名) 高貴なる僧侶のあるは又はかてもとの義、轉じて、貴き僧侶の敬稱。(書狀などに用ふ)「謹んで尊を某僧正の一に呈す」
(けい-かい[境界](名) さかひ。きまり。(疆界)
(けい-かい[警戒](名) ❶注意して戒(イマ)しめまもること。ぬかりなく所要の準備をなすこと。❷注意を與へて戒めまもらすること。ぬかりなく所要の準備をなさしむること。——かうぐんりこ[警戒行軍](名) 敵に近き行軍。——しよく[警戒色](名) 【動】動物が自己をなるべく顯著ならしめ、他の動物に認知せられ易からしめんための特殊なる體色。
(けい-がい[傾蓋](名) 《途中にて、出あひきぬがさをかたむけて立談する義》一寸(チヨ)と面會したることにいふ語。——きうの ごとし[傾蓋如舊] 一寸と面會して意氣相投じ、忽ちむかしなじみの様に親しくなるにいふ。
(けい-がい[謦咳](名) ❶せはぶき。せきばらひ。❷笑ひつ語りつすること。「其前に一す」——に せつす[接謦咳] 面會を得るにいふ。
(けい-かう[經行](名) ❶へめぐりゆくこと。へめぐり。❷月やく。つきのめぐり。「ごと。
(けい-かう[景仰](名) 其人の德をしたひあふ
(けい-かう[啓行](名) さきがけ。かどで。
(けい-かう[傾向](名) かたむきむかふこと。かたよりおもむくこと。かたむき。かたより。
(けい-かく[圭角](名) ❶かど。とがり。❷才氣又は見識の發露して他とはなれて見ゆる狀態。❸言語又は舉動の他と和合せざる狀態。
(けい-かく[傾角](名) 【地】磁針が水平と成す角、北半球にありては磁針の北極は水平より下に向ふものとす。「る。
(けい-がく[經學](名) 經書の意義を研究する學
(けい-がく[谿壑](名) 《大いなるたにの義》慾望の深くして足ることを知らざるにたとへいふ語。「一
(けい-がく[驚愕](名) おどろくこと。「の慾。
(けい-かふ[閨閤](名) ❶ねや。ふしど。❷おそば。ごきんじよ。「一の臣」
(けい-がふ[契合](名) ❶わりふを合せたるが如く、兩者の言行などのよく一致すること。❷種々の現象を比較して、其共通の事情を以て其現象の原因又は結果なりと推定すること。
(けい-がふ[迎合](名) 他人の機嫌を察しおもねりへつらひてこれに從ふこと。
(けい-がみ[罫紙](名) 罫(ケ)を引きたる紙。(界紙)
(けい-かん[鷄姦](名) なんしよく。だんしよく。
(けい-がん[慧眼](名) さかしく鋭き眼力。
(けい-き[刑期](名) 刑罰を受けてゐる期間。
(けい-き[京畿](名) ❶宮城のある近傍の稱。❷畿內の稱。「一八道」
(けい-き[輕騎](名) 身がるによそほひたる騎兵。
(けい-き[景氣](名) ❶けしき。けはひ。ありさま。「一を見定む」❷賣買又は取引のありさま。「一のよ
(けい-ぎ[經義](名) 經書の意義。「い店」
(けい-ぎ[藝妓](名) 宴席などに招かれ、歌舞音曲をなすを業とする女。うたひめ。げいしや。げいこ。
(けい-き-きう[輕氣球](名) 空氣に比して輕き瓦斯體(例へば水素又は石炭瓦斯等)を絹張の袋に入れて空中に上下せしむる裝置のもの、袋の下部に籠ありて、これに人を乘せ又は物を容(イ)る、索をつけて地上に繫留するものと、自由に空中に浮遊行動するものとの二種あり。(下圖に示すは繫留する紙花式の輕氣球なり)


[けいききう]

——たい[輕氣球隊](名) 輕氣球を使用して、通信又は偵察等をなすために設けられたる軍隊。
(けい-きふ[警急](名) 急變に對して用意をなすこと。——しゆくえい[警急舍營](名) 軍隊が服裝をとゝのへ、背嚢を身邊に置き、嚴しき防備を以て舍營すること。
(けい-きやう[景況](名) けいき。ありさま。
(けい-きゆう[勁弓](名) がうきゆう。つよき弓。
(けい-きよ[輕擧](名) かるがるしきおこなひ。
(けい-きよ[瓊琚](名) うつくしき玉。
(けい-きよく[荊棘](名) ❶いばら。❷賊國又は暴民。「一を拔く」
(けい-きんこ[輕禁錮](名)【法】輕罪に科する主刑の一、一定の場所に留置して定役に服せしめざるもの、現行法にて十一日以上五年以下の刑期なり。
(けい-きんごく[輕禁獄](名) 【法】重罪に科する主刑の一、內地の獄に入れ定役に服せしめざるもの現行法にて六年以上八年以下の刑期なり。「金屬。
(けい-きんぞく[輕金屬](名) 【化】比重四以下の
(けい-く[警句](名) よく眞理をいひあらはしたる句、すぐれてするどき意義ある句。
(けい-ぐ[刑具](名) 罪人などをいましむるために、其身體に加ふる具。かせ。
(けい-ぐ[敬具](名) つゝしみて申上ぐといふ意。

形狀の末に記する語。
けいくわ[經過](名)❶とほりこすこと。すぎゆくこと。へゆくこと。❷時日をへゆく狀態。「病氣の一」。
けいくわ[京華](名)みやこ。
けいくわ[螢火](名)ほたるび。
けいくわい[輕快](名)❶重量少なくして速力はやきこと。「一なる小舟」。❷氣分輕くさつぱりしてすばやきこと。「一なる小說」。❸病氣稍や輕くなりたること。
けいくわう[螢光](名)❶ほたるび。ほたるのひかり。❷[理]透明體によりこれを照らすとき透過光に見たる色と異なる色の光を反射する特殊の光。
けいくわく[計劃](名)はかりごと。もくろみ。くはだて。[經畫]。
けいくわん[警官](名)警察官の略言。
けいくわん[掛冠](名)「くわいくわん」に同じ。
けいくわん[桂冠](名)月桂冠の略言。
けいくわん[鷄冠](名)にはとりのとさか。
――くわ[鷄冠花](名)[植]「けいとう」に同じ。
――せき[鷄冠石](名)砒と硫黃との化合物。柱狀又は粒狀をなす、鮮紅しき橙黃色を有して透明なり、永く大氣中に曝せば雄黃となる、融解し易し。繪具又は烟火の材料に供せらる。
けいげい[鯨鯢](名)大奸賊又は凶徒の首領。
けいけい[輕輕](名,副)かろがろしきさまに。
けいけい[熒熒](名,副)暗中にて小さきもののぴかぴかとひかるさまにいふ語。
けいけう[景教](名)「キリスト教」に同じ。
けいけん[敬虔](名)❶つゝしみ正しくすること。❷神佛に忠敬なること。
けいけん[經驗](名)❶實際にためしこゝろみたること。こゝろみ。ためし。❷こゝろみ又はためしによりて得たる智識又は技術。❸感官を通じて得たる知覺。又、知覺によりて結合せられたる知識。
――ろん[經驗論](名)❶[Empiricism][哲]知識は總て經驗によりて收得したる結果にして、經驗以外に知識の根源なしといふ一派の認識論。純理論の對。❷經驗上より立てたる議論。
けいげん[輕減](名)減じて輕くすること。
けいこ[稽古](名)❶古昔の事を考ふること。❷學藝・技藝などを習ふこと。[修習、溫習]。❸音曲などをならふこと。
[稽古所](名)物事を學習する所。又、音曲などを教ふる家。――ばかま[稽古袴](名)稽古する時にはく袴。――ぼん[稽古本](名)音曲などの稽古に用ふる大字の書物。
けいご[警固](名)非常を警めて防備すること。又、其設備。かため。[護衛]。
けいご[警護](名)危害あらせじといましめまもること。「一の武士」。
けいご[敬語](名)敬意を表するために使用する語。
けいこう[鷄口](名)(にはとりの口の義)小なる團體のかしら。
けいこく[警告](名)注意戒心するやうにつげ知らすこと。
けいこく[傾國](名)(一顧傾人城、再顧傾人國といふ語より出づ)美人の稱。けいせい。
けいこく[頃刻](名)ざんじ。しばらく。
けいこつ[頸骨](名)くびのほね。
けいこつ[脛骨](名)脛部の骨。
けいこつ[輕忽](名)かろがろしきこと。ゆるがせにすること。
けいさ[繫鎖](名)❶つなぎとむること。つなぎとめて自由を得しめざること。❷つなぎとむるに用ふるくさり。
けいさい[荊妻](名)自分の妻の謙稱。
けいさい[繼妻](名)のちぞひ。後妻。
けいさい[掲載](名)かゝげ載すること。
けいざい[輕罪](名)[法]禁錮又は罰金に處せらるゝ犯罪。
けいざい[經濟](名)❶國ををさめ民をすくふこと。政事を行ふこと。「一の才」。❷[經]人類が財貨を獲得し使用し以て其慾望を滿足せしめんとする各種の行爲又は狀態。❸儉約なること。利益になること。とく。――か[經濟家](名)經濟の事に明かなる人。又、巧に費用を節する人。――かい[經濟界](名)人類社會の經濟的活動の範圍。交換賣買等の行はるゝ社會。――がく[經濟學](名)[經]人類及國家の財貨に對する關係を研究する科學。――せいさく[經濟政策](名)[經]國家及其機關が、國民の經濟上の利益發達を保護增進する方法手段の稱。信用・交通・貨幣・保險・銀行其他等の政策、農業政策・工業政策等それぞれの名目あり。――てき[經濟的](形)❶財を獲得し使用し以て慾望を滿足せしめんとするさまにいふ語。❷とく又は儉約になるさまにいふ語。
けいさう[輕躁](名)沈着せざること。輕々しくさわぐこと。
けいさう[輕裝](名)身輕に裝ふこと。又、「あっさり」とよそほふこと。
けいさう[競爭](名)「きやうさう」に同じ。

けいさう[硅藻](名)[植]海中に生ずる下等植物。其形狀種々なれど、外部は必ず硅酸より成りて美麗なる殼膜を有し、内部は黃綠なるが故に常に綠色を呈せり。――せき[硅藻石](名)上古の硅藻の化石となりて存在せるもの。我國にては北海道に多く產す。――ど[硅藻土](名)硅藻の堆積により成りたる土。
けいさう[係爭](名)二人以上の人の間に爭ひあること。――じじつ[係爭事實](名)[法]係爭となりたる事實。例へば甲乙の間に契約を結びたる事實の有無のあらそひの如し。――ぶつ[係爭物](名)[法]係爭の目的となれる物件。例へば甲乙の間にあらそひある土地の如し。
けいさつ[警察](名)❶[法]國家及人民の安寧幸福に對する危害を排除するため、直接に人民の自由を制限する國家の命令權の行爲。警察官廳の權限によりてなす所の行爲。❷警察署の略言。――い[警察醫](名)警察に關する醫務を司る職名。――ぎやうせい[警察行政](名)[法]「けいさつ」❶に同じ。――くわん[警察官](名)警察處分の執行をつかさどる職名。又、其職にある官吏。卽ち警視・警部・巡査等なり。――くわんちやう[警察官廳](名)❶[法]警察上の命令又は處分をなすべき權限を有する官廳。各省大臣・北海道長官・警視總監・府縣知事・警察署長等なり。❷俗に警視廳又は警察署などの稱。――けん[警察權](名)[法]警察を行ふ權力又は權限。――しよ[警察署](名)各府縣及北海道にて、一定の區域内の警察事務を扱ふ役所。警視又は警部を以て其長とし、警視總監又は府縣知事又は北海道長官の下に屬す。――しよぶん[警察處分](名)[法]警察上の行政處分。交通の遮斷・集會の解散等の類これなり。――めいれい[警察命令](名)[法]警察上の行政命令。――れい[警察令](名)[法]前條に同じ。
けいさん[卦算](名)文鎭の類にして、易の算木の狀をなすもの。けさん。[卦尺]。
けいさん[硅酸](名)[化]硅素と酸素と水との化合物。硅酸「アルカリ」の溶液に強き酸を加へて析出する膠狀の沈澱物にして、これを乾燥すれば無水硅酸となる。無水硅酸は、弗化水素の外すべての酸類に溶解せず、應用極めて廣く硝子又は磁器の製造に用ひらる。天然には水晶・石英・燧石・瑪瑙等となりて存在す。――アルカリ[硅酸ー](名)[化]無水硅酸と「アルカリ」と共に融解して生ずる硝子狀のもの。水に溶解すれば水飴の如き粘液を生ず、これを器具の表面に塗りて防火用とし、又種々の工業に用ふ。――えん[硅酸鹽](名)硅素と酸素とアルミニウム・カルシウム等との化合物。
けいさん[計算](名)計りかぞふること。勘定。――じけん[計算事件](名)[法]計算の當否を目的とする訴訟。
けいし[桂枝](名)桂の枝の皮。藥用に供せらる。
けいし[京師](名)みやこ。きやうと。
けいし[繼子](名)自己の配偶者の子にして、自己の實子若しくは養子にあらざるもの。まゝこ。
けいし[罫紙](名)けいがみ。
けいし[警視](名)高等官の警察官。
けいし[輕視](名)輕んじ見ること。
けいし[刑死](名)死刑に處せられて死ぬること。
けいし[經始](名)いとなみはじむること。「靈臺の一」。
けいし[經史](名)經書と歷史と。
けいし[揭示](名)揭げて示すこと。又、其文書。
けいし[啓示](名)あらはしめすこと。「天の一」。
けいし[家司](名)「けいし」に同じ。
けいし[屐子](名)古昔、行はれしはきもの。
けいじ[繫辭](名)❶論理學の命題において主語と客語とを結びつけて、肯定若しくは否定の意を示すもの。例へば「人の性は善なり」といふ命題に於ける「なり」の如きこれなり。
けいじ[掲示](名)「けいし」の轉。
けいじ[刑事](名)❶刑罰に關する事件。民事の對。❷けいじおほゆさきの略言。
けいじ[慶事](名)よろこびごと。いはひごと。
けいしう[輕舟](名)かるき小舟。
けいしう[閨秀](名)すぐれたる婦人。
けいじか[形而下](名)形體を具有すること。知覺せらるゝ現象の境界。有形。形而上の對。――がく[形而下學](名)有形のものに關する學問。卽ち理化學・動植物學等をいふ。
けいしき[形式](名)❶外形。外觀。❷一定の狀態、固有の形。❸かた。模型。――しゆぎ[形式主義](名)[Formalism][倫]善惡は行爲又は意志の傾向に屬する性質にして、直接に感知せらるといふ倫理說。❷何事によらず内容より形式に重きを置くこと。――てき[形式的](名)形式をおもとするさまにいふ語。
けいじさいばん[刑事裁判](名)[法]犯罪に

就き、刑罰の適用を定むること。 ——しよ[刑事裁判所](名)[法]刑事裁判をなす權限ある裁判所、即ち司法裁判所が刑事裁判をなす場合にいふ。
(けいじ-じけん)[刑事事件](名) 刑事訴訟に關する事件。
(けい-じじやう)[形而上](名) 形體の知覺すべからざること。知覺せらるゝ現象を超越する境界、無形。形而下の對。 ——がく[形而上學](名) 有形を超越したる境界に關する學問、即ち、哲學。
(けいじ-じゆんさ)[刑事巡査](名) 刑事上の犯罪人を逮捕する職務を帶びたる巡査。
(けいじ-せいさい)[刑事制裁](名)[法]國家が刑法上の犯罪者に科する制裁。
(けいし-そうかん)[警視總監](名) 各省大臣(直接には內務大臣)の指揮監督を受け、東京府下の警察行政及消防・監獄の事務を總理する官職、高等警察は總理大臣の指揮を受け、又、檢事と同じく犯罪搜索の權限を有す。
(けいじ-そしよう)[刑事訴訟](名)[法]檢事が刑事被告人に就き、司法裁判所に公訴を提起し刑罰の適用を求むる手續。又、刑事被告人と司法裁判所との間に於ける其事件上の手續。
(けいし-ちやう)[警視廳](名) 警視總監が事務を處理する官署。又、警視總監が處理する事務の全體。 ——れい[警視廳令](名) 警視總監が職權又は委任によりて發する行政命令。
(けい-しつ)[繼室](名) のちぞひ。後妻。
(けい-しつ)[形質](名) 形體と質と。
(けいじ-ひこくにん)[刑事被告人](名)[法]刑罰法の犯罪人として告訴又は告發せられ、未だ裁判確定せざるもの。

(けい-しや)[傾斜](名) ㊀かたむきたること。かたむきたる程度。㊁[地]地層面と水平面との角度。
(げい-しや)[藝者](名) ㊀音曲・歌舞などを以て、酒宴の興をたすくるを業とする女。げいこ。うたひめ。(藝妓)。㊁すべて遊藝に巧なるもの。
(けい-しやう)[輕傷](名) かろききず。かろきておひ。
(けい-しやう)[卿相](名) 朝政に預かる高官。
(けい-しやう)[形象](名) かたち。さま。
(けい-しやう)[啓上](名) 申上ぐること。「一筆ー」。
(けい-じやう)[形狀](名) さま。かたち。ありさま。やうす。「地球のー」。 ——げん[形狀言](名)[文法]「けいようし」(形容詞)に同じ。
(けい-じやう)[經常](名) 繼續して絕えざること。一定してかはらざること。つね。 ——さいしゆつ[經常歲出](名) 每年繼續して支出する國家の歲出、例へば諸官廳の費用の如し。 ——さいにふ[經常歲入](名) 每年繼續して收入する國家の收領、例へば、租稅・手數料又は財產營業等より生ずる利益等の如し。 ——ひ[經常費](名) 每年繼續して支出する經費。
(けい-しやぎ)[傾斜儀](名) 土地の傾斜を測定する器械。
(けい-しゆ)[稽首](名) 頭の地に付くまで、體を屈して拜すること。「ー再拜」。
(けい-しゆ)[擎手](名) 手をさゝぐること。
(けい-しゆ)[繼受](名) うけつぐこと。 ——はふ[繼受法](名)[法]他國の法律を採用し又はこれに則りて制定せる法律。
(けい-しゆく)[奎宿](名) 二十八宿の一。
(げい-じゆつ)[藝術](名) ㊀たくみなるわざ。わざ。技術。㊁美を形象に表現すること。又、其手段、美術。 ——び[藝術美](名)[哲]藝術によりて表

現せられたる美、模倣する價値を離れ、美を唯一の目的となすもの。
(けい-しよ)[經書](名) 儒教又は漢學にて、最も尊崇せる易經・書經・詩經・春秋・禮記・大學・論語・孟子・中庸などの稱。
(けい-しよう)[形勝](名) 地勢又は風景のすぐれたる土地。
(けい-しよう)[敬稱](名) 敬ひていふとなへ、人の妻を指して令閨などゝいふ類。
(けい-しよう)[敬承](名) つゝしみてうけたまはること。
(けい-しよう)[警鐘](名) 火事などに鳴らす鐘。
(けい-しよう)[繼承](名) あとをうけつぐこと。
(けい-しよく)[景色](名) けしき。ふうけい。
(けい-しん)[敬神](名) 神をうやまふこと。「ー愛國」。
(けい-じん)[鷄人](名) 古昔、宮禁にて夜明を知らすることを掌(ツカサド)りし人。
けい・する[刑](他、さ變) 刑罰に處す。つみす。
けい・する[敬](他、さ變) うやまふ。
けい・する[賀](他、さ變) いはふ。よろこぶ。
けい・する[啓](他、さ變) 言上す。
(けい-すう)[係數](名)[數](い)積の因數の中、前方にある因數の其後方にある因數に對する稱、例へば $6x, abx^2, pqxyz$ に於て $6, ab, pq$ は x, x^2, xyz の係數なり。(ろ)數係數の略言。
(けい-すう)[計數](名) かずを計算すること。さんよう。 ——き[計數器](名) 計數に使用する器械、算盤(ソロバン)もまた其一なれど、普通は歐米より渡來せる一種の器械の稱にして、該器械は巧妙なる裝置にして、使用上大いに勞力を省く。
(げい-すう)[鯨鬚](名)「くぢら」(鯨)(二)を見よ。
けいず-かひ(名) ひそかにぬすみ物を賣買すること。又、其商人。(窩主)。

(けい-すゐ)[經水](名) つきのさはり。つきやく。月經。(月水)。
(けい-せい)[形勢](名) ありさま。なりゆき。「熟ら世のーを觀る」。
(けい-せい)[形聲](名) 漢字の六書の一、半聲半義のものにて、例へば江の字は、水にして工(コウ)の聲をなすとの意より、氵に工を合はせて成るが如し。
(けい-せい)[傾城](名) ㊀(「一顧傾人城再顧傾人國」の語に出づ)美人の稱。㊁轉じて、遊女の稱。
(けい-せい)[警醒](名) ㊀睡眠をいましめさますこと。㊁迷妄をいましめ悟らすること。
(けい-せい)[警世](名) 世人をさとしいましむること。
(けい-せい)[經世](名) 世ををさむること。 ——か[經世家](名) 世ををさむる人。政治家。
(けい-せい)[形成](名) 形を成すこと。かたちづくること。 ——そう[形成層](名)[植]木幹の靭皮と木質との中間にある肉眼にては不分明なる薄き層、幹の發達のためには最も緊要なる部分にして、冬期の外常に外方に向ひては靭皮を生じ內方に向ひては木質を生ず。
(けい-せう)[輕少](名) いさゝか。すこしばかり。(輕微)。
(けい-せき)[形跡](名) あとかた。
(けい-せき)[經籍](名) けいしよ。
(けい-せき)[螢石](名)[鑛]一種の鑛物、透明若しくは半透明にして玻璃光を有し、熱すれば燐光を發す、鍍鋼の熔劑又は玻璃の腐蝕劑に供せられ、美麗なるものは裝飾品に用ひらる。
(けい-せき)[硅石](名)[鑛]硅素の化合物なる水晶・瑪瑙(メナウ)又は燧石等の稱、石英。 ——ど[硅石土](名)「けいさうど」(硅藻土)に同じ。
(けい-せち)[磬折](名) 次條に同じ。
(けい-せつ)[磬折](名) (磬の如き形に曲ぐる義)

立ちながら腰を前方に曲ぐること。
(けい-せつ)[螢雪](名) (晉の車胤が螢をあつめ其光にて書を讀み、孫康が雪をあつめ其影にて書を讀みしといふ故事に出づ)辛苦して學問すること。「ーの功空しからず」。
(けい-せつ)[勁節](名) 剛強なるきしやう。又、妄に屈せざるみさを。
(げい-せつ)[迎接](名) 來るものをむかふること。
(けい-せん)[頸腺](名) 頸部の腺。
(けい-せん)[經線](名)[地]地球の表面上に緯線と直交して兩極を連結したる想像上の大圈、即ち同經度の地點を連結したる想像線。しごせん。
(けい-そ)[硅素](名)[化]非金屬の一、製法により或は無定形褐色の粉末となり或は板狀の結晶となり或は鋼色の光澤を有する針狀結晶となる、天然に遊離しては存在せざれど、化合物となりては多量に存在す、其酸化物の稍や不純なるは石英にして往々火山脈をなす。又、硅酸鹽類となり岩石土砂等を構成す。
(けい-そ)[鼷鼠](名)[動]はつかねずみ。
(けい-そう)[輕鬆](名) ゆかたかろくして質あらきこと。「土壤ー」。
(けい-そう)[敬崇](名) うやまひあがむること。たふとぶこと。
(げい-そう)[迎送](名) おくりむかへ。
(けい-ぞく)[繫屬](名) つながりつくこと。かゝりつくこと。又、つなぎつくること。かけつくること。
(けい-ぞく)[繼續](名) ㊀つぎつゞくること。つぐこと。㊁あとをうけつぐこと。あとにつゞくこと。 ——ちえきけん[繼續地役權](名)[法]地役權の一種、他人の土地に間斷なく繼續して或便益を受くべきもの。 ——はん[繼續犯](名)[法]犯罪たるべき所爲が、比較的長き時間を要する性質のもの、

例へば、監禁罪の如きこれなり。 ——ひ[繼續費](名) 每年繼續して支出する費用。
(けい-そつ)[輕率](名) かろはずみ。
(けい-たい)[携帶](名) たづさへ持つこと。
(けい-たい)[形體](名) かたち。ありさま。(形態)。
(けい-たい)[繼體](名) あとつぎ。よつぎ。「ーの君」。
(けい-だい)[境內](名) ㊀さかひうち。區域內。㊁神社又は佛閣などの構內。
(けい-たう)[傾倒](名) ㊀かたむきたふること、又、かたむけたふすこと。㊁さかさにし內にあるものを盡く出すこと。㊂心をよせしたふこと。
(げい-たう)[藝道](名) 藝術の法。技藝の道、わざのみち。わざ。げい。
(けい-たん)[鷄蛋](名) にはとりのたまご。又、其しろみ。
(けい-ちつ)[啓蟄](名) (蟄したるもの、啓(ヒラ)くといふ義)二十四氣の一、春の節にして、陽曆三月五日にあたる。
(けい-ちやう)[敬聽](名) つゝしみてきくこと。
(けい-ちやう)[傾聽](名) 耳をかたむけてきくこと。心をかたむけてきくこと。
(けい-ぢやう)[刑場](名) しおきば。
(けいちやう-きん)[慶長金](名) 後陽成天皇の慶長年中に鑄造せられし大判・小判等の總稱、當時の金貨幣中品位最も高きもの。
(けいちやう-ぎん)[慶長銀](名) 後陽成天皇の慶長年中に鑄造せられし豆銀・丁銀等の稱。
(けい-ちゆう)[傾注](名) かたむけそゝぐこと。又、かたむけ致すこと。
(けい-ちゆう)[閨中](名) ねやのうち。
(けい-ぢゆう)[輕重](名) 輕きと重きと。
(けい-ちよう)[輕重](名)「けいぢゆう」に同じ。

(けい-ちようえき[輕懲役](名)【法】重罪の主刑の一。内地の懲役場に入れ定役に服せしむる刑罰。現行法にて六年以上八年以下の刑期なり。
(けい-づ[系圖](名) ❶先祖より代々の血統を記したる一家の表。系譜。❷物事の來歴。
けい-づくし[藝盡](名) 身に得たる藝のかぎりをあらはすこと。
(けい-てい[逕庭](名) かけへだゝり。かけはなれ。
(けい-てい[兄弟](名) きやうだい。――かきにせめぐ[兄弟鬩牆](名) 兄弟がうちわげんくわをなすにいふ。
(けい-てう[輕佻](名) かろ〴〵しきこと。けいはく。
(けい-てう[京兆](名) ❶左京職及右京職の唐名。❷轉じて、府知事の異稱。
(けい-てん[經典](名) ❶變ぜざる道理。つねのみち。❷違ふべからざる法式。さだまりたるのり。❸聖人の述作にかゝる書。又、聖人の言を記したる書。
(けい-でんき[繼電器](名)【理】一個の電磁石にして、電信又は電話の線路に通ずる弱き(距離遠きために)電流の作用により、受信部の電路を開閉し、以て受信機を動かす用をなすもの。
けい-と[毛絲](名) 毛を絲によりたるもの。用ひて種々の編物をつくる。
(けい-と[計都](名) 「けいとせい」の略言。
(けい-ど[塋土](名) はかば。
(けい-ど[經度](名)【地】地球上一定の地點より東又は西に向て測りたる角距離。卽ち經線により測る距離。赤道に於ける地球の四周を三百六十度に分つ。明治十八年米國「ワシントン」府に開きたる萬國子午線會議にて、「イギリス」國「グリニッチ」の司天臺を通過する線を基點とすることとなれり。西に測るを西經といひ、東に測るを東經といふ。
(けい-とう[惠投](名) 他より物を惠まれたること。
(けい-とう[系統](名) ❶次第順序を追ひ、つゞきつながりて統一してあること。すぢ。みち。❷一の原理又は法則の下に、個々の事物の間に存する一般の關係を順序を立て、列ぬること。
(けい-とう[鷄頭](名)【植】莧科に屬する草。葉は互生して長き尖頭を有す。夏秋の交、赤色黄色若しくは白色の花を開く。花序は雞冠狀なり。觀賞用として栽培し、又、葉は食用に供せらる。――げ[鷄頭花](名) 前條に同じ。
(けいとう-てき[系統的](名) 系統あるさまにいふ語。――はっせい[系統的發生](名) 現種なる原始の狀態より、順序を追ひて次第に複雜なる狀態に進化すること。
(けい-どく[煢獨](名) ひとりもの。
(けい-とせい[計都星](名) 九曜の一。其神の像は忿怒の相を具へ兩手に日月を捧げ背龍に乘る。
(けい-にく[鷄肉](名) にはとりの肉。
(けい-にん[繼任](名) 任務をうけつぐこと。
(けい-にん[藝人](名) 遊藝を以て渡世する人。卽ち、俳優・落語家などの類。
(けい-のう[藝能](名) 身に得たる藝。又、藝に長じたる才。
(けい-ば[競馬](名) 乘りたる馬を馳(は)せて、互に遅速を爭ひ勝敗を賭ふこと。くらべうま。うまかけ。
(けい-はい[輕輩](名) ❶身分低きもの。❷特に、足輕のともがら。
(けい-はう[警報](名) ❶警戒すべき由を告ぐる報知。❷風雨などの來るを豫(かね)め示すこと。
(けい-はう[輕砲](名) 口徑十二珊以下の火砲の稱。重砲の對。
(けい-ばう[閨房](名) ねま。寢室。閨門。
(けい-はく[輕薄](名) ❶思慮のあさきこと。うはすべり。「―なる考へ」。❷眞實ならざること。親切ならざること。「―極まる人」。❸あさま。
(けい-はく[敬白](名) 敬ひて申すこと。
(けい-ばく[繫縛](名) ほだし。なはめ。
けいはち-かぜ[警八風](名) 官紀頽廢の取締を嚴重にすること。警視廳令第八號を以て布告せられしによりいふ。(東京の俗語)
(けい-はつ[啓發](名) 知識をひらくこと。迷ひをとくこと。
(けい-ばつ[刑罰](名) ❶【法】國家が正義に反し社會に害惡をなすものに對して加ふる惡報。國家が有罪の確定判決を經たるものに加ふる苦痛。主刑と附加刑とあり。❷しおき。ばつ。「天の―」。――けん[刑罰權](名)【法】國家の主權が犯罪者に對して刑罰を加ふる作用。――はふ[刑罰法](名)【法】刑法に同じ。
(けい-はふ[刑法](名)【法】刑事に係(かゝ)はる法律。卽ち、犯罪及刑罰に關する國家の規定。
(けい-はん[罫版](名) 紙に罫(け)を印するための版木。
(けい-ひ[經費](名) 經營に要する費用。つひえ。
(けい-ひ[輕肥](名) かろき美衣を着て肥えふとりたる馬にのること。轉じて、ぜいたくなる生活をなすにいふ語。
(けい-び[輕微](名) すこし。わづか。輕少。微小。
(けい-び[警備](名) 豫(かね)め警戒すること。豫め防備すること。――かん[警備艦](名) 警備のためにそなへてある軍艦。――たい[警備隊](名) 島地警備のために屯在する軍隊。現時對馬に置かる。
(けい-びき[罫引](名) 罫を引くこと。又、其用具。
(けい-ひつ[警蹕](名) 次條に同じ。

(けい-ひつ[警蹕](名) 主上又は貴顯の出入し給ふ時、聲をかけ先拂して、人を警(いま)しむること。其掛聲は下を向きて、或は「をし」或は「し」或は「をし〳〵」などといふ。
(けい-びやく[啓白](名) 言上すること。
(けい-ひん[景品](名) けいぶつ。
(けい-びん[慧敏](名) 才智するどきこと。さときこと。
(けい-ふ[輕浮](名) 心のかろ〴〵しくうはだつこと。親切の情に乏(とぼ)しきこと。
(けい-ふ[系譜](名) けいづ。
(けい-ふ[繼父](名) 自己の母の夫にして自己の實父・養父にあらざるもの。まゝちゝ。
(けい-ふ[繼夫](名) のちぞひの夫。
(けい-ぶ[輕侮](名) かろんじあなどること。
(けい-ぶ[警部](名) 判任官の警察官。――ちやう[警部長](名) 警務長の前稱。
(けい-ふう[輕風](名) かろく吹く風。
(けい-ふく[敬服](名) 感じて服從すること。
(けい-ふく[景福](名) おほいなるさいはひ。
(けい-ふく[慶福](名) よろこび。さいはひ。
(けい-ふく[敬復](名) つゝしみて返事すること。
(けい-ぶつ[景物](名) ❶時々のながめ。をり〳〵の景色。❷賣る品物に添へて顧客に與ふる品物。❸主なるものに添へて與ふるもの。
(けい-ふん[輕粉](名) 「はらや」に同じ。
(けい-ふん[塋墳](名) はか。つか。
(けい-ぶん[奎文](名) (奎は二十八宿の一にして文章の事を掌るといふ支那の傳說に出づ)學問文物の義にいふ語。「―大に興る」。
(けい-へい[迎聘](名) 禮物を送りて呼びむかふること。
(けい-へう[輕剽](名) かろ〴〵しきこと。又、かろ〴〵しくてあらきこと。
(けい-へき[刑辟](名) つみ。とが。おきて。
(けい-べつ[輕蔑](名) あなどりてないがしろにすること。輕侮。あなどり。
(けい-べん[輕便](名) てがるなること。「―御料理」。――てつだう[輕便鐵道](名) 通常のものよりは軌道又は列車の規模小なる鐵道。
(けい-ぼ[繼母](名) 父の妻にして、實母又は養母にあらざるもの。まゝはゝ。
(けい-ぼ[景慕](名) あふぎしたふこと。
(けい-ぼ[傾慕](名) 心をよせしたふこと。
(けい-ぼ[敬慕](名) うやまひしたふこと。
(けい-ほきよく[警保局](名) 内務大臣の統轄に屬し、其意思を受けて行政警察・高等警察・圖書出版及著作權に關する事項を扱ふ內務省の一局。
(けい-ま[桂馬](名) ❶將棊の駒の名。盤の目を斜に前の右又は左へ一齋だけ、飛び進むことを得るもの。なりては金將と同一のはたらきをなす。❷圍碁にて、一つの石より一間又は二間隔て一齋ずらせて石を打つこと。一間なるを小桂馬といひ、二間なるを大桂馬といふ。
(けい-みやく[經脈](名) みち。すぢ。
(けい-む[警務](名) 警察上の事務。――ちやう[警務長](名) 北海道及各府縣(東京府を除く)の事務官。警務の執行に關し、長官又は知事の命を受け、警察・衞生及巡査を指揮監督するもの。
(けい-めい[鷄鳴](名) ❶鷄の鳴くこと。❷昔時の丑の時。今の午前二時。
(けい-めい[啓明](名) よあけの明星。あけのみやうじやう。
(けい-めい[經營](名) 「けいえい」の訛。
(けい-めい[敬命](名) 謹み敬ふこと。
(けい-めい[刑名](名) ❶【法】刑罰の名稱。死刑・徒刑・流刑・懲役・禁獄・禁錮・拘留・科料又は剝奪公權・停止公權・監視・罰金・沒收これなり。❷名義と實際と相伴ふやう、法律を以て嚴重にとりしまること。「―の學」。
(けい-めい[藝名](名) 藝人などが藝道上にて、本名の外に附くる名。
(けい-めう[輕妙](名) かろらかにして巧なること。圓滑にして妙なること。「―文章」。
(けい-もう[毛蒙](名)【植】かえうの手。
(けい-もう[啓蒙](名) 蒙昧なるものを啓發すること。兒童に教訓すること。
(けい-もん[閨門](名) ❶ねや。ふしど。❷轉じて、一家内の男女の品行。「―修まらず」。
(けい-やく[契約](名) ❶ちぎり。やくそく。約定。❷【法】法律上の効果を生ずるを目的とする二人以上の意思の合致の稱。一方がこれが申込をなし相手方がこれを承諾するによりて成立す。贈與・賣買・交換・貸借・雇傭・請負・委任・寄託等はすべて契約なり。――くわんけい[契約關係](名) 契約により生じたる權利義務の關係。――しよ[契約書](名) 契約の證明のため當事者間に於て作成する證書。――せつ[契約說](名) 國家及法律は人民の契約によりて成るといふ說。此說によれば、人民の君主を戴する權は君主が人民を制する權と對立すといひ、又は人民は各自主權の一部として支配さるものにして、他人に支配せらるゝものにあらずといふ如き、暴慢なる論結を生ず。
(けい-ゆ[經由](名) へゆくこと。とほること。「―の人」。
(けい-よ[刑餘](名) 嘗(かつ)て刑罰をうけたること。「―の人」。
(けい-よ[惠與](名) めぐみあたふること。
(けい-よう[形容](名) ❶すがた。かたち。ていさ

い。ありさま。形狀。㊂物事の形狀をかたどりていひあらはすこと。——し[形容詞](名)[文法]物事の形狀を示す詞、これに「しき」の活用と「ししき」の活用とあり、前者にては「く・し・き・けれ」と活用し、後者にては「しく・し・しき・しけれ」と活用す。

(けい-よく)[啓沃](名) 彷より智をひらくこと。さとして迷をとくこと。又、其人。

(けい-ら)[警邏](名) みまはりて非常をいましむること。

(けい-ら)[輕羅](名) うすき絹布。うすもの。

(けい-らく)[經絡](名) ㊀すぢみち。㊁體內の筋肉のみち。

(けい-らく)[京洛](名) みやこ。

(けい-らん)[鷄卵](名) にはとりのたまご。

(けい-り)[警吏](名) 警察官。

(けい-り)[經理](名) ㊀をさめとゝのふること。㊁會計及給與に關する事務の處理。——きよく[經理局](名) 陸軍省及海軍省の一局、當該大臣の管理に屬する行政上の會計及給與の事務を扱(アツカ)ふ所。

(けい-りう)[繫留](名) つなぎとむること。

(けい-りう)[稽留](名) とゞまること。とゞこほること。

(けい-りく)[刑戮](名) 刑罰に處せらるゝこと。

(けい-りやく)[計略](名) はかりごと。

(けい-りん)[經綸](名) 國家ををさめとゝのふること。

(けい-りん)[鷄林](名) 朝鮮國の異稱。

(けい-りん)[桂林](名) 文士のなかま。——の-いつし[桂林一枝](名) 文士のなかまの一人。

(げい-りん)[藝林](名) 藝道者なかま。文學者社會。

(けい-るゐ)[係累](名) わづらひ。かゝはり。ほだし。[繫累]。

(けい-れい)[敬禮](名) 敬意を表する禮。

(けい-れい)[刑例](名) 刑罰に關する規定。

(けい-れき)[經歷](名) へきたりたること。へめぐること。又、其すぢみち又は狀態。

(げい-れふ)[鯨獵](名) 鯨を捕ふること。

(けい-れん)[痙攣](名) 筋肉の引きつること。

けい-ろ[毛色](名) ㊀毛の色。㊁やうす。「—のかはった奴」。

(けい-ろ)[徑路](名) すぢ。みち。

(けい-ろく)[鷄肋](名) (魏の曹操の故事に出づ) にはとりの肋骨をねぶれば一種の味ありて、何となく捨てがたき心地せらるゝが如く、さほど役に立つにはあらねど捨てがたき物事にいふ語。

(けい-わく)[熒惑](名) 火星の一名。

(けい-ゐ)[經緯](名) ㊀たてとぬきと。㊁をさめとゝのふること。「天下を—す」。㊂經線と緯線と。又、經度と緯度と。——ぎ[經緯儀=Theodolite](名) 天體又は地物の方位角及仰角を測るに用ふる一種の器械、直立せる軸によりて水平に廻轉する板あり、これに二つの支柱ありて望遠鏡の水平軸を支ふ、支柱の一つに目盛したる垂直なる圓板附着し、廻轉板の下に目盛ある水平板あり、水平板によりて方位角を知り、垂直板によりて仰角を知る。

(けい-ゐき)[塋域](名) はかば。むしよ。

(けい-ゑい)[警衞](名) いましめ守ること。けいご。

(けい-ゑん)[閨怨](名) 婦人が其夫若しくは情人にすてられ又はこれと訣(ワカ)れて、ねやのさびしきをうらみかこつこと。

(けい-ゑん)[敬遠](名) 敬ひて近づきけがさざるやうにすること。又、おもてむきは敬ふやうの態度を取りて、實際は親しくせざるやうにすること。

(げい-ゑん)[藝苑](名) 「げいりん」(藝林)に同じ。

けう[希有](名) ㊀まれに有ること。㊁珍しく不思議なること。

†けう[孝](名) 「かう」に同じ。

†けう[興](名) 「きよう」に同じ。

(けう)[嬌](名) たをやかなること。あだめきたること。(嬌)。

(けう)[橇](名) かんじき。そり。

(けう)[僑](名) わびずまひ。かりずまひ。

(けう)[驕](名) おごりはこること。たかぶること。

(けう)[梟](名) ㊀[動]ふくろふ。㊁ごくもん。さらしくび。㊂たけきもの。すぐれたるもの。

(げう)[驍](名) たけきこと。すこやかなること。又、たけきもの。すこやかなるもの。「天下の—なり」。

(けう-あい)[嬌娃](名) なまめきてうつくしきこと。又、其女。美人。

(げう-あ)[曉鴉](名) よあけになくからす。

(けう-あく)[梟惡](名) 惡徒のかしら。又、すぐれたるわるもの。

(けう-いく)[教育](名) ㊀誘ひて善德にすゝますること。敎へて知識を啓發せしむること。をしへそだつること。㊁[敎]未だ成熟せざる人を個人として又は國家社會の一員として、完全なる生活をなす準備をなさしむるを目的とし、比較的成熟せる人が、これに對して諸種の材料及方法によりて、或時期の間繼續してなす行動。——か[教育家](名) 敎育の事業にあたる人。——がく[教育學](名) [敎]人心の作用現象を說明する心理學を基礎とし、倫理學又は社會學等を參酌して、教育に關する諸般の事を研究する學。

(けう-いく-そうかん)[教育總監](名) 教育總監部の長官、陸軍大將若しくは中將を以てこれに親補せられ、天皇に直隸す。——そうかんぶ[教育總監部](名) 陸軍全般の敎育の齊一進歩を規畫する所、歩・騎・砲・工・輜重の各兵種の兵監部を置く。

(けう-か)[嬌歌](名) なまめきたるうた。

(けう-かい)[教誡](名) をしへ。いましめ。

(げう-かう)[僥倖](名) ㊀さいはひをもとむること。しあはせをねがふこと。㊁おもひがけぬしあはせ。こぼれざいはひ。

(けう-がふ)[校合](名) 讀み合せて誤(アヤマ)りあるを照し合せて正すこと。——ずり[校合刷](名) 校合のための印刷。

(けう-ぎ)[教義](名) 宗教の旨義。をしへのむね。

(げう-き)[曉起](名) あさおき。はやおき。

(げう-き)[澆季](名) ㊀一般の道德信仰の腐敗したること。世上の風俗人情の浮薄となりたること。世のすゑ。㊁末の世。まつせ。

(げう-き)[驍騎](名) つよき騎兵。

(けう-きよ)[僑居](名) かりずまひ。たびずまひ。

(けう-くわ)[教化](名) みちびきて智をひらき善にすゝますること。をしへみちびくこと。をしへ。

(けう-くわ)[教科](名) 敎授する科目。——しよ[教科書](名) 學校にて教科に用ふる書物。

(けう-くわい)[教會](名) ㊀宗教上の集會又は團體。㊁信徒の集會し又は說敎などする場合。

(けう-くわい)[教誨](名) をしへさとすこと。をしへ。——し[教誨師](名) 監獄にて、定時に囚徒に對し勸善の說敎をなす人。

(けうぐわい-べつでん)[教外別傳](名) [佛] 「けうげべつでん」に同じ。

(げう-くわう)[曉光](名) ㊀夜のあけそらむ光。㊁暗晦なりし物事のあらはれそむる狀態。

(けう-くわん)[教官](名) 敎授の職務にある官吏。

(けう-くわん)[叫喚](名) をめきさけぶこと。——ぢごく[叫喚地獄](名) [佛]八熱地獄の第四、罪業深き者獄卒の苛責にあひ、常に苦痛に堪へずして叫喚すといふ。

(けう-くん)[教訓](名) 敎へさとすこと。意見を加ふること。

けう-け[毛受](名) 月代(サカヤキ)を剃(ソ)る時、剃りたる毛を受くるために持つ板。[拔毛板]。

(けう-け)[教化](名) 「けうくわ」に同じ。

(けう-げ)[教化](名) 前條に同じ。

(けう-げき)[矯激](名) 強ひて普通と異なる擧動をなすこと。又、わざと正直なるさまを裝ふこと。

(けうげ-べつでん)[教外別傳](名) [佛]經論にあらはれたる文字言說の敎の外に、釋迦牟尼が以心傳心にて、別に深遠の奧義を傳へしといふこと。又、其深遠の奧義。(禪宗の宗旨にいふ)。

(けう-けん)[教權](名) ㊀敎授上の威嚴。㊁宗敎上の權力。㊂職權。

(けう-ご)[嬌語](名) なまめきたることば。

(げう-ご)[曉悟](名) さとること。

(けう-こう)[嬌喉](名) うるはしくつや多きよき音聲の出づるのど。——をろうす[弄嬌喉] うるはしきよき音聲を出して歌ふ。

(けう-さ)[教唆](名) ㊀いざなひ煽動すること。そそのかし。㊁[法]他人をして犯罪行爲をなす故意を生ぜしめんとすゝめみちびくこと。——ざい[教唆罪](名) [法]他人を教唆して一定の犯罪を構成せしめたる犯罪。

(けう-ざい)[教材](名) 敎授するに要する諸種の材料。

(けう-ざい)[絞罪](名) 「かうざい」に同じ。

(けう-し)[教師](名) ㊀學術又は技藝を敎授する人。㊁宗敎の旨を說きて傳道する人。せんけうし。

(けう-し)[喬梓](名) 父子の尊卑。又、父子。

(けう-し)[驕侈](名) おごりたかぶること。ほしいまゝ。わがまゝ。

(けう-し)[教旨](名) をしへのむね。

(けう-しつ)[教室](名) 「けうぢやう」に同じ。

(けう-しふ)[教習](名) をしへならはすこと。

(けう-しや)[驕奢](名) おごり。ぜいたく。

(けう-しゆ)[梟首](名) 斬罪に處したる人の首を木に架けさらすこと。又、其首。さらしくび。獄門。

(けう-しゆ)[教主](名) 宗敎を創始せし人。をしへのぬし。「三界の—」。(宗祖)。

(けう-じゆ)[教授](名) ㊀學術又は技藝などを敎へ授くること。㊁官立の高等又は專門の學校にて生徒を敎授する職名。

(けう-しよ)[教書](名) 諸侯の發する命令書。又、大統領の發する諭告書。

(けう-しよく)[教職](名) 生徒に敎授する職務。又、衆人を敎導する職務。

†けう-しよ-でん[校書殿](名) 古昔、禁中に累代の御書籍を藏(ヲサ)め置かれし處。ふみどの。

けう-す[梟す(せ・し・す・する・すれ・せよ)](他、さ變) 首を獄門にかく。さらす。

(けう-せい)[矯正](名) ためなほすこと。——じゆつ[矯正術](名) (身體成育の不正を矯正する術の義)徒手體操の稱。

(げう-せい)[曉星](名) よあけの空に、まばらに見ゆる星。

(けう-せう)[嬌笑](名) なまめきたるわらひ。あいきやうあるわらひ。

(げう-そ)[翹楚](名) 衆に抽(ヌキ)でたること。拔群なること。又、其もの。

(けう-そく)[教則](名) 敎授に關しての規則。

(けう-たい)[嬌態](名) なまめきこびるさま。

(けう-だう)[教導](名) ㊀敎へ導くこと。㊁善を勸め惡をいましむること。——しよく[教導職](名) 神官又は僧侶などの人を敎へ導くことを職とする人。——だん[教導團](名) 一時陸軍省の

管理に屬し、下士官を養成せし所。

(げう-だつ)[曉達](名) 奥義まできはめさとりてあること。

(げう-ち)[曉智](名) 物事にさとき智能。

(げう-ぢやう)[教場](名) 學校などにて敎授をなす室。

(げう-つう)[曉通](名) 其物事にあかるく通じてあること。

(げう-てい)[轎丁](名) かごかき。こしかき。

(げう-てい)[教程](名) をしへさづくる程度。又、をしへさづくるのり。

(げう-てん)[教典](名) 宗敎上の經文又は法式。

(げう-てん)[曉天](名) よあけのそら。——の-ほし[曉天星](名) よあけのそらの星の如くに、稀なる物事にいふ語。

げう-と[氣疎](名) けうときこと。

(げう-と)[教徒](名) 或宗敎を信奉するともがら。

(げう-とう)[教頭](名) 學校の敎師の首座。又、其地位に在る人。

げう-と・し[氣疎](形、二) ㊀けうとまし。きらはし。不愉快なり。㊁おそろし。こはし。恐くべし。㊂ばからし。拍子(ヒヤウシ)ぬけたり。

(げう-は)[教派](名) 宗敎の分派。をしへのわかれ。

(げう-ばう)[教坊](名) 遊藝ををしふる所。

(げう-ばう)[翹望](名) 首をのばしてのぞみまつこと。

(げう-ばく)[蕎麥](名) そば。又、そばきり。

(げう-はふ)[教法](名) をしへ。宗敎。宗旨。

(げう-はん)[教範](名) 敎ふるのり。

(げう-ふう)[矯風](名) 惡風俗をためなほすこと。

(げう-ぶ-しやう)[教部省](名) 明治五年に設置せられたる神道佛敎に關する事務を管理せし官廳、十年一月に廢し事務を內務省に屬せらる。

(げう-べん)[教鞭](名) 昔時、敎師の生徒を訓(シ)へいましむるために持ちしむち。——をとる[執教鞭] 生徒を敎授するにいふ。敎師となりて居るにいふ。

(げう-ぼく)[梟木](名) 首を梟する木。獄門臺。

(げう-ぼく)[喬木](名) 【植】高く直立する木。松・杉・樅(モミ)等の如きこれなり。——たい[喬木帶](名) 【植】高山植物分布上の一帶、山麓帶の次にして、もみ・つが等の喬木繁茂して森林をなす所。

(げう-まん)[驕慢](名) ほこること。たかぶること。

卄げう-みやう[交名](名) 古昔、上奏などに人の名を連ねて記しゝこと。

(げう-む)[教務](名) 敎授上の事務。又、宗門上の事務。

(げう-めい)[驍名](名) 武勇のきこえ。

(げう-もん)[教門](名) しゆうし。しゆうは。

卄げう-やう[孝養](名) 親によくつかふること。

(げう-やう)[教養](名) をしへそだつること。

(げう-やう)[驕陽](名) 夏の日光。

卄げう-やく[交易](名) 「かうえき」に同じ。

(げう-ゆ)[教諭](名) ㊀をしへさとすこと。をしへ、さとし。㊁中學程度の學校などの敎師の職名。

(げう-ゆう)[梟雄](名) ㊀すぐれたるもの。をさ。㊁すぐれてたけきもの。

(げう-ゆう)[驍勇](名) たけきこと。つよきこと。又、其兵士。

(げう-よ)[轎輿](名) 人をのせて舁(カ)き行く小さき輿。あげこし。かご。

(げう-よく)[矯抑](名) ためおさふること。しひておさへつくること。

げう-ら[毛裏](名) 裏に毛あるもの。「—のシャツ」。

卄げう-ら[淸](名) きよら。淸潔。

(げう-り)[教理](名) 宗敎上の道理又は理論。

(げう-りやう)[橋梁](名) 交通路を連絡するために、河川又は谿谷に跨りて架設する構造物。かけわたしたるはし。はし。

(げう-りん)[喬林](名) ㊀喬木の森林。㊁種子又は苗木より成りたる森。

(げう-ゐん)[教員](名) 敎師たる人。——めんきよじやう[教員免許狀](名) 中學校・師範學校・高等女學校又は小學校の敎員たる資格あることを證明したる免狀、前者は文部大臣これを下附し、後者は府縣知事これを下附す。

卄げ-おさ・る[氣壓](自、ら下二) いきほひにおさる。壓倒せらる。

卄げ-おそろ・し[氣恐](形、二) いきほひおそろし。

卄げ-おと・る[氣劣](自、ら四) ゐせいまけす。おとる。

げ-おり[毛織](名) ㊀鳥獸などの毛を以て織りたるもの。けおりもの。㊁木綿を毛だゝせて織りたるもの。——もの[毛織物](名) 前條(一)に同じ。

げ-が[怪我](名) ㊀きず。かけ。創瑕。㊁過失によりてうけたる負傷。㊂あやまち。そさう。——にん[怪我人](名) 傷を受けたる人。負傷者。

(げ-かい)[下界](名) 天上に對し、この世界の稱。

(げ-かう)[下向](名) ㊀高き方より低き方へ下ること。㊁都より田舍へ向て行くこと。

卄げが・し[穢](形、二) 「けがらはし」の古言。

げが・す[穢](他、さ四) ㊀きたなくす。よごす。㊁はづかしむ。㊂醜惡にす。「心を—」。

げ-がは[毛皮](名) 未だ毛を去らぬ獸類の皮。

げ-がはり[毛更](名) 毛のはえかはること。

げ-かへし[蹴返](名) ㊀蹴返すこと。㊁相撲(スマウ)の手、四つに組み敵の足を蹴(ケ)りてこれを倒すこと。

げ-かへ・す[蹴返](他、さ四) ㊀蹴りてもとの地位へ戾す。㊁他人に蹴られたるに報いて蹴る。㊂度々足にて蹴る。㊃けかへしを試む。

げ-がみ[罫紙](名) 罫を引きたる紙。けいがみ。

卄げがら-は・し[穢](形、二) ㊀潔白ならず。不淨なり。きたなし。㊁さげしむべし。きらはし。にくむべし。

卄げがら-ふ[穢](自、は四) 「けがる」の延言。

卄げがらひ[穢](名) 「けがれ」の延言。

げが・る[穢](自、ら下二) ㊀きよらかならず。きたなくなる。よごる。(不潔)。㊁はづかしめを受く。あなどりに合ふ。㊂醜惡となる。「心—」。

げがれ[穢](名) ㊀けがるゝこと。(不潔、不淨)。㊁はづかしめ。あなどり。㊂醜惡となること。

(げ-かん)[下疳](名) 「かんさう(疳瘡)」に同じ。

卄げ-き[外記](名) 古昔、太政官に附屬せし大外記・少外記の稱、詔勅及上奏文を起草し、又、其事に關する記錄を掌りたるもの、今の書記官の類。

(げき)[劇](名) ㊀俳優が戲曲中の人に扮裝して、一定の脚色(シク)に關する所作をなすこと。えんげき。しばゐ。㊁はげしきこと。はなはだしきこと。㊂いそがしきこと。わづらはしきこと。

(げき)[隙](名) ㊀すき。あひだ。㊁なかたがひ。あらそひ。不和。㊂乘ずべき機會。をり。

(げき)[檄](名) ㊀支那の古昔、一尺二寸の木簡に事由を書して人を呼び出すに用ひしもの。㊁人を催促し若しくは勸めなどするために發する書狀。げきぶん。「—を作りて、罪を天下に鳴らす」。

(げき)[激](名) ㊀はげしきこと。たけきこと。㊁言論の直に過ぐること。㊂ことさらに世俗にたがふこと。

(げき)[逆](名) 「ぎやく」に同じ。

(げ-き)[下機](名) 「げこん(下根)」に同じ。

(げき-かい)[劇界](名) 演劇の範圍、又、俳優の社會。

(げき-かう)[激昂](名) 激して意氣のたかぶりふるふこと。

(げき-く)[隙駒](名) 「くげき(駒隙)」に同じ。

(げき-けん)[擊劍](名) 刀劍を持ちて己れを防禦し敵を刺擊すること。竹刀(シナヒ)又は木劍を以て互に打ちあふこと。けんじゆつ。——か[擊劍家](名) けんじゆつつかひ。

(げき-ご)[激語](名) はらたち紛(マギ)れにいひ過ぎたることば、過度にはげしきことば。

(げき-こん)[屐痕](名) 下駄の齒のあと。

(げき-さい)[擊碎](名) うちくだくこと。

(げき-ざい)[劇劑](名) 「げきやく(劇藥)」に同じ。

(げき-さう)[鬩爭](名) あらそひ。うちわもめ。

(げき-さつ)[擊殺](名) うちころすこと。

卄げき-し[劇詩＝Drama](名) 演劇にうたふ韻文。

(げき-しふ)[逆襲](名) 「ぎやくしふ」に同じ。

(げき-しやう)[激奬](名) はげましすゝむること。

(げき-しやう)[激賞](名) 極めてほめたゝふること。

(げき-じやう)[擊攘](名) 敵を擊ちておひはらふこと。うちはらひ。

(げき-じやう)[擊壤](名) 支那の上代に行はれし一種の遊戲、つちくれを投げて行ひしもの。

(げき-しゆ)[鷁首](名) 古昔、水中の魔を恐れしむる意にて、鷁といふ水鳥の首を刻(キザ)みて船のへさきに附けしもの。鷁の首をつけたる船。

(げき-しよく)[劇職](名) いそがしき職務。

(げき-しん)[逆臣](名) 「ぎやくしん」に同じ。

(げき-しん)[激震](名) はげしくふるふ地震。(劇震)。

(げき-じん)[劇甚](名) はげしきこと。甚しきこと。

げき・す[激](自、さ變) ㊀はげしくなる。

あらくなる。㊁衝突す。つきあたる。㊂逆(サカ)ひてはげしくおこる。

げき・す[檄](自、さ變) 檄文を送る。

(げき-せき)[闃寂](名) ひつそりしてさびしきこと。

(げき-せつ)[激切](名) はげしくせまること。

(げき-ぜつ)[鴃舌](名) (もずの囀(サヘ)る如きの意) 外國人の言語をいやしめていふ語。

(げき-せん)[劇戰](名) はげしきたゝかひ。(激戰)。

(げき-ぜん)[闃然](名、副) ひつそりとしてしづかなるさまにいふ語。

(げき-だう)[劇道](名) 演劇のみち。

(げき-たく)[擊柝](名) ㊀拍子木(ヒヤウシギ)を打ち叩くこと。㊁拍子木を打ち叩きて夜を警むる人。よまはり。

(げき-たい)[擊退](名) 敵をうちしりぞくること。

(げき-たん)[激湍](名) 溪川(タニガハ)などの水の岩石にあたりなどして流るゝ早瀨。

(げき-だん)[劇談](名) ㊀演劇に關するはなし。㊁はげしき談判。

(げき-ぢやう)[劇場](名) 劇を演ずる場所。しばゐ。

(げき-ちん)[擊沈](名) 彈丸を放ちて船艦をうちしづむること。

(げき-つう)[劇通](名) 演劇に關する事柄によく通じたること。又、其人。

(げき-つう)[劇痛](名) はげしくいたむこと。

(げき-と)[逆徒](名) 反逆をなしたるともがら。むほんにん。むほんにんのなかま。

(げき-ど)[激怒](名) はげしく怒ること。

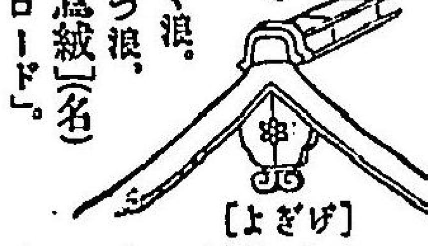
(げき-どう)[激動](名) はげしくふるひうごくこと。

げ-きは[毛際](名) 毛の生(ハ)えぎは。

(げき-は)[擊破](名) うちやぶること。

(げき-はつ)[激發](名) はげしくおこりたつこと。又、激しておこらすること。

(げき-はん[劇繁](名) いそがしきこと。多忙なること。
(げき-ひやう[劇評](名) 演劇に關する事柄の批評。
(げき-ぶん[檄文](名) 「げき(檄)」に同じ。
(げき-へん[劇變](名) 急劇なる變化。(激變)。
(げき-む[劇務](名) 多忙なる事務。
(げき-めつ[擊滅](名) うちほろぼすこと。
廿げき-やう[顯形](名) 神佛の形を現はしたまふこと。
(げ-ぎやう[下行](名) たまもの。
(げき-やく[劇藥](名) ㊀使用少しく度に過ぐれば忽ち身體に異常の結果ある藥劑。はげしきくすり。㊁爆發する火藥。——わうじやう[劇藥往生](名) 劇藥を服用して死ぬること。
(げ-ぎよ[下御](名) 貴人などの車馬より下にくだること。
(げ-ぎよ[懸魚](名) 棟木(ムナギ)の端に被ひつくるもの、魚の尾の形に刻(キザ)む、水の緣により火災を防ぐ意なりといふ。


[げぎよ]

廿げ-ぎよ・し(くしきし)(けれ)[清](形、二) 「きよし」に同じ。
(げき-らう[逆浪](名) さかまく浪。
(げき-らう[激浪](名) あらだつ浪。
け-きらず-ビロード[毛不切天鵞絨](名) 織りたるまゝにて毛を切らざる「ビロード」。
け-ぎらひ[氣嫌](名) 何となく好まぬこと。
(げき-らん[劇亂](名) はげしくくるひ亂るゝこと。
(げき-りよ[逆旅](名) たび、やどや。はたごや。
(げき-りん[逆鱗](名) (韓非子に出づ)天子の御いきどほり。おんど。(宸怒)。
け-ぎれ[毛切](名) 毛にこすられて、けがすること。
(げき-れい[激勵](名) はげましいさますること。又、はげみいさむこと。
(げき-れつ[激烈](名) 極めてはげしきこと。
(げき-ろん[激論](名) はげしきいひあひ。
(げ-く[希求](名) ねがひもとむること。——げん[希求言](名) 【文法】願望・命令の意を表はす語。
(げ-くう[外宮](名) 伊勢國豐受(トヨウケ)大神宮を申し奉る言。內宮の對。
廿げ-ぐくり[下括](名) 指貫(サシヌキ)のすそをしめくくること。
け-ぐつ[毛沓](名) 獸類の毛皮を以て造りたるくつ、古昔、將軍の着用せしもの。つらぬき。
廿けくにものまうす-まうちぎみ[申食國政大夫](名) 上古、執政の大臣を稱したる語、をすくに、と訓ずべきを誤りたるもの。
廿け-ぐるま[毛車](名) いとげのくるま。
(げ-くわ[外科](名) 身體の外部の創傷又は皮膚病などの類を治療する科。內科の對。——いしや[外科醫者](名) 外科のれうぢを專門とする醫者。
(げ-くわん[下官](名) 身分卑(ヒク)き官吏。
(げ-くわん[外官](名) 地方官の稱。內官又は京官の對。
廿げ-くわん[解官](名) 官を免ぜしこと。「一停任」。
(げ-くわん[下浣](名) 月の末十日の間即ち二十一日以後の稱。げじゆん。
(げ-げ[下官](代) 上官に對し、官吏の自稱。
(げ-げ[下下](名) ㊀志もじも。志たじた。㊁最も劣(オト)れること。最下等。
(げ-けつ[下血](名) 血のくだること。
廿けけれ[心](名) 「こころ」の訛、(古昔、甲斐の方言)。
(け-げん(名) 不思議にて合點(ガテン)の行かぬ容貌。「ーな顔をして怪む」。
(げ-げん[化現](名) 神佛などの姿を變へて此世に現はるゝこと。
(げ-げん[下弦](名) 「かげん」に同じ。
廿け-ご[華宮](名) 佛事に花を盛るに用ふる器。はなざら。
廿け-ご[餌子](名) (笥籠の義)古昔、食物を盛(モ)るに用ひし器。
廿け-ご[家子](名) 妻子奴僕などすべて家に屬したる人。けんぞく。
(げ-こ[下戶](名) 酒量の少なき人。
(げ-ご[解悟](名) 【佛】心の無性無住なることをさとること。
(げ-こく[下國](名) ㊀都より地方へ赴くこと。㊁格のひくき國。上國の對。
廿げ-こく[外國](名) 都のありし國の外。
(げ-こく[下刻](名) 昔時、時刻を三分したるものゝ一。上刻又は中刻の對。「子の—」。
(げ-こく-じやう[下剋上](名) 志もののものが上のものをたしなむること。
廿け-ごと[食事](名) 志よくじ。
廿け-ごと[褻事](名) なれてある事。つねの事。
け-こみ[蹴込](名) ㊀家の入口にある沓脫(クツヌギ)の下。㊁人力車などに乘りて、足を休(ヤス)め置く所。
け-こ・む(まみむむめめ)[蹴込](他、ま四) 蹴りて內へ入る。
け-ごも[毛薦](名) 毛にて織りたるこも。
け-ころばし[蹴轉](名) ㊀けころばすこと。㊁天明の末頃まで、江戶の下谷淺草邊にありし一種の遊女。
け-ころば・す(さしすすせせ)[蹴轉](他、さ四) 蹴(ケ)りて顚倒せしむ。けたふす。
け-ごろも[毛衣](名) 毛皮にてつくりたる衣服。(裘)。
廿け-ごろも[褻衣](名) つねに着用する衣服。
(け-ごん[華嚴](名) 【佛】(い)萬行を修習して德果を莊嚴にすること。(ろ)「けごんしゆう」の略言。——しゆう[華嚴宗](名) 【佛】佛教の一派、專ら華嚴經を所依とし馬鳴(メミヤウ)菩薩に淵源す、我國にては天平七年唐僧道璿といふもの來りてこれを傳へたり。
(げ-こん[下根](名) 拙劣なる根性。
け-さ[今朝](名) (此朝の轉)今日のあさ。こんてう。
ケサ[袈裟](名) (梵語 Kasāya の略、褐色衣と譯す)僧侶の服、貪・嗔・痴の三毒を捨離したる表示として、肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正しとすといふ。(無垢衣、功德衣、忍辱鎧)。

[ケサ]

(げ-ざ[下座](名) ㊀昔時、貴人に對して行ひし禮、座を下りてうづくまりしこと。㊁芝居の舞臺の右に當たる所。「ーの樂」。
廿け-さい[潔齋](名) 身をきよめてものいみすること。けっさい。
廿げ-さい[解齋](名) ものいみをふること。
(げ-ざい[下劑](名) 便通をよくするために服用する藥劑。くだしぐすり。
廿け-さう[假粧](名) 「けしやう」に同じ。「頭洗ひ、ーして」。
(け-さう[懸想](名) 想(オモ)ひを懸(カ)くること。戀(コ)ひ慕(シ)ふこと。れんぼ。
けさう-ぶみ[懸想文](名) ㊀懸想の意をのべつゞりて贈る艷書。㊁昔時、懸想文賣の賣りあるきし、疊紙の中に白米二三粒入れありしもの、男女おのおの良緣を得る緣起として買ひたり。——うり[懸想文賣](名) 昔時、京都にて、毎年正月元日より十五日迄の間に、祇園の犬神人(イヌジニン)といふもの、赤き布の衣に高く袴を着け編笠(アミガサ)をかぶり覆面して、懸想文を賣りあるきしもの。
(げ-さく[下策](名) 最もよからぬはかりごと。
廿げ-さく[外戚](名) 母方の親戚。ぐわいせき。
(げ-さく[戲作](名) ㊀たはむれの著作。㊁なぐさみの讀物。稗史。小說。——しや[戲作者](名) 戲作をする人。小說家。
廿け-ざ-けざ(名、副) さやかなるさまにいふ語。
廿け-ざやか(名) さやかに著(イチジル)しきさまにいふ語。
廿け-ざや・ぐ(がぎぐぐげげ)(自、か四) けざやかにてあり。あざやかにてあり。きはだつ。
(け-さん[卦算](名) ㊀けいさん。(壓尺)。㊁「くさずり」の一名。
(げ-さん[下山](名) 山を下ること。登山の對。
廿げ-ざん[見參](名) ㊀(見在參仕の義)古昔、節會又は宴會などに伺候したる人の名を記し、其主人たる人の御前へ差出せし名刺。㊁「げんざん」に同じ。
け-し[芥子](名) ㊀【植】罌粟科に屬する草、莖は平滑、葉は白綠色にして莖を抱きて互生す、花冠は四瓣にして下垂す、種子は食用に供せられ、乳液より阿片を製す。(罌粟)。㊁模樣の名、芥子玉の略言。
廿け-し[家司](名) 家事一切の取扱をなすもの。家のつかさ。今日の家令に同じ。
けし[消](名) 消すこと。又、消したるもの。
け・し(しくしき)(けれ)[怪](形、二) 異なり。常ならず。怪むべし。
廿け・し(しくしき)(けれ)[褻](形、二) 常並なり、當然なり。
(げ-し[御寢](名) 高貴の人の眠ること。およすみ。
廿げ-し[下司](名) したづかさ。
(げ-し[夏至](名) 【天】二十四氣の一、太陽が夏至點に達し北半球の晝最も長く夜最も短き時、即ち毎年六月廿一日頃なり、此時北寒帶にては太陽地下に沒することなく、南寒帶にては太陽地上に出づることなし。冬至の對。
けし-あざみ[罌粟薊](名) 【植】罌粟科に屬する草、花瓣は黃色なり、葉・萼及果實等に刺あり、觀賞用として栽培せらる。(苦菜)。
けし-いん[消印](名) 消すしるしに押(オ)す印、郵便局にて郵便切手の通用したる證據に押す印の類。
けしか・く(くけけくくる)(くれ)(けよ)[嗾](他、か下二) 煽動して敵に向はす。おだて、仕向く。
けしかり(らりりりるれ)[怪](自、ら變) 異樣なり。不思議なり。——からず 不當なり。不理なり。
廿けしかり(らりりりるれ)[褻](自、ら變) 常並なり。當然なり。
(け-しき[景色](名) 山水風物などのおもむき。けいしよく。けいけい。ふうけい。(風景)。
(け-しき[氣色](名) ㊀みえ。きざし。けはひ。ありさま。樣子。㊁顏のさま。心のおもむき。——だつ(たちつつてて)[氣色立](自、た四) ㊀心に思ふ樣子顏面に現はる。㊁樣子外にあらはる。けしき見ゆ。㊂活氣生ず。いきほひあらはる。——づく(かきくくけけ)[氣色付](自、か四) 前條に同じ。——ばかり[氣色許](名、副) ㊀わづかばかり。すこしばかり。㊁外面の勢のみにて、實際のこれに副(ソ)はざるさまにいふ語。——ばむ(まみむむめめ)[氣色食](自、ま四) 「けしきだつ」に同じ。
廿けし-ぐくり[芥子括](名) 古昔、行はれし袖口の括(クク)り方、俠者風流の仕立方なりといふ。
けし-くち[消口](名) 火事など消したる方の口。——をとる 消防組などが、他の消防組に先んじて其消口の火を消し止めたるにいふ、其處に其組の名を記したる札を立つるを例とす。
けし-ずみ[消炭](名) ㊀薪の火を消してこしらへたる炭、急に火を起す時などに用ふ。㊁吉原の遊廓にて、風呂の番などをする男。
(げし-せん[夏至線](名) 【天】北回歸線の一名。「くわいきせん」(回歸線)の條を見よ。
けし-だま[芥子玉](名) ㊀けし粒の如き細かき模樣を置きたるもの、多く手拭などの染模樣にあ

り。㊁膜の異稱。
けしつぶ[芥子粒](名)㊀けしの實の小さき粒。㊁最も小さきものをたとへいふ語。
けしつぼ[消壺](名)ひけしつぼ。
げしてん[夏至點](名)[天]黄道上赤道より最も北の點。太陽の此點に至れるとき夏至なり。
げしなる[御寢成](自,ら四)ぎよしんなる。いぬる。(就寢)。
げしにん[解死人](名)「げしゆにん(下手人)」の訛。
けしにんぎやう[芥子人形](名)最も小さき人形。きめんぎやう。「一の加賀紋」。
けしのか[芥子香](名)僧侶の調伏の祈禱にたく護摩(ごま)のけしやきのにほひ。
けしばうず[芥子坊主](名)子供の頭の周圍を剃り、頂上のみに毛を殘したるもの。すゞしろ。
げしやう[化生](名)㊀形を變へて現はるゝこと。㊁へんげ。ばけもの。妖怪。――のもの[化生物](名)前條(二)に同じ。
けしやう[假粧](名)㊀紅又は白粉をもて顏を粧ひ飾ること。けさう。けはひ。みじまひ。(化粧、粉飾)。㊁器又は裝飾などを塗りし彩色すること。――かがみ[假粧鏡](名)みじまひに使用する大いなる鏡。――いくさ[假粧軍](名)かさうのいくさ。――がは[假粧革](名)うつくしき模様を施せる革。――がみ[假粧紙](名)相撲(すまふ)にて、力士の用ひて身體を淨むる切紙。通常土俵(どひやう)の柱に貝(つ)しおく。――キセル[假粧煙管](名)うつくしき模様を施せる煙管。――だらひ[假粧盥](名)みじまひに使用する道具。――だち[假粧立](名)相撲にて、力士の一方が相手を促して取組まんと立上ると、相手のこれに應じて立たざるときにいふ。――だな[假粧棚](名)四十八棚の一、棚の板の數四枚ふくらとつぎにして、化粧の品などを置くに適したるもの。――べや[假粧部屋](名)假粧するための部屋。――まはし[假粧廻](名)力士が土俵入などに用ふるまはし、前面に前垂様のものありて、これにいろいろのうるはしき模様などを施す。――もとゆひ[假粧元結](名)「これもとゆひ」の一。――ゆひ[假粧結](名)徳川時代に、奥女中の髮かもじの上に結びしもとゆひ。
けしやき[芥子燒](名)護摩を焚(た)くに、芥子を用ふるより、護摩を焚くをいひし語。「――する」。
げしやく[掛錫](名)僧侶が一定の場所に安住すること。
げしやく[外戚](名)ぐわいせきに同じ。
げしやくばら[外借腹](名)本妻ならで、妾の生みたるもの。又其生まれたる人。(庶生、庶流)。
げしゆく[下宿](名)㊀やどさがり。やどおり。㊁期限を定めて長く宿泊すること。――や[下宿屋](名)下宿の料を取りて人を寄宿せしむるを業とする家。
げしゆす[毛繻子](名)舶來の毛織物。繻子の如くにして光澤あり、衣服の裏又は袖口などに用ふ。
げしゆにん[下手人](名)自身に手を下して人を殺したるもの。
げしゆん[下旬](名)月の二十日より末日までの間の稱。(下澣)。
げしよ[下書](名)ぶたがき。公邊に奉る文書なる。
げしよう[顯證](名)明かなること。
げしよう[下乘](名)㊀乘物より下ること。㊁乘打を禁ずること。げば。
げしよく[下職](名)㊀頭立ちたる職業者の下に附きて働く者。したしよく。㊁下等なる職業。
けじらみ[毛蝨](名)[動]灰色又は灰白色なる、細小にして扁形なり、陰部又は腋部の毛などに寄生す。
けしん[化身](名)[佛]神佛の形を變へて此世に生れ現はること。うまれかはり。「紫式部は、觀音の一なり」。(後身)。
けす[消](他,さ四)㊀火を止む。火を滅す。「火を一」。㊁除く。去る。㊂形跡の見えぬやうにす。「字を一」。㊃なくす。ほろぼす。
けす[着](他,さ四)「きなす」に同じ。
げす[下司](名)卑しき官吏。えだづかさ。
げす[下種](名)身分卑しき者。又、根性(こんじやう)賤しき者。(下衆)。――げすし[下種し](形,二)極めて賤しく下品なり。――こんじやう[下種根性](名)根性の甚だ卑賤なること。
げすをんな[下種女](名)身分の賤しき女。
げす[解](他,さ變)㊀理解し得。會得す。「其意味を一」。㊁消滅す。けす。
けすぢ[毛筋](名)㊀髮を梳(す)きたる跡。㊁極めて小さき物事にいふ語。――たて[毛筋立](名)けすぢぼう。――ぼう[毛筋棒](名)「けすぢたて」に同じ。

[けすぢたて]

櫛の一種。髮の毛筋を正すに用ふるもの。柄細長くして、末端は鋭く尖(とが)りたるもの。けすぢたて。
げすゐ[下水](名)物など洗ひたる汚水を流す稱。――いた[下水板](名)下水の上にわたしおく板。――だう[下水道](名)汚水又は雨水等を流通せしむる排水路。
げせつ[下拙](代)自分の謙稱。やつがれ。
げせわ[下世話](名)えだざまのうはさ又はことわざ。
げせん[下賤](名)身分の低きこと。いやしきこと。
げせん[外錢](名)
げぞう[顯證](名)「けしよう」に同じ。
げそく[華足](名)机又は臺などの脚に花などの彫刻を施したるもの。くゑそく。
げそく[下足](名)㊀脱(ぬ)ぎたる履物(はきもの)。㊁脱ぎたる履物の番の爲に拂ふ金錢。――ばん[下足番](名)下足の番人。――わり[下足割](名)下足番に拂ふ代。
けた[方](名)四角形。
けた[桁](名)㊀橋又は家などの外邊の柱の上に亙(わた)す材木。梁の對。㊁十露盤(そろばん)の珠を貫く爲の串(くし)、又、其串を貫きたる横木。これに位取を記し、其の上段なる一箇(便利のために二箇あるもあり)の珠を五とし下段の五箇の珠を各一とし算用す。㊂轉じて位取。「一のみこみが出來ぬ」。
げた[下駄](名)材をくりぬき、齒を作り鼻緒を付けたる履物(上履)。――いん[下駄印](名)一つの材の中を凹(へこ)くして、恰も下駄の齒の如くにこしらへたる印。
げたい[懈怠](名)なまくること。おこたること。
げだい[外題](名)㊀書物の表紙に記す名目。内題の對。(外簽)。㊁標題。題號。「芝居の一」。
けたう[毛唐](名)「けたうじん」の略言。
げだう[化導](名)をしへみちびくこと。
げだう[外道](名)㊀[佛]佛敎以外の宗教の稱。㊁眞理に背き妄情に從ひ、心外に法を求むること。㊂邪心あるもの。惡意ふかきもの。㊃極めて醜惡なる男性の假面。
けたうじん[毛唐人](名)髯の多きよりいふ外國人を卑しめていふ語。
けたうち(名)一種の遊戲。二枚の羽子板の如きものを持ち、先づ其一方を投げ、次に他の一方を投げて、それに當つるもの。
けだかし[氣高](形,一)品格高し。上品なり。「人品一」。
けたぐり[蹴手繰](名)相撲(すまふ)の手。敵の脚を蹴(け)ると同時に、敵の體を手繰(たぐ)りて倒すこと。
けだし[蹴出](名)㊀けだすこと。㊁女の腰より足にかけて纏ふ布。こしまき。
けたけた(名,副)前條に同じ。
けだし[蓋](副)㊀推量するに。想像するに。おほかた。多分。㊁決定するところは、終極するところは。つまり。ひきやう。――くも(副)前條に同じ。
けだす[蹴出](他,さ四)㊀蹴(け)りて出す。㊁合計などに、豫定よりも節減して其金高を取りこす。
けたたまし(形,二)あわただし。さわがし。
げただん[下駄段](名)下駄を脱ぎおくために設けたる段。
けたつ[蹴立](他,た下二)㊀蹴(け)りて立つ。蹴りて起す。㊁荒々しくふむ。
げだつ[解脱](名)[佛]煩惱(ぼんなう)の繋縛を解きて三界の業苦を脱すること、迷を開き道を悟りて自由自在となること。「一得道」。
けたで[毛蓼](名)[植]たでの一種。いぬたでに似て、莖葉に白き毛あり、淡紅色の花を開く。
けたてる[蹴立](他)「けたつ」の訛。
げたばこ[下駄箱](名)下駄を入れおく箱。
げたばん[下駄番](名)下駄の番人。
げたばん[下駄判](名)「げたいん」に同じ。
けたふし[蹴倒](名)けたふすこと。
けたふす[蹴倒](他,さ四)㊀蹴りて倒す。「天地にはたとけたふして」。㊁壓倒す。おしたふす。
げため[下駄目](名)㊀下駄の目は三つあるよりいふ。㊁雲助又は車夫の仲間にて、三の數の隱語。
けだもの[獸](名)(毛之物の轉といふ)㊀全身に毛を被り、四足にて、這ひ歩く動物の總稱。獸類。㊁人をのゝしり呼ぶ稱。
げたや[下駄屋](名)下駄をつくり又は賣る人。又、其店。
けたゆき[桁行](名)一棟の家の長さ。梁間の對。
げだん[下段](名)㊀下のだん。下のきだ。㊁劍術又は槍術などにて、手を低く下げて刀又は槍を構ふること。流派によりて其様を異にす。
けち[結](名)㊀むすび。をはり。㊁二人づつ組になりて弓を射ること。㊂[佛]まどひ、わづらひ。煩惱(ぼんなう)。「一を斷ち成佛す」。
けち[闕](名)かけ。かけめ。闕官。くゑち。
けち(名)㊀いやしきこと。不思議。㊁凶事の來るべき原因。「一がつく」。
けち(名)㊀ふるきこと。㊁ひけふ。腹病。㊂いやしきこと。卑賤。

(げ-ぢ［下知］(名) いひつけ。さしづ。命令。指揮。
(げぢ(名)［動］「げぢげぢ」の略言。
(けち-えん［血緣］(名)「けつえん」に同じ。
(けち-えん［結緣］(名)【佛】佛道に緣を結ぶこと。
廿けち-えん［掲焉］(名) あきらか。あらは。きはやか。「今少し―なるはかげに」。「く寄り添ふ」。
け-ぢか-し［氣近］(形、二) ちかし。「けぢかく寄り添ふ」。
(け-ちがひ［蹴違］(名) あやまち。つまづき。しくじり。失敗。失策。「―が起る」。
(げ-ぢき［下直］(名) 價の安きこと。廉價。かうぢきの對。
(げ-ぢく［牙軸］(名) 卷物又は幅物などの軸若しくは軸の左右の小口の象牙なるもの。ざうげのぢく。
(けち-くさ-し［吝嗇臭］(形、二) 吝嗇なり。けちなり。
(けち-ぐわん［結願］(名)【佛】願を掛けたる日數の果つること。
(けち-けち(名、副) けちなるさまにいふ語。
げぢ-げぢ［蚰蜒］(名)、㊀［動］多く人家の床下などに見る小さき蟲、形狀はむかでに似て、前後路ほぼ等(ヒト)しき環節に一對づゝの步脚を有す、巧に快行して食物を求む。㊁忌み嫌はるゝ人。㊂(非の字が「げぢげぢ」の形に似るよりいふ)非職官吏の稱。
(けち-みやく［血脈］(名)「けつみやく」に同じ。
廿けぢ-め［別目］(名) ㊀區別。わかち。わいだめ。㊁えん。くらゐ。だん。
(げ-ちやく［下着］(名) 都より田舍などへ到着すること。
(げ-ぢよ［下女］(名) みづしめ。はしため。おもぢよちゆう。下婢。
け-ちら-す［蹴散］(他、さ四) ㊀蹴(ケ)りて亂(ミダ)し散らす。㊁敵を追ひ散らす。
(けちん-ばう［吝嗇坊］(名) 吝嗇なる人をあざけりていふ語。

(けつ［橛］(名) 門のとびらを止むるために門の中央に打つ杭(クヒ)。
(けつ［闕］(名) ㊀欠くること。たらぬこと。かけ。㊁支那の宮城の門外の左右にある兩個の臺、上に樓觀を設く。㊂轉じて、宮城の門。又、宮城。「―を犯す」。
(けつ［穴］(名) ㊀あな。「墓―」。㊁鍼術にて、人體に鍼(ハリ)を打つべき箇所の稱。㊂尻。
(けつ［結］(名) ㊀むすび。をはり。㊁をはりの句。「けっく」。
(けつ［決］(名) ㊀さだまり。きまり。㊁けつえん。かくご。㊂わかれ。訣別。㊃ゆがけ。(弓懸)。㊄勇敢なること。果斷なること。㊅可否の決定。「―を採る」。
廿け・つ［消］(他、た四) ㊀消す。㊁けなす。「いかばかりなんてまつ人か宮をばけちらん」。
(げつ［月］(名) つき。
(けつ-あつ［血壓］(名) 血液の壓力、其差によりて血行生ず。
(けつ-い［決意］(名) 選擇して決定したる意志。
(けつ-うん［血暈］(名) ちぶるひ。
(げつ-えう［月曜］(名) 七曜の第二日、火曜日の前日。
(けつ-えき［血液］(名) 動物の身體の內部に充滿して營養をつかさどる液、高等動物のは紅色の不透明體にして、血漿と血球とより成る。ちしほ。
廿けつ-えき［闕腋］(名) けつてき。わきあけ。
(けつ-えん［訣宴］(名) わかれのさかもり。
(げつ-えん［月掩］(名)［天］太陰が遊星又は恆星を蔽(オホ)ふこと。
(けつ-えん［結緣］(名)【佛】佛門に入る緣を結ぶこと。けちえん。
(けつ-えん［血緣］(名) ㊀血すぢ。㊁血すぢをひくもの。同族。
(けっ-か［結跏］(名) 兩足を打違(ウチチガヒ)にしてあぐらかくこと。
(けっ-か［闕下］(名) 宮門のもと、又、御殿のもと。
(げっ-か［月下］(名) 月の光りのさすところ。

(けっ-かい［結界］(名)【佛】法力を以て界を結び、外道惡魔などを防禦して其中に入れずといふこと。
(けっ-かい［結改］(名) 陰曆五月及九月の二十五日に、楊弓を射る人相集まりて、的中の勝負の競點をすること。
(けっ-かう［決行］(名) 決定して行ふこと。實際に行ふこと。
(けっ-かう［血行］(名) 體內に於ける血液の循環。 ―き［血行器］(名) 心臟と血管との稱。
(けっ-かく［結核］(名) 結核症の患部の硬(カタ)くなりてこり結ぼるゝこと。 ―きん［結核菌］(名) 結核症を起す菌、「ドイツ」人「コッホ」の發見に係る、其傳播の事例多きが中に、肺結核患者のはき出したる痰(タン)の中に含まれたるものが、痰の乾燥によりて空氣中に飛揚混交するによるを最とすといふ。 ―しやう［結核症］(名) 結核菌の寄生によりて起る疾患、人類死亡の一割半はこれによるといふ、呼吸器は結核菌の侵入に最も便なるが故に、此症の起るは肺を最とす、此症は感染すれども遺傳するものにあらず。
(げっ-かくさ［月角差］(名)［天］太陽の太陰に至る距離の遠近により其相互作用の異なるため、太陰の運動に起る變差、即ち上弦の起る時刻は早く下弦の起る時刻は遲(オク)れんとすること。
(げっ-か-ひやうじん［月下氷人］(名) 男女の緣をとりもつ神。むすぶのかみ。
(けつ-がふ［結合］(名) 結び合ふこと。結び合はすること。連結。固體。 ―たい［結合體］(名) 個體が相連結して成りたる一體。
(げっ-か-らうじん［月下老人］(名) むすぶのかみ。
(けっ-かん［缺陷］(名) かけ。不足。不備。
(げっ-かん［月刊］(名) 月々刊行出版すること。

(けっ-き［蹶起］(名) はね起くること。飛び立つこと。
(けっ-き［血氣］(名) 激し易き盛んなる意氣。はやりごゝろ。客氣。 ―のゆう［血氣勇］(名) たゞ血氣にまかせて勇みたつこと。
(けつ-ぎ［決議］(名) 論議を決定すること。又、其決定したる條項。 ―あん［決議案］(名) 議會にて、或事件に就きて議會の意思を表明するために、決議にかくる議案。
(げっ-き［月氣］(名) 月の光のさすさま。
(けっ-きう［血球］(名) 血液の一成分、赤血球と白血球とあり、前者は無核細胞にして圓盤狀なり、三千五百個を連ぬとも大さ一「インチ」に達せず、後者は前者より大にして核を有し、表面には數多の突起ありて恰も粟實の如く、「アミーバ」樣の運動をなす特性を有す。
(げっ-きう［月球］(名) 月の稱。
(げっ-きふ［月給］(名) 月每に定めたる給料。月俸。 ―とり［月給取］(名) 月給を取る人。つとめにん。
(げっ-きゆうでん［月宮殿］(名) 月の中にありといふみや。
(けっ-きよ［穴居］(名) 穴の中のすまひ。開けぬ世に行はれしすまひ。あなずまひ。
(けっ-きよく［結局］(名) をはり。つまり。はて。
(けっ-きん［闕勤］(名) つとめを缺くこと。やすみて出勤せざること。
(げっ-きん［月琴］(名) 支那より傳來の樂器、琵琶に似て小さく、胴は圓形にして扁(ヒラ)く、四絃十二柱なるもの、哀れなる淋(サビ)しき音を發す。(要琵琶)。

［げつきん］

(けっ-く［結句］(名) 詩歌の終末の句。(落句、斷句)。

けっ-く［結句］(副) ㊀とゞのつまりに。つひに。とうく。㊁却て。むしろ。いっそ。
(けっ-くわ［結果］(名) ㊀或原因が或所緣に催(モヨホ)されて、發生若しくは到達したる狀態又は終極。なりあがり。はて。でき。㊁［倫］吾人が動作によりて來したる外物の變動。
(けっ-くわい［決潰］(名) きれくづるゝこと。又、きりくずすこと。
(げっ-くわ［月華］(名) ㊀つきのひかり。㊁げっけい。
(けっ-くわい［血塊］(名) 血のかたまり。
(げっ-くわう［月光］(名) 月のひかり。
(けっ-くわく［闕畫］(名) ㊀漢字の中の畫を省(ハブ)くこと。㊁天子其他貴き人の御名に當る字を書くとき、憚り諱(イ)みて其字の最終の畫を欠(カ)くこと、例へば、統を統と玄を玄と書くが如し。(省文)。
(けっ-くわん［血管］(名) 心臟より出でゝ、體內に分布せる血のかよふ脈管、動脈管と靜脈管とあり。
(けつ-げ［結夏］(名)【佛】僧侶が、陰曆四月十五日より七月十五日まで即ち一夏九旬の間、外遊せずして家に籠(コモ)り居ること。あんご。
げ-づけ［毛付］(名) ㊀馬の毛色。㊁馬の毛色を帳簿などに書き付くること。
(げっ-けい［月卿］(名) 三位以上の人。公卿。
(げっ-けい［月桂］(名) ㊀「つきのかつら」に同じ。㊁［植］「げつけいじゆ」の略言。 ―くわん［月桂冠］(名) ㊀古代「ギリシア」にて月桂樹を「アポロー」神の靈樹とし、其枝葉を以て冠をつくり、賞讃の表章として競技の優勝者などの頭に冠らしめしもの。㊁轉じて、最も名譽ある地位の稱。「―は遂に北手に歸せり」。 ―じゆ［月桂樹＝Laurel］(名)［植］樟科に屬する木、高さ三丈乃至五丈に達し、枝葉互生す、葉は長大にして尖頭を有し、披針狀をなし暗褐色なり、花は黃白色にして密聚せる繖狀花序をなし葉腋に生ず、實は卵形にして桑實に似る、葉實共に香料に供せらる。
(げっ-けい［月經］(名) 生殖器の成熟せる婦人(十四歲乃至四十五歲許の婦人)の妊娠又は授乳期の外、子宮より出づる生理的定期性の血液、殆ど二十七八日目に反復し、四五日持續す。つきやく。つきのさはり。つきのめぐり。つきのもの。さはり。めぐり。けいすゐ。(經行、經水)。 ―へいし［月經閉止］(名) 定期の月經が、疾病のためにとまりて出でざること。
(けつ-げき［穴隙］(名) あな。すきま。 ―をきる［鑽穴隙］(孟子に出づ)男女私(ヒソ)かに相通ずるにいふ。
(げつ-げつ［孑孑］(名、副) 孤立するさま又は他と和合せざるさまにいふ語。
(けっ-こう［結構］(名) ㊀結び構ふること。組み立つること。㊁かまへかた。つくりかた。くみたて。「―壯麗なり」。㊂よきこと。美(ウツク)しきこと。すぐれたること。 ―じん［結構人］(名) ㊀愚直なる人を嘲りいふ語。㊁心がらのよき人。人のよき人。
(けっ-こう-そ［血紅素］(名) 血液の赤血球中に含有せる色素、赤血球の淡黃色なるはこれあるによる、一定量の鐵を含み極めて酸素と化合し易く又離れ易き性あり、生活上最も緊要なるものなり。
(けっ-こく［缺刻］(名) かけ。きざみ。
(けっ-こん［血痕］(名) 血のあと。
(けっ-こん［結婚］(名)［法］一男一女の間に於て、夫婦の關係を發生する法律行爲をなすこと。一男一女が婚姻を結ぶこと。

(げっ-こん[月痕](名) つきかげ。
(けつ-さい[潔齋](名) ものいみ。きよまはり。「精—」
(けつ-さう[結裝](名) 身支たくをすること。
(けつ-さう[血相](名) かほのやうす。かほいろ。
(けつ-さく[傑作](名) 詩歌文章其他製作物などの勝れてよく出來たるもの。(名作)。
(げつ-さく[月朔](名) ついたち。
(けつ-さん[決算](名) ❶勘定の仕上。❷毎年度に於ける收支の總計算。——あん[決算案](名) 未だ確定の手續を經ざる決算。——はうこく[決算報告](名) 年度の總決算の報告。
(けつ-し[血嗣](名) 血統のあとつぎ。
(けつ-し[楔子](名) ❶くさび。❷事件の所緣。
(けつ-し[決死](名) 死をいとはずしてすゝむこと。死を念頭におかずして爲すこと。——たい[決死隊](名) 死を期(ご)して敵に突撃する部隊。
(けつ-じ[闕字](名) ❶詔句文章中にて、天皇又は貴人の御名などの上に、敬意を表して一字若しくは二字のあきを設くること。❷詔句文章の中にて、あるべき筈の字の挿入してなきこと。
(けつ-じ[訣辭](名) いとまごひのことば。
けっ-して[決](副) どうしても。かならず。きっと。「—無い」(必然、必定)。
(けつ-しふ[結集](名) 【佛】散亂せる法文を結び集めて編輯すること。
(けつ-しや[結社](名) 多人數が共同の目的を遂げんがために、相合して團體を結ぶこと。「—の自由」。
(げつ-しや[月謝](名) 月ごとに報酬として差出す謝禮の金。特に、生徒の毎月出す授業料。
(けつ-しやう[血漿](名) 血液の成分をなす液質、血清と纖維素とより成る。稍々濃厚透明にして、凝結の際は血清のみ遊離す。
(けつ-しやう[結晶](名) 鑛物などが天然一定の法則に從ひ面・稜及隅角を有する形體を成すこと。四個以上の平面を以て圍まれたる形體をなすこと。——すゐ[結晶水](名) 【化】結晶體の必ず含有する水。硫酸銅は五分子の水を、炭酸「ナトリウム」は十分子の水を含むが如し。——ソーダ[結晶曹達](名) 【化】炭酸曹達の異稱。——たい[結晶體](名) 結晶して一定の形體をなすもの。
(けつ-しゆつ[傑出](名) すぐれたること。ぬけいづ「たること」。
(けつ-しよ[闕所](名) ❶領主が罪によりてとりし次の領主の未だ定まらざる莊園。❷德川時代の附加刑、追放以上の刑に處せられたるものゝ、領地又は財産を官に沒收せしこと。もっきゃう。(官沒、籍沒)
(けつ-しよ[血書](名) 自分の身體の血を以て文字を書くこと。又、其書きたる文書。
(けつ-じよ[缺如](名) かけてあること。(闕如)
(けつ-じよう[結繩](名) 支那の太古に、人々物事を記憶し又は互の意思を通ずるために、繩を結びてこれが志るしとなしゝこと。「—の政」。「所」。
(けつ-しよう-てん[決勝點](名) 勝負のきまる箇所。
(けつ-しよく[血色](名) ❶血の色。❷皮膚のいろつや。「—わるし」。❸あかき色。「—の羅紗」。
(けつ-しよく[血食](名) 子孫相繼ぎて、先祖の祭の絶えざること。
(げつ-しよく[月食](名) 【天】滿月の時に、地球が太陰と太陽との間に來り太陽の光を遮(さへぎ)るによりて、太陰の一部若しくは全部が、地球上より見えざること。白道若し黄道に一致せば、滿月の際は必ず月蝕起るべきに、其然らざるは、白道の黄道に對して傾くが故にして、太陰が其交點に來るとき恰も滿月となる場合にのみ起る。ぐわっそく。(月蝕)。「げ」。
(げつ-しよく[月色](名) 月の色。月の光。つきかげ。
(けつ-しよく-そ[血色素](名) 血紅素に同じ。
(けつ-しるゐ[齧齒類](名) 【動】哺乳類の一目。草食する小獸にして、門齒は鑿狀をなし物をかじる性あり。好みて群棲し、生産力極めて大なり。うさぎ・ねずみ等これに屬す。
(けつ-しん[決心](名) 心をきめ定むること。念慮を一途に定めて動かざること。かくご。
(けつ-しん[結親](名) 緣組すること。親族となること。
けっ-する[決](自、さ變) ❶堤防きれて水流れ出づ。❷判斷つく。❸さだまる。きまる。❹訣別す。わかる。❺さけひらく。やぶれわかる。
けっ-する[決](他、さ變) ❶堤防を破りて水を流し出す。❷齒にて噛(か)み斷(き)つ。❸判斷をつく。❹きむ。さだむ。❺さきひらく。やぶりわかつ。
けっ-する[結](自、さ變) 大便通ぜず。ひけつす。べんぴす。
(けつ-すゐ[決水](名) ❶堤防又は水閘の決潰して水の氾濫したること。又、其水。❷堤防又は水閘を決潰して、水を氾濫せしめたること。又、其水。
(けつ-せい[血清](名) 凝結せる血液より析出せる帶黄色にして稍透なる一種の液。——ちれうりやう[血清治療](名) 傳染病者の身體に、該傳染病の不感受性となりたる動物の血清を注射して、病毒を中和無害となすこと。——れうはふりやうほふ[血清療法](名) 前條に同じ。
(けつ-ぜい[血稅](名) 國民の兵役義務。
(げつせい-きより[月星距離](名) 【天】太陰と其軌道の近く見ゆる大なる恒星又は遊星との距離。

(けつ-せき[血石＝Hæmatite](名) 【鑛】方六面形の結晶をなす鑛物。通常塊狀をなす。
(けつ-せき[闕席](名) 出づべき筈の處へ出でぬこと。——さいばん[闕席裁判](名) 【法】「けっせきはんけつ」に同じ。——はんけつ[闕席判決](名) 【法】(い)民事訴訟上にては、原告又は被告が口頭辯論の當日裁判廷に出頭せざる場合に、出頭せる相手方の申立によりてなす判決。原告が闕席の場合には、訴訟却下の言渡をなし、被告が闕席の場合には、原告の陳述を被告の自白と看做し、その正當なるときは被告敗訴の言渡をなし、然らざるときは訴訟却下の言渡をなす。闕席したるものは、該判決送達より十四日以內に故障の申立をなすことを得、其申立適法なるときは、裁判所は原被兩造を呼び出して、新に口頭辯論を開くものとす。(ろ)刑事訴訟上にては、呼出を受けたる被告人又は代人(罰金以下にあたるべき事件)の裁判廷に出頭せざる場合に、檢事の請求に基きて下す判決。該判決は、檢事其他訴訟關係人の請求により送達をなす。判決送達を受けたる被告人は、三日間に故障の申立をなすことを得。其申立適法なるときは、裁判所は更に審理を開き裁判をなす。
(げつ-せき[月石＝Moon-stone](名) 長石の一種。透明にして氷の如き色をなす。
(げつ-せき[月夕](名) 月かげ明かなるゆふべ。
(けつ-せん[血戰](名) 血まみれになりてたゝかふこと。力のたけを盡くしてたゝかふこと。
(けつ-せん[決戰](名) 決死のたゝかひ。いよいよ勝敗を定むるたゝかひ。
(けつ-せん[血腺](名) 【生】血液の新成又は崩解に關することをつかさどる腺。例へば脾・腋等の如し。
(けっせん-とうへう[決選投票](名) 選擧の投票に、適度の投票數を得たるもののなき場合か、若しくは何れを當選者と認め難き投票數の二名以上ある場合かに、其中の高點者二名以上に就きて、當選者を決定するために行ふ投票。
(けつ-そく[結束](名) ❶むすびつかぬること。たばぬること。❷衣服又は甲冑を身に著け仕度すること。
(けつ-ぞく[血族](名) 同始祖より出て血統のつゞきたる親族。血統を分けたるもの。——けっこん[血族結婚](名) 近き血族の男女が結婚すること。——こくか[血族國家](名) 血統上の關係を以て社會の秩序を立て、これによりて編制したる國家。即ち上代に於ける我國の如きこれなり。——しん[血族親](名) 六親等內の血族。——だんたい[血族團體](名) 血族のみを以て組成したる團體。
(けつ-そん[缺損](名) かけ。そんじ。不足。
(けつ-たい[結隊](名) 隊を結ぶこと。
(けつ-たい[結體](名) 結合したる體形。
(けつ-たう[結黨](名) ❶黨派を結ぶこと。仲間をつくること。❷政黨を成立せさすること。——しき[結黨式](名) 結黨に就きて擧行する儀式。
(けつ-たく[結託](名) 互に心を通じて助けあふこと。くみあふこと。
(けつ-たふ[決答](名) 決かときまりたる返答。
(けつ-たるい(形) 「かひだるし」の轉訛。
(けつ-たん[血痰](名) はき出したる痰の中に血の混じてあること。
(けつ-だん[決斷](名) ❶意志の向ふ所を定むること。❷物事の善惡邪正を裁判すること。——しよ[決斷所](名) 建武中興の時、訴訟の裁判をつかさどりし役所。「雜訴—」。
(げつ-たん[月旦](名) ❶毎月のついたち。❷月旦評の略言。——ひやう[月旦評](名) 後漢のとき、汝南に毎月品題を定めて鄉黨の人物を批評せし故事に出づ)人物の批評。しなさだめ。
(けつ-ちやう[結腸](名) 大腸の大部の稱。右の下腹より起り胃の下部に至るもの。水分の外吸收せず。「生—」。
(けつ-ちやう[決定](名) 「けってい」に同じ。「往—」。
(けつ-ちやく[決着](名) きまりのつくこと。(落着)。
(げつ-ちゆう[月中](名) ❶月のなか。❷月影の中。
(けつ-ぢよ[闕除](名) かきのぞくこと。「きす所」。
(けつ-てい[闕廷](名) きんり。きゆうちゆう。
(けつ-てい[挈提](名) ❶ひっさぐること。さげもつこと。❷たづさふること。攜帶すること。❸かたはらより力をそふること。たすけあふこと。
(けつ-てい[決定](名) ❶意志の向ふ所をさだむること。選擇して執る所をきむること。❷物事の定まること。きまり。さだまり。❸【法】裁判所がなす判決以外の裁判。訴訟手續に關する裁判。
(けつ-てい[結締](名) むすびつくること。むすびきむること。——そしき[結締組織](名) 豈(テイ)く體內に於いて各部の機關の位置を維持する組織。例へば皮膚と筋肉とを聯絡する白色網狀の組織の如きこれなり。
†(けつ-てき[闕腋](名) 「けつえき」に同じ。わきあけ。
(けつ-てん[蹶顚](名) つまづきたふるゝこと。
(けつ-てん[缺點](名) ❶足らざる所。不十分なる所。❷指摘すべき非。そしり又は責むべき所。❸あやまち。やりそこなひ。「典」。
(けつ-てん[缺典](名) 規定の不十分なる所。(闕

（ケット[Blanket]（名）「ブランケット」の略言、（毛布）。

（ケットー（名）「ケット」の訛。

（けっ-とう[血統]（名）血すぢ、（血脈）。

（けっ-とう[決鬪]（名）雙方の間に解け難き遺恨又は決し難き爭論等の高じたるがため、互に相約して何れかの死するまで鬪ひて勝負を決すること。はたしあひ。——ざい[決鬪罪]（名）【法】決鬪を行ふ當事者又は立會人若しくは其場所を貸與したるもの等の罪。——じやう[決鬪狀]（名）決鬪申込の書狀、はたしじやう。

（けっ-ぱい[蹶敗]（名）しくじり、やりそこなひ。

（けっ-ぱい[結界]（名）「けっかい」の訛。

（けつ-ばう[缺望]（名）不滿足に思ふこと。

（げっ-ぱう[月報]（名）月々の報告を月々に刊行するもの。

（けっ-ぱく[潔白]（名）㈠よごれ無きこと、潔(イサギヨ)きこと。㈡まっしろ、純白。㈢不正なる慾望なきこと、貪慾ならざること、廉潔、（清廉、清潔）。㈣うしろぐらきことなきこと、罪惡なきこと、やましからざること。

（げっ-ぱく[月迫]（名）月の末の差迫りたる頃。特に、十二月の末、（月末）。

（けっ-ぱつ[結髮]（名）㈠髮を結(ユ)ふこと。又、結びたる髮。㈡元服すること。「—擧に從ふ」。

（けつ-ばふ[缺乏]（名）不足すること、乏しきこと。

（けっ-ぱん[血判]（名）神文又は誓文などの記名の下に、眞實を表すため、指の血を出して捺すこと。

（けつ-び[結尾]（名）をはり、すゑ。結末、「文の—」。

（げつ-び[月尾]（名）月のをはり。

（げっ-ぴやう[月評]（名）月々の出來事の批評。

（げっ-ぷ[月賦]（名）月々に割りあてゝ拂ふ金子。

（げっ-ぷ（名）おくび。

（けつ-ぶつ[傑物]（名）すぐれ出でたるもの。

（けつ-ぶん[闕文]（名）脫落したる文句、脫落ある文書、（脫文）。

（けつ-ぶん[結文]（名）文章の結末、又、其文句。

（げっ-ぺう[月表]（名）月々につくる表。

（けっ-ぺき[潔癖]（名）すこしの不潔をもいとふ性質、きれいなる事を好むくせ、きれいずき。

（けつ-べつ[訣別]（名）わかれ、いとまごひ。

（げつ-べつ[月鼈]（名）（月とすっぽんとの意）彼此の優劣相違の甚しきにいふ語。

（けつ-べん[血便]（名）表面に血液の附着して出る糞便。

（げっ-ぽう[月俸]（名）㈠月給。㈡月々の所料。

（けっ-ぽん[闕本]（名）卷數の不足してある書册。

（けつ-まく[結膜]（名）「きようまく」（鞏膜）に同じ。

（けつ-まつ[結末]（名）くゝり、をはり。

（げつ-まつ[月末]（名）月の末、つきずゑ。

け-つまづき[蹶躓]（名）けつまづくこと。

け-つまづ・く[蹶躓]（自、か四）㈠物に蹴(ケ)あたりてつまづく。㈡中途にて失敗す、しくじる。

（け-づまり[毛詰]（名）狆(チン)の毛の短きこと。

（けつ-みやく[血脈]（名）㈠體內の血液のかよふ脈管。㈡ちつゞき、ちすぢ、血統。㈢嗣統。

け-づめ[蹴爪]（名）雉子又は雞などの趾の後にある爪、かけづめ、（距）。

（げつ-めい[月明]（名）月影のあきらかなること。又、月のあかるき影。

（けつ-めい[決明]（名）【植】「えびすぐさ」の一名。

（げつ-や[月夜]（名）つきよ。

（けつ-やく[結約]（名）約束を結ぶこと、ちぎること。やくそく、やくぢやう。

（げつ-よ[月餘]（名）一月あまり。

（げつ-よ[孑餘]（名）㈠はした、のこり。㈡殘黨、（餘類）。

（げつ-らい[月來]（副）つきごろ。

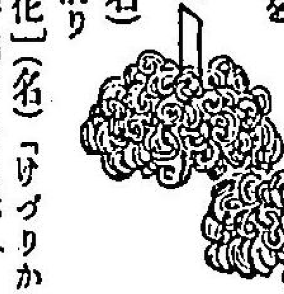
（げつ-らう[月老]（名）月下老人の略言。むすぶのかみ。

（けつ-らく[缺落]（名）かけておつること、かけて不足すること。

（けつ-り[血痢]（名）「りびやう」に同じ。

（けつ-り[結縭]（名）えんぐみ、けっこん。

けづり[削]（名）けづること、又、けづる方。——あめ[削飴]（名）削りて食する飴。——かけ[削掛]（名）柳・榾などの枝を、削りかけて荳花の如く作りたるもの、昔時、正月十五日にあめかざりを除きたるあとの門戶に吊(ツ)して咒(マジナヒ)としたり。——ばうふう[削防風]（名）さしみのつまなどに用ふる削りたる防風。廿——ばな[削花]（名）「けづりかけ」に同じ。廿——ひ[削氷]（名）削りたる氷。——もち[削餅]（名）かきもち（越後地方の方言）。


[けかりづけ]

けづり-と・る[削取]（他、ら四）㈠削りて容積を減ず。㈡取りて減(ヘ)す、そぐ。

（けつ-りやく[闕略]（名）缺きて加へざること、はぶくこと。

（けつ-りん[血淋]（名）血の混じて出づる淋病。

（げつ-りん[月輪]（名）月影の稱、形圓くして輪狀に見ゆるよりいへる名。

けづ・る[削]（他、ら四）㈠少々づゝ省(ハブ)きて取る。薄く殺(ソ)ぎて取る。へぐ。そぐ。㈡減少す。へす。かく。㈢奪ふ、除く。「領地を—」。（刪）。

けづ・る[梳]（他、ら四）櫛(クシ)をもて髮を理(オサ)む。くしけづる。

（けつ-るゐ[血淚]（名）血のまじりて出づる淚、

即ち甚しき悲傷又は哀傷のあまり流す淚。

（けつ-れい[厥冷]（名）血のめぐり絕えて體の冷かになること。

（けつ-れい[缺禮]（名）禮をつくさゞること。

（げつ-れい[月令]（名）定め行ふべき政事又は儀式を、月々に區別し順序を立てゝ記錄したるもの。

（けつ-れう[結了]（名）をはりたること、をはり。しまひ。（終結）。

（けづれ・る[削]（自、ら下二）㈠削られて少なくなる。㈡削るを得。

（けつ-ろ[血路]（名）㈠圍みたる敵を切り開きてにぐる一方の道。㈡困難なる場合を切りぬくる路。

（けつ-ろ[缺漏]（名）不足なること、ぬけ、もれ。

（けつ-ろん[結論]（名）㈠論じつめたる結局、結局の議論。㈡【論】三段論法の結末の命題、即ち、前提又は大前提と後提又は小前提とによりて得たる判斷。

（げつ-ゐ[孑遺]（名）「げつよ」（孑餘）に同じ。

（けつ-ゐん[闕員]（名）人數の缺けたること、定員の足らざること。

（けつ-をん[血溫]（名）血の溫度。

（け-てう[怪鳥]（名）怪しき鳥。

（け-てん[怪顚]（名）怪しみ驚くこと。——がほ[怪顚顏]（名）怪顚なる顏のさま。をかしきさまの顏。

（げ-でん[怪顚]（名）前條に同じ。

（げ-てん[外典]（名）【佛】佛經以外の書籍。ないてんの對。

（げ-でん[下田]（名）地味あしき田。

（げ-とう[下等]（名）「かとう」に同じ。

（げ-どく[解毒]（名）體內に入りたる毒物を解き消すこと、藥を用ひて毒物を稀薄にし又は中和無害にすること。——ざい[解毒劑]（名）解毒に用ふる藥劑、どくけし。——やく[解毒藥]（名）前條に同じ。

廿け-どころ[褻所]（名）ふだんの居間。

け-とば・す[蹴飛]（他、さ四）蹴(ケ)て飛ばす。

廿け-どほ・し[氣遠]（形、二）とほし、うとし。

け-どり[氣取]（名）けどること。

け-ど・る[氣取]（自、ら四）氣色を見てさとり知る。

廿け-なが・し[來經長]（形、二）時間長し。

け-なげ[健氣]（名）㈠心がけよきこと、殊勝なること。㈡かひがひしきこと、いさましきこと。——もの[健氣者]（名）けなげなるふるまひの人。

け-なし[貶]（名）そしり、わるくち、（誹謗）。

け-なし[毛無]（名）毛の無きこと。又、其もの。

け-な・す[貶]（他、さ四）あしざまにいふ、おとしめくさす、そしる。

け-なみ[毛並]（名）㈠毛のありさま、「—のよい犬」。㈡しゆるゐ、しな、「—の變った男」。

け-な-もの[健者]（名）「けなげもの」に同じ。

廿け-なら・ぶ[日並]（自、は下二）日數を積む。

（げ-なん[下男]（名）つかひをとこ。しもべ。

廿け-に[故]（副）ゆゑに。

廿け-に[異]（副）なほさら、ことさら。

げ-に[實]（副）㈠其如く。まことに。あつに。㈡すぐれて。

廿け-にく・し[氣惡]（形、二）にくし。

廿げに-げに・し[實實]（形、二）（「げ」は發語）もっともらし。まことらし。

（け-にん[家人]（名）㈠いへのこ、けらい。㈡德川時代に、德川氏の旗下の小祿のものゝ稱。

（け-にん[化人]（名）あやしき人、ばけもの。妖怪。

（げ-にん[下人]（名）身分の卑(ヒ)きもの、げす。

（げ-にん[解任]（名）任務をとかるゝこと。

廿げ-にん[外任]（名）國司の任即ち地方官。京官の對。

け-ぬき[毛拔]（名）鬚又は髭などを挾みて拔き取る具、鐵にてつくり、形ははさみの如く、頭のくひあふやうにつくりたるもの、（鑷）。——あはせ[毛拔合]（名）㈠雙方のきれなそろへて、縫ひあはすること。㈡外(ソ)るゝばかりに辛うじて合ふこと。

廿け-ぬる・し[溫]（形、二）稍や溫(アタタ)かし。寒くなし。

（げ-ねつ[解熱]（名）亢進せる體溫を減ずること。——ざい[解熱劑]（名）解熱に用ひて効力ある藥劑、例へば、かざ藥の如きこれなり。——やく[解熱藥]（名）前條に同じ。

（け-ねん[懸念]（名）氣がゝり、こゝろがゝり。

廿け-の-あらもの[毛麁物]（名）大いなる獸類。

廿け-の-くつ[靴沓]（名）「くわのくつ」に同じ。

廿け-の-こり[消殘]（名）けのこること、「—の雪」。

廿け-の-こ・る[消殘]（自、ら四）消えのこる。

廿け-の-ところ（名）日のほど經ること、「—は、戀ひつゝもあらん」。

廿け-の-にこもの[毛柔物]（名）小さき獸類。

け-ば[毳]（名）細き毛。

（げ-ば[下馬]（名）㈠馬より下(オ)るゝこと、（下乘）。㈡乘打を禁ずること。

（げ-はい[下輩]（名）㈠卑(イヤ)しきともがら、しもざまの者。㈡目下のもの。

け-ばうき[毛箒]（名）鳥の羽などを束(ツカ)ねてつくりたる箒(ハウキ)。

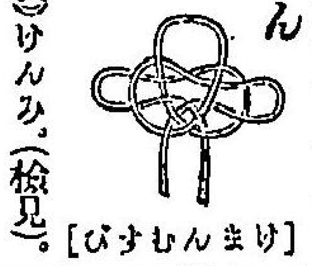
け-ばうし[毛帽子]（名）毛を飾りうゑたる帽子。又、毛の絹(ケシ)きものにてつくりたる帽子。

けはえ-ぎはワーギ「毛生際」(名)「けぎは」(毛際)に同じ。
けはえ-ぐすり「毛生藥」(名) 皮膚の局部に毛を生ぜしむるために塗抹する藥。
(げ-はく「下白」(名) 下等の白米。上白の對。
(けば-けば-だち「毳毳立」(名) いとけばだちたること。
(けばけば-だ-つ「毳毳立」(自、た四) いと「けばだつ」。
けは-し「險」(形、二) ㊀勾配(コウハイ)急にして行くに危し。道路平かならずして歩むに惡し。けんそなり。さかし。(嶮)。㊁氣質あら〳〵しくして激し易し。
けば-だち「毳立」(名) けばだつこと。
けば-だ-つ「毳立」(自、た四) 細毛起り立つ。「紙が—」。
けは-なし「蹴放」(名) ㊀けはなすこと。㊁門の内外の區域をわかつ溝のなき敷居。
けは-な-す「蹴放」(他、さ四) 蹴(ケ)て開く。
けはひ ケハイ「氣色」(名) おもてに現はれたる樣子。けしき。そぶり。
けはひ ケハイ「假粧」(名)「けさう」に同じ。
げば-ふだ「下馬札」(名) 乘打を禁ずる旨を記したる制札。
けはらひ「毛拂」(名) 衣服の塵などを拂ふために用ふる刷毛(ハケ)、こはき毛にて造りたるもの。「フラシ」。
げ-び「下卑」(名) 品劣(オト)れること。いやしきこと。
〰げび-ざう「下卑藏」(名) 意地根性のきたなきものをのゝしりていふ語。
け-びき「罫引」(名) ㊀罫(ケ)を引くこと。又、其引きたるもの。㊁罫を引くに用ふる道具。——がみ「罫引紙」(名) けいがみ。けがみ。
けびき-おどし「毛引縅」(名) 毛絲にておどしたる鎧。
卄け-びと「食人」(名) 古昔、死者の靈前に食物を供ふることをつかさどりし人。
(け-びやう「假病」(名) 詐(イツハ)りてよそはふ病氣。にせびやうき。「—をつかふ」。(詐病)。
(げ-び-る「下卑」(自、は上一) いやしく見ゆ。いやしくなる。
卄け-びゐ-し「檢非違使」(名) 古昔、非法違法の事をとりたゞしゝ職名、追捕・糺彈・裁判・訴訟などの事をつかさどり、今の裁判官と警察官とを兼ねたるが如きもの。
(げ-ひん「下品」(名) 品格の下りたること。上品の對。
け-ふ「今日」(名)(此日(コヒ)の轉といふ) 現在の日。このひ。いまのひ。こんにち。「今日」。——あす「今日明日」(名) 今日か明日かの中。間もなき程。
(けふ「怯」(名) おそるゝこと。おくびやう。
(けふ「俠」(名) をとこぎ。をとこだて。
(げ-ぶ「煙」(名) ㊀「けぶり」の略言。㊁物事の形跡のうせたること。——にまかる 茫然として判斷のつかなくなるにいふ。
(げふ「業」(名) ㊀學問。藝術。㊁よすぎ。なりはひ。㊂わざ。志わざ。㊃つとめ。勤務。㊄てだて。志かた。㊅いさを。てがら。㊆もとゐ。もとだて。「—を創め統を垂れ」。
(げ-ぶ「下部」(名) 志もの方。
(けふ-あい「狹隘」(名) ㊀極めて狹(セマ)きこと。「—なる部屋」。㊁度量小なること。
け-ぶか「毛深」(名) 毛ぶかきこと。——し「毛深」(形、二) 毛多く生(ハ)えてあり。
(けふ-かう「俠行」(名) をとこだてのおこなひ。
(けふ-かう「狹巷」(名) せまきちまた。ろぢ。
(けふ-かく「俠客」(名) をとこだて。
(けふ-がふ「協合」(名) やはらぎあふこと。またしくむつまじきこと。
(けふ-かん「峽間」(名) たにあひ。はざま。
(けふ-き「俠氣」(名) をとこだての心。をとこぎ。
(けふ-き「狹軌」(名) 鐵道の「レール」の間が、三「フイート」六「インチ」以內なること。廣軌の對。——てつだう「狹軌鐵道」(名)「レール」が狹軌なる鐵道。廣軌鐵道の對。
(けふ-ぎ「狹義」(名) 範圍を制限して狹くしたる意義。せまきいみ。廣義の對。
(けふ-ぎ「協議」(名) ㊀はなしあひ。さうだん。㊁二人以上のものが、或事項を討議して決定すること。——くわい「協議會」(名) 協議するために設くる會。「兩院の—」。
(けふ-くわい「協會」(名) 會員相協力して設立維持する會(多くは會の名稱に用ふ)。
(けふ-げき「挾擊」(名) はさみうち。
(けふ-こう「挾攻」(名) 前條に同じ。
(けふ-こく「峽谷」(名)【地】峻絶なる兩崖の相迫りたるたに。はざま。
(けふ-こつ「俠骨」(名) 俠氣ある精神。
けふ-このごろ「今日此頃」(名) 極めて近き頃。ちかごろ。
(けふ-さく「狹窄」(名) 口のすぼまりてせまきこと。
(けふ-ざつ「夾雜」(名) まぎれいること。まじること。——ぶつ「夾雜物」(名) まじり入りたる不純物。
(けふ-さん「夾算」(名) 書物又は卷物などよみさし又はみさしたるところに、はさみおくもの。薄き竹片の頭を割(サ)きて挾むやうに作れり。志をり。

(けふ-さん「協贊」(名) ㊀力をそへてたすくること。㊁【法】帝國議會が、法律案又は豫算案に就き議決すること。法律は必ず此手續を經べきものとす。——けん「協贊權」(名) 憲法によりて、帝國議會に附與せられたる協贊の權限。
(けふ-じ「夾侍」(名) ㊀左右にはんべること。又、其人。(挾持)。㊁【佛】佛像の左右に侍してゐるもの、不動の制吒迦・昆羯羅又は彌陀の觀音・勢至などの類。わきだち。(脇士)。——ボサツ「夾侍菩薩」(名) 觀音菩薩と勢至菩薩との稱。わきだち。
けぶ-し「煙」(形、二) けぶたくあり。
(けふ-しや「狹斜」(名) いろざと。いろまち。遊里。
(けふ-しやう「協商」(名) 協議してとりはからふこと。はなしあひ。さうだん。
(けふ-しよう「夾鐘」(名) ㊀十二律の一、二月に當る。㊁陰暦二月の異稱。
(けふ-じゆう「脅從」(名) ㊀おびやかされて從ふこと。心ならずも恐しさに屈服すること。㊁おびやかして從はすること。おしつけてまげて屈服せさすること。
(けふ-しん「俠心」(名) をとこぎ。
(けふ-しん「協心」(名) 心をあはすること。たすけあふこと。「同力—」。
(けふ-せう「狹小」(名) せまくちひさきこと。
(けふ-そく「脇息」(名) 座傍に置き臂(ヒヂ)を掛け體を支(サヽ)ふる具、小さき机の如き形をなすもの。ひぢかけ。おさへ。おしまづき。
(けふ-だ「怯懦」(名) 物事によくおぢおそるゝこと。決行する意力弱きこと。おくびやう。
(げふ-たい「業體」(名)「げふてい」に同じ。
けぶた-し「煙」(形、二) ㊀煙を受けて、苦しく感ず。㊁きゅうくつなり、きまづし。
(けぶ-だし「煙出」(名) けむりだし。(煙突)。
(けふ-ぢ「挾持」(名) そばより力をそふること。たすくること。
(けふ-つう「浹通」(名) あまねく通ずること。
(けふ-てい「篋底」(名) はこのそこ。匣底。
(けふ-てい「協定」(名) 協議して決定すること。——ぜいりつ「協定稅率」(名) 國家が或貨物に課する關稅に就き、特に或國と協定したる稅率。關稅は通常の關稅稅率によるべきものなれど、協定稅率を定めたる貨物に就きては、協定稅率によるべきものとす。
(げふ-てい「業體」(名) ㊀營業のすぢ。家業。㊁おこなひ。ふるまひ。
(けふ-どう「協同」(名) 心を合はせ共同して事をなすこと。
(けふ-にん「俠任」(名) をとこだて。をとこぎ。
(けふ-はく「脅迫」(名) ㊀おびやかしせまること。おどしつくること。㊁【法】畏怖せしむる目的を以て、人に不法の害惡を加ふることを示す行爲。——ざい「脅迫罪」(名)【法】人を脅迫したる犯罪、脅迫を受けたる本人又は其親屬の告訴を待って成立す。
(けふ-ほ「夾輔」(名) ㊀左右よりたすくること。㊁つらがまち。ほゝ。
(げふ-む「業務」(名) なすべきわざ。つとめ。
(けふ-ゆう「俠勇」(名) 俠氣ありて且勇氣あること。又、其人。
けぶり「煙」(名) ㊀物の火に燒けて起る朦朧たる氣。けぶ。けむ。けむり。㊁煙に似て、朦朧たる色をなし立ちのぼるもの。「水—」。——ぐさ「煙草」(名)「タバコ」の一名。——だし「煙出」(名)「けむりだし」に同じ。
けぶり「氣振」(名) そぶり。けはひ。ふるまひ。
(けふ-りき「協力」(名)「けふりよく」に同じ。
(けふ-りやう「狹量」(名) 度量のせまきこと。
(けふ-りやく「劫略」(名) おびやかして奪ふこと。かすむること。
(けふ-りよく「協力」(名) ㊀力を合はすること。一致すること。(戮力、合力)。㊁【經】人類が合同して一つの仕事をなし若しくは分業によりて經濟界を組織すること。
けぶ-る「煙」(自、ら四) ㊀煙立つ。㊁霞(カス)みて見ゆ。煙の立つが如くに見ゆ。
ケプレル の はふそく「—の法則」＝Kepler's law」【天】遊星の運行に關する法則。「デンマルク」國人「ケプレル」の發見にかゝるものにして三則あり。(第一)遊星の軌道は楕圓にして、太陽其焦點の一にあり。(第二)太陽より遊星に至る直線は、等時間に等しき面積を畫く。(第三)遊星の太陽を一週する時間の平方は、其太陽に至る平均距離の三乘に比例す。
(けふ-ろ「狹路」(名) せまきみち。
(けふ-わ「協和」(名) 心をあはせて仲よくすること。親密にして互に隔心なきこと。
(げ-ほくめん「下北面」(名) 古昔、院の御所を守衞せし武士。
(げ-ほふ「外法」(名) 妖術。魔法。卄——がしら「外法頭」(名) 人の髑髏をもて行ひし妖術。——づかひ「外法遣」(名) 外法をつかひ、あやしき事をなす人。
け-ぼり「毛彫」(名) 模樣を細(コマ)かく毛筋の如く彫(ホ)ること。又、其彫刻物。
卄け-まうき「希望」(名)「きばう」に同じ。
け-まはし「蹴廻」(名) 袴又はうちかけの裾の足にかゝるところ。

けまり【蹴鞠】(名) ㊀革にて製したるまり、まうきくに用ふるもの。㊁まりを靴にて蹴上(ア)ぐる遊戲。まうきく。(蹴鞠)。

(け-まん【華鬘】(名) 佛像又は堂塔の頂に付くる飾、金銀の造花にて拵へたる花かづら、まゝ生花をも用ふ。――さう【華鬘草】(名)【植】罌粟科に屬する草、葉は複葉にして芹に類し、小葉は缺刻を具す、花は紅紫色にして總狀花序に排列す、(荷包牡丹、魚兒牡丹)。――ぼたん【華鬘牡丹】(名)【植】前條に同じ。――むすび【華鬘結】(名) 紐の結び方、いれひも。どうまんむすび。


[けまんむすび]

け-み【毛見】(名)(稻の毛を見る義)けんみ。(檢見)。

け-み・す せしすする、すれ、せよ【閲】(他、さ變) たゞしみる。あらたむ。あらぶ。「書を―」。(點檢、査閱)。

(け-みち【蹊道】(名) 馬のなみあし。

(け-みやう ミャウ【假名】(名) 實名の外に假に附けたる名。かりのとなへ。(假名)。

(け-みやう ミャウ【家名】(名) 家のとなへ。みやうぶ。

(け-みん【下民】(名) 末もざまの民。末もざまのもの。かみん。

け-む【煙】(名)「けむり」の略言。

けむ(助動)【文法】過去を推量していふに用ふる語。

けむ(助動)(「からん」の約言)形容詞の語根に添ひて、未來を推測する意を表はす語。「なー」、「べー」。

(けむ-くだち(名)「けばけばだち」に同じ。

(けむ-くだ・つ たちつつてて(自、た四) 毛立つ。けばだつ。

(けむくぢゃら(名) ㊀毛のむくむくして手ざはりの滑(ナメ)かならぬこと。㊁毛の多く生(ハ)えたるさまにいふ語。

廿けむし【臭】(名)「をあさ」に同じ。

け-むし【毛蟲】(名) ㊀【動】昆蟲類鱗翅類に屬する蝶蛾類の仔蟲の稱、褐色若しくは黑色にして、長さ三寸許、羽化して蝶となる。(蛅蟖、蠋蠖)。㊁群(ムラガ)り寄りて害となるもの又は少しく氣に障れば害をなすものをのゝしりいふ語。――まゆ【毛蟲眉】(名) 太く迦(コ)くして、けむしのさまに似たる眉毛。

け-む・し くしき、けれ【煙】(形、二)「けぶし」に同じ。

け-むしろ【毛席】(名) 毛にて織りたるむしろ、毛織物の敷物。(毛氈、毾㲪)。

けむた・し くしき、けれ【煙】(形、一) ㊀煙のために苦しく感ず、煙に咽(ムセ)ぶ。㊁きゆうくつなり。氣まづし。

けむ-だし【煙出】(名)「けむりだし」に同じ。

廿け-むつか・し しくしき、しけれ(形、二) 希有(ケウ)なり。むさくるし。むくつけし。

けむり【煙】(名)「けぶり」に同じ。――だし【煙出】(名) 屋内にて物を焚(タ)く煙を屋外に出だすために屋上に設けたる窓、又は竈の上に煉瓦などにて高く積み上げたる筒。けむだし。けぶだし。えんとつ。(煙突、煙窓、煙筒)。

けむ・る らりるるれれ【煙】(自、ら四) けむりたつ。けぶる。

(げ-めん【外面】(名) ㊀そとがは。おもて。ぐわいめん。㊁顏面のさま。かほいろ。かほだち。――にょボサツないしんにょヤシャ【外面如菩薩內心如夜叉】 婦人の顏のいと美(ウツク)しく柔和に見ゆれど、其心根のいと陰險にして恐るべきにいふ。

け-もの【獸】(名) ㊀家に飼(カ)ふ畜類。家畜。㊁轉じて、けだもの。――へん【獸偏】(名) 漢字の偏の名、狗・猫などの左方にある犭の字の稱。

け-もも【毛桃】(名)【植】もゝの一種、實大きくして果皮に毛あり、花もまた普通のものより大きくして色淡(アハ)し。(山桃)。

(けもん-りよう【花文綾】(名) 花の模樣ある綾。

げ-や【下屋】(名) 母屋(オモヤ)にさしかけてつくりたる小屋。

廿けやか【異】(名) きはだちてあること。きはやかなること。

けやき【欅】(名)【植】楡科に屬する喬木、葉は櫻に似て鋸齒多し、材は黃色を帶びて堅く、建築・器具其他種々の料に供せらる。

け-やき【毛燒】(名) 鳥の毛を毟(ム)りたるあと、肌膚にある細小なる毛を火にて燒くこと。

廿けやけ・し くしき、けれ【異】(形、一) きはだちてあり、異樣なり。ことなり。

廿けや・し しくしき、しけれ【異】(形、二) 前條に同じ。

廿げ-ゆ【解由】(名) 古昔、任期はてたる國司が、後任者より事務・租税などの滯(トドコホ)りなき旨の文書を請取ること。――じやう ゲユ-ジヤウ【解由狀】 前任の國司などが、後任者より解由に請取る文書。

けら【螻蛄】(名)【動】直翅類中蟋蟀科に屬する昆蟲、夏秋の頃、土中に穴居して鳴く、形いなごに似て頸圓く長し、前肢は長くして地を開掘するに適す、頗る農家に有害なるものにして、殊に小麥・稻苗等の根を害す。おやうらいむし。おけら。(土狗蛄)。

[けら]

けら【啄木鳥】(名)【動】「けらつゝき」の略言。

けら【鍔】(名) よくきたへたる鐵。

(け-らい【家來】(名) 家にめし使ふ者。ずさ。けにん。いへのこ。(隸從、家隸、家僕、家臣、家臣)。

(げ-らう ゲ-ラウ【下郞】(名) 人に使はるゝ賤しき身分のもの。おもべ。

(け-らく【快樂】(名)「くわいらく」に同じ。

(げ-らく【下落】(名) 價の下(サ)がること。等のくだること。

(けら-げい【螻蛄藝】(名) 諸種の藝あれど、皆な巧ならざること。

(けら-けら(名、副) 笑ふさまにいふ語。

(げら-げら(名、副) 聲を出だして、さはやかに笑ふさまにいふ語。(哄哄)。

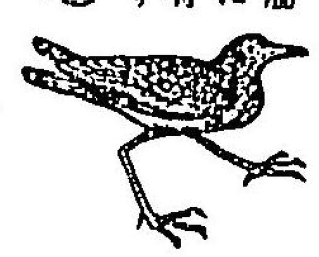
廿けらし(助動)(過去の助動詞「けり」と推量の助動詞「らし」とよりなる、「けるらし」の約言) 過去を推測する意を表はす語。「櫻花さきにーな」。

(けら-つつき【啄木鳥】(名)【動】「てらつゝき」の訛。

(けら-ば【螻蛄羽】(名) ㊀のきさき。のきば。㊁土藏の鉢卷の上にあるつき。

廿げ-らふ ラフ【下臈】(名) つとめの年月尙は淺くして地位低きもの、稱。上臈の對。

けり【鳧】(名)【動】涉禽類に屬する鳥、鳩大なり、頭背は灰色にして胸腹は白色なり、足長く嘴短し、常に水邊に棲息す。(桃鳧)。


[けり]

け・り らりりるれ (助動)(來(キ)有(ア)りの約言) ㊀過去の義を表はす語、つ・ぬ・たり等よりは、現在に遠き場合に用ふるもの。㊁詠嘆の意を表はす語。「心なりー」。

(げ-り【外吏】(名) 古昔の外任の官吏の稱、即ち、國司などをいふ。

(げ-り【下痢】(名) くだりばら。腹くだり。(痢病)。

(けり-かも【鳧鳧】(名) 歌又は歌人をのゝしりていふ語。

けり-かもめ【鳧鷗】(名)【動】游水類中長翼類に屬する鳥、形はかもめより小さく、腹部白色にして背部淡黑色なり、嘴と脚とは赤し。

(げ-りやく【下略】(名) 下の方の文言を略すること。上略の對。

ける けれけるけれ【蹴】(他、か下一) 足をもて突きやる。足にかけて飛ばす。

ゲレイン【Grain】(名)「グレイン」に同じ。

ケレオソート【Creosote】(名)【化】無色油狀の液體、するどき一種の臭氣を有し、腐敗又は醱酵を防ぐ効あり、多く齒痛を止むる藥劑として使用せらる。

(げ-れつ【下劣】(名) いやしく劣(オト)りたること。

(げれ-ど(接)「げれども」に同じ。

(げれ-ども(接) であるが。然かれども。然かしながら。

(けれん(名) ごまかすこと。ごまかし。

(けろ-けろ(名、副) ㊀病氣などの思ひの外早く治(ナホ)りて全く跡方なきさまにいふ語。㊁平然として何事にも關せざるさまにいふ語。

(げろ-げろ(名、副) ㊀へどを吐(ハ)くさまにいふ語。㊁へど。

(げろ-り(名、副)「げろげろ」に同じ。

(け-ろん【戲論】(名) たはむれの議論。やくにたゝぬ言。「自性卽ち無性にて、すでに―を離れたり」。

廿げ-ゐ【外位】(名) 古昔、外官に賜はりし位階、外正從何位と稱し、普通の位階よりは低し、後には卑賤の家柄のものには京官にても外位を賜ひたり。

廿げ-ゑ【外衞】(名) 古昔、禁中の閤垣の外をまもりし衞府の稱。

(けん【拳】(名) ㊀こぶし。にぎりこぶし。㊁一種の遊戲、二人若しくは二人以上のものが、互に手又は指にて種々の狀をなして、勝負をあらそふもの、にんけん・とうはちけん・きつねけん等樣々あり。――をうつ 拳の遊戲をなす。

(けん【權】(名) ㊀はかりのおもり。(錘)。㊁物の輕重をはかる器、はかり。㊂手段は正しき道に合せざれど、目的は正しき道にかなふこと。「―を行ふ」。㊃はかりごと。たくらみ。術數。謀略。㊄臨機應變の才あること。(機智)。㊅かり。假設。㊆いきほひ。ちから。㊇けんりよく。けんげん。けんり。

(けん【券】(名) わりふ。てがた。きつて。

(けん【乾】(名) ㊀易の八卦の一、☰の形をなすもの。「天・天子又は世にあらはれさかゆる運若しくは剛健にして强(ツト)めて息(ヤ)まざる德を表はす。㊁戌と亥との間卽ち西北間の方位。いぬゐ。㊂あめ。そら。㊃かみ。きみ。天子。「―德廣大」。

(けん【間】(名) ㊀柱と柱とのあひだ、ま。「三十三―堂」。㊁長さの單位、六尺の稱。

(けん【劍】(名) ㊀つるぎ。㊁つるぎをつかふ技、げきけん。「―を學ぶ」。㊂銃の頭に付くる鎗の穗の如きもの。㊃螫(サ)す蟲の尻にあるとげ。――をうつ【擊劍】 げきけんをまなぶ。

(けん【卷】(名) まきもの又は書物の數ある中の順序。まき。くわん。「―の一」。

(けん【見】(名) みこみ。かんがへ。みかた。みやう。

(けん【件】(名) くだり。こと。かど。「彼の―」。

(けん【險】(名) ㊀けはしきこと。あやふき所。けんそ。「―を超ゆ」。(嶮)。㊁むづかしきこと。恐るべきこと。㊂顏面にすごみあること。「―のある顏」。

(けん【縣】(名) ㊀あがた。㊁郡の異稱。㊂明治の初年に、朝廷の直轄地の稱。藩の對。「笠松―」㊃郡及市を以て組織せられたる地方行政區劃の一にして、且地方自治體の最上級たるもの、機關は縣會及縣參事會にして、行政は知事これを掌り監督は內務大臣これを掌る。㊄支那にて、郡若しくは府に屬する行政區劃の稱。(縣)。

(けん)[鵑](名)【動】ほとゝぎす。「—を聞く」。
(けん)[腱](名) 筋肉の兩端の白色部分の稱、強靱にして收縮することなく骨に附着す。
(けん)[健](名) つよきこと。さかんなること。すこやか。「天行は—」。
(けん)[賢](名) さかしきこと。かしこきこと。すぐれたること。又、其人。
(けん)[妍](名) たをやかなること。みめよきこと。
(けん)[堅](名) ㊀かたきこと。かたきもの。「—を鑽る」。㊁甲冑。「—を被り戈を執る」。
(けん)[謙](名) へりくだること。
(けん)[驗](名) ㊀ためし。こゝろみ。㊁しるし。きゝめ。
(けん)[儉](名) 事を省(ハブ)き用を節すること。自ら戒めてほしいまゝにせざること。つゞまやか。「—以つて德を養ふ」。
(—けん)[軒](接尾) ㊀家を數ふるにいふ語。「二—」「百—」。㊁雅號又は屋號などの末尾に用ふる語。
(げん)[弦](名) ㊀弓づる。つる。「—に應じて斃る」。㊁琴などに張る絲。いと。(絃)。㊂絃を張りたる樂器即ち琴瑟の類。㊃【天】太陰の影が弓狀に見ゆる場合の稱、特に陰曆七八日頃と二十二三日頃との月にいふ。㊄【數】圓(又は他の曲線)の弧の兩端を連ぬる線の稱。又、直角三角形の斜邊の稱。㊅一升入殼枡の上部に架する四角形の鐵の稱、其體積は二百四十立方分なり。
(げん)[原](名) ㊀のはら。はら。㊁もと。ねもと。みなもと。「左右逢—」。
(げん)[舷](名) ふなばた。「—を叩いて謠ふ」。
(げん)[言](名) ㊀ことば。ことのは。㊁句。「我に九—を敎ふ」。㊂字。「一部四十余萬—」。㊃詩歌。辭章。㊄命令。「—を修む」。
(げん)[玄](名) ㊀赤を含む黑色。黃を含む黑色。くろ。㊁あめ。天上。㊂もと。極微。㊃微妙にして深遠なること。たへなること。おくふかきこと。又、其道理。「—之又—衆妙之門」。㊄しづか。閑雅。㊅老子莊子の說きし道德。「よく—を談ず」。
(げん)[嚴](名) きびしきこと。おごそかなること。
(げん)[幻](名) ㊀まぼろし。㊁てづま。妖術。
(げん)[現](名) ㊀うつゝ。實在。㊁げんざい。げんぜ。「過—未」。㊂其場にあること。ありあはすること。「—兵僅に三千」。㊃賭事に類したる一種の空相場、當日の相場を標準として互に現金の授受をなすこと。
(げん)[驗](名) ㊀祈禱又は療治などのしるし。「—が見える」。㊁見え、樣子。「—の惡るい子」。(京都の方言)。
(げん)[減](名) ㊀へること。へらすこと。㊁げんぱふ。ひきざん。「加—」。
(げん)[元](名) ㊀天地の太德。又、天地の正氣。㊁ねもと。はじめ。原始。端初。㊂かうべ。頭首。㊃をさ。首長。㊄王朝の革命。又、君王の即位。㊅曆日。又、年號。「—を改む」。㊆改曆又は年號の第一年。即位又は革命の第一年。
(けん-あい)[險隘](名) けはしくせまきこと。又、其所。
(けん-あい)[兼愛](名) 自他親疎の差別なく、すべての人を平等に愛すること。支那古代の學者墨翟はこれを道德上の主義となしたり。
(けん-あい)[眷愛](名) かはゆがること。なさけをかくること。
(けん-あい)[涓埃](名) しづくとごみと。轉じて、極めてすくなき物事にいふ語。「未有—答聖朝」。
(けん-あく)[險惡](名) ㊀道路のさがしく歩み難きこと。㊁性質のねぢけて恐るべきこと。㊂すべて物事のあやうくおそろしきこと。「天候—」。
(げん-あく)[元惡](名) 惡徒又は反賊のかしら。
(けん-あん)[檢案](名) 形跡をしらべたゞすこと。
(げん-あん)[原案](名) 修正案などに對して、會議に上(ノボ)りたるはじめの議案の稱。
(けん-い)[險易](名) むづかしきとやすきと。けはしきとたひらかなると。
(けん-いう)[縣有](名) 縣といふ自治體の所有。「—財產」。
(けん-いう)[悁憂](名) うれふること。
(けん-いち)[見一](名)【數】珠算にて、二桁(ケタ)以上の割算などの稱。
(けん-いん)[牽引](名) ひきだすこと。ひきゆくこと。ひきよすること。
(けん-いん)[見印](名) 見認印(ミトメイン)。
(けん-いん)[檢印](名) 檢査の證として捺(オ)す印。
(げん-いん)[原因](名) 物事のよりもとづく所。もと。おこり。結果の對。
(けん-うん)[眩暈](名) めのくらむこと。めまひ。
(けん-うん)[卷雲](名)【地】毛髮狀・羽毛狀又は平行纖維狀をなして、高く天空にかゝる雲、主として雪片より成るといふ。
(けん-えい)[卷纓](名) 冠の纓の一種、內に卷きたるもの。くわんえい。まきえい。

[けんえい]

(けん-えい)[獻詠](名) 宮中又は神社などに詩歌を奉ること。
(げん-えい)[幻影](名) ㊀はかなきかげ。まぼろしのあと。㊁思想又は感覺の錯誤によりて、見あやまりたる實際ならぬ現象。
(けん-えう)[權要](名) 權力ある樞要の位地。又、其位地にあるもの。
(けん-えう)[險要](名) 地勢のさがしくして要害なること。又、其地。
(げん-えう)[眩曜](名) ひかりかゞやくこと。
(けん-えき)[檢疫](名) 傳染病の流行を豫防するため、船舶又は汽車の出入發着に際し、其乘客等に檢診又は消毒等を行ふこと。——ゐゐん[檢疫委員](名) 府縣知事又は警視總監の指揮監督の下に、檢疫の事務を扱(アツカ)ふ委員。

(げん-えき)[現役](名) 常備兵役の一種、現に所屬の部隊に編入せられて軍務に服役し、戰時には所屬の豫備・後備より先に出征を命ぜらるゝもの、兵卒・下士・准士官・將校おの〳〵其年限を異にす、兵卒の年限は、陸軍にては三年とし海軍は四年とす。
(けん-えつ)[檢閱](名) ㊀しらべけみすること。あらため。㊁陸軍又は海軍にて、實地に就き軍紀・敎育・勤務・保育・作戰準備其他諸般の軍事上の事項をしらべけみすること。
(げん-おん)[原音](名)【理】三味線など絃の中央を彈ずるとき、全絃を一區として振動して發する音を其絃の原音といふ、即ち發音體の發し得る最低の音、音叉の上部を胡弓の絃にてすりて出だす音をもてこれを測る。
(けん-か)[縣下](名) 縣の支配の下。
(けん-が)[懸河](名) はや瀨の河。
(けん-が)[犬牙](名) ㊀犬のきば。㊁くひちがひ。いりちがひ。
(げん-か)[絃歌](名) 鳴物を彈(ヒ)き歌を謠(ウタ)ふこと。
(げん-か)[現價](名) 現在のねだん。時のさうば。
(げん-か)[原價](名) しいれのねだん。もとね。元價。
(げん-か)[玄關](名)「げんくわん」の訛。
(げん-か)[減價](名) ねさげ。ねびき。
(けん-かい)[硯海](名) 硯の水のたゝふる所。すゞりのうみ。
(けん-かい)[見解](名) 意味のとりかた。意見のたてかた。みやう。みどころ。
(けん-かい)[狷介](名) みさをを守りて孤立せること。志堅くして他と和合せざること。「—不屈」。
(けん-がい)[懸崖](名) きりぎし。がけ。絕壁。——さっしゅ[懸崖撒手](名) 懸崖に手をはなして落つる義。勇猛心を奮ひ起し思ひきってなすことにたとへいふ。殊に、禪家などにて、疑團に鎖(ト)ざされ進退きはまる場合に於ける奮進にたとへいふ。
(げん-かい)[嚴戒](名) きびしくいましむること。げんぢゆうに用心すること。
(けん-かい)[限界](名) さかひ。さかひめ。かぎり。
(けん-かう)[軒昂](名) 奮ひおこること。高くあがること。「意氣—」。
(けん-かう)[堅硬](名) かたきこと。
(けん-かう)[權衡](名) ㊀秤(ハカリ)の錘(オモリ)と竿(サヲ)と。㊁つりあひ。
(けん-かう)[乾綱](名) 天子又は國家ののり。
(けん-かう)[健康](名) すこやか。ぢやうぶ。無病、達者。——しんだん[健康診斷](名) 無病なるか然らざるかの診斷。
(けん-がう)[健剛](名) 勢つよく活動してたゆまざること。すこやかにして屈せざること。
(けん-がう)[堅剛](名) かたきこと。こはきこと。
(げん-かう)[言行](名) 言(コト)と行(オコナヒ)と。——いっち[言行一致](名) 言と行と相應じて、自分の行にあらはし得ざる事柄は放言せざること。
(げん-かう)[原稿](名) したがき。草稿。——し[原稿紙](名) 原稿をかくための用紙。——れう[原稿料](名) 述作したる原稿の代價。
(げん-かう)[現行](名) 現に行ふこと。又、現に行はるゝこと。——はふ[現行法](名) 現に行はれて効力を有する法律。——はふき[現行法規](名) 前條に同じ。——はん[現行犯](名)【法】現に行ひ又は現に行ひ終りたる際に發覺せる犯罪、犯人として一人若しくは數人に追呼せらるゝもの、兇器贓物等を携帶し又は身體被服に顯著なる犯罪の痕跡ありて、犯罪者と思料すべきもの、家宅內の犯罪檢證のため又は犯罪人と思料すべきものを逮捕するため、戶主より其處分を求めたるもの等は、またこれに准ぜらるゝものとす。
(けん-かく)[堅確](名) かたくして動かざること。
(けん-かく)[懸隔](名) かけへだゝりたること。かけはなれたること。
(けん-かく)[研覈](名) くはしく取調ぶること。
(けん-かく)[劍客](名) けんぢゆつゝかひ。
(けん-がく)[兼學](名) 諸學をかね學ぶこと。
(けん-がく)[見學](名) 實物を見て智識を廣むること。
(けん-がく)[研學](名) 學問を修めみがくこと。
(げん-かく)[嚴格](名) おごそかにしてたゞしきこと。
(げん-かく)[減額](名) 數をへらすこと。たかを少なくすること。
(げん-かく)[幻覺](名)【心】何等の刺戟なくして刺戟あると同樣なる感覺を起すこと。
けん-かたばみ[劍酢醬](名) 紋所の名、かたばみの葉の間に、けんさきを容れたる模樣を描(エガ)きたるもの。
(けん-かふ)[堅甲](名) かたきよろひ。又、かたき甲殼。
(けん-かふ)[肩胛](名) かひがらぼね。かいがね。——こつ[肩胛骨](名) 前條に同じ。
(げん-かん)[阮咸](名) 晉の阮咸が造りたるより此の名ありといふ。㊀月琴の古稱。㊁八角の胴に、長き竿をつけたる淸樂の樂器。
(げん-かん)[嚴寒](名) きびしきさむさ。
(けん-き)[懸記](名)【佛】佛の豫言。
(けん-ぎ)[嫌疑](名) ㊀意義又は事情のまぎらはしきこと。㊁或事をなしたるならんと思はるゝこと。うたがひ。うたぐり。

(けん-ぎ)[權義](名) 權利と義務と。
(けん-ぎ)[建議](名) 一の國家機關に對し、若しくは私人又は團體などが上級の國家機關に對し、又は官府に對して、或希望を開陳すること。
(けん-ぎ)[權宜](名) 臨機のみはからひ。
(けん-ぎ)[讞議](名) 獄を定むる評定。
(げん-き)[元氣](名) ㊀身體を支持するいきほひ。精神の活動するちから。㊁すべて物事の根本となる氣力、「一國の—」。㊂すこやかなること。勢よきこと。
(げん-き)[衒氣](名) てらひたかぶる意氣。
(げん-き)[驗氣](名) 病氣の癒(イ)えて、治療又は服藥などのしるしあること。
(げん-き)[原器](名) 同種類のもの丶標準として、他をこれによらしむる器。「度量衡の—」。
(げん-ぎ)[原義](名) 根本の意義。
(げん-ぎ)[玄義](名) 幽玄微妙なる義理。
(けんぎ-あん)[建議案](名) 建議の案文又は議案。
(けん-きう)[研究](名) をきめみがきて深く其道にすゝむこと。あきらめ究むること。「學問の—」。
(けん-ぎう)[牽牛](名) ひこぼし。「—織女」。——せい[牽牛星](名) 前條に同じ。——くわ[牽牛花](名) [植]「あさがほ」の一名。
(けんぎ-しや)[嫌疑者](名) うたがひのかゝれる人。
(げん-きふ)[玄芨](名) [植]「さねかづら」の一名。
(げん-きふ)[減給](名) 月給又は給與の額を減ずること。
(けん-きやう)[牽強](名) 理にあはぬを強(シ)ひて理にあふやうにいひ紛(マギ)らはすこと。こじつけ。
(げん-きやう)[現況](名) 現在のありさま。
(げん-ぎやう)[現形](名) ㊀形を現はすこと、げぎやう。㊁現在のかたち。

(げん-きやく)[減却](名) へること。又、へらすこと。
(けん-きよ)[檢擧](名) 犯罪・犯則等の形跡をとりしらべ又は其證據を收集すること。
(げん-きよ)[懸魚](名) 「けぎよ」に同じ。
(げん-きよ)[言語](名) 「げんご」に同じ。
(けん-ぎよう)[噞喁](名) ㊀魚の口を水上にあらはすこと。あぎとふこと。㊁口を上方に向くること。
(げん-きよう)[元兇](名) わるいもの丶かしら。最もすぐれたるわるもの。
(けん-きよく)[蹐跼](名) 體を曲げちゞむること。
(けん-きん)[獻金](名) 金を朝廷又は官府に獻上すること。又、其金。
(けん-きん)[兼勤](名) 二つ以上の職をかねてつとむること。かねやく。けんむ。
(けん-きん)[獻芹](名) (芹を獻上する義、左傳に出づ)君王に忠義を盡すことの謙稱。「—の誠」。
(げん-きん)[嚴禁](名) 嚴重にさしとむること。
(げん-きん)[現金](名) ㊀證書・手形又は債權若しくは目錄などに對して、交換の媒介物たる金錢の稱。㊁實際に差出す金錢、即座に拂ふ代金。㊂かけうりをせぬこと。即座に金錢の授受をなすこと。㊃目前の利益。㊄其意に應ぜざれば怒り、其意に應ずれば直ちに喜ぶこと。——きやく[現金客](名) 現金にてものを買ひくる丶客。——しゆぎ[現金主義](名) 目前の利益又は當座の勘定のみに基きて萬事を處理すること。——すゐたふちやう[現金出納帳](名) 「きんせんすゐたふちやう」(金錢出納帳)に同じ。——てもとありだか[現金手許有高](名) 簿記にて、手許(テモ)に現存する現金の員數、即ち、現金の收入の高と支出の高との差。——とりひき[現金取引](名) 取引を現金にてなすこと。

げんきん-とりたて[現金取立](名) ㊀現金を取立つること。㊁現金取立郵便の略言。——いうびん[現金取立郵便](名) 送附する郵便物に對する現金取立を、郵便局に委託する手續、委託せんとする者は、委託書及金額取立の證券を郵便局に差出し其受領書を請取り、該委託を受けたる郵便局は、これを取立郵便局に送附し、取立郵便局より現金取立の通知ありたるときは、差出人は其通知書と先に受けたる受領書と取立金送達料とを、委託郵便局に差出して取立金の交附を受く。
(けん-ぐ)[賢愚](名) 賢と愚と。馬鹿と利口と。
(げん-く)[言句](名) ことば。もんく。
(げん-く)[原句](名) もとの句。
(けん-くわ)[堅果](名) [植]堅硬なる果實の稱、例へば栗又はかしの類の果實これなり。
(けん-くわ)[喧嘩](名) ㊀さわがしきこと。かまびすしきこと。㊁あらそひ。いさかひ。たゝかひ。さうどう。(諍鬪)。——かひ[喧嘩買](名) よく他人といさかひを起すこと。又、他人のいさかひなどに立ちいりて、これを引受くること。——どし[喧嘩腰](名) けんくわを起さんとの意氣ぐみ。
(げん-くわ)[玄關](名) げんくわん。
(げん-くわ)[嚴科](名) きびしき罰。きびしきつみ。
(げん-くわ)[現化](名) 神佛などが世の中に體をあらはし出ること。
(けん-くわい)[縣會](名) 縣の議決機關、縣會議員を以てこれを組織し、縣の歲入出豫算及決算報告、法律命令に定むるもの丶外の使用料・手數料・縣稅及夫役、現品の賦課徵收、不動產・積立金穀・財產及營造物、歲入出豫算外の權利義務其他法律命令に

定めたる權限事項等に關して議決するものとす、通常毎年一回開設せられ、縣知事これを召集す。——ぎゐん[縣會議員](名) 縣會を組織する議員、縣內の市町村公民にして市町村議員の選擧權を有し、且其縣內に於て一年以來直接國稅三圓以上を納むるものは、これが選擧權を有し、同上の資格にて直接國稅年額拾圓以上を納むるものは、これが被選擧權を有す、人口七十萬未滿の縣は三十人を定員とし、七十萬以上百萬未滿は五萬を加ふる毎に一人を增し、百萬以上は七萬を加ふる毎に一人を增す。
(げん-ぐわい)[言外](名) ことばにのべざる所。ことばのほか。「—の意味」。
(けんくわ-しよくぶつ)[顯花植物](名) [植]花と稱する生殖機關を有し、果實を結び種子を生ずる高等植物の總稱。
(けん-くわん)[兼官](名) 本官の他に兼ぬる官職。かけづかさ。けんむ。
(けん-くわん)[縣官](名) ㊀縣の行政事務を扱(アツカ)ふ吏員。㊁「けんちやう」に同じ。
(けん-くわん)[權官](名) 權力多き官職。又、其官職にゐる人。
(げん-くわん)[玄關](名) ㊀[佛]玄妙なる道にすゝみ入る端緒。㊁禪寺の客殿に入る門。㊂普通の家にある正面の入口。——をはる 玄關のさまのみを立派にすること、即ち外觀をかざるにいふ。
(けん-くん)[賢君](名) かしこききみ。
(けん-ぐん)[懸軍](名) 後方の聯絡なく、遠く進入する軍隊。
(げん-くん)[嚴訓](名) きびしきいましめ。おごそかなるをしへ。
(げん-くん)[元勳](名) ㊀國家に盡くしたる大功。又、其大功ある人。㊁特に、國家に大功ありて君王のおぼえいとめでたき老年者。

(げん-くん)[嚴君](名) ちゝぎみ。
(げん-げ)[碎米菜](名) [植]「れんげさう」の一名。
(けん-けい)[建溪](名) 茶の異稱。
(けん-けい)[賢兄](代) 同輩などに對して用ふる敬稱。
(げん-けい)[現形](名) ㊀形をあらはすこと ㊁現在のかたち。今の形態。
(げん-けい)[減刑](名) 刑罰を減じて輕くすること、次條(二)を見よ。
(げん-けい)[減輕](名) ㊀へらしてかろくすること。㊁[法]刑罰の減輕、法律上のもの五つありて裁判上のもの一つあり、前者は宥恕減輕・自首減輕・未遂犯減輕・從犯減輕・特別減輕にして、後者は酌量減輕なり。
(げん-けい)[嚴刑](名) きびしき刑罰。おもきつみ。
(げん-けい)[現計](名) ㊀現在のもの丶計算。㊁現在に出納(スヰタフ)したる金錢の計算。
(げん-けい)[原形](名) ㊀もとのかたち。以前の狀態。㊁原始のかたち。進化なきほどの狀態。——しつ[原形質](名) 細胞の最も主要なる部分にして、其生活力を主宰するもの、卵白に似たる半流動體の物質より成り、內部に透明なる顆粒あり、其中心に核を有す。
(けん-げう)[檢校](名) ㊀高野山などにて一寺の法事を檢閱する職。㊁昔時、盲人の官名の最上のもの。
(けん-げう)[顯教](名) [佛]釋迦牟尼が、機に應じ物に接して明かに遍く衆生に說きしめしたる敎法の稱。特に、天台宗・淨土宗などの稱。密敎の對。
(けん-げき)[劍戟](名) ㊀つるぎとほこと。㊁轉じて、兵器又は戰爭。
(げん-げつ)[弦月](名) 上弦又は下弦の月。ゆみはりづき。
(けん-げふ)[兼業](名) 本業の他にするわざ。

(けん-げふ)[建業](名) 事業のもとゐをたてまうくること。
(げん-げふ)[現業](名) 實際のわざ。實地のしごと。
(けん-けん)[蹇蹇](名、副) ㊀おそきさま又はにぶきさまにいふ語。㊁なやむさま又はまがるさまにいふ語。㊂すなほにしてたゞしきさまにいふ語。㊃おごりたかぶるさまにいふ語。
(けん-けん)[拳拳](名、副) ㊀さゝげたもつさまにいふ語。㊁うやうやしきさま又はねんごろなるさまにいふ語。「—服膺す」。
(けん-けん)[涓涓](名、副) 水などの流るゝさまにいふ語。
(けん-けん)[件件](名) かどかど。まなぐ。「由。
(けん-げん)[權原](名) [法]權利を取得したる原由。
(けん-げん)[權限](名) [法](い)大權又は法律に依りて委任若しくは附與せられたる物事を處理する能力又は職務の範圍。(ろ)法律の規定により、他人の機關となりて或事務を處理する能力又は事務の範圍。「代理人の—」。——さいばんしよ[權限裁判所](名) 權限爭議を裁判する裁判所。——さうぎ[權限爭議](名) [法]二個の官府間に、其權限につき意見解釋を異にすること、同一事件を互に自己の權限に屬すと主張するときは積極的權限爭議といひ、互に自己の權限に屬せずと主張するときは消極的權限爭議といふ。
(けん-げん)[建言](名) 官府などに對して、自分の意見を申立つること。——しよ[建言書](名) 建言の旨をしたゝめたる文書。
(げん-げん)[嚴顏](名) きびしきとがめ、げんぢゆうのえかりつけ。
(げん-げん)[顯現](名) あきらかにあらはるゝこと。又、あらはししめすこと。「神の—」。

(げん-げん)[衒言](名) 自慢のことば。てらふことば。

(けん-こ)[眷顧](名) なさけをかくること。めぐむこと。かへりみ。ひいき。(愛顧)。

(けん-ご)[堅固](名) ㊀たしかにして動かざること。「道心―なり」。㊁すこやか。達者。健全。㊂破れがたきこと。拔けがたきこと。「―の城郭」。(堅牢)。

(けん-ご)[險語](名) むづかしきことば。最もするどき語。「―鬼膽を破る」。

(げん-こ)[拳固](名) ㊀にぎりこぶし。げんこつ。㊁[變]助又は車夫などの仲間にて、五圓・五錢・五拾錢等の五の數を冠したる金錢の隠語。

(げん-ご)[原語](名) ㊀寫し又は譯し若しくは改めなどしたることばのもとのことば。㊁外國語。

(げん-ご)[言語](名) 人類の思想を表はす聲音の結合。ことば。ことのは。――がく[言語學](名) 言語の根本・沿革又は規則に關して研究する科學。

(けん-こう)[獻貢](名) ㊀みつぎものを奉ること。㊁ものをそなへさゝぐること。

(げん-こう)[元后](名) きみ。君主。

(けん-こう-し)[懸鉤子](名) 【植】「きいちご」の一名。

(けん-こく)[建國](名) 國家の基礎をたつること。國を建つること。「―の三傑」。(肇基)。

(げん-こく)[現石](名) 田地の貢收中より領主に收むる石高の稱。くさだかの對。

(げん-こく)[嚴酷](名) 過度にきびしきこと。殘忍なること。

(げん-こく)[原告](名) 【法】民事・刑事又は行政訴訟に於て、訴訟を提起して裁判を請求せる當事者。又、特に民事の第一審にて、訴訟を提起し裁判を請求せる當事者。――にん[原告人](名) 原告なる人。訴を起しゝ方の人。被告人の對。

(げん-こつ)[拳骨](名) げんこ。にぎりこぶし。

げんごらう-ぶな[源五郎鮒](名) 【動】ふなの變種。近江國琵琶湖に生ず。大さ一二尺許、頭小くして、色白く金色を帶び、味美なり。

げんごらう-むし[源五郎蟲](名) 【動】鞘翅類中龍蝨科に屬する蟲。我國に産する最大なる龍蝨なり。黑褐色にして少しく綠色の光澤を帶び、鞘翅に少しく短毛あり。後肢に一爪を有す。池沼に生息し小魚を捕食す。成蟲後は夜間空中を飛翔す。

(けん-こん)[乾坤](名) ㊀方角の名。いぬゐとひつじさること。㊁天地。陰陽。――いってき[乾坤一擲](名) 自家の全滅を賭けて事を行ふをいふ語。

(げん-こん)[現今](名) いまのとき。まのあたり。たうぎ。(目今、當今)。

(けん-さ)[檢査](名) たゞし見ること。とり調らべ。あらため。

(げん-ざ)[驗者](名) 加持祈禱などする人。「―もとむるに」。

(けん-さい)[縣債](名) 地方債の一、縣といふ地方自治體が縣會の議決を經て起す公債。

(けん-さい)[賢妻](名) かしこきつま。

(けん-さい)[賢宰](名) かしこき宰相。

(けん-さい)[賢才](名) かしこき才智。又、其才智ある人。

(けん-ざい)[健在](名) 無事にくらしてゐること。

(げん-さい)[幻妻](名) ㊀人の妻をのゝしりていふ語(京阪地方の言)。㊁よたか。ぢごく。(街妻)。

(けん-ざい)[顯在](名) あらはれてあること。

(げん-ざい)[原罪=Original sin](名) 「アダム」「イブ」の墮落の結果として、其子孫たる人類は、生れながらにして罪惡ありといふこと。

(げん-ざい)[現在](名) ㊀まのあたり。目前。㊁【哲】時間上の三區別の一、過去と未來との境界。すこしの延長もなく時間といふ線の一點に過ぎざるもの。いま。

㊂【佛】其人の現に生を此世に受けていきながらふる間。げんぜ。㊃【文法】現に行はるゝ動作を表はすもの。㊄虛僞又は夢幻にあらざること。實際。㊅其場にありあはすること。「―の糧食」。――ち[現在地](名) 其物若しくは其人の現に存在しゐる土地。――ゐん[現在員](名) 現在其處にゐる人數。

(げん-さいばん)[原裁判](名) 【法】當の裁判の前の裁判。控訴の裁判にては第一審の裁判をいひ、上告にては控訴の裁判をいふ。

(けん-さう)[萱草](名) 【植】「わすれぐさ」に同じ。

(けん-さう)[險相](名) するどき顏つき。すごみのある人相。

(けん-さう)[喧噪](名) かまびすしきこと。さわがしきこと。

(けん-ざう)[建造](名) たてつくること。かまへこしらふること。――ぶつ[建造物](名) 建造したるもの、即ち家屋・倉庫などの稱。

(げん-さう)[現想](名) 目擊したる物事に關聯して起るかんがへ。

(げん-さう)[現象](名) 「げんしやう」に同じ。

(げん-ざう)[現像](名) ㊀あらはれたる形像。又、形像をあらはすこと。㊁寫眞機械にかけて玻璃板にとりたる物體の映像を、現像液を注加して現はすこと。――えき[現像液](名) 寫眞にて玻璃板にとりたる映像を現出せしむるために用ふる一種の液。(寫眞術の條參照)。

けん-さき[劍先](名) ㊀つるぎのさき。きっさき。㊁とがりたるものゝさき。ほさき。㊂破軍星(建先、斗柄)。――ぶね[劍先船](名) さきの尖(トガ)りたる船。

(けん-さく)[建策](名) はかりごとをたつること。

(げん-さく)[絃索](名) 琴又は三味線などのいと。

(けん-さ-くわん)[檢査官](名) 或事項の檢査をなす官吏。

(けん-ざけ)[拳酒](名) 拳(ケン)の勝負によりて飲む酒。

(けん-さつ)[賢察](名) 人の察することの敬語。おさっし。

(けん-さつ)[檢察](名) ㊀あらべみること。とりあらべること。㊁【法】犯罪犯則等の形跡を搜査し、證憑を收集すること。――きよく[檢察局](名) 檢察官が事務を行ふ所、臺灣の覆審法院及地方法院に附置せられ、臺灣總督に直屬す。――くわん[檢察官](名) ㊀檢察の事務にあたる官職又は官吏。㊁臺灣の覆審法院及地方法院の檢察局にある官職、司法警察又は刑事の訴追裁判の執行等の事務にあたり、當該法院所管の民事訴訟につき國を代表す。――くわんちやう[檢察官長](名) 臺灣の覆審法院及地方法院の檢察局の長、檢察局の事務の指揮監督をなすもの。

(けん-さやく)[檢査役](名) ㊀けんさするやくめ。又、其人。㊁相撲(スマフ)の四本柱の所に坐して、勝負の檢査をなすもの。

(けん-さん)[研鑽](名) 物事の道理をきはめさぐること。けんきう。

(けん-ざを)[間竿](名) 土地の間(ケン)數をはかる竿。

(けん-ざん)[險山](名) けはしきやま。

(けん-ざん)[建盞](名) 天目の一種、支那の建安の産、形のやゝ違ひたるを胡盞(ウサン)といふ。(茶人の語)。

(けん-ざん)[乾山](名) 「けんざんやき」の略言。――やき[乾山燒](名) 元祿年間、京都嵯峨の人、緒方乾山(光琳の弟)の創製にかゝる陶器、らくやきに似たるもの。

(けん-ざん)[獻殘](名) 獻上ののこりもの。

(けん-さん)[檢算](名) 締高の再しらべ。

(けん-さんじくわい)[縣參事會](名) 縣といふ地方自治體の議決機關、參事會員を以てこれを組織し知事を議長とす。縣會の委任事項、縣會の議決範圍内に於ける財產及營造物の管理、縣費支辨の工事執行の規定、縣に係る訴訟及和解、其他法律命令により其權限に屬する事項等の議決をなし、臨時要急の事件にして縣會召集の暇なき場合に、縣會に代はりてこれを議決し、縣會に提出する議案につき、知事に對して意見を述ぶることを得。――ゐん[縣參事會員](名) 縣參事會を組織するもの、縣の知事・高等官及名譽職參事會員六名なり、名譽職參事會員は縣會議員中よりこれを互選す。

(げん-ざん)[見參](名) ㊀面會又は拜謁などの敬語。㊁格鬪又は果合(ハタシアヒ)などにいふ敬語。

(けん-し)[檢使](名) 事實の見屆をなす使者。

(けん-し)[檢屍](名) 變死などの屍の檢査。

(けん-し)[犬齒](名) きば。

(けん-し)[繭絲](名) ㊀まゆの絲。㊁租稅又は財貨の稱。「以て保障となさんか、以て―となさんか」。

(けん-し)[劍士](名) けんじゆつつかひ。劍客。

(けん-じ)[檢字](名) 漢字の字書にて、偏傍の疑難なる漢字の所屬を知らするために、總畫によりて索引し得るやうに漢字を排置したるもの。

(けん-じ)[謙辭](名) 謙遜していふことば。

(けん-じ)[健兒](名) ㊀すこやかなる男。いさましきをのこ。㊁古昔の兵士。こんでい。

(けん-じ)[劍璽](名) 草薙劍と八尺瓊勾玉(ヤサカニノマガタマ)と。

(けん-じ)[檢事](名) 通常裁判所に置かれたる司法行政官、刑事の公訴を提起し法律の適用を請求し刑罰の執行を監督し、又、公益の代表者として其職權に屬する事務を行ひ、若しまた民事に關しても必要なりと認むるときは、通知を求め意見を述ぶることを得、裁判所に對し獨立して事務を行ふ。

(げん-し)[元子](名) ㊀皇太子の稱。㊁次條に同じ。

(げん-し)[原子=Atom](名) ㊀【化】如何なる化學的作用を施すとも、最早分つべからずと假定したる物質の極微なるもの、分子は原子數個より成る。㊁すべて物事組成のもとゝなる單一不可分にして獨立自存なるものゝ稱。もと。ねもと。

(げん-し)[嚴師](名) きびしき先生、師を尙(トウト)びていふ稱。

(げん-し)[原始](名) ㊀もと。はじめ。(元始)。㊁未だ進化をなさゞること。

(げん-し)[元巳](名) 三月三日の稱。上巳。

(げん-し)[幻師](名) 魔法つかひ。

(げん-じ)[言辭](名) ことば。ことばつかひ。(言詞)。

(げん-じ)[現時](名) 現今の時。

(けん-しう)[獻酬](名) 盃のやりとり。

(げん-しう)[減收](名) 收入の減(ヘ)ること。

げんじ-うち[源氏打](名) 錢の小札を、一枚を下に一枚を上に、又一枚を下に一枚を上に、順々にくひあはせたること。又、其打方の錢。

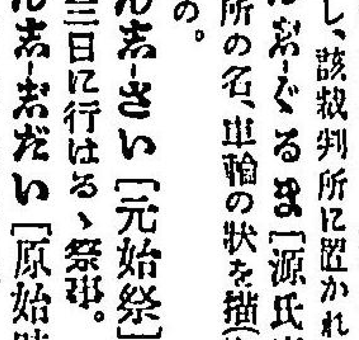
(げん-しか)[原子價](名) 【化】元素又は基が水素と化合し又は水素と置換する割合、酸素の一原子は水素二原子と化合するを以て二價元素にして、窒素の一原子は水素三原子と化合するを以て三價元素なり、又、水酸基は水素一原子と化合するを以て一價なり。

(けん-しき)[見識](名) ㊀かんがへ。みこみ。意見。㊁主義又は節操。㊂きぐらゐ。――ば・る(ら・り・る・れ・れ)

[見識張](自、ら四) 見識を張る。からいばりす。

(げんじ-きよく [檢事局](名) 通常裁判所に附屬し、該裁判所に置かれたる檢事の事務を扱ふ所。

げんじ-ぐるま [源氏車](名) 紋所の名、車輪の狀を描(ヱガ)きたるもの。



[げんじぐるま]

(げんし-さい [元始祭](名) 一月三日に行はるゝ祭事。

(げんし-じだい [原始時代](名) 「げんじんじだい」(原人時代)に同じ。

(げんじ-せい [檢事正](名) 地方裁判所の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、該地方裁判所管內の檢事を監督するもの。

(げんし-せつ [原子說=Atomism](名) ㈠[化] 物質は原子より成り、又、異なる元素の原子は一定の割合を以て化合すといふ說。㈡[哲] 單一不可分にして獨立自存せる多數のものを以て宇宙の原理となす說、これを物質的なりとするを物質的原子說といひ、精神的なりとするを精神的原子說といふ。

(げんじ-そうちやう [檢事總長](名) 大審院の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、すべての下級檢事を監督するもの。

(げんじ-たくぼく [源氏啄木](名) 啄木絲をもて鎧の沢を緘甲に巫を矢筈の貝の口に組むこと。

(げんじ-ちやう [檢事長](名) 控訴院の檢事局の長、其檢事局の事務の指揮監督を掌り、該控訴院管內の下級檢事を監督するもの。

(げんしつ [原質](名) もとの性質。

(げんじつ [乘日](名) ㈠朔日より以前の日。㈡二三日かゝるべき物事を一日になすこと。

(げんじつ [言質](名) やくそくのことば。あようこのことば。ことばじち。

(げんじつ [現實](名) ㈠現在にあらはれてあること。㈡實際の事實又は狀態。理想の對。——かい [現實界](名) [哲] 實際の事實又は狀態のあらはれてある世界、即ち經驗の範圍。——てき [現實的](名) 現存するさま又は實際なるさまにいふ。——は [現實派=Realism](名) 實際の事實又は狀態を立場とし目的として、說を立て又は事を行ふもの。理想派の對。

げんじ-な [源氏名](名) 遊女などが營業上本名の外に附したる稱、若紫・紅梅・梅枝の類。

(げんし-ねつ [原子熱](名) [化] 元素の原子量と其比熱との相乘積、即ち一原子を溫むるに要する熱量の割合、元素に就きて殆ど皆な一定の値を有す。

げんじ-ぶし [源氏節](名) 一種の俗曲、歌祭文に似たるもの。

げんじ-まめ [源氏豆](名) 一種の菓子、豆に砂糖をかけ紅色又は白色にしたるもの。ほうらいまめ。

(げんじや [賢者](名) かしこき人。けんじん。

(げんじや [縣社](名) 縣より幣を奉る資格の神社、鄕社の上位なるもの。

(げんじやう [勸賞](名) はげましほむること。又、手柄(テガ)の褒美(ハウビ)。「(ツ)ること。」

(げんじやう [懸賞](名) 賞をかけて物を募ること。

(げんじやう [兼掌](名) かねつかさどること。

(げんじやう [肩章](名) かたにつくるしるし。

(げんじやう [憲章](名) のり。おきて。

(げんじやう [見性](名) [佛] 諸種の妄惑を照見して、自性の無性なるを覺悟すること、即ち、大悟徹底すること。

(げんじやう [肩牆](名) 野戰にて、砲手若しくは砲車の掩護のために、土壤にて構築したるもの。

(げんじやう [堅城](名) 防禦堅き城壘。

(げんじやう [謙讓](名) へりくだりゆづること。さしでがましからざること。

(げんじやう [獻上](名) ㈠さしあぐること。たてまつること。㈡「げんじやうはかた」の略言。

(げんじやう [劵狀](名) 手形。又、證文。

(げんじやう [現象](名) ㈠あらはれたるさま。見ゆるかたち。㈡[哲] 吾人に感知せらるゝものゝ形象。もの、吾人の主觀に映ずる相。本體の對。——かい [現象界](名) [哲] 感知の世界。形而下の世界。經驗の世界。

(げんじやう [現狀](名) 現在のありさま。

(げんじやう [原狀](名) もとのありさま。以前のかたち。——くわいふく [原狀回復](名) ㈠もとの狀態にとりもどすこと。或狀態の生ぜざりし以前の如くになすこと。㈡[法] (い)民事訴訟にて、天災其他避くべからざる障害のために、不變期間を懈怠したるために受けたる權利の損害を除却すること、其申立は障害の止みたる日より、十四日の期間內にこれをなすことを要するものとす。(ろ)民事訴訟にて、確定判決の基本たる事實に不法の點ある場合に、其判決の取消を求むること。

(げんじやう-かうい [玄奘縞衣](名)[動] 「貓の異稱。」

(げんじやう-しつ [顯晶質](名) [鑛] 明瞭なる結晶をなす岩石の質。

(げんじやう-じやうブツ [見性成佛](名) [佛] 見性して一切諸法の覺者となること。

げんじやう-の-さうじ [賢聖障子](名) 內裏の南殿の襖(フスマ)の稱、東西各四間、これに支那の三代より唐までの聖賢、名士の肖像を描きたり。

げんじやう-はかた [獻上博多](名) 博多織の上品なるもの、帶などに用ふ。

(げんじやう-らく [還城樂](名) 舞樂の曲名、見蛇樂の轉訛にして、西域の人好みて蛇を食ふに擬せし舞。

[げんじやうらく]

(げんじやう-ろん [現象論=Phenomenalism](名) [哲] 吾人の智識は現象に限られ、本體其物の眞相を知る能はずといふ說。又、智識に現はれたる現象は即ち本體にして、智識を離れたる本體は存在せずといふ說。

(げんじやく [劍尺](名) ものさしの一種、かねざしの一尺二寸を八段とせるもの、佛像・刀劍・門戶等をはかるに用ふ。

げん-ジヤリ [劍舍利](名) [鑛] 劍先の形になりたる石英の稱。又、かぶとすゐしやう。

(げんじゆ [卷鬚](名) [植] 葉の變形して絲狀をなし、他物に纏(マト)ひて莖の支持をなすもの。「えんどうの—」。

(げんじゆ [黔首](名) たみぐさ。人民。

(げんじゆ [元首](名) 萬民のかしら。君主。

(げんじゆ [玄珠](名) おくふかきまことの道理。

(げんじゆう [拳銃](名) 「ピストル」に同じ。

(げんじゆう [元戎](名) ㈠國內の軍隊をすべつかさどるもの。元帥。㈡大いなる兵車。「一十乘」。

(げんじゆく [減縮](名) へらしてすくなくすること。へらしちゞむること。又、へりてすくなくなること。ちゞまりへること。

(げんじゆく [嚴肅](名) ㈠おごそかなること。きびしきこと。㈡げんぢゆうに自らつゝしみ守ること。克己すること。慾情を抑ふること。——しゆぎ [嚴肅主義=Rigorism](名) [倫] 諸種の慾情を壓伏し諸種の快樂を拒絕し、理性の命令に從ひ己に克(カ)ち行を制するとを以て道德の標準となす倫理說。

(げんじゆつ [劍術](名) 擊劍。劍法。——つかひ [劍術使](名) 劍術をつかふ人。又、劍術に巧なる人。

(げんじゆつ [幻術](名) 魔法。妖術。又、てづま。

(げんじゆん [險峻](名) 山の高くしてけはしきこと。嶮岨。(嶮峻)。

(げんじよ [賢所](名) 「かしこどころ」に同じ。

(げんじよ [劵書](名) てがた。又、しようしよ。

(げんじよ [卷舒](名) ㈠まくとのぶること。㈡自己の才能を世にあらはすとあらはさゞること。

(げんじよ [原書](名) ㈠もとの文書。原本。㈡外國の文字を以て記してある文書。飜譯書の對。

(げんじよ [嚴暑](名) きびしき暑さ。(酷暑)。

(げんじよう [健勝](名) すこやか。丈夫。健康。

(げんじよう [謙稱](名) 謙遜のとなへ。へりくだりていふ名目。

(げんじよう [健訟](名) すこしの物事にても訴訟を提起すること。

(げんじよう [檢證](名) ㈠物事をとりしらべて正確にすること。㈡[法] 判事が實地に臨みて證據物件をとりしらべて正確にすること。「一調書」。

(げんじよく [顯職](名) 貴き官職。高官。

(げんじよく [減食](名) 食物の量をへすこと。

(げんじよく [現職](名) 現任の官職。

(げんし-りやう [原子量](名) [化] 或元素の原子と水素の原子との重さの比、酸素の原子量は一五・八八なり。然れども近來に至り、酸素の原子量を一六・〇とし、これに對する他の元素の原子の重量を其原子量と稱せり、然るときは水素の原子量は一・〇〇八なり。

げんじ-ゑあはせ [源氏繪合](名) 源氏物語五十四帖の趣を描(ヱガ)きたる繪を用ひてなす繪合。

(げんしん [賢臣](名) かしこき臣。

(げんしん [檢診](名) 取調のために診察すること。

(げんしん [檢眞](名) [法] 民事訴訟にて、私署證書の眞否をとりしらぶること。

(げんしん [權臣](名) 權力ある臣下。

(げんしん [懸針](名) 筆法の一、竪(タテ)の畫の下端尖りて恰も針を懸るが如きさまにいふ。垂露の對。

(げんしん [獻身](名) 自分の利害を顧みずして力を盡くすこと。

(げんじん [賢人](名) かしこき人、特に聖人に次ぐ德のある人。

(げんしん [現身](名) ㈠現在の身。うつしみ。㈡[佛] 「おうじん」(應身)に同じ。——ブツ [現身佛](名) [佛] 「おうじんブツ」(應身佛)に同じ。

(げんじん-じだい [原人時代](名) 人類いまだ蒙昧にして、事を記す文字なく生を營ふ生業なく、たゞ木實などを食ひて棲息せし太古の時代。

(げんじん-しやくわい [原人社會](名) 原人時代の人類社會。

(げんしん-どう [原振動](名) [理] 發音體が原音を發するときの振動。

げん-す [鈐](他、さ變) ㈠鏁をおろす。㈡綱理を綜す。

げん-す [檢](他、さ變) とりしらぶ。あらたむ。

げん-す [獻](他、さ變) たてまつる。さしあぐ。

げん-ず [減](自、さ變) 少なくなる。へる。

げん・ず[減](他、さ變) ㊀へらす。へす。はぶく。㊁減算をなす。ひく。
げん・ず[現](自、さ變) あらはる。
げん・ず[現](他、さ變) あらはす。
(けん・すう)[間數](名) 間(ケ)の數。
(けん・すう)[軒數](名) 家の數。戸數。
(けん・すう)[件數](名) 事件のかず。
(げん・すう)[現數](名) 現在の數量。
(げん・すけ)(名) のろま。へた。又、かけだしもの等をのゝしりていふ語。(大阪地方の俚語)。
けん・ずまふ[拳相撲](名) 一種の遊戯、拳をもて勝負を爭ふこと。
(けん・すゐ)[建水](名) みづこぼし。
(げん・すゐ)[減水](名) 水かさの減ること。
(げん・すゐ)[元帥](名) ㊀軍勢の總大將。(大將軍)。㊁元帥府に列する陸海軍大將に賜はる稱號、時により勅を受けて陸海軍の檢閲を行ふ。——ふ[元帥府](名) 天皇陛下の軍事上の最高顧問府。
(げんすゐ・せき)[玄水石](名) 磁石(ジシャク)の異稱。
(げん・ぜ)[現世](名) [佛]過去の諸行生起せる此世、人の現に生を受けてある世。現在の世。
(けん・せい)[權勢](名) いきほひ。ゐせい。權力。權威。
(けん・せい)[賢聖](名) 賢人と聖人と。又、知識道徳の最もすぐれたる人。
(けん・せい)[建制](名) たてつくること。まうけさだむること。
(けん・せい)[牽制](名) ㊀ひきとゞめて、自由を束縛すること。㊁自由の行動のさまたげをなすこと。——うんどう[牽制運動](名) ㊀敵軍をして或方面に向ひて、防禦又は攻撃をなし得ざるやうに仕向をなす軍隊の行動。㊁すべて他のものゝ運動の妨害をなすための行動。

(けん・せい)[憲政](名) 憲法に依りて行ふ政治。立憲政治。——たう[憲政黨](名) 明治三十一年六月自由黨と進歩黨との合同して組織せし政黨の名。又、其同年九月の分裂後、舊自由黨員の標榜せし黨名。——ほんたう[憲政本黨](名) 憲政黨の分裂後、舊進歩黨員の標榜せる黨名。
(けん・ぜい)[縣稅](名) 縣內に住する者、縣內に三ヶ月以上滯在する者、縣內に於て土地家屋物件を所有し若しくは使用又は營業所を有する者に對して縣の賦課する租稅。
(げん・せい)[嚴制](名) きびしきおきて。げんぢゅうなるさだめ。
(げん・せい)[現世](名) いまのよ。げんだい。
(げん・せい)[芫菁](名) [動]「はんめう」に同じ。
(げん・せい)[嚴正](名) 嚴重に正しくすること。きびしくたゞしきこと。——ちゅうりつ[嚴正中立](名) きびしく局外中立の態度を守り、彼此の交戰國に對して何等の妨害又は援助をなさゞること。
(げんせい・せつ)[原生說](名) 地球上に於ける幾千萬の生物は、皆な共本源を一にすれど、進化發達を異にせしより、幾千萬年の間に漸々變遷して今日の狀態となりたりといふ說。
(げんせい・どうぶつ)[原生動物](名) 原形質より成る最下等動物。構造極めて簡短、概ね微小にして肉眼を以て見る能はず。「アミーバ」の類これなり。
(けん・せう)[顯證](名) 「けんしょう」の訛。
(けん・せう)[喧擾](名) さわがしきこと。そう〳〵しきこと。かまびすしきこと。
(げん・せう)[言笑](名) ことばつかひとわらひがほと。又、かたりつ笑ひつすること。「—自若」。
(げん・せう)[減少](名) ものゝすくなくなること。又、ものをすくなくすること。(減殺、減損、減省)。

(けん・せき)[譴責](名) ㊀とがめ責むること。とがめ。㊁官吏の懲戒の一、過去の失策をとがむること。
(けん・せき)[堅石](名) 質堅き石。
(げん・せき)[嚴責](名) きびしくせむること。
(げん・せき)[言責](名) ㊀嘗て證言せし責任。㊁物事に就きて是非を言ふべきせめあること。
(げん・せき)[原籍](名) 最もはじめの籍、本籍、寄留籍の對。——ち[原籍地](名) 其人の本籍ある土地。
(げん・せき)[玄石](名) 玄水石の略言。
(けん・せつ)[建設](名) たてまうくること。かまへつくること。
(げん・せつ)[言說](名) いひとくこと。いふこと。又、其主意。
(げん・せつ)[原說](名) もとの說。はじめの主意。
(げんぜ・てき)[現世的](形) 說く所の主旨の範圍が、おもに現世を限とし、現世を超越したる境に及ばざるさまにいふ。
(けん・せん)[健羨](名) いとうらやましきこと。
(けん・せん)[捲線](名) [理]絕緣線を螺旋狀に捲きたるもの。「コイル」。
(けん・ぜん)[健全](名) ㊀身體のすこやかなること。達者、丈夫。㊁常態を失せずして能く活動すること。總情に偏せずして精力すこやかなること。「—なる思想」。——がく[健全學](名) 身の養生の學問。衞生學。養生學。
(げん・ぜん)[泫然](名、副) 涙のはら〳〵と流るゝさまにいふ語。
(げん・ぜん)[儼然](名、副) おごそかなるさまに。
(げん・ぜん)[現然](名) まのあたり。現在。
(けん・そ)[險阻](名) けはしきこと。けはしき所。(嶮岨)。
(げん・そ)[元素](名) ㊀もと。ねもと。㊁[化]「Element」現今知られ居る方法にては、如何にす

とも二つ以上の物質に分つべからざる物質、即ち、酸素・水素・窒素・硫黃などの類。これを金屬元素・非金屬元素の二つに分つ。(原素)。
(げん・そ)[減租](名) 租稅の額をへすこと。
十けん・そう[顯證](名) 明かなること。
(けん・そく)[賢息](代) 他人の息子の敬稱。
(けん・そく)[牽束](名) ㊀拘泥すること。㊁束縛すること。
(けん・そく)[檢束](名) ㊀取締りて自由になさしめざること。㊁つゝしませて放縱ならしめざること。
(けん・ぞく)[眷屬](名) うから。やから。いちもん。
(げん・そく)[原則](名) 數多の現象に共通なる法則。又、普通の場合に適用せらるゝ法則。
(げん・ぞく)[還俗](名) 僧をやめて、俗にかへること。
(げんそく・どう)[減速動](名) [理]時間の經過するに從ひ、運動の路程の次第に減退し行くこと。
(けん・そん)[謙遜](名) へりくだること。卑下すること。ひかへめにすること。(謙退)。
(げん・そん)[減損](名) へること。又、へすこと。
(げん・そん)[玄孫](名) ひこの子。やしやご。
(げん・そん)[現存](名) 現在してあること。現にながらへてあること。「—の人物」。
(けん・だ)[倦惰](名) うみおこたること。あきてなまくること。
(けん・たい)[兼帶](名) 二つ以上のものゝ用を一つのものが兼ぬること。かけもち。
(けん・たい)[獻替](名) 萬事につけて主君によしあしを申上ぐること。
(けん・たい)[倦怠](名) うみおこたること。
(けん・たい)[謙退](名) へりくだること。
(けん・たい)[賢臺](代) 同輩若しくは同輩以上の敬稱。
(けん・だい)[見臺](名) (書見臺の略)書物を載せて見る具、高さ適應なる二本若しくは一本の支柱をたて、上に斜に板を載するもの、其斜なる板の上に書を載す。(書架、懶架)。

[いだんけ]

(けん・だい)[兼題](名) (兼日の題の意)歌合の當日までに、各歌などを詠(ヨ)みて出さしめんがために、數日前に、其題を出しおくこと。
(けん・だい)[憲臺](名) 政事の可否又は官吏の正邪に就て君主に言上する職。
(げん・たい)[原態](名) もとのありさま。
(げん・たい)[現態](名) いまのありさま。
(げん・たい)[減退](名) へりさりぞくこと。すくなくなること。
(げん・だい)[現代](名) いまのよ。たうだい。げんこん。方今。——しさう[現代思想](名) 現代に於て、最も勢力ある人生觀又は社會觀の傾向。
(けん・たう)[見當](名) ㊀めあて。方向。㊁鐵砲の照尺、(前照星)。——ちがひ[見當違](名) ㊀めあてちがひ。㊁やぶにらみ。
(けん・たう)[喧鬧](名) さわがしきこと。かまびすしきこと。
(けん・だう)[權道](名) 手段は正經ならざれども、目的は正經に合すること。はかりごと。
(けん・だう)[萱堂](名) 母の稱。
(けん・だう)[縣道](名) 道路の種別の一、各縣を接續し若しくは當該縣廳より縣下の首要地に達する等の道路の稱。
(けん・だう)[劍道](名) けんじゅつ。げきけん。
——しゃ[劍道者](名) けんじゅつつかひ。
(げん・たう)[現當](名) [佛]現世と將來と。
(けん・たう・し)[遣唐使](名) 古昔、支那の唐朝の頃に日本より遣はしゝ使者。
(げん・たつ)[嚴達](名) きびしきたっし。
(けん・たん)[健啖](名) たっしやにくふこと。多量に

(けん・だん)[檢斷](名) 理非の裁判。——しょく[檢斷職](名) 鎌倉時代の、檢斷の事にあたりし職名。
(げん・たん)[元旦](名) 「ぐわんたん」に同じ。
(げん・たん)[嚴探](名) きびしくさぐること。
(げん・だん)[嚴談](名) 手ひどく談判すること。
(けん・ち)[檢地](名) 地を測量すること。(方量)。
(けん・ち)[軒輊](名) ㊀あげさげ。あがりさがり。㊁たかひく。優劣。
(けん・ち)[縣治](名) ㊀縣の行政。㊁縣廳の所在地。
(けん・ち)[縣地](名) 縣下。地方。
(けん・ち)[硯池](名) すゞりのうみ。
(けん・ち)[見地](名) みるところ。かんがふるところ。
(けん・ちう)[繭紬](名) 支那より輸入する一種のつむぎ、柞蠶の絲にて織りたるもの。(絹紬、絹綢)。
ケン・チエン[卷纖](名) 「ケンチャン」に同じ。
(けん・ちく)[建築](名) 家屋・倉庫などをたてつくること。——がく[建築學](名) 建築に要用なる事項を學理的に研究する科學。——ぶつ[建築物](名) 建築したるもの、即ち家屋・倉庫等の稱。たてもの。
(けん・ちじ)[縣知事](名) 縣の知事。
けん・ちゃ[獻茶](名) 抹茶をたて、神佛に供(ソナ)ふること。
(けん・ちゃう)[縣廳](名) 縣知事が其權限に關する事務を處理する所。縣の治所。
(げん・ちゃう)[原腸](名) 卵の胚囊の腔、生育して消化器の大部分となる。
(げん・ぢゃう)[現場](名) 現に其物事のありし場所。げんば。
ケン・チャン[卷纖](名) ㊀一種の料理、黑豆のもやしを油にて煎(イ)りたるもの、醬油と鹽とをもて食ふ。支那より傳來せり。㊁一種の料理、野菜など

を油もて煮、それに醬油又は味噌などを入れて汁にしたるもの。——じる[卷繊汁](名) 前條(二)に同じ。

(げん-ぢゅう)[嚴重](名) いかめしきと。きびしきと。

(げん-ぢゅう)[現住](名) ㊀寺の現在の住職。㊁現在の住所。

(けん-ちょ)[顯著](名) いちじるしきと。あきらかにあらはるゝと。

(けん-ぢょ)[賢女](名) 賢(カシコ)き女。(賢婦)。

(げん-ちょ)[原著](名) もとの著作。飜譯などの對。——しゃ[原著者](名) 原書を著作したるもの。もとの著作者。

ケン-チン[卷繊](名)「ケンチャン」に同じ。

けんつき-でっぱう[劍付鐵砲](名) 小銃の先端に劍をつけたるもの。

(けん-つく)[劍突](名) あらあらしき小言。

(けん-てい)[獻呈](名) たてまつると。けんじやう。

(けん-てい)[懸蹄](名)「ぐうていゐ」(偶蹄類)の條を見よ。

(けん-てい)[獻替](名)「けんたい」に同じ。

(けん-てい)[檢定](名) 檢査してよしあしを定むこと。——しけん[檢定試驗](名) ㊀けんていのために行ふ試驗。㊁中學校・師範學校・高等女學校の教員又は小學校の教員たる學力資格の有無を檢定するために行ふ試驗。前者は文部大臣これを行ひ、後者は府縣知事これを行ふ。及第者には教員免許狀を下附す。——れう[檢定料](名) 檢定をこふための手數料。

(げん-てい)[賢弟](一) 年下の男子に對して用ふる敬稱。

(げん-てい)[限定](名) かぎりさだむると。——しょうにん[限定承認](名)[法] 相續の承認の一、相續人が相續により得たる財産の限度に於てのみ、被相續人の債務及遺贈を辨濟すべきことを留保すると。

(げん-てう)[玄鳥](名)[動]「つばくらめ」の漢名。

(けん-てき)[涓滴](名) ㊀したゝり。しづく。㊁少しばかりの物事にいふ語。「—の益」。

(けん-てつ)[賢哲](名) 知識廣く事理に明かなる人。かしこき人。すぐれたる人。

(けん-てん)[圈點](名) 文章の妙所又は要所の傍側に、目じるしのために付くる小さき環の點。

(けん-でん)[喧傳](名) かまびすしくいひつたふると。多人數のつたへいふと。

(けん-でん)[硯田](名) 文士などの生活のたよりとする文を草し字を書くに用ふる硯を、農夫の生活のたよりとして耕作する田にたとへいふ語。

(げん-てん)[原點](名) ㊀運動の始まりたる位置。延長の起りたる箇所。㊁[數] 一定點より引きたる直線が、此定點の周圍に回轉するとき、直線に對する定點の稱。

(けんでん-き)[驗電器](名)[理] 物體の發電を驗するに用ふる器械、卽ち、金箔驗電器の類。

(けん-ど)[權度](名) はかりとものさしと。又、のり、きそく。

(げん-ど)[限度](名) かぎり。ほど。

(けん-とう)[健鬪](名) 屈せずにたゝかふと。

(げん-とう)[玄冬](名) 冬の異稱。

(げん-とう)[舷燈](名) ふなばたにとぼす燈火。

(げん-とう)[減等](名) 等級を減(ヘ)らし下すと。

(げん-とう)[嚴冬](名) 寒さきびしき冬。

(げん-とう)[幻燈](名) ㊀幻燈器械を用ひ暗室内に於て、小さき繪畫の擴大なる像を障壁又は白幕などに映ぜしむるもの。うつしゑ。ふげゑ。㊁「げんとうきかい」に同じ。——きかい[幻燈器械](名) 幻燈の器械、內部を黑く塗りたる箱に伸縮自在なる圓筒を附け、其先端と箱に接續せる所とに各凸「レンズ」を嵌入して、其間に繪畫の板を入れ、箱の後壁に反射鏡を附くる裝置なり、今其焦點に「ランプ」を置けば、光は圓筒と箱との接續せる處にある「レンズ」のために集束せられ強く繪畫の板を照し、筒先の「レンズ」により擴大なる倒象を現出せしむ。

(げん-どう)[言動](名) ことばとふるまひと。いふ所と行ふ所と。

(げん-どう)[原動](名) 運動をおこすもと。活動のもと。——き[原動機](名)[理] 位置の「エネルギー」又は其他の「エネルギー」を利用して、機械仕事をなさしむる器械、卽ち蒸氣機關・電動機等これなり。——りょく[原動力](名) ㊀[理] 物體又は器械をして運動を起さしむる「エネルギー」の稱、水力・風力・電力等これなり。㊁すべて物事の活動をなさしむる勢力の稱。

(けん-とく)[賢德](名) 賢明なる德。「—有り」。

(けん-とく)[謙德](名) 物事に謙遜する道德。

(けん-とく)[乾德](名) 天子の御德。

(けん-とく)[見德](名) とみくじ。——うり[見德賣](名) とみくじを賣ると。又、其人。

けんど-ちょうらい[捲土重來](名) 一旦敗れたるものが、更に全力を擧げて進擊し來ると。

けん-どん(名) 上下又は左右に溝ありて、そこに蓋又は戶をはめ得るやうにつくりたるもの。「—の蓋」。

(けん-どん)[絹緞](名) 太く織りたる繭紬(ケンチウ)。

(けん-どん)[倹飩](名)「けんどんそば」の略言。——そば[倹飩蕎麥](名) そばきりの一種。

(けん-どん)[慳貪](名) ㊀極めてやぶさかなると。食慾の心の深きと、物を所望すると。㊁邪見。苛酷。

——もの[慳貪者](名) 慳貪なる人。

(けん-ない)[縣內](名) 縣の管轄內。

(けん-ない)[權內](名) 權利の範圍內。

(けん-ない)[圈內](名) 範圍の內。「勢力—」。

(けん-なふ)[獻納](名) ものをけんじをさむると。

(げん-なま)[現生](名) 未だ人の手指つかざるなまなましき紙幣。轉じて、現金の異稱。

(けん-なん)[劍難](名) 刃物の災難に逢ふと。殺傷の難にかゝると。「—の相」。

(けん-なん)[險難](名) けはしきと。(險阻)。

げん-に[現](副) げんざいに。まのあたりに。(目下)。

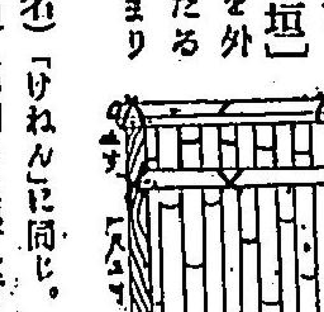
げん-に[嚴](副) きびしく。げんぢゅうに。

(けん-にん)[兼任](名) 二個以上の職務に兼ねて任ぜらるゝと。「—の相」。

(けん-にん)[堅忍](名) よく堪へ忍ぶと。

(げん-にん)[現任](名) 現在其職にあると。又、其人。

けんにん-じ[建仁寺](名) 建仁寺垣の略言。——がき[建仁寺垣](名) 竹を割りて皮を外に平たく並べて結びたる垣、京都の建仁寺に始まりしもの、けんにんじ。



[けんにんじ]

(けん-ねん)[懸念](名)「けねん」に同じ。

(けん-のう)[權能](名) 權利を主張し行使し得る能力。

げん-のう[玄翁](名)(殺生石をくだきたりといふ玄翁法師の名に出づ)石をわるかなづち、鐵にて造り頭太し。

げん-の-しょうこ[牻牛兒](名)[植] 牻牛兒科に屬する草、葉は掌狀に分裂し、花は整齊にして淡紅色なり、雄蘂は通常皆な葯を具す、莖葉ともに藥用に供せらる。(牻牛兒)。

(けん-のん)[險難](名)(險難の轉訛) あやふきと。(危險)。——しゃう[險難性](名) 物事をけんのんがる性質。——がる(自、ら四) あやぶむ。危く思ふ。

(けん-ば)[犬馬](名) ㊀いぬとうまと。㊁自分に關する物事の謙稱。「—の勢」「—の齡」。

(げん-ば)[玄蕃](名) ㊀「げんばれう」の略言。㊁玄蕃寮に屬する官名。

(げん-ば)[現場](名) ㊀其物事のありし場所。㊁めのまへ。實地。㊂火災の時などに、水を運ぶ大いなる桶。

(けん-ぱい)[獻盃](名) 盃を人に差すとの敬語。

(けん-ばう)[健忘](名) ㊀記憶力の極めて薄きと。㊁病氣によりてよく物事をわするゝと。きぬけ。——しゃう[健忘症](名) 健忘の病氣。

(げん-ばう)[言貌](名) ことばと様子と。

(けん-ぱく)[建白](名) ㊀上に對して自己の意見を陳述すると。建言。㊁建白書の略言。——しょ[建白書](名) 建白の主意をかきしたゝめたる書面。

(けん-ぱく)[堅白](名) ㊀支那戰國時代の公孫龍が說きし一種の論法、其例として、質堅く色白き石ありとせんに、目にて見たるときは、其白きを見て其堅きを知らず、其堅きを知るは手のこれに觸るゝによる、されど其時は其堅きを知るのみ、故に堅と白とは異にして、「堅石と白石とは同一のものにあらず」と說けり。㊁轉じて、普通人の肯定するとを否定し否定するとを肯定すると。——どうい[堅白同異](名) 堅は白にあらずと說き、異なるを同じとし、同じきを異なりとすると。

(けん-ぱつ)[圈發](名) 漢字の四聲を示す符號、多くは方形の四隅に圈點を記するものを用ひ、□を平聲□を上聲□を去聲□を入聲とす。(點發)。

(けん-ぱつ)[遣發](名) 人をつかはしやると。

(げん-ぱつ)[嚴罰](名) 嚴(キビ)しき罰。

(けん-ぱふ)[憲法](名) ㊀おきて。のり。㊁[法] 國權の本體及作用を規定する大法、卽ち、統治主權の主體・客體及機關・作用の大則を規定するもの。

(けん-ぱふ)[拳法](名) 拳(コブシ)をもて人と格鬪する技術。

(けん-ぱふ)[劍法](名) 劍術。

(げん-ぱふ)[嚴法](名) きびしきおきて。きびしきばつ。

(げん-ぱふ)[減法](名)[數] 或數より或數をひき去りて其差を計算すると。

けんぱふ-ぞめ[憲法染](名) 一種の染め方、黑茶色に小紋を染むるもの、京都の人吉岡憲法といふもの始めて染め出したりといふ。

††げんば-れう[玄蕃寮](名) 古昔、治部省の所管に屬し、外國に對する事及僧尼の度牒・佛寺の刑政の事等を掌りしもの。

(けん-ばん)[檢番](名) 藝妓屋のとりしまりする所。(見番)。

(げん-ぱん)[原版](名) もとの印刷版。

(けん-び)[兼備](名) 兼ね備ふると。あはせたもつと。

(けん-ぴ)[拳匪](名) 支那に於ける頑冥なる一種の匪徒、大いに拳法を尊信す。

(げん-び)[玄微](名) おくふかく極めて微妙なると。

(げん-び)[原微](名) 發達の度低くして極めて微小なるもの。「—滴蟲」「—植物」。

(げん-ぴ)[原被](名) 訴訟の原告と被告と。(兩造)。——さうはう[原被雙方](名) 原告と被告との雙方。——りやうざう[原被兩造](名) 前條に同じ。

けん-ぺき[痃癖](名)「けんぺき」に同じ。

(けん-び-きやう)[顯微鏡] = Microscope]

(名) 細微なる物體を廓大して見る具、一個の凸「レンズ」は即ち顯微鏡なれど、普通顯微鏡と稱するは、圓筒の一端に凸「レンズ」あり、これを對物「レンズ」といふ、これに嵌入する圓筒ありて、其端に又凸「レンズ」を備ふ、これを接眼「レンズ」といふ、對物「レンズ」は焦點距離の甚だ短きものなり、但し其球面收差を減少せしめんがため、其形の甚だ小さきものを用ふ、對物「レンズ」の前に物體を置き、第二の圓筒を適宜に出入して接眼「レンズ」より見るなり。むしめがね。

けん-びし[劍菱](名) ㊀紋所の名、菱形の四隅を、劍さきの形に尖(トガ)らせたるさまを描(ヱガ)きたるもの。㊁攝津國伊丹(イタミ)産の上酒、樽(タル)にけんびしの紋をゑがけるより此名なり。

(けん-ぴつ)[健筆](名) 達者に字をかくこと。又、達者に文を作ること。

(げん-ぴつ)[減筆](名) ふでかずを少なくすること。

(けん-びやう)[硯屛](名) 硯の邊に立てゝ塵埃などを防ぐ具、小さきついたての如く造りしもの。

(けん-ぴよう)[堅氷](名) あつきこほり。かたきこほり。あつごほり。

‡けん-び-ゐ-し[檢非違使](名)「けびゐし」に同じ。

(げん-ぴん)[現品](名) 實際のしなもの。

(げん-ぴん)[原品](名) もとのしなもの。

(けん-ぷ)[絹布](名) 絹おりもの。

(けん-ぷ)[賢婦](名) かしこき女。

(けん-ぶ)[劍舞](名) 刀を持ち詩歌を吟ずるにつれてなす舞。

(げん-ぶ)[玄武](名) 四神の一、北方のもの〻稱、龜の象を圖とす。――がん[玄武岩](名) 概ね暗黑色にして緻密なる火山岩、斜長石・輝石・磁鐵鑛及橄欖石などより成る、往々柱狀節理をなして多くの石柱を立てたる壯觀を呈す、但馬國の玄武洞の如きこれなり、石材として種々の用に供せらる。

(げん-ぷく)[元服](名) ㊀昔時、男子成人して服を改め、髮を理し、冠を加ふるときに行ひし儀式、此時幼名を廢して烏帽子名を付く、公家衆の元服は、髮を短くして紫の緒にて卷き、眉を剃り墨にて高眉を付け、齒を黑む。うひかうぶり。(首服、始冠)。㊁昔時、嫁したる女の眉を剃り齒を染め髮を丸髷などに結びしこと。「一姿の女」。

(げん-ぷく)[袪服](名) はれのきもの。麗しき衣。

(けん-ぶつ)[見物](名) ㊀みせものを觀ること。ものみ。いうらん。「京都―」。(縱覽)。㊁「けんぶつにん」の略言。――にん[見物人](名) けんぶつする人の稱。みて。(看人、觀客)。

(げん-ぶつ)[現物](名) ㊀現在の品。正物。㊁現金

(げん-ぶつ)[元物](名) 果實を生ずる本、例へば利息に對する元金の如し。

(けん-ぶん)[檢分](名) 立合ひてとりしらぶること。(見分、檢閲)。

(けん-ぶん)[見聞](名) 見ると聞くと。みきゝ。けんもん。

(げん-ぶん)[原文](名) 臆寫又は飜譯若しくは改作などしたる文章のもとの文章。

(げん-ぶん)[言文](名) 言語と文章と。――いっち[言文一致](名) 文字を以て表はす文章の綴字・語法等を、口舌に擧げていふ言語と同一にすること。

(けん-ぺい)[兼幷](名) 合はせ取ること。

(けん-ぺい)[憲兵](名) 陸軍大臣(京畿にては警視總監)の管轄の下に屬し、行政及司法警察の執行を掌る特種の兵、將校下士及上等兵より成り、各地に配置せらる。――しれいくわん[憲兵司令官](名) 憲兵司令部の長官、陸軍少將若しくは大佐を以てこれに充つ、各地の憲兵を統轄し司令部の事務を總理す。――しれいぶ[憲兵司令部](名) 全國の憲兵事務を總轄する所。

(けん-ぺい)[權柄](名) ゐけん。けんりよく。いきほひ。――がま-し しく・しき・しけれ(形、二) 權力を誇(ホコ)るやうに見ゆ。――づく[權柄付](名) 權柄にまかせて事をなすこと。――づら[權柄面](名) けんぺいがましき顏つき。

(げん-ぺい)[現兵](名) 其場にありあはす兵士。

(げん-ぺい)[源平](名) (源氏と平氏との義にて、其旗色の源氏は白く平氏は赤きより出づ)白と紅と。――もも[源平桃](名) [植]桃の變種、花は重瓣にして、紅白咲(サ)きわけのもの。

(けん-ぺき)[痃癖](名) ㊀頸より肩及脇にかけて筋の時々ひきつること。㊁按摩すること。あんま。

(けん-べつ)[軒別](名、副) 毎戶。いへごと。

(けん-べん)[軒冕](名) ㊀貴人のかうむる高き冠。㊁轉じて、高き官位。

(けん-ぺん)[權變](名) 變に應じ事を處置すること。

(けん-ぽ)[畎畝](名) ㊀田のみぞとあぜと。㊁轉じて、賤しき農民の地位、「―の中より起る」。

(けん-ぽ)[健步](名) たっしやにあるくこと。

(げん-ぽ)[原簿](名) ㊀臆寫又は改作したるもとのちやうめん。㊁簿記の主要帳簿の一、仕譯の口座を設けて、貸借の記入をなすもの。もとちやう。

(けん-ぽく)[硯北](名) (硯の北側の義)おそば。おひざもと。(手紙などに用ふ)。「采君の―」。

(けん-ぼう)[權謀](名) 臨機の策略。又、正直にあらざる策略。(權略)。――か[權謀家](名) よく權謀を行ふ人。(策士)。

(けん-ぽう)[劍鋒](名) 劍のほさき。

(げん-ぽう)[減俸](名) 俸給の額を減ずること。

(げん-ぽう)[元謀](名) はかりごとの主唱者。

けん-ぽ-なし[玄圃梨](名) [植]鼠李科に屬する木、樹幹長大に生長す、花は小形にして帶紅色なり、葉は廣卵形にして三大脈あり、花梗は花後に肥大し食用とすべく、木材は種々の用に供せらる。(枳椇)。

(けん-ぽん)[絹本](名) きぬ地。「一のかけ軸」。

(けん-ぽん)[獻本](名) 書籍を進呈すること。又其書籍。

(けん-ぽん)[見本](名) みほん。

(げん-ぽん)[元本](名)「ぐわんぽん」に同じ。

(げん-ぽん)[原本](名) ㊀もと。ねもと。㊁もとの書物。もとの文書。げんえよ。

(けん-ま)[研磨](名) ㊀すりみがくこと。㊁けんきう。れんえふ。

(けん-ま)[肩摩](名) 肩と肩と相觸るゝこと。――こくげき[肩摩轂擊](名) 人馬車輛の往復雜遝すること。(轂擊の條を見よ)。

(げん-まい)[玄米](名) 籾(モミ)を去りて未だ搗(ツ)かぬ米。くろごめ。

(げん-まい)[現米](名) ㊀實際にあるこめ。其場にありあはするこめ。㊁祿として宛てがふ米。

(けん-まく)[劍幕](名) 物凄(スゴ)きかほのさま。あらくしき容貌。

けん-まはし リシマ[拳回](名) 昔時、拳相撲(ケンズマウ)せし時、手にかけたる甲がけの類。

(げん-まん)(名) (いつはれば拳固を萬回受くるの意) いつはりなきこと。まこと。(東京の小兒の俚語)。

けん-み[檢見](名) (毛見の轉訛) ㊀實際に就きて稻作を檢(シラ)べ、年貢(ネング)又は小作米等の高を定むること。又、其人。㊁檢査すること。又、其役。

(けん-みつ)[顯密](名) ㊀あきらかなるとひそかなると。㊁[佛]顯教と密教と。

(げん-みつ)[嚴密](名) 嚴重にしてこまかき物事をもらさぬこと。

(けん-む)[兼務](名) かねつとむること。又、其つとめ。(兼勤)。

(げん-む)[幻夢](名) ㊀ゆめまぼろし。㊁はかなき形跡。

(けん-めい)[縣命](名) いのちがけ。又、力一ぱい。

(けん-めい)[賢命](名) 尊長などの命令の敬語。

(けん-めい)[賢明](名) 性質正しくして事理に明かなること。かしこきこと。又、其人。

(げん-めい)[嚴命](名) きびしき命令。きびしきおほせ。

(げん-めい)[嚴明](名) 號令などのきびしくして明かなること。

(げん-めい)[言明](名) 言語にあらはしのぶること。

(げん-めう)[玄妙](名) 幽玄にして精妙なること。おくふかくしてたへなること。又、其道理又は技藝。

(げん-めん)[硯面](名) 硯の墨をする處。

(けん-めん)[券面](名) ㊀證券の數額などの記してあるかた。㊁券面額の略言。――がく[券面額](名) 券面に記してある數額。「公債の―」。――だか[券面高](名) 前條に同じ。

(げん-めん)[減免](名) 等を減じてゆるすこと。

(げん-もく)[玄默](名) ものしづかにしてみだりに言說せざること。おくゆかしく默してゐること。

(げん-もく)[眩目](名) まばゆきこと。

‡けん-もつ[監物](名) 古昔、中務省に屬して、出納(スヰタフ)を監察し管鑰を掌りしもの。

(けん-も-ほろろ)(名) (けん及ほろゝは雉子の鳴き聲)取り付く術(スベ)もなきこと。「一の挨拶」。

(けん-もん)[權門](名) ㊀官位高く權力多き家。㊁轉じて、まひなひ又はいんもつ等の稱にいふ。

(けん-もん)[見聞](名) 見ると聞くと。みきゝ。けんぶん。

(げん-もん)[諺文](名)「オンムン」に同じ。

(げん-や)[原野](名) のはら。はら。

(けん-やく)[儉約](名) ㊀物事を放縱又は散漫にせざること。つゞまやか。(節省)。㊁費用をつゞまやかにすること。浪費せぬこと。(節儉)。㊂費用のいらぬこと。

(けん-やく)[兼役](名) 役目をかねもつこと。又、かねもつ役目。けんむ。

(けん-やく)[鍵鑰](名) ㊀ぢやうまへ。かぎ。㊁內に入りこむ要所のまもり。

(げん-ゆ)[原由](名) もとづく所。もと。

(けん-よ)[肩輿](名) 澀籠(カゴ)。(轎)。

(けん-よ)[權輿](名) (支那の衡(ハカリ)をつくるは權より始め車をつくるは輿よりはじむとの義に出づ)はじめ。はじまり。おこり。

(けん-らう)[堅牢](名) 堅固にして丈夫なること。かたきこと。

(げん-らう)[元老](名) ㊀官位年齡又は德望のすぐれて高き功臣。㊁轉じて、其部內にて年久しくつとめ居て功勞あるもの〻稱。――くわいぎ[元老會議](名) 國家の元老が國事に關し、會合してなす評議。

(げんらう-ゐん)[元老院](名) ㊀明治八年四月に設立せられ同廿三年三月に廢止せられたる官府、元老院議官を以てこれを組織し、議長及幹事を置き、法律案の討議又は御諮詢の奉答等の權限ありしもの。㊁共和國などにて上院の稱。――ぎくわん[元老院議官](名) 我國の元老院を組織せし議員、時の官位高く名望厚き功臣より採用せられたり。――ぎゐん[元老院議員](名) 元老院を組織する議員。

(けんり)[權利=Right](名) ㊀[法]法律の創定保護により人の享受する利益。㊁物事をなし得る資格、自由に物事を處分[illegible]得る分限。──かうゐ[權利行爲](名)[法]權利を行使する行爲。又、法律行爲。──きようつう[權利共通](名)[法]共同訴訟にて、數人間に共同の權利ある場合の稱。──くわいふく[權利回復](名)[法]他人のために權利を侵害せられたるものが、裁判所の判決によりて其權利を回復すること。──くわんけい[權利關係](名)[法]權利者が法の力によりて義務者の意思を制限し、義務者が法の力に服從して權利者の意思に從ふ關係。──こうそく[權利拘束](名)[法]訴訟の提起によりて生ずる訴訟上の効力、民事にては訴狀の送達によりて始まり、其終了までは、其訴訟の原由を變更し若しくは妄に取下をなし又は更に他の裁判所にこれを訴ふることを得ざるものなり、刑事にては、檢事の公訴によりて始まり、其終了までは、特定の被告人がなせる特定の犯罪に限られ、又、檢事は妄に取下をなすことを得ざるものなり。──ざいち[權利質](名)[法]財產權を目的となす質權。──しや[權利者](名)義務者に對して權利を有するもの。又、債權者。──しゆたい[權利主體](名)[法]法律上權利を有する人格あるもの。

(げんり)[原理](名) ㊀[哲]說明若しくは判斷の根據となる道理。他の眞理の基となる根本の眞理。㊁[倫]正しき行爲の法則。人間動作の根本の規範。㊂すべて物事の基となり根本となり、其秩序發生を規定するもの。

(げんり)[玄理](名) おくふかき道理。

(けんりつ)[縣立](名) 縣の費用を以て設立維持せらるゝもの。

(げんりつ)[嚴律](名) きびしきおきて。きびしき刑罰。

(けんりやう)[賢良](名) 智明かにして德正しきこと。又、其人。

(げんりやう)[減量](名) かさの減(ヘ)ること。又、かさを減すこと。

(けんりやく)[權略](名) はかりごと。權謀。

(げんりゆうたう)[玄龍湯](名) 古昔の煎藥の名。

(けんりよ)[賢慮](名) 他人の考案の敬語。おかんがへ。

(けんりよく)[權力](名) 他人を強制し服從せしむる威力。──くわんけい[權力關係](名)[法]權力者が自己の意思によりて、服從者の意思を強制する關係。主權者と國民との關係の如きこれなり。──せつ[權力說](名)[倫]道德上の規定は權力を有するもの、命令に基くとし、命令を以て是非善惡の究極的根據となす一派の倫理說。──だんたい[權力團體](名)[法]統一ある人民の團體にして權力の主體たるもの。

(けんるゐ)[堅壘](名) 防禦又は要害の堅固なるとりで。攻めおとしがたきとりで。

(けんれい)[縣令](名) ㊀[法]縣知事が、官制上一般の委任若しくは法律命令の特別の委任による職權内に於て、其管轄區域内に發する行政命令。㊁明治十九年以前の縣知事の舊稱。

(げんれい)[黔黎](名) たみ。百姓。

(げんれい)[嚴厲](名) いときびしきこと。甚だおごそかなること。

(げんれい)[嚴令](名) きびしき命令。

(けんれう)[見料](名) 物を見たる損料又は報酬。

(げんれう)[原料](名) 製造のたねもの。

(けんれん)[眷戀](名) 戀着の念に繫(ツナ)がるゝこと。戀(コ)ひ慕(シタ)ふこと。(係戀)。

(けんれん)[牽連](名) つながりつゞくこと。かゝりつらなること。又、つなぎつゞくること。かけつらぬること。

(げんろ)[言路](名) 下民が官上に對して申出づべきすぢみち。「—を開く」。

(げんろん)[言論](名) 思想を言說によりて發表すること。いひ論ずること。のぶること。「—の自由」。

(げんわく)[幻惑](名) 目をまどはしくらますこと。

(げんわく)[眩惑](名) 見ておどろきまどふこと。

(けんわんちよくひつ)[懸腕直筆](名) 腕を宙にして物につけず、筆を直く持ちて字を書くこと。

(けんゐ)[權威](名) 權力の威勢。いきほひ。

(けんゐ)[健胃](名) 胃を健康にすること。──ざい[健胃劑](名) 健胃のために飲用する藥劑。

(けんをん)[暄溫](名) あたゝかきこと。

(けんをんき)[驗溫器](名) 寒暖計に同じ。

こ ご

こ 喉的破裂音K即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「オ」との綴音。

ご 「こ」の濁音、凡て「こ」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

廿こ[鉤](名) 卷きたる簾(スダレ)を掛け止むるかぎ。

こ[子](名) ㊀兩親の間に生れたる人。㊁動物の牝牡又は雌雄の間に生れたるもの。「犬の—」。「豚の—」。㊂本より分かれて、別に生(オ)ひたつもの。「竹の—」。㊃幼稚なる人。こども。㊄三位一體の第二の人格。

こ[粉](名) 物の細末。こな。「米の—」。

こ[蠱](名)[動]「かひこ」の異稱。

こ[海鼠](名)[動]「なまこ」に同じ。「くし—」。

こ[木](名) 木の轉。「—の葉」。(樹木)。「—」。「かは—」。

こ[籠](名) 竹にて編みたる器の總稱。かご。「ふせ—」。

こ[格](名) ㊀障子の骨。㊁梯子の段。㊂碁又は將棊の盤の縱橫の筋。

(こ)[弧](名) ㊀ゆみ。きのゆみ。「—を張り」。㊁[數]圓周又は他の曲線の一部分。

(こ)[股](名) ㊀また。またぐら。㊁[數]直角三角形の一邊、其三角形の第二の大角に對したる邊。

(こ)[戶](名) ㊀ではひりぐち。出入口。㊁とまへ。とびら。㊂いへ。いへかず。「—を窠じ」。㊃酒を飲む量。「—大にして酒の甘きを嫌ふ」。

(こ)[湖](名) 陸地の凹所に多く水の湛(タヽ)へたる處、みづうみ。

(こ)[古](名) もと。むかし。いにしへ。「—今」。

(こ)[賈](名) あきんど。「農—」。

(こ)[瞽](名) めくら。「—者」。

(こ)[鼓](名) つゞみ。たいこ。──をならしてせむ[鳴鼓攻] 其罪をかぞへ立てゝ攻擊す。

(こ)[姑](名) しうとめ。「よく—に事ふ」。

(こ)[孤](名) ㊀兩親のなきひとり子。みなしご。「—を養ふ」。(孤兒)。㊁援助なきこと。ひとりだち。

(こ)[故](名) ㊀もと。むかし。㊁ふるきこと。又、ふるき物事。「—を吐き新を納れ」。㊂えきたり。ためし。㊃ふるきちなみ。むかしなじみ。㊄こと。事件。「幽明の—を知る」。㊅ゆゑ。わけ。㊆死にしこと。

こ[是](代)「これ」に同じ。「—はいかに」。「—たび」。

こ—[小](接頭) ㊀或語に冠して、細小なる意を表はす語。「—形」。「—山」。[illegible]或語に冠して、値少なる意を表はす語。「—高し」。

こ—[濃](接頭) 或語に冠して、色の濃きさまを表はす語。「—紫」。

—こ[子](接尾) 婦人の名の下につくる語。「春—」。「政—」。

—こ[絢](接尾) 絓絲の絲綛(スヂ)を數ふるにいふ語。「一—」。「三—」。

—こ[處](接尾) ところ。ばしよ。「いづ—」。「ど—」。

(—こ)[箇](接尾) 物の數を數ふるにいふ語。「十—」。「百—」。「三—」。

(—こ)[戶](接尾) 家數をかぞふるにいふ語。「五十—」。

ご[碁](名) 碁盤の目に、黑白の碁石を並べ、圍み鬪はせて勝負を決するもの、地を廣く占めたるを勝とす。──をうつ 碁を行ふ。──をかこむ[圍碁] 前條に同じ。

ご[豆油](名) 大豆を水にひたし、石灰を加へて磑(ヒ)きたる液、油畫の繪具などに使用す。

(ご)[午](名) ㊀十二支の一。うま。㊁正午。「時已に—」。

(ご)[期](名) をり。とき。期限。「此の—に及びて」。

(ご)[伍](名) ㊀支那の古昔、相依り相保つものと定めし五戶の稱。㊁古昔、軍隊編制の最下級、五人を一組としたるもの。㊂くみ。なかま。㊃隊列。行列。

(ご)[後](名) のち。あと。「其—」。

(ご)[五](數) いつゝ。

廿ご[御](名) 御前の略言、婦人の尊稱。「伊勢の—」。

ご—[御](接頭) 或語に冠して、尊敬の意を表はす語。「—覽」。「—論」。

—ご[御](接尾) 目上の人の稱に添へて呼ぶ語。「母—」。「姉—」。

コークス[Coke](名)「がいたん」(骸炭)に同じ。

コーヒー[珈琲=Coffee](名) 珈琲樹の果實の核を焙燒して粉となしたるもの、これに砂糖を加へ熱湯に和して飮む。──のき[珈琲樹=Coffea arabica](名)[植]茜草科に屬する小喬木、熱帶地方に產す、葉は楕圓狀披針形にして對生す、花は白色にして香氣あり葉腋に生ず、果實は大いさ胡椒の如き漿果なり。

コールタール[Coal-tar](名) 石炭を蒸燒にする際に生ずる半流動體の物質、幾多の化合物を含有し「アニリン」又は石炭酸等を製する原料に供せられ、又「ブリキ」又は鐵材等に塗りて腐蝕を防ぐ料に供せらる。

コールマニー[Call money](名) 銀行が仲立業者などに低利にて貸す金錢、必用の時には何時にても返濟の請求をなすことを得るもの。

ゴア[臥亞](名)(「インド」の地 Goa より出づ)昔時、蘭人の創めて寫(モ)したる一種の織物。

(ごあく)[五惡](名)[佛]五つの惡事、即ち、殺生・偸盜・邪婬・妄語・飮酒の稱。──しゆ[五惡趣](名)[佛]「ごだう」(五趣)に同じ。

こあげ[小揚](名) 船に積みたる荷物を陸へ運びあぐること。又、其人。(桃脚夫)。──にんそく[小揚人足](名) 雇はれて小揚を業とする人足。

こあは[小粟](名)[植]粟の一名。

こあふひ[小葵](名) ㊀[植]「ぜにあふひ」の一名。(冬葵子、莃葵)。㊁一種の染模樣。

[こあふひ(二)]

こあみがさ[小編笠](名) 德川時代の初めに行はれしあみがさ、饅頭形にて腰高に編(ア)みたるもの、風車頁・鎗持奴など冠れり。

廿こい[凍](名) こゞゆること。

(こい)[古意](名) 古代のさま。いにしへのふり。

(こい)[故意](名) ㊀ことさらにたくらむこと。わざとなすこと。㊁ことさらに或行爲をなさんとする意思。

(こいう)[蠱誘](名) まどはし誘ふこと。

(こ-いう[固有](名) ❶もとより有ること。うまれつきて有ること。❷特別に所持して居ること。——めいし[固有名詞](名)【文法】其物に特有の名稱を表はす名詞。普通名詞の對。
(こ-いき[小意氣](名) 稍や意氣なること。
こい-げしやう[濃化粧](名) あつげしやう。
こ-いし[小石](名) 小さき石。いしくれ。(礫、磧)。
ご-いし[碁石](名) 碁を圍むに用ふる小さき扁圓の石、黑と白との二種あり。——け[碁石笥](名) 碁石を入れておく器。——まめ[碁石豆](名)【植】くろまめの一種、扁(ひら)く黑きもの。
こ-いたじき[小板敷](名) ❶禁中の殿上にある小板敷。❷はゞ狹き板敷。「一名。
こ-いたどり[小虎杖](名)【植】「いぬいたどり」の
こいち(名)【動】一種の魚、口長く鱗細し、體長大いなるは一尺許に達す。「一列の稱。
こ-いち[小一](名) 芝居の舞臺の直下の平土間の
こい-ちや[濃茶](名) ❶ひきちやの一種、分量を多くして濃に立てゝ飮むもの。❷濃(こ)き茶色。❸男女のあひだの極めて親密なること。「—の仲」。
{こ-いつ[此奴](代)「こやつ」の轉訛。(這奴)。
こ-いぬ[小犬](名) 犬の子。小さき犬。ちんころ。(小狗、狡狗)。
†こい-ふ・す[轉臥](自、さ四) ころげ臥す。
こ-いへ[小家](名) 小さき家。
コイル[Coil](名)「げんせん」(絃線)に同じ。
(ご-いん[五音](名) ❶音律にて、宮・商・角・徵・羽の五つの音の稱にして、これが高低を次第したる十二の調子を十二律といふ、宮を主とし起る。❷五十音圖の各行の五つの音の稱。「—相通の理」。
(こう[后](名) ❶きみ。❷きさき。

(こう[公](名) ❶邪曲なきこと。偏頗なきこと。❷ひろくおこなはるべきこと。一般。「これ心術の—患なり」。❸えこひいきなきこと。平等。❹ひとりの私有にあらざること。共同。❺かくさゞること。明白。「これを—言せよ」。❻官府又は官事。やくば。つとめ。「—より退く」。❼國家又は社會、世間又は衆人。「—に許す餘に死す」。❽爵長の敬稱。「某家—」。❾五等爵の第一。❿大臣の稱。「三—」。「菅原道眞—」。「の第二。
(こう[侯](名) ❶まと。射的。❷大小名。❸五等爵
(こう[候](名) 時候。氣候。
(こう[篌](名) クダラごと。
(こう[功](名) ❶わざ。ことゝ。事業。❷つとめ。やくめ。職務。❸いさを。はたらき。てがら。❹成就又は勝利。❺利益又は有用。❻武功により金鵄勳章を賜はる等級、一級より七級まであり、皆な規定の年金附與す。「—二級」。「—五級」。
(こう[紅](名) べに。くれなゐ。「—染」。
(こう[汞](名) 水銀。みづかね。
(こう[肱](名) ひぢ。「—を曲げて枕とす」。
(こう[貢](名) みつぎすること。みつぎもの。「—を獻ず」。
(こう[公](代) 敬意の對稱。「—零落々」。
(—こう[口](接尾) ❶人數を數ふるにいふ語。「一家三—」。❷道具を數ふるにいふ語。「太刀一—」。
{こう(名) 馳走(西國の方言)。
{こう(名) こまき(九州の方言)。
(こう-あん[苟安](名) ❶一時の安心。しばらくのあんど。「—を偸む」(偸安)。❷一寸のがれ。
(こう-あん[公案](名) ❶公事の案文。訴訟の目安。❷禪家にて、會下に參ずる徒に示して、研究推考せしむる問題。
(こう-あん[公安](名) 公共の安寧。——けいさつ[公安警察](名) 高等警察に同じ。

(こう-い[公移](名) 官府よりの廻狀。
(こう-い[厚意](名) 厚き志。ふかき情。
(こう-いう[公有](名) ❶公共團體の所有。「—財產」。「—地」。❷朝廷又は政府の所有。「じ。
(こう-いう[後遊](名)「こうくわい」(後悔)に同
(こう-いう[紅友](名) 酒の異稱。
(こう-いん[後胤](名) 後代の子孫。(後裔)。
(こう-いん[句引](名) かどはかすこと。かどはかし。
(こう-いん[拘引](名) ❶とらへひくこと。とらへひくこと。❷【法】豫審判事が、訊問のため人を強制して裁判所に出頭せしむること。——じやう[拘引狀](名)【法】豫審判事が人を拘引するために發する令狀、召喚狀を受けて出頭せざるものに發し、又は法律に定めたる場合に發す、四十八時間內は、其人の自由を停止することを得る効あるものとす。
(こう-いんすう[公因數](名)【數】二つ以上の數のいづれもが含有する因數。「衣服。
†こう-うら[紅裏](名) こうぞめの裏を付けたる
(こううん・ゐじゆ[江雲渭樹](名)(杜甫の詩に出づ)遠く思ひ思はるゝ親友の間柄にいふ語。
(こう-えい[後裔](名) 血統のすゑ。もそん。(後胤)。「く。
(こう-えき[鴻益](名) おほいなる利益。
(こう-えき[公役](名) おほやけのつとめ又はぶやく。
(こう-えき[公益](名) 社會公共の利益。——だんたい[公益團體](名) 社會公共の利益を圖ることを目的としたる團體。
(こう-えふ[紅葉](名) 秋季に變色して赤くなりたる木の葉、葉綠素が分解して遂に紅色となるによる、かへで・うるし・つた・かき等に多し。

(こう-えん[口演](名) 口づからのぶること。口上をいふこと。
(こう-えん[紅焰](名) ❶紅色をなすほのほ。❷【天】太陽の光球の周圍より高く上騰せる美麗なる紅色の瓦斯、日觸皆既の際これを見ることを得、又、分光器を用ふればこれを檢することを得。「(洪恩)。
(こう-おん[厚恩](名) ふかき恩。ふかきめぐみ。
(こう-おん[鴻恩](名) 大いなる恩惠。(大恩)。
(こう-か[後架](名) 禪家にて、便所の稱。かはや。
(こう-が[公衙](名) やくしよ。やくば。(官衙、官署)。
(こう-か[公暇](名) 一般に賜はる休暇。
(こう-が[姮娥](名) 月の異稱。
(こう-かい[公海](名)【法】何れの國の主權にも屬せず、各國の平等に使用航海の自由を有する海洋、地球上の海洋の最大部分はこれに屬す。領海の對。
(こう-かい[公廨](名) やくば。やくしよ。
(こう-かい[公開](名) 公衆の觀覽又は集會等を許すこと。おほやけにひらくこと。——じやう[公開狀](名) 或人にあてたる書狀を私に贈らずして、新聞雜誌などに掲載し公衆に示すもの。「ひ。
(こう-がい[後害](名) のちのさはり。のちのうれ
(こう-がい[口蓋](名)【動】口腔の上部の壁。
(こう-かう[公行](名) おほやけに行はるゝこと。
(こう-かう[功効](名) しるし。きゝめ。
(こう-かう[後項](名) ❶のちの條項。❷【數】甲の乙に對する比に於て、甲に對する乙の稱。
(こう-がう[口號](名) 口ずさみ。(口占)。「や。
†こう-かき[紺搔](名) こんや。こうや。そめもの
(こう-かく[口角](名) くちわき。くちさき。——あわをとばす[口角飛沫] 氣激し勢はげしく言論するさまにいふ。

(こう-がく[後學](名) ❶後進の學者。(後生)。❷後來の智見。「—のためお聞かせ下されたし」。
(こう-がく[鴻學](名) 學問に深く通じたる人。
(こう-がく[工學](名) 工業に關する事項を學理的に研究する科學。
(こう-がくかう[公學校](名) 臺灣の小學程度の學校。「合同。
(こう-がふ[苟合](名) 暫時の一致。姑息なる
(こう-がふ[媾合](名) 交合。房事。
(こう-かん[槓杆](名) ❶【理】一定點のまはりに廻轉し得る丈夫なる棒、其或點に力を加へて他の或點に於ける抵抗を支ふるもの、其抵抗を支ふる點を支點といひ、力を加ふる點を力點といひ、抵抗の及ぶ點を重點といふ、支點が重點と力點との間なるを第一種とし、重點が支點と力點との間なるを第二種とし、力點が支點と重點との間なるを第三種とす、土方の石などを動かすに用ふる所謂梃子(テコ)は第一種に、藁を細切するに用ふる押切などは第二種に、裁縫用の鋏は第三種に屬す。❷梃子(テコ)の特稱。
(こう-がん[紅顏](名) 年わかき男の血色美(うるは)しき顏。紅色の顏。「は、鐵面皮。
(こう-がん[厚顏](名) あつかましきこと。あつか
(こう-き[後騎](名) あとより續く騎兵。「こと。
(こう-き[弘毅](名) 度量ひろくして意志つよき
(こう-き[興起](名) ❶奮ひ興ること。勢盛んになること。「國勢—す」。❷總じてはげみたつこと。「感奮—す」。
(こう-き[口器](名) 口部にありて食物攝取の機能をなすもの、脣齒舌若しくは嘴等をいふ。
(こう-き[口氣](名) ものいひぶり。
(こう-ぎ[厚誼](名) あつきよしみ。あつきなさけ。
(こう-ぎ[公儀](名) ❶朝廷又は政府。おほやけ。❷維新前に、將軍家の稱。「(街談)。
(こう-ぎ[巷議](名) ちまたの議論。世のうはさ。
(こう-ぎ[公議](名) ❶世上一般の議論。(輿論)。❷公平なる議論。たゞしきいけん。——しよ[公議所](名) 維新後、政府の諮詢する事件を討議するために設置せられし機關。——にん[公議人](名) 公議所に列席せし職名、各藩より選出せり。
(こう-きう[購求](名) あがなひ求むること。
(こう-きう[恒久](名) 久しくかはらざること。えいきう。
(こう-ぎやう[興行](名) 芝居又は相撲などを行ふこと。見世物を行ふこと。——けん[興行權](名) 脚本又は樂譜に關する興行をなし得る特權、其著作權中に含有せらるゝもの。
(こう-きゆう[後宮](名) 后妃などの住みたまふ宮殿。おくごてん。又、后妃などの稱。(后宮)。「官許。
(こう-きよ[公許](名) おほやけの許可。ゆるし。
(こう-きよ[貢擧](名) 進士の試驗。
(こう-きよ[溝渠](名) ❶みぞ。❷くだ。
(こう-きよ[後拒](名) あとぞなへ。しんがり。
(こう-きよ[薨去](名) 貴人の死去にいふ語。(特に三位以上の人にいふ)。「去にいふ語。
(こう-ぎよ[薨御](名) 親王・女院・攝家・大臣の死
(こう-ぎよ[控御](名) 馬を奔逸せざるやうにあつかふこと。轉じて、人をあやつりあつかふこと。
(こう-きよう[口供](名) 罪人のくちがき。
(こう-きよう[公共](名) 社會の一般。世間の衆人。——くみあひ[公共組合](名) 公共の利益を圖ることを目的とする組合。——じげふ[公共事業](名) 公共の利益幸福の維持又は增進のためになす事業、例へば、學校・病院又は道路に關

する事業の如きこれなり。――しん【公共心】(名) 公共の利害に關して同情深き心。公共のために盡さんとする心。――だんたい【公共團體】(名)【法】國家に對して公法上の義務を負擔せる團體。郡組合・町村組合・水利組合等の如きこれなり。

こうきん【公金】(名) 官府又は公共團體の所有に屬する金。

こうぎよく【攻玉】(名) 玉をみがくこと。轉じて、「智徳をみがくこと。」

こうきん【拘禁】(名) とらへて留めおくこと。

こうくわ【公課】(名) ●官府よりのかゝりもの。又はぶやく。●やくめ。つとめ。

こうぐう【厚遇】(名) てあつきもてなし。

こうぎん【工銀】(名) てまだい。くてま。ちんぎん。

こうくわ【紅花】(名) 色の紅なる花。

こうくわ【功過】(名) いさをとあやまちと。

こうくわ【後禍】(名) のちのわざはひ。

こうくわい【後悔】(名) 前に行ひし事を自分にて後に悔ゆること。前になし、事を自ら殘念がること。

こうくわい【公會】(名) 公衆のよりあひ。おほやけの會議。

こうぐわい【口外】(名) 他人に告ぐること。ことばに發すること。「―を禁ず。」

こうぐわい【郊外】(名) かこひのそと。

こうくわう【鴻荒】(名) おほむかし。太古。

こうくわん【後患】(名) 後のうれひ。後日の難儀。

こうくわん【公館】(名) おほやけの設立なるやかた。

こうくん【功勳】(名) いさを。てがら。

こうくん【紅裙】(名) (紅色の裳すその義) 美人又は妓女の稱。

こうぐん【後軍】(名) あとぞなへの軍。

こうけい【公卿】(名) くぎやう。くげ。

こうけい【口徑】(名) 口のさしわたし。「―二十七珊の大砲。」

こうけい【後繼】(名) あとつぎ。

こうけい【紅閨】(名) 美人の閨房。「空閨。」

こうけい【肯綮】(名) ●筋肉の結締せられてある所。すぢのつけね。●轉じて、物事の急所。

こうけい【後景】(名) ●背後の光景。●舞臺の後壁などに畫く背景。かきわり。

こうげい【虹霓】(名) にじ。

こうげい【工藝】(名) 工作に係る藝術。製造に係る技藝。――さくもつ【工藝作物】(名) 直接吾人の用に供する能はず、必ず製造して後始めて用をなす作物。即ち、藍・麻・煙草などの稱。――ひん【工藝品】(名) 製造せられたる物品。多少の技術を要して成りたる物品。

こうげい【孔致】(名) ●あな。

こうげき【攻擊】(名) ●攻め擊つこと。攻め付くること。●論じなじること。責めたゞすこと。――すゐらい【攻擊水雷】(名) 我より接近して、敵艦の水線下に破裂せしむる水雷。魚形水雷の如きこれなり。――ぜんしん【攻擊前進】(名) 防禦の地位にありしものが、敵をうちはらひてすゝむこと。

こうげふ【功業】(名) 事業。又、功績。

こうげふ【鴻業】(名) 國を開き基を建つるなどの偉業。大いなる事業。

こうげふ【興業】(名) 事業をおこすこと。特に、經濟上の事業を起すこと。――ぎんかう【興業銀行】(名) 日本興業銀行法により設立せられたる株式會社。企業の資本を供給するを以て目的とし、國債券・地方債券及社債券・株券を質とし貸付及其(株券を除く)應募の引受・預金及貸付

手形の割引・財團を抵當としたる貸付等を營業とす。其拂込金額の十倍を限り債券を發行することを得。若し又外國に於ける公益の事業に對し、資金の需要ある場合に、主務大臣の認可を得たるときは、規定外の債券を發行することを得。

こうげふ【工業】(名) 粗製品に人工を加へこれが形狀を變更して、更に有用のものとなす生産業。即ち製造業。昔時のものは規模狹小にして家内的なりしが、近代は機械の發明により規模廣大となり工場的となれり。――がくかう【工業學校】(名) 工業に關する學問技術を教授する所。――じだい【工業時代】(名)【經】經濟上の時期を五分したるものゝ第五。即ち今日の時代にして、分業協力盛んに行はれ信用ますく利用せられ、各種の機械發明せられ大生産法行はる。――しよいうけん【工業所有權】(名)【法】工業上に於ける意匠・發明・雛形・商標等に關する所有權。これが保護に關しては各國同盟條約あり。――ぢやう【工業場】(名)「こうぢやう」(工場)に同じ。

こうけん【貢獻】(名) ●貢物(ミツギ)を奉ること。●力を致すこと。「文明の―」

こうけん【後見】(名) ●昔時、家長が幼年にして、其職務を行ふ能はざる場合に、これが代理となりて政務を管理する職。●局外にありてたすくること。うしろみすること。●後見人の略言。●【法】禁治産者又は親權を行ふものなき未成年者を監護教育して、其財産を管理する職務。――かんとく【後見監督】(名) ●後見を監督すること。●後見監督人の略言。――かんとくにん【後見監督人】(名)【法】後見を監督する人。即ち、後見人の事務を監督し、後見人の缺けたる場合には、其後任者の就任を催し、又は親族會議を召集して其選任をなし、後見人と被後見人との利益相反する場合には、被後見人を代表し、若し急迫なる場合には、必要の處分をなすもの。遺言により指定せられたるもの、指定によるものを指定後見監督人といひ、親族會議の選任によるものを選定後見監督人といふ。――にん【後見人】(名)【法】禁治産者又は未成年者の後見をなす人。最後に親權を行ひたるものゝ指定によるものを指定後見人といひ、法律の規定によるものを法定後見人といひ、親族會議の選定によるものを選定後見人といふ。

こうけん【公權】(名) 個人が公法上に於ける權利。例へば選擧權被選擧權の如きこれなり。――ていし【公權停止】(名)「こうけんていし」に同じ。――はくだつ【公權剝奪】(名)「はくだつ」に同じ。

こうげん【公言】(名) かくさずにいふこと。又、あまねく告ぐること。

こうげん【恒言】(名) つねにいふこと。又、其言。

こうげん【控弦】(名) (弓を控へて弦を引くものゝ義) 射手の兵士。

こうけんけん【恆見圈】(名)【天】常に地平上に見ゆる極星の所在の範圍。極を中心とし觀測地の緯度に等しき角度を半徑とする圈なり。

こうご【後顧】(名) あとのきづかひ。のちのうれひ。

こうご【口語】(名) 文章上には使用せざる通俗のはなしことば。文語の對。

こうこう【口腔】(名) 口內の空所。其門に齒あり、上は口蓋下は舌なり、左右の壁を頰(ホホ)とす。

こうこう【鴻溝】(名) ●おほいなるみぞ。●へだて。境。「―」

こうこく【公告】(名) 廣く世上に告ぐること。

こうこく【後刻】(名) ごこく。のちほど。

こうこく【興國】(名) 勢のおこりゆく國。

こうこん【後昆】(名) のちの世の人。又、子孫。

こうさ【公差】(名) ●貨幣の實質の品位量目と、法定の品位量目との差。我國の品位の公差は、金貨は千分の一にして銀貨は千分三。量目は各種別各等を異にす。●度量衡にて、一定の標準と實際のものとの差異を法律にて認許したる範圍。

こうさい【後妻】(名) のちぞひ。ごさい。(繼室)。

こうさい【口才】(名) 口前のよきこと。(辯口)。

こうさい【公裁】(名) おほやけのさばき。裁判。

こうさい【公債】(名) 國家又は地方自治體が、收支の適合を圖るため臨時に起す債務の稱。地方自治體のものは之を地方債といひ、俗に公債といへば國家の債務の特稱とせり。其償還の時期は必ずしも一定せず、豫め償還の時期を定めずして、財政の寬裕なるとき隨意に償還を行ふものあり、又、豫め償還の年限を定め、其期限に至れば必ずこれを償還するものあり。大藏省證券の如きもまた短期の公債なり。募集の方法は政府が公衆に對して債券の賣出をなし申込をなさしむるもの、銀行をして之が請負をなさしめ、更に銀行をして賣出をなさしむるもの等あり、國籍を標準として、內國債と外國債とに區別す。――しようしよ【公債證書】(名) 公債特に國家の債務に對して發行する證券。

こうさう【紅藻】(名)【植】根莖葉の區別判然せざる柔軟類にして、紅色の色素を多く含有するもの。あさくさのりこれに屬す。

こうさう【構想】(名) ●つくりかまふるかんがへ。●「さうざう」(想像)に同じ。

こうさう【鴻爪】(名) (鴻が南に來るとき、跡を雪上に爪痕をつくれど、北に歸るときは、旣に消えて爪痕なき義に出づ) 行衞の定かならずして徑路の不分明なるにいふ語。

こうさう【公葬】(名) 國家に於いてされたる人などの葬式を官府にて營むこと。

こうさう【後裝】(名) 銃身又は砲身の底より彈藥を裝塡すること。又、其裝置。「―銃」「―砲」。

こうさう【後像】(名)【心】刺擊去りたる後其感覺の尙は意識中に殘留せるもの。

こうざう【構造】(名) ●こしらへつくること。かまへつくること。●つくりかた。たてかた。かまへかた。――こく【構造谷】(名)【地】地殼の褶曲若しくは斷層によりて生じたる谷。――さんがく【構造山岳】(名)【地】地殼の褶曲又は斷層によりて生じたる山嶽。――しき【構造式】(名)【化】化學符號に原子價を附記して、符號と符號とを連結する分子式。例へば水はH-O-Hなるが如し。

こうさく【告朔】(名) ●古昔、四季の初めに大臣殿上に仰ぎて官の上る公文を御覽ありしこと。●支那の古代に、諸侯が前年末に天子より受けし暦と政令とを廟に納めおき、每月の初に特羊を廟に供へて其月の暦と政令とを受けしこと。

こうさく【工作】(名) ●職工のしごと。土木のわざ。――せん【工作船】(名) 船內に機械を据(ス)ゑ付け、艦隊に附屬して、軍艦の船體・機關及兵器等の修繕をなす船。――ぶつ【工作物】(名) 工作したるもの。製造品。

こうさん【恆產】(名) さだまりたる資產。

こうし【小牛】(名) 牛の子。小さき牛。(犢)。

こうし【後肢】(名) うしろあし。

(こう-し)［貢士］(名) ㊀諸方より選拔して官府に出す人の稱。㊁維新後、一時諸藩より選拔して朝廷に出しゝ人の稱。
(こう-し)［後嗣］(名) よつぎ。又、子孫。
(こう-し)［公私］(名) おほやけとわたくしと。官府と民間と。社會と個人と。
(こう-し)［公使］(名) 外交官の一、外務大臣の監督訓令を受け、條約國に駐在して自國を代表するもの。法令の定むる所により、其國に於ける自國臣民在留者の保護取締をなす職權を有す、特命全權公使・辨理公使及代理公使の區別あり。(欽差大臣)。
(こう-し)［厚志］(名) 厚きこゝろざし。(厚情)。
(こう-し)［公子］(名) 貴族の男子。わかとの。
(こう-じ)［公事］(名) ㊀おほやけの事。かみのつとめ。(公用)。㊁公共に關する事柄。
(こう-じ)［工事］(名) 工作の仕事。普請(フシン)の作業。
(こう-じ)［後事］(名) 將來又は死後の事。「―を託す」。
(こう-じ)［口耳］(名) ㊀口と耳と。「―の慾」。㊁聞きたる事を同化して自己の知識となす能なく、其まゝにこれを言說にあぐること。「―の學」。――さんずん［口耳三寸］ 學問の同化力少なく知識の淺少なるにいふ。
(こう-じ)［公示］(名) おほやけに示すこと。ひろくしめすこと。――さいこく［公示催告］(名) 【法】權利又は請求の屆出をなさしむるためになす催告。此手續の管轄は區裁判所に屬し、多くは官報又は公報に掲載してこれをなす、若し其期間(少なくとも掲載當日より六ケ月)を過ぎて、當事者これが屆出をなさゞるときは失權となるものとす。又、失踪者に屆出をなさしむるためにも多くは此手續をなす。――そうだつ［公示送達］(名) 【法】訴訟上に於ける書類送達の一法、當事者の現在地知れざるか、若しくは通常の方法による能はざるかのときに行ふものにして、掲示場又は新聞紙などに掲載してこれをなす。

(こう-しう)［厚酬］(名) てあつき報酬(ムクイ)。
(こう-しう)［拘收］(名) とらへをさむること。
(こう-しき)［公式］(名) ㊀おほやけに定まりたる方法。㊁計算の法を表はす式。㊂法令公布の式。
(こうし-くわん)［公使館］(名) 公使が駐在國に於て事務を扱ふ場所、國際法上本國の領地と看做され、駐在國の主權の範圍外なりとす。――しよきくわん［公使館書記官］(名) 公使館に附屬し、公使の職務を補助する高等官。
(こう-しつ)［後室］(名) やもめ、未亡人、(主に、身分ある人にいふ)。
(こう-じつ)［口實］(名) いひたつる種。いひぐさ。いひまへ。
(こう-しふ)［攻習］(名) をさめならふこと。
(こう-しや)［厚謝］(名) あつく御禮をいふこと。
(こう-しや)［巧者］(名) 事に巧なること。上手(ジヤウズ)。
(こう-しや)［叩謝］(名) 頭をたれて謝すること。
(こう-しやう)［紅晶］(名) 【鑛】紅色の水晶。
(こう-しやう)［工匠］(名) ㊀たくみ、だいく、職人。㊁工作物にあらはれたる意匠。
(こう-じやう)［厚情］(名) 厚きなさけ。ねんごろなる情。
(こう-じやう)［口上］(名) ㊀ことばにていひ傳ふること。㊁興行物にて、其仕組の委細を陳ぶること。――いひ［口上言］(名) 口上をいふ人。――かんばん［口上看板］(名) 興行物にて其仕組の趣を記して出す看板。
(こう-じやう)［攻城］(名) 城塞をせむること。「―野戰」。――はう［攻城砲］(名) 巨大なる一種の火砲、威力強大にして堡壘兵舍等の堅牢物を破壞し、其他多大の損害を敵兵に與ふるために用ひらる、通常運搬に八頭の馬を用ふ。

(こうしやう-がい)［公生涯］(名) 一生涯の中公共の事に關係して活動したる間の稱。
(こう-しやく)［公爵］(名) 五等爵の第一。
(こう-しやく)［侯爵］(名) 五等爵の第二。
(こう-しゆ)［公主］(名) 支那にて、君王の女の稱。
(こう-しゆ)［叩首］(名) 首を地につけて禮拜すること。いとねんごろに辭儀すること。
(こう-しゆ)［鉤取］(名) ㊀かぎにかけてとること。㊁内にあるもの又は隱したる事實などを引出すこと。
(こう-しゆ)［攻守］(名) 攻むると守ると。――どうめい［攻守同盟］(名) 二國以上同盟して、其中の一國が同盟外の敵國と開戰する場合に、これを助けて敵國と開戰すること。
(こう-じゆ)［鴻儒］(名) 學問深き人。大學者。(博士、大儒)。
(こう-じゆ)［口授］(名) 口づからさづけつたふること、直接にをしへいふこと。くじゆ。
(こう-じゆ)［口受］(名) 口づからのべいふ所をうけたまはること。
(こう-しゆう)［公衆］(名) 世間の人々、社會の人たち。
(こう-じゆつ)［口述］(名) 口にてのぶること。――しけん［口述試驗］(名) 口にて問題を述べて、口にて回答をなさしむる試驗。
(こう-じゆ-はうしやう)［紅綬褒章］(名) 自己の危難を顧ずして人命を救助したるものに、下賜せらるゝ褒章。
(こう-しよ)［公署］(名) ㊀やくしよ。やくゑよ。㊁公吏の事務を扱ふ所。
(こう-しよ)［苟且］(名) まにあはせ、かりそめ。こそく。「―の策」。

(こう-しよ)［口書］(名) くちがき。(口供、供狀)。
(こう-しよ)［洪鐘］(名) 大いなるつりがね。
(こう-しよう)［公證］(名) ㊀表立ちたる證據。㊁【法】國家又は公共團體の機關が、其職權により或事實を證明するためになす行爲又は形跡。
こうしよう-にん［公證人］(名) 人民の囑託により、民事に關する公正證書を作成する公吏、司法大臣に隸屬す。――やくば［公證人役場］(名) 公證人が其事務を扱ふ役場。
(こう-しよく)［公職］(名) 官府又は公共團體の職務。おほやけのつとめ。
(こう-しよく)［紅色］(名) くれなゐのいろ。あかきいろ。――さう［紅色藻］(名) 【植】「こうさう」(紅藻)に同じ。
(こう-じよく)［詬辱］(名) はづかしめ。はぢ。
(こう-しん)［後身］(名) ㊀生まれかはりの身。㊁境遇一變化したる以後の身。
(こう-しん)［後進］(名) ㊀後より進みゆくこと。「―の士」。㊁後より進みゆく人。
(こう-しん)［功臣］(名) 國家に功勞ある臣。「明治の―」。
(こう-しん)［紅唇］(名) くれなゐのくちびる。又、べにをつけたるくちびる。
(こう-じん)［後人］(名) のちの人。後世の人。
(こうしん-じよ)［興信所］(名) 取引の便利を圖り、かねて其危險の豫防を目的として、商業者の知らんと欲する他人の財產上の狀態につき、確實なる調査又は報道をなす所。
こう-ず［候］(自、さ變) さぶらふ。はんべる。
こう-ず［候］(他、さ變) うかゞふ。みる。
こう-ず［薨］(自、さ變) 三位以上の人の死去せらるゝにいふ語。

こう-ず［困］(自、さ變) こまる。困却す。
(こう-ずゐ)［洪水］(名) おほみづ。(大水)。
(こう-せい)［後世］(名) 後の世。まつだい。
(こう-せい)［後生］(名) 後に生まるゝ人。後の學ぶ人。
(こう-せい)［厚情］(名) あつきなさけ。
(こう-せい)［孔性］(名) 【理】物質の分子と分子との間に空隙ありといふこと。
(こう-せい)［控制］(名) ひきて自由の行動をなさしめざること。ひかへとゞむること。
(こう-せい)［攻勢］(名) 攻めかゝるいきほひ。
(こう-せい)［厚生］(名) 生活の道をゆたかにすること。「―利用の道」。
(こう-せい)［構成］(名) かまへつくること。くみたてこしらふること。
(こう-せい)［恆星］(名)【天】=Fixed star 【天】一の星群の中心となりて其位置を變せざる星、太陽も一の恆星なり。――げつ［恆星月］(名)【天】月が恆星に對し地球を一周する時間、二十七日七時四十三分十一秒餘なり。――じ［恆星時］(名)【天】地球が恆星に對し、一回の自轉をなす時間を時の單位として測りたる時間。――じつ［恆星日］(名)【天】一の恆星が南中してより、再び南中するまでの時間。――ねん［恆星年］(名)【天】太陽が一の恆星に對し或方向に見えてより、同一の恆星に對し、同一の方向に再び太陽の見ゆるまでの時間の稱にして、三百六十五日六時九分九秒なりとす。
(こう-せい)［公正］(名) ㊀偏頗又は邪曲なきこと。たゞしきこと。㊁公認せられてあること。疑惑なきこと。――しようしよ［公正證書］(名)【法】人民の囑託に應じて、公證人が作成したる民事上の證書、法律上完全なる證據として、其正本に依りたゞ裁判所の命令のみを得ば、これが執行をなすことを得。

(こう-せいせい-てん)［恆惺惺天］(名) 心智のつねに明かにしてくらからざること。
(こう-せう)［哄笑］(名) 大いに笑ふこと。どっと笑ふこと。
(こう-せき)［口跡］(名) ことばづかひ。こわいろ。
(こう-せき)［功績］(名) てがら。いさを。(勳績)。
(こう-せき-えい)［紅石英］(名)【鑛】紅色の石英。
(こう-せき-ど)［洪積土］(名)【地】洪水の作用によりて積み重なりたる地層。
(こう-ぜつ)［口舌］(名) くちとしたと。轉じて、ことば。ものいひ。「―のあらそひ」。
(こう-せん)［口錢］(名) 賣買のなかだちしたる手數料。
(こう-せん)［口占］(名) くちずさみ。
(こう-せん)［工錢］(名) 作業工事のちんせん。
(こう-せん)［公選］(名) 公衆よりの選擧。
(こう-せん)［後先］(名) あとさき。
(こう-せん)［攻戰］(名) 攻め戰ふこと。又、城を攻むると野にて戰ふと。
(こう-ぜん)［紅髯］(名) ㊀あかきくちひげ。あかひげ。㊁髯の紅色なるより、西洋人の稱。
(こう-ぜん)［哄然］(名、副) 一度にどっと笑ふさまにいふ語。
(こう-ぜん)［公然］(名) 世間に知れわたりてあるさま又は秘密にせざるさまにいふ語。おほやけなるさまにいふ語。――のひみつ［公然秘密］(名) ㊀秘密にてあるべき物事が、世間にひろくもれ聞えてあること。㊁公然にして疑ふべき所なきやうなれど、其實體は不思議にして知るべからざること。「天地は―なり」。
(こう-そ)［公訴］(名) 檢事が特定の犯罪人に對して、其裁判を裁判所に求むること。
(こう-そ)［貢租］(名) みつぎ。ねんぐ。(租稅)。
(こう-そ)［後素］(名) (論語に出づ)㊀智識をみがく

よりも德性を養ふを急となすと。㊂ゑ、繪畫。

(こう-そ[控訴](名)【法】第一審の判決に對し不服を申立て、直接上級裁判所に、其事實上若しくは法律上の覆審を求むると。されど第一審の判決が終局判決なるか、若しくは法律に於て終局判決と見做すべき中間判決なるかの時に限る。區裁判所の判決に對する控訴はこれを地方裁判所に、地方裁判所の第一審判決はこれを控訴院になす。控訴は第一審の辯論を繼續するものなるが故に、新なる事實を陳述し證據を提出するとを得。——きかん[控訴期間](名)【法】控訴をなすとを得る一定の期間。民事にては、判決の送達に始まりて一ケ月間とし、刑事にては、判決言渡の日より五日間とす。

(こう-そう[倥偬](名) いそがしきと。「兵馬—」。

(こう-そう[後送](名) 後方へおくると。

(こう-そく[公則](名) おほやけの規則。一般の規則。

(こう-そく[後足](名) あとあし。

(こう-そく[拘束](名) ㊀拘引して束縛すると。㊁自由の行動を制限若しくは停止すると。

こう-ぞめ[紅染](名) べにぞめ。

こう-そゐん[控訴院](名) 地方裁判所の判決又は決定に對して、控訴又は抗告をなすべき合議制度の裁判所。一又は二以上の民事部と刑事部とに分ち、部長を以てこれを監督せしむ。——ちやう[控訴院長](名) 控訴院の長官、勅任判事を以てこれに補す。院內及管內の下級裁判所の事務を監督す。判事としての職務權限は他と異ならず。

こう-た[小唄](名) 三味線に合はせて歌する短き俗歌、はうた。(小歌、小曲。)

(こう-たい[後退](名) あとへさがると。あとすさり。

(こう-たい[後代](名) 後の世。こうせい。

(こう-だい[鴻大](名) いと大なると。(巨大)。

(こう-たう[洪蕩](名) ひろ〴〵としてさゝはりなきと。

(こう-たう[勾當](名) ㊀つかさどると。㊁第一に位する內侍。㊂昔時、關白家にて、雜務を執りし者。㊃眞言宗にて、事務を執る人。㊄盲人の官名。

(こう-たう[公盜](名) 官吏又は公吏などの、地位を利用して私利を圖るものをのゝしりていふ語。

(こう-だう[公道](名) ㊀おほやけの道理。たゞしきみち。㊁公共のものの通行する道路。

(こう-だう[哄堂](名) 一座どっと笑ふと。

(こう-だく[肯諾](名) うべなふと。うけひくと。

(こう-たつ[口達](名) ことばにての言渡。

(こう-たつ[公達](名) 政府よりの示達。くだつ。

(こう-だつ[寇奪](名) あだをなし財物をかすめとると。

(こう-だつ[攻奪](名) 攻めて奪ふと。

こう-たひ[小謠](名) 謠曲の文句中の主要の部分を抽(ヌ)きて一曲となせるもの。

(こう-たん[口端](名) くちの端。くちさき。

(こう-だん[口談](名) 口づからの物語。はなし。

(こう-だん[後段](名) 後のきり。後のだん。中段又は前段の對。

(こう-ち[拘置](名) とらへおくと。とめおくと。

(こう-ぢ[小路](名) (「こみち」の音便) 幅の狹き路。(巷街、夾巷)。

ご-うち[碁打](名) 碁を打つと。又、其人。

(こう-ちう[釦鈕](名) こはぜ。「ボタン」。

ご-うちぎ[小袿](名) 昔時の婦人の禮服、小袖に似る、濶袖にて裏あり、上にうちかけて着しもの。

(こう-ちや[紅茶](名) 一種の茶、茶の葉を醱酵せしめたるものにして、その煎汁は紅色を帶ぶ。

(こう-ぢやう[工場](名) 工作をなす場所。職工のしごとば。(工業場)。——ざいだん[工場財團](名)【法】一個又は數個の工場に屬する土地・建物・機械・器具其他一切の物件の全部若しくは一部を以て、抵當權の目的のために設定したる財團、所有權保存の登記によりてこれをなす、法律上これを不動產と見做し、所有權及抵當權以外の物權又は貸借の目的となすとを得ず、且一の財團に屬するものは、他の財團に屬するとを得ざるものとす。

(こう-ちゆう[口中](名) 口のなか。

(こう-ぢよ[控除](名) さしひくと。とりのぞくと。

(こう-ぢよ[工女](名) 細工(サイ)物などを造るとを業とする女。工場に雇はれて仕事をする女。

(こう-ちん[口陳](名) 口上にて事情をのぶると。

(こう-ぢん[紅塵](名) ㊀繁華なる地に起る塵埃。㊁轉じて、巷街の喧しきと。世間の煩しきと。俗界。

(こう-ぢん[後陣](名) 後方の陣隊。あとぞなへ。

(こう-ぢん[後塵](名) 人又は馬の走りて、後方にたつ塵(チリ)。——をはいす[拜後塵] あとにつきゆくにいふ。

こう-で[小腕](名) ㊀小さき腕。かよわき腕。㊁力量少なきと。わざまへの未熟なると。

(こう-てい[公聽](名) おほやけの耳に入ると。

(こう-てい[公廷](名) 裁判廷。しらす。公判廷。

(こう-てい[工程](名) ㊀しごとのほど。わざのはかどり。(功程)。㊁【理】「こうりつ」(工率)に同じ。

(こう-てい[後提](名)【論】三段論法にて、第二次の命題、即ち、前提と斷案との媒となるもの、一に小前提といふ。

(こう-てい[公定](名) おほやけに定むると。一般にまもるさだめ。——さうば[公定相場]

(名) 取引所にて取引賣買したる相場。

(こう-てい[肯定](名) 然りとなすと。ゆるすと。——めいだい[肯定命題](名)【論】主辭と賓辭との一致を許容する命題、例へば「鴉は黑し」「犬は動物なり」の如き命題これなり。肯定命題＝Affirmative proposition

(こう-でい[拘泥](名) かゝはりなづむと。

(こう-てう[候鳥](名)【動】季節に從ひて住處を變じ、或は北方に去りて產卵し又は南に歸る習性ある鳥、つる・つばめ等これなり。わたりどり。

(こう-てう[紅潮](名) ㊀朝日などにうつりて紅に見ゆる海波。㊁美人などが、はぢらひて顏をあかくすると。

(こう-てう[後凋](名) 多くのものより後れて凋ぼむと。轉じて、衆に從はずしてみさををを守ると。

(こう-てん[公轉](名)【天】遊星が太陽を中心として回轉すると。

(こう-てん[後天](名) ㊀此世に生れ出でゝ後に身に享受したると、負傷のために一種の不具となり、又は境遇のために一種の習慣をなしたる等は、即ち後天にして、研究して知識を長じ、修養して品性を高むるもまた後天なり。先天の對。㊁經驗の結果。——てき[後天的](名) 物事の後天に成りたるにいふ語。

(こう-でん[功田](名) 古昔、功勞者に賜はりし田地。

(こう-でん[公田](名) ㊀おほやけの所有に屬する田。㊁支那の井田にて、中央の田の稱、其周圍の田を受けし八家のものが、かはる〴〵これを耕して其收穫を租稅となしたりといふ。

(こう-と[鴻圖](名) 大いなる謀計。

(こう-ど[公度](名)【數】二つ或は二つ以上の量が、皆な或一つの量を恰も若干含むとき、其或一つの量の稱。

(こう-ど[后土](名) 地をまもるかみ。くにつかみ。

(こう-とう[叩頭](名) 「こうしゆ」(叩首)に同じ。

(こう-とう[口頭](名) 口さき。口上。——けいやく[口頭契約](名)【法】口頭によりてなす契約。特別の規定なき限りには、法律上書面契約と効力異ならず。——しけん[口頭試驗](名) 「こうじゆつしけん」(口述試驗)に同じ。——すゐもん[口頭推問](名) 口頭にて或問題を授け、これをふかくたづねとふと。——べんろん[口頭辯論](名)【法】法廷に於て訴訟當事者が、口頭により其申立又は陳述をなすと。——ゐにん[口頭委任](名)【法】口頭にて委任契約をなすと。

(こう-どう[倥侗](名) うつけ。ぼんやり。

(こうとう-しき[恆等式](名)【數】式中の文字に如何なる値を與ふとも、相等しきもの恆に成立する等式、例へば$(x+1)^2=x^2+2x+1$の如し。

(こう-とく[公德](名) 社會公共に對する德義。

(こう-とく[功德](名) 功と德と。

(こう-どく[購讀](名) 書籍などを買ひて讀むと。——しや[購讀者](名) 購讀する人。

(こう-どん[紅暾](名) 光の紅なる朝日。

(こう-ない[構內](名) かこひのうち。

(こう-なう[後腦](名)【生】腦髓の一部分、延髓の上背面にありて大腦の下に位するもの、縱線によりて左右に區分せられ、表面には數多の横(よこ)みありて横走す、即ち全身の運動を主宰する所。(小腦)。

(こう-なん[後難](名) 後のわざはひ。將來の難儀。(後患)。

(こう-にん[後任](名) 前任者にかはりて其任務に就くと。又、其人。

(こう-にん[公認](名) 國家・社會又は公共團體が、是認してあると。

(こう-にん[侯人](名) 古昔、門跡家に使はれし人の稱。

(こう-ねつ[口熱](名) 口中の邪熱。

(こう-ねつ[紅熱](名) もの、熱して紅色となると。

(こう-ねん[後年](名) ゆくすゑ。又、晩年。

(こう-のう[功能](名) きゝめ。しるし。(効驗)。

(こう-ば[工場](名) 「こうぢやう」に同じ。

(こう-ば[詬罵](名) のゝしりはづかしむると。

(こう-はい[後輩](名) 後に生れ又は後より進む人。

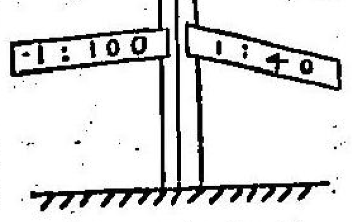
(こう-はい[後背](名) うしろ。せな。

(こう-はい[興敗](名) おこるとやぶるゝと。

(こう-はい[興廢](名) おこるとすたるると。(興亡)。

(こう-ばい[紅梅](名) ㊀【植】梅の一種、花冠紅色なり。㊁「こうばいいろ」の略言。——いろ[紅梅色](名) 濃(コ)き桃色若しくは赤に紫を帶びたる色。——やき[紅梅燒](名) 饂飩(ウドン)粉と米の粉とに、砂糖を混(マ)ぜ梅花の形に燒きたる菓子。

(こう-ばい[勾配](名) ㊀傾斜の度。「山の—」。㊁【氣轉】身のこなし。「—がぬるい」。——へう[勾配標](名) 鐵道線路の傍側にたてたる線路の勾配をあらはす標、汽車の運轉手これにより速力の加減をなす。



[こうばい―う]

(こう-ばい[公賣](名) 公衆に競賣すると。競賣に附すると。——しよぶん[公賣處分](名) 官府が稅金滯納者の家產などを、強制して公賣に附し其滯額を補ふと。

(こう-ばい[購買](名) あがなひかふと。かひとると。——くみあひ[購買組合](名) 產業

又は生計に必要なる材料物品を購買して、これを組合員に分配するために設立したる組合。——り**よく**[購買力](名) 物品をあがなひかふ財力。

(とう-ばい-すう)[公倍數](名) [數]數個の數(又は整式)にて割り切る、數(又は整式)の、此等の數(又は整式)に對する稱。二つ以上の數の何れにても割り切る、數。

(とう-はう)[公報](名) ㊀官府よりあまねく國民に發表する報告。㊁地方官などの發する官報の如き文書の稱。

(とう-はう)[後報](名) のちの知らせ。

(とう-はう)[後方](名) のちのかた。うしろのかは。——**きんむ**[後方勤務](名) ㊀後方に於けるつとめ。㊁出征軍隊の給養又は補充に關する事務。

(とう-ばう)[紅帽](名) ㊀あかき色の帽子。㊁もと近衞師團の制帽たりし紅色のはちまきある軍帽。——**たい**[紅帽隊](名) 紅帽をかぶれる軍隊。又、もと近衞師團に屬したる軍隊。

(とう-はう-けい)[孔方兄](名) 錢の異稱、中に方形の孔あるよりいふ。

(とう-はう-せき)[紅寶石](名) 紅色の鋼玉石。「紅玉石」。

(とう-はく)[厚薄](名) 厚きと薄きと。「—何れか」。

(とう-はく)[紅白](名) 赤きと白きと。——**え**[**よう-ぶ**][紅白勝負](名) 紅白兩組に分れてなす勝負。

(とう-はく)[侯伯](名) 諸侯、大名。

(とう-ばつ)[攻伐](名) 攻め伐(ウ)つこと。

(とう-はふ)[公法](名) [法]權力關係を規定したる法、例へば憲法・行政法・刑法・刑事訴訟法等の如きは、大體上これに屬す。私法の對。——**おん**[公法人](名) [法]公法の規定により法人格を與へられたる權利の主體、例へば自治體の如きこれなり。私法人の對。

(とう-はん)[後半](名) あとの半分。前半の對。

(とう-はん)[公判](名) [法]裁判手續の一、刑事被告人を法廷に呼出して、口頭を以て審理する裁判、公開を原則とす。豫審の對。——**てい**[公判廷](名) 公判の開始せられてある法廷。

(とう-ひ)[口碑](名) いひつたへ。「—に遺る」。

(とう-ひ)[公費](名) 官府又は公共團體の費用。

(とう-び)[後備](名) ㊀後のそなへ。㊁「こうびえき」の略言。——**えき**[後備役](名) 兵役の一、豫備役を經過したるもの、服するもの、其期間は十年なりとす、これを經過すれば國民兵役となる。——**ぐん**[後備軍](名) ㊀後ぞなへの軍隊。ごづめ。㊁後備役にある兵士を以て組織したる軍隊。

(とう-ひやう)[公評](名) ㊀世上一般の評判。㊁偏頗なき正しき批評。「—敵にあり」。

(とう-びん)[後便](名) またのたより。次回の便。

(とう-ふ)[公布](名) ㊀一般に觸(フ)れ示すこと。(布告)。㊁[法]法律命令をあまねく國民に通知すること、我國現今の制にては、官報に掲載するを公式とし、これによりて拘束力を生ず。

(とう-ふ)[工夫](名) ㊀土木工事などに從事する役夫。㊁「くふう」に同じ。

(とう-ぶ)[後部](名) うしろの方。

(とう-ぶ)[公武](名) 公家と武家と。朝廷と將軍家と。——**がったい**[公武合體](名) 德川幕府の末年に、公武の一致を圖りて國事を處理せんといひし一派の議論。

(とう-ふう)[恆風](名) [地]恆に一定の方面に吹く風、即ち、貿易風又は反對貿易風若しくは高緯度地方に於ける西風の如きこれなり。

(とう-ぶ-きやう)[工部卿](名) 工部省の長官。

(とう-ふく)[興復](名) 衰頽したる事を恢復すること、再興すること。「と思ふ所と」。

(とう-ふく)[口腹](名) くちとはらと。又、いふ所と、「と思ふ所と」。

(とう-ぶ-しやう)[工部省](名) 明治の初年に土木工事・鑛山・製鐵・燈臺・鐵道・電信等に關係する事を掌りし中央官廳、十八年十二月之を廢せらる。

(とう-ふん)[紅粉](名) 化粧に用ふるべにおしろい。「—を扮飾す」。

(とう-ふん)[口吻](名) ㊀口さき、くちばし。「—を挾む」。㊁くちぶり、いひやう。「—を學ぶ」。

(とう-ふん)[公憤](名) 公共の事に關してのいきどほり。社會衆人のいきどほり。

(とう-ふん)[興奮](名) ㊀感じて心氣の奮起すること、感じて精神の勢だつこと。㊁刺戟(シゲキ)によりて神經の動作を起すこと。——**ざい**[興奮劑](名) 興奮せしむる成分を含める藥劑。

(とう-ぶん)[公文](名) 官府が職務權限上より發する文書。——**しき**[公文式](名) 法律・勅令・閣令・省令等に關する親署・制定・公布其他の要用の方式。——**しよ**[公文書](名) 官府の權限職務の執行上作成したる文書。

(とう-ぶん-ぼ)[公分母](名) [數]等(ヒ)しき分母を有する多くの分數に對して、其分母の稱。

(とう-へい)[公平](名) 平等不偏なること、偏頗無きこと。たゞしきこと。

(とう-へい)[工兵](名) 城塞橋梁の築造架設其他軍事上の土木建築の事にあたる軍隊の稱。又、其軍隊に屬する兵士。——**くわいぎ**[工兵會議](名) 工兵の技術其他の事項に關して陸軍大臣の諮

詢に應じ、且工兵の改良進歩に就きて審議立案をなす機關、工兵の佐官を以てこれを組織す。

(とう-べい)[貢米](名) みつぎ奉る米。

(とう-へう)[公表](名) おもてむきに發表すること、世間に披露すること。

(とう-へう-るゐ)[喉鰾類](名) [動]硬骨類中の一目、腹部の鰭(ヒレ)は胸部の鰭の後方に位し、鰾(ウキ)は食道と連なるもの、こひ・ふな等これに屬す。

(とう-へん)[口邊](名) 口のはし。口のほとり。

(とう-へん)[公邊](名) ㊀おほやけ。官府。㊁おほやけざた。おもてむき。

(とう-へん)[後編](名) のちの卷。前編の對。

(とう-ほ)[候補](名) ㊀或官職の缺位に補せらるべきもの。㊁或地位身分を得んと望むこと。或地位身分を得べき資格あること。又、其人。——**しや**[候補者](名) 候補となる人。候補を望む人。「代議士の—」。——**せい**[候補生](名) 或一定の修業を完了して、或官職若しくは地位に登用せらるゝ生徒。「士官—」。

(とう-ほう)[口俸](名) 糊口しえらるゝ俸給額。

(とう-ぼく)[厚朴](名) 支那より渡來せる一種の藥、朴樹の皮にて製し、苦(ニガ)く辛(カラ)きもの。

とう-ぼふ-むぎ[弘法麥](名) [植]莎草科に屬する草、地下莖を有し、葉長く莖も長し、花は赤褐色にして、花序は小穗狀をなし花柱は三裂す、藥用に供せらる。いぬむぎ。

とう-まう-の-がく[孔孟學](名) 支那の孔子及孟子の說き示したる學問、即ち儒學の稱。

(とう-みやう)[功名](名) 「こうめい」に同じ。

(とう-みん)[公民](名) ㊀國家に係屬し、獨立して生活を營む自由民。奴隸又は私民の對。㊁[法]市町村を構成する住民中公民權を有するもの、稱、其資格は帝國臣民にして公權を有し、且一戸を構へ治產の禁を受けざる滿二十五歲以上の男子にして、二年以上其市町村の住民となり其市町村の負擔を分任し、其市町村内にて地租若しくは直接國稅二圓以上を納むるものとす。——**けん**[公民權](名) [法]公民が公民たる地位によりて有する權利、即ち、其市町村の選舉に參與し、其市町村の名譽職に選舉せらるゝ權利。

(とう-む)[公務](名) 國家又は公共團體の事務又は職務。おほやけのつとめ。

とう-め[小梅](名) [植](い)「こなのうめ」の一名。(ろ)「にはうめ」の一名。

(とう-めい)[功名](名) 功をたて名をあぐること。功あらはるゝこと。「高く名あらはるゝこと」。

(とう-めい)[公明](名) 偏頗又は私慾なきこと。邪曲又は陰蔽なきこと。わたくしなきこと。

(とう-もう)[鴻濛](名) 物事の渾沌として不分明なること。太古のありさま。「り呼べり」。

(とう-もう)[鴻毛](名) (おほ鳥の毛の義) 極めて輕き物事にたとへいふ語。「義は泰山、死は—」。

(とう-もう)[紅毛](名) 外國人の稱、其毛の赤きよりいふ。

とう-や[紺屋](名) こんや。染物屋。

(とう-やく)[後約](名) のちのやくそく。

(とう-やく)[口約](名) くちやくそく。

(とう-やく-すう)[公約數](名) [數]二つ以上の數に通じたる約數。

(とう-よ)[公餘](名) 官務のひま。

(とう-よう)[公用](名) ㊀おほやけの用事。おほやけのつとめ。(公事)。㊁國家又は公共團體の需要。——**ざいさん**[公用財產](名) [法]官廳の建物敷地などの如く、公用に供する國有の財產。——**せいげん**[公用制限](名) [法]國家が公用のために、特定物に對する所有權を制限する行政處分。されど所有權は消滅するものにあらずして、行政處分の解除とともに復用するものとす、例へば公用の工事のために、一時隣接地を占有使用するが如し。——**ちようしう**[公用徵收](名) [法]國家が公用のために、特定物に對する所有權を強制して徵收する行政處分、土地の公用徵收に就ては、土地徵收法による。——**にん**[公用人](名) 昔時、大小名の家に事(ツカ)へて、公用を辨ぜし人。

(とう-よう)[功用](名) 用ひて功あること、はたらき、きゝめ。

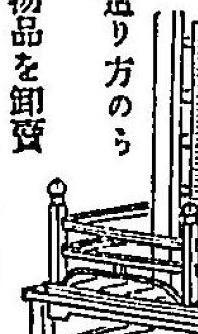
(とう-らい)[後來](名) このゝち、ゆくすゑ。將來。

(とう-らう)[功勞](名) ほねをり。はたらき。

†とう-らう-でん[後涼殿](名) 古昔、清涼殿の西にありし御殿。こうりやうでん。

(とう-らく)[後樂](名) (天下の樂にむくれて樂しむ義) 國家國民の事に關して心をつくし前途を考ふること。「先憂—」。

(とう-らん)[句欄](名) 折れ曲がりたる造り方のらんかん。



[こうらん]

とう-り[小賣](名) 物品を卸賣(オロシウリ)の許(モト)より買ひ入れ、これを少しづゝ分けて賣ること。卸賣の對。「菓子—營業」。(零賣)。

とう-り[梱](名) 繩にてくゝりたる荷物。包裝したる貨物。こり。

(とう-り)[公理](名) ㊀證明を要せず又は證明すること能はず、凡ての認識の根據となる理。㊁他の物事を說明する根據にして且證明を要せざる理。

(とう-り)[公吏](名) 國家の事務を扱(アツカ)ふ人に

して官吏にあらざるもの、執達吏・公證人乃至自治體の吏員等の類これなり。
(こう-り[功利](名) ㊀功名と利慾と。又、功績あり利益あること。㊁[倫]利益、幸福。――けうキヨウ[功利教=Utilitarianism](名) [倫]一派の倫理說、其中に自身の利益幸福を道德の標準となすものと、他人の利益幸福を道德の標準となすものと、社會の最大多數者の最大幸福を道德の標準となすものとあれど、普通には最後のものをさしていふ。――せつ[功利說](名) [倫]前條に同じ。
(こう-りう[拘留](名) ㊀とらへてとめおくこと。㊁[法]刑事被告人を監獄に拘禁すること。又、違警罪の犯者を、一日以上十日以下の刑期間、定役に服せしめずして留置すること。――じやうジヤウ[拘留狀](名) [法]豫審判事が刑事被告人を拘留するために發する令狀、通常被告人を訊問せし後にあらざればこれを發することを得ざれど、被告人逃亡したる場合には、直ちに發するものにして、釋放なき以上は、判決執行に至るまで被告人の自由を拘束する効あるものとす。――しよ[拘留所](名) 拘留に處せられたる違警罪犯者を拘置する所。
(こう-りつ[公立](名) 國家又は公共團體の設立維持にかゝること。又、其物。
(こう-りつ[工率=Power](名) [理]器械が每單位時間になす仕事。
(こう-りやうリヤウ[公領](名) 公の領地。官の所有地。私領の對。
(こう-りやうリヤウ[餱糧](名) ひやうらう。はしひ。
(こう-りやうリヤウ[口糧](名) 兵士の糧食。
(こう-りやうでんリヤウ[後涼殿](名) 「こうらうでん」に同じ。
(こう-りやく[攻略](名) せめとること。せめうばふこと。

(こう-りよく[公力](名) 個人又は團體を強制し服從せしむる國家又は社會の權力。
こう-る[梱](他、ら四) 繩をかけて荷造をなす。
(こう-るゐ[紅涙](名) 血の涙。又、美人の涙。
(こう-れい[恆例](名) つねの例式。きまりの行事。(常例、定例)。
(こう-れん[後聯](名) 漢詩の律の第五第六の句、多くは對語を以て聯合するもの。
(こう-ろ[攻路](名) 攻め行く路すぢ。
(こう-ろ[紅爐](名) 炭火のさかんにおこりてある爐。「―上一點雪」。
(こう-ろ[鴻臚](名) 外國の來賓との應接。又、其職名。――くわん[鴻臚館](名) 古昔、外國の來賓を接待するため京都に設けられし館。
(こう-ろう[紅樓](名) 財產家のむすめの住居。又、妓女などの住居にもいふ。
(こうろ-へ-る(自、は下一) ㊀年功を積みて其物事に熟煉す。㊁成熟して、堅髓し若しくは長大となる。「こうろへた猿」。
(こう-ろん[口論](名) ことばあらそひ。くちあらそひ。さうろん。
(こう-ろん[公論](名) ㊀偏頗なき公平なる論。㊁世上一般の議論。
(こう-わ[媾和](名) 「かうわ」(講和)に同じ。
(こう-ゐ[攻圍](名) 城塞をとりまき攻むること。
(こう-ゑん[公園](名) 社會公衆の遊歩するために設けたる庭園。(遊園、囿園)。――ち[公園地](名) 前條に同じ。
(こう-ゑん[後援](名) 後詰のたすけ。――たい[後援隊](名) 後詰に來れる軍隊。
(ご-うん[五蘊](名) [佛]色・受・想・行・識の五つの稱、一切の有爲法を此に攝しあつむといふ。ごをん。

こえ[肥](名) ㊀土地に使用して、地味を肥やし生產力をゆたかにするもの。こやし、ひれう。㊁糞又は尿(イバリ)の特稱。
――ごえ[越](接尾) こゆる路。峠路。「伊賀―」。
(ご-えい[御影](名) 最も尊敬すべき人の畫像又は寫眞などの敬稱。
こ-えだ[小枝](名) 小さき枝、さえだ。(條、條杪)。
こえ-たご[肥桶](名) 肥を運ぶ桶。
こえ-つち[肥土](名) 地味肥えて生產力ゆたかなる土壤。
こえ-つぼ[肥壺](名) 大小便を受くる壺。(糞坑、厠池)。
こえ-とり[肥取](名) 厠(カハヤ)の屎便をくみとりて掃除する人。(淨人)。
ごえふ-の-まつゴヨウ[五葉松](名) [植]松杉科に屬する木、葉細く短く、木理(キメ)密にして樹皮鱗の如くならず、毬果は長楕圓狀をなす、觀賞用として栽培せらる。いつはのまつ。(五剛、五鬣松)。
こえ-まつ[肥松](名) 松樹のやに多き處。
++こえ-らか[肥](名) こえふとりたること。
コエンドロ[胡荽=Coriandrum sativum](名) [植]繖形科に屬する草、葉は鋸齒を有し、花は五瓣にして淡色なり。こにし。
++こ-および[小指](名) 「こゆび」の古稱。
こ-おろし[子墮](名) 藥を用ひて胎內の子をおろすこと。(墮胎)。――ぐすり[子墮藥](名) 墮胎に用ふる藥品。
(こ-おん[古音](名) 古昔の字音又は國音。
(ご-おん[吳音](名) 漢字の字音の一、漢音の條を見よ。
(ご-おん[五音](名) 「ごいん」に同じ。
(こ-か[古歌](名) 古き歌、古人の歌。
(こ-か[胡笳](名) 支那の胡人の吹く一種の笛、蘆

の葉をまきてつくりたるものにて、悲哀の音を發すといふ。
(こ-か[古柯](名) ㊀ふるきえだ。㊁[植]「こかの木」に同じ。
(こ-が[古雅](名) 古代の風ありて風雅なること。又、ふるびて雅致多きこと。
(こ-が[個我](名) 差別上の自我、個人としての自我。
こが(名) 桶又は樽の方言。(樋)。
(ご-か[梧下](名) 「きか」(机下)に同じ。
(ご-か[五加](名) [植]「うこぎ」の一名。
(こ-かい[湖海](名) ㊀湖と海と。㊁世の風塵を餘所(ヨソ)にしたる所。㊂度量の大なること。意氣の盛なること。「―の士」。
(ご-かい[五戒](名) [佛]偸盜・邪婬・妄語・殺生・飲酒の五つの惡行の戒。
こ-かい[沙蠶](名) [動]環蟲類に屬する蠕形動物、形狀は蚯蚓に類し細長にして赤色を帶ぶ、淺海の泥中に棲息す、魚を釣る餌(エサ)に供せらる。ゐむし。
(ご-かい[誤解](名) 理會をあやまること。意味をとりちがふること。げしちがへ。おもひちがひ。
(ご-かいだうウ゛ード[五街道](名) 昔時、江戸を起點としたる五つの街道、即ち、東海道・中山道(木曾街道)・日光街道・甲州街道・奥州街道の稱。
コカイン[Cocaine](名) [化]「コカ」と稱する植物の葉の中に含有せる「アルカロイド」、針狀の結晶をなし、熱湯又は「アルコホル」等に溶解す、局部の麻痺を惹(ヒ)起す性あるを以て、醫師が小手術を行ふに使用せらる。
(こ-かうコー[枯槁](名) ㊀活氣絕ゆること。かるゝこと。㊁やせおとろふること。「形容―」。
(こ-かうコー[孤高](名) ひとりきはだちて高きこと。

(こ-かうコー[鼓行](名) 軍隊などがつゞみをうちならし勢をつけて行くこと。
(こ-がうゴー[呼號](名) 呼びさけぶこと。
(ご-かうコー[五更](名) ㊀一夜を五つに分ちたる時刻の總稱、「かう」(更)の條を見よ。㊁昔時の時の名、今の午前四時。
(ご-かうコー[御幸](名) 主上のみゆき。
(ご-かうコー[五港](名) 我國最初の開港場たりし橫濱・神戶・長崎・新潟・函館の稱。
こ-がうしコーシ[小格子](名) ㊀小さき格子(カウシ)。㊁吉原にて、格低き女郎屋の稱。
こ-がき[小垣](名) ちひさきかき。
こ-がき[小蠣](名) [動]「いそがき」の一名。
こ-がき[小餓鬼](名) こどもを賤めていふ語。
(こ-かく[古格](名) むかしの格式、古來のかた。
(こ-かく[顧客](名) 得意の客。おとくい。
(こ-かく[孤客](名) ひとりたび。又、其人。
(こ-かく[小角](名) 昔時、芝居にて、錢百六十文の隱語。
(こ-がく[古學](名) ㊀古代の事を研究する學問。㊁宋儒の性理說に反對して起りたる我國の儒學、伊藤仁齋・荻生徂徠等の主張する所にして、專ら古文を研究し孔孟の眞意を發揮せんとせしもの。㊂我國にて古文を研究し、古代の狀態を闡明せんとする學問、賀茂眞淵・本居宣長等の稱へしもの。
(こ-がく[古樂](名) 古代の音樂。
(こ-かく[小角](名) へぎの角盆。
(ご-かく[語格](名) ことばづかひの規則。
(ご-かく[五角](名) 五角形の略言。――けい[五角形](名) 五邊の直線形、五邊形。
(ご-かく[五覺](名) [佛]五つの覺(サトリ)、即ち衆生覺・聲聞覺・菩薩覺・三乘覺・佛覺の稱。

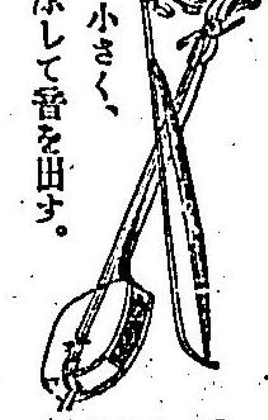
(ご-かく[五角](名) 互に力量優劣無きこと。(互格)。
(ご-がく[五嶽](名) 支那にある五つの大山、即ち泰山(東嶽)・衡山(南嶽)・華山(西嶽)・恒山(北嶽)・嵩山(中央)の總稱、上代にはこれを祀(マツ)りたり。(五岳)。
(ご-がく[語學](名) ㊀言語の發達及變化等に就きて研究する學。㊁言語・文章の性質・用法等を研究する學問、文法、文法學。㊂外國語の研究。――しや[語學者](名) 語學をなさむる人。又、語學に長(タ)けたる人。
こ-がく-る[木隱](自、ら下二) 木のかげに隱る。
こ-がくれ[木隱](名) 木のかげに隱るゝこと。
こ-かげ[木陰](名) 樹木のかげ。(樹陰)。
こがし[焦](名) ㊀こがすこと。㊁穀類を炒(イ)り碾(ヒ)きて製したる粉。㊂香煎の一名。
(――ごかし(接尾) かこつけて自己の利を覓(モト)むること。「おため―」。
こ-がしら[小頭](名) 一群の中の一部の長たる位地にあるもの。「相撲の―」。
こ-かす[粉屑](名) 穀類などの粉になりたる物。
(こか-す[轉](他、さ四) ㊀押し遣(ヤ)る。たふす。㊁ひそかに物の位置を轉ず。「品物を―」。
こが-す[焦](他、さ四) ㊀火にて燒き黑む。㊁焚物(モノ)をもて燻(ク)ぶ。㊂心を苦しめなやます。「思ひを―」。
こ-かぜ[小風](名) そよ吹く風、なよかぜ。(微風)。
(ご-かせん[五歌仙](名) 平安朝にて、和歌に秀でし五人、即ち大中臣能宣・淸原元輔・源順・紀時文・坂上望城をいひ、又、赤染衛門・和泉式部・紫式部・馬内侍・伊勢大輔をもいふ。
こ-がた[小形](名) 形の小さきこと。又、其物。大形の對。

こ-がたな［小刀］(名) 小さき刀。「ナイフ」。(剞刀、鐁刀)。
〔こ-かつ［枯渇］(名) ㊀かれびかわくこと。㊁乏(ボク)しくなること。つくること。「詩想―」。
〔こ-がつを［小鰹］(名) 【動】「うづわがつを」の一名。
こ-がね［黄金］(名) ㊀わうごん。きん。㊁金貨。㊂「こがねいろ」の略言。——いろ［黄金色］(名) こがねの如き黄色。やまぶきいろ。(大眞)。——ぐさ［黄金草］(名) 【植】菊の異稱。(金草)。——むし［黄金蟲］(名) 【動】(い)鞘翅類中金龜子科に屬する蟲、體色は金光ある綠色にして、花蜜を吸收して害をなす、幼蟲は白色にして、俗に蠐螬(ジサム)といひ、田圃にありて植物の根を害す。(金牛兒、金龜子)。(ろ)「あぶらむし」の一名。——めぬき［黄金目貫］(名) 【植】寒菊の異稱、花の形刀の目貫に似たるより名づく。
こ-がね［小金］(名) 僅なる金錢。
こ-がね［小鐵］(名) 錻の小札の錢にて作りたるもの。
こ-がねがし［小金貸］(名) 僅なる金錢を高き利子を取りて貸す金貸。
こか-の-き［古柯木］(名) 【植】古柯科に屬する木、冬も落葉せず、夏花を開き、秋實を結ぶ、實より鹼を採る。(天竺柱)。
こか-の-しらべ［五個調］(名) 琴にて五とほりのしらべ方、即ち掻手(カイテ)・片垂(カタタリ)・水字瓶(スヰウヒヤウ)・蒼海波(サウカイハ)・雁鳴(ガメイ)の稱。
こ-がはせ［小爲替］(名) ㊀郵便爲替にて、五圓以下のものゝ稱、爲替料三錢なり。㊁「こがはせしようしよ」の略言。——しようしよ［小爲替證書］(名) 小爲替の證書、該小爲替取扱の郵便局より差出人に交附するもの、受取人は何處の郵便局にても、これと引換に現金を受取ることを得。
こ-がひ［蠶飼］(名) かひこを養ふこと。(養蠶)。
こ-がひ［子養］(名) ㊀子を養ふこと。㊁こどものときよりやしなひ育つること。「―の小僧」。(子飼)。
こ-がひ［小買］(名) 一時に多量の買入をなさずして、少々づゝの買入をなすこと。大買の對。(零買)。
こ-がひ［小貝］(名) 漢字の偏の名、財・貯などの字の左方の貝の字の稱。おほがひ(頁)の對。
こ-がひな［小腕］(名) 小さきかひな。こうで。
こ-がへり［子轉］(名) 出產に臨み、胎內の子の位置を顛倒して、頭部の自然に下方に向ふこと。
こか-ぼう［五加棒］(名) 一種の菓子、もこし米にて圓柱體に製し、黄粉にて包みたるもの。(梱家寶)。
廿こ-がみ(名) (「このかみ」(小腹)の略言)ゑたはら。
こ-がも［小鴨］(名) 【動】かもの一種、小形なり、背部灰黑色にして赤茶色の斑條あり、腹部は白褐色にして暗黑色の斑點あり。
こ-がら［小雀］(名) 【動】燕雀類に屬する鳥、形はやまがらに似て、背腹共に白く翅尾共に黑し、嘴小さくして鋭く、木實及蟲を食す、美聲を發して鳴く。

［こがら］

こ-がら［子柄］(名) 子供の樣子(ヤウス)又は顔だち。
こ-がらし［木枯］(名) 季秋より初冬にかけて吹く風。(凩、颬)。
こ-がらす［小烏］(名) ㊀小さき烏。㊁平家重代の名劍の名。
こがら-ふ［古柯蜒］(名) 古柯木より採りたる鹼。
廿こがら-め［小雀］(名) 【動】「こがら」の古名。
こが-る［焦］(自、ら下二) ㊀燒けて黑くなる。㊁いたく心に望みおもふ。㊂深く戀ひ慕ふ。
こがれ-じに［焦死］(名) 深く戀ひ慕ひ、ために病を發して死ぬること。
〔こがれる［焦］(自) 「こがる」の訛。
〔ご-かん［沍寒］(名) はげしき寒さ。
〔ご-かん［五感］(名) 視・聽・嗅・味・觸の五つの感覺。
〔こ-き［古稀］(名) (杜甫の詩の人生七十古來稀の句に出づ)七十歳の稱。
こ-き［國忌］(名) (「こくき」の略言) ㊀天皇・皇后等の御忌日。㊁國喪。
(こ-き［古器］(名) 古代の器物。古物。
(こ-き［古記］(名) 古き記錄。舊記。
(こ-ぎ［狐疑］(名) (狐は疑ひぶかき獸なりとの義に出づ)疑ひためらふこと。まよひてきまらぬこと。
(こ-ぎ［古義］(名) ㊀むかしの意義又は解釋。㊁【佛】眞言宗にて、空海の所說を全然遵奉するもの。新義の對。
(こ-ぎ［古儀］(名) 古昔の儀式。
(ご-き［碁器］(名) 碁石をいるゝ器。
(ご-き［誤記］(名) かきあやまり。かきそこなひ。
(ご-き［五氣］(名) 溫・涼・寒・燥・濕の稱。
(ご-き［五畿］(名) 畿內五國、即ち、山城・大和・河內・和泉・攝津の稱。ごきない。
(ご-き［語氣］(名) ものいひぶり。ことばのいきほひ。
(ご-き［御器］(名) 椀の稱。(合器)。
廿こぎ-いた［胡鬼板］(名) 「はごいた」の古稱。
(こ-きう［故舊］(名) ふるきなじみ。むかしよりのしりあひ。(舊知)。
(こ-きう［狐裘］(名) 狐の腋下にある白毛にてつくりたるかはごろも、古昔、支那にてこれを珍重せり。
こき-おろし［扱落］(名) こきおろすこと。
こき-おろ-す［扱落］(他、さ四) ㊀むしりておとす。こきておとす。㊁ひどく人を貶む。

こ-ぎく［小菊］(名) ㊀花の細かき菊。㊁一種の紙、多く鼻紙に用ふるもの。
〔こき-こき(名、副) ㊀固きものゝ動くさまにいふ語。㊁物をすり洗ふさまにいふ語。
ごき-ざら［五器皿］(名) 五種の供物を盛る佛具。
廿こき-し［幾許］(副) そこばく。いくら。
こき-たけ［扱竹］(名) 稻を扱(コ)ぐ具、竹をもて作る。
廿こきた-し(形、二) 多し。
廿こき-た-む［漕回］(他、ま四) 漕ぎめぐる。
廿こき-た-る［扱垂］(自、ら下二) たれさがる。たる。
〔こき-つかひ［扱使］(名) こきつかふこと。
〔こき-つか-ふ［扱使］(他、は四) むごきあひしらひをなして使ふ。あらくくしく追ひつかふ。
こ-ぎって［小切手］(名) 一種の手形、銀行に對して細緻したる信用を有するもの若しくは銀行に當座預金あるものが、其銀行を支拂人として振出したる一覽拂のものにして、必ず振出人・支拂人・受取人の三者を具有せざるべからず、尤も振出人は自己を受取人となすことを得、所持人は其日附より一週間內にこれを呈示して、支拂を求めざるべからざるものとす、此手形も裏書によりて轉傳することを得。——ちやう［小切手帳］(名) 小切手を綴(ト)ぢ合せたる帳面、銀行より當座預金者に交付するもの。
(ご-きない［五畿內］(名) 五畿に同じ。
〔こ-きび［小氣味］(名) 「こきみ」に同じ。
(こ-きふ［呼吸］(名) ㊀息(イキ)の出入。㊁【動】動物の生活作用を營むため、呼吸器によりて外氣と血液との間に絕えず行はるゝ瓦斯の交換、即ち、體內の可燃物質の酸化によりて生ずる炭酸を排出して酸素を攝取すること、空氣中に棲息するものは、氣中に於てこれを行ふを得れど、水中に棲息するものは、直接に空氣に觸れざるが故に、水中に溶解せる酸素を取り、又、其中にて炭酸を排出するなり。㊂【植】植物が動物の如く、體內の炭酸を排出して外部の酸素を攝取すること、萌芽せんとする種子又は開放せんとする花蕾の如きは、其作用最も盛んなりとす。㊃つりあひ。かねあひ。はずみ。ぐあひ。——うんどう［呼吸運動］(名) 【生】肺臟が內部の空氣を交換するために、絕えず行ふ一種の伸縮。——き［呼吸器］(名) 呼吸の作用を營む器官の稱にして、即ち、高等動物の肺臟・魚類の腮又は蜘蛛類の肺嚢・昆蟲類の氣管若しくは下等動物の皮膚等これなり。
(こ-きぶつ［古器物］(名) 「こき」(古器)に同じ。
こき-ま-ず［扱雜］(他、さ下二) かきまぜ、まぜあはす。
こき-まぜ［扱雜］(名) こきまずること。
こ-ぎみ［子君］(名) なじみとなれる遊女。
こ-きみ［小氣味］(名) きもち。きみ。
こき-もとゆひ［扱元結］(名) 「もとゆひ」に同じ。
(こ-きやう［故鄕］(名) ふるさと。きやうり。故山。故國。(鄕國、家鄕)。
(ご-きやう［五經］(名) 儒學にて聖人の述作として最も尊重する五つの經書、即ち易・書・詩・春秋・禮記の稱。
(ご-きやう［五境］(名) 【佛】五つの境涯、即ち色・聲・香・味・觸の稱。
(ご-ぎやう［五行］(名) ㊀支那古來の學說にて、天地の間に循環流行して停息せざる木・火・土・金・水の五つの元氣の稱、これによりて萬物組成せらるといふ、木は育成の德をつかさどり、方位にては東にあたり四時にては春にあたる、火は變化の德をつかさどり、方位にては南にあたり四時にては夏にあたる、土は生出の德をつかさどり、中央の方位にあたり四季の主たり、金は刑禁の德をつかさどり、方位にては西にあたり四時にては秋にあたる、水は任養の德をつかさどり、方位にては北にあたり四時にては冬にあたるとせり、又、木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ずるを相生といひ、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に克つを相克といふ、陰陽家などにてはこれを男女の性に配し、相生のもの相合すれば和合して幸福あり、相克のもの相對すれば不和にして災難來るといへり。㊁【佛】五つの修行、即ち布施・持戒・忍辱・精進・止觀の稱。
(ご-ぎやう［御形］(名) 【植】「はゝこぐさ」に同じ。——よもぎ［御形蓬］(名) 【植】前條に同じ。
(こ-きやく［沽却］(名) 賣り果たすこと。賣却。
(ご-ぎやく［五逆］(名) 五つの罪惡又は刑罰、佛道にては、父を殺すこと・母を殺すこと・佛身より血を出だすこと・阿羅漢を殺すこと・和合の僧を破ることの稱にして、其一を犯すとも必ず無間地獄に落つといへり、普通にては、君を殺すこと・父を殺すこと・母を殺すこと・祖父を殺すこと・祖母を殺すことの稱にして、何れも極刑に行はるゝものとせり。
(こ-きゆう［胡弓］(名) もと西洋より渡來せし一種の樂器、形は三味線に似て小さく、小弓の弦にて其絃を摩して音を出す。(鼓弓、提琴)。


［こきゆう］

(こ-きよ)[故墟](名) ふるき城あと。
(こ-ぎよ)[枯魚](名) ほしうを。ひもの。
(こ-きよく)[古曲](名) 古代の音曲。
(こ-きり)(名、副) ㊀かぎり。きり。たけ。「これ—出さぬ」。㊁固きもの、觸れ合ふさまにいふ語。「頭を—ぶつける」。
++こき・る(れ・れ・る・る・れ・れよ)[扱入](他、ら下二) ひきてしごき入る。こきおとしている。
こ・きる(ら・り・る・る・れ・れ)[小切](他、ら四) ㊀小部に分く。小さく切る。㊁ねぎる。
(こ-ぎれ)[小切](名) ㊀物の小さきぎれはし。特に、反物の切れはし。㊁芝居にて、衣裳に附屬する襟卷・腰卷・しごきおび等の稱。
(こ-きん)[胡琴](名) 淸樂に用ふる一種の樂器、もと胡國より傳はりしものといふ。
(こ-きん)[古金](名) 昔時通用せし貨幣。——ぎん[古金銀](名) 前條に同じ。
(ご-きん)[五金](名) 金・銀・銅・鐵・錫の稱。
こきん-びな[古今雛](名) 雛人形の小さきもの。
(こ-きんらん)[古金襴](名) 古代の金襴。
(こく)[穀](名) 常食に供する穀物、即ち、米・麥・豆・粟・稷・黍等の類。たなつもの。
(こく)[石](名) ㊀斗の十倍の量。(斛)。㊁日本形の船舶の積量にて、十立方尺の稱。「千—船」。
(こく)[刻](名) ㊀てうこく。きざみ。ほり。㊁漏刻の水の漏れ落つる壺の内の箭にきざみてある目盛、其一刻は一時間の四分の一を表はす。㊂一晝夜の百分の一の稱、一日を十二時とし、晝夜の長短によりて差あれども、平均一時は八刻三分の一にあたる、春分及秋分は晝夜各五十刻、冬至は晝四十刻夜六十刻にして、夏至は晝六十刻夜四十刻なり。㊃十二時に十二支を配したる一時の三分の一の稱。「巳の上—」「申の下—」。
(こく)[酷](名) 嚴に過ぐること。又、むごきこと。「—なる」
(こく)[殼](名) 昆蟲などの外皮。から。
こ・く(か・き・く・く・け・け)[扱](他、か四) ㊀かきおとす。むしる。[扱毟]。
〔こ・く〕[放](他、か四) はなつ。發す。「屁を—」。
㊁物の間に挾み又は物の間を通して引く。「鉛を—」。
こ・ぐ(が・ぎ・ぐ・ぐ・げ・げ)[漕](他、か四) ㊀船にて船をこぎ進む。「船を—」。(擢、榜)。㊁居睡して體をぶらつかす。
(ごく)[獄](名) ㊀囚人などを其自由を束縛してとめおく所。ごくや。「—に下す」。㊁うつたへ。訴訟。
(ごく)[穀](名) 穀物。「—つぶし」。
(ご-く)[御供](名) 「ごくもつ」(御供物)の略音。
(ご-く)[五苦](名) 【佛】人生の五つの苦、即ち生・老・病・死及愛別の稱。
(ご-く)[語句](名) ことば。又、ことばのきり。
(ごく)[極](副) このうへなく、きはめて。もつとも。
(ごく-あく)[極惡](名) 最大なる惡逆。
(こく-あん)[國安](名) 國内の治安。
(こく-い)[刻意](名) 自分の意思をいためくるしむること。自分の慾情をおさへつくること。
(こく-い)[黑衣](名) ㊀黑色のきもの。㊁すみぞめのころも。僧衣。——のさいしやう[黑衣宰相](名) 僧侶にして君王を輔佐し大政に參與するものゝ稱。
(こく-いう)[國有](名) 國家の所有。
(こく-いん)[刻印](名) きざみてこしらへたる印。
(ごく-いん)[極印](名) ㊀昔時、通用貨幣の發行所及量目などの證據に、其貨幣に打ち込みし符號。㊁きはめの證據、しるし。
(こく-いん)[黑印](名) すみつき。
(こく-う)[穀雨](名) 二十四氣の一、春の氣節中の最後なるもの、陽曆四月二十日にあたる。
(こ-くう)[虚空](名) ㊀天地間の空なる所。そら。㊁【佛】無相無色なること。㊂「—を摑んで七顛八倒」。前後の思慮なきこと。うつかりしてあること。氣のつかぬこと。㊃目的なきこと。㊄忌憚なく亂暴を行ふこと。——かい[虚空界](名) 【佛】眞如は無形無相にして、一切所作の業を受容するより、眞如の妙理又は眞如の境地の稱。——ざう[虚空藏](名) ㊀【佛】菩薩の名、智慧慈悲の廣大無礙なると恰も虚空を藏とせるが如しといふ、其像は、右に劍を持ち左に如意寶珠を持つ。㊁「こめわし」の一名。——もの[虚空者](名) 忌憚なく亂暴を行ふもの。

〔こくうざう(一)〕

(ご-くう)[御供](名) ごくもつ。ごく。——しよ[御供所](名) 社寺に屬して、神佛にさゝぐる供物(クモツ)を調ふる所。(神廚)。——すゐ[御供水](名) 神佛に奉る水。
(こく-うん)[國運](名) 一國の運命。(國步)。
(こく-うん)[黑雲](名) くろくも。
(こく-えい)[黑影](名) くろきかげ。又、かげぼふし。
(こく-えう-せき)[黑耀石](名) 【鑛】玻璃質火山岩の一種、質脆く黑色又は赤褐色にして、介殼狀の斷口を有す、器物又は粧飾品の料に供せらる、上代には、これを用ひて矢の根などをつくりたり。
(こく-えき)[國益](名) 一國の利益。「—を計る」。
(こく-えん)[黑鉛](名) 【鑛】石墨に同じ。

(こく-えん)[黑烟](名) 黑きけぶり。くろけぶり。
(こく-おん)[國恩](名) 生まれたる國の恩。
(こく-おん)[國音](名) ㊀一國の人の固有の音聲。㊁字音に對して、我國語の音の稱。
(こく-か)[國歌](名) 一國のおほやけの儀式に、奏樂にのぼせうたふべきものと定められたる歌。
(こく-か)コッ[刻下](名) このごろ。いま。
(こく-か)コッ[國家](名) 【法】一定の土地に於て統治組織を有する人類の社會、又、統治權の主體、すべてこれなり。——がく[國家學](名) 國家の性質・組織及其發達・變遷等に關して研究する科學。——きくわん[國家機關](名) 【法】國家が國土人民を統治するために設けたる機關、内閣・各省大臣・裁判所等。——けいざい[國家經濟](名) 國家の財政。——けういく[國家教育](名) 【教】國家に於て施行せらるゝすべての教育の稱。又、國家主義によりて教育事業を組成し、以て個人の教育を施すこと。——しやくわいしゆぎ[國家社會主義](名) 【經】國家が、個人放任主義をも取らず國家萬能主義をも取らず、放任を得策とすれば放任し、干涉を得策とすれば干涉し、殊に重きを富の分配に置きて貧弱を保護し、社會の平衡を保持するを以て目的となす主義。=State socialism。——しゆぎ[國家主義](名) ㊀【倫】人生の行爲の目的は、其保屬する國家の福利・安寧を保護・增進するにありといふ主義、其中に個人の福利及意思は絕對に國家の犧牲となして、これに服從せしむべしと極端に論ずるものもあれど、個人が國家の保護の外に於て生存し得ざると同じく、國家も個人なければ成立し得ざるが故に、國家の福利の增進を圖ると同時に、また個人の福利の增進を圖るべしと說くもの多し。㊁【經】國際貿易の政策上、個人を單位とせずして國家を單位とし、國家全般の利害を標準とする主義。——しゆけん[國家主權](名) 【法】「しゆけん」(主權)に同じ。——しゆけんせつ[國家主權說](名) 【法】主權は國家にありて、君主は其機關なりといふ說。——ばんのうしゆぎ[國家萬能主義]=Collectivism(名) 【經】經濟上の事業を個人に放任するは、社會の秩序を亂り、貧富の懸絕をしてますます甚しからしむるものなるが故に、勢力を富の分配の標準とし、經濟上の事業は、すべて國家に於て經營すべしとの主義。——れんがふ[國家聯合](名) 【法】國家と國家とが、共同して政務を施行するために聯合すること。
(こく-が)[國衙](名) 國司のつかさ。
(こく-かい)コッ[國界](名) くにざかひ。國境。
(こく-かう)コッコウ[國交](名) 國と國との交際。
(こく-がう)コウゴウ[國號](名) 一國の稱號。王朝のとなへ。
(こく-がく)[國學](名) ㊀我國の國史・國文等を研究する學問。㊁古昔、諸國に設けたりし學校。㊂支那の古代にて、天子の宮城のある地若しくは諸侯の居城ある地に設けてありし學校、國の大學。
(こく-かん)コッ[國漢](名) 國文と漢文と。
(ごく-かん)ゴッ[極寒](名) 極めて寒きこと。(酷寒)。
(こく-き)コッ[國忌](名) 「こき」に同じ。
(こく-き)コッ[國旗](名) 一國の規定の旗じるし、即ち其國を表示する旗、我國にては日丸を章とす。
(こく-き)コッ[國基](名) くにのもとゐ。
(こく-き)コッ[國器](名) 國家ををさむるほどの大器量、又、其大器量ある人物。
(こく-ぎ)[國儀](名) 國家のおほやけの儀式。
(こく-きう)コッ[黑球](名) 黑色のたま。
(こく-きふ)コツキウ[哭泣](名) 聲をあげて泣くこと。
(こく-きやう)コツキヤウ[國境](名) くにざかひ。
(こく-ぎやく)[酷虐](名) くるしめしへたぐること。
(こく-きん)コッ[國禁](名) 國法上の禁制。
(こく-く)コッ[刻苦](名) いたく心力をつかふこと、身心をくるしめつとむること。「—勉強」。
(こく-くわい)コッ[國會](名) ㊀全國各地の人民より選擧したる各議員が、集まりてなす大會議。㊁民選又は勅選等の議員を以て組織せられたる憲法上の合議制度の機關、帝國議會の如きこれなり。——ぎゐん[國會議員](名) 國會を組織する議員、衆議院議員などの如きこれなり。
(こく-ぐわい)[國外](名) 一國の領土の外。
(こく-くわう)コックワウ[國光](名) ㊀一國の政治・風俗等の狀態。「—を觀る」。㊁くにのひかり。くにのさかえ。くにのいきほひ。(國威)。
(こく-くわん)コッ[國患](名) 國家のうれひ。くにの害。
(こく-くん)コッ[國君](名) 一國の君主。くにのきみ。(國王)。
(こく-くん)コッ[國訓](名) 我國にて行はるゝ漢字のよみ。
(こく-けう)コツキヨウ[國教](名) 國家が認めて國民の信奉すべき宗教とし、其教務を國家の事務の一部として取扱ふもの、我國には國教の制度なし。
(こく-げき)[轂擊](名) 車のこしきとこしきとが摩(ス)れあふこと、人の雜沓するさまにいふ語。
(こく-げつ)[黑月](名) 曆にて望以後の月。
(ごく-げつ)[極月](名) 十二月の異稱。しはす。
(こく-けん)コッ[國憲](名) 國家の根本の法規。くにののり。
(こく-けん)コッ[黑圈](名) 黑きけんてん。

(こく-けん)コツ[國權](名) 國家の權力。——**たう**[國權黨](名) ㊀國權を擴張し強盛にせんとを目的として團結したる黨派。㊁曾て、熊本縣下を本據となしゝ一種の黨派。

(こく-げん)[刻限](名) 定めたるかぎりの時刻。——**づけ**[刻限附](名) 急速の取扱を要する文書などに、其取扱の刻限を記すると。

(こく-こ)コツ[國庫](名) 國家の收入支出をなす本源、即ち、國家の資產を集合して統一せる所。又、國家が財產權の主體たる場合の稱。——**きん**[國庫金](名) 國庫の所有に屬する金。——**さいけん**[國庫債劵](名) 「こくさいしようけん」(國債證劵)に同じ。——**しべん**[國庫支辨](名) 國庫より其費用を支出すると。

(こく-ご)[國語](名) ㊀國民一般に使用する其國の言語。㊁我國固有の言語。——**がくかう**ガッコウ[國語學校](名) 臺灣總督府の統轄に屬し、我國語を教授する學校。

(ごく-ごく)[極極](副) きはめて。もっとも。「——わるい」。

(こく-さい)[國祭](名) 我國のおほやけの祭日、即ち、四方拜・元始祭・孝明天皇祭・紀元節・神武天皇祭・春季皇靈祭・秋季皇靈祭・天長節・神嘗祭・新嘗祭の稱。

(こく-さい)[國宰](名) 大臣。宰相。

(こく-さい)[國債](名) 國家の公債。——**しようけん**[國債證劵](名) 國債を表證するための證劵、公債證書の如きこれなり。

(こく-さい)[國際](名) 國家と國家との交際又は關係。——**かはせ**ワーカセ[國際爲替](名) 外國爲替に同じ。——**くわいぎ**[國際會議](名) 國際上の事件に關し、各國の全權委員によりて催(モヨホ)さるゝ會議。——**くわんれい**[國際慣例](名)

國際上に行はるゝ從來のならはし。——**けいはふ**ケーホ[國際刑法](名) 【法】犯罪に就きて、國家と國家との關係を定むる國際法。——**こうあん**[國際公安](名) 【法】國家の安寧秩序の關係が、其國に存在する場合の稱。——**こうはふ**コーホ[國際公法](名) 【法】國際法の一、國家と國家との權利關係を規定したる法律の稱にして、各國のこれを承認したるもの。——**こんいん**[國際婚姻](名) 【法】これを行ふ人又は土地が、二國以上に關係したる婚姻の稱。——**しはふ**シーホ[國際私法](名) 【法】國際法の一、二國以上の人民相互間の權利關係を規定したるもの。——**だんぱん**[國際談判](名) 國際の事件に關したる談判。——**でうやく**デウヤク[國際條約](名) 條約に同じ。——**はさん**[國際破產](名) 【法】一の破產が國際上の關係となる場合の稱。——**はふ**ホー[國際法](名) 【法】國際公法及國際私法の總稱。——**はんけん**[國際版權](名) 【法】國家と國家との間に、條約を締結して保護する彼我の國民の版權。——**ぶんげふ**[國際分業](名) 【經】一國民と他國民との間に行はるゝ分業、例へば甲國はおもに農業、乙國はおもに鑛業、丙國はおもに工業に從事する等をいふ、かくて有無過不足相通じて人生の經濟を形成す。——**ぼうえき**[國際貿易](名) 一國民と他國民との間に行はるゝ貿易。外國貿易。

(こく-ざい)[國財](名) ㊀國民の總財產。㊁國家の所有に屬する財貨。(國帑)。

(ごく-さいしき)[極彩色](名) 最も精密にしたる彩色。いと見事なる彩色。(大着色)。

(こく-さう)サウ[國葬](名) 國家に偉大なる功勞ある人などの葬式を國費をもて行ふと。

(こく-さう)サウ[國喪](名) 國民全體の喪、即ち、主上・皇后・皇太后等の喪の稱。

(こく-ざう)ザウ[國造](名) 上古の國司。くにのみやつこ。

(こく-さく)[告朔](名) 「こうさく」に同じ。

(こく-さん)[國產](名) 其國の產物。又、我國の產物。

(こく-し)[國師](名) 古來、天子より智德高き禪僧に賜はる稱號。

(こく-し)[黑子](名) ㊀ほくろ。(黑痣)。㊁ちひさきもの。「彈丸——の地」。

(こく-し)[國史](名) 其國の歷史。又、我國の歷史。(國志、國乘)。

(こく-し)[國司](名) 古昔、日本六十六國及二島に置かれたる地方官の稱、守・介・掾・目等の職員ありたり。「土佐の——」。

(こく-し)[國士](名) 全國中最もすぐれたる人。

(こく-じ)[國字](名) ㊀其國の文字。㊁我國にて特に造りたる字、例へば辻・畑などの類をいふ。

(こく-じ)[告示](名) 一般に告げしらすると。ふれわたし。(布達)。

(こく-じ)[國璽](名) 國家を表章する印、我國のは方二寸九分の金材にして、大日本國璽の五字を志るしあり、内大臣これを尚藏す、國書・條約批准・勳記等にこれを鈐せらる。

(こく-じ)[酷似](名) 極めてよく似てあると。

(こく-じ)[國事](名) 直接に國家に關する事柄、特に政事に關していふ。——**たんてい**[國事探偵](名) 國事犯に關する罪狀を探偵すると。又、其職務の人。——**はん**[國事犯](名) 【法】直接に政治上の秩序を害せんとする犯罪、内亂及外患に關する犯罪の如きこれなり。

(ごく-し)[獄死](名) 獄中にて死ぬると。

(ごく-しう)[獄囚](名) 獄舍にとらはれたる囚人。

(こく-しつ)[黑漆](名) ㊀黑色のうるし。又、それにて塗りたるもの。㊁黑色のうるしの如く、光澤ありて深黑なると。

(こく-しつ)[梏桎](名) ㊀てかしとあしかしと。㊁自由を束縛すると、又、自由のほだし。

(こく-しびやう)ビヤウ[黑死病](名) 「ペスト」に同じ。

(ごく-しや)[獄舍](名) ひとや。らうや。

(こく-しやう)シヤウ[濃漿](名) 一種の料理、鯉の肉を濃(コ)き味噌汁をもて煮詰めたるもの。

(こく-じやう)ジヤウ[國情](名) 一國の情態。くにのありさま。(國狀)。

(ごく-じやう)ジヤウ[極上](名) 最もすぐれたると。きはめてよきと「——の品」。

(こく-しやう-がん)[黑障眼](名) 「そこひ」の一名。

(こく-しゆ)[國守](名) ㊀古昔、國司の長官。くにのかみ。㊁國持の大名。一國の領主。

(こく-しゆ)[國手](名) (一國の名手の義) 醫師又は碁打などの名人の稱。

(こく-しゆく)[穀菽](名) 米・麥・粟・大豆・小豆等の總稱。

(こく-しよ)[國書](名) ㊀君主又は大統領が、其國の名を以て發する文書。㊁國の歷史・文章などの書籍。

(こく-しよ)[酷暑](名) きびしき暑さ。

(ごく-しよ)[極暑](名) 前條に同じ。

(こく-しよく)[國色](名) 國中にならぶものなき容色、又、絕世の美人。「——無雙」。

(こく-しよく)[黑色](名) くろきいろ。——**じんしゆ**[黑色人種](名) 世界の人種の三大別の一、皮膚黑色若しくは濃褐色にして、髮黑く鼻平く、顎の中央突出したるを特徵とす。

(こく-じよく)[國辱](名) 一國の辱。くにのはぢ。

(こく-じん)[國人](名) 國の人民。くにたみ。

(こく-じん)[黑人](名) 黑色人種に屬する人。くろんぼう。——**しゆ**[黑人種](名) 「こくしよくじんしゆ」に同じ。

(ごく-しん)[極心](名) 心をこめてものをすると。

こく-すセシ、スル、スレ、セヨ[哭](自、さ變) ㊀大聲をたてゝかなしみ泣(ナ)く。なきさけぶ。㊁支那にて、死を弔して、なきさけぶ禮を行ふにいふ。

こく-すセシ、スル、スレ、セヨ[刻](他、さ變) きざむ。ほる。

こ-ぐすり[粉藥](名) 粉末にしたる藥。散藥。

(こく-すゐ)[國粹](名) 物質上又は精神上に於ける其國固有の長所、國民の特性・國土の狀態又は歷史等によりて養成せらる。——**ほぞん**[國粹保存](名) 時勢如何に變遷すとも、國粹は永くこれを保存すべしといふと。

(ごく-ずゐ)[極髓](名) ㊀このうへなきと。㊁最も中心の所。

こくすゐ-の-えん[曲水宴](名) 「きよくすゐのえん」に同じ。

(こく-ぜ)[國是](名) 輿論の認(ミト)めて可とする國政の方針。「——を定む」。

(こく-せい)[國政](名) 國のまつりごと。

(こく-せい)[國勢](名) 國のありさま又はいきほひ。

(こく-せい)[哭聲](名) なきさけぶ聲。

(こく-せい)[國製](名) 其國の製造。又、我國の製造。

(こく-ぜい)[國稅](名) 中央政府が其經費を支辨するために、直接に賦課する租稅、地租・所得稅・營業稅・關稅・登錄稅等の類これなり。地方稅の對。——**ひん**[國稅品](名) 國稅として上納する物品、沖繩縣・小笠原島・伊豆七島にて行はる。

(ごく-せい)[極製](名) 最上の製造。特別の製造。

(こく-せう)セウ[酷肖](名) よく似てあると。

(こく-せき)[國籍](名) 【法】一國の臣民たる資格

分限、又、其取得喪失の公證、國籍を日本に有すといへば、現に日本の臣民たるなり。

(こく-せん)[黑綫](名) 黑色のすぢ。

こ-くそ[蠶糞](名) 蠶(カヒコ)の糞。

(こく-そ)[告訴](名) 【法】或犯罪の被害者が、犯罪事實を其權限ある官府に申告すると。——**にん**[告訴人](名) 告訴せし被害者。

(ごく-さう)[獄窓](名) 監獄のまど。轉じて、監獄のうち。

(こく-そく)[觳觫](名) 死をおそるゝさまにいふ語。

(こく-ぞく)[國俗](名) 國の風俗習慣。

(こく-ぞく)[國賊](名) 國家に仇をなすもの。君を害し世を亂しなどする者。

こ-ぐそく[小具足](名) 鎧(ヨロヒ)の胴のみを略して、他は皆な着用してあると。

(ごく-そく)[獄則](名) 監獄内の規則。

(ごく-そつ)[獄卒](名) ㊀看守又は押丁の如き、獄囚を取扱ふ地位卑(ヒク)きもの。㊁【佛】地獄にて亡者を責むるといふ鬼。㊂義理人情を知らぬ人をいやしめていふ語。

(こく-たい)[國體](名) ㊀國家を其組織特に其主權の存在によりて觀察したる稱、これを君主國體と共和國體との二に別つ。㊁國家の狀體。くにがら。㊂國家の面目。「——を辱しむ」。

(こく-だい)[國內](名) 「こくない」に同じ。

(ごく-たい)[玉帶](名) ごくのおび。

(こく-だう)ダウ[國道](名) 公道中にて幅員最も廣き定めの道路、即ち東京より伊勢の大廟又は各府縣廳・各師團司令部・各鎭守府等に通ずる道路。

(ごく-だう)ダウ[獄道](名) ㊀邪曲なると。惡事を行ふと。㊁放蕩なると(大阪地方の方言)。㊂「ごくだうもの」の略言。——**もの**[獄道者](名) わ

るもの。又、はうたうもの。

こく-だか[石高](名) ❶米穀の數量。❷扶持(ﾁﾌ)の高。

こく-だち[穀斷](名) 神佛などに祈願して、穀物を斷ちて食はぬこと。

(こく-たん[黒檀](名) 【植】柿樹科に屬する木、熱帶地方に産す、材質緻密にして淡黒色なり、諸種の什具を作るに用ひらる。(烏木、烏樠木)。

(こく-たん[穀旦](名) (穀は善の義) 吉日。良辰。

(こく-たん[黒炭](名) 【鑛】石炭の一種、色純黒にして光輝あり、これを火中に投ずればよく燃え黒煙臭氣を發す、木炭に比すれば三倍の火力を有す、主に燃料に供せらる。

(こく-ち[告知](名) つげしらすること。――さんか[告知參加](名) 【法】訴訟の告知を受けて、其訴訟に參加すること。――ばん[告知版](名) 特定の人に告知せんとする事柄をしるしおくための版、鐵道停車場などに旅客使用のために設く。

こ-ぐち[小口](名) ❶きりはし。はし。「木の―」。❷いとぐち。端緒。「亂行の―」。❸區別。部門。❹少なき額。多からぬ量。「―の預金」。❺「こぐちぼり」の略言。――がき[小口書](名) 物の小口に其物の性質などを記すこと。又、其文句。「雜誌の―」。――ぎり[小口切](名) 小口を切ること。又、小口より順次に切ること。――どり[小口取](名) ❶小口よりものをとること。❷部門を設け區別をなすこと。――ぼり[小口彫](名) 版木の材の橫斷面に、彫刻を施すこと。又、其彫刻物。――のはかま[小口袴](名) くゝりを入れたる大口の袴。

こぐち-たうざ[小口當座](名) 「こぐちたうざよきん」の略言。――よきん[小口當座預金](名) 銀行が一口の金高五圓以下に限りたる特別の當座預金、普通の當座預金より高利を附し、これが引出又は預入は共に通帳を以てす。

(こく-ちゆう[國中](名) 國のうち。國內。

(こく-ちゆう[黒丑](名) 【植】「あさがほ」の一名。

(ごく-ちゆう[獄中](名) 獄屋の中。

(ごくちゆう-あくにん[極重惡人](名) 世のつねならぬ惡人。最も重き罪を犯(ｵｶ)したる惡人。

(こく-ちよ[國儲](名) 諸侯の世子。又、君主の後繼者。

こく-ぢら[小鯨](名) 【動】くぢらの一種、形狀はせみくぢらに似、稍や小さくして圓長なり、頭小く背鰭なし、全身淡黒色にして淡灰色の斑文あり、口中の鬚白し、通常は溫順なれど、稚兒を伴ふときは強暴なり、皮肉共に佳良にして、殊に鬚は工藝上貴重なる材料なり。

[こくぢら]

こく-づけ[刻附](名) こくげんづけ。

(ごく-つぶし[穀潰](名) (徒食するもの、義) 無能無益にして、徒(ｲﾀﾂﾞﾗ)に生活する人をのゝしりていふ語。(菜袋)。

(こく-てい[國定](名) 國家の制定、國法の規定。――けうくわしよ[國定教科書](名) 文部省などが、特に編纂撰定したる學校の教科書。――ぜいりつ[國定稅率](名) 國法の規定したる輸出入貨物に賦課する稅率。

(ごく-てい[獄丁](名) 獄卒。

(こく-てう[國朝](名) わがくに。わがてうてい。

(こく-てん[國典](名) ❶國の儀式又は事例。❷我國文にて我國の事を記したるもの。邦書。

(こく-てん[黒點](名) 黒色の點。くろぼし。

(こく-てん[黒甜](名) ひるね。午睡。

(こく-と[國都](名) 一國の首都。

(こく-ど[國土](名) ❶【法】統治權の客體の一、國家の領有に屬する土地、即ち統治權の行はるゝ境域。❷ふるさと。故國。

(こく-ど[國帑](名) 國庫の貨財。

(こく-ど[黒奴](名) 黒人を卑(ｲﾔ)しめていふ語。

(こく-ど[黒土](名) ❶黒色の土。❷耕土の一、百分中二十以上の腐植物を含有し、鬆輕にして淡黒色なる土壤、地味甚肥沃なるものとす。

(こく-とう[黒頭](名) 髮くろき頭、轉じて、年わかき人。――こう[黒頭公](名) 宰の稱。

(こく-ない[國內](名) くにのうち。國中。――こうあん[國內公安](名) 【法】國內の安寧秩序に關するすべての場合の稱。

(ごく-ない[獄內](名) 監獄のうち。

(ごく-ない[極內](名) 極めて秘密なること。

(こく-ないしやう[黒內障](名) 「そこひ」の一名。

(こく-なん[國難](名) 一國の危難。國家のわざはひ。

(こく-にく[黒肉](名) 黒色の印肉。

(ごく-ねち[極熱](名) 非常にあつきこと。

(こく-ねつ[酷熱](名) 前條に同じ。

(ごく-ねつ[極熱](名) 前條に同じ。

‡ごく-の-おび[玉帶](名) 束帶の時袍を束ぬる帶、革にて製し飾るに玉石を以てす。

こく-はく[木鍬](名) 全體を木材にてつくりたる鍬。(木鑱)。

(こく-はう[國寶](名) ❶くにのたから。❷全國の社寺の寶物中、特に歷史の徵證となり若しくは美術の模範となるべき物件にして、內務大臣が古社寺保存會に諮詢して、保存すべき資格ありと認定したるもの。

(こく-ばう[國防](名) 國家が外敵に對して、設せる防禦。くにのふせぎ。

(こく-はく[酷薄](名) 殘酷にして、なさけ心なきこと。邪見。(刻薄)。

(こく-はく[告白](名) つげかたること。あからさまにいふこと。

(こく-はく[黒白](名) 「こくびやく」に同じ。

(こく-はつ[告發](名) 【法】犯罪の被害者外のものが、其犯罪事實を權限ある官府に申告すること。

(こく-はふ[國法](名) ❶一國家に於けるすべての法規。國家が直接に制定せし法規。くにのおきて。❷【法】國家の編制及各部の組織權限を定めたる法規。――がく[國法學](名) 國家の編制を解剖し、各部の組織權限を研究する學。

(こく-ばん[黒板](名) 黒く塗りて白堊を以てこれに物事をかくための板、多くは學校の教室等にて教授用に掛け用ふ。

(こく-ひ[國費](名) 國庫支辨に屬する費用。

‡こくび[袵](名) 衣服の襟(ｴﾘ)。

こ-くび[小首](名) 首を傾くるときに首の稱にいふ語。――をかたむく 首をかたむく。轉じて、思案するにいふ。

(ごく-ひ[極秘](名) 極めての秘密。

(ごく-び[極微](名) ❶極めて微なること。最も小なること。❷夫々の道の最もおくふかき義理。

(こく-ひやう[酷評](名) 過度にからき批評。手ひどき批評。

(こく-びやく[黒白](名) ❶黒色と白色と。❷正と邪と。善と惡と。

(こく-ひん[國賓](名) 國家の賓客として、官府より特別なる優待をなす外來の貴賓。

(ごく-ひん[極品](名) 極上の品。

(ごく-ひん[極貧](名) 甚しき貧乏。

(こく-ぶ[國府](名) ❶古昔、國ごとに置かれたる國司の官衙。府中。(國衙)。❷「こくぶタバコ」の略言。――タバコ[國府烟草](名) 大隅國國府地方より出す烟草、香氣ありて佳良なり。

(こく-ふう[國風](名) ❶國中の風俗。❷國中のはやりうた。

(こく-ふう[谷風](名) ❶東の風。❷【地】登間山腹の溫度昇るにより、溪谷より吹き上ぐる風。

(こく-ふく[克復](名) 以前の狀態にかへること。又、以前の狀態にとりもどすこと。「平和―」。

(こく-ふく[克服](名) 敵にかちて服從させること。

(こく-ぶつ[穀物](名) 「こくもつ」に同じ。

(こく-ぶん[國文](名) 國語を以て綴りたる文章の總稱。特に我國語にて綴(ﾂﾂﾞ)りたる文章。――がく[國文學](名) 我國文の解釋組織又は使用等に就きて研究する學。

こくぶん-じ[國分寺](名) 天平十三年勅命を以て諸國に必ず建立せしめられし寺院、僧をおきて其國內の僧尼を監督せしめられたり。

(こく-へい[國柄](名) 國土人民を支配する權力。國の政權。「―を握る」。(國秉)。

(こくへい-しや[國幣社](名) 官幣社・別格官幣社に亞(ﾂ)ぐ格の神社、大社・中社・小社等の別あり。

(こく-べつ[告別](名) わかれをつぐること。いとまごひをすること。

(こく-ほ[國步](名) 一國のいきほひ又は運命。「―艱難」。

(こく-ぼ[國母](名) 「こくも」に同じ。

(こく-ぼたん[黒牡丹](名) ❶【植】紫黒色の牡丹の稱。❷【動】牛の異名。

(こく-ほん[國本](名) 一國のねもと。くにのもとゐ。「農は―なり」。

(こく-ほん[刻本](名) 彫刻したる版木を印刷したる書物。版本。

こく-ま[黒熊](名) 【動】熊の一種、小形なり、毛は黒褐色にして尾短し、雜食す。

‡こくみ[寄肉](名) こぶ又はいぼ等の總稱。

(こく-みん[國民](名) ❶【法】統治權の客體の一、一定の統治權の下に服從關係を有する人類。(蒼生)。❷同一の國籍を有する人民。同一の種族に屬する人民。――ぎむ[國民義務](名) 國民一般の負擔すべき公法上の義務、納稅義務・兵役義務等これなり。――ぐん[國民軍](名) 國民兵を以て編制したる軍隊。――けいざい[國民經濟](名) 【經】國民として共同生活を營む經濟的活動。――けういく[國民教育](名) 【敎】國民に國民たる本分を知らしむるを目的とする教育。――けふくわい[國民協會](名) 明治二十五年、西鄕從道・品川彌二郎等の主唱にかゝる政治的團體、始めは倶樂部組織なりしが、後に政黨となり、明治三十二年に解散したり。――しゆぎ[國民主義=Nationalism](名) 異なる民族を排斥して同一の民族を以て國家を組織すといふ主義。又、自國民と同一なる民族を合して、自國の權力關係の下に置かんとする主義。――せいしん[國民精神=Nationality](名) 國家のために盡くす國民の氣風、國家の保護發達を圖る國民の精神。――せき[國民籍](名) 【法】國籍に同じ。――へい[國民兵](名) ❶國民兵役に服する國民の、召集せられて國民軍に編入せられたるもの。❷國民兵役の略言。――へいえき[國民兵役](名) 兵役の一、第一國民兵役と第二國民兵役とに分つ、第一國民兵役は後備兵役及補充兵役を終へたるものこれに服し、第二國民兵役は、常備兵役・後備兵役若しくは第一國民兵役にあらざる滿十七歲以上滿四十歲以下の日本帝國男子の悉く服するもの、

事變に際し、後備兵役にあるもの盡く召集せられ、尙は兵員を要する場合には召集せらる。
(こく-む)[國務](名) 國家の政務。――だいおん[國務大臣](名) 內閣を組織する最高官府、國家の政務に關し、天皇を輔弼し、法律・勅令其他國務に關する詔勅に副署して其責を明かにす、たとひ自己の意見に反すとも、其官職にある間は、副署を拒むことを得ざるものとす。
(こく-めい)[克明](名) まめやか。まっていゝ。(東京地方の方言)。
(こく-めい)[國名](名) ㊀くにのとなへ。㊁くにの名譽。
†こく-も[國母](名) 皇太后又は皇后を申し奉る語。
こく-もち[黑餅](名) 紋所の名、正圓の中に模樣(モヤウ)のなきもの、中古の武士が、矢口の祭事の黑餅を象(カタド)りて始めたりといふ。――つけ[黑餅附](名) こくもちを付けたる着物。
(こく-もつ)[穀物](名) こくるゐ。
こく-もり[石盛](名) 穀の出來高により、其田畝の位地を定め年貢(グテン)の石數を定むること。
(ごく-もん)[獄門](名) ㊀獄屋の門。㊁昔時の刑罰、死罪に處したる者の首を、獄屋の門の邊の木に懸けて梟(サラ)しゝこと。さらしくび、梟首。(竿首、梟獄)。――くび[獄門首](名) 獄門に處せられたる首、さらしくび。――だい[獄門臺](名) さらし首を載する臺。
ごく-や[獄屋](名) らうや。ひとや。
(こく-よう)[國用](名) 國事の費用。
(こく-ら)[小倉](名) 「こくらおり」の略言。――おり[小倉織](名) 一種の織物、絲は木綿にして博多(ハカタ)織の如くに厚く織る、帶地又は袴地となす、もと豐前國小倉より出しゝが故に此名あり。――だち[小倉裁](名) 小倉織にて製造したるもの。
(こく-らう)[國老](名) 大名(ダイミヤウ)の家老。
〔こぐら-か・る〕(自、ら四) 粲(ミダ)れてからまる、こんぐらかる。こんごらかる。もつる。
(ごく-らく)[極樂](名) ㊀[佛]西方十萬億の佛土を經過したる處にありて、阿彌陀佛の居所といふ世界、蓮華を以て世界をなし、諸事具足圓滿にして安樂ならずといふをなし、佛果を得たる亡者こゝに往生すといふ。㊁安樂にして何等の心配なき境涯。――おうど(ジヤウド)[極樂淨土](名) 前條に同じ。――せかい[極樂世界](名) 前條に同じ。
(こく-らん)[國亂](名) 一國のみだれ。國內のさうどう。(內亂)。
(こく-り)[酷吏](名) ㊀殘酷なる官吏。㊁極惡の異稱。
(こく-り)[國利](名) 國家の利益。「ー民福」。
〔こくり〕(名、副) 「こっくり」に同じ。「ーく居睡る」。
(ごく-り)[獄吏](名) 監獄の官吏。罪囚を扱ふ官吏。
(こくりつ-ぎんかう)[國立銀行](名) 明治五年以後に不換紙幣引揚のため、政府の特別なる保護によりて各地に設立せられし銀行、明治廿九年以來、營業滿期と共に次第に私立銀行に變じ、明治三十二年に至り全く消滅せり。
(こく-るゐ)[穀類](名) 米・麥など穀のたぐひ。こくもつ。
こ-ぐれ[木暮](名) 木陰(コカゲ)の暗き所。(木暗、樹陰)。
(こく-れつ)[酷烈](名) 極めてはげしきこと。いときびしきこと。
(こく-ろん)[國論](名) 一國全般の議論。
(こ-くわ)[瓠瓜](名) 【植】「ゆふがほ」の一名。
(こ-くわ)[瓠果](名) 【植】うり・きうり等胡蘆科に屬する植物の果實。
(ご-くわ)[五果](名) 李(スモモ)・杏(アンズ)・棗(ナツメ)・桃・栗の稱。又、柑(ミカン)・橘(タチバナ)・栗・柿・梨をもいふ。
(こく-わう)[國王](名) ㊀國の元首の王と稱するもの。(國君)。㊁民族の長にして、政權を握りてあるもの。「南蠻のー」。
(ご-くわう)[後光](名) 佛の體より發射すといふ想像の光輝、佛像の肩上に金色の輪などを附けたるは、これをうつせるなり。(圓光)。
(こくわう-とう)[孤光燈](名) 「ことう」(弧燈)に同じ。
(ご-ぐわつ)[五月](名) 一年の第五番目の月の稱。陰曆五月の異名をさつきといふ。(皐月)。――ささげ[五月豇](名) 【植】「いんげんまめ」の一名。――せっく[五月節句](名) 五節句の一、五月五日の稱にして、迎へて男子を祝ふ節句とす。(端午)。――にんぎやう[五月人形](名) 五月節句に、幼(ヲサナ)き男子の祝ひにかざる武者(ムシヤ)人形。――のぼり[五月幟](名) 五月節句に幼き男子の祝ひにたつる幟。
(ご-くわん)[五官](名) 人身の五つの機關、即ち眼(視官)・耳(聽官)・口(味官)・鼻(嗅官)・皮膚(觸官)の稱。
(こく-ゐ)[國威](名) 國の威光。「ーを輝す」。
(こく-ゑん)[國遠](名) 遠國に遷(ウ)さるゝこと。
(こ-くん)[古訓](名) 古代のよみ方。
(こ-ぐん)[孤軍](名) 味方少なき軍隊、援なき軍隊。
(ご-くん)[五葷](名) 一種の臭氣ある五つの蔬菜、佛家にては、大蒜・小蒜・興蕖・慈葱・茖葱をいひ、道家にては韭・薤・蒜・芸薹・胡荽をいひ、練形家にては、小蒜・大蒜・韭・芸薹・胡荽などをいふ。
こけ[苔](名) ㊀【植】蘚苔門に屬する隱花植物の總稱、莖葉の區別判然せず、古木・濕地又は石などに叢生す、微細の葉を著くるものあり、又は全體扁平なるものあり。㊁閑居又は世捨人などにいふ語、「ーの庵」「ーの衣」。㊂死にて葬(ハウ)らるゝこと、「ーとなる」。

(こけ)(名) きのこ。(美濃・尾張地方の方言)。
こけ[鱗](名) うろこ。「瓜のー」。
こけ[虛假](名) おろかもの。ばか。(白痴、愚漢)。
こげ[焦](名) こげたること。焦げたるもの。
ごけ[後家](名) ㊀夫を失(ウシナ)ひて後、なほ獨身にて家を守りゐる寡婦。ごうしつ。やもめ。(孀婦)。㊁二つそろひてあるべきもの丶中、一つ失(ウ)せて殘りたる方の稱。
(ご-け)[五家](名) 眞宗の五つの並立ちたる寺、即ち、東本願寺・西本願寺・佛光寺・錦織寺・專修寺の稱。
ご-け[碁笥](名) 碁石を入るゝ圓き器。(碁奩)。
(こ-けい)[估計](名) ㊀ねうち。㊁みつもり。
(こ-けい)[固形](名) 一定の形を有すること。――たい[固形體](名) 固體に同じ。
(ご-けい)[五刑](名) ㊀支那の五種の刑罰、即ち、墨(イレズミ)・劓(ハナキリ)・剕(アシキリ)・宮(勢を割くこと)・大辟(クビキリ)の稱。㊁支那の上代に於ける五つの罪惡、即ち、農を害すること・軍にありて將の命にたがふこと・不孝などをなすこと・官吏にして其職を盡くさゞること・謹愼ならざることの稱。㊂昔時の五種の刑罰、即ち、笞・杖・徒(ヅ)・流(ル)・死の稱。
(ご-けい)[互惠](名) 相互の間に、特別の便益又は恩典を交換的に享有すること。――でうやく(デウ)[互惠條約](名) 互惠の目的を以て締結せられたる條約。
(ご-けい)[御禊](名) 「みそぎ」の敬稱。
(ご-けい)[吾兄](代) 同輩などを親しみて呼ぶ代名詞、「ーの手紙」。
ごけ-いり[後家入](名) 後家の方に壻入すること。
(ご-けう)[五教](名) ㊀「ごじやう」(五常)に同じ。㊁【佛】華嚴の五つの敎、即ち小乘敎・大乘始敎・大乘終敎・一乘頓敎・不思議乘圓敎の稱。
〔こけ-おどし〕[虛假威](名) たゞおろかなるものを威(オド)すに足るほどの、至てあさはかなる手段。
こげ-くさ・し[焦臭](形、二) 火に焦(コ)げたるにほひあり。物のやくるにほひあり。
こけ-ごろも[苔衣](名) 世すて人などの着るみすぼらしき衣服。(蘿衣)。
こげ-ちゃ[焦茶](名) 濃(コ)き茶色。
こけ-しのぶ[苔忍](名) 【植】しのぶの一種、形苔(コケ)に似る。
(こ-けつ)[固結](名) 固く結ぼるゝこと。かたまること。
(こ-けつ)[虎穴](名) ㊀とらの棲(ス)むあな。㊁極めて危險なる地。――にいらずばこじをえず[不入虎穴不得虎兒] 危險の地を踏まずば功名を成すを得ざるにいふ。
(ご-け-にん)[御家人](名) 德川時代の將軍家直參の士分。家人。
こけ-の-いほ[苔庵](名) わびずまひのいぶせき家。
こけ-の-した[苔下](名) くさばのかげ。はかのした。
ごけ-ぶん[御家分](名) 御家相應の取扱を受くるもの。
こけ-むしろ[苔席](名) 苔(コケ)の生(ハ)えたる樣をむしろにたとへいふ語。
こげ-めし[焦飯](名) 焦(コ)げたる飯。(鍋底飯)。
こけ-もも[苔桃](名) 【植】石南(シャクナゲ)科に屬する小灌木、高山に生ず、葉は小楕圓形にして花は淡紅色なり、果實は細く漿果にして食すべし。(越橘)。
こけら[柿](名) ㊀材木を削りたる片。こっぱ。㊁材木(多くは槇又は檜)を薄く剝(ハ)ぎたるもの、おもに板屋根などを葺(フ)くに用ふ。やねいた。――ぶき[柿葺](名) こけらにて屋根を葺くこと。又、其葺きたる屋根。
〔こけ-ら〕[苔](名) 【植】「こけ」に同じ。
〔こけ-ら〕[鱗](名) 【植】「こけ」に同じ。
こ-げら[小啄木](名) 【動】きつゝきの一種、雀大にして保護鳥の一なり、頭部は茶褐色、頸喉は白色、胸・背・翼に黑白の横紋ありて腹部は白色なり、多く山地に棲息す。

[こげら]

〔こ・ける〕(自、か下一) たふる。ころぶ。
〔こ・ける〕[憔](自、か下一) やす、ほそる、「頰がー」。
〔こ・げる〕[焦](自、か下一) 火に焼けて黑くなる。こがる。
(こ-けん)[孤劍](名) 單身劍を携へて行くこと。
(こ-けん)[沽券](名) ㊀地所の所有權を證する手形。うりけんじやう。㊁うりねの記してある書付。㊂ねうち。品位。「ーが下がる」。
(こ-げん)[古言](名) ㊀古代に使用せられし言語。㊁古人のいひしことば。
(こ-げん)[古諺](名) 古代のことわざ。
(ご-けん)[御見](名) (御見參の略言)面會の敬語。――もじ[御見文字](名) (「もじ」は添辭)前條に同じ。
(ご-げん)[語原](名) 或言語の成り立ちたるもと。
(こ-こ)[呱呱](名、副) 乳兒の泣く聲。「ー乳を求む」。
こ-こ[此處](代) 自身より最近の場所を示す代名詞。このところ。(茲、爰)。
(こ-こ)[個個](名、副) ひとつ〳〵。おの〳〵。
(こ-ご)[古語](名) 「こげん」(古言)に同じ。
(ご-こ)[五鈷](名) とっこの一種、兩端の五つに割れたるもの。
(ご-こ)[五古](名) 五言の古詩。

こ-こ［五胡］(名) 支那の晉の頃、北方より內地に移住せし五種の異族、即ち、匈奴・羯・鮮卑・氐・羌の稱。
こ-ご［午後］(名) ㊀正午より日沒までの間。ひるすぎ。㊁正午より夜半までの時間。
こ-こ(名) めし(關東の方言)。
こ-こう［糊口］(名) ㊀(粥を食ふの意)からく生を送ること。㊁くちすぎ。よすぎ。
こ-こう［股肱］(名) (もゝとひぢとの意)最もたよりにする臣下又は目下。「―の士」。
こ-こう［虎口］(名) (虎の口の意)非常に危難なる所又場合。「―をまぬかる」。
こ-こう［戸口］(名) 戸數と人口と。
ごこう-ごみん［五公五民］(名) 田畝の全收穫の五分を官に納めて貢租とし、殘餘の五分を農民の所得となすこと。
こごえ-じに［凍死］(名) 寒氣のために、こゞえて死ぬること。
こご-える［凍］(自、下一)「こゞゆ」の訛。
ここ-かしこ［此處彼處］(代) このところかのところ。方々。
こ-こく［故國］(名) ㊀ふるさと。こきやう。㊁ふるきくに。むかしからのくに。
ご-こく［五穀］(名) ㊀五つのたなつもの、即ち、米・麥・粟・黍・豆の稱。㊁穀類の總稱。
ご-こく［後刻］(名) のちほど。のちがた。
こ-ごし［小腰］(名) ㊀少し腰を曲(ま)げたるさまにいふ語。㊁古昔、女の裳の腰の左右にとりつけたる細き布の紐。
＋こご-し しく、しく、し、しき、しけれ (形、二) おほやうなり。おほらかなり。「こゞしうなまめいたるすぢをえなんみせぬ」。
＋こご-し しく、しく、し、しき、しけれ［險］(形、二) けはし。

こ-ごしよ［小御所］(名) 足利時代に、將軍の參內せるとき、裝束を改めて休息するため、宮中に設けたる所。ごんごしよ。
ご-こしよ［五鈷杵］(名)「こんがうしよ」(金剛杵)に同じ。
ご-こしより［御己證］(名)【佛】宗祖などが師匠の敎を受けずして、自ら悟りたる道。
＋ここ-だ［幾許］(副) 澤山。多く。そこばく。こゝば く。——く［幾許］(副) 前條に同じ。
ここ-ち［心地］(名) ㊀こゝろもち。氣分。㊁なさけ。あはれみ。「―なう」。
こ-ごと［小言］(名) ㊀いひ聞かする理窟。志かり戒しむることば。㊁獨にてつぶやくこと。ひとりごと。㊂かげぐち。わるくち。
こ-こざ［[illegible]戸］(名) けんぺつ。かどなみ。
ここ-に［此、是］(副) ㊀この所に。この場に。㊁この折に。この時に。——おいて［於是］(接) ㊀この時に當りて。この所にありて。㊁其理に由りて。其わけ故に。
ここぬ-か［九日］(名)「ここのか」に同じ。
ここの［九］(數) ここのつ。——か［九日］(名) ㊀月の第九番目の日、ここぬか。㊁ここのつの日數。——かさね［九重］(名) 天子の住みたまふ所。ここのへ。——そぢ［九十］(數) 十を九つ加へたる數。くそぢ。——つ［九］(名) 昔時の時刻の名、今の十二時。——つ［九箇］(數) 十より一を減じたる數。三の三倍。く。——つ-どき［九時］(名) 正午又は夜半、即ち今の十二時。
ここの-へ［九重］(名) ㊀九つのかさなり。㊁(支那にて天子の位置を九天にたとへいふより名づく) 禁中の別稱。——ざ［九重座］(名) 兜の「はちまんざ」の異稱。——びと［九重人］(名) おほみやびと。殿上人。

＋ここ-ば［幾許］(副)「ここだ」に同じ。——く［幾許］(副)「ここだく」に同じ。
ここ-べつべつ［個個別別］(名、副) ものものゝ別れ別れになるさまにいふ語。
ここ-む［踞］(自、ま四) 腰をかゞむ。かゞむ。
ここ-む［踞］(他、ま下二) かゞましむ。
こ-ごめ［粉米、小米］(名) 搗(つ)く時碎けたる米の細末。(米屑)。——うつぎ［粉米空木］(名)【植】薔薇科に屬する木、葉は單葉にして互生し、花は恰も粉米の如く白色小形にして十箇乃至十二箇の雄蕊を有す。(珍珠花)。——ざくら［粉米櫻］(名)【植】薔薇科に屬する木、叢生す、葉は狹披針形、花瓣は五個ありて白色なり、雄蕊は花瓣より短し、觀賞用として栽培せらる。(笑靨花)。——ばな［粉米花］(名)【植】「こゞめざくら」の一名(京阪地方及四國の方言)。——やなぎ［小米柳］(名)【植】いはやなぎ。——ゆき［粉米雪］(名) こゞめの如くちらちら降る小片の雪。「元」。
ここ-もと［此許］(代) このところ。こゝ。(幾許、此
こ-ごもり［子籠］(名) 子の胎內にとまること。にんしん。くわいにん。——ざけ［子籠鮭］(名) 鹽びきの鮭の腹の中に、其子を鹽漬にしたるものを入れたるもの。いれこざけ。
こご-ゆ［凍］(自、や下二) 寒氣のために、肢體感覺を失ふ。
＋ここ-ら［許多］(名、副) あまた。きよた。(多々)。
ここ-ら［此邊］(代) この邊。この近所。
こご-り［凝］(名) こゞること。又、こゞりたるもの。——どうふ［凝豆腐］(名)「こほりどうふ」の一名。

こご-る［凝］(自、ら四) こほりて固くなる。こる。「油が―」。
こころ［心］(名) ㊀智情意の全範圍、即ち意識。㊁おもひ。こゝろばせ。おもんぱかり。かんがへ。㊂たましひ。志やうね。㊃なさけ。おもひ。「―なの人々や」。㊄ことわけ。いみ。——にいる 氣にあふ。こゝろにかなふ。——にかかる 忘れられず。心配になる。——にこむ 心に忘れず。——にとむ 心におぼえおく。記憶す。——にのる 心にかなふ。——をおく 氣をつかふ。心配す。——をくむ 他の心の程をすゐりやうす。おしはかる。——をとる きげんをとる。——をやる きをはらす。——をわく 千々に心をくばる。
こころ-あしげ［心惡氣］(名) ㊀心ざまのよからぬさまにいふ語。㊁きもち快からぬさまにいふ語。
こころ-あたり［心當］(名) ㊀心におしはかること。おしはかり。㊁おしはかりたる目當。
こころ-あて［心當］(名) ㊀前條に同じ。㊁こゝろだのみ。
こころ-ありげ［心有氣］(名) 何等かのおもひ又はわけのあるらしきこと。
こころ-いき［心意氣］(名) ㊀きだて。こゝろばへ。こゝろばせ。㊁寄するおもひ。思ひ慕ふ心の中。
こころ-いそぎ［心急］(名) こゝろぜき。
こころ-いぢ［心意地］(名) がうぢやう。いぢ。
こころ-いっぱい［心一杯］(名、副) 思ふさま、思ふさま。
＋こころ-いられ［心苛］(名) 心のいら立つこと。こゝろぜき。
こころ-いれ［心入］(名) 氣を付くること。注意。
こころ-う［心得］(他、あ下二) ㊀會得(エトク)す。理解す。㊁覺悟す。用意す。㊂修學す。まなぶ。㊃承諾す。ひきうく。

こころ-うつり［心移］(名) 心がはり。
こころ-え［心得］(名) こゝろうること。こゝろうる物事。——がほ［心得顏］(名) こゝろうるさま。こゝろうるふり。——ちがひ［心得違］(名) ㊀思ひちがひ。考へちがひ。(誤解、誤認)。㊁條理にたがひたる行爲。
こころ-おき［心置］(名) こゝろづかひ。
＋こころ-おきて［心掟］(名) 心のおきて。心のさだめ。
こころ-おくれ［心後］(名)「きおくれ」に同じ。
こころ-おち［心落］(名) てぬかり。志くじり。
こころ-おとり［心劣］(名) 心ざまのおとりてあること。
こころ-おひ［心生］(名) 心のまゝに生ひ出づること。
こころ-おぼえ［心覺］(名) ㊀心に覺えてゐること。(記憶)。㊁きおくのしるしとなすもの。
こころ-がかり［心掛］(名) 心にかゝること。こゝろづかひ。きがかり。志んぱい。(懸念、疑慮)。
こころ-が-く［心掛］(他、か下二) 常に心を付く。常に心にとゞむ。
こころ-がけ［心掛］(名) 心がくること。
こころ-がさ［心嵩］(名)「どりやう」(二)に同じ。
こころ-がはり［心變］(名) ㊀＋心のくるふこと。發狂。㊁心のかはること。おもひの他へ移ること。「―の男の身」。(變心)。
こころ-がへ［心替］(名) 自分の心を人の心と取替ふること。
こころ-がまへ［心構］(名) 心に待ち受くること。こゝろぐみ。ようい。かくご。
こころ-から［心自］(副) 心より起りて。
こころ-がら［心柄］(名) ㊀心のさま。こゝろだて。こゝろがけ。㊁自業自得。

こころ-くばり［心配］(名) 志んぱい。
こころ-ぐみ［心組］(名) かねて思ひ居ること。こゝろがまへ。(心算)。
こころ-くらべ［心競］(名) いきばり。いきぢ。
こころ-ぐる-し［心苦］(形、二) 氣遣はし。志んぱいなり。轉じて、氣毒なり。「―くはあれど見ざらましかばくちをしからまし」。
こころ-ざし［志］(名) ㊀心の向ふこと、思ひ立つこと。㊁心に一定したる目的。又、心に樹立する信念。㊂おもひこみ。ぞんねん。㊃自分のこゝろの程を表して、物を贈り又は事を行ふこと。「折角の―」。
こころ-ざ-す［志］(自、さ四) (心指すの意) ㊀心向ふ。思ひ立つ。めざす。㊁＋自分のこゝろの程を表して、贈り與へ又は行ひ爲す。「人のあからさまにこしの國へまかりけるにぬさ―とて」。
こころ-ざはり［心障］(名) 心にかゝること、氣にさはること。こゝろがかり。きざはり。
こころ-ざま［心樣］(名) 心のありさま。心底。(心狀)。
こころ-さむ-し［心寒］(形、二) ぞっとす。おそろしがる。
こころ-さわぎ［心騷］(名) むなさわぎ。
こ-ごろし［子殺］(名) 我子を殺すこと。
こころ-しづかに［心靜］(副) あわてずに。おちつきて。
＋こころ-しらひ(名) こゝろづかひ。こゝろがまへ。
こころ-しり［心知］(名) 其に心の底(ソコ)を知りあひてゐること。
こころ-す［心］(自、さ變) ㊀心をとゞむ。㊁氣を付く。㊂心地になる。おもひになる。
こころ-ぞへ［心添］(名) こゝろづけ。忠告。
＋こころ-たがひ［心違］(名) 心と違ふおこなひ。「―とはいひながら、猶めづらしうみえらめ人の

御ありさまなりや」。　「み。
こころ-だくみ[心企](名) 心中のかんがへ。たく
こころ-だ-つ[心立](自、た四) 思ひたつ。
くはだつ。　「氣性」。
こころ-だて[心立](名) 心ばへ。氣だて。(斉性、
こころ-だのみ[心頼](名) 心の中にて、たのみに
思ひ居ると。又、其相手。　「たましひ。
こころ-たましひ[心魂](名) こんぱやう。
こころ-だより[心便](名) 心の中にて、たよりに
思ひ居ると。又、其相手。
こころ-づかひ[心遣](名) 心をいろ〳〵には
たらかすと。氣をさま〴〵にくばると。志んぱい。け
ねん。きぐらう。(心勞、心痛)。
+こころ-づ-から[心自](副) 自己の心よりして。
こころ-づき[心付](名) こゝろづくと。
こころ-づ-く[心付](自、か四) 心にとま
る。氣が付く。
こころ-づ-く[心付](他、か下二) ㊀人
に注意す。告げ知らす。㊁思ひやる。くみとる。
こころ-づくし[心盡](名) 心を盡くして其ため
を計ると。又、其ためにいろ〳〵と氣を揉(モ)むと。
「—も仇となり」。
こころ-づけ[心付](名) 心づくると。こゝろぞ
へ。
こころ-づよ-し[心強](形、二) ㊀人情乏し、
つれなし。㊁懸念少なし。心たしかなり。(氣丈夫)。
こころ-どけ[心解](名) 心の和ぎとくると。
+こころ-どり[心取](名) きげんをとると。
こころ-なが[心長](名) 氣のゆるやかなると。あ
せらざると。きなが。 ——し[心長](形、
二) 氣長にてあり。

+こころ-な-ぐ[心和](自、か四) 心やはら
ぐ。　「じ。きばらし。
+こころ-なぐさ[心慰](名) きなぐさみ。きさん
こころ-なげ[心無氣](名) 何等の感じもなく見
ゆると。
こころ-な-し[心無](形、二) ㊀なさけ心な
し。つれなし。㊁思慮なし。うつけなり。㊂無邪氣
なり。をさなし。
こころ-ならず[不心](副) ㊀本意にあらずして。
心とたがひて。㊁心も心ならずして。不安心にて。
(非意)。
+こころ-ならひ[心慣](名) 心に志みこみし
ならはし。心の癖。　「にいふ語。
こころ-にくげ[心憎氣](名) こゝろにくきさま
こころ-にく-し[心憎](形、二) ㊀覺束無
く思はる。心置きせらる。㊁奥ゆかしく思はる。㊂
心に惱く思はる。
こころ-ね[心根](名) ㊀こゝろのそこ。心底。㊁
せい志つ。根性。　「おもひ。
+こころ-の-いづみ[心泉](名) 心に浮び出づる
+こころ-の-いろ[心色](名) 心のさま。
こころ-の-おに[心鬼](名) ㊀あらぬ心配して、
われとわが心をくるしむると。㊁慈悲のこゝろな
く、殘酷なるにいふ語。
こころ-の-くも[心雲](名) 心のまよひ。煩惱。
こころ-の-こま[心駒](名) 煩惱のために心の狂
(ル)ふを、駒の狂ふにたとへいふ語。
こころ-の-こり[心殘](名) ㊀何となく遺憾に思
はるゝと。ざんねん。㊁断念し離きと。みれん。
こころ-の-すぢ[心筋](名) おもひのおもむき。
こころ-の-そこ[心底](名) 飾りいつはらぬま

ことのおもひ。こゝろね。
こころ-の-たけ[心丈](名) おもひのかぎり。
こころ-の-ちり[心塵](名) ぼんなう。私慾。
こころ-の-つき[心月](名) さとり開けて智見
明かなるを、月にたとへいふ語。
こころ-の-とも[心友](名) ㊀よく心を知りあ
ふ友。㊁心を慰藉するたよりとなるもの。
こころ-の-まま[心儘](名、副) おもふまゝ。お
もふぞんぶん。　「とへいふ語。
こころ-の-みづ[心水](名) 心の清濁を水にた
こころ-の-やみ[心闇](名) 思ひみだれて理非
の判斷つかぬを、闇にたとへいふ語。
+こころ-ば[心葉](名) ㊀古昔、大嘗會などに、冠
の巾子の前に掛けし造花の飾、主上のは銀にてつく
れる櫻のかざし、臣下のは鍍金(メッキ)にして山吹・梅
など位階の高下によりて種類を異にしたり。㊁古
昔、贈物に添へし飾、絲にて花・紅葉などの形を結び
又は種々の美しきものをかざりたり。
こころ-ばかり[心許](名、副) たゞ僅かに心の
程を表したるばかりのさまにいふ語。
+こころ-ばしり[心走](名) こゝろさわぎ。
こころ-ばせ[意](名) (心馳の義)心の趣(オモム)き向
ふと。おもひ込むと。おもひいり。 +——びと[意
人](名) 心ある人。なさけある人。
こころ-はづか-し[心羞](名) はぢら
はし。うらはづかし。きまりわるし。
こころ-ばへ[意](名) ㊀心のおもむき。心のさ
ま。㊁おもむき。ありさま。「庭の—も面白く」。
+こころ-ば-む[心](自、ま四) 心あり。おも
ひあり。なさけあり。
こころ-ばらし[心晴](名) ㊀きばらし。きなぐ

さみ。㊁無念ばらし。
こころ-ぶか-し[心深](形、二) なさけぶ
かし。おもひぶかし。
こころ-ぶと[心太](名) 【植】「ところてん」の異稱。
こころ-ぼそ[心細](名) 心ぼそきと。——し
[心細](形、二) たのみ少なし。ものさびし。
こころ-まうけ[心設](名) こゝろまち。こゝ
ろがまへ。用意。
こころ-まかせ[心任](名) 思ひのまゝ。隨意。
こころ-まち[心待](名) かねて心中に待ちて居
ると。こゝろがまへ。
こころ-まどひ[心惑](名) 心にまどふと。
こころ-まよひ[心迷](名) 心にまよふと。
こころみ[試](名) ㊀こゝろみると。ためすと。㊁
邪慾に誘(イザナ)はれんとすると。(基督教徒の語)。
+こころ-みえ[心見](名) 心のほどの外面にあら
はるゝと。
こころ-みじか[心短](名) きぜき。きみじか。
——し[心短](形、二) 心短にてあり。
こころ-みる[試](他、ま上一) 實際を知
らんとて試驗す。實地に就きてためし見る。ためす。
こころ-む[試](他、ま上二) 前條に同じ。
こころ-むけ[心向](名) おもひをかくると。
こころ-もち[心持](名) 心に感ずる工合。こゝ
ち。きもち。
〔こころ-もち[心持](副) すこし。やゝ。「—長い」。
こころもと-なが-る[心許無](自、ら四)
こゝろもとなく思ふ。
こころもと-な-し[心許無](形、二) ㊀待
ち居て、心も心ならず。まちどほし。㊁覺束なし。き
づかはし。

こころ-やす-し[心安](形、二) ㊀安心な
り。きづかひなし。㊁懇意なり。えたし。
こころやす-だて[心安立](名) 親しきに慣(ナ)
れて、遠慮なきと。(狃昵親)。
こころ-やすめ[心休](名) 氣やすめ。　「慨」。
こころ-やり[心遣](名) おもひを晴らすと。(遣
+こころ-や-る[心遣](自、ら四) おもひを
はらす。こゝろをなぐさむ
こころ-ゆか-し[心懷](形、二) そゞろ
にゆかしく思はる。
こころ-ゆ-く[心行](自、か四) ㊀おもひは
る。きがすむ。㊁心をとられて恍惚とす。ほる。
こころ-ゆるび[心弛](名) 心のおこたり。心のゆ
るみ。　「ぶきと、又、其人。
〔こころ-よし[心好](名) 惡意なけれど、才氣に
こころ-よ-し[快](形、二) (心好しの義)
㊀こころ樂し。心うれし。㊁きもちよし。きみよし。
㊂病氣よし。やまひいゆ。㊃はっきりしてあり。あい
まいならず。㊄勢よし。勢はやし。
こころ-よせ[心寄](名) ㊀ひいき。あいこ。「院の
御—もあれば」。㊁心を寄せかたむくると。
こころ-わすれ[心忘](名) 氣づかずに居ると。
こころ-をかし[心可笑](形、二) 心中
にをかしく思ふ。　「聲」。
こ-ごゑ[小聲](名) 小さき聲。調子の低き聲。(低
〔こ-こん[古今](名) いにしへと今と。——どく
ぽ[古今獨步](名) 其人に比すべきもの古今
になきと。
(ご-こん[語根](名) 【文法】(い)言語を分解して、
もはや分つと能はざるに至れる部分の稱。(ろ)用
言の語尾に對して、その變化せざる部分の稱。例へ

ばつよし」といふ語の「つよ」の類をいふ。「し」は語
尾にて變化す。
(ご-ごん[五言](名) 一句が五つの言より成りたつ
と、又、其もの。 ——こし[五言古詩](名) 五
言の句より成れる古詩。 ——りつ[五言律](名)
五言八句より成れる律詩。——ぜっく[五言絶
句](名) 五言四句より成れる詩。——はいりつ
[五言排律](名) 五言の句より成れる排律。
こ-さ[濃](名) こき度合。　「砂。
(こ-さ[胡砂](名) えびすの土砂。又、支那北方の
(こ-ざ[胡坐](名) あぐら。
(こ-ざ[孤坐](名) ひとりすわりてゐると。
(ご-さ[誤差](名) ㊀たがひ。ちがひ。㊁【數】或數
と其近數との差。又、或量とこれを觀測して得たる
量との差。
(ご-ざ[御座](名) ㊀座の敬稱。㊁あげだゝみ。
ござ[蓙](名) 藺(イ)の莖を編(ア)みてつくりたる志
きもの。(蓙莚、藺席)。
(こ-さい[巨細](名) ㊀大と小と。粗(アラ)きと細かき
と。㊁いちぶ志ぢゅう。ゐさい。
(こ-さい[瓠犀](名) (ひさごのさねの義) ならび
よく色白く美しき齒の稱。　「たらき。
こ-さい[小才](名) 少しの才智。ちよっとしたは
(ご-さい[後妻](名) のちぞひの妻。こうさい。
(ご-さい[五彩](名) 五色。「—の龍文」。　「稱。
(ご-さい[五菜](名) 韭(ニラ)・薤(ラッキョウ)・葵・葱・藿(イ)の
(ご-さい[御祭](名) 土用の牛過より、一七日の間
吹く東北の風。
(ご-ざい[五罪](名) 「ごけい」(五刑)に同じ。
こ-さいかく[小才覺](名) 少しの才智。ちよっと
したはたらき。

ござい-ぶし［語齋節］(名)淨瑠璃の一派、明曆年中、岡島語齋より始まる。

〔**ござい-ま-す**せしすするすれせよ〕［御座在］(自、さ變)「ござります」に同じ。

(**こ-ざう**ザウ)［故造］(名)ことさらに拵(コシラ)へたること。たくみてなすこと。「有心ー」の稱。

(**ご-ざう**ザウ)［五葬］(名)土葬・火葬・水葬・野葬・林葬

(**ご-ざう**ザウ)［五臟］(名)漢法にて、腹中にある肺臟・心臟・脾臟・肝臟・腎臟の稱。——**ろくふ**ーロツプ［五臟六腑］(名)五臟と六腑と。轉じて、腹の中又は心の中。(六腑の條を見よ)。

こ-ざか-ししくしきしけれ［小慧］(形、二)㊀利口ぶる。利口めかす。㊁わるがしこし。小才あり。(巧黠)。

こ-ざかな［小肴］(名)小さき魚類。

こ-さく［小作］(名)他人の土地を借り、小作料を拂ひて耕作又は牧畜などすること。——**にん**［小作人］(名)小作を業とする者。小作の農夫。(賃耕人)。——**れう**ーリヨウ［小作料］(名)［法］他人の土地を耕作又は牧畜の目的を以て使用する報酬として、地主に支拂ふ地代、卽ち、永小作といふ借地の方法による借地料。

こ-ざくら［小櫻］(名)［植］櫻の一種、花の形細かく色淡し。——**をどし**［小櫻縅］(名)小櫻革にて縅(ヲド)したる鎧。又、白絲に紅の絲を混じたるものにて縅したる鎧。——**がは**ーガワ［小櫻革］(名)藍染の地に櫻の花を白く小さく染め出したる革。

［こざくらをどし］

こさ-こさ(名、副)細かきものゝ入りまじりたるさまにいふ語。

こざ-こざ(名、副)前條に同じ。

こ-さつ［小札］(名)(小さき札の義)もと通用せし十錢・二十錢又は五十錢等の紙幣の稱。

(**こ-さつ**)［故殺］(名)［法］一時感情の激發により て殺意を生じ、深思熟慮せずに、これを斷行して人を殺しゝこと。謀殺の對。

(**こ-さつ**)［古刹］(名)ふるき寺院。ふるデラ。

(**ご-さつ**)［誤殺］(名)［法］或人を殺さんとして、誤りて他人を殺すこと。

コサック［哥薩克＝Cossack］(名)「ロシア」國の諸部に住する一種の民族、騎馬に堪能なり、「ロシア」國にては、其中より徵集して騎兵を組織す。——**きへい**［哥薩克騎兵］(名)「コサック」人を以て編制せられたる「ロシア」國の騎兵、馬上にて槍を使用す。

(**こ-ざっぱり**)(名)稍やさっぱりしたるさまにいふ語。「ーした姿」。

こ-ざつま［小薩摩］(名)「こざつまぶし」の略言。——**ぶし**［小薩摩節］(名)一種の俗曲、大薩摩節より分派したるもの。

こざと-へん［阜偏］(名)漢字の偏の名、阿・降等の左方にある阝の字の稱、字書にては阜部に屬す。

こ-ざね［小札］(名)「されし」(札)の條を見よ。——**くさずり**［小札草摺］(名)恐くこざねをもて綴ひたるくさずり。

ござ-の-ま［御座間］(名)貴人の居室。

ござ-ぶね［御座船］(名)貴人の召さるゝ船。

ござ-むしろ［蓙筵］(名)「ござ」(蓙)に同じ。

こ-さむらひーサムライ［小侍］(名)㊀ちひさき體のさむらひ。㊁諸家に奉公する身分卑(イヤ)しきさむらひ。——**どころ**［小侍所］(名)小侍の詰所。

こ-さめ［小雨］(名)細かき雨。(微雨)。

こ-ざら［小皿］(名)小さきさら。てしほ。

〔**ござり-ま-す**せしすするすれせよ〕［御座在］(自、さ變)(「ござる」に「ます」を添へたる語)「ござる」の敬語。

こ-ざる［小猿］(名)小さき猿。又、猿の子。

こ-ざる［小旅］(名)小さき旅。

ご-ざ-るらりるるれれ［御座在］(自、ら四)㊀あいてなさるの、ぶります。㊁わるくなる。損ず。㊂(我意に腐ず。我にもひを寄す。㊃あいぼれる。

(**こ-さん**)［古參］(名)古くより仕へてあること、以前より其職にあること。

(**こ-ざん**)［故山］(名)ふるさと。古巢。故里。故國。

(**ご-ざん**)［五山］(名)㊀京都五山及鎌倉五山の稱。㊁我國の五つの尼寺、卽ち、景愛寺・護念寺・檀林寺・恩林寺・通玄寺の稱。㊂印度の祇園精舍・竹林精舍・大林精舍・誓多林精舍・那蘭陀寺の稱。㊃支那の徑山寺・育王寺・天童寺・靈隱寺・淨慈寺の稱。

(**ご-さん**)［誤算］(名)あやまりの計算。さんようのちがひ。

(**ご-さん**)［午餐］(名)ひるめし。ひるはん。——**くわい**［午餐會］(名)衆客を招待して、午餐を供すること。

〔**ご-ざん-す**せしすするすれせよ〕［御座在］(自、さ變)「ござ います」の訛。

(**ご-さん-ちく**)［五三竹］(名)［植］竹の一種、根に近づくに從ひ、節極めて短かく、時としては三五相連れる故に此の名あり。(蓬竹、佛面竹)。

ござんなれ「こそあるなれ」の約言、にてあるよな。

ごさん-の-きり［五三桐］(名)紋所の名、桐の花と葉とを三つとりあはせて描(エガ)きたるもの、中の花は五つ左右の花はおの／＼三つづゝなり。

こし［腰］(名)㊀人體の脊柱の下部にして骨盤の上部なる所、卽ち、中央の屈曲すべき約所、腰部。㊁凡て物の全體を人身に比して、其腰部にあたる所の稱。㊂衣服などの腰部にあたる部分。㊃押しとほす意氣又は受けたふる精力。「ーが弱い」、「ーが強い」。㊄和歌の第三句の五文字。㊅いきほひ。てうし。「ーを折る」。——**がひくい**人によくへりくだるにいふ。——**をれす**後より腰をつく。後より助く。そゝのかす。——**をかがむ**體を曲げ屈す。——**をかく**尻を物の上にのせて、足を垂る。——**をつく**こしを折りて倒る。又、挫(クジ)け弱る。——**をぬかす**腰のつがひをはづして起つ能はず。又、大いに驚きて爲す能はず。——**をのばす**曲れる身體をのばす。又、休息す。やすむ。——**ををる**こしをかがむ。又、屈服す。へつらふ。

こし［層］(名)建造物の重疊せる段層、かさなり。

こし［輿］(名)㊀人を乘せて舁(カ)き行く乘物、昔時は貴賤尊卑によりて、其形狀製作を異にせり。いたごし・あじろごし・あげごし・さげごし等種類多し。(輦、轎)。㊁二本の長柄にて舁く棺。

［こし(一)］

(**こ-し**)［古詩］(名)㊀漢詩にて律及絕句以外の古體の詩。㊁漢詩の一體、平仄に拘(カカハ)らざるものにして、五言又は七言若しくは長短句あり、其押韻の一韻到底なるものは、第一第二句は韻をふみ、第三句は韻をふまず、それ以後の句は、一句づゝ間をおきて韻をふむを法とす、又、其押韻の一韻到底ならざるものは、韻を換へて韻をふむは勿論なれど、其法種々にして概說し難し、別に柏梁體と稱するものあり、七言にして每句に韻をふむ、杜甫の飮中八仙歌の如きこれなり。

(**こ-し**)［古史］(名)古代の歷史。古代史。

(**こ-し**)［胡荽］(名)［植］「コエンドロ」の一名。

(**こ-し**)［虎視］(名)虎の如く鋭(スル)き眼にてみはること。又、他を併合せんとの雄志を抱き、ひそかに狀勢を覗てあること。「ー眈々」。

(**こ-し**)［顧視］(名)かへりみること。ふりむきみること。

(**こ-し**)［古趾］(名)㊀古昔ありし建築物のどだい石。㊁古昔に或建築物のありし場所。

こ-しくしきしけれ［濃］(形、二)㊀色薄からず。色深し。㊁水分少なし。濃厚なり。㊂味ま つこし、あつし。

—こし［越］「ー」接尾)物を越してするにいふ語。「垣根ー」、「壁ー」。

〔**ご-し**〕［腰］(一接尾)刀を數ふるにいふ語。「太刀」「二ー」の類。

(**こ-し**)［市子］(名)冠の頂上に高く突き出で、髻(モトドリ)を挿入する部分。

(**こ-し**)［兀子］(名)腰を掛くる具、長方形にして四足なるもの、

(**こ-し**)［古時］(名)いにしへ。むかし。

(**こ-し**)［古事］(名)㊀古代にありたる事、以前よりありたる事、㊁傳はり來れる物事に關する因緣。「ー來歷」。(故事)。

(**こ-し**)［怙恃］(名)㊀たのみ。たより。㊁父と母と。

(**こ-し**)［居士］(名)㊀學問ありて仕官せざる人、財貨多くして道義高き人。㊁［佛］男子の法名の下に附くる稱號。又、俗人にして佛門に歸依する男子の稱號。

(**こ-し**)［固辭］(名)固く辭退すること。

(**こ-し**)［孤兒］(名)親にはなれたる幼兒。みなしご。

(**ご-し**)［互市］(名)交易。貿易。

(**ご-し**)［五子］(名)支那の五人の大學者、卽ち、老子・莊子・荀子・揚子・文仲子の稱。

(**ご-し**)［五師］(名)僧侶の職名。

(**ご-し**)［五指］(名)五本の指、卽ち拇指・食指・中指・無名指・小指の稱。

(**ご-し**)［吾子］(代)同輩の敬稱。きみ。ごへん。

(**ご-し**)［五時］(名)㊀一時より第五番目にあたる時間、昔時の七つさがり。㊁［佛］五時敎の略言。

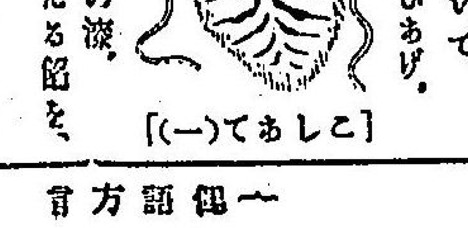
(**ご-し**)［午時］(名)ひるどき。まひる。ま ひるご。

(**ご-し**)［五事］(名)㊀儒學にて五つの重んずべき事柄、卽ち貌・言・視・聽・思の稱。㊁兵法にて五つの重んずべき事柄、卽ち道・天・地・將・法の稱。

(**ご-し**)［語次］(名)言葉ついで。はなしついで。

こし-あげ［腰揚］(名)着物の腰部のぬひあげ。

こし-あて［腰當］(名)㊀形は敗皮の如く、毛皮にてつくり緒(ヲ)をつけ、うしろ腰にあてゝ結ぶもの。(皮腰袋)。㊁すべて腰部にのみあて着くるものゝ稱。


［こしあて(一)］

〔**こし-あぶら**〕［金漆］(名)こがねいろの漆。

こし-アン-こうあん［漉餡］(名)擂(ス)りつぶしたる餡を、すゐなうにて漉(コ)したるもの。

こし-いた［腰板］(名)㊀袴腰につくる板。㊁壁・障子又は垣根などの下部にある板。

こし-いたみ［腰痛］(名)腰に疼痛を感ずる疾病。「えうつう」。

こし-いれ［輿入］(名)㊀嫁(ヨメ)の輿を婿(ムコ)の家に遣(ヤ)り込むこと。㊁よめいり。「おもに、貴人にいふ」。

(**ご-しう**)［五臭］(名)五つの臭氣、卽ち羶・腥・香・焦・朽。

〔**こしうけ**〕［竹簽］(名)魚を捕ふる具、竹にてつくる。(東京近在の方言)。

こ-じうと［小舅］(名)夫(ヲット)の兄弟。(伯叔)。

こ-じうとめ［小姑］(名)夫の姉妹。「又、其人」。

こし-おくり［輿送］(名)輿入に輿を送りゆくこと。

こし-おし[腰推](名) 後方より力を添ふること、そばよりそゝのかすこと。又、其人。あとおし。

こし-おび[腰帶](名) ❶帶の稱。❷婦人の帶の下に纏(マ)ふ細き紐(ヒモ)の特稱。(腰釋)。

こし-かき[輿昇](名) 輿を舁(カ)く人。(駕輿丁)。

こし-かけ[腰掛](名) ❶腰を掛くる臺。(腰架)。❷事件の到來を待つため、假に其處に身をおくこと、糊口を得るために、暫く其職に從事すること。──**しごと**[腰掛仕事](名) 腰掛にする仕事。──**じり**[腰掛尻](名) 暫時其處に身をおき若しくは其職に就き、熱心忠實に事を扱ふ考なきこと。──**だい**[腰掛臺](名) こしをかくる臺。──**ぢゃや**[腰掛茶屋](名) 暫時腰を掛けて休む茶屋。

こし-かた[來方](名) 過去の時。きしかた。既往。

†**こじ-がた**[巾子形](名) 門の閾(シキミ)の中央の地上に挿入せる杭(クヒ)、雙方のとびらをさゝへ止むるもの、冠のこじの形に似たるより名づく。

こし-がたな[腰刀](名) 腰に帶する小刀。わきざし。(佩刀)。

†**こじ-がみ**[巾子紙](名) 冠の纓を前方にをりかへして挾みとむる紙。

[こじがみ]

(**こ**)-**しき**[古式](名) むかしのかた、いにしへの志かた。

こしき[轂](名) 車輪の中央にありて、軸(ジク)其中を貫き輻(ヤ)其外に集まるもの。

こしき[甑](名) 飯を蒸し炊(カシ)ぐ具、古代は瓦にて製し、形圓く底に細き穴ありたり、現今は木にて製し、底に竹の簀(ス)を敷く。せいろう。──**ぬの**[甑布](名) 甑にて物を蒸すとき、蒸籠(セイロウ)の底に敷く布。(炊布)。†──**わら**[甑藁](名) 古昔、今日の簀を用ふるが如く甑の底に敷きし藁の稱。

こ-じき[乞食](名) 食を人に乞ひて生活するもの。こつじき。こもかぶり。(乞兒、乞丐)。──**ごや**[乞食小屋](名) 乞食の雨露をしのぐためにつくりたる小屋、多くは竹などを柱としむしろなどにておほふ。──**しばゐ**[乞食芝居](名) 下等なる芝居。──**ばうず**[乞食坊主](名) ❶こじきをあざけりていふ語。又、僧侶をあざけりていふ語。❷坊主頭の俗人をあざけりていふ語。

(**ご**)-**しき**[五識](名) 【佛】五根によりて五境を生ずる心識の稱。

(**ご**)-**しき**[五色](名) ❶青・黄・赤・白・黒の五つの色。❷五とほりの色、又、種々の色。──**あげ**[五色揚](名) さまざまのものを材料としたる天ぷらあげ。──**さうめん**[五色索麵](名) 五色にそめわけたる索麵、伊豫國の名產。──**なます**[五色鱠](名) 一種の料理、大根・人參など色の異なりたるものをとりまぜてこしらへたる鱠。

こし-きり-ばんてん[腰切半纒](名) 腰までとゞかぬはんてん、賤業者などの常用するもの。

こし-きんちゃく[腰巾着](名) ❶腰に附くる巾着。❷常に他人の傍につき添ひゐるもの。

†**こじ-く**[乞食](自、か四) こじきをなす。ものもらひをなす。

こし-くだけ[腰碎](名) 相撲(スマフ)などにて、態度亂れて敵の突擊を支ふる能はざること。

こし-ぐるま[腰車](名) 柔術などにて、自分の腰にかけて敵の體を浮かし、これを投げ倒すこと。

(**ご**)-**じくわ**[午時花](名) 【植】梧桐科に屬する草、高さ二三尺、葉は鑓鉤子に似て互生す、初秋の頃、葉間に五瓣朱色の花を開く、其花午時に開き午夜に萎(シボ)むより此名あり。(夜落金錢)。

こし-け[腰氣](名) 子宮病の總名。たいげ。

(**ご**)-**じけう**[五時敎](名) 【佛】釋迦牟尼の一代の間に說きし敎法を、華嚴時(ケゴンジ)・阿含時(アゴンジ)・方等時(ハウドウジ)・般若時(ハンニヤジ)・法華涅槃時(ホケネハンジ)の五時代に分けていふ稱。

†**こ-じげ-し**[木繁](形二) 木繁く生じてあり。

(**こ**)**じ-ける**[拗](自、か下二) 拗くゆがむ、ねぢける。こじれる。

(**ご**)**し-ごし**(名、副) 物を磨(ス)るときに發する音、又は物を磨るさまにいふ語。

こし-こばた[腰小旗](名) 腰に帶して標(シルシ)となす小旗。

こし-ごろも[腰衣](名) 僧侶の腰に纏(マト)ふ短くして黒き衣。

こし-さげ[腰提](名) 腰に提(サ)げて持つもの、煙草入の類。

こし-ざし[腰挿](名) ❶腰に挿(サ)して携帶するもの、やたての類。❷かづけものとして賜はりし卷絹。──**チヤウチン**[腰挿提燈](名) 腰に挿し得るやうに、柄をつけてある提燈。

こし-しやうじ[腰障子](名) 腰板のある紙障子。

こし-ぞひ[輿添](名) 輿に隨伴してゆくこと。又、其人。(輿副)。

こし-だ(名) 【植】裏白(ウラジロ)科に屬する羊齒植物、形は裏白に似て短小なり。

こ-じた[小舌](名) 舌根腫(ハ)れて、更に舌のごときものを生ずる一種の病。

こし-だい[輿臺](名) 輿を地上に置くとき、其轅(ナガエ)を支ふる机の如き臺。

こし-だか[腰高](名) ❶腰の高きこと。❷腰の高き椀、たかつきの類。──**マンヂユウ**[腰高饅頭](名) たけ高くつくりたる饅頭。

こし-ぢ[越路](名) 北陸道の古稱。

ご-しち-にち[五七日](名) 人の死にて三十五日目の稱。

(**ご**)-**しぢゃう**[互市場](名) 互市をゆるされたる場所。

(**こ**)-**しつ**[固執](名) 自分の意見などを、かたく執りて移らざること。

(**こ**)-**しつ**[痼疾](名) 久しく癒(イ)えざる疾病。ぢびやう。(慢性病)。

(**こ**)-**しつ**[故實](名) 法令・儀式などの古昔の事例。──**か**[故實家](名) 故實に通じたる人。

こし-つき[腰付](名) 腰のさま。

こじ-つ-く(他、か下二) 非理をいひまぎらはして、道理のあるごとくにす、牽強す。

こじ-つけ(名) こじつくること。(牽強)。──**る**(他)「こじつく」の訛。

〔**こしっ-ぽね**〕[腰骨](名)「こしぼね」の訛。

〔**ごじっぽ-ひゃくぽ**〕[五十步百步](名) (孟子の語に出づ)彼此の差異懸隔なきにいふ語。

こ-じとみ[小蔀](名) 殿上六間にあり、主上殿上を御覽ずらるゝ所。

†**こし-なづ-む**[腰滯](自、ま四) 水中などを步行するに、腰を自由に運ぶこと能はず。「あさしぬはら、──」。

こし-なげ[腰投](名) 柔術などにて、敵の體を自分の腰にかけて投ぐること。

こし-なは[腰繩](名) 輕罪の囚人などの腰に繩をかくること。又、其繩。

こし-ぬけ[腰拔](名) ❶ゐざり。(躄)。❷臆病なること。意氣地なきこと。又、其人。「──武士」。

こし-の-くに[越國](名) こしぢ。

こし-の-もの[腰物](名) 腰に帶したる刀劍。(帶刀)。

†**こし-のりぞめ**[輿乘初](名) 古昔、正月の初めに、輿に乘りそめしこと。

こ-しば[小柴](名) 小さき柴。──**がき**[小柴垣](名) 小柴を以てつくりたる垣。

†**こし-ばせ**[腰支](名) 腰のさま。こしつき。

こし-ばり[腰張](名) 襖(フスマ)・壁(カベ)などの下部に紙を張ること。

こし-びやうぶ[腰屛風](名) 丈低き屛風、すべて三尺位の高さのもの。(矮屛風)。

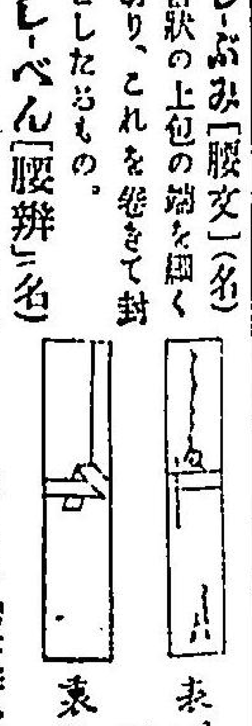
ごじふ-おん[五十音](名) 片假名の「ア・イ・ウ・エ・オ」「カ・キ・ク・ケ・コ」「サ・シ・ス・セ・ソ」「タ・チ・ツ・テ・ト」「ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ」「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」「マ・ミ・ム・メ・モ」「ヤ・イ・ユ・エ・ヨ」「ラ・リ・ル・レ・ロ」「ワ・ヰ・ウ・ヱ・ヲ」の稱。──**づ**[五十音圖](名) 片假名を聲音の分類によりて配列したるもの、即ち、「ア・イ・ウ・エ・オ」の母音を第一の行におき、カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワの順にて各行を配列す、印度悉曇章の配列法に倣へるものなりといふ。

ごじふ-から[五十雀](名) 【動】燕雀類に屬する鳥、禁止鳥の一なり、體矮小にして嘴は細くして尖(トガ)る、秋來り冬去る。

†**こし-ぶくろ**[腰袋](名) 腰にかくる巾着の類。

ごじふさん-つぎ[五十三驛](名) 昔時、江戶日本橋より京都三條大橋に至る間にありし五十三個の宿驛、即ち品川(東京府)、川崎・神奈川・程ケ谷・戶塚・藤澤・平塚・大磯・小田原・箱根(以上神奈川縣)、三島・沼津・原・吉原・蒲原・由井・興津・江尻・府中・丸子・岡部・藤枝・島田・金谷・日阪・掛川・袋井・見付・濱松・舞阪・新井・白須賀(以上靜岡縣)、二川・吉田・御油・赤阪・藤川・岡崎・池鯉鮒・鳴海・宮(以上愛知縣)、桑名・四日市・石藥師・庄野・龜山・關・阪下(以上三重縣)、土山・水口・石部・草津・大津(以上滋賀縣)をいふ。

こし-ぶみ[腰文](名) 書狀の上包の端を細く切り、これを卷きて封としたるもの。



[こしぶみ]

〔**こし-べん**〕[腰辨](名)「こしべんたう」の略言。──**たう**[腰辨當](名) ❶腰に辨當をさぐること。又、其辨當。❷(腰辨當にて通ふもの、義)諸官廳に出勤する小官吏などの稱。

こ-じほ[小潮](名) 【地】上弦又は下弦のときの潮汐、上弦又は下弦のときは、太陰は太陽を去ること直角の位置にあるを以て、兩者の地球に對する引力相反して作用するが故に、潮汐の高さ最も低し。

こ-しはう[小四方](名) さんばうの一種、脚の四面に孔あるもの。

こし-ぼそ[腰細](名) ❶腰の細やかなること。❷【動】「すがばち」の一名。(畿內の方言)。──**の**[腰細](枕)「すがる」に冠らする詞。「──、すがるをとめの、そのかほの」。

こし-ぼね[腰骨](名) ❶腰部の骨。❷押しとほす意氣。又、堪へ忍ぶ精力。

こ-じま[小島](名) 小なる島。(嶼)。

こし-まき[腰卷](名) ❶腰より足に掛けて纏(マト)ふ布。ゆもじ。けだし。❷土藏の外部の礎の上部に、一層土を多くせる部分。❸兜のしころと鉢と相接續せる部分。

†**こ-じみ**(名) いりあひの鐘。(昏鐘鳴)。

こし-みの[腰蓑](名) 腰に纏(マト)ふ短き蓑。

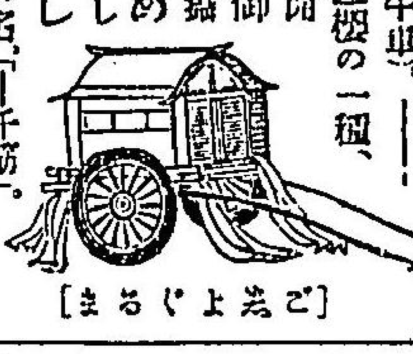
こし-むかへ[輿迎](名) 輿入の輿を迎ふること。又、其人。こしおくりの對。

†**こし-も**[腰裳](名) 古の衣服の一。

こし-もと[腰元](名) ❶腰の邊。❷貴人の傍に仕

ふる侍女。(侍婢)。
(こ-しや〔瞽者〕(名) めしひ。めくら。(盲人)。
(こ-しや〔古社〕(名) ふるき神社。
(こ-しや〔誤寫〕(名) 寫し誤ること。うつしちがへ。
(ご-しや〔五舍〕(名) 古昔、禁中にありし昭陽舍(セウヤウシヤ)・淑景舍(シゲイシヤ)・飛香舍(ヒギヤウシヤ)・凝花舍(ギヨウクワシヤ)・襲芳舍(シフハウシヤ)の稱。
(ご-しや〔五車〕(名) (五つの車につむ程ある義、莊子に出づ)書籍の多きをいふ語。「—の書」。
こ-しやう〔小姓〕(名) 貴人の傍近くに給仕する少年。(扈從、近侍者)。
(こ-しやう〔胡床〕(名) あぐら。こしかけ。しやうぎ。
(こ-しやう〔故障〕(名) 一さゝはり。さしつかへ。しやうげ。二〔法〕刑事又は民事の闕席判決を受けたる原告又は被告が、其闕席判決をなしゝ裁判所になす不服の申立。
(こ-しやう〔古城〕(名) ふるき城。
(こ-しやう〔孤城〕(名) 一ひろびろしたる場所に、たゞ一つ見ゆる城。「一片—萬仭山」。二敵軍に包圍せられて援軍なき城。たゞ一つ孤立せる城。
(ご-しやう〔五障〕(名) 〔佛〕女人は一には梵天王・二には帝釋天・三には魔王・四には轉輪聖王・五には佛身となるを得ずといふこと。
(ご-しやう〔後生〕(名) 一〔佛〕のちのよ。來世。二〔佛〕來世の安樂。極樂の往生。三人に折りいって哀願するときにいふ語。
(ご-しやう〔五情〕(名) 五つの情。即ち喜・樂・欲・怒・哀をいひ、又、喜怒哀樂欲をもいふ。
(ご-しやう〔五常〕(名) 一人の守るべき五つの道。即ち、父子の間には親、君臣の間には義、夫婦の間には別、長幼の間には序、朋友の間には信あること。二仁・義・禮・智・信の五徳の稱。三〔佛〕五戒の稱。
(ご-しやう〔互讓〕(名) 互にゆづりあふこと。
ご-しやうぎ〔碁將棊〕(名) 碁と將棋と。
こしやう-きかん〔故障期間〕(名) 〔法〕故障の申立が有效なる期間、即ち、民事にては十四日間、刑事にては三日間なり。
ごしやう-ぎらひ〔後生嫌〕(名) 後生頼を嫌(キラ)ふこと。佛法を嫌ふこと。
こしやう-ぐみ〔小姓組〕(名) 徳川幕府が、殿中に設けし近習の兵隊。
こ-しやうじ〔小障子〕(名) 小さき障子。
ごしやう-だのみ〔後生賴〕(名) 佛に歸依して極樂の往生を願ふこと。佛法を信ずること。
こ-しやうにん〔小商人〕(名) 資本少く商賈小さき商人。こあきんど。
ごしやう-ねがひ〔後生願〕(名) 後生頼に同じ。
(ご-しやう-らく〔五常樂〕(名) 雅樂の曲名。
(こ-しやう-らくじつ〔孤城落日〕(名) 勢せまりて、陷落に近きさまにたとへいふ語。
こ-しやうらふ〔小上臈〕(名) 古昔、大臣・納言・參議等の女の、女官となりしもの丶稱。
(こ-しやく〔小癪〕(名) 一未熟なるに、さかしらだちたること。「—な奴」。二かんしやく。「—に障る」。
(ご-しやく〔五爵〕(名) 五等爵に同じ。
(ご-しやく〔語釋〕(名) 言葉の意義の解釋。
(ご-しやく〔五尺〕(名) 短き身長にいふ語。「—短軀」。
(ごしや-ごしや (名、副) 「ごちやごちや」に同じ。
(こ-しやじ〔古社寺〕(名) ふるき神社とふるき寺院と。 ——ほぞんくわい〔古社寺保存會〕(名) 内務大臣の監督に屬し、古社寺の建造物又は寶物の歴史の徵證・特殊の由緒(ユイシヨ)又は製作の優美等に就きて、内務大臣の諮詢に應じ、又、其保護の資格の有無等に關して、意見を上申する機關。
(こ-しゆ〔古酒〕(名) 去年釀造せる酒。
(こ-しゆ〔戸主〕(名) 一一家の主人。あるじ。二〔法〕戸主權の主體たるもの、即ち、一家の首位を占め家族を統轄するもの、家族扶養の義務を負ふ。
(こ-しゆ〔固守〕(名) 固(カタ)く守ること。
(こ-しゆ〔古主〕(名) むかし仕へし主人。(舊主)。
こし-ゆ〔腰湯〕(名) 腰より下部を沐浴すること。(坐浴)。
(ご-しゆ〔御酒〕(名) 酒の敬語。
(ご-しゆ〔五趣〕(名) 〔佛〕善惡の業因によりて、到著する五つの所、即ち、天・人・地獄・畜生・餓鬼の稱。
(ご-しゆいん〔御朱印〕(名) 將軍の朱印。又、其朱印を捺(オ)したる書類又は劵札。 ——ち〔御朱印地〕(名) 徳川時代に、將軍の朱印を捺したる劵を下附したる社寺への寄附地。租税を免ぜられたれど、又、賣買を禁ぜられたり。 ——ぶね〔御朱印船〕(名) 昔時、公許のあるしとして朱印ある鑑札を所有し、海外の貿易を行ひし船。豐臣時代に始まりて、徳川時代の初頃まで行はれたり。
(こ-しゆう〔扈從〕(名) 貴人のそばに侍ること。又、其人。
(こ-しゆけん〔戸主權〕(名) 〔法〕戸主が其家族に對して有する私法上の權利。家督相續又は廢絶家の再興若しくは一家の新立等によりてこれを取得し、死亡・婚姻・離婚・隱居又は國籍の喪失若しくは廢家等によりて喪失す。
(こ-しゆごだい〔小守護代〕(名) 鎌倉時代に、守護又は地頭の代理となりて事を行ひし役名。
(ご-しゆせん〔五銖錢〕(名) 漢の武帝の鑄造せし銅錢の稱。
(ご-しゆでん〔御守殿〕(名) 一徳川時代に、三位以上の諸侯に嫁したる將軍の娘の稱。又、其人の居所の稱。二御守殿に仕へし女中の髮の結方。

こし-ゆひ〔腰結〕(名) 昔時、裳着(モギ)・袴着(ハカマギ)などのときに、腰の紐(ヒモ)を結ぶ役をなしゝもの。
(ご-しゆゆ〔呉茱萸〕(名) 〔植〕芸香科の落木・根に蘖(ヒコバエ)を生じ、葉は對生にして、漆の如く稍厚大なり。夏椒に似たる花を開く、花は黄白色なり。
(こ-しよ〔古書〕(名) 古き文書。古き書籍。
(ご-しよ〔御所〕(名) 一禁裏。二後世俗して、將軍家又は大臣家などの稱。 ——がき〔御所柿〕(名) 〔植〕柿の一種、實の形扁(ヒラ)し、もと大和國葛上郡五所村より出づ。やまとがき。(瓦勢柿、紅柿、方柿)。 ——かづき〔御所被衣〕(名) 古昔、京都の内裏の婦人が用ひし一種の被衣。 ——きたひ〔御所鍛〕(名) 「きくさく」の一名。 ——ぐるま〔御所車〕(名) 古昔、貴人の用ひし牛車、上に屋形あるもの。(轎車、牛車)。 ——ざくら〔御所櫻〕(名) 〔植〕櫻の一種。花は大形重瓣にして五瓣狭り闊く。 ——ざむらひ〔御所侍〕(名) 古昔、仙洞又は攝家などに仕へし侍。 ——ぞめ〔御所染〕(名) ごしよぢらしの類の染模樣。 ——ぢらし〔御所散〕(名) ちらし模樣の名。「—千筋」。


〔ごしよぐるま〕

(こ-しよう〔古松〕(名) 年を經たる松。老松。
(こ-しよう〔誇稱〕(名) 一ほこりていふこと。二ぎやうさんにいふこと。「誇」。
(こ-しよく〔古色〕(名) 年を經たる風致又は色。
(ご-しよく〔誤植〕(名) 活字のうゑあやまり。
‡ごしよ-どころ〔御書所〕(名) 古昔、皇室の御藏書を保管せし役所。 ——のあづかり〔御書所預〕(名) 御書所の長官。
ごしよ-はちまん〔五所八幡〕(名) 全國中最も名たゝる五個所の八幡宮、即ち、筑前大分宮・肥前千栗宮・肥後藤崎宮・薩摩新田宮・大隅正八幡宮の稱。
こし-よろひ〔腰鎧〕(名) 「くさずり」の一名。
こしら-ふ〔拵〕(他、は下二) 一とりなして實(ナ)む。取繕ひてよきやうにす。二造りかまふ。たて設く。つくる。「城を—」。三制作す。調達す。四かざる。よそほふ。五いつはる。あざむく。六かたどる。まねす。
こしらへ〔拵〕(名) こしらふること。こしらへたるさま。「好みの—」。 ——ごと〔拵事〕(名) 虛構せる事實。いつはり。(虛捏、捏造)。 ——ぶみ〔拵書〕(名) にせぶみ。にせてがみ。 ——もの〔拵物〕(名) 實物に模擬して製作したるにせもの。
こ-じり〔小後〕(名) 物事の最端。「—をとる」。
こ-じり〔鐺〕(名) 一たるきの端。二刀劍のさやの末端。 ——とがめ〔鐺咎〕(名) 昔時、武士が途中にて行きあふとき、帶したる刀の鐺と鐺とのさはりたるを無禮として咎立をなしゝこと。轉じて、わづかの物事に就きて咎立をなすこと。
こじ-る〔抉〕(他、ら四) 一くじる。ゑぐる。二ねぢる。もぢる。
(こじれ-る〔拗〕(自、ら下一) 曲がる。ねぢく。
‡こ-しろ〔子代〕(名) 古代に、皇后の御子なき時、其御名を一伴の民に負(オ)はしめて、役代の紀念とせられしと。又、其人民。
‡こし-ゐ〔腰居〕(名) こしぬけ。ゐざり。(躄)。
(こ-しゐん〔孤兒院〕(名) 不幸なる孤兒を收容して、これを養育するとを目的とする所。
こし-をれ〔腰折〕(名) 一年老いて腰の折れかゞまりたると。「—の翁」。二歌の上句と下句との意の相あはぬと。「—歌」。三詩歌文章の拙惡なると。四ごぜんかごの小なるもの。(肥前の方言)。五「こしをれうた」又は「こしをれぶみ」の略言。 ——うた〔腰折歌〕(名) 一歌の上句と下句との意の相あはぬ歌。又、拙惡なる歌。二自分の作歌の謙稱。 ——ぶみ〔腰折文〕(名) 一拙惡なる文章。二自分の文章の謙稱。
(こ-じん〔古人〕(名) 古の人。むかしのひと。「人」。
(こ-じん〔故人〕(名) 一古き朋友。舊友。二死にし人。
(こ-じん〔胡人〕(名) 一えびすの人。二外國人をいやしめていふ語。
(こ-じん〔個人〕(名) 國家又は社會等に對して、個々別々の人の稱。一個人。 ——きげふ〔個人企業〕(名) 〔經〕一人にして法律上又は經濟上の一切の責任を負ひて、生產に從事すること。 ——けいざい〔個人經濟〕(名) 一個人に關する經濟。國家經濟などの對。 ——しゆぎ〔個人主義=Individualism〕(名) 一〔倫〕個人の獨立自由を重んじ、自家を基礎として一切の行動を規定せんとする主義。二〔敎〕國家又は社會に關係なく、たゞ個性を發達せしむるとを以て、教育の目的となす主義。三〔經〕個人放任主義に同じ。 ——せいど〔個人制度〕(名) 個人を法律上の權利義務の主體となす制度、方今文明諸國の制度は概ねこれなり。家族制度の對。 ——てき〔個人的〕(形) 言論又は行爲などに、個人を主とするにいふ語。 ——はうにんしゆぎ〔個人放任主義〕(名) 〔經〕經濟上、個人隨意の行動は最も有效なるが故に、國家はなるべく其自由に放任して、行動を容易ならしむ

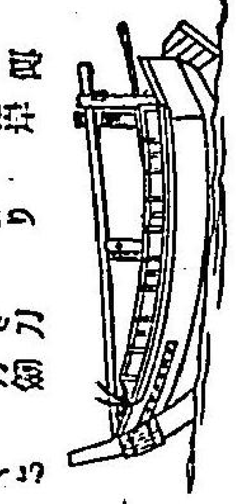
べしといふ主義。其極端なるものに至りては、道路の經營乃至貨幣の鑄造等をも、個人の手に委ぬべしと説けり。
(ご-しん)[五辛](名) 五種の辛味ある蔬菜、即ち、韮(にら)・薤(らつきよう)・葱・蒜(ひる)・薑(はじかみ)の稱。
(ご-しん)[護身](名) 身のまもり。身の防禦。
(ご-しん)[吾人](名) われらの社會。人類。「等」
(ご-しん)[吾人](代) われ〱。われら。(我儕、我等)
(ご-しんさい)[御親祭](名) 天子が御自身に、神をまつりたまふこと。又、其祭典。
ご-しんざう[御新造](名) 人の妻の敬稱。
(ご-しん-さん)[御新樣](名) 中等社會の人の妻の敬稱。(東京の方言)
‡ご-しんぢやう[小辛常](名) ❶てごろ。❷稍々殊勝なること。
(ご-しん-たう)[護身刀](名) 身のまもりに持つ刀。まもりがたな。
ご-しんでん[小寢殿](名) 小さなるつくりの寢殿。「殿」
(ご-しん-とう)[御神燈](名) 神燈の敬稱。特に、藝人などの家の入口に、其(その)しるしある神燈。
(ご-しん-とう)[五親等](名) [法] 親等の一。或人と其人又は其人の配偶者より、五世を隔てたる親族關係。例へば或人と其曾祖父母の祖父母若しくは其曾孫の孫との關係、又は其人と配偶者の曾祖父母の祖父母若しくは其曾孫の孫との關係等これなり。
(ご-しんぷ)[護身符](名) 身のまもりにする神佛のふだ。「のお札。
‡ご-す[小簾](名) をす。すだれ。
ご-す[濾](他、さ四) 細かき隙(すき)間を通らしめ、滓(かす)を留めて澄澈せしむ。「酒を—」(漉)。
ご-す[越](自、さ四) ❶上を過ぎ行く。とほる。「山を—」❷上に及ぶ。「水股を—」❸まさる。すぐる。「才學人に—」(超) ❹經過す。ふ。「年を—」❺行く。去る。來る。「まかり—」「引き—」
ご-す[鼓](他、さ變) ❶うちならす。かきならす。❷うごかす。ふるふ。おこす。「勇を—」
‡ご-ず[掘](他、さ上二) 植物を根附のまゝ引き拔く。
ご-す[呉須](名) ❶支那の呉須窯の陶器。青釉又は赤畫等あり。❷コバルトの細末を、水に溶解せしめて、陶器の青き模樣を畫(ゑが)くに用ふる繪具。
ご-す[期](自、さ變) 「きす」に同じ。
(ご-すう)[箇數](名) ものゝかず。かず。
(ご-すう)[戸數](名) 家の數。やかず。——わり[戸數割](名) [法] 地方税の一。現在の各戸に賦課して徴收するもの。同一家族といへども、住家を別にすれば各別に賦課し、又、一家の内に同居するものといへども、各別の生計をなせば各別に賦課す。
(ご-すう)[語數](名) 言語の數。
ご-すき[杴](名) 木にて造れる鋤。
ご-すぎ[小杉](名) ❶小さき杉の木。❷すぎはらがみの小判のもの。
(ご-すこ-し)[狡](形、一) ❶狡猾なり。わるがしこし。❷吝嗇なり。けちなり。
ごす-で[呉須手](名) 呉須の陶器。
ご-ずみ[粉炭](名) 炭の細末となりたるもの。
ご-ずみ[濃墨](名) 濃く磨(す)りたる墨汁。
ご-すみれ[小菫](名) [植] すみれの一種。葉は殆ど尖頭にして葉柄は翼を有せず、距は花瓣と同長なるか少なくとも等片と同長なり。
コスメチック[Cosmetic](名) 脂肪を原料とし香料を加へて製造したる化粧品。頭髮又は口髭などに塗(ぬ)るに用ふるもの。
コスモス[Cosmos](名) [植] 菊科の一年草。形茴香に似、高さ六七尺に達し、葉は細く、花は單瓣にして、色は種々あり。
‡ごすり[錆子](名) やすりの類。
ごすり-つ・く[擦付](他、か下二) ❶力を入れてする。❷押しつけてなすりつく。
ごす・る[擦](他、ら四) ❶押し付けて磨擦す。「玉を—」(磨) ❷遁れはしにあてゝいふ。
ごす・る[擦](自、ら下二) すれあふ。
(ご-すゐ)[湖水](名) みづうみ。
(ご-すゐ)[鼓吹](名) ❶太鼓を叩き笛を吹くこと。轉じて、音樂を奏すること。❷勢をつくること。おこしたつること。❸意見を公表すること。議論を主張すること。
(ご-すゐ)[午睡](名) ひるね。午眠。
(ご-すゐ)[五衰](名) 天人が臨終にはまぬかれぬといふ五種のおとろへの稱、即ち、身光不現・華鬘萎頽・兩腋汗流・衣服垢穢・不樂本座をいふ。
ごずゑ[梢](名) (木末の義) 木の枝の末。木のさき。「—に宿る蝉」(杪、標)。——のあき[梢秋](名) 陰暦九月の異稱。
ごすん-くぎ[五寸釘](名) 曲尺二寸五分許の釘の稱。
(ご-せ)[後世](名) 後の世。(後生)
(ご-ぜ)[瞽女](名) (ごぜ〱の略音) 三味線など彈きて錢を乞ふ盲目の女。「へし盲、瞽—」
‡ご-ぜ[御前](接尾) 古昔、婦人の名の下に添へて呼べる語。
(ご-せい)[顧省](名) みづからわが身を顧みること。
(ご-せい)[個性](名) ❶個個の性質。❷個々の人の特有の性質。
(ご-ぜい)[小勢](名) 少なき人數。こにんず。「ゑ」
(ご-せい)[語勢](名) ことばのいきほひ。
(ご-せい)[語聲](名) はなしをするこゑ。はなしごゑ。

(ご-せい)[五星](名) 五つの星、即ち、歳星(木星)・熒惑(火星)・太白(金星)・辰星(水星)・填星(土星)の稱。
(ご-せい)[五聲](名) 「ごいん」(五音)に同じ。
(ご-せい)[五聖](名) 支那古代の五人の聖人、即ち、黄帝・堯・舜・禹・湯の稱。一説に、黄帝を除き周公を加へてもいふ。
(ご-せい)[五牲](名) 五つのいけにへ、即ち、麋・鹿・麏・狼・兎の稱。
(ご-せい)[悟性](名) [心] 直觀によりて理解し、又は其理解を綜合する意識の作用。
(ご-せい)[互生](名) [植] 葉がたがひちがひに生ずること。對生の對。
(ご-せい-しんりがく)[個性心理學](名) 天才又は罪囚等、一般より差別ありとせらるゝ個性の心理を研究する學。
(ご-せい-ぶつ)[古生物](名) 現代の地層の形成以前に生殖せし生物、即ち「マンモス」の如きもの。
(ご-せう)[胡椒](名) [植] 胡椒科に屬する小木本。多く熱帶地方に産し、攀緣せる莖蔓を有す。果實は形圓く色赤黒く、皮の中に圓(まろ)き核あり、其中の仁を採りて藥劑又は食用とす。
(ご-せう)[湖沼](名) みづうみとぬまと。
(ご-せき)[古跡](名) むかし物事のありし跡。舊跡。(古迹、古蹟)
(ご-せき)[古昔](名) いにしへ。むかし。(古時)
(ご-せき)[戸籍](名) ❶戸數又は人別を詳(つまび)らかに記載せる帳簿。❷家族・親族及國籍の上に於ける各人の身分事項に就きての公證。又、一戸毎に作りて各人の家族關係に屬する事項を登録公證したる記録。——ぼ[戸籍簿](名) 各人の家族關係に屬する事項を登録公證したる記録の帳簿。正本は戸籍役場に備へおき、副本は其地の地方裁判所に保存す。——やくば[戸籍役場](名) 戸籍吏が其事務を行ふ所。——り[戸籍吏](名) 戸籍に關する行政事務を扱ふ吏員。通常市町村長を以てこれに充つ。東京・京都・大阪の三市は、特に區長を以てこれに充つ。
(ご-せき)[五石](名) 五つの藥石、即ち、石膽・丹砂・雄黄・礬石・磁石の稱。
ご-せく[五節供](名) 「ごせっく」の略言。「語」
(ご-せ-ごせ)(名、副) 度量の寛大ならぬさまにいふ語。
‡ご-せ-しや[後世者](名) 佛に祈りて、後世を願ふ者。念佛を唱へて極樂往生を願ふ人。又、其人。
‡ご-せち[五節](名) 古昔、陰暦十一月豐明(とよのあかり)の節會などに行はれし女樂の稱、四人の舞姫にてこれを舞ひ、五たび袖をかへすことあるによりて此名あり。
‡ご-せちゑ[五節會](名) 五つのせちゑ、即ち、元日・白馬・踏歌・端午・豐明の稱。
(ご-ぜつ)[五絶](名) ❶死せしむべき五つの原因、即ち、縊・溺・壓・凍・驚の稱。❷絶句にて、五言絶句の稱。
(ご-せつ-く)(自、か四) こせ〱す。
(ご-せつく)[五節句](名) 明治維新後まで行はれし五つの節句、即ち正月七日(人日)・三月三日(上巳)・五月五日(端午)・七月七日(七夕)・九月九日(重陽)の稱。明治六年一月に廢せらる。
(ご-せつけ)[五攝家](名) 古昔、攝政・關白に補せらるべき五家の稱、即ち、近衞・九條・二條・一條・鷹司の稱。
(ごぜ-の-ばう)[瞽女坊](名) 「ごぜ」(瞽女)に同じ。
(ご-ぜめ)[後攻](名) こづめ。
ご-ぜりあひ[小競合](名) ❶小さき戰爭。こいくさ。❷うちわもめ。
(ご-せん)[古錢](名) 古昔通用したる錢。
(ご-せん)[姑洗](名) ❶十二律の一。❷陰暦三月の異稱。
(ご-せん)[互選](名) 特定の人々が、其範圍内の人につきて行ふ選舉。
(ご-ぜん)[午前](名) ❶朝より正午までの間。❷夜半より正午までの間。
(ご-ぜん)[御前](名) ❶貴人の座前又は面前の敬稱。❷貴人の前驅。又、其もの。❸特に陛下の御坐前又は御面前の敬稱。——かうしやく[御前講](名) 貴人の御前に於て、書物などの講釋をなすこと。——くわいぎ[御前會議](名) 陛下の御前にて、國家の大事に關し、元老・大臣などが爲す會議。
(ご-ぜん)[御膳](名) ❶膳の敬稱。❷朝・晝・夕の食事。「—をたべる」——かご[御膳籠](名) 竹にて目を粗く小判形に編みたる笊。てんびんぼうにて擔ふ。——じやうとう[御膳上等](名) 品等の最もすぐれたるにいふ語。——だな[御膳棚](名) ❶四十八棚の一、棚の數總計七枚あるもの。❷臺所にある棚、膳の類をのせおくもの。
(ご-ぜん)[御前](代) 貴人の敬稱。
(ご-ぜん)[五善](名) [佛] 五戒を守ること。
(ご-せんざ)[御遷坐](名) 神社の修繕又は新築に就きて、神體の所在をかふること。せんぐう。——しき[御遷坐式](名) 御遷坐に就きて擧行する儀式。
(ご-せんぢやう)[古戰場](名) 古昔、戰爭ありし場所。
ごせん-ひら[五泉平](名) 越後國五泉町より出だす特產。精好縞の下品なるもの。
ごそ(助) ❶多くの中より一事をとり出で、さし定めていふ意を表はす語。「これ—よけれ」❷希求の意をあらはす語。「こよひの月夜、あきらけく—」

こぞ［去年］(名) きよねん。きくねん。(舊年)。
こ-ゾウ［小僧］(名) ❶年少の僧。❷商店などにて使役する小童。❸少壯者を卑(いや)しみ呼ぶ語。
(こ-そく［姑息］(名) 一時のまにあはせ。かりそめの安心。いつすんのがれ。
こそ-ぐ(げ)る［刮］(他。か下二) こすりけずる。けづりおとす。
(こ-ぞく［古俗］(名) むかしのならはし。
(ご-そく［五則］(名) 五つの法則。即ち。規(ぶんまはし)・矩(さしがね)・權(はかり)・衡(はかりざを)・繩(すみなは)の稱。
(ご-ぞく［語族］(名) 同系統なる言語の一族。
(ご-ぞくさい［御息災］(名) ❶息災の敬稱。❷物に頓着ならず質朴なるといふ語。「—の田舍者」。
こそ-ぐるくる［擽］(他。ら四) 皮膚の或部分を刺戟して。一種の感覺を起さしむ。くすぐる。(抓搔)。
〔こそげる［刮］(他) 「こそぐ」の訛。
〔こそ-こそ(名。副) ❶靜かに音のするさまにいふ語。❷ないないで事をなすさまにいふ語。—どろばう(名) ささいのぬすみをなすもの。小ぬすびと。「發する音。
〔ごそ-ごそ(名。副) 麁(あら)く粗(あら)きもの〻相觸れて
ごぞつ-て［擧］(副) 「こぞりて」に同じ。
こ-そで［小袖］(名) ❶裃(かみしも)の大袖なるに對して。常の衣の稱。袖の小さき衣。❷綿の綿入。(綿衣)。❸絹(きぬ)の袖。—ばく［小袖幕］(名) 昔時。花見などのとき。小袖を脱(ぬ)ぎこれを紐(ひも)に通しかけて。幕としもの〻稱。「るにいふ。
こそはゆ・し(形。二) くすぐらる〻如き感ある
こ-ぞめ［濃染］(名) 濃く染めたる色。
十こぞめ-ぐさ［濃染草］(名) 【植】萩の異稱。
十こぞめ-づき［木染月］(名) 陰暦八月の異稱。

こぞりて［擧］(副) ことごとく。のこらず。みな。
こぞり-は［小反刃］(名) 小さきなぎなた。
こぞ-るる［擧］(自。ら四) ことごとくそろふ。殘らずあつまる。
こぞ-るる［擧］(他。ら四) ことごとくそろへあつむ。殘らずかりだす。「はなれむら。
(こ-そん［孤村］(名) かけはなれて隣村なき邑里。
(こ-たい［固體］(名) 一定の體形及體積を有する物體。通常温度に於ける金石の如き是れなり。液體及氣體の對。
(こ-たい［古體］(名) ❶いにしへのさま。ふるきかたち。❷漢詩にて。律及絕句以外の詩體の稱。
(こ-たい［個體］(名) 個々にわかれてあるもの。ひとつ〳〵になりて存在するもの。
(こ-だい［誇大］(名) ❶實際よりも仰山なること。おほぎやうなること。❷ほこること。たかぶること。
(こ-だい［古代］(名) ❶いにしへ。むかし。❷ふるめかしきこと。ふるくさきこと。❸現時の地殼構成以前の世界。
(ご-たい［五體］(名) ❶頭・頸・胸・手・足の稱。又。頭と兩手と兩足との稱。❷全身の總稱。❸書體にて。篆・隸・眞・行・草の稱。
(ご-たい［五帶］(名) 【地】熱帶と南北半球の兩溫帶及兩寒帶との稱。
(ご-だい［五大］(名) 【佛】五智より生ずる地・水・火・風・空の五つの種性の稱。其一切處にあまねきが故に大と名づく。
(ご-だい［五代］(名) 支那の唐朝の後を承(う)けし五王朝。即ち。後梁・後唐・後晉・後漢・後周の稱。
こだい-さらさ［古代更紗］(名) ❶古く南蠻より渡來せる更紗。❷古代更紗に模擬せる布。

(ご-だい-しう［五大洲］(名) 地球上の五つの大陸。即ち「アジア」・「アフリカ」・「ヨーロッパ」及南北「アメリカ」の稱。
(ご-だいそう［御大層］(名) 仰山(ぎやうさん)なること。
(ご-だいそん［五大尊］(名) 【佛】不動・降三世・軍吒利夜叉・大威德・金剛夜叉の稱。「る堂。
(ご-だい-だう［五大堂］(名) 五大尊を安置せ
(こたいてき-はつせい［個體的發生］(名) 個體が卵子より發生して次第に生育すること。系統的發生の對。
ごだい-の-みうら［御體御占］(名) 古昔。神祇官に於て。六月十日に行はれし御占。天皇の御身體に御つゝしみあるべき事をうらなひ奏したり。
(ご-だいみやうわう［五大明王］(名) 【佛】「ごだいそん」〔五大尊〕に同じ。
(こ-だい-もやう［古代模樣］(名) 古代に行はれたる模樣。古風の模樣。
(ご-だい-りき［五大力］(名) 廻船より稍や小さき荷船。內海の沿岸に用ふ。
(こ-たう［孤島］(名) 陸地よりかけはなれたる小島。
(こ-たう［古刀］(名) ❶ふるき刀劍。❷慶長以前の作にかゝる刀劍の特稱。
(こ-たう［胡桃］(名) 【植】「くるみ」の稱。(羌桃)。
(こ-だう［古道］(名) ❶古代の交通路。❷古代の學問又は技藝。❸古代の方法。
十こ-だう［小道］(名) 小さきみち。こみち。
(ご-だう［悟道］(名) 道の眞理を悟(さと)ること。


［ごだいりき］

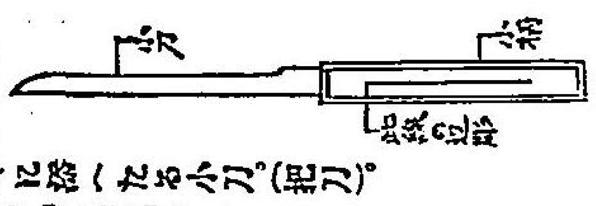
(ご-だう［五道］(名) 【佛】五趣に同じ。
こ-だうぐ［小道具］(名) ❶小さき道具。❷刀劍の附屬品。即ち鍔などの稱。「—屋」。❸芝居にて。俳優の衣裝に附屬する煙草入・櫛・笄などの稱。—かた［小道具方］(名) 芝居の小道具を扱ふ人。
ごたう-くぢら［五島鯨］(名) 【動】游水類中いるか科に屬する哺乳動物。體色黑くして長さ二丈餘に達す。我國にては肥前國五島邊に多く產するより此名あり。
ごたう-するめ［五島鯣］(名) 肥前國五島邊より出だすするめの稱。
〔こ-たか(名) 【動】「いなご」の一名。(關東の方言)。
こ-たかがり［小鷹狩］(名) 秋の鷹狩の稱。冬のおほたかゞりの對。
こ-だか・し［木高］(形。一) 稍長し。梢長し。
こ-だか・し［小高］(形。一) すこし高し。
こ-たか-だんし［小鷹檀紙］(名) 判小さき檀紙。
〔ご-たく［御託］(名) くどくどしくいふこと。又。僭越なる言をならぶること。
〔ごた-くさ(名。副) ❶紛紜又は錯雜あるさまにいふ語。❷混合又は雜沓(ざつたふ)せるさまにいふ語。
こ-だくみ［木匠］(名) 木材を以て家屋を建築し又は器具をつくることを職とするもの。大工。(木工。工匠。番匠)。十—の-かみ［木匠頭］(名) こだくみのつかさの長官。十—の-つかさ［木匠寮］(名) 古昔。宮內省の被管に屬し。營繕の事を掌りし「寮。
〔ごた-ごた(名。副) 「ごたくさ」に同じ。
こ-だし［小出］(名) 多くあるもの〻中より。便利のため少許を出し置くこと。又。其物。「—の金」。
こ-だち［木立］(名) たちき。はやし。(叢—)。
こ-だち［小太刀］(名) ❶小さき刀。❷小さき刀を似ふこと「—の名人」。

十こ-たち［御達］(名) 婦人たち。(彼達)。
こ-たつ［火燵］(名) 上に櫓(やぐら)を置き。蒲團をかけて足などを暖むる小さきゐろり。(五燵。火囲)。—やぐら［火燵櫓］(名) 火燵の上に置きて。蒲團をかくる枠。(爐架。爐棚)。
(ご-だつ［誤脫］(名) 文句のあやまりとぬけと。
〔ごたつ-き(名) ごたつくこと。もめ。こんざつ。
〔ごた-つ・く(自。か四) ごたごたす。「り」。
こ-だて［小楯］(名) 假に設けたる楯。「盾を—にとり」。
ごた-に(名) 一種の料理。さまざまのものを混交して煮たるもの。ごつたに。(什錦菜)。「べきもと。
こ-だね［子種］(名) 子となるべき元子。子を產す
こ-たば［小束］(名) 小さきたば。(小把)。
こ-タバコ［粉煙草］(名) 刻煙草の細かくなりて粉となりたるもの。
〔ごた-ばこ(名) さまざまのものをとり入るゝ箱。
〔こだは・る(自。ら四) ❶さしさはる。さゝはる。❷かゝはる。かゝづらふ。❸何事もなきことをいひたてゝ故障す。
こ-たび［此度］(名) このたび。こんど。(這般。今般)。
こ-だひ［小鯛］(名) 小さき鯛。
こた・ふ［答］(自。は下二) ❶他の言に對して返へし言ふ。いらふ。(對)。❷報ず。むくゆ。❸應ず。「行狀相—」。❹反響す。ひゞく。❺感ず。とほる。きく。
〔こた・ふ［堪］(自。は下二) ❶こらふ。たへしのぶ。たふ。❷たもつ。もつ。
(ご-たぶん［御多分］(名) ❶數量多きことの敬稱。「—の頂戴物」。❷多數者の言ひ又は行ふ方。又。其方につきしたがふこと。—れん［御多分連］

(名) 自家の意見なく。たゞ多數者につきしたがふやから。
こたへ［答］(名) ❶いらへ。返辭。返答。❷問題の解決。❸きゝめ。しるし。❹ひゞき。反響。
こたへ［堪］(名) こらへ。たもち。「に響く」。
こ-だま［木魂］(名) ❶樹木の靈。❷やまびこ。「—
こ-だま［小玉］(名) 「こだまぎん」の略言。—ぎん［小玉銀］(名) まめいた。まめぎん。(碎銀。子粒銀)。
(ごた-まぜ(名) 混合すること。いりまじり。
十こた・る［傾］(自。ら下二) かたむく。
十こた・る［木垂］(自。ら四) 木老いて枝垂れ下がる。
(こ-たん［枯淡］(名) 活氣もなくむきもなきこと。
(ご-だん［後談］(名) 後の物語。のちのはなし。
(ご-だん［後段］(名) をはりの段。又。のちの段。
こ-ダンナ［小旦那］(名) わかダンナ。大旦那の對。
こち［東風］(名) 東方の風。ひがしかぜ。(谷風)。
こち［鯒］(名) 【動】硬鰭類中こち科に屬する魚。形ははうぼうに似て扁(ひら)く。口大く尾尖りて鱗細し。背部は灰色なり。我國沿岸多少の產あれども殊に東海に多し。(牛尾魚。鯒。鮃。鯒)。
(こ-ち［故智］(名) 古人の智でなし。策略。
こ-ち［此方］(代) このかた。こちら。こなた。
(ご-ち［五地］(名) 五つの土地。即ち。山林・川澤・丘陵・墳衍・原隰の稱。
(ご-ち［五智］(名) 【佛】法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の五種の智識。—によらい［五智如來］(名) 五智を表はしたる如來。說多けれど。大日・阿閦・寶性・彌陀・釋迦をいふ。
(ご-ぢ［護持］(名) ❶まもりたもつこと。❷祈禱。

(こ-ちく[胡竹](名) 竹の笛。「からたけの―の聲も、きかせなん」。
(ご-ちく[五畜](名) 五種の家畜、即ち、雞・羊・牛・馬・犬の稱。
{こち-こち(名、副) 物のかわきて凝固したるさまにいふ語。「―した餅」。　「り」。
†こち-こち(代) あちらこちら。方々。「―の花の盛」
{こち-こち(名、副) 「こちこち」の意を強めていふ語。　「なり」。「―き田舎人」。
†こち-こち・し(形、二) 無骨なり。きすぐ〔し〕
(ご-ちそう[御馳走](名) 饗應の敬稱。 ――せいりやく[御馳走政略](名) 人を饗應し機嫌をとりて、自分の要求を承諾せしむること。
(ご-ぢ-ソウ[護持僧](名) 貴人のために、常に祈禱をなす僧。
†こち-た・し[言痛](形、一) ❶煩はし。うるさし。❷かしまし。やかまし。　「しといふ」。
†こち-づ[言出](自、た下二) 言語に出
{こち-と[此方人](代) われ〲。 ――ら[此方人等](代) われ〲ども。
こち-の-ひと[此方人](代) 妻が夫を呼ぶ稱。
†こ-ぢもく[小除目](名) 古昔、大臣の官位を敍任する臨時の除目。大臣以外の官の敍任は、春若しくは秋なれど、大臣には定期なかりき。
こ-ちや[粉茶](名) 茶の細粉となりたるもの。
(こ-ちや[古茶](名) 去年採りたる茶。新茶の對。
{こ-ちや[此方] こなたは。われは。「しくすること」。
(こ-ちやう[誇張](名) 實際より仰山(ぎやうさん)
(こ-ちやう[戸長](名) 町村の長又は町村の事務を取扱ふ人。(里正)。 ――やくば[戸長役場](名) 戸長の事務を取扱ふ所。

(ご-ちやう[伍長](名) 五人を一組とせるものゝ頭。くみがしら。
(ご-ぢやう[御諚](名) 貴人の命令。おほせ。みことば。「―には候へども」(御令)。
(こ-ちやく[固着](名) ❶かたくつくこと。かたまりつくこと。つきて離れざること。❷其土地にとゞまりゐること。移動せざること。「粉をつけ給ふこと」。
†ご-ちやくこ[御着袴](名) 天皇又は東宮の
{こちや-こちや(名、副) 細きものゝ群れ集まりて、混雜するさまにいふ語。　「ふ語」。
{ごちや-ごちや(名、副) 前條の意を稍や強めてい
{ごちやつ・く(自、か四) ごちや〲す。
(こ-ちゆう[孤注](名) 財貨を盡くして博奕に賭すること。轉じて、全力を擧げて、運否天賦の危險なる事を試むることにいふ語。
(こ-ちゆう[孤忠](名) 他に同情者なき忠義。
(こ-ちゆう[個中](名) ❶此範圍の中。このうち。❷禪家などにて、世俗の事業に對し、參禪求道などの範圍の義にいふ語。「―の消息」。
(こ-ちゆう[古注](名) 古代の註釋。
(ご-ちゆう[五蟲](名) 五種の動物、鱗蟲・羽蟲・毛蟲・介蟲・倮蟲の稱にして、鱗蟲の長は蛟龍、羽蟲の長は鳳凰、毛蟲の長は麒麟、介蟲の長は神龜、倮蟲の長は聖人なりといひ傳へたり。
(ご-ぢゆう[後住](名) 後の住持。前住の對。
(ご-ちゆういん[五中陰](名) 【佛】人死にたれど、未だ未來に生ぜずして、即・住・生・滅・壞の五つのものゝ定まらざる間の稱。
ごぢゆう-の-タフ[五重塔](名) 屋根を五重につくり重ねたる塔。
(ご-ぢよく[五濁](名) 【佛】五つの汚穢、即ち劫・見・命・煩惱・衆生の稱。 ――あくせ[五濁惡世](名) 【佛】五濁ある惡しき世。末世。「地方の方言」。
こ-ぢよらう[小女郎](名) 小さき女子。(遊女
こち-ら[此方](代) このはう。こち。
(ご-ぢん[後陣](名) 後方に備へたる陣。後軍。
(ご-ぢん[五塵](名) 【佛】五欲を生ずる五つのもの、即ち、色・聲・香・味・觸の稱。
(こつ[骨](名) ❶動物の體質中にある堅き部分の稱にして、全身の支柱となりて體形を成すと同時に、内部の柔軟なる器官を保護するもの、硬骨と軟骨とありて、硬骨は質最も堅牢にして中に多量の石灰質を含み、軟骨は有機質より成り、柔軟にして彈力あり。ほね。❷火葬して、後に殘りたるほね。❸〔こつ〕。てうえ。「―が旨い」。「―を覺ゆ」。
(こつ[笏](名) ❶貴人のもつさく。❷特に、神官などの手にする如意の如きもの。
(こつ[忽](名) 絲の十分一、即ち一の十萬分一。
(ご-づ[牛頭](名) 【佛】地獄の獄卒の一。體は人の如く頭は牛の如きもの。
こつ-あげ[骨揚](名) 火葬に附したる死者の殘骨を拾(ひろ)ひ採りて、これを桶に納むること。こつひろひ。
(こつ-えん[忽焉](名、副) ❶たちまちかはるさまにいふ語。❷うちすてゝとりあはぬさまにいふ語。
(こ-づか[小柄](名) 脇差のさやに添へたる小刀。(把刀)。



[こづか]

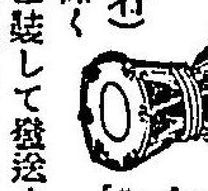
(こつ-がい[乞丐](名) こじき。
(こつ-がい[乞骸](名) (乞"骸骨"の義) 辭職すること。退隱すること。　「ること」。
(こつ-がう[骨骾](名) 忠直にしてへつらはざ

(ご-づ-かう[牛頭香](名) 「ごづせんだん」(牛頭栴檀)に同じ。
(こつ-かく[骨格](名) ❶高等動物の體格を組織する種々の骨片(人類のは約二百個)、其中軸となれるものを脊柱といひ、上に頭骨を戴き胸部の左右に肋骨あり、股骨は支軸となりて脊柱に連結す。ほねぐみ。(骨骼)。❷からだの恰好。
こ-づかひ[小使](名) 小事に使役するもの。
こ-づかひ[小遣](名) 「こづかひぜに」の略言。 ――ぜに[小遣錢](名) 小買物其他雜費に宛つべき金錢。(小費錢)。 ――せん[小遣錢](名) 前條に同じ。 ――ちやう[小遣帳](名) 仕拂ひたる小遣錢の條目を記しおく帳簿。 ――どり[小遣取](名) 生活費の大部を得んとにはあらず、たゞ小遣錢を得んために、或職業に就くこと。
こつ-がら[骨柄](名) ❶ほねぐみ。骨格。❷からだのやうす。人品。　「乾したる小さき蝦」。
こづき-えび[小衝蝦](名) 皮を剝(む)き乾(ほ)して、
コツク[Cook](名) 料理人。料理番。
{こ-づ・く[小衝](他、か四) ❶わづかなる刺衝を與ふ。❷押へて搖(ゆ)る。❸少しく又はをり〲攻擊を加ふ。❹細かくつき碎(くだ)く。
こつくり[狐狗狸](名) 神秘の作用をなすといふ一種の裝置、三本の手頃の竹をあつめて其中央を括(くゝ)り、これを鼎足に擴(ひろ)げて上に盆をのせ、數人其周圍に坐して、其盆を輕くおさへて祈禱などすれば、盆自らうごき出す、其うごき方によりて、物事をトすべしといふ。
{こつくり(名、副) ❶色などの丁度頃合なるさまにいふ語。❷急に動作をはじめ又は狀態の變ずるさまにいふ語。「―死んだ」。 ――こつくり(名、副) ゆるぎうごくさまにいふ語。「―居睡る」。 ――わうじやう(名) 急の死去。
こ-づくり[小作](名) つくりの小さなること。「す」。
†こ-づく・る[木造](他、ら四) 材木を採伐
こ-づけ[小付](名) ❶重荷の上に、更に添へ付くる小荷物。❷負擔ある上に添ふる負擔。
(こつ-けい[滑稽](名) ❶口辯巧にして、よく滑脫なる言說をなすこと。「―多智」。❷ざれごと。だうけ。おどけ。❸【心】不釣合又は不一致なる言行又は狀態が、吾人をして優秀なりとの自覺を生ぜしめて、一種の快感を起さしむること。 ――か[滑稽家](名) 滑稽の才にとめる人。よくおどけをなす人。 ――ぐわ[滑稽畫](名) おどけゑ。とばゑ。 ――せうせつ[滑稽小說](名) 滑稽の快感を生ぜしむることを主としたる小說。 ――てき[滑稽的](名) 滑稽なるにいふ語。
(こつ-こつ[矻矻](名、副) ❶つとめつゞくるさまにいふ語。❷安からざるさまにいふ語。　「する」。
{こつ-こつ(名、副) 固き物の觸れ合ふ音。「―音が
{ごつ-ごつ(名、副) 柔なやかならざるさまにいふ
(こつ-ざ[兀坐](名) ぼんやりして坐すること。「語」。
(こつ-さう[骨相](名) こつがら。ほねぐみ。 ――がく[骨相學=Phrenology](名) 人の頭蓋骨を相して、其性質又は運命をトする學。
(こつ-し[骨子](名) ❶ほね。❷要點。主眼。
(こつ-し[杌子](名) こしかけだい。こしかけ。
(こつ-じき[乞食](名) ものもらひ。こじき。非人。 ――ばうず[乞食坊主](名) 「こじきばうず」に同じ。　「しろ。あるそか」。
(こつ-しよ[忽諸](名) ❶にはか。急遽。❷ないが
(こつ-ずゐ[骨髓](名) ❶骨と髓と。又、骨の中心。❷心の底。心中。「うらみ―に徹す」。❸要點。主眼。「文章の―」。　「はねぶし」。
(こつ-せつ[骨節](名) 骨格の關節。ほねのつがひ。
(こつ-ぜん[忽然](名、副) ❶にはか。たちまち。❷はからず。意外。
(ごづ-せんだん[牛頭栴檀](名) (南天竺の摩羅耶山降して牛頭山といふ、多く栴檀を生ず、故に此名ありといふ) 熱帶地方より産出する一種の香料。香氣麝香に似る。
{こつそり(名、副) 靜かなるさま又は他に知らせざるさまにいふ語。
{ごつ-た(名) ❶物事の入りまじりてあること。こんざつ。❷もめ。かつとう。 ――かへ・す[ごったかへす](自、さ四) ❶ひと入りまじる。❷甚しき騷擾を生ず。 ――に(名) 「ごたに」に同じ。 ――ばこ(名) がらくたを入るゝ箱。
(こつ-だう[骨堂](名) 火葬して殘りたる骨を納むる堂。
こ-づた・ふ[木傳](自、は四) 木より木に傳ふ「―鳥」。
(こつ-たん[骨炭](名) 一に獸炭ともいふ、骨の如き動物性の物質を炭化せしめたるもの、液中に存在する物質の臭氣又は色素を吸收するに適當す。
{こつ-ち[此方](代) こちら。このはう。
(こつ-ち[忽地](副) たちまち。にはかに。
こ-づち[小槌](名) ❶小さき槌。❷うちでのこづち。
{ごつ-ちや(名) いりまじり。もめ。 ――まぜ(名) ごたまぜ。

[こづち]

(こつ-ちやう[骨張](名) 最上。第一。「馬鹿の―」。
こ-づつ[小筒](名) 小さき火砲。せうぢう。

こ-つゞみ[小鼓](名) 小さきつゞみ。左肩にのせて打つもの。


[こつゞみ]

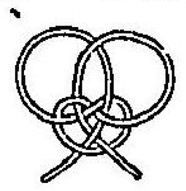
こ-づゝみ[小包](名) ㊀小さきつゝみ。㊁「こづゝみいうびん」の略言。
こづゝみ-いうびん[小包郵便](名) 一種の郵便。書狀及郵便の禁制品を除く外、凝して品物に制限なく郵便物を包裝して發送するを得。――ぶつ[小包郵便物](名) 小包郵便によりて發送する物品。其容積は長さ・厚さ及幅は曲尺二尺以内を限とし、其厚さ及幅の五寸以内のものは長さ三尺を限とし、重量は一貫五百匁を限とし、價格表記の金額は千圓を限とす。重目の多少と里數の遠近によりて料金を異にす。
(こっ-てり)[濃](名、副) 濃厚なるさまにいふ語。「―した汁」。――づくり[濃粧](名) 紅粉をこってりつけて粧(ヨソ)ふこと。あつげしやう。
(ごづ-てんわう)[牛頭天王](名) 【佛】祇園精舍の主護神。
(こっ-とう)[兀頭](名) はげあたま。
(こっ-とう)[骨董](名) 種々雜多の道具。ごたごたしたる古道具。(古董)。――や[骨董屋](名) 骨董品を賣る商人。だうぐや。――てん[骨董店](名) 骨董品を賣る店。だうぐや。(骨董舖)。――ほ[骨董舖](名) 骨董店に同じ。――はん[骨董飯](名) ごもくめし。
(こっ-せつ)[榾柮](名) ほだ。そだ。たきぎ。
(こつ-にく)[骨肉](名) ㊀骨と肉と。㊁血統を同じうせる親子兄弟。
‡こ-づの[小角](名) 角の先の中にある小さき骨。
(こっ-ぱ)[木端](名) ㊀斧の類にて切りすてたる木の屑。こけら。(木片)。㊁取るに足らぬもの。「―大名」。
(こっ-ぱい)[骨牌](名) 「カルタ」。

(こっ-ぱい)(名) こざかしきこと。こなまいき。「―な事をいふな」。(東京の方言)。
(こっ-ぱふ)[骨法](名) ㊀はねぐみ。㊁禮儀作法のすぢみち。㊂藝術の主眼なる點。
(こつ-ばん)[骨盤](名) 【生】下肢を支(サ)ふる腰部の骨と脊柱の下部と癒合して成りたる骨、腹部の下底にあり、臟器を盛る。
こつ-ひろひ[骨拾](名) 「こつあげ」(骨揚)に同じ。
こ-つぶ[小粒](名) ㊀昔時の貨幣の二朱又は一朱の稱。㊁粒の小さきもの。「―の山椒」。
コップ[鈕](名) (オランダ語 Kop) 玻璃製の盃又は水飲などの稱。
こ-つぼ[子壺](名) 子宮の異稱。
こ-づま[小褄](名) 少しく褄をからぐる場合などにいふ褄の稱。「―をからぐ」。
(こつ-まく)[骨膜](名) 骨をつゝみたる膜。
‡こ-づみ[木積](名) 木屑の寄り集まること。「堀江より朝しほみちによる―」。
こ-づ・む[偏](自、ま四) かたよる。よる。
ご-づめ[後詰](名) 後に控(ヒカ)へ居る軍勢。又、あとがりとなる軍隊。(後陣)。
(ごづ-めづ)[牛頭馬頭](名) 【佛】地獄にある獄卒、牛頭・馬頭の各條を見よ。
(こ-づら)[小面](名) 面をいやしめていふ語。「―がにくい」。
(ごつ-り)(名、副) 堅きもの、相觸るゝさまにいふ語。
(こつ-をけ)[骨桶](名) 死人の骨を入るゝ桶。
(ごつん)(名) 固き物を打ち當てたるさまにいふ語。
こて[鏝](名) ㊀泥又は漆喰(シックヒ)などを塗る用具、鐵にて扁(ヒラ)く製し柄を附けたるもの。(杇、鏝)。㊁「やきごて」の略言。
こ-て[籠手](名) ㊀弓を射るとき、左の臂(ヒヂ)にかくるもの。ゆごて。㊁鎧(ヨロヒ)の附屬具、兩腕に掛くる甲。(臂鎧、釬)。㊂擊劍などにて、手指より肘(ヒヂ)のあたりにまで穿(ウガ)ちはむる具、布に綿をつゝみて手の形につくる。㊃擊劍などにて、手首と肘(ヒヂ)との間を打つこと。

[こて(二)]

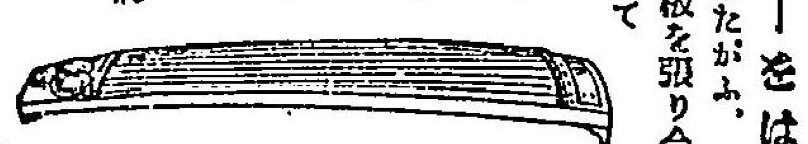
ご-て[後手](名) ㊀敵より攻め掛けられ、此方は防ぐ方となること。敵のために先を制せらるゝこと。先手の對。㊁ごづめ。後陣。
こ-てい[小體](名) 生活などの質素なるさま。
(こ-てい)[戸庭](名) 家の出入口と庭と。轉じて、家の内。
(こ-てい)[古體](名) 「こたい」に同じ。
(こ-てい)[固定](名) 一所にさだまりてあること。うつらざること。うごかざること。――くわっしゃ[固定滑車](名) 滑車の條を見よ。――しほん[固定資本](名) 【經】資本の區別の一、漸次消耗すれど、一回にして消費せられず、幾回も同一の生產に使用せらるゝもの、の稱。即ち、土地・家屋・器具・機械・牛馬等の類。流動資本の對。
(ご-てい)[五帝](名) 支那上代の五人の聖君、即ち少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜の稱なりといひ、又、伏羲・神農・黃帝・堯・舜の稱ともいふ。
(ご-てい)[五鼎](名) ㊀五つのかなへ。㊁牛・羊・豕・魚・腊の五つの食膳。轉じて、ぜいたくなる食事。――にくらはずば ごていににられん[不食五鼎烹五鼎] 功名を成し榮華を享(ウ)くる能はずば、氣儘自由の事を行ひ、罪を得て死なんとの意にいふ。
(ご-てい)[御亭](名) 「ごていしゆ」の略言。――しゆ[御亭主](名) 一家の主又は他人の夫の稱。

こ-てい-た[鏝板](名) 壁(カベ)などに鏝をもて泥などを塗(ヌ)り付くるときに、其塗るものを盛る小さき板。
(ご-てう)[語調](名) ことばの調子。
(ご-でう)[五條](名) ㊀五とほりの箇條。「―の御誓文」。㊁五幅(ノ)にて製したる袈裟。
(ご-てうし)[五調子](名) 昔樂にて五つの調子、即ち、宮・商・角・徵・羽の稱、更にこれを其高低によりて十二に細別す。十二律の條を見よ。
‡こ-でう-はい[小朝拜](名) 古昔、淸涼殿の東庭にて、元日に殿上人の拜賀したる儀式、朝拜の無き年に行はれたり。朝拜の對。
(こて-こて)(名、副) こってり。又、澤山。
(ごて-つく)(自、か四) ごたつく。
(こ-てふ)[胡蝶](名) ㊀【動】鱗翅類に屬する昆蟲、觸角は棍棒狀にして、翅は屢く物に止まるときはこれを上方に合して垂直となす。種類甚だ多けれど、多くは美麗なり。㊁雅樂の名、背に羽を負(オ)ひて蝶の形をなし、額(ヒタ)に山吹の造花の飾をつけたる童子の舞ふもの。――のゆめ[胡蝶夢](名) (莊子が夢に胡蝶となりたりといふ寓言に出づ)夢又ははかなき物事にいふ語。又、物と我との差別なき境涯にいふ語。――むすび[胡蝶結](名) 紐などの結方、胡蝶の翅を擴(ヒロ)げたるさまに結ぶもの。


[こてふむすび]

(こ-てん)[古典](名) ㊀古昔の儀式又は法式、むかしののり。㊁古昔の事を記したる書籍、古書。
(こ-てん)[古點](名) 昔時の訓點。「―の論語」。
(ご-てん)[語典](名) 語をあつめて、これが解釋をなしたるもの。辭書。

(ご-てん)[午天](名) ひるどき。
(ご-てん)[御殿](名) 貴人の住む家の敬稱。――い[御殿醫](名) 昔時、大名などの御殿に勤め醫業の事を掌りし醫者。――ぢよちゆう[御殿女中](名) 宮中又は大名の奥向に奉仕せる女中。
(ご-でん)[誤傳](名) あやまりのいひつたへ。まちがひのとりざた。
こと[事](名) ㊀しごと。わざ。㊁人生に現出する無形の狀態、物の對。㊂わけ。ゆゑ。㊃つとめ。ようじ。㊄異變、變亂。「四方―なし」。――ともせず 物事を心にかけず、眼中におかず。
こと[言](名) ことば。(辭、語、詞)。――をはむ[食言] ちかひにそむく、いひし事をたがふ。
こと[琴](名) 一種の樂器、長き桐の板を張り合はせて中を空にし、上面に絃を張り、彈じて鳴らすもの、種類多し。


[こと]

こと[異](名) 疑はりてあること。常ならざること。ちがふこと。「―なる御氣色」。
(こ-と)[糊塗](名) はっきりと處置せざること。又、ごまかしておくこと。
(こ-と)[古渡](名) こわたり。
こと―[異](接頭) 或語に冠して、ことなる意を表する語。「―國」。
―ごと[如](接尾) ごとく。やう。
[―ごと][共](接尾) それも共に。それぐるみ。「皮―かじる」。
―ごと[毎](接尾) ごとに。つねに。
‡こと-あげ[言擧](名) 特別に取り立てゝいふこと。
こと-いと[琴絲](名) 琴に張りて彈ずる絃。三味線絃の如く生絲にてつくる。
‡こと-いみ[言忌](名) 忌みていはざること。

(こ-とう)[孤燈](名) 暗中にたゞ一つ見ゆる燈火。
(こ-とう)[弧燈=Arc lamp](名) 電燈の一、二本の炭素棒を對向せしめたる裝置のものにして、初め其炭素棒を相接觸せしめ、強き電流を通ずるときは、其接觸部紅熱して光を放つ、然ると其兩端を少しく離せば、其中間に弧狀の強き光を生ず、されど炭素棒燃(モ)えて兩端の間隔漸次離開するを以て、自動的に常に一定の距離を保たしむる裝置を附す。(弧光燈)。

[ことう]

(こ-どう)[鼓動](名) 心臟の血液循環によりて、脈にこたふるひゞき。「胸の―」。
こ-どう[小胴](名) 「つゞみ」の異稱。
(こ-どう)[古銅](名) 古代の銅。「―の花瓶」。
(ご-とう)[御燈](名) みあかし。
(ご-とう)[梧桐](名) 【植】「あをぎり」に同じ。
‡こ-とうけ[言承](名) こたへ。へんじ。
(ごとう-しん)[五等親](名) ㊀親子より數へて、親疎に由りて分かちたる五つの階級、一等親は、父母・養父母・子・養子をいひ、二等親は、祖父・祖母・嫡母・繼母・伯叔父・姑・兄・弟・姉・妹・夫の父・夫の母・妻・妾・甥・姪・孫をいひ、三等親は、曾祖父・曾祖母・伯叔婦・夫の甥・從父兄弟姉妹・異父兄弟姉妹・夫の祖父・夫の祖母・夫の伯叔姑・甥の妻をいひ、四等親は、高祖父・高祖母・從祖父姑(祖父の兄弟)・從祖伯叔父姑(祖父の兄弟の子)・夫の兄弟姉妹・兄弟の妻妾・再從兄弟姉妹・外祖父・外祖母・舅(母の兄弟)・姨(母の姉妹)・兄弟姉妹の孫・從父兄弟の子・外甥・外姪・曾孫・孫の妻をいひ、五等親は、妻妾の父母・姑子(父の

姉妹の子)・弟妹の子;母の兄弟姉妹の子)・玄孫(曾孫の子)・外孫・姉・女の夫をいふ。❷前條の第五等にあたるもの。

ことう-ぼり[後藤彫](名) 彫物の一派、美濃國の人後藤祐乘より始まる。祐乘は足利義政に仕へ、刀劍の金物の作に名ありし人なり。

ことう-もの[後藤物](名) 後藤彫の彫刻物。

‡こと-おほ[事多](名) 用事多きこと。

‡こと-かた[異方](名) 異なりたる所。別の所。

‡こと-がまし(形、二) ことばおほし。

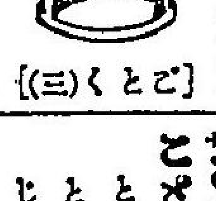
こと-がら[事柄](名) 事のすがた。事のありさま。(事體、事由、事態)。

こと-きる[事切](自、ら下二) ❶命絶ゆ。死ぬ。

こと-ぎれ[事切](名) ❶事のやむこと。おしまひ。❷命終はること。死ぬること。

こ-どく[孤獨](名) ❶みなしごとひとりもの。又、ひとりもの。「けふよりは子とては有りもせめ—の世」。❷たすけなきこと。つれなきこと。ひとり。

ご-とく[五德](名) ❶兵家の重んずる五つの德、即ち、智・信・仁・勇・嚴の稱。❷(佛)比丘の重んずる五つの德、即ち、怖魔・乞士・淨戒・淨命・破惡の稱。❸三脚又は四脚を付けたる鐵の輪、火の上に置き、釜・鐵瓶などを掛くるもの。かなわ。(火架三脚、鐵架)。



[ごとく(三)]

‡こと-ぐさ[言種](名) ことのはぐさ。いひぐさ。「朝夕の—に」。

‡こと-くに[異國](名) ❶ちがひたる國。別の國。❷外國。外邦。

‡こと-ごころ[異心](名) ふたごゝろ。あだごゝろ。

ごと-ごと(名、副) 物と物とを打ち合はするが如き響。「—音がする」。

‡こと-ごと[異事](名) ほかの事柄。別事。「—に目もうつらず」。

‡こと-ごと[異異](名、副) べつべつ。まちまち。

こと-ごと[悉](名、副) 「ことごとに」に同じ。

‡こと-ごとく[悉](副) ❶あるかぎり。のこらず。みな。(皆、盡)。

こと-ごとし[事事](形、二) さも大事らしく。仰山(ギヤウサン)らし。たいそうらし。

こと-ごのみ[事好](名) ものずき。

こと-こまやか[事細](名) 委(クハ)しきこと。詳かなること。「—に」。

‡こと-こむ[事籠](自、ま下二) くちこもる。どもる。

こと-どころ[事所](名) ❶德川時代に、代々國事の技藝を以て仕へし家。❷集まりて國事する所。

‡こと-さへぐ[言喧](枕) (言さへぐの意)「カラ」「クダラ」など外國の名に冠らする詞。其國語の聞き分け難きをいふ。

‡こと-さま[異様](名) 異ひたるさま。ことなるやう。

‡こと-さまし[事醒](副) 興の醒むること。

‡こと-さら[殊更](副) ❶故意に。心ありて。わざと。❷其物事のために特別に。わざく。❸わけて。とりわけ。 ‡—に[殊更](副) 前條に同じ。 ‡—ぶ[殊更](自、は上二) 殊更にするやうに見ゆ。

こと-し[琴師](名) 琴をつくり又は直す人。

こ-とし[今年](名) 此年。こんねん。(今歲、今茲)。 ‡—おひ[今年生](名) 今年生ひたるもの。 —ごめ[今年米](名) 今年とりいれたる米。新米。 —だけ[今年竹](名) 今年芽を出して育ちたる竹。 —でき[今年出來](名) 今年出來たるもの。又、其もの。

‡こ-とじ[小刀自](名) 古言、酒造司にありし酒部の一。

ごと-し[如](助動) ❶物事を比べて同一なるさまの意を表はす語、「花の—」(若)。❷取りわけて擧げいふ意を表はす語、「武文のごときはまた少しく聞ゆ」。

こと-しり[事知](名) よく物事を知りたること。又、其人。

こと-ずくな[言少](名) 言葉すくなきこと。

‡こと-ずくな[事少](名) 用事すくなきこと。

‡こと-そぐ[事殺](他、か四) 事をはぶく。

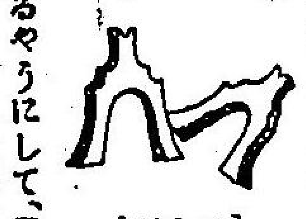
‡こと-だつ[事立](自、た四) 常と變れる事をなす。「正月なれば—」。

‡こと-だつ[事立](自、た下二) 前條に同じ。

こと-だま[言靈](名) 古來、我國の言語を尊びていふ詞、皇國の言語に靈あり、雅正なる音聲を述ぶれば靈妙なる徳用をなすとの意なり。 —のさきはふくに[言靈幸國](名) 我國の異稱。

こと-ぢ[柱](名) 琴の絃の下に挿して之れを支(サ)ふるに用ふるもの。(琴柱、箏柱)。 ‡—ぼら[柱](名) 異稱。

ことぢにかはして ことをひく[膠柱鼓瑟] 活動の出來ざるやうにして、用をなさしめんとすると、即ち、物事を活用するを知らざるたとへにいふ。



[ことぢ]

こと-づく[託](自、か下二) ❶かこつく。ことよす。❷人に頼みていひやる。傳言す。

‡こと-づく[託](他、か四) ことづくす。

こと-づけ[託](名) ❶かこつけ。❷ことばのとりつぎ。傳言。(寄語、囑言)。

こと-づて[言傳](名) ❶人のいふ語によりて傳へ聞くこと。傳聞。傳説。❷ことばのとりつぎ。ことづけ。でんごん。傳言。寄語。

こと-づま[琴爪](名) 「ことづめ」に同じ。

こと-づめ[琴爪](名) 琴を彈ずるときに指のさきに嵌(ハ)むる具、象牙などをもて爪の形に造りたるもの。(義甲、箏甲)。

‡こと-と[事](副) 其事をとりたてゝ。ことさらに。「もっぱら」。

‡こと-どころ[異所](名) ほかの所。よそ。

‡こと-とひ[言問](名) ❶物をいひかくること、はなしかたらひ。❷尋ね問ふこと。たづね。とひ。

‡こと-とふ[言問](自、は四) ❶ものをいふ。はなす。❷たづぬ。とふ。

‡こと-どもり[言吃](名) 言語を澁(シブ)りて發し得ざること。又、其人。どもり。

‡こと-なし[事無](形、二) ❶容易なり。たやすし。❷つゝがなし。無事なり。❸異變なし。おだやかなり。

‡ことなし-ぐさ[言無草](名) 「忍(しのぶ)」の一名。

‡ことなし-ぶ[事無](自、は上二) 事の無きさまにす。

‡こと-ならば(接) 成るたけならば。なるべくは。

‡こと-なり[異](自、ら變) ❶同一ならず。ちがふ。❷よそなり。ほかなり。❸すぐれたり。ぬきいでたり。❹くすし。めづらし。❺あやし。うたがはし。

こと-に[殊](副) ❶とりわけて。別段に。別して。❷其上に。なほ。

—ごとに[毎](接尾) 或語に添へて、「いづれも」「いつも—たびに」「一つ一つ」等の意を表はす語。「春—咲く花」「人に逢ふ—いふ」。

こと-にす[異](他、さ變) ❶區別す。わかつ。❷たがふ。ちがふ。❸特別のとりあつかひをなす。ことなる待遇をなす。

‡こ-とねり[小舍人](名) 古昔、藏人所の所屬にして中少將などの其せし舍人の稱。

‡ことねり-どころ[小舍人所](名) 古昔、禁中にて常に小舍人が居りしところ。

‡こと-の-は[言葉](名) ❶ことば。❷詩又は歌。 ‡—かぜ[言葉風](名) 歌の風體。 ‡—ぐさ[言葉草](名) いふべきたね。いひぐさ。ことぐさ。(言種)。

‡こ-との-ばら[小殿原](名) 春盤に用ふる「ごまめ」の稱。

こと-の-ほか[殊外](副) 思ひのほか。案外。意外。

‡こと-の-を[琴緒](名) 琴に張る絃。いと。

こと-は[言葉](名) 「ことば」に同じ。

こと-ば[言葉](名) ❶げんご(言語)に同じ。❷文字を以て言語を記したるもの。(詞、辭)。❸いひぶり。いひやう。くちぶり。 —をつがふ 口やくそくす。ちぎる。

ことば-あらそひ[言葉爭](名) いひあひ。「こうろん」。

ことば-がき[詞書](名) ❶文詞を書くこと。又、書きたる文書。❷歌の小序。はしがき。

ことば-がたき[言葉敵](名) はなしあひて、はなしとなる人。

ことば-がへし[言葉返](名) くちへんたふ。口答(クチコタヘ)。

ことば-じち[言葉質](名) 人の言葉を證據に取ること、又、證據に取りたる言葉。「—を取る」(言質)。

‡こと-はかり[事計](名) 事のはからひ。(商議)。

‡こと-はじめ[事始](名) 事をはじめること。❶昔時、正月の儀式終りて、二月八日に其年にする事をはじめし日。❷すべて事の手始めにいふ語。

ことば-じり[言葉後](名) ❶ことばの末の方。(語尾)。❷他人のいひそこなひの語「—を捕ふ」。

ことば-ずくな[言葉少](名) 多くをいはぬこと。

ことば-たがへ[言葉違](名) ❶いさかひ。いひあらそひ。❷言葉の前後相矛盾(ムジュン)せること。又、約束したる言にたがふ。

ことば-たたかひ[言葉戰](名) こうろん。

ことば-づかひ[言葉遣](名) 言葉をつかふさま。又、言葉をつかふ方法。(言法)。

ことば-づめ[言葉詰](名) りくつぜめ。

ことば-とがめ[言葉咎](名) ことばの咎をとりて發言すること。

こと-はな[異花](名) ほかの花。他し花。

ことば-の-いづみ[言葉泉](名) ことばの數無量なるを、泉の限りなく湧きくるにたとへていふ語。

ことば-の-うみ[言葉海](名) ことばの數多きを、海の廣く深きにたとへていふ語。

ことば-の-その[言葉園](名) ことばの數多きを、園の草木の多きにたとへていふ語。

ことば-の-ちり[言葉塵](名) ことばの數多きを、塵の數多きにたとへていふ語。

ことば-の-はな[言葉花](名) ❶和歌の美稱。❷文句の美稱。

ことば-の-はやし[言葉林](名) ことばの數多きを、林中の草木の多きにたとへていふ語。

‡こと-はら[異腹](名) はらがはり。

‡こと-はらから[異兄弟](名) はらがはり又は、たねがはりの兄弟。

こと-ひ[特牛](名) 「ことひうし」の略言。 —

し[特牛](名) 強健なる牡牛、頭の大きなる牛。——うしの—[特牛](枕) 「みやけ」に冠らする詞。
‡ことひきぐさ[琴彈草](名) (松風を琴の音にたとへし故事に出づ)〔植〕松の異稱。
‡ことびと[異人](名) ほかのひと、他人、餘人。
ことぶき[壽](名) ❶ことぶくこと、ちやうゐい(祝詞)、いはひ、よろこび。❷命の長きこと、ちやうじゆ(長壽)。❸よはひ、とし、いのち。——をちぢむ 死ぬることにいふ、又、殺すにいふ。
ことぶく[壽く](他、か四) 「ことほぐ」に同じ。
ことぶれ[事觸](名) ❶すべて事を觸れ行くこと、又、其人。❷鹿島の事觸に同じ。
(ごとべい)[五斗米](名) (陶淵明の故事に出づ) わづかの食祿又は俸給。
‡ことほがひ[言祝](名) 「ことほぎ」の延言。
ことほぎ[言祝](名) ことほぐこと、いはひ、よろこび、「初春の御—」(壽)。
ことほぐ[言祝ぐ](他、か四) 言葉にて祝ふ、祝す、ことぶく、いはふ、(壽)。
‡ことみ[事見](名) ものみ、ゆさん。
‡ことむく[言向く](他、か下二) ❶敵方へ向かしむ、従はしむ。❷討ち平ぐ、たひらぐ。
‡ことむすび[言結](名) ぐちやぐちや。
ことも[子供](名) ❶人々、人達。❷わらべ、わらんべ。❸遊蕩などにて藝娼妓などの稱。——だまし[子供騙](名) ❶子供をすかすこと、子供をあざむくこと。❷手段又は物品の甚だ淺薄なるをあざけりていふ語。
こともおろか[言愚](副) いふまでもなく。
‡こともの[異物](名) 異なる物、別物。

‡ことやう[異樣](名) 變はりたる樣、ことざま。
ことゆく[事行く](自、か四) 事とゝのひ行く、埒(らち)があく、折合付く。
‡ことよさし[事寄](名) ことよさすこと。
‡ことよさす[言寄す](他、さ四) 委任す、命令す、まかす、いひつく、(任事、命令)。
ことよす[言寄す](自、さ下二) ❶かこつく、(事寄、托言)。❷いひよる。
ことよせ[言寄](名) ことよすること。——づま[言寄妻](名) ものをいひ掛けていひ寄る婦人。
ことよる[言寄る](自、ら四) いひよる。
ことり[小鳥](名) 形の小さき鳥の總稱、すゞめ、ひばり等の類。
‡ことり[部領](名) (部執の義) ❶一部屬の長、一群のかしら。❷古昔、藏宮の舍人の衛門の府を領したるもの。もくてう、木鳥。——づかひ[部領使](名) 上古防人(さきもり)の役を領したるもの、又は七月相撲を行はるゝとき、國々の力士を召すために派遣せられし使者、多くは花をかざしたりといふ。
ことりあはせ[小鳥合](名) 鶯、山雀などの小鳥を合せて、鳴聲、羽色の善惡を勝負すること。
‡ことりばば[子取婆](名) とりあげばば、(産婆)。
‡ことわざ[事業](名) わざ、しわざ。
ことわざ[諺](名) 古來のいひならはし、世間にいひ傳ふることば、通俗の訓戒。
ことわり[理](名) ❶すぢ、みち、道理、「おのづからなることわりを見よ」。❷わけ、よし、理由、「—いうて下さんせ」。
ことわり[斷](名) ❶かねて告げ置くこと、豫めいひ置くこと。❷承知せぬこと、謝絶すること。❸わびをいふこと、あやまること。
ことわる[理る](他、ら四) 是非を判斷す、事理を區別す、わかつ、(判、辨別)。
ことわる[斷る](他、ら四) ❶かねて告げ置く、豫め知らす。❷承知せず、謝絶す(辭退、謝絕)。❸あやまる、わぶ。
ことをさめ[事納](名) ❶十二月八日に、其年の雜事を終ふること。❷物事のをさめ。
こな[小名](名) 村内又は町内の字(あざ)。
こな[粉](名) こ、「—にもなし」「—屋」。
こな[此方](代) あなた、(元祿頃の語)。
‡こな[子奈](名) (子等の古言)男子の女子を親みて呼びし語。
(ごなう)[御惱](名) 病氣の敬稱、おんなやみ。——け[御惱氣](名) 前條に同じ。
こながき[粉餅](名) 一種の料理、飯に米の粉を混(まぜ)て煮たるもの、(糝)。
(こなから)[二合半](名) (小半の義)❶二合五勺。❷こなからざけの略言。——ざけ[二合半酒](名) ❶二合五勺の酒。❷量少なき酒。
(こなぎ)[小水葱](名) 水葱(なぎ)の小さきもの。
‡(こなごな)[粉粉](名) 極めて細かく碎(くだ)けたるさまにいふ語、「—になる」。
こなさん[此方樣](代) 男より女を若しくは女より男を親しみて呼ぶ語、おまへさん。
こなし[小梨](名) 〔植〕こりんごの一名。
こなし(名) ❶細かく碎(くだ)くこと。❷消化せしむること。❸ひりまはし、あつかひ。
こなす[熟す](他、さ四) ❶細かに碎く、粉にす、こなごなにす。❷食物を消化す。❸自由に運用す、「使ひ—」。

こなすび[小茄子](名) 〔植〕いぬほほづきの古名。
こなた[水田](名) よく開墾したる水の深き田。——づくる[水田作](自、ら四) 一二回開墾して漸く良田となす。
こなた[此方](代) (このかたの約言) ❶身に最も近きものにいふ代名詞。そなた又はかなたの對。❷われ、おのれ。——かなた[此方彼方](代) ❶あちらこちら、方々。❷われもかれも。——さま[此方樣](代) 他人の家に赴き、其家を指して尊びいふ語。
こなつめ[小棗](名) 〔植〕なつめの一種。果實は圓くして味酸く、秋の頃熟して赤くなる、(酸棗)。
‡こなひだ[此間](名) 「このあひだ」の略言。——ぢゆう[此間中](名) 此間のうち。
こなみ[前妻](名) 以前の妻、せんさい、うはなりの對。
こなみぢん[粉微塵](名) 極めて細かく碎(くだ)けたること、こなごな。
こなや[粉屋](名) 米麥等の粉を賣る人又は店。
こなら[小楢](名) 〔植〕ならの一名。
こなる[熟る](自、ら下二) ❶碎(くだ)けて粉になる、細かになる。❷食物消化す。❸運用自在なり。
こなれ(名) こなるゝこと。——る(自) 「こなる」の訛。
(ごなん)[五男](名) ❶五人の男子。❷五人目の男子。
(ごなん)[御難](名) 災難の敬稱、「松若谷の—」。——のもち[御難餅](名) 法華宗にて、九月十二日に開祖日蓮上人の像に供する餅、日蓮上人が龍口の刑場にひかるゝ途中、老婆が餅を供せし故事に出づといふ。

‡コニオル[王妃](名) (百濟の語)三韓の王后。
‡コニキシ[國王](名) (百濟の語)三韓の王。
‡こにし[胡荽](名) 〔植〕「コエンドロ」の古名。
‡コニセシ[王子](名) (百濟の語)三韓の太子。
‡こにだ[小荷駄](名) 馬に付くる荷物、(輜重)。——うま[小荷駄馬](名) 荷物をのせ行く馬。
(ごにち)[後日](名) 後の日。
(こには)[小庭](名) ❶小さき庭。❷古昔、内裏清涼殿の殿上の南庭の稱。
こにもつ[小荷物](名) 少量の荷物、手廻の荷物。
‡こにやく[蒟蒻](名) 〔植〕こんにやくの古名。
ごにんぐみ[五人組](名) ❶五人より成りたる組。❷昔時、行政上の便宜より、五戸を一組とし、これに特定の責務をおはせしものゝ稱。
こぬか[小糠](名) 米のかす、ぬか。——あめ[小糠雨](名) 細かき雨、ぬかあめ。
こぬかさんがふ[小糠三合](名) (小糠三合もつならば入聟すなとの俗諺に出づ)聟養子の身分にいふ語、「—の身」。
こぬけ[小脱](名) 芝居の鼠(ねずみ)の一種。
こぬすびと[小盗人](名) ちよつとした物をぬすむ盗賊、こそぐろ、泥棒、(竊盗、耳賊、小賊)。
こぬすみ[小盗](名) 少し許りのものを盗むこと。
‡こぬれ[木末](名) 木のうれ、こずゑ。
こねかへす[捏返](他、さ四) これてうねかへす、又、勢よくこねる。
こねこ[小猫](名) 猫の子、又、小さき猫。
こねどり[捏取](名) 餅を搗(つ)くとき、杵を持つ人の傍にありて、餅を捏(こ)ね返す者、又其人。
こねまき[小寢卷](名) 小さきねまき、即ちかいまきの類。
こねりがき[木練柿](名) 枝つきのまゝ色付きたる柿の實、「柿の實、方柿」。
こねる[捏ぬる](他、な下一) ❶米麥の粉などに水を混じてまぜかへす。❷理屈をいふ、又、難問を出す、「—」。
‡こねる(自、な下一) 死ぬ。
(ごねん)[顧念](名) 後事をおもふこと、顧慮。
(ごねん)[御念](名) 他人の心遣の敬稱、おこゝろづかひ、ごねんばい。
この[此](代) (「これ」といふ代名詞「こ」に國語の「の」の結付きたる語)身に最も近き物事を指し示す代名詞、その又はかの等の對、(這、斯)。——あひだ[此間](名) ❶ちかごろ、このごろ。❷さきだつて、さきごろ。——いだ[此際](名) 「此の際」の略語。——うへなし[此上無](名) これにまされる物なし。
‡このかうべ[兄部](名) 力役をする者の長。
このかた[以來](名) 其時より後、それ以後。
このかた[此方](代) こなた。
このかみ[兄](名) (子の上の義) ❶第一の兄又姉にも通じていふ、長子。❷自分より年長じたる人、としうへ。❸氏(うぢ)の上。
このかみ[小嗅](名) あたはら、とがみ、はがみ。
このきみ[此君](名) (晉の王子猷が竹を愛して「何可一日無此君耶」といひし言に出づ)〔植〕竹の異稱。
‡このくれ[木暗](名) 木の茂(しげ)りて下の暗きこと、又、其蔭。——やみ[木暗闇](名) 前條に同じ。——しげ[木暗繁](名) 下の暗きばかり木の茂りたること。
‡このこ[子之子](名) 孫の一名。
このごろ[此頃](名) ちかごろ、このほど、(頃日)。

こ-の-した[木下](名) 木の下。樹下。 ——かげ[木下影](名) こかげ。 ——やみ[木下闇](名) 木葉繁くして其下の暗きこと。又、其處。

このしろ[鰶](名) 【動】喉鰾類中このしろ科に屬する魚、體は側扁にして腹底は梁狀をなす、背部は蒼靑色にして蒼黑色の點數行に並列す、腹部は稍や白色なり、體長大いなるは一尺許あり、我國東海より西海に至る迄の內海に多し、其當歲なるをこはだといふ。

‡この-しろ[利息](名) 貸金のりそく。

〔この-ぢゆう[此中](名) このあひだぢゆう。

このて-がしは[兒手柏](名) 【植】松杉科に屬する木、葉は鱗片狀にして恰も掌(タナゴコロ)を立てたるが如く、對生して常綠なり、花は單性にして雌雄同株なり、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。

こ-の-ね[木根](名) 木の根。

こ-の-は[木葉](名) ❶木の葉。 ❷もちば。(落葉)。 ——いし[木葉石](名) 木の葉の形の面に印したる石。又、木の葉の化石。 ——かき[木葉搔](名) 「こまざらひ」の一名。(竹把)。 ——がくれ[木葉隱](名) 木の葉の陰にかくるゝこと。木の葉の下にうづまること。 ——がへり[木葉返](名)【動】「えつさい」の小さきものゝ稱。 ——がれひ[木葉鰈](名) ❶【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、體色淡灰にして、全身に褐色なる微細の斑點浸布せり。 ❷二寸位の小さきひらめを重ねて乾したるもの。さゝのはがれひ。(從薬魚)。 ——ごろも[木葉衣](名) 木の葉を編みて造りたる衣服、仙人などの着たるものといふ。 ——ざる[木葉猿](名) 騷(サワ)がしき猿。 ——しぐれ[木葉時雨](名) 木の葉の飛び散るを、時雨(シグレ)にたとへいふ語。 ——せんべい[木葉煎餅](名) 落葉の形に製したる煎餅。 ——づく[木葉角鴟](名)【動】みゝづくの一種、晝間は樹林に隱れ、夜間出でゝ食を求む、眼圓くして大いなり。(鵂鶹)。 ——てんぐ[木葉天狗](名) 小さき天狗。 ——とりづき[木葉取月](名) 陰曆四月の異稱。 ——むしや[木葉武者](名) 弱き武者。

[このはがれひ]

こ-の-はう[此方](代) 下輩に對して用ふる自稱の代名詞。

この-はな[木花](名) ❶梅の花。「なにはづにさくやーふゆごもり」。 ❷櫻の花。

こ-の-ほど[此程](名) ちかごろ。このごろ。(近時)。

こ-の-ま[木間](名) 木のあひだ。樹間。「ーの月」。

このま-し しく しき しけれ [好](形、二) 好むべし。すきなり。 ——げ[好氣](名) すきらしく見ゆること。

この-まゝ[此儘](名) 現在のまゝ。

このまろ-どの[木丸殿](名) 「きのまろどの」に同じ。

こ-の-み[木實](名) 樹木に生(ナ)る果實。きのみ。くだもの。(果實、樹果)。

このみ[好](名) ❶すくこと。好むこと。 ❷望みてなす注文。「ーに由る」 ❸はやり。流行。 ——ごころ[好心](名) ものずきの心。又、色ごのみ心。

‡こ-の-みち[木道](名) 材木の識別。 ——の-たくみ[木道匠](名) こだくみ。大工。

‡このみ-どり[木實鳥](名)【動】猿の異稱。

この・む まみむむめめ [好](他、ま四) ❶欲しく思ふ。得んと望む。 ❷たしむ。たしなむ。 ❸愛す。めづ。 ❹望みて注文をなす。

こ-の-め[木芽](名) きのめ。 ‡——づき[木芽月](名) 陰曆二月の異稱。

‡この-も[此面](代) こなた。こちら。 ——かのも[此面彼面](代) こなたかなた。あちらこちら。あちこち。

‡このも-し しく しき しけれ [好](形、二) このまし。 ‡——げ[好氣](名) このましげ。

この-もと[木下](名) きのもと。(樹下)。

この-よ[此世](名) 現に生きてある今の世。げんぜ。「ーからなる地獄の責」。(現世)。

‡この-よら[此夜](名) こんや。こよひ。今宵。

このり[兄鷂](名)【動】はしたかの雄の稱。(雀鷂)。

この-わた[海鼠腸](名) なまこの腸を鹽辛にしたるもの、尾張國より多く出す。

このゑ[近衞](名) ❶「このゑふ」の略言。 ❷「このゑしだん」又は「このゑへい」の略言。 ——しだん[近衞師團](名) 皇宮守頭の常備兵師團、又、其師團に附屬する軍隊。 ——の-みかど[近衞御門](名) 陽明門の一名。 ——ふ[近衞府](名) 古昔、皇居に近く居て警衞せし武官のつかさ。 ——へい[近衞兵](名) 近衞師團に附屬する兵士。 ——ぼたん[近衞牡丹](名) 紋所の名。 ——りう[近衞流](名) 和樣書道の一派、徳川時代の始、近衞信尹の創めしところ、光悅流はこれより出づ。

このん-で[好](副) ❶好みて。たしなみて。 ❷しば〳〵。よく。「ー貰ふ」。

[このゑぼたん]

こ-ば[小端](名) はし。「材木のー」。

(こ-ば[胡馬](名) 北方のえびすの馬。「ー嘶北風」。

〔こ-ば[木羽](名) こけら。(奥州の方言)。

(ご-は[五派](名)【佛】禪宗の五つの流派、卽ち、臨濟・雲門・曹洞・潙仰(イギヤウ)・法眼(ホウゲン)の稱。

(ご-は[五覇](名) 支那の春秋時代の五人の覇者卽ち、齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・宋の襄王・楚の莊王の稱。

ご-ば[後場](名) 取引所にて、午後に立つ相場。

(こ-ばい[故買](名)【法】贓品なることを知りて、これを買ふこと。けいずかひ。 ——はん[故買犯](名)【法】故買をなしたる犯罪。

〔こは-いけん コワ [強意見](名) 嚴重なる意見。てひどき說諭。

(ご-ばい-し[五倍子](名) 「ふし」の一名。(鹽麸子)。

‡こは-いひ コワイイ [強飯](名) こはめし。赤飯。(硬飯)。

(こ-ばう[顧望](名) ❶あとをふりむきて見ること。又、方々を見まはすこと。 ❷かれこれと考へわたりて、決行せざること。

(ご-はう ゴーホウ [午砲](名) 正午をしらする大砲の音。

(ご-はう ゴーホウ [誤報](名) あやまりの報知。

(ご-ばう ゴーボウ [御坊](名) 僧又は寺を敬ひて呼ぶ語。

ご-ばう ゴーボウ [牛蒡](名) 【植】菊科に屬する草、葉は芋に似て厚くして皺あり、頭狀花は悉く筒狀の完全花より成りて冠毛を有す、高さ二三尺、根の長さ二三尺ありて色黑し、山中に自生するもあれど、多くは菜園に培殖せられ、葉柄及根は食用に供せらる。(便衣牛)。 ——じり[牛蒡尻](名) 猫などの短き尾。 ——ぬき[牛蒡拔](名) 一氣に拔くこと、又、多くの中より撰び拔くこと。

こ-ばかま[小袴](名) ❶古昔、素袍(スハウ)の下に用ひし袴、さしぬきに似たるもの。 ❷後世、半袴の一名。 ❸細き綠(ヘリ)を取りたる裾のある半袴。

〔こは-が・る らりるるれれ [恐](自、ら四) 恐しく思ふ。おそる。

〔こ-はく[買舶](名) あきんどぶね。

(こ-はく[琥珀](名) ❶【礦】前世界の松脂などの地中に埋沒して、其性を變じたるもの、往々炭層中に出づ、假れ黃色を帶び蜂蜜の如き色をなす、摩擦すれば能く電氣を生ず、「パイプ」又は簪の珠などの料に用ひらる。 ❷「こはくもり」の略言。「ーの帶」。 ——おり[琥珀織](名) 一種の絹織物、なゝこに似たる目ありて、羽織地又は帶地などにす。 ——たう ウート [琥珀糖](名) 一種の菓子、煮とらかしたる寒天に、砂糖を加へて固(カタ)めたるもの。

こは-げ コワ [恐氣](名) ❶おそろしがる心地。 ❷おそろしげなるさま。 ——だ・つ たちつつてて [恐氣立](自、た四) おそろしくなる。

こは-ごは コワゴワ [恐恐](名、副) おそれながらものするさまにいふ語。(懍々)。 ——・し しく しき しけれ [恐恐](形、二) ❶おそるゝさまなり。 ❷おそろし。あら〳〵し。「ーき顏」。

ご-はごは ゴワゴワ [強強](名、副) ❶かたくこはきさまにいふ語。 ❷紙類又は反物などの地のしなやかならざるさまにいふ語。 ——・し しく しき しけれ [強強](形、二) かたくこはきさまなり。

こは-さ コワ [恐](名) おそろしきこと。おそろしき度合。

こは-さ コワ [強](名) こはきこと。こはき度合。

こは-し コワ [毀](名) こはすこと。「ーにかゝる」。

こは・し シ コワ くしきけれ [恐](形、二) 恐るべし。おそろし。

こは・し シ コワ くしきけれ [強](形、二) ❶かたし。(硬)。 ❷つよし。(剛)。

こ-はしとみ[小半蔀](名) 「はしとみ」に同じ。

こ-はしり[小走](名) ❶稍や急ぎ行くこと。 ❷昔時、武家の婦人に事へて雜用を辨ぜし少女。

こは・す コワ さしすすせせ [毀](他、さ四) やぶる。くだく。こぼつ。くづす。

こ-はぜ[鞐](名) 〔小挾の轉〕 帙・足袋・脚半などの掛け合はする端に付けたる爪の如きもの、これをこはぜかけにかけて合はせ閉づ、角・真鍮・象牙などをもて造る。(牙籤、桃牙、骨板)。 ——かけ[鞐掛](名) ❶こはぜを掛くるために、他の一片に裝置しあるもの。 ❷こはぜを掛けて合はせ閉づる仕立。

こ-はだ[木肌](名) 木の皮。(樸)。

こ-はだ[小鰭](名)【動】「このしろ」の幼期。(江鰶魚)。

こ-ばた[小旗](名) ❶小さき旗。 ❷さしこばた。

〔ご-は-つ・く ゴワ かきくくけけ [強付](自、か四) ごはくす。「衣服がー」。

こ-ばな[小鼻](名) 鼻のさきの左右卽ち孔の上の小高き所。 ——どり[小鼻鳥](名)【動】「うづら」の異稱。

‡こはな-がゆ[小花粥](名) 古昔、八朔に食ひし黑燒の胡(スス)をまぜたる粥。

〔こは-ば・る コワ らりるるれれ [強張](自、ら四) 強くなる。かたくなる。「舌がー」。(強直)。

‡こは-ひ コワイイ [硬飯](名) 「こはいひ」の略言。

(ご-はふ ゴーホウ [語法](名) 言語を組成する法規。

(ご-はふ ゴーホウ [護法](名) 「ごほふ」に同じ。

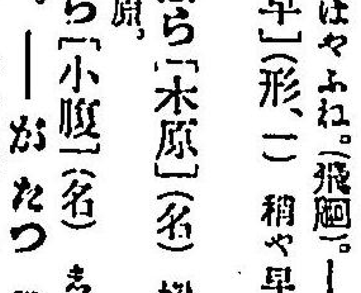
〔ご-ば-まめ[五葉豆](名)【植】「がんくひまめ」の一名。

こばみ-しようしよ[拒證書](名) 拒絕(キヨゼツ)證書ともいふ、手形所持人が其引受拒絕又は支拂拒絕(不渡)の場合に、必要なる行爲をなしたるとの證明に、公證人若しくは執達吏をして作成せしむる要式の文書、引受拒絕の場合には引受拒絕證書といひ、支拂拒絕の場合には支拂拒絕證書といふ。

こば・む まみむむめめ [拒](他、ま四) ❶支へ止む。支へ防ぐ。はゞむ。 ❷應ぜず。ひきうけず。

こは-めし コワ [強飯](名) 蒸籠(セイロウ)にて蒸したる糯米、多くは小豆(アヅキ)を混じ、赤く染めて祝賀など

に用ふ。むこは。(赤飯、硬飯)。
〔こは-もて〕コハ「恐持」(名) 相手の恐しく思ひて、心ならずも優待すること。
こは-もの コハ「强者」(名) つよきもの。
こ-ばや「小早」(名) ㊀少しく早きこと。稍や急ぐこと。「—に迫る」。㊁急行に用ふる小舟。小さきはやふね。(飛廻)。——-し くしきけれ「小早」(形、二) 稍や早し。少しく急ぐ。
†こ-ばら「木原」(名) 樹木の生えたる野原。
こ-ばら「小腹」(名) またはら。このかみ。——-が たつ 稍やいかりの心生ず。
†こ-はり「小張」(名) 白き布の狩衣、はくちやう。
こ-はる「小春」(名) 陰暦十月の異稱。——-びより「小春日和」(名) 小春の頃の暖かきひより。
こは・る コハル「れれるるれよ」「毀」(自、ら下二) 砕(クダ)けやぶる。くずる。やぶる。(毀)。
こは・る コハル「らりるるれれ」「强」(自、ら四) 強くなる。かたくなる。
コバルト「Cobalt」(名) 【鑛】色澤銀に近くして微(コス)しく赤色を帯びたる金屬、鐵に比して稍や重く且硬(カタ)く稍や融解し易し、産出少なく價不廉なるを以て、廣く諸般の需用に供する能はず、酸化物は「ガラス」及陶磁器の着色顔料に供せらる。
こは-れ コワレ「毀」(名) ㊀こはるゝこと。㊁こはれたるもの。又、こはれたるかけら。(環)。——-もの「毀物」(名) ㊀こわれたるもの。㊁こわれ易き物品。
〔——る〕(自)「こはる」の訛。
(こ-はん)「枯礬」(名) 「やきみやうばん」の一名。
(こ-はん)「孤帆」(名) たゞ一片の船。
こ-ばん「小判」(名) ㊀昔時の金貨、薄くして楕圓形をなし、其一枚は一兩に相當せり。大判の對。㊁判(ハン)の小さきもの。「—の紙」。


〔こばや(二)〕

こ-ばん「小鷭」(名) 【動】涉禽類に屬する鳥、嘴長く端部は黄色にして根部に軟毛を被る、背部赤黑色にして腹部白し、脚は赤色にして長く趾は自在なり、水邊に棲息し小魚などを食す。(紅冠水鷄、田鷄)。
こ-ばん「小番」(名) ㊀しもべ。㊁こばんしゆう。
(ご-はん)「午飯」(名) ひるめし。ひるけ。晝飯。
(ご-はん)「御飯」(名) 飯又は食事の敬稱。
(ご-はん)「誤判」(名) あやまりの判斷。
ご-ばん「碁盤」(名) ㊀碁を圍むに用ふる盤、方形にして多くは下に四足を付け、表面に縱横各十九の罫線を直角に交はるやうに引きたるもの、其縱横の罫線の交はりあふ箇所に、碁石を打つ。(枰枏、碁局)。㊁碁盤の表面の目の如くに、方形を正しくならべたるさまの模様の稱。「—おき」。
こばん-いただき「小判頂」(名) 【動】「こばんざめ」に同じ。
こばん-がた「小判形」(名) 小判の形即ち楕圓形。
こ-はん-ぎん「小半斤」(名) 半斤の二分の一即ち四半斤の稱。
こばん-ざめ「小判鮫」(名) 【動】硬鰭類中こばんざめ科に屬する魚、體は長くして紡錘形をなし、鱗は細小なり、背鰭の棘部は變じて吸盤をなす、背部は褐色にして腹部は暗色なり、吸盤を以て他の強壯なる大魚の腹部に附着し、勞せずして遠方に達す、時に往々小船の底に吸ひつき、船をとゞむるとありといふ。あやかし。こばんいたゞき。
ごばん-しま「碁盤縞」(名) 織物の縞が碁盤の目の如くに、方形の模様を正しく連ねたるさまをなすもの。
こばん-しゆう「小番衆」(名) 武家の近侍。

(こはん-せき)「虎斑石」(名) 近江國高島地方より出づる一種の石、質黑くして白斑あり、硯などを造る料に供せらる。
こ-はん-とき「小半時」(名) 昔時、一時の四分一、即ち、今時の三十分。
こばん-なり「小判形」(名) 小判がた。
†こ-ひ コイ「脛」(名) 膝より下の脹(ハ)るゝ疾。こひずね。
こ-ひ コヒ「鵠」(名) 【動】「はくてう」に同じ。
(こ-ひ)「喉痺」(名) 喉(ノド)の腫(ハ)れふさがる病。
(こ-ひ)「古碑」(名) 古き石碑。
こ-ひ コヒ「戀」(名) 情を寄すること。あこがれまたふこと。れんぼ。れんあい。戀情。愛戀。——-は くせもの 戀は分別以外にして、あらぬ振舞をなすにいふ。——-は しあん の ほか 戀のために心緒惱亂して、身分境遇等には關係せぬにいふ。
こ-ひ コヒ「鯉」(名) 【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、體は側扁にして強壯なり、鰭太し、口の前端に觸髭二對あり、背部蒼黑色にして腹部淡黄色、體長大いなるは三尺餘に達す、河川又は湖沼等に産す。

〔こひ〕

こ-び「媚」(名) こぶること。こぶるさま。「—を呈す」。
(ご-び)「語尾」(名) ㊀ことばのいひしまひ。㊁【文法】一つの語の末、即ち其語の語根•語幹以下の稱、「あがる」「かへす」「ながし」等の「る」「す」「し」これなり。
(ご-びう)「誤謬」(名) あやまり。まちがひ。
†こひ-うら コイ「戀占」(名) 戀につきてのうらなひ。「—り」。
こひ-か コイ「戀歌」(名) 戀の心を詠じたる和歌。
(こ-ひ-か)「虎皮下」(名) 虎の皮の敷物のもとの義、書簡文にて、學者又は軍人等の宛名の下に書する語、即ち、御手許の義。

こ-びき「木挽」(名) 材木を鋸(ノコギリ)にて挽(ヒ)くこと。又、其業の人。(拉鋸人)。
こひ-ぐさ コイ「戀草」(名) ㊀こひの情を草の茂げるさまにたとへいふ語。㊁心の異稱。
こひ-ぐち コイ「鯉口」(名) ㊀刀の鞘(サヤ)口と鐔(ツバ)と相合ふ所。㊁一種の服、つゝその如くに仕立たる布子にして、水仕事などするとき、着物の穢(ヨゴ)るゝを防ぐために着るもの。——-を きる 直に拔刀の用意をするやうに、鯉口をすこしくゆるめておく。
こ-ひげ「小髭」(名) ㊀すこしく生びたる髭。㊁【植】燈心草科に屬する草、水田に生ず、莖は細長くして通常葉は存在せず、雄蕊は六個あり、莖を以て席を織る。
こひ-こく コイ(名) 一種の料理、鯉の肉を煮たる味噌汁、即ち鯉の肉のこくしやう。
こひ-ごころ コイ「戀心」(名) こひしく思ふ心。又、「いろけ」。
こひ-ごろも コイ「戀衣」(名) 戀する人の衣服。
こ-ひざ「小膝」(名) (「こ」は接頭語)膝を進め又は膝を打つときなどに膝にいふ語、「—を進む」。
†こひ-ざめ コイ「戀醒」(名) 戀ふる心のうすらぐこと。
こひ-し コイ「しくしきけれ」「戀」(形、二) したふ心切なり。したはし、なつかし。
こひ-しらず コイ「戀不知」(名) 未だ戀愛の情を解せざること。又、むくつけくして愛情の少なきこと。
こ-びたひ クビタヒ「小額」(名) (「こ」は接頭語)額の稱。
†こひ-ぢ コイヂ「泥」(名) (濃泥の義かといふ)「どろ」に同じ。「—に被が出る」。
こひ-ぢ コイヂ「戀路」(名) こひしたふ情のむき。こひのみち。——-の やみ「戀路闇」(名) こひしたふ情に惱(ナヤ)みて、物事のあやめもわかぬさまにいふ語、「—に踏み迷ふ」。

こび-ちや「媚茶」(名) 黑色を帶びたる淡き茶色。
(こ-ひつ)「古筆」(名) 古人の書きたる書。——-み「古筆見」(名) 古筆の眞僞を鑑定する人。
こ-ひっさき-もとゆひ イユ「小引裂元結」(名) 昔時、奥女中の用ひし引裂元結の小さきもの。
こ-ひつじ「小羊」(名) 羊の子。又、小さき羊。
〔こびっちよ〕(名) 身體の小さきものを罵りていふ語。
こ-びと「小人」(名) ㊀古昔、武家にて、走りつかひをなし、卑賤のもの、稱。こばしり。こもの。(白徒)。㊁たけ甚だひくき人。矮人。一寸法師。(侏儒)。——-がは ワ「小人革」(名) 昔時、革足袋などにつくりし革、肌柔(ヤハ)かにしてきめ細かし。——-ぐみ「小人組」(名) 徳川時代に、將軍家に附屬して卑賤の役をつとめし一階級。——-しま「小人島」(名) 身體の甚だ小さき人の住みてゐるといふ想像上の島。——-めつけ「小人目付」(名) 昔時、御徒目付(カチメツケ)の下に屬せし役目。
こひ-にようばう コイーボウ「戀女房」(名) 戀ひしたひて娶(メト)りたる妻。
こひ-ねがはくは コイネガワクワ「希」(副) 願ひ望むには。ねがふことには。ねがはくは。なにとぞ。どうぞ。
こひ-ねが・ふ コイネガウ「はひふふへへ」「希」「冀」(他、は四) 望み願ふ。ねがひのぞむ。こひもとむ。(尚、翼、冀)。
こひ-の-かたき コイ「戀讎」(名) 戀の成功せざるうらみ。又、自分の戀ふる人と相愛せる相手。
こひ-の-たきのぼり コイ「鯉瀧登」(名) 鯉が龍門の瀧をさかのぼりて龍となるといふこと。轉じて、人の立身出世するをにいふ語。
こひ-の-つじうら コイ「戀辻占」(名) 戀に關する種々の文句を記したる辻占。

こひ-の-ふち コイ「戀淵」(名) 戀ふる情の深きを淵にたとへいふ語。
†こひ-の-む コイ「ひみむむめめ」「乞祈」(他、ま四) 乞ひいのる。「こひのみて、あがまつ時に」。
こひ-の-やっこ コイ「戀奴」(名) 戀ふる情に支配せらるゝ様を奴に比していふ語。
こひ-の-やまひ コイ「戀病」(名) こひやみ。
こひ-びと コイ「戀人」(名) ㊀思ひ慕ふる人。意中の人。情人。㊁いろ。
ご-び-へんくわ「語尾變化」(名) 【文法】動詞及形容詞等が、其意を數種にいひ分かち又は他語に接續するために其語尾を變化すること。
こ-びやう ヨウ「小兵」(名) ㊀弓勢の弱きこと。㊁身體の矮小なること。からだの小さきこと。
ごひやく-らかん「五百羅漢」(名) 【佛】佛滅後遺教結集のとき、來會せし弟子衆の總稱。
こひ-やみ コイ「戀病」(名) 戀情の烈(ハゲ)しきより起る病氣。こひわづらひ。こひのやまひ。(相思病)。
コヒラー「Coherer」(名) 【理】細き硝子管に細かき金屬の粉を入れ、其兩端に電極を附したるもの、「マルコニ」式無線電信機の主要部にして、金屬粉の電氣の抵抗高けれど、電波達するときは抵抗著しく減ずる性を利用したるなり。

〔コヒラー〕

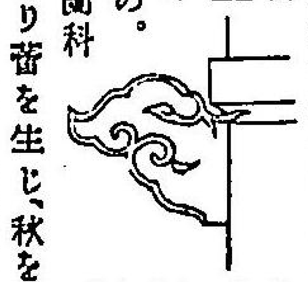
〔こびりつ・く〕「かきくくけけ」(自、か四) しっかりつきて離れず。かたまりつく。
〔こびる〕「媚」(自)「こぶ」の訛。
こ-ひる「小蒜」(名) 【植】「ひる」に同じ。
こひ-わた・る コイ「らりるるれれ」「戀亙」(自、ら四) 戀ひ慕ひて年月を經(フ)。
こひ-わづらひ コイワヅライ「戀煩」(名) こひのやまひ。「こひやみ」。

こ-びん[小鬢](名) 鬢の端。
こふ[鵠](名) 【動】「はくてう」に同じ。
こふ[鸛](名) 【動】渉禽類に屬する鳥、嘴は長くして全部角質なり、趾間の根基に小蹼を張り、後趾よく發達せり、毛色白く、眼の周圍の面部は羽毛生ぜずして裸出す。こふのとり。
コフ[劫](名) (梵語 Kalpa 劫波(コフハ)の略)【佛】(い)一時期。(ろ)極めて長き時間。「セツナ」の對。——をふ 永き年月を經。年功を積む。
こふ[劫](名) 圍碁にて、互に取らんと爭ふ一つの石が、互に一手間を置かざれば取り得られぬもの、故に他方に於て敵を脅(オビヤカ)す石を打ち、敵これを防ぐ間に、其石を取(ト)りとる。
‡こ-ふ[國府](名) 「こくぶ」に同じ。
こ-ふ[乞ふ](他、は四) ㊀ねがふ。のぞむ。(請)。㊁もとむ。もらふ。(丐)。
こ-ふ[戀](他、は上二) 戀ひ思ふ。こひしく思ふ。なつかしく思ふ。戀のぶ。
こぶ[瘤](名) ㊀病氣によりて、筋肉むすぼれ皮膚推(ウツ)く高(カ)くあらはれたるもの。㊁皮膚を烈しく打たれて、筋肉の一時脹(ハ)れ上りたるもの。㊂すべて物の表面に小高く現はれ出でたるもの。「木の—」。㊃厄介物又は子供。「—つき」。
こ-ぶ[昆布](名) 【植】「こんぶ」に同じ。
(こ-ぶ)[鼓舞](名) ㊀鼓を打ちならして舞を演ぜしむること。㊁はげましいさましむること。いきほひづかすること。ふるひおこすこと。「士氣を—す」。
こ-ぶ[媚](自、は上二) ㊀氣にあふやうにす。機嫌をとる。へつらふ。おもねる。㊁やさしき姿をなす。なまめきたるさまをなす。㊂容子をかざる。志やれる。

(ごふ)[業](名) ㊀【佛】因を縁によりて果となさしむる善惡の作行、例へば、或植物の種は因、これを蒔きたる地は縁、生えたる其植物は果にして、斯かる那悧に到達せしめし耕作は業なり。㊁自分自ら作りし罪惡の應報。——をにやす ごふはらに思ふ。
(ご-ふ)[護符](名) 「ごふう」に同じ。
ご-ぶ[五分](名) ㊀一寸の二分一。㊁物の長さを五分位に切りたるもの。㊂「ごぶごぶ」に同じ。
(ごふ-いん)[業因](名) 【佛】現世又は來世に於ける一切果相の因。
(こ-ふう)[古風](名) むかしの風。又、いにしへの姿。「—な人」。
(ご-ふう)[護符](名) 神佛の加護の威力こもるといふ符、多くは紙に呪文などを書きたるものにして、災難又は病氣等の禁厭(マジ)に、これを壁間に貼(ハ)り又は肌身につけ若しくは飲みなどす。(神符)。
(ごふう-ぢふう)[五風十雨](名) (五日に一たび風吹きて十日に一たび雨ふる義) 風雨の極めて順當なること。
こ-ぶかし[木深し](形、二) 木立茂げし。「山のけしき木ぶかく世はなれて」。
こぶ-がり[五分刈](名) 長さ五分ぐらゐに、髮を刈ること。
こぶ-ぎり[五分切](名) 長さ五分ぐらゐに物を切ること。
(こ-ふく)[鼓腹](名) (腹をつゞみうつ義) 食物に滿足して、いと氣樂に身を休ますさまにいふ語。はらつゞみ。「—撃壤」。
(こ-ふく)[胡服](名) えびすの人の着る衣服。
こ-ぶく[子福](名) 子供の多くあること。——者[子福者](名) 子供を數多く持ちてゐる人。
(ご-ふく)[呉服](名) ㊀「クレはとり」に同じ。㊁織物の總稱。きれるゐ。反物。——ざし[呉服

差](名) 「ごふくざやく」に同じ。——ざやく[呉服尺](名) 布帛を測るに用ふるものさし、一尺は曲尺の一尺二寸五分に相當す。くぢらざし。(布帛尺、裁縫尺)。——だな[呉服店](名) ごふくや。——だな[呉服棚](名) 四十八棚の一、一間の床を、殘らず一樣なる造方の袋戸にしたるもの。——てん[呉服店](名) ごふくや。——みせ[呉服店](名) ごふくや。——もの[呉服物](名) きれるゐ。織物。反物。
ごぶ-ぐし[五分櫛](名) 厚さ五分許ある櫛。
‡こ-ふくべ[小瓠](名) 【植】枇杷の古名。
ごふく-や[呉服屋](名) 呉服を賣る家又は人。(呉服商)。——もの[呉服屋者](名) 呉服屋にゐる人、呉服屋に勤むる人。
こ-ぶくろ[子袋](名) 婦人の腹中にある子のやどる所即ち子宮。
ゴフ-くわ[劫火](名) 【佛】器世間を燒き盡くして灰燼となすといふ大火。
(ごふ-くわ)[業果](名) 【佛】ごふのむくい。
(ごふ-くわ)[業火](名) 【佛】烈(ハゲ)しき憤怒を火にたとへいふ語。
(こぶ-こぶ)[瘤瘤](名) おほく並び出でたる瘤。——だつ[瘤瘤起](自、た四) 瘤數多く現はる。「—だった松の根」。
(ごぶ-ごぶ)[五分五分](名) 雙方一樣なること。互に可否又は優劣なきこと。
(ごふ-ざらし)[業曝](名) 前世の應報により、現時に恥辱を蒙ること。又、其もの。
こぶし[拳](名) 指を五本共に掌の中へ屈めて、握(ニギ)り固めたるもの。にぎりこぶし。げんこつ。‡——うち[拳打](名) 拳にて他を擊つ技藝、拳法の類。——あがり[拳上](名) 長き物を持つに、其先

端下りて手許高きこと。——がため[拳固](名) ㊀にぎりこぶし、げんこつ。㊁犬追物のとき、初めに酒を飲むこと。——さがり[拳下](名) 長き物を持つに、其先端上がりて手許下がること。——ばな[拳端](名) 神社の屋根の貫(ヌキ)の小口をひぢ木の如くにしたるもの。



[こぶしばな]

こ-ぶし[辛夷](名) 【植】木蘭科に屬する木、山野に生ず、夏より蕾を生じ、秋を經て、葉は落ち蕾のみ殘り毛衣を存す、春の末、葉の出づる前に、白色大形の花を開く、觀賞用として栽培せらる。(木筆、杞棣)。‡——はじかみ(名) 【植】「こぶし」の古名。
こ-ぶしん[小普請](名) 德川時代に、小普請の人足を旗本の非役者に課せしこと。——きん[小普請金](名) 德川時代に、小普請の代はりに、扶持高百石に付き、一兩二分宛の率を以て旗本に出金せさせしこと。——ぐみ[小普請組](名) 德川時代に、旗本の非役のもの、編入せられし組。
(ごぶ-しん)[五分心](名) 幅の五分ある「ランプ」の心。
(ごふ-だう)[劫盜](名) おひはぎ。おひおとし。
こぶ-だひ[瘤鯛](名) 【動】硬鰭類中こぶだひ科に屬する魚、體は楕圓形にして鱗は稍や小なり、頭上に瘤狀の突起あり。
(こ-ぶつ)[古佛](名) 古代の佛像。
(こ-ぶつ)[古物](名) ふるき物。又、むかしの品。
(ご-ぶつ)[後佛](名) 【佛】未來に色身を現出すといふ佛。
(ご-ぶつ)[互物](名) 一對ありて、互にそろはざれば、其用をなさゞるもの、稱。
(ごふ-つう)[業通](名) 魔性の通力。「妖術、魔術の—に」。

(こぶ-つき)[瘤附](名) ㊀妊(ト)りたる婦人の以前より已に妊娠してあること、又、其婦人。㊁厄介者又は子供の附き居ること。又其もの。
(ごふ-つくばり)[業突張](名) ごふざらし。「死に掛かりて、死にもせぬ—」。
ごぶ-づけ[五分漬](名) みのぼし大根を五分切にし、三杯酢にて漬けたるもの。
(こぶつ-しやう)[古物商](名) 古物のあきなひ。又、其あきなひを業とする人。
こふ-づる[鸛鶴](名) 【動】「こふ」(鸛)に同じ。
こぶな-ぐさ[藎草](名) 【植】禾本科に屬する草、葉は竹に似て、花は穗狀花序に排列す、煎じて染液を採る。かいな。
こ-ぶね[小船](名) 小さき船。(扁舟、輕舟、艇)。
こふ-の-とり[鸛鳥](名) 【動】「こふ」(鸛)に同じ。
(ごふ-はう)[業報](名) 【佛】作行に應じて來たるむくい。業のむくい。「—な奴」。
(ごふ-はら)[業腹](名) いかりに堪へぬこと。「—
(ごふ-びやう)[業病](名) 業のむくいに生じたりといふ難病。「人をいぢめた報いで此—」。
(ごふ-ふう)[業風](名) 【佛】(い)業因の轉々して、業報のうつり行くさまを、風にたとへいふ語。(ろ)地獄にありて、極めて猛烈なりといふ暴風。
(ごふ-ま)[業魔](名) 一切の惡業が、智慧を失はしむるを、魔にたとへいふ語。
こぶ-まき[昆布卷](名) 「こんぶまき」の略言。
こ-ぶみ[小文](名) 半切紙にきた、めたる書面。
こぶ-やうじ[瘤楊子](名) 皮を削(ケ)づらざる材を用ひて作り、皮を其まゝつけおく楊子。
(ごふ-やく)[業厄](名) 業によりて受くる災難。
こぶ-やなぎ[瘤柳](名) 【植】楊柳科に屬する木、

幹に瘤の如きものを生ず、葉粗(アラ)く花少なし、材白ければ楊子又は柳行李を製する料とす。(楳柳)。
こぶら(名) 【動】「きさご」の一名。(肥前唐津の方言)。
‡こ-ふ-らく[戀](動) 「戀ふる」の延言。
こ-ぶり[小降](名) 雨又は雪などの少しく降ること。「—になる」。(小雨)。
こ-ぶり[小振](名) 普通より稍や小形なること。「おほぶり」の對。
こ-ぶり[子振](名) 子供の容貌。「—がよい」。
(ごふ-りき)[業力](名) 【佛】過去・現世・未來に於ける因緣を知りて、業を起さゞる力。
(ごふ-りやく)[劫掠](名) おびやかしかすむること。
こ-ぶろ[小風呂](名) 小さき風呂。
(こ-ふん)[古墳](名) ㊀いにしへの塚。むかしの墓。㊁上代の墳墓、其構造は普通土地を堀下げ、石塊を以て槨を造り、死屍は石棺又は陶棺に納めてこれに容れ、大石の蓋を置き、其の上に土を盛りて塚とす、塚の形狀には圓錐形或は瓢簞形等あり、其の周圍には多く濠をめぐらしたり。
(こ-ふん)[孤憤](名) 自分獨り世を憤(イキドホ)ること、他に同情者なき自分一己の慷慨。
(こ-ぶん)[古文](名) ㊀古代の文章。㊁古代の文字。「—孝經」。
(こ-ぶん)[子分](名) ㊀假に子と定めて、實子の如く取りあつかふもの。㊁親方の部下。てきた。てか。「親分—の間柄」。
(ご-ふん)[胡粉](名) 介殼を燒きて製したる白粉、顏料に供せらる。(白堊)。
(ご-ぶん)[誤聞](名) きゝまちがひ。きゝあやまり。
(こ-ぶん-じ)[古文辭](名) 古代の文辭。——がく[古文辭學](名) 宋又は明の儒學がおもに性理を說くに反對して、明又は我國に起りたる儒學、

古文辭の眞正なる解釋によりて、經書に述べたる所の聖賢を解し、以て儒學の眞理を知らんとするものゝ稱。我國にては荻生徂徠の一派これなり。

こへい [雇聘](名) やとひ入るゝこと。やとひ用ふること。「―して顧問とす。」

こへい [雇兵](名) 貨錢を給してやとひ使ふ兵士。

こへい [胡瓶](名) 口に鳳の頭をつけたる瓶。

こへい [胡兵](名) えびすの兵士。

こへい [語弊](名) 語の上のきず。語の不完全なる點。

こへい [御幣](名) 幣束の敬稱。ぬさ。にぎて。――かつぎ [御幣擔](名) 不吉を忌み緣起を氣に懸くる性質。又、其人。(迷信、過信。) ――もち [御幣持](名) つき從ひて他人に諂(へつら)ふ者。たいこもち。

こへう [虎豹](名) とらとへうと。轉じて、猛烈なるもの又は暴惡なるものゝ稱。

こべう [古廟](名) 古くなりたるみたまや。又は神社。

こへき [古癖](名) 古代の器物などを好むくせ。

こべつ [戸別](名、副) いへごと。軒別。

こべつ [語別](名) [文法]言語の品詞上の區別。

こべりつく [こべり付く](自、か四) こびりつく。

こべん [顧眄](名) ふりかへりて見ること。

こへん [御邊](代) 同輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと。貴殿。足下。

こぼく [古木](名) 年數を經たる立木。おいき。「老樹。」

こぼく [枯木](名) 枯れたる立木。かれき。――はなひらく [枯木華開] 苦運又は苦境にありしものが、再び幸福に際會するにいふ。

十こぼこぼ (名、副) 鳴り響く音。「風音高くて、神―なる」「舟端をこぼこぼと打ちたゝく音」

十こぼし (形、二) こひし。の古言。

かばかりこき妹ぞ。

こぼし [零](名) ❶こぼすこと。❷水こぼし。

こぼす [零す](他、さ四) ❶洩(も)らす。溢(あふ)れしむ。❷愚痴をいふ。なげきわぶ。

こぼつ [毀つ](他、た四) 破り損ず。こはす。やぶる。「―たれたる家」(破壞)。

こぼね [小骨](名) ❶小さき骨。❷骨の稱。「―が折れる」。

こほふ [護法](名) ❶もの、け又は病氣等を調伏して、其人を保護すること。山伏の御坊の一によりて。❷政法を保護すること。又、其神。

十こぼめかす (他、さ四) こぼめくやうにす。

十こぼめく (自、か四) こぼこぼと音す。「さうじなども、たなめかし―こそ」。

こほり [氷](名) ❶水の氷點以下の寒氣にあひて凝結したるもの。又、すべて液體の寒氣のために凝結したるものゝ稱。(冰)。❷かさねの色目、表裏白なるもの。 ――いし [氷石](名) [鑛]水晶の一名。其結晶したるさまのこほりに似たるより此名あり。 ――いちご [氷苺](名) けづりたる氷に、いちごのシャリベツを加へたるもの。 ――おろし [氷卸](名) 氷砂糖を細末としたるもの。ざらめ。(粉糖)。 ――かけ [氷掛](名) 金米糖に氷蜜を掛けたるもの。鍋盤を火上に置き細に氷蜜をたらし掛け、攪(か)きまぜて製す。 ――きんとき [氷金時](名) けづりたる氷に、煮たる赤小豆を混じたるもの。 ――こんにやく [氷蒟蒻](名) 寒氣にさらして凍(し)ませたる蒟蒻。(氷蒟蒻)。 ――ざたう [氷砂糖](名) 白砂糖を煮て、玉子の白身を入れ灰汁(あく)を去り、青竹の割りたる中に入れて凝結せしめたるもの。(石蜜、水晶糖)。 ――しらたま [氷白玉](名) けづりたる

氷に、白玉團子を入れ砂糖を加へたるもの。 ――しるこ [氷汁粉](名) けづりたる氷と汁粉とをまぜたるもの。 ――すべり [氷滑](名) 氷の上をすべり行く遊戲。 ――すゐ [氷水](名) 氷に水をまぜて飲料となしたるもの。こほりみづ。 ――どうふ [氷豆腐](名) 寒中に凍(し)らしたる豆腐。こほりどうふ。 ――ぶだうしゆ [氷葡萄酒](名) けづりたる氷に、葡萄酒を加へたるもの。 ――みかん [氷蜜柑](名) けづりたる氷に、蜜柑水を加へたるもの。 ――みつ [氷蜜](名) 氷卸に玉子の白身を加へて煮つめたるもの。 ――みづ [氷水](名) ❶こほりみづに同じ。❷寒中に冷却したる水。 ――もち [氷餅](名) ❶非常に凍らしめたる餅。❷かき餅の異稱。(中國地方の方言。) ――や [氷屋](名) 夏日、氷水其外けづりたる氷をもとゝしたる諸種の飲料をあきなふ家又は人。 ――ラムネ (名) けづりたる氷に、ラムネを加へたる飲料。 ――レモン (名) けづりたる氷に、レモンと水を加へたるもの。

こほり [郡](名) 一國を小分したる一部の土地。町・村・里等をあはせ括す。ぐん。「山城國愛宕―」 ――のつかさ [郡司](名) 大領・少領・主政・主帳をすべていふ稱。ぐんじ。 ――ぶぎやう [郡奉行](名) 代官の頭にして郡の庶務をすべつかさどりし武家の役名。

こほる [凍る](自、ら四) 寒氣に逢ひて凝結す。「水が―」(氷、冰)。

こぼる [零る](自、ら下二) 洩(も)れ出づ。溢(あふ)れ散る。「水―」「涙―」(溢)。

十こぼる (自、ら下二) 毀損す。やぶる。こはる。

こぼれ [零れ](名) こぼるゝこと。こぼれたるもの。「―を拾ふ」(溢)。 ――さいはひ [零幸](名) 豫想せざる幸福。意外のさいはひ(僥倖)。 ――まつば [零松葉](名) 松葉の散在したる模樣。

こほろぎ [蟋蟀](名) [動]直翅類中蟋蟀科に屬する蟲。全體褐色にして尾端に二個の突起あり。常に日光を忌み陰所に棲息して鳴く。古名きりぎりす。たまきりぎりす。

こほん [虎賁](名) 勇力を以て人に卓ふるもの。つはもの。

こほん [古本](名) ❶ふるびたる書物。ふるほん。❷古代の書籍。「―大學」。

こほん [小本](名) 小さき書物。大本の對。

こぼんなう [子煩惱](名) 小兒をいたく愛すること。

こま [駒](名) (小馬の義) ❶馬の子。又小さき馬。❷馬の總稱。❸將棋の盤上につかふもの。多くは小さき木片にてつくる。これにそれぞれの名を記るしあり。又、細工によりてたちを異にす。❹すごろくのこま。(杭子、枕馬。) ❺三味線の胴の表面にて、絃を支ふるもの。❻物の間に挿(さ)し入るゝ小さき木。

こま [獨樂](名) (こまつぶりの略言) 子供の玩具。小さく圓くして扁(ひら)き材に軸を貫き、其軸に絲を纏(ま)ひ投げ飛ばして廻はすもの。

こま [木間](名) 木と木との間。このま。

こま [小間](名) ❶ひま。すきま。あひま。❷ちひさき間。せまき間。❸土地を貸して、一月に一間の貸料を得べき區域の稱。(東京語。)

コマ [狛](名) コマいぬの略言。

こま― [小間、細](接頭) 或語に冠らせて細かき又は手輕なる意を表はす語。「―物」「―使」

ゴマ [護摩](名) [佛](梵語 Homa) 焚燒又は火祭

の義)密教にて、諸種を焚きて佛に祈ること。火を焚(た)きて佛に祈ること。

ごま [胡麻](名) ❶[植]胡麻科に屬する草。莖は長橢圓形にして、花は葉腋に一個又は數個づゝ生じ、花冠は白色にして紫紅色若しくは黃色の斑(ふ)あり。果實の粒子(つぶ)に白・黑・赤の三種ありて、共に多量の油を含み、食用とし又は油を搾る。❷「ごますり」の略言。 ――あへ [胡麻韲](名) 一種の料理。胡麻の粒子(つぶ)をすり碎(くだ)き、これに食材料のものを入れてまぶしたるもの。 ――をする ごますりをなす。へつらふ。

{こまい [古米](名) 收穫してより年を重ねたる米。ふるごめ。(陳倉米)。

ごまいかぶと [五枚兜](名) 兜のしころを五枚に造りたるもの。

ごまいざさ [五枚笹](名) ❶[植]竹の一種。丈低くして發生し、一莖に五枚づゝの葉あり。おかめざさ。❷紋所の名。五枚の笹の葉を描(か)きたるもの。

コマいぬ [狛犬](名) (高麗(こま)犬の義)古昔、高麗より渡來せし犬。形は狼に似て羊を殘(そこな)ふに用ひたりといふ。後世、其形を木又は石などにてつくり、宮庭の御簾又は神社の前などに置く。

[コマいぬ]

{こまう [虛妄](名) ❶實際にあらざること。虛偽にあらざること。❷たばかり。いつはり。

コマうど [高麗人](名) 高麗の國の人(狛人)。

コマがく [高麗樂](名) 高麗より傳來の雅樂。

こまか [細](名) こまかさ。

こまかし [細](形、二) ❶ちひさし。ほそし。

❷よく行きわたれり。綿密なり。❸ねんごろなり。えんせつなり。❹くだくだし。わづらはし。

{ごまかし [誤魔化](名) ❶欺きて術中に陷ること。❷目前を裝ひつくろひまぎらすこと。(瞞着)。

ごまかす [誤魔化す](他、さ四) ごまかしをなす。あざむく。まぎらす。

こまがた [駒方](名) うまかた。

こまがね [細金](名) 小粒の金銀貨幣。

十こまがへる (自、ら四) 若返りて又若がへる。

ごまがら [胡麻幹](名) 胡麻の莖。

ゴマき [護摩木](名) ゴマに焚(た)く木。「ぬるでの木。」

{こまく [鼓膜](名) [生]耳の奧にある薄き膜。音響の振動を受けて、これを神經に通ずるもの。

こまくら [木枕](名) 木製の枕。

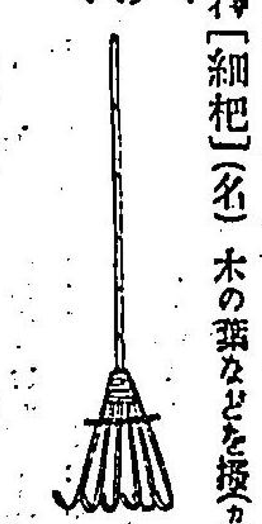
こまくら [小枕](名) ❶木の枕。❷頭を受くるため、木枕の上にのする袋、もみなどを入る。❸婦人の髮のかもじの根に用ふる木。

十こまけ [細分](名) こまかきもの。

こまげた [駒下駄](名) 一つの材にて、臺も齒も刳(く)りて造りたる下駄。うまげた。

こまごま [細細](名、副) ❶細かきさまにいふ語。❷くはしきさまにいふ語。 ――し [細細し](形、二) ❶いとちひさし。又、いとほし。

十こまざらひ [細杷](名) 木の葉などを搔(か)き集むるさらひ。齒細かし。このはかき。(木杷。)



[こまざらひ]

{こまざらへ [細杷](名) 前條の語。枕杷。

こまし（形）「こまかし」の訛。
ごま-しほ〔胡麻鹽〕（名）⊖胡麻の種子を炒（イ）りて、これに燒鹽を加へたるもの。⊜白と黑と相交りてゐる毛。——あたま〔胡麻鹽頭〕（名）黑白相交りたる頭。——かづら〔胡麻鹽鬘〕（名）胡麻鹽頭のかづら。
〔こましやくれ（名）こざかしく私口めきたる言動をなすこと。
〔こましやく-れる（自、ら下一）こましやくれにてあり。
〔ごま-すり〔胡麻擂〕（名）もゝねること。へつらふこと。又、其人。
こ-また〔小股〕（名）⊖狹く股をひろぐること。「ーて歩く」。⊜股の稱。「ーをかゝふ」。
ゴマ-だう〔護摩堂〕（名）寺院に附屬し、護摩を焚（タ）く場所に定めある殿堂。
ごま-だけ〔胡麻竹〕（名）幹に黑斑のある竹。
ゴマ-だん〔護摩壇〕（名）護摩を焚（タ）く壇。

［ごまだん］

こまち-をどり〔小町踊〕（名）盆のをどり、十二三以下の小女襷（タスキ）をかけ太鼓を打ち、輪にならびて廻りながら歌をうたふ。
こ-まつ〔小松〕（名）ちひさき松。わかき松。
こま-づかひ〔小間使〕（名）主人の傍近く置きて小用に使ふ下女。
廿こま-つくり（名）獨樂（コマ）の古名。こまつぶり。
〔こまつ-な〔小松菜〕（名）武藏國小松川地方より出だすつまみなの成長したるもの。（東京の方語）。
こまつ-なぎ〔駒繋〕（名）【植】荳科に屬する小木、羽狀複葉を有し花は紫紅色なり、觀賞用として栽培せらる。（馬棘、金剛花）。

こまつ-ばら〔小松原〕（名）小松の生えたる野原。
廿こま-つぶり（名）獨樂（コマ）の古名。
こ-まつり〔木祭〕（名）樵夫などが、木を採伐するに山の神を祭ること。
廿コマ-つるぎ〔狛劔〕（名）柄長くして頭に環ある劍。
廿コマ-つるぎ〔狛劔〕（枕）「わ」に冠らする詞。「ーわさみがはら」。
ごま-どうふ〔胡麻豆腐〕（名）一種の料理、胡麻の白き種子を擂（ス）りつぶして葛粉を入れ、火にかけ煉（子）りて、豆腐の如くにこしらへたるもの。
こま-どり〔駒鳥〕（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形は雀より大きく、嘴鋭くして尖る、腹白く、背部頭部共に樺色なり、鳴く聲愛らし。（知更雀）。

［こまどり］

こま-どり〔小間取〕（名）人數を二組に分けて、技藝を闘はする時など、右に一人左に一人と、順を追ひて入違に組み合はすること。
こま-ど・る〔小間取〕（他、ら四）人數を小間取に配（クバ）る。
コマ-にしき〔高麗錦〕（名）古昔、高麗より渡來せし錦織。
こまぬ・く〔拱〕（自、か四）⊖腕組をなす。てをくむ。たむだく。⊜何事をも爲さずして居る。
こま-の-あがき〔駒足掻〕（名）⊖駒のあがくこと。⊜光陰の經過。
ごま-の-あぶら〔胡麻油〕（名）胡麻の種子より搾（シボ）り取りたる油、黑胡麻より採りたるものは揚物などに用ひ、白胡麻より採りたるものはしらしぼりと稱し、婦人の髮に付く。
こま-の-つめ〔駒爪〕（名）【植】「つぼすみれ」（ろ）に同じ。

ごま-の-はひ〔胡麻灰〕（名）道中にて旅人の體を裝（ヨソホ）ひて、旅人を欺（アザム）き盜賊をはたらく者。
〔こ-まはり〔小廻〕（名）⊖すこしくまはること。⊜身のこなし。「ーが利く」。
こまひ〔杲〕（名）⊖たるきの端にありて軒に貫く木。こまひぬき。⊜壁の下地にわたす竹。——ぬき〔杲貫〕（名）たるきの端にある木。
廿こま-ひき〔駒牽〕（名）⊖古昔、八月に諸國の牧場より馬を京都へ獻ぜしこと。⊜古昔、四月廿八日武德殿に出御ありて、五月に行はるべき騎射の手入などを御覽ありしこと。——ぐさ〔駒牽草〕（名）【植】「すみれ」の一名。（菫菜）。——ぜに〔駒牽錢〕（名）錢の一種、人が駒を牽きて行く圖を現はしたるもの、古昔これを呪咀（マジナヒ）などに用ひたりといふ。
コマ-ぶえ〔高麗笛〕（名）高麗樂に用ふる笛、歌口の他に、孔六つ若しくは三つあるもの。（篠）。
ゴマ-ふだ〔護摩札〕（名）護摩をたき佛に祈りて、つくりたるおふだ。
こ-まへ〔小前〕（名）賤民の稱。「ーの者」。
こま-まはし〔獨樂廻〕（名）獨樂（コマ）を廻してさまざまの曲藝をなす藝人。（獨樂師）。
ごま-みそ〔胡麻味噌〕（名）煎（イ）りたる胡麻と味噌とを擂（ス）り合はせたるもの。
廿こま-むかへ〔駒迎〕（名）古昔、八月に駒牽の駒を近江國逢坂關まで出迎へしこと。
こま-むすび〔小間結〕（名）紐など與結に結び固むること。（細結、固結）。
ごまめ〔鱓〕（名）すぼしにしたるひしこの稱、煮又は燒きて食ふ、多くは祝賀の儀式などに用ふ。たつくり。（韶陽魚）。
こま-もの〔小間物〕（名）⊖婦人の化粧品、即ち、

櫛・笄・紅脂・白粉などをいふ。「ーを賣る」。⊜へど。——みせ〔小間物店〕（名）⊖小間物を賣る店。⊜へどを吐くこと。——や〔小間物屋〕（名）⊖小間物を商ふ人又は家。⊜へどを吐くこと。
こま-やか〔細〕（名）⊖ちひさきこと。ほそきこと。⊜くはしきこと。めんみつなること。⊜色深きこと。又、情厚きこと。（濃）。
ごま-やき〔胡麻燒〕（名）胡麻を付けて燒くこと。又、其物。
こま-よけ〔駒除〕（名）馬の奔逸を禦（フセ）ぐため、門前などに設くる低き柵。うまどめ。こまよせ。（梐枑）。
こま-よせ〔駒寄〕（名）前條に同じ。
こまり-い・る〔困入〕（自、ら四）非常にこまる。
こまり-き・る〔困切〕（自、ら四）非常にこまる、いたくこまる。
こまり-は・つ〔困果〕（自、た下二）こまりきる。
〔こまり-もの〔困者〕（名）手に合はずして自由にならぬ者。もてあまし者。
こま・る〔困〕（自、ら四）⊖處置になやむ。あつかひにくるしむ。もてあます。⊜なやむ。くるしむ。
こ-み〔小身〕（名）刀の身のつかの中に入る部分。刀のなかご。刀心。
こみ〔込〕（名）⊖種々取まじへてあること。「ーて五十錢」。⊜さしこむ病氣。さしこみ。
（ご-み〔五味〕（名）五つの味、即ち、辛・甘・鹹・酸・苦の稱。
ごみ〔芥〕（名）ちり。あくた。（塵芥）。
〔こみ-あ・ぐ〔込上〕（自、か下二）⊖上方へ衝（ツ）き上ぐ。⊜嘔吐を催す。⊜さしこみ起る。
〔こみあげる〔込上〕（自）前條の訛。
こみ-あひ〔込合〕（名）こみあふこと。雜沓。
こみ-あ・ふ〔込合〕（自、は四）數多の人いり込む。雜沓す。

こみ-い・る〔込入〕（自、ら四）⊖無理に押し入る。（亂入）。⊜入りまじる。こんざつす。⊜事件こまごましくなる。
こみ-うま〔込馬〕（名）あとじさりして進まぬ馬。
廿こ-みか〔小甕〕（名）ちひさきかめ。
ごみ-かくし〔芥隱〕（名）小兒の遊戲、互に芥をかくしおきて、尋ねあふたはむれ。
〔ごみ-くた（名）ごみ。ちり。塵芥。
（ごみ-し〔五味子〕（名）【植】一種の草、帶綠色なる九瓣の白花を開き赤色の實を結ぶ、藥用とす。
ごみ-ため〔芥溜〕（名）芥を拾つる所。はきだめ。ちりづか。——の-つる〔芥溜鶴〕（名）すぐれたる人が、不相應なる低き社會にあるにいふ語。
こ-みち〔小道〕（名）⊖幅の狹き道。こうぢ。（徑、蹊）。⊜よこみち。わきみち。
こ-みち〔小路〕（名）六町一里の里程。大道の對。
こ-みぢん〔粉微塵〕（名）「こなみぢん」に同じ。
廿こ-みづ〔濃漿〕（名）米を煮たる汁。おもゆ。こんづ。
ごみ-とり〔芥取〕（名）ちりとり。（塵箕）。
こみ-や〔込矢〕（名）前裝銃の附屬具、細長き鐵の棒にして、彈藥を銃身の底に突き入るゝに用ふるもの。こめや。「カルコ」。「カルカ」。（槊杖）。
（ご-みやう〔五明〕（名）「インド」國の古代にて、「バラモン」種族の特に研究せし五つの學術の稱にして、佛教もまたこれを因襲せり、即ち聲明（音樂）・工巧明（算數・彫刻等）・醫方明（醫學）・因明（論理學）・內明（佛學）これなり。又、これを內外に分け、前述のものを內五明とし、其中の因明・內明を除（ノゾ）きて、呪明・符明を加へたるものを外五明といへり。
廿こ-みら〔小韮〕（名）【植】「にら」の古名。大韮の對。
廿こ・む（他、ま四）子を生む。

こ・む〔込、籠〕（自、ま四）⊖入りこむ。こもる。いる。⊜むらがる。群集す。（雜沓）。
こ・む〔込、籠〕（他、ま下二）⊖押し入る、入れこむ。つむ。いる。「丸をー」。⊜含めもたす。いれつゝむ。⊜そゝぎこむ、集中す。「精神をこめて」。
ゴム〔護謨=Gum〕（名）⊖或種類の樹木より分泌せる液の乾きて固まりたる脆（モロ）き物質、採取する樹木の異なるに從ひて、其性質を異にすれど、すべて粘着力強く、種々の用に供せらる、「アラビアゴム」は其一なり。⊜一に彈性「ゴム」と稱し、或熱帶植物の樹身より分泌する液を少しづゝ採取して製造したる黑色乃至褐色の塊狀をなす物質、「ゴム」毬・「ゴム」管其他諸種の具を製する料に供せらる。⊜東「インド」地方等に產する或樹木の分泌液を空氣に曝（サラ）して乾かしたる黑色又は褐色の物質、暖むれば軟（ヤハラ）かくなり、種々の形になすを得、且これを精製して諸種の用に供す、齲齒（ムシバ）に塡（ウ）め又は義齒を作るに用ふる「ゴム」と稱するものは即ちこれなり。——いん〔護謨印〕（名）彈性「ゴム」にて製造したる印、石膏の印型にあてゝ製造す。——カッパ〔護謨合羽〕（名）「ゴム」布にて製したる合羽。——ぐし〔護謨櫛〕（名）彈性「ゴム」に多量の硫黃（イワウ）を吸收せしめたるもの即ち「エボナイト」を細工してつくりたる櫛。——くわん〔護謨管〕（名）彈性「ゴム」を以て製造したる管、諸種の用に供せらる。——しやうし〔護謨漿〕（名）「アラビアゴム」の溶液、製造其他藥用に供せらる。——だま〔護謨玉〕（名）彈性「ゴム」にてこしらへたる鞠などの玉。——にんぎやう〔護謨人形〕（名）彈性「ゴム」を以てこしらへたる人形。——ぬの〔護謨布〕（名）彈性「ゴム」を上面にひきたる布、

防水用の外套などを製する料。——**のり**［護謨糊］(名)「アラビアゴム」を溶(ト)かしたる糊、ものを貼(ハ)るに用ふ。——**びき**［護謨引］(名) 表面に護謨を引きたるもの。——**まり**［護謨毬］(名) 彈性「ゴム」にてこしらへたる中の空虛なる毬。——**わ**［護謨輪］(名) 車輪の外周に、彈性「ゴム」を裝置したるもの。

こ-むぎ［小麥］(名) 【植】禾本科に屬する直立草本、果實は穎果にして、芒(ノギ)を有するものと有せざるものとあり、重要なる農作物にして、種子は多くは粉となし、饂飩・「パン」其他醬油・菓子等を製造する料に供せられ、稈(ワラ)は大麥の稈と共に、帽子其他麥稈(ムギワラ)細工等に用ひらる。(麳)。——**こ**［小麥粉］(名) 小麥の種子を挽きたる粉。(麪)。

こ-むすび［小結］(名) 相撲(スマフ)にて関脇の次位。

こ-むすめ［小娘］(名) 十四五歲までの少女。をとめ。こをんな。(處女、少女)。

(**こむ-ソウ**［虛無僧］(名) 普化(フケ)宗の僧侶の稱、尺八を吹きて錢を乞ひ諸國を修行す、德川時代に、武士の罪を犯しゝもの、刑罰を逃れんために此群に入り、多く丸ぐけの帶を締(シ)め下駄を履(ハ)き、絹布の小袖を重ね深編笠を被り、袈裟を掛けて修行したり。ぼろ。ぼろんじ。

［こむさう］

こむ-にち［五墓日］(名) 家作に凶なる外甚だ凶なりといふ日。

{**こ-むね**［小胸］(名)「むね」の稱、「一の悪い事」。

こむら［腓］(名) 脛のうしろの肉の膨(フク)れたる所。ふくらはぎ。(腨腸)。——**がへり**(エリ)［腓返］(名) 腓の筋肉の俄に結ぼれ縮(ツヾ)むこと。(轉筋)。

こ-むら［樷］(名)木の枝の茂り聚りたる所。(木叢)。

こ-むらさき［小紫］(名) 【植】馬鞭草科に屬する木、山野に自生す、葉はいぼたに似て、夏時花を開く。

こ-むらさき［濃紫］(名) 濃(コ)き紫色。古昔、三位以上の袍などに用ひし色。

こむろ-ぶし［小室節］(名) 昔時、吉原に通ふ馬子(マゴ)などの謠(ウタ)ひし小唄。

こ-め(名) 【動】「えひ」に同じ。

こ-め［籠目］(名)「こめかうり」の略言。

こめ［米］(名) 稻の種子、うるしねは炊(カシ)ぎて飯とし、もちごめは蒸して餠とす。

{一**こめ**(接尾) ぐるみ、「枝一折る」。

こめ-あげ［米揚］(名)「こめあげざる」の略言。——**ざる**［米揚笊］(名) 磨(ト)ぎたる米を打ち揚げて、水をきるための笊。(笊籬)。

(**こ-めい**［顧命］(名) ㊀深く愛しての命令。㊁君王又は貴人の死後の事の依託。

(**こ-めい**［古名］(名) 昔時の名目、古代の稱呼。

こめ-いち［米市］(名) 米相場の立つ市。

こめ-うり［米賣］(名) 米をあきなひありく人。

こめ-おり［籠目織］(名) 一種の絹織物、籠(カゴ)の目の如くに、細くちゞれて、透(ス)き通るやうに薄くありたるもの。(縠)。

†**こめか-し**しきしく(形、二) 小兒めきたり。

こめ-かし［米淅］(名) ㊀米をとぐこと。㊁「こめかしをけ」の略言。——**をけ**［米淅桶］(名) 米を磨ぐ桶。こめとぎをけ。

こめ-かみ［顳谷］(名) 眼の側部にありて、物を嚙めば筋肉の動く所、即ち顳顬。

†**こめ-く**ぐけく(自、か四) 子供らしくあり。

こめ-ぐら［米藏］(名) 米穀を入れおくための倉庫。よねぐら。(米廩)。

こめ-さうば(サウ)［米相場］(名) ㊀米穀の相場。㊁米穀の投機的取引。

こめ-さし［米刺］(名) こざし。あらため。——**さくら**［米刺櫻］(名) 【植】「こゞめざくら」の一名。

{**こめ-ざこ**［米雜魚］(名) 【動】「めだか」の一名。

こめ-だはら(タハラ)［米俵］(名) 米を入るゝ俵。(米苞)。

こめ-つき［米搗］(名) 米を搗(ツ)くこと。又、其人。——**ばった**［米搗蝗蚱］(名)㊀【動】「こめつきむし」の一名。㊁{ぺこ〳〵頭を人に下ぐる人をのゝしりていふ語。——**むし**［米搗蟲］(名) 【動】鞘翅類中叩頭蟲科に屬する蟲、全身褐色にして尾端細し、其體を抑ふれば、頭を振るさま恰も人の米を搗(ツ)くに似たるよりなづく、幼蟲は多く砂地に棲息し、時に大小豆の根を切り害をなす。ぬかづきむし。こめふみ。(叩頭蟲、搗糧蟲)。

こめ-つぶ［米粒］(名) 米の顆粒。(顆米)。

こめ-とぎ［米磨］(名)「こめかし」に同じ。——**をけ**［米磨桶］(名)「こめかしをけ」に同じ。

こめ-の-むし［米蟲］(名) ㊀【動】「よなむし」の一名。㊁{人間の稱、米食するよりいふ。

こめ-びつ［米櫃］(名) ㊀白米を入れ置く櫃。げびつ。カラト。(穀匣)。㊁{生計の本となるべきもの。生活費を產出するもの。「田畑が一」。

こめ-ぶくろ［米袋］(名) こめを入るゝ袋。

こめ-ふみ［米踏］(名) ㊀臼を踏みて米を精(シラ)ぐること。又、其人。㊁【動】「こめふみむし」の略言。——**むし**［米踏蟲］(名) 【動】「こめつきむし」の一名。

こめ-へん［米偏］(名) 漢字の偏の名、糖・糯等の字の左旁にある米の字の稱。

こめ-むし［米蟲］(名) 【動】「よなむし」の一名。

こめ-や［込矢］(名)「こみや」に同じ。

こめ-や［米屋］(名) 米を賣る人又は家。(米店)。

{**こめ-やなぎ**［米柳］(名) 【植】「こゞめざくら」の一名(加賀地方の方言)。

{**こ-めらう**(ラウ)［小女郞］(名) こむすめ。

†**こ-めらは**(ラハ)［小女童］(名) こむすめ。

{**こめる**(他)「こむ」の訛。

{**こ-めろ**［小女郞］(名) こめらう。こむすめ。

(**ご-めん**［御免］(名) ㊀官廳のゆるしをうけたること。㊁役を罷(ヤ)めらるゝこと。やとひを解かるゝこと。めんきよ。㊂容赦の敬語、「一なされ」。——**がはら**(ガハラ)［御免革］(名) 赭色の地に白く櫻草などを摺(ス)り出だしたる革、もと貴人の料にして後下民にも許さる。こざくらがは。——**げた**［御免下駄］(名) 桑付の駒下駄、古昔、禁中にて、雨天の節は特別に履(ハ)くを許されたるもの。

{**ごめん-ぶやこ**(名) 【動】「こめざこ」の訛。

(**ごめん-たい**［五面體］(名) 【數】五つの平面にて界する立體。

こも［石菰］(名) 【植】禾本科に屬する草、湖水に生ず、葉は長くして一分內外の幅あり、種子は平滑なり、葉は用ひて席を織り又は諸國の心とし、又は肥料ともす。

{**こ-も**［虛無］(名)「こむソウ」の略言。

こも［菰］(名) 【植】「まこも」に同じ。

こも［薦］(名) 粗(アラ)く織りたるむしろ、多くは藁を料とす。(蓆、苫)。——**かぶり**［薦被］(名) ㊀薦にて包みたる大きなる酒樽、「一一本」。㊁{こじきの稱、薦をかぶりてゐるよりなづく。(蓑冠)。

コモ-ガイ［熊川］(名) ㊀(朝鮮語にて、熊を「コム」川を「カイ」と云ふより轉じたる詞) 朝鮮國咸鏡道熊川郡にて製せし茶碗、茶家にて珍重す。㊁口開きて性淺き茶碗。

{**こ-もく**［芥］(名) ㊀ごみため。㊁ごみ。(塵芥)。

(**ご-もく**［五目］(名) ㊀「ごもくずし」「ごもくめし」又は「ごもくならべ」若しくは「ごもくまめ」の略言。㊁種々なる物の入りまじりたること、「一ケンチン」。——**じやうるり**(ジャウ)［五目淨瑠璃］(名) 種々雜多の院本中の文句をとりあはせて謠(ウタ)ふもの。——**ずし**［五目鮨］(名) 魚肉又は野菜など種々のものを刻み込みて製したる鮨。——**ならべ**［五目並］(名) 碁盤の目の上に、縱橫若しくは斜に、碁石を五目列ね並ぶる遊戲、敵を妨げ己を防ぎ、早く並びたる方を勝ちとす。——**まめ**［五目豆］(名) 人參・牛蒡・道根・慈姑など、共に合はせ煮たる大豆、正月の儀式に用ふるもの。——**めし**［五目飯］(名) 魚肉又は野菜など種々のものを混(マ)ぜて、炊(カシ)ぎたる飯。(骨董飯)。

こも-ごも［交］(副) かはる〴〵。たがひに。

{**こも-ソウ**［虛無僧］(名)「こむソウ」の訛。

こも-だたみ［薦疊］(名) 薦を床の上に敷きたるもの。

†**こも-だたみ**［薦疊］(枕)「へ」に冠らする詞、「一平群」。

こも-だれ［薦垂］(名) ㊀出入口に薦を垂れ下げてあること。㊁出入口に薦を垂れてある乞食小屋、又、むさくるしく賤しき住居。

こ-もち［子持］(名) ㊀子を持ちてあること、子を孕(ハラ)みてあること。又、其婦人。㊁大小相並びてあること。㊂「こもちすぢ」の略言。——**いし**［子持石］(名) ㊀石の中に小さき石のこもりてあるもの。㊁「はったいし」の一名。——**おさ**［子持縞］(名) 織物の縞柄の子持筋なるもの。——**すぢ**［子持筋］(名) 太き筋と細き筋と並行したるもの。

こ-もちづき［小望月］(名) 陰曆十四日の夜、即ちもちづきの前夜の月。

(**ご-もつ**［御物］(名) 御所の御藏品。

こも-づつみ［薦包］(名) 薦にてつゝむこと。又、薦にてつゝみたるもの、「酒の一」。

こも-づの［菰角］(名) まこもの根に出づる芽。

こ-もの［小者］(名) こども。めしつかひ。「雇用。

{**こ-もの**［小物］(名) こま〳〵したる附屬物、又其

†**こ-ものなり**［小物成］(名) 田畑以外の產物及び工產物に賦課する稅。

こも-ばり［薦張］(名) ㊀小屋などの四方をこもにて張ること。又、其小屋。㊁「こもばりしばゐ」の略言。——**しばゐ**［薦張芝居］(名) こもばりの小屋にて興行する下等芝居。

こも-まくら［菰枕］(名) ㊀まこもにてつくりたる枕。㊁†高瀨のたばね。

†**こも-まくら**［菰枕］(枕)「たか」に冠らする詞、「一高瀨の淀」。

こも-むしろ［菰席］(名) こもにてつくりたる席。

こもり［籠］(名) ㊀家內にひきこもりゐること。㊁社寺などにさんろうすること。㊂外に現はれずひそみてあること。ものゝ內にあること。「もり。

こ-もり［子守］(名) 小兒のもりをすること。又、其人。

†**こ-もり**［木守］(名) 材木の番人。

†**こもり**(名)「はたけ」(畑)の異稱。

†**こもりく-の**［籠口］(枕)「はつ」「はて」に冠らする詞、「一初瀨」。「するど。

†**こもり-こひ**(コヒ)［籠戀］(名) 心中にてひそかに戀

こもり-だう(ダウ)［籠堂］(名) 信者の參籠する堂、神社・佛閣に附屬するもの。

ごえい【護衛】（名）❶護りまもること。❷護りまもる人。

ごえき【御役】（名）❶官府の用事。❷官府の用事を勤むる人。

ごえき【五益】（名）【佛】五種の利益。

ごえき【五穢】（名）【佛】五種の穢れ。

ごえき【御影】（名）❶神佛の像。❷人の肖像。

ごえき【御縁】（名）❶神佛と人との縁。❷男女の縁。

ごえき【御園】（名）❶官府の園。❷官府の園を守る人。

ごえき【御煙】（名）❶官府の煙。❷官府の煙を守る人。

ごえき【御猿】（名）❶官府の猿。❷官府の猿を守る人。

ごえき【御猿引】（名）官府の猿を守る人。

ごえき【御猿舞】（名）官府の猿を舞はする人。

ごえき【御猿飼】（名）官府の猿を飼ふ人。

ごえき【御猿曳】（名）官府の猿を曳く人。

ごえき【御猿牽】（名）官府の猿を牽く人。

ごえき【御猿使】（名）官府の猿を使ふ人。

ごえき【御猿廻】（名）官府の猿を廻す人。

ごえき【御猿遣】（名）官府の猿を遣ふ人。

ごえき【御猿回】（名）官府の猿を回す

とりゐやう[凝性](名) ㊀物事に深く心を注ぐこと。何事につけても熱中する性質。㊁風雅(フウガ)(ハリ)の意匠を好むこと。

†とりずまに(副) 以前の事に懲りずに。改めずに猶ほ引續きて。ゐやうこりゝなく。「—、またもなき名は、たちぬべし」。

†とりゐき[香燒](名) 堂の異稱。(齋宮の忌詞)。

(と-りつ)[股栗](名) おそれてわなゝく身ぶるひすること。ふるひわなゝくこと。

(と-りつ)[孤立](名) ㊀たすけ無きこと。一本だち。ひとりだち。獨立。「—して事を爲す」。㊁對立するものなきこと。其物ばかりにてあること。——ぎむ[孤立義務](名) [法]權利と對立せざる義務、即ち、兵役義務・納稅義務の如きこれなり。

とりは・つ(てて、つる、つれ、てよ)[懲果](自、下二) いよ〳〵懲る。いたく懲る。

(どり-むちゆう)[五里霧中](名) (廣さ五里許もあるきりの中の義) 心彌はれ又は心亂れて、思案のつかぬ狀態にいふ語。

(とりや)(感) 目下(メシタ)のものを呼びかくる語。「—よく聞け」。

(ご-りやう)[御領](名) 領地の敬稱。

(ご-りやう)[御靈](名) ㊀古昔、陰陽祭にて祭りし疫病神の稱。㊁たゝりをなす人の怨念。をんりやう。㊂みたま。

(こ-りよ)[顧慮](名) かへりみておもひはかること。後事を心配すること。「—して事を行ふ」。

(こ-りよ)[胡虜](名) ㊀えびず。蠻民。「何日平—」。㊁とりことなりたる蠻民。

(こ-りよう)[古陵](名) 古きみさゝぎ。

(ご-りよう)[吳綾](名) 吳の國より渡來したるあや。

ゴリラ[Gorilla](名) [動]猿猴類に屬する獸、「アフリカ」に産す、身長七尺に達す、全體黑褐色にして面部黑く、性質猛惡にして腕力強大なり。(大猩猩)。

(ごりる)[懲](自) 「こる」の訛。

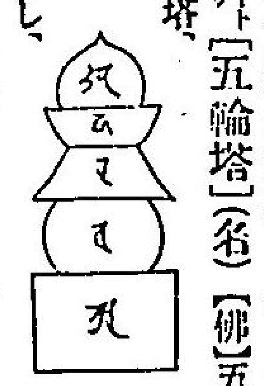
(コーリン)[火鈴](名) (字の唐音)手にて振り鳴らす一種の鈴、つりがねの如き形のもの。

(こ-りん)[小輪](名) 輪狀の小さきこと。「—の朝顏」。

(ご-りん)[五倫](名) 人生の最も親しき五つのあひだがら、即ち、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の稱。

(ご-りん)[五厘](名) ㊀一錢の半額、半錢。㊁寄席の下足番にて、落語家又は淨瑠璃語などより、一名每に五厘づゝ、步合を取り立つる人。(東京の方言)。

(ご-りん)[五輪](名) (い)[佛]地・水・火・風・空の五體の稱。(ろ)「ごりんたふ」の略言。——くだき[五輪碎](名) 相撲(スマフ)の手、五輪殘らず碎きつぶすとの義。——たふ[五輪塔](名) [佛]五個の石を積み重ねたる石塔、地・水・火・風・空に象(カタド)れるものにして、最上頂を如意珠形と稱し、次を半月、次を三角、次を圓、次を方と稱す。



[ごりんたふ]

こりんご[小林檎](名) [植]薔薇科に屬する木、山野に自生す、春に五瓣小形の白花を開く、實は櫻に似て秋熟す。(棠梨)。

こりん-たう[小鈴糖](名) 一種の菓子、金平糖に似て中の空虛なるもの。

こ・る(ら、り、る、る、れ、れ)[凝](自、ら四) ㊀よりかたまる。あつまりよる。凝集す。「油が—」。㊁一心に深く思ひ込む。又、精神を集注す。㊂ふける。すさむ。㊃風雅(フウガ)(ハリ)の意匠をなす。

こ・る(ら、り、る、る、れ、れ)[伐](他、ら四) 木を伐る。きこる。「薪を—」。(樵)。

こ・る(ら、り、る、る、れ、れ)[梱](自、ら四) 荷造す。こうる。(括)。

こ・る(り、り、る、る、れ、りよ)[懲](自、ら上二) 前非を悟(サト)りて再びせざらんと思ふ。失敗を悔(ク)いて深く愼む。「こりて手を出さぬ」。

コルク[Cork](名) 「コロップ」に同じ。

こる-め[孕女](名) はらみ女。

†こる-もは[凝海藻](名) [植]「ところてん」の古名。

(こ-るゐ)[古壘](名) 古昔のとりで。昔時の城壁。

これ[是、此、之、斯](代) ㊀身に最も近き物事に用ふる代名詞。それ又はかれ等の對。「—を取る」。(之)。㊁此時。いま。「—からさき」。

これ[是之](感) ㊀漢文にて句調を強むるに用ふる語。「何惱—有」。㊁人を呼び掛け又は注意を加ふる時などにいふ語。こら。「—よく聞け」。

(こ-れい)[古禮](名) 古昔行はれし儀式又は禮法。

(ご-れい-や)[御靈屋](名) おたまや。みたまや。

(ご-れう)[御料](名) ㊀飯の敬稱。㊁使用又は供給の敬稱。㊂皇室の御財產又は御料地。㊃むすめ。「嫁—」。——ち[御料地](名) 皇室の御所有に屬する土地。——にん[御料人](名) ㊀昔官女の古名。㊁他人の妻の敬稱。(京阪地方の方言)。「—樣」。(御寮人)。

(ご-れう-きよく)[御料局](名) 宮內大臣の統轄の下に屬し、皇室世傳の御料及主管に屬する財產會計を常理する所、全國內須要の地に支廳又は出張所を置く。——ちやう[御料局長](名) 御料局の長官、局務を總理し局員を監督するもの。

これ-かれ[是彼](代) これとあれと。「—あつまりて、よひより酒のみなどす」。

(こ-れき)[古曆](名) 古昔に使用せし曆。

これ-これ[此此](名) まかまか。うん〳〵。

(これ-ゐき)[是式](名) これくらゐ。これほど。こればかり。「—の事には恐れぬ」。

これ-に-よりて[由是](接) このわけゆゑに。この故に。されば。——これをみれば[由是觀之] 前條に同じ。

これ-は-これ-は(感) 物事の意外なるに驚歎していふ語。「—とばかり花の吉野山」。

これ-ほど[是程](名) このくらゐ。かくばかり。

コレラ[虎列刺=Cholera](名) 「コレラ」菌によりて發生する劇烈なる傳染病、腹鳴りて劇(ハゲ)しく吐瀉し、殊に米の汁の如きもの下痢するを常とす、これ「コレラ」菌の毒を吸收したる淋巴液なり。——きん[虎列刺菌](名) 「コレラ」の病原となる黴菌、「ドイツ」國人「コッホ」の發見にかゝる、されど此菌は胃中の鹽酸のために撲滅せらるゝものなるが故に、胃の健全なる人は其病害を受けずといふ。

(ご-れん)[瑚璉](名) (論語に出づ) 支那の古代に黍稷を盛りて宗廟に供へし皿器、轉じて、高く拔き出でたる器量又は國政に參與する器量にいふ語。

(ご-れん)[御簾](名) 貴人の妻。(備前・備後の方言)。

(ご-れん-ちゆう)[御簾中](名) ㊀公卿の妻の敬稱。㊁すべて貴人の妻の敬稱。

ころ[頃](名) ㊀ころはひ。おぶん。「寺しも—は衣更着の」。㊁ほど。又、忠は。

ころ[轉](名) ㊀「ころばし」の略言。㊁尺八を吹く手、五穴をあけ、一穴及二穴を指にてかはる〴〵うちて、吹き鳴らすこと。

(こ-ろ)[胡盧](名) ㊀ひさご。ふくべ。(壺盧)。㊁笑ひ聲の喉(ノド)に籠(モ)ること。くっくっと笑ふこと。

ゴロ[吳絽](名) 「ゴロフクレン」の略言。(吳羅)。

(ごろ)(名) 「ごろつき」の略言。「羽織—」。

(ご-ろ)[語路](名) ㊀言語又は文句の調子、口調。「—のよい文」。㊁「ごろあはせ」の略言。——あはせ[語路合](名) 地口の一種、普通に呼びなれたる語の語路にあふやうに、異なる文句をつくること。

—ごろ[頃](接尾) ㊀武語に添へて、其時分にの意を表はす語。「冬の中—」。㊁武語に添へて、以來又はつねにの意を表はす語。「月—」。「日—」。

ごろ-あひ[頃合](名) ㊀適當なる時機。㊁適當なる程度。ほど。

(こ-ろう)[固陋](名) 見聞狹(セマ)くしてかたくななること。舊弊を守りて改進を好まぬこと。

(ゴロウ)[吳絽](名) 「ゴロ」の轉。

ころ-がき[轉柿](名) 澁柿の果實の皮を去りて、日に干(ホ)したるもの、色黑くして上に白粉の如きものあり、味甚だ甘し。(胡顏柿、乾柿)。

ころが・す(さ、し、す、す、せ、せ)[轉](他、さ四) ころばす。

ころが・る(ら、り、る、る、れ、れ)[轉](自、ら四) ころぶ。

†ころく(名) 鴉などの鳴聲。(古昔のあづま語)。

(ころく-ぞめ)[小六染](名) 一種の染模樣、俳優嵐小六の着物より始まれるものなりといふ。

(こ-ろ-くわ)[胡盧科](名) [植]一年生の草本にして蔓莖なり、合瓣花冠をなし、果實は多肉にして食用に供すべきもの多し、きうり・うり等これに屬す。

†ころ・げる(げ、げ、げる、げる、げれ、げよ)[轉](自、か下二) ころがる。

ころ-ころ(名、副) ㊀ころがり行くさまにいふ語。㊁鈴などの鳴る音。

ごろ-ごろ(名、副) あちらこちらに轉(コロ)がりゐるさま。

ごろ-ごろ(名、副) ㊀車輪などの軋(キシ)りて響く音。(轆轤)。㊁雷鳴などのとゞろき響く音。(鞳鞳)。

ころし-て[殺手](名) 人又は家畜を殺しゝ人。

ころし-も[頃](接) 其なり。其とき。

ころ・す(さ、し、す、す、せ、せ)[殺](他、さ四) ㊀命を絕つ。死なしむ。(害、戮、屠)。㊁活動をおさへとゞむ。「息を—」。㊂質におきて流す。

(ごろ-た)(名) ㊀材木の丸きされはし。㊁「ごろたいし」の略言。——いし(名) 地面にころがりてある石。

コロタイプ[Collotype](名) 一種の寫眞版、殆ど「アートタイプ」と同一なれど、たゞ下塗に水硝子を用ふるが故に、日光に曝(サラ)す要なきを異なりとす。

コロヂオン[Collodion](名) [化]火綿の一種を「アルコホル」と「エーテル」との混合液に溶解し、通常これに少量の沃化「アンモニウム」を加へたるもの、寫眞術に使用す。

(ごろ-つき)[破落戶](名) ㊀一定の住所も職業もなく、漂泊してゐる惡漢、ならずもの。(無賴漢)。㊁他人の弱點に乘じて、不當の利益を強請する惡漢。

ごろ-つ・く(か、き、く、く、け、け)(自、か四) ごろ〳〵音す。

(ごろ-つ・く)(か、き、く、く、け、け)(自、か四) ㊀ころがりてあり。㊁ごろつきの行爲をなす。㊂さすらふ。さまよふ。

コロッケ(名) (「フランス」語 Croquette) 一種の料理、牛肉をきざみて、蒸したる馬鈴薯・小麥粉等を交へ、これをかためて油にて揚げたるもの。

コロップ(名) (Corkの訛)壜の口に栓(セン)とする樹皮、彈力ありて輕し。——ぬき(名) 壜の栓の「コロップ」を拔くための具、多くは尖頭ある鐵に螺旋を裝置したるものにして、これを「コロップ」の中に旋入し置きて拔きとる。

コロナ[Corona](名) 白光の條を見よ。

(ころ-ゐ)[轉寐](名) 寢仕度をせずにたふれて假寐すること。「—て風を引く」。

{ころばか・す[轉](他、さ四) ころばす。
ころばし[轉](名) ❶ころばすこと。❷木石などの重きものを動かすとき、其下に敷く圓き棒の類。
ころば・す[轉](他、さ四) ❶くる〜廻轉せしめて進(す)む。ころがす。まろばす。❷よこにす。たふす。こかす。❸{罪寳銷をかふ。
{ころばせる[轉](他) 「ころばす」の訛。
{ころはち-ぢやわん[五郎八茶碗](名) 底の深き粗製の茶飯茶碗。
‡ころび[嘖](名) ころぶこと。ふかり。「發展の—」。
ころび[轉](名) ❶まろぶこと。たふるること。❷天主教の禁法、切支丹宗門を改めて佛教の内に入ること。(徳川時代の言)(回心)。❸{罪寳。——がき[轉蠣](名) [動]岩石に附着せずして、海中にころびある牡蠣、なつがき。——ね[轉寝](名) かりね。うたゝね。(假寐)。
‡ころ・ぶ[嘖](他、は四) ふかる。そむ。
ころ・ぶ[轉](自、は四) ❶くる〜返くりて進む。ころがる。まろぶ。❷よこになる。たふる。❸切支丹宗を改宗す。(徳川時代の言)。❹{罪寳をなす。
ゴロフク[呉絽服](名) 「ゴロフクレン」の略言。——レン[呉絽服連](名) 《オランダ」語、Grofgreinの訛》西洋の毛織物、もと多くは駱駝の毛もて製したりしが、今は羊毛又は麻・綿などを雜(ま)へて織る。(呉絽福林、牛郎綱)。
‡ころ・ぶ・す[轉臥](自、さ四) ころびふす。
コロボックル(名) 《アイヌ」語、Koropok-unguru》「アイヌ」の口碑にて、「アイヌ」以前に北海道に住したりといふ人種。
ころ-ほひ[頃](名) ❶ころ。とき。❷ほど。「は。」
{ころ-まけ[轉負](名) たやすく負くること。

ころも[衣](名) ❶人の身體に著(き)る物の總稱。きもの。きぬ。❷僧の着る衣服。ぢきとつ。(衲衣)。❸「テンプラ」などの外面につくるもの。——がへ[更衣](名) ❶季節に應じて衣服を更(か)ふること。❷古昔、四月及十月に、其折々の衣服に着かへしこと。❸催馬樂の曲名。——づつみ[衣包](名) 衣服をつゝむ巾。ふくさ。ふろしき。(衣帙、袍)。——で[衣手](名) 袖、「我—に雪はふりつゝ」。‡——のくび[衣首](名) えり。小襟。——のすそ[衣裾](名) ❶裾に當たる衣の部分、「君がためー、を濡らしつゝ」。❷裾(すそ)。——ばこ[衣箱](名) 衣類を入れおく箱。——へん[衣偏](名) 漢字の偏の名、袍・袖等の字の左にある衤の字、字書にて、衣の部に屬す。
{コロリ[虎列拉](名) 「コレラ」に同じ。
{ころり(名、副) ❶突然に倒るゝさまにいふ語、又、倒れ斃るさまにいふ語「—となる」。❷わけもなきさま又は不意なるさまにいふ語。
{ごろり(名、副) 前條の意を稍や強めていふ語。
‡ころ-ろ・く[嘶咽](自、か四) 咽喉をてころ〜と鳴る。
コロロフォルム(名) [化]「クロロフォルム」に同じ。
こわ-いろ[聲色](名) ❶音聲のさま。こわね。❷俳優などのせりふのいひ方の眞似(ね)。——をつかふ こわいろの眞似をなす。「き。」
(ごーわうゎぅ[牛黄](名) 牛の膽に生ずるはふんせき。
(ごーわうゎぅ[牛王](名) 《生土(うぶ)の譌なりとも、涅の寳鐸の現れるなりともいふ》祇園又は八幡若しくは熊野などの神社より出だす牛王寳命又は牛王寳印と記せる護符。——うり[牛王賣](名) 古昔、牛王を賣り歩きし人、もとは比丘尼なりき。

(こわう-こんらいゎぅ[古往今來](名、副) 古より今に至るまでの間。
こ-わき[小脇](名) わき、「—に抱へる」。
こ-わきざし[小脇差](名) 脇差より小さき刀。あひくち。短刀。(匕首)。「人心をー、す」。
(こ-わく[蠱惑](名) たぶらかし欺くこと。だますこと。
こ-わけ[小分](名) ちひさき區分。
こわ-ざし[聲差](名) 聲の樣子。こわいろ。
‡こわ-ざま[聲樣](名) こゑのさま。
‡こわ-だえ[聲絕](名) 聲のとだゆること。
こわ-だか[聲高](名) 高き聲、「—にいふ」。
こ-わたり[古渡](名) ふるく渡來したる外國の製品、「—唐棧」。「ふさま。」
こわ-づかひかひ[聲遣](名) 口をきくさま。ものいふ。
‡こわ-づくり[聲作](名) せきばらひ。えはぶき。
‡こわ-づく・る[聲作](自、ら四) せきばらひす。えはぶきす。
‡こわ-づくろひ(名) 「こわづくり」に同じ。
こ-わっぱ[小童](名) 年齡幼(をさな)きもの又は未熟ものなどをいやしめていふ語。——やらう[小童野郎](名) 前條に同じ。「ざやう。」
こわ-ね[聲音](名) 人の聲のさま。おんせい。おん
‡こわ-ぶり[聲振](名) 歌ふさま。
‡こわ-まね[聲眞似](名) 他人の口まね。
こ-わらべ[小童](名) こども。どうじ。
こ-わり[小割](名) ❶小さき區わり。❷小さく挽(ひ)き割りたる材木。
‡こわ-わざ[聲技](名) 聲音を用ふる技術。
‡こ-ゐ[木居](名) 鷹の木にとまり居ること。——どり[木居鳥](名) [動]鷹の異稱。
(ご-ゐ[五位](名) 「ごゐさぎ」の略言。——さぎ

[五位鷺](名) [動]涉禽類に屬する鳥、嘴長くして全體灰色なり、背部は蒼黑色、腹部は白色に黄色を帶び、脚は長くして黄色なり、古昔、近衛帝が神泉苑に於て御宴を催したまひしとき、これに五位の位を授けられたればとていふ。(鵁鶄)。
(ご-ゐん[雇員](名) やとひて使用する人、やとひ。
こゑ[聲](名) ❶物體の振動より生ずる音波が、聽官に達するによりて起る感覺。おん。おと。ひゞき。ね。❷人類又は動物の發聲器より出づるおん。おんせい。❸いひふらし。又、ひやうばん。❹いきはひ。又、はまれ。——をかく 呼びかく。
(ご-ゑい[護衞](名) そばをかため守ること。つきそひまもること。又、其人數。——へい[護衞兵](名) 護衞のためにつけられたる兵士。
こゑ-がかり[聲掛](名) 目上より其ものに對して、特別の思召又は沙汰ありしこと。
こゑ-かけ[聲掛](名) 呼びかくること。
こゑ-がはりはり[聲變](名) 聲ざしの變(か)はること。又、其年齡。
こゑ-がら[聲柄](名) 聲の出づるさま。こわざま。こわぶり。こわいろ。こわざし。
こゑ-ごゑ[聲聲](名) 個々の聲。又、人々の言。——に[聲聲](副) 一同の聲にて。個々の聲にて。
こゑ-だすけ[聲援](名) ❶他のうたふ傍より、聲をそへたすけてうたふこと。❷たすくる勢を示して、力をそふること。せいえん。
(ご-ゑつ[胡越](名) 《支那の北にある胡國と南にある越國との意》❶相互の極めて疎遠なること。又、相互に背きて面識なきこと。❷北方と南方と。
(ご-ゑつ[呉越](名) 《支那の呉國と越國との意》相互の仲の極めて惡しきこと。

こゑ-のあや[聲文](名) 聲の曲折。聲の調子。
‡こゑ-のはかせ[音博士](名) おんはかせ。
{こゑ-ばん[聲番](名) 芝居にて、揚幕の邊などに居て、役者の出入に聲をかくる人。
(こ-えん[故園](名) ふるさと。こきやう。
(こ-えん[古園](名) 設けられてより久しく年を經たる園。
‡こ-を[小緒](名) 牛胃(ひ)の緒。「經たる園。」
こ-をけ[小桶](名) 小さき桶。「格の小さき男。」
こ-をとこ[小男](名) ❶わかもの。わかうど。❷體
こ-をどり[小躍](名) 喜びて躍ること。(雀躍)。
こをとろ-ことろ[子捕子捕](名) 小兒の遊戲、數人の小兒あの〜前のもの〜帶を握(と)りて前後に並(なら)び、その先端のもの親となり最後のもの子となる、別に一人鬼となりて、親の前より迂回して子を捕(と)へんとするを、親のこれを防ぐにつれ、一列のものすべてこれに從ふ、子が若し鬼に捕はるれば、代はりて鬼となる。
こ-をんな[小女](名) ❶幼年の女。少女。❷幼年の下女。❸身體の小なる女。
‡こをろ-こをろ(名、副) 潮の漸次に凝(こ)るさまにいひし語、「—にかきなし」。
(こん[鯤](名) 《莊子に出づ》想像上の大魚、大いさ數千里、北溟に居るといへり。
(こん[坤](名) ❶易の八卦の一、☷の象なるもの、地又は皇后若しくは柔順にして物を載する德等を表はす。❷方角の一、西と南との間。ひつじさる。
(こん[痕](名) あと。あとかた。形跡。「ひじさる。」
(こん[魂](名) 精神の靈。たましひ、「—は天に歸す」。
(こん[婚](名) けっこん。えんぐみ、「—を求む」。
(こん[紺](名) 青と紫との合ひたる色。
(こん[今](名) いま。現世。現在、「古來—」。

(こん[根](名) ❶[植]植物の莖の下部にして養分を吸收する所、生長の時期によりて一年生・二年生・多年生に區別し、生存の位置によりて、地根・水根・氣根・寄生根に區別す。❷[化]電解物の解離して「イオン」となるべきものが、解離せざる分子中に存する間の稱、例へば銅根(Cu)硫酸根(SO_4)の如し。❸[數]方程式を滿足せしむる未知數の稱、例へば $3x+7=13$ の方程式に於て、x に2を與ふるときは滿足するが故に、2は此方程式の根なり。又、冪根の略稱。❹もと。もとゐ。あとり。❺物事に堪へ得る氣力、「一氣」。❻[佛]心の事物に對する作用、六根の元氣、「上—」「下—」。
(—こん[獻](接尾) 宴席にて、杯を他にさす度數を數ふる語、「酒三—」。
(こん[艮](名) ❶易の八卦の一、☶の象なるもの、動靜時を得る德を表はす。❷方角の一、北と東との間。ひがしきた。うしとら。
(こん[權](名) ❶そへ。(副)「—の頭」。❷かり。(假)。❸臨機。又、方便。❹「ごんさい」の略言。
{ごん(名) 鐘の音、「—となる鐘」。「歷乃。」
(こん-あつ[根壓](名) [植]根より吸收する水の
(こん-い[袞衣](名) 袞龍の御衣。天子の御衣。
(こん-い[懇意](名) ❶ねんごろ。えんせつ。❷交際の親密なること。むつこん。
こん-いろ[紺色](名) 「こん」(紺)に同じ。
(こん-いん[婚姻](名) ❶夫婦となること。えんぐみ。けっこん。❷[法]一男一女が夫婦の關係を結ぶ法律行爲、其成立の要件は、男女が一定の年齡に達したること、近親の血族にあらざること、互に配偶者なきこと、當事者及父母の承諾及届出等にして、其効力は、妻は夫の家に入ること、夫婦同居の義務を負ふこと、互に

こんぜ—こんぽ

こんぜ-ぶつ[金剛仏](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ぼさつ[金剛菩薩](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ぼだい[金剛菩提](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ぼん[金剛梵王](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ゆ[金剛喩](名)【佛】金剛喩の略。

こんぜ-ゆう[金剛勇](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ゆうし[金剛勇士](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ゆうぼさつ[金剛勇菩薩](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-ゆしゃ[金剛喩者](名)【佛】金剛喩の略。

こんぜ-りき[金剛力](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-りきし[金剛力士](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-りゅう[金剛流](名)能樂の一派。

こんぜ-りんぼさつ[金剛輪菩薩](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-れんぼさつ[金剛蓮菩薩](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜ-わしゅ[金剛和修](名)【佛】金剛薩埵に同じ。

こんぜい[今世](名)この世。

こんぜき[金石](名)金と石。

こんぜき-の-ちぎり[金石の契](名)金と石とのように堅い約束。

こんぜき-の-ごとし[金石の如し](形ク)金と石とのように堅い。

こんぜき-の-ごとく[金石の如く](副)金と石とのように堅く。

こんぜき-の-ごとくに[金石の如くに](副)金と石とのように堅く。

こんぜき-の-ごとくなり[金石の如くなり](形動ナリ)金と石とのように堅い。

こんぜき-の-ごとくにす[金石の如くにす](サ変)金と石とのように堅くする。

こんぜき-の-ごとくにせず[金石の如くにせず](サ変)金と石とのように堅くしない。

こんぜき-の-ごとくにせよ[金石の如くにせよ](サ変)金と石とのように堅くしろ。

こんぜき-の-ごとくにせり[金石の如くにせり](サ変)金と石とのように堅くした。

こんぜき-の-ごとくにせる[金石の如くにせる](サ変)金と石とのように堅くした。

こんぜき-の-ごとくにせるに[金石の如くにせるに](サ変)金と石とのように堅くしたが。

こんぜき-の-ごとくにせるは[金石の如くにせるは](サ変)金と石とのように堅くしたは。

こんぜき-の-ごとくにせるを[金石の如くにせるを](サ変)金と石とのように堅くしたを。

こんぜき-の-ごとくにせるも[金石の如くにせるも](サ変)金と石とのように堅くしたも。

こんぜき-の-ごとくにせるものは[金石の如くにせるものは](サ変)金と石とのように堅くしたものは。

こんぜき-の-ごとくにせるものを[金石の如くにせるものを](サ変)金と石とのように堅くしたものを。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえに[金石の如くにせるものゆえに](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえに。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにや[金石の如くにせるものゆえにや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにも[金石の如くにせるものゆえにも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもや[金石の如くにせるものゆえにもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがな[金石の如くにせるものゆえにもがな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがも[金石の如くにせるものゆえにもがも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもな[金石の如くにせるものゆえにもがもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもや[金石の如くにせるものゆえにもがもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよ。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもな。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもや。

こんぜき-の-ごとくにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも[金石の如くにせるものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも](サ変)金と石とのように堅くしたものゆえにもがもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやもよやも。

**こんぜ

（とん-おやう）[言上]（名）申しあぐること。
（とん-おゆんくわん-せうすう）[混循環小數]（名）（數）小數點と循環する部との間に、循環せざる部分ある循環小數。
とん-およく[袞職]（名）（詩經の語に出づ）⊖天子の天職、即ち國家を治めたまふ御事。⊜大臣等の職、即ち天子を補翼して國家を治むる職。
（とん-おん）[懇親]（名）⊖ねんごろ。おたしみ。⊜むつまじくあること。交際をあつくすること。——くわい[懇親會]（名）懇親のために催(もよほ)す會合。
（とん-おん）[金神]（名）陰陽家にて祭る神。其のある方角に對して物事をなすは不吉なりとして、これを避く。北方角は甲己の歳は午・未・申・酉の方、乙庚の歳は辰巳の方、丙辛の歳は子・丑・寅・卯・午・未の方、丁壬の歳は寅・卯・戌・亥の方、戊癸の歳は子・丑・申・酉の方といふ。——の-まび[金神間日]（名）一年の中、金神の方角に對して物事をなすとも差支なしといふ日。春は丑、夏は申、秋は未、冬は酉をいふ。——よけ[金神避]（名）金神の方角を避けて物事をなすこと。——むき[金神向]（名）方角の不吉なることにいふ語。
とん-ず[婚]（自、さ變）夫婦の緣を結ぶ。
とん-ず[根]（自、さ變）ねざす。もとづく。
とんず（名）「はやず(早鮓)」に同じ。
とん-ず[混]（自、さ變）まじる。まざる。
とん-ず[混]（他、さ變）まぜあはす。まず。
（とん-すう）[根數]（名）（數）根數を有する數の稱。又、乘根の稱。
（とん-すう）[混數]（名）（數）「たいぶんすう(帶分數)」に同じ。
（とん-すゐ）[昏睡]（名）⊖前後も知らずよく寝込むこと。⊜神氣おとろへ身體つかれて、たゞうつとりとしてねむりてあること。
（とん-ずゐ）[跟隨]（名）後につきゆくこと。
（とん-ずゐ）[椎萃]（名）〔植〕古拙科に屬する木。葉は羽狀複葉にして、數個の小葉より成る。花は淡黄色にして圓錐狀に排列す。「野鴉椿」。
（とん-せい）[懇情]（名）ねんごろなるなさけ。
（とん-せい）[懇請]（名）ねんごろにねがふこと。
（とん-せい）[今世]（名）いまのよ。きんせい。
（とん-せい）[混成]（名）まぜあはせてつくること。又、まじりあひて出來ること。——おゆ[混成酒]（名）酒精と酒類にあらざるもの（水の如きもの）とを混和するか、又は酒類と酒類とを混和するか、若しくは二種以上の酒を混和するかして作りたる酒類。——りよだん[混成旅團]（名）歩兵一旅團に、騎兵・工兵・砲兵其他各種の兵を加へて編制したる一部隊の稱。
（とん-せう）[今宵]（名）こよひ。こんや。
（とん-せき）[今夕]（名）こよひ。
（とん-せき）[痕跡]（名）あと。あとかた。
（とん-せき）[今昔]（名）いまとむかしと。——の-かん[今昔感]（名）いまとむかしとを思ひくらべての感慨。「――に堪へず」。
（とん-せき）[椎跡]（名）入木道にて、祖たる人に次ぐ人の筆跡。「きせき」。
（とん-ぜつ）[昏絶]（名）目くらみていきたゆること。
（とん-せん）[混戰]（名）敵味方入り亂れて戰ふこと。
（とん-せん）[混線]（名）電信又は電話等の架線と架線と互に相接着して、彼我の電流相混ずること。
（とん-ぜん）[渾然]（名、副）⊖分別又は差別なきさまにいふ語。⊜圭角又は缺陷なきさまにいふ語。
（とん-だい）[今代]（名）いまのよ。「――の次第」。
とん-だて[獻立]（名）⊖調部に上(あ)すべき事などの手はず。⊜わけがら。⊜たくらみ。
（とん-だん）[懇談]（名）ねんごろにはなすこと。
とん-ぢ[根治]（名）⊖根本からをさめなほすこと。⊜根本からをさまりなほりて、絶えて其物事の再生せざること。——れうはふ[根治療法]（名）病氣の根治するやうになす療治。
（とん-ぢく）[坤軸]（名）地軸。
（とん-ちゆう）[昆蟲]（名）⊖あはくのむし。すべてのむし。⊜昆蟲類に屬する動物。——るゐ[昆蟲類]（名）〔動〕節足動物の一綱。概ね陸上に棲息す。氣管によりて大氣を呼吸し、頭・胸及腹の三區別判然たり。胸部は一對、頭は三對、脚も三對あり、概ね背上に二對の翅、股部に二對の有節肢あり。てふ・ばつた・せみ等これに屬す。
†とん-づ[濃漿]（名）「こみづ」の音便。
（とん-てい）[昆弟]（名）あにおとゝ。兄弟。
（とん-てい）[根底]（名）ねもと。
とん-でい[健兒]（名）⊖古昔、兵部省の所屬にして、諸國に數百人配置せられし衞士の稱。⊜徳川時代に、中間又は足輕の類の稱にもいへり。——わどころ[健兒所]（名）健兒の居りし所。
（とん-でい）[健兒童]（名）幼年の健兒。
とん-でい[金泥]（名）金箔を粉にし、膠(にかは)の液に溶(と)かしたるもの。
（とん-てう）[今朝]（名）けふの朝。けさ。
（とん-てき）[擺的]（名）ごんさい。
（とん-でん）[墾田]（名）新に開墾したる田。

（とんてん-ぎ）[渾天儀]（名）圓球の表面に日月星辰等天體を描(ゑが)きたるもの。形恰も地球儀の如し。古昔はこれを天體の運行を測定するに用ひたり。
コンデンス-ミルク[Condensed milk]（名）牛乳を煮つめ、砂糖を加へて甘味をつけたるもの。罐詰として貯(たくは)へ得(う)べきやうにし、小兒などの飲用に供す。
（とん-ど）[今度]（名、副）このたび。今回。
（とん-どう）[金銅]（名）黄金を雜ぜたる銅。
（とん-どう）[混同]（名）⊖まじりあひて一つになること。又、まぜあはせて一つとなすこと。⊜〔法〕債權及債務が同一の人に歸すること。
（とん-とく）[坤德]（名）皇后の御德を申し奉る語。
（とん-とく）[懇篤]（名）ねんごろ。しんせつ。
とん-どさ[紺土佐]（名）紺色に染めたる厚き紙。「土佐國より出だす」。
コンドル[Condor]（名）〔動〕猛禽類に屬する鳥。鳥類中最大なるものゝ一にして、南「アメリカ」西部の高山に棲む。頭部は羽毛なくして裸出し、頸部に白羽毛ありて、他は暗黑色の羽毛なり。性猛烈にして牛馬などを襲ふことあり。

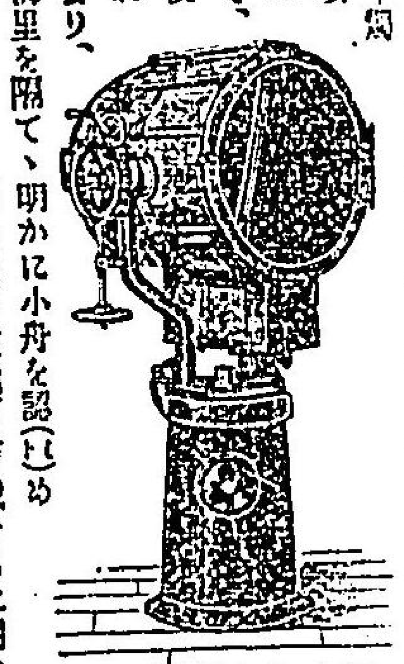
[コンドル]

（とん-とん）[混沌]（名）天地開闢の始めに、物事の判然せざる狀態。又、物事の區別不分明なる狀態。[渾沌]
（とん-とん）[餛飩]（名）一種の食品。細かにしたる肉を、小麥粉に包みて蒸したるもの。
とんな　このやうな。「――物」「――身分」。
（とん-なん）[困難]（名）くるしみなやむこと。わづらひくるしむこと。なやみ。くるしみ。
（とん-にち）[今日]（名）⊖この日。けふ。（本日）。⊜このごろ。いま。
（とんにち-さま）[今日樣]（名）その日を守る神。
（とん-にふ）[混入]（名）濁水の混れ込むこと。
（とん-にやく）[蒟蒻]（名）⊖〔植〕天南星科に屬する植物。莖は綠色にして大いなる球狀の地下莖を生ず。葉は三分して各部羽狀に深裂し、肉穗花序は延長して大形の佛焰を具す。⊜一種の食品、こんにやくだまを碎きて、蒸して製したるもの。（蒟蒻、鬼芋）。——だま[蒟蒻球]こんにやくの球狀をなす地下莖。——ばん[蒟蒻版]（名）「かんてんばん(寒天版)」に同じ。
（とん-ねん）[今年]（名）この年。ことし。（本年）。
（とん-ぱく）[魂魄]（名）精神の靈と體力の靈と。人類の精靈。たましひ。
とん-の-すそご[紺末濃]（名）上部は白く下部を濃き紺色にそめたるもの。
コンパス[羅鍼子]（名）（オランダ語[Compas]の訛）⊖ぶんまはしに似て二叉をなす金屬製の器具。圖引に用ふるもの。⊜一種の測量器械、方位を測るもの。羅鍼盤。
（とん-ぱち）[權八]（名）博徒などの居候。
（とん-ぱふ）[困乏]（名）貧困乏しきこと。びんぼう。
とんぱる-りう[今春流]（名）能樂の一派。今春氏を祖とす。
（とん-ばん）[今晩]（名）こよひ。今夜。
（とん-ばん）[今般]（名、副）このたび。今度。
コンピラ[金毘羅]（名）（梵語[Kumbhira]）鰐魚の義、天竺の靈鷲山の鬼神、魚身にして、蛇形をなし、尾に寶玉を藏すといふ。
（とん-ぷ）[昆布]（名）〔植〕褐色藻に屬する海草。體は帶の狀をなし、褐色にして體內に葉綠素を含有す。柔軟にして強靭なり。往々數十丈に達す。食用に供し、又、製炭などに用ふ。ひろめ。（海帶）。——まき[昆布卷]（名）一種の料理。燒魚又は燒きはぜ等を昆布の中にまき入れて、煮たるもの。こぶまき。
（とん-ぱい）[困憊]（名）くるしみつかるゝこと。いたみつかるゝこと。
コンペイトー[金米糖]（名）（ポルトガル語Confeitos）一種の菓子。氷糖に饂飩粉を加へたるものに、炒(い)りたる芥子を種に入れて、鍋(か)き回して製したるもの。（糖花）。
（とん-べん）[言偏]（名）漢字の偏の名、語・說などの字の左にある言の字の稱。「言」
とん-ぼう[牛蒡]（名）〔植〕「ごぼう」の訛。
（とん-ぼう）[棍棒]（名）⊖てつぼう。⊜體操に用ふる一種の器械、手許細く次第に膨大となりて、恰も德利の狀をなす。
{とん-ぼう-どめ}（名）「ぼんぼちどめ」の訛。
（とん-ぽん）[根本]（名）こんげん。もとね。もと。（根基）。「――改革」。——てき[根本的]（形）根本なるにいふ語。——げんり[根本原理]（名）「さうきやうげんり(究竟原理)」に同じ。
（とんぽん-か）[混本歌]（名）和歌の一體、五七七の三句より成るもの。
コンマ[Comma]（名）⊖歐文の句讀に施す點、又、記數の位取に用ふる點、即ち「,」。⊜普通の位。又、單位。「一以下の人間」。——バチルス[Comma bacillus]（名）「コンマ」の狀をなす微細なる「バチルス」。
（とん-まう）[懇望]（名）ひたすら望(のぞ)むこと。ねんごろに望むこと。（切望）。

コンミッション[Commission](名) 周旋料。手數料。こうせん。
とん-むらご[濃村濃](名) 色の濃きむらご。
とん-めい[懇命](名) 深切なる相談。又深切なる心ぞへ。
(とん-めい)[渾名](名) あだな。
(とん-めい)[昏迷](名) 心迷ひて茫然としてゐること、目先くらんで心亂るゝと。
(とん-もう)[根毛](名) [植]根の表皮の細胞より出でたる絲狀のもの、根の古びたる處には存せず。
(とん-もり)(名、副) こもりて昏(ク)らききまにいふ語。「―した森」。
とん-や[紺屋](名) 染物を職業とする人又は店。こうや。そめものや。
(とん-や)[今夜](名) こよひ。こんばん。今宵。
コンモン-センス[Common sense](名) 常識。
(とん-やく)[困厄](名) くるしみ。なんぎ。「つゆ。
(とん-ゆ)[懇諭](名) ねんごろにさとすこと。あつきさとし。
とん-ゆふ[今夕](名) このゆふべ。今夜。今晩。
(とん-よ)[坤輿](名) (地載萬物如輿の句より出づ)大地の稱。地球。坤儀。
†とん-らう[軒廊](名) ㊀廊下。㊁古昔、禁中紫宸殿の東にありて、うらなひの占(ウラ)をなし、所。
(とん-らん)[混亂](名) 錯雜して亂れたること。亂れて秩序なきこと。いりみだるゝこと。(混淆)。
(とん-らん)[昏亂](名) 心くらみてみだるゝこと。智慧分別のなくなりて、道理のわからぬこと。
(とん-りう)[根瘤](名) ㊀根に生ずるこぶ。㊁豆又は荻などの根に、「バクテリア」の寄生によりて生ずる小粒狀のもの。
(とん-りふ)[建立](名) 堂・塔などを造り建(タ)つること。
(とん-りよう)[袞龍](名) 「とんりようのぎよい」の略言。——のぎよい[袞龍御衣](名) 古昔、天子の御禮服、色赤く、日・月・星辰・龍・蟲・火などを繡(ヌ)ひたるもの、大禮の時などに用ひ給ひたり。——のそで[袞龍袖](名) 天子の御衣の袖。轉じて、天子の御威徳の下。おかげ。「―にかくる」。
(とん-りん)[混林](名) 多種の樹木より成る森林。
(とん-りん-ざい)[金輪際](名) ㊀[佛]大地の底下の百六十萬由旬離れたる所、即ち地の最下底。㊁轉じて、物事の根底。
†とんりん-ざい[金輪際](副) 底の底まで、どこまでも。「―聞かぬ」。
(とん-れい)[婚禮](名) 結婚するときの儀式。
(とん-ろ)[焜爐](名) 座敷などにて物を煮るに用ふる小さき爐、鐵製又は土製にして下部に口あり。
(とん-わ)[懇話](名) うちとけて話しあふこと。ねんごろなるものがたりすること。——くわい[懇話會](名) 懇意の人々のあつまりてなす談話會。
†とん-ゑ[近衛](名) 「このゑ」の略音。——ふ[近衛府](名) 「このゑふ」に同じ。
(とん-ゑん)[渾圓](名) まろきこと。まどか。——きう[渾圓球](名) ㊀まろきたま。㊁地球の稱。

さ　ざ

さ 齒的摩擦音S即ち舌端を硬口蓋の前部に接して摩擦せしむる音と、母音「ア」との綴音。
ざ 「さ」の濁音、凡て「さ」と同じくして、たゞ摩擦音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。
(さ)[差](名) ㊀たがひ。ちがひ。㊁[數]一數より或數を減じたる値、「二數の―」。
(さ)[左](名) ㊀ひだり。㊁前に記したる文句のひだりの方。「―の通相違無之候」。
(さ)[佐](名) たすけ。はさ。「王者の―」。
(さ)[梭](名) 織機の附屬品。をさ。「―を投ず」。
(さ)[紗](名) うすぎぬ。さや。
ざ[然](副) さやう。しか。「―思ひ給へど」。
さ―(接頭) ㊀或語に冠して、狹き意を表はす語。「―山」。㊁或語に冠して、早き意を表はす語。「―蕨」。㊂或語に冠して、五月の意を表はす語。「―蠅」、「―月」。㊃名詞又は動詞などに冠する無意味の語。「―牡鹿」。
―さ(接尾) 形容詞に添へて、これを名詞とする語。「歸るわびし―」、「嚴―」、「遠―」、「高―」。
†―さ(接尾) 或語に添へて、方向を示すに用ふる語。「國―歸る」。(東北地方又は西國地方の方言)。
(さ)(感) ㊀人を誘(イザナ)ひ又は人を詰(ナジ)るときにいふ語。いざ。「―行かう」、「―どうぢや」。㊁驚愕して發する聲。「―志まった」。
(ざ)[座](名) ㊀すわるべき場所。ゐどころ。㊁多人數の集會。㊂すべてものをする置く場所の稱。「砲―十有二」。㊃はしのやどり。星宿。㊄金具の下に添ふる裝飾。㊅徳川時代に、官許を得て貨幣を鑄造せし所の稱。「金―」、「銀―」。㊆足利時代に、專賣店の稱。「絹―」、「七―」。㊇能樂を演ずる所。又、芝居を演ずる所。「―元」。㊈坐禪をなすこと。「―を積む」。
(ざ)(接尾) ㊀佛像を數ふる語。「二十五―」。㊁里神樂(サトカグラ)の曲を數ふる語。「彌陀一―」。
サーチ-ライト[Search light](名) 強大なる光線を發射する一種の電燈、太き炭素棒を用ひたる弧光燈にして、器底の反射鏡により、強き平行の光線たらしむる裝置のもの、軍隊用のものは、其光力二萬五千燭光以上にして、暗夜これにより、二海里を隔て、明かに小舟を認(ミト)め得、多くは夜間敵艦艇の來襲を警戒するに用ひらる。(探海燈、探照燈)。


[サーチライト]

サーベル[洋劍](名) (「オランダ」語Zabelの訛)軍人の佩(オ)ぶる西洋風の刀劍。(洋刀)。——せいりやく[洋劍政略](名) 陸海軍の出身者によりて行はるゝ武斷政略の稱。——ないかく[洋劍内閣](名) 多數若しくは主腦者が、陸海軍の出身にして且武斷政略を行ふ内閣の稱。
(さあ)(感) 「さ」の延音。
(さあ-さあ)(名、副) ㊀物の摩(ス)れ合ひて發する音。㊁雨などの絶間なく降る音。
(さあ-さあ)(感) 「さあ」を強めていふ語。
(ざあ-ざあ)(名、副) 「さあさあ」の意を稍や強めていふ語。
さ-あや[紗綾](名) 絖(ヌメ)の類のあやもり物。
さい(名) [動]「みごひ」に同じ。
(さい)[菜](名) ㊀やさい。あをもの。蔬菜。㊁めぐり。おかず。そへもの。「一汁三―」。(肴)。
(さい)[采](名) ㊀いろ。いろどり。彩色。㊁あや。もやう。文章。㊂さいく。かざり。華飾。㊃こと。わざ。事業。「展―」。㊄つかさ。やくめ。官職。「若予―」。㊅ちぎやうち。食邑。㊆ぬさ。幣帛。㊇雙六の附屬具、小形の立方體にして、其六面に一・二・三・四・五・六の數を記し、投げ轉(コロ)がして、上面にあらはれたる數によりて石を行(ヤ)る。(采、骰)。
(さい)[宰](名) ㊀をさとなりて物事をつかさどること。をさとなりて物事をつかさどる人。つかさ。㊁天子の輔佐。さいしやう。㊂家臣の長。からう。志はいにん。㊃料理人。志だし方。
(さい)[犀](名) [動]哺乳類中奇蹄類に屬する獸、陸棲動物の中にて大いさ象に亞(ツ)ぎ、皮は皺襞多く極めて堅厚なり、每肢三蹄を具す、「インド」産の一種は、鼻頭に一角を有し、中央「アメリカ」産の一種は、鼻頭の前後に二角を有す。
(さい)[最](名) ㊀最も勝れたること、最も勝れたるもの。第一。「國中の―たり」。㊁かなめ。主要。
(さい)[才](名) ㊀たち。性質。㊁はたらき。能力。㊂たちのすぐれたること。又、はたらきの多きこと。㊃賢人。智者。㊄材木の長さ又は體積の單位。㊅容積の單位、勺の十分の一。(才)。
(さい)[齋](名) ㊀書齋の室、へや。㊁ものいみ。けっさい。
―さい[齋](接尾) 室又は人の雅號などの末尾につくる語。「仁―」、「知不足―」。
(さい)[歳](名) とし。又、よはひ。「―月」。
(さい)[妻](名) ㊀つま。にようばう。(室)。㊁[法]法律上正當の婚姻をなしたる女子が、其婚姻の關係存續中に有する身分。
(さい)[債](名) おひめ。かり。「負―」。
(さい)[彩](名) ㊀いろどり。いろ。㊁つや。ひかり。
(さい)[際](名) ㊀あひ。あひだ。㊁をり。とき。㊂きは。はとり。㊃かぎり。さかひ。
(さい)[塞](名) ㊀とりで。てぢろ。(砦)。㊁くにざかひ。邊界。
(さい)(名) 軒などに垂るゝ氷。
(さ-い)[差異](名) たがひ。ちがひ。(差違)。
―さい[哉](接尾) よはひを數ふるにいふ語。
(ざい)[財](名) ㊀人の寶となす物品、即ち、米穀・金錢・布帛等の稱。㊁[經]「ざいくわ」(財貨)に同じ。
(ざい)[材](名) ㊀もくざい。材木。㊁志ろ。原料。㊂使用する器具。㊃使用に堪ふる器量。「將相の―」。㊄うまれつき。性質。㊅はたらき。才能。
(ざい)[采](名) 「さいはい」に同じ。「―打振りて」。——をとる 指揮をなす。(采)。
(ざい)[在](名) 「ざいがう」の略言。「千住―」。
(ざい)[劑](名) まぜあはせたる藥味。まぜあはせたる調藥。やくみ。やくざい。
(ざい-)[在](接頭) 或語に冠して、其中又は其處にある意を表はす語。「―東京」、「―英國」。
(―ざい)[劑](接尾) 調合したる藥を數ふる語。「一―の藥」。
(さい-あい)[最愛](名) 最も愛すること。いとかはゆがること。「―の妻」。
(さい-あう)[災殃](名) わざはひ。さいなん。
(ざい-あく)[罪惡](名) ㊀つみ。とが。㊁道徳上又は宗教上に於て、非難又は懲罰すべき否徳。
(さい-あん)[再案](名) 修正したる草案。又、かんがへなほしたる考案。
(ざい-あん)[罪案](名) 罪科の始末書。裁判の目安。「―書」。(斷案)。
(さい-い)[彩衣](名) いろいろの彩文ある衣。
(さい-いふ)[采邑](名) ちぎやうち。食邑。「―を賜ふ」。(領地)。
(さい-う)[細雨](名) こまかきあめ。きりあめ。
(さ-いう)[左右](名) ㊀みぎとひだりと。㊁そば。ちかく。㊂おそばに事ふる人。近臣。㊃たすけ。輔弼。㊄隨意に動かすこと。「君王を―し」。——さうしよう[左右相稱](名) 體を中分して、其左右同形なること。
(ざ-いう)[座右](名) ㊀座のみぎ。㊁そば。かたは

ら。「謹んで書を某君の—に呈す」。——のめい[座右銘](名) 常に自分の性行の標準となす訓戒。
(さい-うり)[西瓜](名)【植】「すゐくわ」の一名。
(ざい-えい)[在營](名) 兵營にあること。
(さい-えい)[細纓](名) 冠の纓の一種。纓の端にて細くつくれるもの。六位以下の武官の用ふるところにして、常に二筋に挿す。

[さいえい]

(ざい-えき)[在役](名) ㊀使役又は苦役の中にあること。㊁兵役に服してあること。㊂軍艦が特別の任務に服してあること。
(さい-えん)[再縁](名) 二度のえんぐみ。
サイエンス[Science](名) 「くわがく(科學)」に同じ。
(さい-おう)[再應](名、副) ふたゝび。
(さい-か)[最下](名) もっとも劣れること。もっとも低きこと。
(さい-か)[裁可](名) ㊀君主が、臣下の奏議などを許可したまふこと。㊁【法】天皇が自ら意思を決定して表示したまふ行爲。これによりて法律命令生ず、議會にて議決したる法律案も、裁可なくんば法律とならず、通常案文に、御名を署し御璽を鈐せらるゝを其形式とす。
(さい-かい)[齋戒](名) 飲食動作を愼(つゝしみ)にせずして、清淨謹愼を守ること。又、思慮意念を愼(シツ)み、心を專一清明に守ること。ものいみ。けっさい。「開くこと。
(さい-かい)[再開](名) 一旦閉ぢたるものを更に
(さい-かい)[西海](名) ㊀西方の海。「平家—に沒す」。㊁西海道の略言。——だう[西海道](名) 筑前・筑後・豐前・豐後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩及壹岐・對馬の稱。

(さい-がい)[災害](名) 暴風雨・地震・洪水などの自然のわざはひ。又、自家の性行に關係なくして來れるわざはひ。(災禍、災難)。
(さい-がい)[際涯](名) きし。又、きは。
(ざい-かい)[財界](名) 財物の生産交換の行はるる範圍。經濟の社會。金融の市場。「かんがへ。
(さい-かう)[再考](名) 再へなはすこと。再度の
(さい-かう)[再校](名) 二度目の校正。「う。
(さい-かう)[宰衡](名) 天子の補弼。さいしや
(さい-かう)[最高](名) 程度又は位置の最も高きこと。第一なること。——がくふ[最高學府](名) 大學などの稱。——かんだんけい[最高寒暖計](名) 或時間内の最高の溫度を示す寒暖計。——こもんふ[最高顧問府](名) 樞密院又は元帥府などの稱。——ぜん[最高善](名)【倫】「しぜん」(至善)に同じ。
(ざい-がう)[在鄕](名) 都會より隔(へだ)たりたる田舍の地方。ざい。鄕村。——もの[在鄕者](名) 在鄕の人。ゐなかもの。
(さい-かく)[犀角](名) 犀の角。色の黑きは上品にして烏犀角といひ、其尖頭を藥用に供す。
(さい-かく)[才覺](名) ㊀はたらき。機轉。㊁くめん。計畫。——もの[才覺者](名) きてんのきく人。又、計畫に巧なる人。「ること。
(さい-がく)[才學](名) 才智と學問と。
(ざい-がく)[在學](名) 或學校に生徒となりてあ
(さい-かし)[皂莢](名)【植】「さいかち」に同じ。
さいかち[皂莢](名)【植】豆科に屬する木。葉は羽狀複葉にして、花は黄色なり。果實は長さ一尺餘にして、種子は藥用に供せらる。——のき[皂莢](名)【植】前條に同じ。——むし[皂莢蟲](名)【動】「かぶとむし」の一名。

さい-かへ・る[再返](自、ら四) 再び起る。再發す。ぶりかへす。「病が—」。(再廻)。
(さい-かん)[再刊](名) 「さいはん」(再版)に同じ。
(さい-かん)[細奸](名) 度量狹(せま)くして性質ねぢけたるもの。小人。「の。
(さい-かん)[細間](名) まはしもの。忍びのも
(さい-かん)[歲寒](名) 冬の時節。——のさんいう[歲寒三友](名) 松と竹と梅との稱。
(ざい-かん)[材幹](名) 事を成す技倆あること。役に立つ才能あること。「と。
(ざい-かん)[在監](名) 監獄に拘留せられてある
(さい-き)[再記](名) 更に改めて志るすこと。
(さい-き)[才器](名) 才智ありて役に立つと。又、其人。さいぶつ。
(さい-き)[債鬼](名) 借金又は掛金を取りに來る人。えやくぎんとり。かけとり。「旗。
(さい-き)[彩旗](名) いろ／＼の彩色を施したる
(さい-き)[才氣](名) きばたらき。さいち。又、さいちのやうす。「—面に現はる」。
(さい-き)[猜忌](名) 人をねたみいむこと。そねみ。又、そねみぶかき性質。
(さい-ぎ)[猜疑](名) うたがふこと。うたがひの念。
(さい-ぎ)[再議](名) 二度の評議。再度の討議。
(ざい-き)[材器](名) ㊀つかひみちある道具。㊁役にたつ器具又は人物。
(さい-きう)[彩球](名)【天】太陽の光球を圍める高溫により赤色をなす氣球。日蝕皆既の初めと終りとに見ゆ。又、強き分光器を用ふるときは、これを見ることを得。

(ざい-きう)[罪咎](名) つみ。とが。
(さい-ぎやう)[歲刑](名) 陰陽家にて祭る八將神の一。地を守護する神。此神のある方角に向ひて土地を掘(ほ)るを忌(い)むといふ。「對。
(さい-きやう)[西京](名) 京都市の稱。東京の
(ざい-きやう)[在京](名) 京地に在ること。
(ざい-きやう)[在鄕](名) 自分の鄕里にあること。——ぐんじん[在鄕軍人](名) 豫備役・後備役にある將校・下士卒及歸休兵等の總稱。
(さい-きやうばい)[再競賣](名) 一旦競賣に附したれど、其目的を遂し得ざりしより、更にあらためて競賣に附すること。
(さい-きよ)[裁許](名) 裁決して許可せらるゝこと。
(さい-きよ)[再擧](名) 再び事を起すこと。志なはし。やりなはし。「—して敵を擊つ」。
(さい-きん)[最近](名) 最も近きこと。
(さい-きん)[細謹](名) 些細なる行爲に注意すること。「大行は—を顧ず」。
(さい-きん)[再勤](名) 二度のつとめ。
(さい-きん)[細菌](名)=Bacteria(名)【植】黴菌の一種。生物界中の最も細微なるものにして、肉眼を以て見るべからず、他物に寄生し養分を吸收してこれを腐敗せしむ。細點狀・螺旋狀・棒狀・絲狀等をなす。すべて塵芥と共に大氣中に飛散し、又、地中・水中にも多く生存す。自體を分裂し又は胞子を生じて、迅速に繁殖す。「バクテリア」。
(ざい-きん)[在勤](名) つとめ中。在職。
(さい-く)[細工](名) ㊀細かき物の製造。㊁刃物にてする細かきものを製する職人。さいくにん。㊂細かき工事即ち器具などの製作。㊃たくらみ。とりはからひ。——にん[細工人](名) ㊀細工をする職人。又、細工をなし、賣人。㊁たくらみたる人。

——もの[細工物](名) 細工をしたる物。
(さい-ぐう)[齋宮](名) 古代、天子即位の時毎に、伊勢の神宮に奉仕せしめられし未婚の內親王又は女王。いつきのみや。——れう[齋宮寮](名) さいぐうの事をつかさどりしつかさ。
(さい-ぐさ)[三枝](名)【植】「さきくさ」の音便。——まつり[三枝祭](名) 大和國率川(いさかは)神社の祭。此祭には、さきくさの花もて酒樽を飾る故に此名あり。
(さい-くつ)[採掘](名) 土を掘(ほ)りて、中にある物を採(と)ること。特に、鑛物を掘り採ること。——けん[採掘權](名) 一定の鑛區内に於て、或鑛物を採掘する權利。鑛業者の出願を農商務大臣の許可するによりて發生するものとす。
(さい-くわ)[災禍](名) わざはひ。さいなん。
(ざい-くわ)[財貨](名) ㊀金錢又は貨物等の稱。たからもの。たから。㊁【經】人生の欲望を滿たすに適當なるもの、總稱。これを分つて內界の財貨と外界の財貨との二とす。內界の財貨とは人身の內部に存するものにて、例へば知識・健康又は腕力等これなり。外界の財貨とは、外界に存するものにして、更にこれを分つて自由的財貨と經濟的財貨との二とす。自由的財貨とは、空氣・日光等の如く吾人の隨意に使用し得るものにして、經濟的財貨とは、これを得るには、必ず多少の勞力と報酬とを要するものをいひ、又、分つて、通常の貨物と勤勞と關係即ち顧客・版權・專賣權の類との三とす。
(ざい-くわ)[罪過](名) つみ。あやまち。「ひ。
(ざい-くわ)[罪科](名) 志おき。けいばつ。
(さい-くわい)[再會](名) 再び會ふこと。二度のであひ。

(さい-くわい)[際會](名) 其折に出會ふこと。「風雲—し」。「にいふ語。
(さい-ぐわい)[崔嵬](名) 山などの峙(そばだ)つさま
(さい-ぐわい)[塞外](名) ㊀とりでの外。㊁くにざかひの外。
(ざい-くわい)[罪魁](名) 犯罪の張本人。
(ざい-ぐわい)[在外](名) 外國に在留すること。
(さい-くわう)[採鑛](名) 鑛物を採取すること。——やきんがく[採鑛冶金學](名) 採鑛及冶金(やきん)に關する事項を學理上より研究する科學。
(ざい-くわん)[在官](名) 官職に在ること。
(さい-くん)[細君](名) わが妻の稱。誤りて、他人の妻の稱。
(ざい-け)[在家](名) ㊀佛徒より、在俗の人即ち出家せぬ人をさしていふ語。㊁在鄕の家。ゐなかや。
(さい-け)[濟家](名) 臨濟宗の稱。
(さい-けい)[歲計](名) 會計年度中の收入支出の總計算。一年中の計算の締高。——よさん[歲計豫算](名) 歲計を豫め定めおく計算。
(さい-げい)[才藝](名) 才と藝と。ちゑとわざと。きてんと志ごとと。「—雙絕」。
(さい-けい-こく)[最惠國](名) 國際上、通商等に關して、諸外國中最も利益ある條約を締結せる國。——でうくわん[最惠國條款](名) 最惠國に對する條約の條項。
(さい-けいれい)[最敬禮](名) 最も鄭重なる敬禮。普通には、直立不動の姿勢にて、手を膝下まで垂(た)れて、うやうやしく磬折すること。
(さい-けう)[歲刑](名) 歲刑(サイギヤウ)の訛。
(さい-けつ)[採決](名) 議事などにて、議長が議案に對する可否を議場に問ひて決定すること。多數者

原狀回復の訴に因りて、更にこれを審判すること。又、已に確定判決となりたる刑事訴訟を、事實誤認の明白なる場合に、檢事又は刑事被告人若しくは其親屬の訴により、更に其事件を審判すること。

(さい-しん)[細心](名) ㊀綿密又は謹愼なる心。㊁偏狹又は卑怯なる心。

(さい-しん)[再進](名) 再び進むること。又、再び進むこと。

(さい-しん)[最新](名) 最もあたらしきこと。

(さい-しん)[采薪](名) たきゞをひろふこと。——のうれひ[采薪憂](名) (孟子に出づ)自分の病氣の謙稱。

(さい-じん)[細人](名) 度量のせまきもの。根性のひがみたるもの。小人。

(さい-じん)[才人](名) ㊀才子。㊁詩文の達人。

†さい-す[祭主](名) 「さいしゆ」に同じ。

さい-す[際](自、さ變) であふ。でくはす。

さい-す[擠](他、さ變) おしひらく。おしおとす。

(さい-せ)[在世](名) ㊀世に在る間。「一十年」。㊁いきながらふること。存命。「應永頃—」。

(さい-せ)[財施](名) 【佛】僧侶又は貧者などに、財物をほどこしめぐむこと。

(さい-せい)[再生](名) ㊀一旦死にたるもの、助かること。よみがへること。いきかへること。㊁必死の場合をまぬかるゝこと。「一の恩」。㊂【心】「さいげん(再現)(二)」に同じ。

(さい-せい)[濟濟](名) 債務などを殘りなく辨濟すること。

(さい-せい)[再製](名) こしらへなほし。

(さい-せい)[歲星](名) 木星の一名。

(さい-せい)[祭政](名) 祭事と政事と。まつりごと。——いつち[祭政一致](名) 上古、天皇が皇祖を尊崇したまふは即ち國家を統御したまふ所以にして、宮殿は神器の正宮と天皇の所在とをかねたりし狀態の稱。

(さい-せい)[財政](名) 【法】㊀國家又は公共團體が、其生存發達の目的を達するため、收入を獲得し經費を支出する行爲又は狀態。㊁個人の金融。かねまはり。——か[財政家](名) 財政の事務に巧なる人。——がく[財政學](名) 如何にせば有利なる方法によりて財政を運轉すべきかを研究する科學。——かんとく[財政監督](名) 議會が豫算の査定又は決算の調査其他種々の方法によりて、財政の當否・善惡を監督すること。——ねんど[財政年度](名) 會計年度に同じ。

(さい-せう)[再醮](名) 婦人の再び嫁すること。にどのえんづき。再縁。

(さい-せう)[最少](名) 最も少なきこと。又、最もわかきこと。

(さい-せう)[最小](名) 最も小さきこと。——こうばいすう[最小公倍數](名) 【數】公倍數の最小なるもの。——こうぶんぼ[最小公分母](名) 【數】公分母の最小なるもの。

(さい-せき)[載積](名) のせつむこと。「石炭の—」。

(さい-せき)[在昔](名) むかし。

(さい-せき)[罪跡](名) 犯罪のあとかた。

(さい-せつ)[歲殺](名) 陰陽家にて祭る八將神の一、此神の居る方角に向ひ、嫁取(ヨメトリ)又は壻はじめなどを忌(イ)むといへり。

(さい-せつ)[細說](名) ㊀小人ばらのざんげん。口さがなきものゝとりざた。㊁こまかにとくこと。くはしくとくこと。

(さいせつ-がん)[碎屑岩](名) 【鑛】分子もろくして碎(クダ)け易き岩石、多くは水成岩に屬す。

(さい-せふ)[妻妾](名) つまとめかけと。

(さい-せん)[再選](名) 再度當選すること。又、再度選擧すること。

(さい-せん)[賽錢](名) 神佛に參詣して奉る錢。(香錢)。——ばこ[賽錢函](名) 社寺などにて、賽錢を受くるに設けたる函。

(さい-ぜん)[最前](名) ㊀もっとも前。㊁さきほど。

(さい-そ)[再祚](名) 天子の再度の御即位。(重祚)。

(さい-そ)[菜蔬](名) 野菜。

(さい-そく)[細則](名) 細かき事柄に關したる規則。

(さい-そく)[催促](名) うながすこと。はたること。せつくこと。とくそく。

(さい-ぞく)[在俗](名) 僧とならずにあること。又、其人。

(さい-た)[最多](名) 最も數多きこと。

サイダー[Cider](名) 林檎より取りたるアルコール性の飲料。

(さい-たい)[妻帶](名) 女房もち。「肉食—」。

(さい-だい)[細大](名) ㊀こまかなると大きなること。㊁いちぶしじゆう。みさい。巨細。

(さい-だい)[最大](名) 最も大いなること。——こうやくすう[最大公約數](名) 【數】公約數の最大なるもの。

(さい-たく)[採擇](名) えらびとること。よること。

(さい-たく)[在宅](名) 宅にをること。ざいたく。

さいだ-しほ[齋田鹽](名) 阿波國板野郡齋田地方より出だす鹽。

†さいたづま[虎杖](名) ㊀【植】「いたどり」の古名。㊁春の若草。

†さい-だて[戲射](名) 弓を射る遊戲。(小射楯)。

(さい-たん)[歲旦](名) 新年第一日。元日。(年頭、歲首)。

(さい-だん)[祭壇](名) 祭事を行ふ壇。

(さい-だん)[裁斷](名) ㊀たちきること。㊁理非善惡を判(ワ)けさだむること。さばき。

(さい-だん)[財團](名) 【法】財産の集合體にして法律上人格を付せられ、自ら權利の主體となるもの。社團の對。——はふじん[財團法人](名) 【法】前條に同じ。

(さい-ち)[才智](名) ㊀心の作用。㊁かしこきこと。

(さい-ち)[采地](名) ちぎやうち。りやうち。

(さい-ちやう)[在廳](名) ㊀†古昔、國府に居りし役人。㊁其役所に在勤すること。

(さい-ちゆう)[細註](名) 細かく說きたる註釋。又、細字にてしたゝめたる註解。

(さい-ちゆう)[最中](名) 事のたけなはなる時。もなか。まさかり。

(さい-ちゆう)[在中](名) 其なかに入りてあること。

(さい-ぢゆう)[在住](名) 其處に住みて居ること。

(さい-ぢよ)[妻女](名) ㊀妻と娘と。㊁妻。

(さい-ぢよ)[才女](名) 才智すぐれたる婦人。

(さい-ぢよ)[歲除](名) 大晦日の夜。

(さい-ぢよ)[采女](名) 「うねめ」に同じ。

(さい-づか)[采柄](名) さいはいのつか。——をにぎる さしづをなす。

†さい-つ-ころ[先頃](名) 「さきつころ」の音便。

さい-づち[木椎](名) 小形の木の槌。ばんぢやうづち。さいこづち。(杉搗)。——あたま[木椎頭](名) 後腦のつきいでたる頭。(杉搗頭)。

†さい-つ-とし[先年](名) 「さきつとし」の音便。

†さい-で[裂帛](名) 布帛のきれはし。(裂帛)。

(さい-てい)[裁定](名) 當否をわけさばくこと。

(さい-てい)[再訂](名) 再度の改訂。

(さい-てい)[最低](名) 程度又は位置の最も低きこと、最下。——かんだんけい[最低寒暖計](名) 或時間内の最低の溫度を示す寒暖計。

(さい-てい)[在廷](名) ㊀法廷に出頭してあること。㊁朝廷に出仕してあること。

(さい-てう)[在朝](名) 朝廷に出仕してあること。

さいでう-がき[西條柿](名) 伊豫國西條地方より出す柿の果實。

さいでう-まさ[西條柾](名) 「いよまさがみ」この一名。

(さい-てん)[祭典](名) 祭事の儀式。まつり。

(さい-ど)[妻孥](名) 妻と子と。又、家内眷族。

(さい-ど)[再度](名、副) ふたゝび。兩度。

(さい-ど)[濟度](名) 【佛】衆生の苦患を濟(スク)ひ、苦海即ち生死煩惱の境を去りて、彼岸即ち成佛得脫の境へ度(ワタ)らすること。

(さい-とり)[才取](名) 賣買を周旋して、口錢を得ること。又、其業の人。(牙保、經紀人)。

さい-とり-さし(名) (「さいとり」は、刺鳥の音便)さいとり竿をもて、鳥を捕る人。とりさし。

さい-とり-ざを[刺鳥竿](名) 鳥をさすに用ふる竿。竿頭に鳥黐(モチ)をつく。(刺捕竿)。

(さい-なう)[財嚢](名) ㊀金錢を入れおくふくろ。㊁自分の所有の金錢のかぎり。

(さい-なふ)[採納](名) とりをさむること。とりあぐること。

さいなむ[呵、嘖](他、ま四) ㊀せむ。㊁いぢめる。さへたぐ。(苛、酷)。

(さい-なん)[災難](名) わざはひ。なんぎ。災厄。——よけ[災難除](名) 災難をよくるためのお札又は祈禱等の稱。

(さい-にち)[齋日](名) 齋戒の日。ものいみび。

(さい-にち)[賽日](名) 藪入に閻魔にまゐる日。

(さい-にふ)[歲入](名) 國家又は公共團體の一會計年度内に於ける收入の總額。歲出の對。

(さい-にん)[再任](名) 再び以前の官に任ぜらるること。

(さい-にん)[罪人](名) 罪を犯したる人。はんざいにん。つみびと。とがにん。

(さい-のう)[才能](名) ㊀智慧のはたらき。心の機轉。㊁智慧のはたらきのすぐれたること。

さい-の-かはら[賽河原](名) 【佛】冥途にて、小兒の亡者の遊び居るといふ所。

さい-の-め[采目、賽目](名) ㊀采の面の數字。㊁采程の大きさ。㊂正しき小立方體。

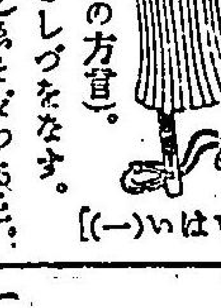
(さい-は)[歲破](名) 陰陽家にて祭る八將神の一、此方角に向ひ、移轉又は航海を忌(イ)むといへり。

(さい-は)[碎破](名) くだきやぶること。(摧破)。

(さい-はい)[儕輩](名) ともがら。なかま。

(さい-はい)[再拜](名) ㊀二度くり返して敬禮すること。㊁手紙の終末に用ふる敬語。「頓首—」。

(さい-はい)[采配](名) ㊀昔時、大將が士卒を指揮するために持ちし具、厚紙を細く裁(タ)ちてつくり、これに柄をつけたるもの。ざい。(采幣、麾配)。㊁麾はたき。(東京の方言)。㊂さしづ。志き。——をふる さしづをなす。


[さいはい(一)]

(さい-ばい)[栽培](名) 植物を栽(ウ)ゑそだつること。

(さい-はう)[砦堡](名) とりで。こぼろ。

(さい-はう)[細報](名) くはしき報知。

(さい-はう)[西方](名) 西の方。——じやうど[西方淨土](名) 【佛】極樂淨土の稱、其西方にありと傳ふるよりいふ。

(さい-はう)[細胞](名) 生物體を組成する微小なるもの、本來は球形にして原形質より成り、外部に細胞膜を有し中に核を有す、營養物質を外界より

攝取し、これを同化して新分子を生じ、消耗したる
舊分子に代ふ、斯くて次第に增大して、或一定の度
に達すれば、二個以上の新細胞となりて生殖す。
——えき[細胞液](名) 細胞中に充滿しある液。
——かく[細胞核](名) 細胞原形質の內にある
顆粒狀の物質。——げんけいしつ[細胞原形
質](名) 細胞を形成する原形質、蛋白性にして顆
粒狀をなし、炭·酸·水·窒の四元素より成る。——し
つ[細胞質](名)「さいはうげんけいしつ」に同じ。
——そしき[細胞組織](名) 其生體が細胞の
集合によりて構成せられたるもの。——まく[細胞
膜](名) 細胞の原形質の表面を被ふ薄膜。
(ざい-はう[財寶](名) たから。たからもの。
さい-ばし[菜箸](名) 飯の菜をはさみて皿に盛る
箸。
(さい-はじ·ける[才彈](自、か下二)
小利口にして思慮深からず。こましやくれる。
廿さい-はて[最果](名) 最後。
さいはひ[幸](名)「さきはひ」の音便。——だ
け[幸茸](名)【植】靈芝(レイシ)
の一名、(玉蕈)。——に[幸]
(副) 都合よくて。しあはせに。
「—危險を免る」。——びし
[幸菱](名) 模樣の名。

[しびひはいさ]

廿さい-は·ふ[幸](自、は四) さきはふ。
廿さい-ば-ら[催馬樂](名) かぐらうたに類する古代
の俗樂、もとは馬を牽(ヒ)く時に謠ひしものといふ。
(さい-はらひ[采拂](名) はたき。「ると。
(さい-はん[再版](名) 同一の圖書を再度出版す
(さい-はん[再犯](名) 以前に罪を犯しゝものが、
また罪を犯すこと、既て有罪の判決を受けしものが再

び罪を犯すこと。——かぢゆう[再犯加重](名)
【法】再犯者に科する刑罰は、等を加へて重くすること。
(さい-ばん[歲晚](名) 年のくれ。せつき。(歲暮)。
(さい-ばん[裁判](名) ㊀是非曲直のさばき。㊁
【法】裁判所が、訴訟を審理し、これを裁斷して法
規の適用を定むること、判決·命令·決定等を包含す。
——くわん[裁判官](名) 裁判所を組織し裁
判上の事務を取扱ふ官吏。——くわんかつ[裁
判管轄](名)【法】事物·土地又は職務に就き、裁
判所が其職權を行使することを許されたる區域。(管
轄裁判所の條參照)。——けん[裁判權](名)
【法】裁判と稱する統治權の一作用。又、裁判所が裁
判を行ふ權限。——しよ[裁判所](名)【法】裁
判といふ統治權の一作用を行使する國家の機關。
又、民事刑事の裁判をなす國家の機關。(法衙)。——
せき[裁判籍](名)【法】土地に關する裁判管轄
を、其裁判を受くる人より見ての稱。——てい
[裁判廷](名)「はふてい」(法廷)に同じ。——ひ
よう[裁判費用](名)【法】裁判に關して當然要す
べき費用、即ち證人又は鑑定人等の日當·旅費若し
くは印紙·用紙等の費用の如きこれなり。訴訟費用。
(ざい-はん[在判](名) ㊀公文書に奉行人の名の
下に記す頭、在官の裁判の義なりといふ。㊁書判
(カキハン)又は捺印あること。
(ざい-はん[罪犯](名) つみ。とが。
(ざい-ばん[在番](名) 勤番にあること。
(さい-ひ[歲費](名) ㊀一年間の入費。㊁貴族院
及衆議院議員の一年間に受くる費用。「まひ。
(さい-ひ[柴扉](名) しばのとびら。又、わびしきす
(さい-び[細微](名) こまかきこと。ちひさきこと。
(さい-び[歲尾](名) としのくれ。せつき。

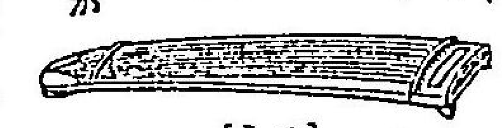
(さい-ひつ[才筆](名) 巧妙なる文章。又、巧妙な
る文章をかき得る才能。
(さい-ひやう[細評](名) くはしき批評。
(さい-ふ[財布](名) 金錢を入れて懷中する袋。か
ねいれ。「あること。
(ざい-ふ[在府](名) 德川時代に、江戸に在勤して
サイフォン[Syphon](名) ㊀【理】曲がりたる管(クダ)
にして、其短脚を液體に入れ、長脚より他の器に液
を流出せしむるもの。㊁「サイフォンラムネ」の略
言。——ラムネ(名) 口に「サイフォン」の裝置あ
る壜に入れある「ラムネ」。
(さい-ふく[祭服](名) 祭主又は神官などが、祭典
のときに着る衣服、白色の布帛にて仕立て、形は袍
に似たるもの。(齋服)。
(さい-ふ-じり[財布尻](名) 金財布のそこ。轉じ
て、金錢の出入のかなめ。「—を握る」。
(さい-ぶつ[才物](名) 才子。「たから。
(ざい-ぶつ[財物](名) 價格ある物品。たからもの。
(さい-ぶへうじゆんじ[西部標準時](名)
澎湖海峽を通過する東經百二十度線上の時刻、沖繩
群島及臺灣の標準時なり。
さい-ふり[采振](名) ㊀采配をふる人。㊁擲奕に
て、采を振る人。㊂【植】「あてやなぎ」の一名。
(さい-ぶん[祭文](名) 祭事に、神靈に告ぐる文。
(さい-へう[彩票](名) 富鬮の札。とみふだ。
(さい-べん[才辯](名) 嘗廻(ハイヒマ)よき辯。巧なる「辯。
(さい-ほ[菜圃](名) 蔬菜を植うるはたけ。
(さい-ほう[裁縫](名) 布帛を裁(タ)ち縫(ヌ)ふこと。
又、衣服の仕立。「發すること。
(さい-ほつ[再發](名) 病氣又は惡癖などの再び
(ざい-ほん[材本](名) 物をつくる原料。もと。

廿さい-まつ(名)「たいまつ」の訛。
(さい-まつ[歲末](名) 年の暮。せいぼ。(歲暮)。
(さい-まつ[細末](名) ㊀こまかき物事。㊁こま
かき粉。「帳」。(貲布、絡)。
(さい-み[細美](名) 粗末なる麻布。さよみ。「—の蚊
(さい-みつ[細密](名) こまかきこと。めんみつ。ち
(さい-みん[細民](名) こまへ。下民。「みつ。
(さい-みん-じゆつ[催眠術=Mesmerism](名)
人をして意識を或一點に集注せしめ、以て睡眠若し
くは喪心の狀態とならしむる術、近時大に流行す、
或はこれによりて、時空を超越したる靈の活動を認
むべしといへり。
(さい-む[債務](名)【法】特定の人に對して、或行
爲をなすべき又はなさゞるべき義務、即ち金錢な
どを借りたる人の辨濟すべき義務の類。債權の對。
——がく[債務額](名) 辨濟すべき金錢の額。
——しや[債務者](名)【法】債權者に對して
債務を負(オ)ふもの、即ち金錢を借りたる者の類。
——めいぎ[債務名義](名)【法】法律上に於
て強制執行の基たるべきものと認めらるゝ書面、例
へば公正證書又は執行命令等の類これなり。
(ざい-む[財務](名) 財政上の事務。——ぎやう
せい[財務行政](名) 財務に關する行政、
國家の財務行政は大藏大臣これを管る。——くわ
ん[財務官](名) 財政上の事務を取扱ふ官吏。
(ざい-めい[在銘](名) 製作物に其作者の銘のあ
ること。(有銘)。
(ざい-めい[罪名](名) 犯罪の名稱、例へば官吏侮
辱又は毆打創傷等の如きこれなり。
(ざい-めう[在苗](名) 在所即ち居る場所の名
によりて付けたる苗字、新田郷に居て新田を名のる

の類これなり。
(さい-めん[西面](名) 後鳥羽天皇の時に置かれ
たる院の御所を守護せし武士。
(さい-もく[細目](名) こまかき箇條。「なる木。
(ざい-もく[材木](名) 建築又は製作等の材料と
ざいもく-や[材木屋](名) ㊀材木を賣る家。㊁
(材木屋の疵の略言、高くとまるの謎(ナゾ)なりとい
ふ) 倨傲なる人。きどりや。——ふう[材木屋
風](名) 元祿頃に流行せし男子の髮風、頭の背部
に細く髻(マゲ)を結びたるもの。
(ざい-もつ[財物](名) 金錢又は金錢上の價格を
有する物品の稱。家財。たからもの。たから。
(さい-もん[柴門](名) しばのと。
(さい-もん[祭文](名) ㊀「さいぶん」に同じ。㊁
「せつきやうざいもん」の略言。㊂「さいもんよみ」の
略言。——よみ[祭文讀](名) せつきやうざい
もんをいやしげなる節にて謠(ウタ)ふもの。「と。
(ざい-や[在野](名) 官に仕へずして民間にある
(さい-やう[西洋](名)「せいやう」に同じ。
(さい-やく[採藥](名) 藥用となる草木を採取す
(さい-やく[災厄](名) わざはひ。災難。「ること。
(ざい-やく[在役](名) やくづき。在職。在勤。
(さい-ゆしゆつ[再輸出](名)「さいしゆしゆつ」
に同じ。「同じ。
(さい-ゆにふ[再輸入](名)「さいしゆにふ」に
(さい-よう[採用](名) 採(ト)りあげ用ふること。
(ざい-よう[財用](名) 資財と費用と。又、物事に
要する費用の支出。「と欲する慾望。
(ざい-よく[財欲](名)【佛】五欲の一、財物を得ん
(さい-らい[再來](名) 再び此世に生れ出たりと
いふこと。うまれかはり。「空海の—」。

(ざい-らい[在來](名) ありきたり。「う。
(さい-らう[宰老](名) 大小名の家臣の長。から
(さい-らう[豺狼](名) やまいぬとおほかみと。
轉じて、やまいぬや狼の如き心の人。慘酷にして貪
欲あくことをしらぬ人。「振舞ふ。
廿さい-ら·ぐ(自、か四) 何となく才ありげに
(さい-り[犀利](名) 堅くしてするどきこと。
(ざい-りう[在留](名) 一時一定の地に留ること。又、
外國に留りゐること。——みん[在留民](名) 外
國に在留する我國の臣民。
(さい-りやう[宰領](名) ㊀つかさどること。とり
しまること。㊁運送の荷物などを護(マモ)り行く人。
(さい-りやく[才略](名) 才智ありて、よくはかり
ごとを立つること。
(さい-りよく[才力](名) 智慧のはたらき。
(ざい-りよく[財力](名) 財產上に於ける勢力。
又、費用を支出し得る限度。
(さい-れい[祭禮](名) かみごと。まつり。
(ざい-れい[罪戾](名) つみ。とが。
(ざい-れう[材料](名) 物をつくるたね又はた
すけとなるもの。
サイレン[Siren](名)【理】發音體の振動數を驗す
るに用ふる一種の器械。
(さい-ろう[菜籠](名) 籠作(カゴツクリ)の炭とり。
(さい-わう[齋王](名) いつきのみこ。
さい-わか[幸若](名) 舞の一種、桃井直常の後裔
にして叡山の稚兒なる幸若麿が、始めて舞ひしも
の、能に似て樂器なく扇拍子のみにて謠(ウタ)ひ舞ふ。
さい-わりびき[再割引](名) 或銀行が、一旦割
引したる手形を更に裏書して讓渡をなし、再びこれ
を割引すること。

(さい-ゐ)[在位](名) 帝王の位にゐたまふ間。御宇。
(さい-ゐん)[齋院](名) 古昔、加茂神宮に仕へられし內親王。いつきのゐん。 ——し[齋院司](名) 齋院の事を掌りしつかさ。
(さい-ゑん)[菜園](名) 野菜を植うるはたけ。
(さい-ゑん)[才媛](名) 才多き婦人。又、詩歌などに巧なる女子。
(ざ-いん)[坐隱](名) (世說に出づ)碁を圍むこと。
(さう)[相](名) ㊀かたち。すがた。「人の—」。㊁一切の品類の形狀。かたち。㊂にんさう。「—を觀る」。
(さう)[箏](名) 一種の樂器、十三絃を張る、其一より五までを大緒といひ、六より十までを中緒といひ、末の斗(ト)・爲(ヰ)・巾(キ)の三絃を細緒といふ。さうのこと。


［さう］

(さう)[喪](名) きちゆう。も。「—服」。
(さう)[草](名) ㊀くさ。くさむら。㊁したがき。文案。㊂草書。「—の手」。「—かな」。
(さう)[操](名) みさを。
(さう)[槽](名) ㊀かひをけ。馬槽。㊁さかぶね。さかだる。
(さう)[曹](名) ともがら。くみ。なかま。「吾—」。
(さう)[嫂](名) あによめ。(嫂)。
(さう)[想](名) ㊀思想の略言。㊁【佛】吾人の心意に日夜斷ゆることなき妄念。
(さう)[壯](名) ㊀つよきこと。強健。㊁さかんなること。りつぱなること。㊂おほいなること。雄大。㊃三十歲前後。わかざかり。㊄血氣さかんなる者。わかもの。
(さう)[雙](名) つゐ。そろひ。兩方。「—の袂」。
(さう)[莊](名) ㊀「さうゑん」(莊園)の略言。㊁「しやう」(莊)に同じ。
(さう)[左右](名) ㊀みぎひだり。㊁ありさま。容體。「—を伺ふ」。㊂おとづれ。たより。「—がない」。

(さう)[然](副) (然の延言) 其如く。さか。「—いふ」。
(—さう)[艘](接尾) 船を數ふるにいふ語。「出船千—入船千—」。
(—さう)[雙](接尾) 一對の物を數ふるにいふ語。「屏風一—」。
(—さう)[樣](接尾) 動詞・形容詞に添へて「さま」の意を表はす語。「行き—」。「恐し—」。
(ざう)[象](名) ㊀【動】哺乳類中長鼻類に屬する獸、軀幹の巨大なると陸棲動物の第一なり、每肢五趾を具す、眼は狹小なり、鼻は圓筒狀に延長して屈伸自在なること恰も人類の指の如し、上顎の二門齒は頗る長く、俗にこれを象牙といふ、現時の世界に棲息するは、「インド」種「アメリカ」種の二とす、力最も強く性質怜悧溫順なり。㊁かた。かたち。

［ざう］

(ざう)[像](名) ㊀かたち。さま。㊁【理】光の反射又屈折により映(ウツ)る物體の形、實際衝立などに映るものを實像といひ、鏡面などにてたゞ眼にのみ映るものを虛像といふ。㊂神佛・人類又は鳥獸等の形體を模して、描(エガ)き又は造りたるもの。「佛—」。
(ざう)[臟](名) 體內の心・肝・腎・肺・脾などの總稱。
(ざう)[贓](名) 盜竊・賄賂其他不法なる手段によりて、財物を取ること。又、其取りたる財物。「—」。
(ざう)[藏](名) をさめ持つこと。又、其物。「某氏の—」。
(さう-あい)[草鞋](名) わらぢ。わらぐつ。
(さう-あん)[草案](名) したがきの文案。(草稿)。

(さう-あん)[草庵](名) 草のいほり。又、いぶせきいほり。(草廬)。
(さう-い)[創意](名) おもひつき。もくろみ。
(さう-い)[創痍](名) ㊀きず。㊁受けたる損害。
(ざう-い)[造意](名) くふう。かんがへ。
(さう-いう)[爭友](名) よく忠告する友人。
(ざう-えい)[造營](名) 家屋などを建築すること。いとなみつくること。
(さう-えん)[蒼鉛](名) 【化】赤色の光澤を有し美麗に結晶せる金屬、稍や稀(マレ)なるものにして、往々遊離して存在し、或は硫蒼鉛鑛となりて存在す、其合金は融解し易くして模型を作るに用ひられ、化合物は醫藥に用ひらる。
(さう-おう)[相應](名) つりあふこと。相當。
(さう-おん)[噪音](名) 【理】振動が急激に生滅するか若しくは不規則なるかの音。調子にのらぬ音。樂音の對。
(さう-か)[喪家](名) ㊀家を喪ふこと。やどなし。㊁喪(モ)に丁(アタ)れる家。㊂おとろへすたれたる家。
(さう-か)[早歌](名) 中古、地下(ゲ)の謠物、神樂のは「はやうた」といひてこれと別なりといふ。
(さう-か)[唱歌](名) 「しやうか」に同じ。
(さう-が)[爪牙](名) ㊀つめときば。㊁たのみになる手先。たすけになる部下。「予は王の—なり」。
廿(ざう-が)(名) 「ざうがん」(象眼)の略言。
(さう-かい)[草鞋](名) 「さうあい」に同じ。「り」。
(さう-かい)[藻海](名) 【地】太西洋中灣流の通路にて、海草のあまた繁茂せる所。
(さう-かい)[掃海](名) 海中に敷設したる諸種の危險物などを、遏(アマ)く取除きて、航海を安全ならしむること。

(さう-かい)[蒼海](名) あをうなばら。あをうみ。(滄溟)。 ——さうでん[蒼海桑田](名) (蒼海變じて桑田となるの意)世の中の甚しきうつりかはりにいふ語。 ——の-いちぞく[蒼海一粟](名) (あをうみの中の一粒の粟の意)極めて多大なるものに比して、極めて微小なるものにいふ語。 ——は[蒼海波](名) 琴を彈(ヒ)く手の一。
(さう-かう)[草冠](名) 「くさかんむり」に同じ。
(さう-かう)[霜降](名) 二十四氣の一、秋季の末にして、陽曆十月二十三日頃にあたる。
(さう-かう)[草稿](名) したがき。(原稿、草案)。
(さう-かう)[糟糠](名) かすとぬかと。轉じて、あしき食物。 ——の-つま[糟糠妻](名) 貧しき時に娶(メト)りて、苦勞を共にしたる妻。「—は堂より下さず」。
(さう-かう)[蒼昊](名) あめ。そら。
(さう-がう)[相好](名) かほつき。容貌。人相。 ——をくづす 眞面目なるかほつきを變じて、大いに笑ひ又はよろこぶにいふ。
(さう-かく)[贓額](名) ぬすみ物などのたか。
(さう-かく-るゐ)[雙殼類](名) 【動】蛤(ハマグリ)などの如く、介殼の左右二つある貝の稱。
(さう-か)[喪家](名) 主人死して喪ある家。 ——の-いぬ[喪家狗](名) おちぶれて憔悴したる人をたとへていふ語。
(さうか-へいきん)[相加平均](名) 【數】數個の數の和を、其個數にて除したるもの。
(さう-がな)[草假名](名) ひらがな。
(さう-かふ)[爪甲](名) つめ。
(さう-かふ)[裝甲](名) ㊀鎧を着て身仕度すること。㊁敵彈を防ぐために、船體に鐵板を施すこと。

——じゆんやうかん[裝甲巡洋艦](名) 巡洋艦の一種、戰鬪艦と共に專ら戰鬪に用ひられ、殊に遠く根據地を離れたる戰鬪に適するもの。
(さう-がん)[雙眼](名) 雙方の眼(マナコ)。(兩眼)。 ——きやう[雙眼鏡](名) 【理】短かき望遠鏡を二つ竝(ナラ)べたる裝置のものにして、兩眼にて望むに適す、各望遠鏡に、凸「レンズ」を對物「レンズ」とし、凹「レンズ」を接眼「レンズ」とす、長さ短く且物體の直立像を見ることを得、近來對物及接眼兩「レンズ」の間に「プリズム」を用ひ、全反射を利用して、長さを更に短くしたるものあり。(兩眼鏡)。
(ざう-がん)[象眼](名) ㊀古昔、布又は紙などに施し、細かき泥畫。㊁今時、銅又は鐵などの面に、模樣を刻(キザ)み込みて、中に金銀などを嵌(ハ)めたるもの。
(さう-き)[早起](名) はやおき。
(さう-き)[早歸](名) はやがへり。
(さう-き)[想起](名) 以前の事をおもひおこすこと。
(さう-ぎ)[爭議](名) ㊀意見又は議論の衝突。あらそひ。㊁異なる意見を主張して議論すること。
(さう-ぎ)[葬儀](名) 死者をはうむる儀式。とむらひの儀式。 ——や[葬儀屋](名) 葬儀に要する器具を貸し若しくは賣る人又は家。
(ざう-き)[臟器](名) もろもろの內臟。
(さう-きふ)[早急](名) 「さつきふ」に同じ。
(さう-ぎやう)[相形](名) さうがう。かたち。
(さう-きやく)[雙脚](名) 二本の足。雙方の足。
(さう-きゆう)[蒼穹](名) おほぞら。あをぞら。
(さう-きよ)[壯擧](名) 意氣さかんなる擧動。計畫雄大なるふるまひ。

(さう-ぎよ)[雙魚](名) ㊀二ひきのうを。㊁(雙鯉ともいふ、鯉魚の中に手紙の入れありし故事に出づ)てがみ。尺牘。 ——きゆう[雙魚宮](名) 【天】十二宮の一、現今は春分點此內にあり。
(さう-ぐ)[葬具](名) 葬式に必要なる道具。 ——し[葬具師](名) 葬具をつくるを業とする人。 ——や[葬具屋](名) 葬具をつくり又は賣る人。
(ざう-く)[造句](名) 句をつゞりつくること。
(さう-ぐう)[遭遇](名) 圖(ハカ)らず出合ふこと。出會すること。 ——せん[遭遇戰](名) 彼我の行動中に、相衝突して生ずる戰鬪。
(さう-くつ)[巢窟](名) 匪徒又は盜賊などの根據地。すみか。す。「盜賊の—」。
(さう-くわ)[想化](名) 【哲】「しさうくわ」(思想化)に同じ。
(さう-くわ)[造花](名) 紙又は帛などを切りて、花の形を造ること。又、其つくりたる花。つくりばな。
(ざう-くわ)[造化](名) ㊀天地間に於ける萬物が、生死現滅しつゝ、無窮に傳はること。㊁宇宙を經營する神。造物主。(造物者)。 ——きめう[造化奇妙](名) しあはせよきこと。つがふよきこと。 ——の-さんしん[造化三神](名) 神道にて、天御中主(アメノミナカヌシ)神・高皇產靈(タカミムスビ)神・神皇產靈(カムミムスビ)神の稱。
(さう-くわい)[爽快](名) さはやかにてこゝろよきこと。意氣さかんにしてたのしきこと。
(さう-くわう)[倉皇](名) あわたゞしきこと。あわつること。(倉卒、蒼黃)。
廿(さう-くわん)[佐官](名) 大寶令の第四等の官。さくわん。主典。「異稱」。
(さう-くわん)[草冠](名) 褐弓にて、數二十の

(さう-くわん)[壯觀](名) さかんなるみもの。りっぱなるみもの。(大觀)。
(さう-くわん)[相關](名) 雙方互に相關係すると。
(さう-くわん)[雙關](名) ㊀左右より閉(ト)ざしあはするやうに造りたる扉(トビラ)。㊁漢文の一體、相對する句を立てゝ骨子とし、以下これに照應參伍して文を行(ヤ)るもの。
(ざう-げ)[象牙](名) 象の上顎の門齒即ちきば、長く口外に出でゝ上に向ふ、色白く、諸種の什器に造りて珍重す。
(さう-けい)[早計](名) 早まりたるしかた。
(ざう-けい)[造詣](名) 學問又は技藝に到達又は熟練してあるほど。「一深遠」。
(ざう-けい)[像型](名) 鑄造する像のいがた。又、製作する像の模形。
(ざう-けい)[造形](名) 形體をつくりこしらふると。——げいじゆつ[造形藝術](名) 形ある藝術、即ち、繪畫・建築の類。
†さう-け-だ-つ[寒氣立](自、た四)「さむけだつ」の轉。
(さう-けつ)[葬穴](名) 死人を葬(ハウ)る穴。
(さう-げふ)[創業](名) 事業をはじむると。基礎をたつると。——そうくわい[創業總會](名) 創業したる會社の第一回拂込ありたるとき、發起人が招集する總會、諸種の報告及取締役・監査役の選擧其他創業の際の必要なる事項を議決するもの。——ひ[創業費](名) 銀行・會社などの創業に要する費用。
(さう-けん)[想見](名) おもひみると。おもひやると。
(さう-けん)[創見](名) 始めての發見。又、自己の發見。
(さう-けん)[雙肩](名) ㊀雙方の肩。㊁自家の負擔。

(さう-けん)[壯健](名) すこやか。たっしゃ。ぢやうぶ。
(さう-げん)[壯言](名) 意氣さかんなるものがたり又はことば。
(さう-げん)[草原](名) くさはら。
†(ざう-げん)[讒言](名) 「ざんげん」の音便。
(ざう-げん)[造言](名) ねなしごと。つくりごと。
(さう-こ)[倉庫](名) 貨物を入れおく所。くら。
(さう-こ)[操觚](名) (觚は方形の木、支那の古代にはこれに文字を書きたり)筆を執(ト)ると。又、文を作ると。
(さう-ご)[壯語](名) 意氣さかんなるものがたり又はことば。
(さう-ご)[相互](名) ㊀あひたがひ。おたがひ。㊁かへ/\。交換。
(ざう-ご)[造語](名) つくりたる語(コトバ)。
(さう-こう)[艙口](名) 船中の荷のあげおろしを便にするため、甲板上に設けたる口。
(さう-こ-えいげふ)[倉庫營業](名) 保管料を受けて他人の寄託貨物を自己所有の倉庫に保管し、倉荷證券を發行し、又、倉庫を賃貸し、又、保管物の轉地其他代金取立・割引・周旋等をなす營業。
(さう-ご-かんおう)[相互感應](名)【理】二つの輪道の一に通ずる電流を或は閉ぢ或は開くとき、其瞬間に、他の輪道に電流の通ずると。
(さう-こく)[相國](名) 太政大臣の唐名。
(さう-こく)[相剋](名) 五行の運行にて、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋(カ)つといふと。
さう-ご-くみあひ[相互組合](名) 相互の利益を圖(ハ)るために組成したる組合、例へば相互保險・職工組合・同業組合の如きこれなり。
(さう-こ-くわいしや)[倉庫會社](名) 倉庫營業をなす會社。

(さう-ご-くわいしや)[相互會社](名) 基金十萬圓以上ある相互保險の組合が、其事業を經營するため、規定により官許を得て設立したる會社。
(さう-ご-さよう)[相互作用](名) 相互に作用を及ぼしあふと。
(さう-こ-しや)[操觚者](名) 新聞雜誌の記者又は文學者などの稱。
(さう-ご-しゆぎ)[相互主義](名) 甲が乙に利益を與ふれば、乙も甲に利益を與へ、甲が乙に障害を施せば、乙もまた甲に障害を施す等、彼我の間に利害をかへ/\にすると。
(さう-ご-ほけん)[相互保險](名) 多數のものが相互組合を組成して相互の保險をなすと、通常の保險會社と同じく、生命・火災・海上等種々あれど、被保險者はすべて組合員なるが故に、自然に個々の損害に注意し、又、組合員一同にてそれ/\の金額を限り責任を有するが故に、一層確實にして、事業上の費用も自ら少額なり。
(さう-こん)[草根](名) 草の根。——ぼくひ[草根木皮](名) 漢方醫の用ふる藥劑の稱。
(さう-こん)[早婚](名) 年の行かぬ中の結婚。
(さう-ごん)[莊嚴](名) たふとくおごそかなると。うるはしくおごそかなると。
(さう-ざ)[草座](名) 僧の坐具(グ)。蓮座の對。
(ざう-さ)[造作](名) ㊀てだて。しかた。㊁てま。ひま。「―もない」。㊂もてなし。「御―かけました」。
(さう-さい)[相殺](名)【法】二人相互に債權者となり債務者となりたるとき、一定の條件に從ひ、雙方の債權債務を差引して消滅せしむると。
(ざう-ざい)[贓罪](名) 不法なる手段によりて、財物を取りたる犯罪。

(さう-さう)[草創](名) ㊀てはじめ。しはじめ。(創始、創業)。㊁はじまり。さいしよ。
(さう-さう)[蒼桑](名) 蒼海桑田の略言。「―の變」。
(さう-さう)[錚錚](名、副) よくきたひたる鐵などの鳴る音。轉じて、多くのもの丶中にて、器量のすぐれたるさまにいふ語。「鐵中の―たり」。
(さう-さう)[草草](名、副) ㊀簡略なるさまにいふ語。㊁いそがはしきさまにいふ語。㊂手うすきさまにいふ語。
(さう-さう)[蒼蒼](名、副) あを/\したるさま。
(さう-さう)[早早](副) いそぎて。はや/\。
(さう-ざう)[想像](名) ㊀おもひやると。おしはかると。㊁【心】既知の事實又は觀念を材料として、新事實又は新觀念をつくる心のはたらき。
(さう-ざう)[創造](名) はじめ造ると。造り出すと。つくると。
†さう-ざう-し[しくしくし](形、二) 物さびし。
さう-ざう-し[騷騷](形、二) さわがし。やかまし。
(さう-さく)[創作](名) はじめつくると。つくると。
(ざう-さく)[造作](名) ㊀つくると。こしらふると。㊁家のうちに、天井・床間・戸棚其他の建具又は裝飾を造ると。又、其裝飾又は建具。㊂貸家を借りて住まふとき、其中の或裝飾又は建具に對して拂ふ代價。「―のない貸家」。
(さう-さつ)[相殺](名) 「さうさい」に同じ。
(ざう-ざん-りよく)[造山力](名)【地】地球の冷えて縮まるにつれ、次第に地殼の表面に褶曲を生ずる收縮力、山岳溪谷はこれによりて生ず。
(さう-し)[創始](名) はじめ。はじまり。

(さう-し)[雙子](名) ふたご。
(さう-し)[桑梓](名) ㊀(詩經に出づ)ふるさと。故郷。㊁文書の版刻。
(さう-し)[壯士](名) ㊀意氣さかんなるわかもの。勇壯なる士。㊁近世、定まりたる職業なくして處々を漂泊し、人の依賴を受けて談判脅迫などを行ふ一種の人物。㊂「さうしばゐ」の略言。
(さう-し)[相思](名) 互にあひ思ふと。あひぼれ。
(さう-し)[草紙](名) ㊀さうかう。したがき。㊁物語などの冊子。㊂手習草紙の略言。㊃練習のために使用せらるゝもの。
†(さう-じ)[障子](名) 「しやうじ」に同じ
†(さう-じ)[精進](名) 「しやうじん」に同じ。「―の日のおこなひ」「―もの」。
(さう-じ)[相似](名) 互に相似かよひてあると。
(さう-じ)[雙兒](名) ふたご。
†(ざう-し)[曹司](名) ㊀古昔、禁中又は官省などに於ける官吏又は女官などの用部屋の稱。つぼね。へや。㊁古昔、大學寮にて人を教授したる所、東西の二つありき。㊂部屋住の公達の稱。「御―牛若丸」。
(ざう-じ)[造次](名) 僅かの間。つかのま。
†さう-し-あはせ[草紙合](名) 古昔行はれし一種の遊戲、互に物語などの冊子の巧拙をたゝかはせて勝負を決せしもの。
(さう-しう)[早秋](名) 秋のはじめ。しよしう。
(さう-しう-さう)[掃愁箒](名) (うれひを掃ふたまはゝきの義)酒の異稱。
さう-しう-もの[相州物](名) 相州の人五郎正宗の系統をつぎたる人々のきたひつくりたる刀。
(さう-しえふ-しよくぶつ)[雙子葉植物](名)【植】發生するときに、必ず二枚の子葉を有する植物、あさがほ・そらまめの類これなり。

(さう-し-えんげき)[壯士演劇](名) 「さうしばゐ(壯士芝居)」に同じ。
さう-し-がみ[草紙紙](名) ㊀てならひざうしの用紙。㊁漉(ス)きがへしの紙。
(さう-しき)[葬式](名) さうれい。
(さう-しき)[相識](名) しりあひ。ちかづき。しりびと。
(さう-しきり)[草紙錐](名) 紙などを綴(ト)づるに用ふる錐。
(さう-じ-けい)[相似形](名)【數】相似直線形又は相似多角形の稱。
さう-じ-こばん[草字小判](名) 文政年間に鑄造せし小判。
さう-し-しばゐ[壯士芝居](名) 舊俳優の系統外なる壯年特に壯士などが、新に組織せし芝居、正劇又は新派など丶稱して、當世風の新狂言を演ず。
†ざう-し-ずみ[曹司住](名) ㊀つぼねにさがりて休み居ると。㊁へやずみ。「―にてあり」。
(さう-じ-たかくけい)[相似多角形](名)【數】相似直線形に同じ。
(さう-じ-ためんたい)[相似多面體](名)【數】互に相似にして相似の位置にある面を有し、且對應二面角相等しき二つの多面體の稱。
(さう-じ-ちよくせんけい)[相似直線形](名)【數】互に等角にして、且其對應邊が互に比例をなす二つの直線形。
(さう-しつ)[喪失](名) なくなすと。うしなふと。
(さう-して)[然而](接) 「然して」の延言。
(ざう-じ-てんぱい)[造次顚沛](名) 暫時の間。つかの間。僅かの間。
さう-じ-の-ちゆうしん[相似中心](名)【數】二つの圓の中心を結ぶ直線と共通切線との交點。

あえういおえ　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

又、相似直線形の對應邊を平行するやうに置きたるとき、對應する頂點を連絡する諸線の交點。

さうおのあちッウ【相似位置】(名)【數】二つの與へられたる直線が、二つの相似形の對應邊なるとき、此相似形の二直線に對する位置。

さうおひッウ【相似比】(名)【數】二つの相似形の對應邊の比。

さうおひやうッウヒヤウ【相思病】(名)こひのわづらひ。

さうおもちッウ【宰司町】(名)古昔、禁中に宰司たちの數多つまりし所。つぼねまち。

さうおみッウ【正身】(名)《昔の譯語》當人。本人。「一の御有樣。」

さうかみせッウ【草紙店】(名)くさうし等などを賣る店。

さうかやりッウカヤウ【相生】(名)五行の運行にて、木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ずといふこと。

さうかやりッウ【創傷】(名)身體をきずつけそこなふこと。又、きず。

さうかやりッウカヤウ【藏相】(名)大藏大臣の異稱。

さうかやくみやりッウクミヤウ【壯士役者】(名)壯士芝居の役者。又、壯士の役者となりたるもの。

さうかゆッウ【襲主】(名)邪式をいとなむ主人。

さうかゆッウ【雙手】(名)左右の手。

さうかゆッウ【操守】(名)心中にかたくとり守りてかはらざること。みさを。

さうかゆッウ【造酒】(名)酒を醸すこと。

さうかゆうッウ【操縱】(名)或はひきとめ或はなちやり、いろ〳〵あやつりて動かすこと。

さうかゆくッウ【早熟】(名)㊀早く熟すること。㊁進達早くして、幼年の頃已に成人の風あること。

さうかゆつッウ【槍術】(名)槍を用ふる術。——か【槍術家】(名)槍術を行ふ人。又、槍術に巧なる人。やりつかひ。

さうかんゆんッウ【早春】(名)㊀「さう(蚤)」。(孟春)。

さうかんよッウ【草書】(名)漢字の書體の一、行書を更にくづし、字畫の撥も略せられたるもの。

さうかんよッウ【藏書】(名)所藏の書物。(所有書)。

さうかんよッウ【相稱】(名)相かなふこと。相似たること。

さうかんよッウ【爭訟】(名)あらそひ。うったへ。

さうかんよッウ【相乘】(名)【數】二個以上の數をかけあはすること。——へいひ【相乘比】(名)【數】同一種類の量が數個あるとき、第一の量と最後の量との比が、第一の量と第二の量との比、第二の量と第三の量との比等の相乘に等しいこと。——へいき【數】數個の數の連乘積を其個數の乘根に開きたるもの。

さうかよくッウ【裝飾】(名)㊀かざりつけ。㊁よそほひ。粧飾。——ひん【裝飾品】(名)裝飾用ふる物品。

さうかよくおゆりッウ【草食獸】(名)【動】もも記事を食ふ哺乳動物、即ち、牛・馬などの類。

さうかんるるッウ【雙翅類】(名)【動】昆蟲類の一、中胸部に膜質の翅一對あり、後胸部の翅は極めて小なる棍棒狀をなして飛行の用をなさず、口器は吸入又は舐取に適して刺す(サ)ことなし。蠅・蚊・虻・蚋など。

さうかんるんッウ【雙星】(名)二つならびて見ゆる星。又、牽牛と織女との稱。

さうかんるんッウ【雙親】(名)ふたおや。兩親。ちゝはは。

さうかんるんッウ【爭臣】(名)主君の非道をいさめあらそふ臣下。

さうかんるんッウ【裝飾品】(名)裝飾にそなはる。(粧飾)。——ひん【裝飾品】(名)裝飾用ふる物品。

さうかんよくおゆりッウ【草食獸】(名)【動】もも記事を食ふ哺乳動物、即ち、牛・馬などの類。

さうかんるるッウ【雙翅類】(名)【動】昆蟲類の一、中胸部に膜質の翅一對あり、後胸部の翅は極めて小なる棍棒狀をなして飛行の用をなさず、口器は吸入又は舐取に適して刺す(サ)ことなし。蠅・蚊・虻・蚋など

(さう-どう)ソウ【騒動】(名) ㊀事變又は擾亂あること。㊁さわぎて平穩ならざること。㊂あらそひたゝかひ。†——うち【騒動打】(名) うはなりうち。

(さう-どく)ソウ【瘡毒】(名) かさ。ばいどく。

†(さう-どく)ソウ【藏匿】(名) かくすこと。かくまふこと。

†(さう-とん)ソウ【草墩】(名) 古昔の一種の腰きもの。

(さう-な)ソウ【草名】(名) ㊀草書の一名。まなの對。㊁古昔、文書に、我名を草書にて自筆と認めたるもの。かきはん。

†(さう-なし)ソウ【左右無】(形、一) すぐになす。ためらはず。「さうなくは人を得乾しめじ」

†(さう-なし)ソウ【無左右】【雙無】(形、一) たぐひなし。ならびなし。

(さう-なん)ソウ【遭難】(名) わざはひにあふこと。危難にであふこと。「自—する」

(さう-に)ソウ(副) 《さうにの音便》やうに。ごとく。

(さう-にん)ソウ【相人】(名) 相見の人。にんさうみ。

(さう-ねん)ソウ【壯年】(名) 最も壯(サカ)んなる年頃。又、其年頃の人。壯齢。

(さう-ねん)ソウ【想念】(名) 【心】意識に印象せられたる事物の念。智・情・意に亙(ワタ)り、心的生活の大部は、其種々なる變化離合に外ならず。

†(さう-の-こと)ソウ【箏琴】(名) 箏に同じ。

†(さう-の-ふえ)ソウ【篳篥】(名) 篳篥に同じ。

(さう-ば)ソウ【相場】(名) ㊀市場に於ける貨物と貨幣との交換比例。貨物の時價。㊁物品の賣買に、現物の取引をなさず、專ら時價の差引によりて、相互間の取引をなすこと。㊂売ささだめ。月旦。——くわいあよ【相場會所】(名) 昔時の取引所。——あ【相場師】(名) 現物によらず、相場の變動を利用してなす取引を業とする人。投機者、相場師。

(さう-ば)ソウ【相場附】(名) ㊀相場の決定。——へう(ヒョウ)【相場表】(名) 相場の高下の記錄。——づけ【相場附】(名) 前條に同じ。

(さう-はう)ソウ【雙方】(名) 兩方。——かうゐ(コウイ)【雙方行爲】(名) 【法】當事者雙方の意思表示により成立する法律行爲。契約の如きこれなり。

(さう-ばう)ソウ【相貌】(名) かほかたち。みめかたち。

(さう-ばう)ソウ【蒼茫】(名) 見渡すかぎりの物色定かならずして、ひろ〳〵としたるもの。

(さう-ばう)ボウ【想望】(名) ㊀其人の德をしたひ仰ぎて其事の到來を待つこと。㊁くさむら。くさはら。

(さう-ばう)ボウ【草莽】(名) ㊀【植】「あやめ」に同じ。㊁民間。在野。——の-あん【草莽臣】(名) 官に仕へずして野にある人。いやみん。賤人。

(さう-はく)ソウ【糟粕】(名) ㊀さけのかす。かす。酒滓。㊁滋味なき殘物。精神なき殘跡。「古人の—」。

(さう-はつ)ソウ【掻撥】(名) かきひらくこと。かきのぞくこと。——る【掻撥類】(名) 【動】鳥類の一、脚は強大にして地上を步むに適し、後趾は前趾よりも高し。翼小にして飛強く、地を掻撥して食物を求む。きじ・にはとり・やまどり等これに屬す。

(さう-はん)ソウ【雙盤】(名) 寺院にて、圖案の開帳などに打ち吊らす金屬の盤。

(さう-ばん)ソウ【早晩】(副) もそかれはやかれ。いつか。

(さう-はん)ソウ【藏版】(名) 所藏の版。又、其版本。

(さう-はん-はうていあき)ソウ【相反方程式】(名) 二の方程式の根の逆數を根とする方程式。

(さう-ひ)ソウ【壯美】(名) ㊀雙方とも負けず劣らず秀でてよきもの。㊁二人の美人。

(さう-ひ)ソウ【象皮】(名) 象の皮。

(さう-びん)ソウ【雙鬢】(名) 左右の鬢。「一の稚」

(さう-びん)ソウ【蒼髮】(名) あをぞら。そら。「ヒ」

(さう-ひん)ソウ【臟品】(名) 「ざうぶつ」(臟物)に同じ。

(さう-ふ)ソウ【壯夫】(名) わかもの。壯丁。「ざ」

(さう-ふ)ソウ【傍父】(名) みなかもの。みなかもや。

†(さう-ふ)ソウ【菖蒲】(名) ㊀【植】「あやめ」に同じ。㊁かされの色目、表は青にして、裏は紅梅なるもの。

(さう-ふ)ソウ【臟腑】(名) ㊀五臟と六腑との總稱。㊁はらわた

(さう-ふく)ソウ【喪服】(名) 喪(モ)の間に着るべき衣服。

(さう-ぶつ)ソウ【贓物】(名) うばひとりたる物。ぬすみたる物。不正なる手段によりて得たる物。

(さう-ぶつ)ソウ【造物】(名) ㊀天地萬物。自然。㊁造物者の略言。——しゃ【造物者】(名) 天地萬物を經營支配する神。造化の神。上帝。天帝。——しゅ【造物主】(名) 前條に同じ。「夫(カ)ゝる」

(さう-ふ-れん)ソウ【想夫憐】(名) 雅樂の曲の名。(想夫憐)

(さう-へい)ソウ【藥文】(名) あや。もやう。

(さう-へい)ソウ【雙斃】(名) 情死。心中。

(さう-へい)ソウ【造幣】(名) 貨幣の鑄造。——きょく【造幣局】(名) 大藏大臣の管理に屬し、もに貨幣の鑄造をなす所。貨牌の製造又は鑛物の試驗等をもなす。

(さう-へい)ソウ【造兵】(名) ㊀兵器を製造すること。——くわん【造兵官】(名) 兵器製造の事をつかさどる高等官。

(さう-ほう)ソウ【藏鋒】(名) 書法にて、筆の起頭に筆毫の尖端をあらはさゞる樣に書くこと。顯鋒の對。純美の對。

(さう-ほん)ソウ【草本】(名) ㊀【植】草本類を有する植物。くさだち。㊁草花。草稍。——けい【草本莖】(名) 【植】一年生又は二年生の植物の莖。質柔軟なり。木幹の對。——たい【草本帶】(名) 【植】高山植物帶の一。矮生なる植物殊に草本類生し、花色鮮美にして恰も五色の毛氈を敷きたる如き一帶の部。

(さう-ほん)ソウ【藏本】(名) 貯藏せる書物。

(さう-ま)ソウ【相馬】(名) ㊀馬の相を觀ること。㊁紋所の名。杭に馬を繋ぎたる象をあらはせり。㊂「さうまやき」の略言。——やき【相馬燒】(名) 磐城國中村舊相馬藩より産出する陶器。外見は粗雜にして、多く走馬の模樣を畫けるもの。

(さう-まい)ソウ【草昧】(名) 世界の狀態又は人世の事物の未だ開けずして不分明なること。「一の時代」

(さう-まう)ソウ【草莽】(名) 「さうばう」に同じ。

(さう-み)ソウ【相見】(名) 人相を見ること。又、其人。にんさうみ。觀相。

(さう-みん)ソウ【早眠】(名) 普通の時刻より早く就寢すること。早くとこにつくこと。

(さう-むけいやく)ソウ【雙務契約】(名) 【法】當事者雙方が義務を負擔する場合の契約。賣買の如く、賣主は物品引渡の義務を生じ、買主は代金支拂の義務を生ずる類これなり。片務契約の對。

(さう-めい)ソウ【滄溟】(名) あをうなばら。あをうみ。大洋。洋海。「する」と。

(さう-めつ)ソウ【勦滅】(名) 賊などをみなごろしにすること。

(さう-めん)ソウ【索麪】(名) 《さくめんの音便》一種の食品。小麥の粉を水と鹽とにて捏(コ)ね、胡麻油にて細く引き延ばし、これを日光に晒(サラ)して乾したるもの。麪(ミン)て、食す。【線麪】。——き【索麪】(名) 創製總會に同じ。

(さう-めん)ソウ【創立】(名) はじめ設くること。成立せしめること。開き建つること。「大學—以來」。——そ【創立】(名) 創製總會に同じ。

(さう-めん)ソウ【創立總會】(名) 會社の成立に際し、發起人又は株主の開く會合。

(さう-もく)ソウ【草木】(名) 【植】草と木と。㊁植物。

(さう-もく)ソウ【草文字】(名) 草書體の文字。

(さう-もつ)ソウ【贓物】(名) 「ざうぶつ」に同じ。

(さう-もん)ソウ【桑門】(名) 佛徒の異稱。よすてびと。「沙門」。

†(さう-もん)ソウ【相聞歌】(名) 戀愛の情を述べたる和歌。

(さう-やく)ソウ【薬】(名) 藥丸發射の用に供する火藥。これを裝塡するには藥管又は藥莢を用ふ。くわやく。がふやく。

(さう-よく)ソウ【蟲翠】(名) ㊀玉蟲の翅。㊁玉蟲の色。

(さう-よく)ソウ【桑楡】(名) ㊀夕桑の日影。㊁西の方。

(さう-らう)ソウ【滄浪】(名) あをあを〳〵としたる波。

(さう-らう)ソウ【蹌踉】(名) 足許のよろ〳〵すること。

(さう-らう)ソウ【蹌踉】(名) 事變起りてさわぎみだるゝこと。さうぶつ。さわぎ。「士民の—」。

(さう-り)ソウ【草履】(名) 藁又は草などにて編みたるはきもの。「履」。——かく【草履取】(名) 小兒の遊戲、交互に草履を匿してこれをさがし出しあふもの。——ぜた【草履下駄】(名) 駒下駄より稍や低き下駄、藁にて編みたるもの。今は多く竹皮を編みたるものを用ふ。

(さう-り)ソウ【藏六】(名) 【動】龜の異稱。

(さう-りょ)ソウ【操練】(名) 兵士を隊伍をして實戰の進退操縱に熟せしむるやう練習すること。

(さう-ろう)ソウ【草廬】(名) くさのいほり。「草廬を三たび」

(さう-ろく)ソウ【藏六】(名) 頭尾兩手兩足の六つをかくす意。【動】龜の異稱。

(さう-ろん)ソウ【爭論】(名) あらそひ。ぎろん。(訛)ろんそう。

(さう-ろん)ソウ【相違】(名) 彼是互に異なること。ちがひ。「違異」。

(さう-ゑん)ソウ【莊園】(名) ㊀別莊の田園。㊁中古、功臣權門其他開墾者等の私有に屬せし土地。賦稅調庸のなかりしもの。そやうゑん。

†(さえ)【栄】(名) 「さかえ」の訛。栄

草(一)(名) 【植】ねなしかづらの一名。「開栄の方角」

(さう-めん)ソウ【草綿】(名) 【植】「きわた」の一名。

(さう-もく)ソウ【草木】(名) ㊀草と木と。㊁植物。

(さう-もく)ソウ【草文字】(名) 草書體の文字。

(さう-もつ)ソウ【贓物】(名) 「ざうぶつ」に同じ。

(さう-もん)ソウ【桑門】(名) 佛徒の異稱。よすてびと。「沙門」。

†(さう-もん)ソウ【相聞歌】(名) 戀愛の情を述べたる和歌。

(さう-やく)ソウ【薬】(名) 藥丸發射の用に供する火藥。これを裝塡するには藥管又は藥莢を用ふ。くわやく。がふやく。

(さう-よく)ソウ【蟲翠】(名) ㊀玉蟲の翅。㊁玉蟲の色。

(さう-よく)ソウ【桑楡】(名) ㊀夕桑の日影。㊁西の方。

(さう-らう)ソウ【滄浪】(名) あをあを〳〵としたる波。

(さう-らう)ソウ【蹌踉】(名) 足許のよろ〳〵すること。

(さう-らう)ソウ【蹌踉】(名) 事變起りてさわぎみだるゝこと。さうぶつ。さわぎ。「士民の—」。

(さう-り)ソウ【草履】(名) 藁又は草などにて編みたるはきもの。「履」。——かく【草履取】(名) 小兒の遊戲、交互に草履を匿してこれをさがし出しあふもの。——ぜた【草履下駄】(名) 駒下駄より稍や低き下駄、藁にて編みたるもの。今は多く竹皮を編みたるものを用ふ。

(さう-り)ソウ【藏六】(名) 【動】龜の異稱。

(さう-りょ)ソウ【操練】(名) 兵士を隊伍をして實戰の進退操縱に熟せしむるやう練習すること。

(さう-ろう)ソウ【草廬】(名) くさのいほり。「草廬を三たび」

(さう-ろく)ソウ【藏六】(名) 頭尾兩手兩足の六つをかくす意。【動】龜の異稱。

(さう-ろん)ソウ【爭論】(名) あらそひ。ぎろん。(訛)ろんそう。

(さう-ろん)ソウ【相違】(名) 彼是互に異なること。ちがひ。「違異」。

(さう-ゑん)ソウ【莊園】(名) ㊀別莊の田園。㊁中古、功臣權門其他開墾者等の私有に屬せし土地。賦稅調庸のなかりしもの。そやうゑん。

†さえ【栄】(名) 「さかえ」の訛。栄

(さう-りょ)ソウ【創立】(名) はじめ設くること。成立せしめること。開き建つること。「大學—以來」。——そ【創立】(名) 創製總會に同じ。

(さう-りょ)ソウ【創立總會】(名) 會社の成立に際し、發起人又は株主の開く會合。

(さう-れい)ソウ【葬禮】(名) 人の死骸を葬(ホフ)るとき。

(さう-れい)ソウ【壯麗】(名) 雄大にしてうつくしきこと。りっぱにしてうるはしきこと。

(さう-れつ)ソウ【壯烈】(名) 志氣の雄大にして行爲の忠正なること。「鬼神泣」。

(さう-れん